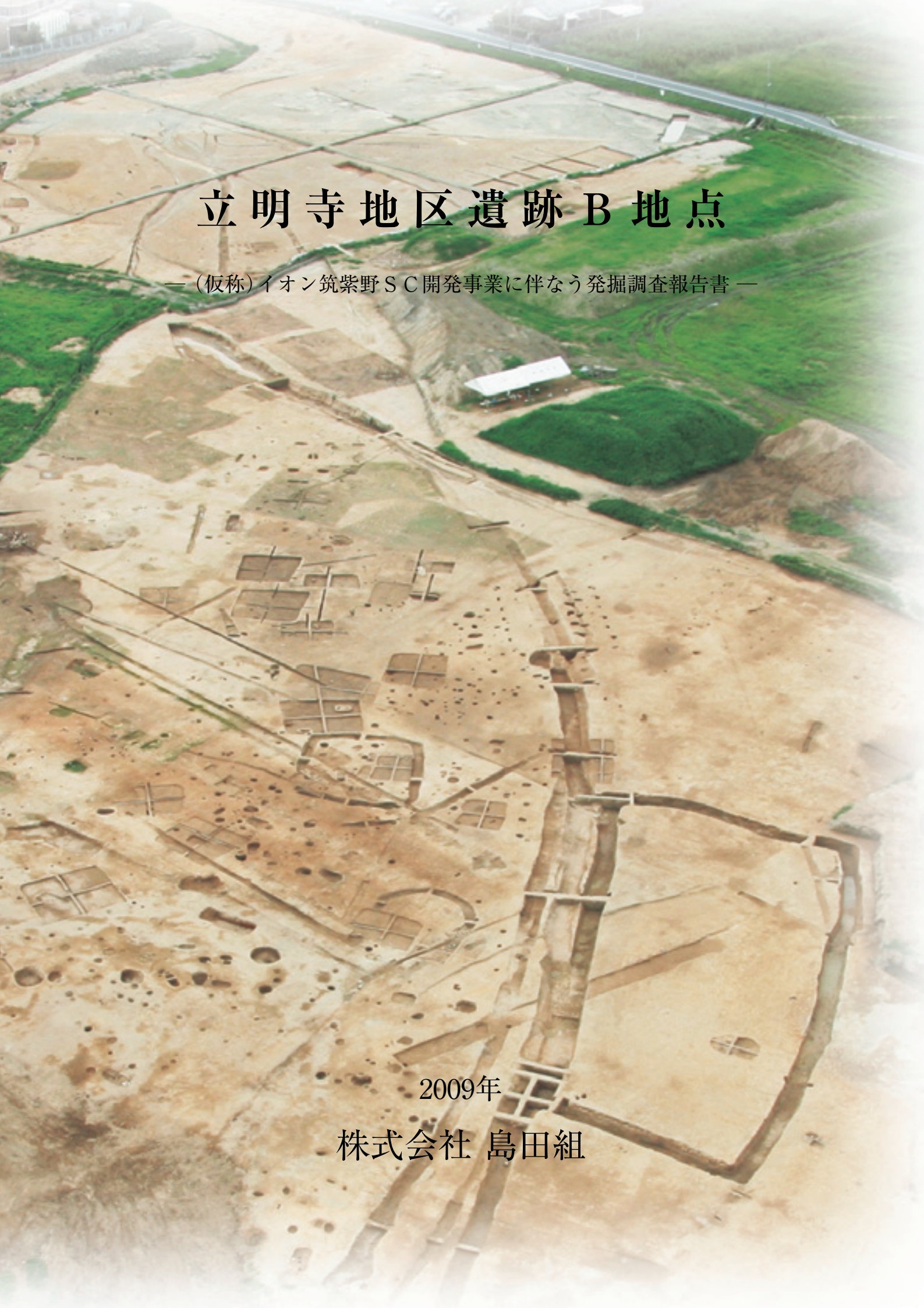


立明寺地区遺跡Ｂ地点

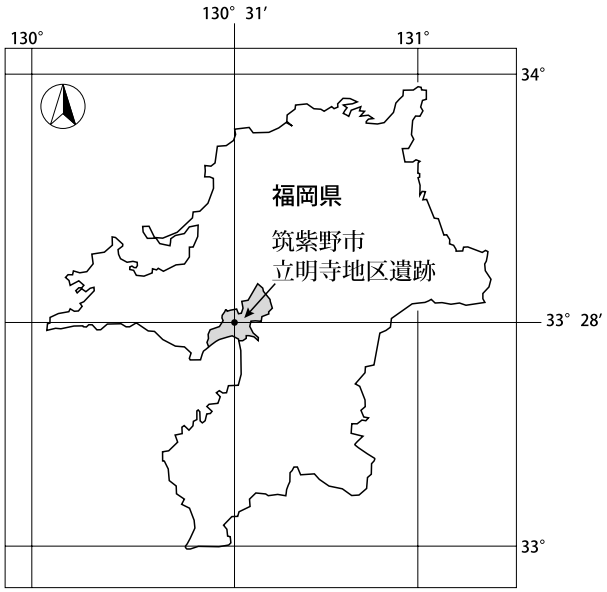
―（仮称）イオン筑紫野ＳＣ開発事業に伴なう発掘調査報告書 ―

2009年

株式会社 島田組

立明寺地区遺跡Ｂ地点

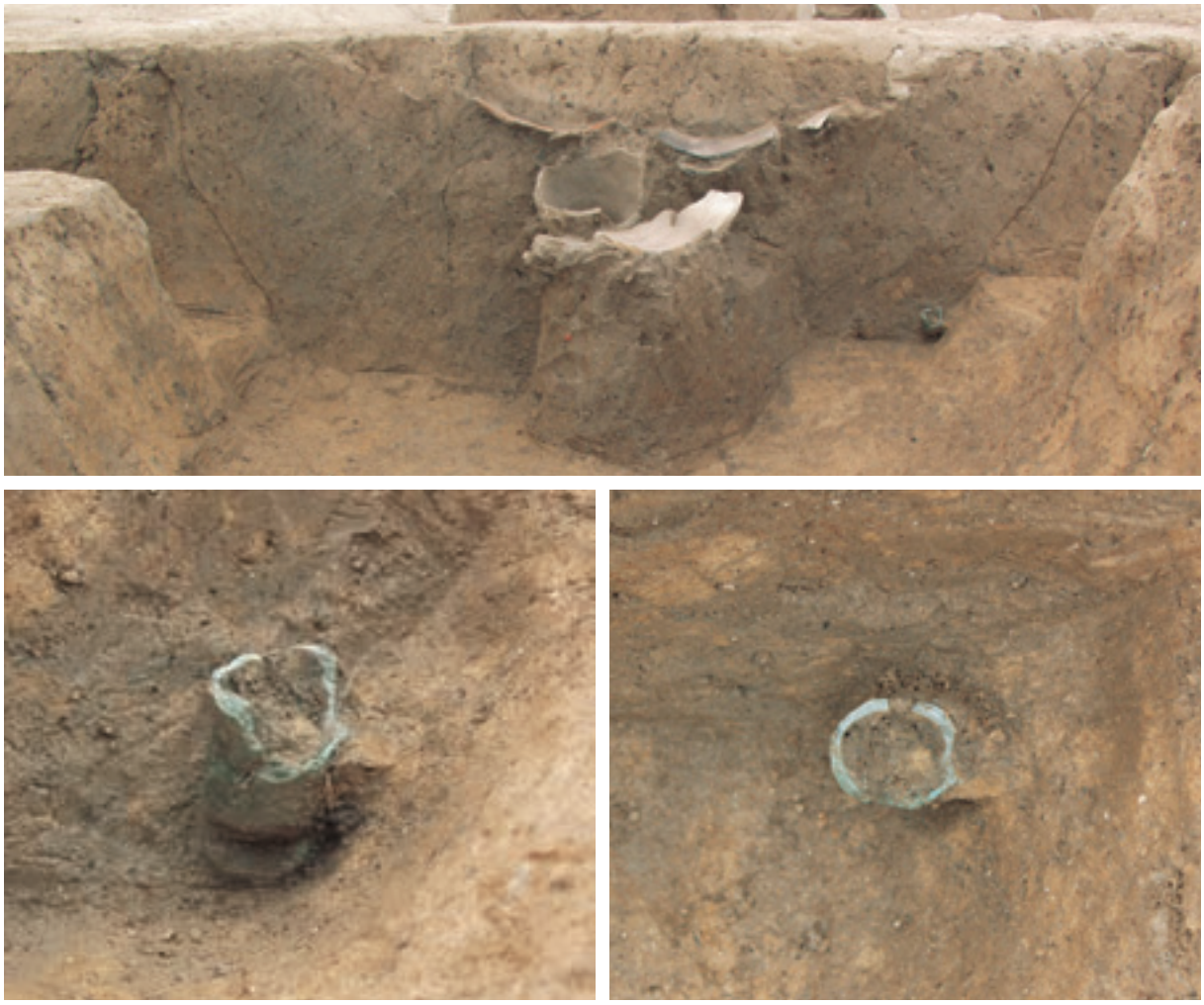
―（仮称）イオン筑紫野ＳＣ開発事業に伴なう発掘調査報告書 ―



2009年

株式会社 島田組

出土土器類　集合



小銅鐸出土状態

保存処理後の小銅鐸

（1）ＢⅡ地区　全景（北東から）

（2）ＢⅡ地区　全景（南東から）

重複する大型建物と竪穴住居

序　　文

筑紫野市は福岡県の南西部に位置し、長崎街道や日田街道などが通る交通の要所です。北側に接する太宰府は７世紀後半に政庁として設立され、九州全域を統合し、政治、文化の中心となりました。また、外国との交渉の窓口として活躍し、文物の交流によって発展した地域です。今回の調査地は、太宰府が管理した続命院（俗明院）の存在が推定されている地域です。俗明院は九州の各地から太宰府にやって来た人々の治療場、救護施設として設立されたと言われています。また、調査地の西側には、弥生時代中期から後期の大集落跡、甕棺を主体とする広大な墓域が確認された立明寺遺跡が隣接しています。

今回の立明寺地区遺跡Ｂ地点の発掘調査は、イオンモール株式会社の計画する多機能複合型の商業施設「(仮称)イオン筑紫野ＳＣ開発事業」に伴うものです。この開発は、地場雇用の促進、地域の発展となる面も大きく、地元、行政、経済界から大きな期待が持たれていました。

発掘調査に於いては、弥生時代から古代に至るまでの数多くの遺構・遺物が確認されました。その性格は主に住居を中心とした集落跡で、当地の人々の居住状態を知る上で欠かせない貴重な資料であります。また、当地からは縄文時代の遺物も数多く出土し、遙か彼方の先人達の存在を知ることができました。更に小銅鐸の出土は、九州に於いては希少な存在であり、大きな成果と言えます。

これらの成果は、研究者のみならず一般の方々にも共有の財産として受け継がれ、研究、学習、教育の場で活用されると共に、今後の文化財保護に役立つことを願います。

なお、発掘調査、整理、報告書刊行に際しましては、地元の方々、イオンモール株式会社、福岡県教育委員会、筑紫野市教育委員会、各大学、研究者、各位より多大なるご指導、ご理解、ご協力を頂きました。ここに心より厚く御礼申し上げる次第であります。

株式会社　島　田　組
代表取締役 島田美津子

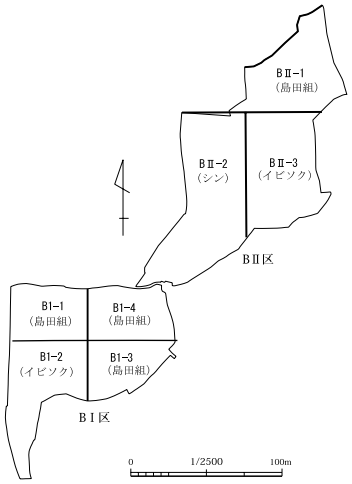
例　　言

1．本書は、福岡県筑紫野市大字立明寺に所在する立明寺地区遺跡Ｂ地点の発掘調査報告書である。

2．調査は(仮称)イオン筑紫野ＳＣ開発に伴う発掘調査として、平成19年７月５日～９月28日にかけて実施し、その後整理作業と報告書作成作業を平成21年11月30日まで行った。

3．発掘調査は福岡県教育委員会の指導の下に、筑紫野市教育委員会、イオンモール株式会社、株式会社島田組との三者により、「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し実施した。

4．発掘調査においては(株)島田組、(株)シン技術コンサル、(株)イビソクの三社による共同企業体を組織して実施した。その分担は右図のとおりで、その体制は第１章に示した。



5．遺物実測は筑紫野市教育委員会の指導の下に(株)島田組、(株)シン技術コンサルが実施したが、一部を(財)八尾市文化財調査研究会、(株)地域文化財研究所、(株)タクトの協力を得た。

6．遺構写真撮影は各調査地区担当者が行い、遺物写真撮影は写房楠華堂に依頼した。

7．本書の方位は真北を示し、水準高は東京湾平均海面(ＴＰ)を使用している。座標は世界測地系第Ⅵ系に基づく数値である。

8．図面トレースは、遺構を(株)シン技術コンサルが、遺物を(株)イビソクが行った。

9．鉄器の保存処理は(株)吉田生物研究所に、炭化米等の分析は(株)パリノサーヴェイに依頼した。

10．石器については吉留秀敏氏から、土器については常松幹雄氏から教示並びに助言をいただいた。

11．本報告において、大型掘立柱建物は大型建物、竪穴住居は住居と略称を用いている。また、遺物名称で、鉄鋤先或いは鉄鍬先と呼称されているものについては、今回鉄鍬先名を用いている。参考文献は総括の末尾にまとめた。

12．本書の執筆は各調査地区担当者を中心に下記のものが分担して執筆した。

第１章、第３章第１節・２節のＢⅠ－１・４地区、第３節の一部、第５章第２節第２項１、第３節　村尾政人

第２章　荒川和哉(島田組)、

第３章第２節　Ⅰ－２地区　松田繁、Ⅰ－３地区　作田一耕

第３章第３節　Ⅱ－１地区　松田重治、Ⅱ－２地区福嶋正史、Ⅱ－３地区　松田繁、田中俊輔

この他に本書の執筆は、第３章第３節第２項１・６、第５章第２節第１項・第２項２を柳本照男、縄文土器・石器を角上寿行(島田組)、環濠出土土器を西森忠幸(島田組)、鉄器を河野正訓(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)、遺物観察表及び遺物レイアウトを萩原美香が担当した。なお、編集は上記の人たちの協力を得て河野と柳本が行った。

13．発掘調査から報告書作成に至る過程で、福岡県教育委員会、筑紫野市教育委員会をはじめ、下記の方々から指導及び援助を得た。記して感謝いたします(敬称略)

小田富士雄、久住猛雄、黒坂貴裕、甲元眞之、菅波正人、下條信行、高倉洋彰、田上勇一郎、

武末純一、橋口達也、深澤芳樹、藤島志考、馬田弘稔、村上恭通、桃崎祐輔、山崎純男、李東冠

目　　次

巻頭図版

序　　文

例　　言

本文目次

図版目次

挿図目次

表 目 次

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 ……1

第２節　調査体制 ……2

第３節　調査の方法 ……4

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境 ……5

第２節　歴史的環境 ……6

第３章　調査の成果

第１節　層序 ……11

第２節　ＢⅠ地区

第１項　縄文時代の遺構と遺物 ……12

第２項　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物 ……14

第３項　古代～中世の遺構と遺物 ……40

第４項　遺構に伴わない出土遺物 ……56

第３節　ＢⅡ地区

第１項　縄文時代の遺構と遺物 ……74

第２項　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物 ……76

第３項　古代～中世の遺構と遺物 ……234

第４項　遺構に伴わない出土遺物 ……248

第４章　自然科学的分析

第１節　住居跡出土炭化米（パリノサーヴェイ） ……255

第２節　青銅品成分分析（吉田生物研究所） ……262

第５章　総括

第１節　縄文時代 ……265

第２節　弥生～古墳時代 ……266

第３節　古代～中世 ……277

図　版　目　次

巻頭図版１　出土土器類　集合

巻頭図版２　小銅鐸出土状態・保存処理後の小銅鐸

巻頭図版３　（１）ＢⅡ地区全景（北東から）

（２）ＢⅡ地区全景（南東から）

巻頭図版４　重複する大型建物と竪穴住居

図版１　ＢⅠ地区　遺構　（１）全景（北から）

（２）全景（南から）

図版２　ＢⅠ地区　遺構　（１）住居23-S0007（南東から）

（２）住居28-S0007（南東から）

図版３　ＢⅠ地区　遺構　（１）方形周溝28-S0009・周辺の住居群（俯瞰）

（２）方形周溝28-S0009・周辺の住居群（北東から）

図版４　ＢⅠ地区　遺構　（１）方形周溝28-S0009・住居28-S0007（北西から）

（２）方形周溝28-S0009 遺物出土状態（南西から）

（３）方形周溝28-S0009 断面・小銅鐸出土状態（南東から）

図版５　ＢⅠ地区　遺構　（１）住居28-S0005（北東から）

（２）住居27-S0009（北東から）

図版６　ＢⅠ地区　遺構　（１）掘立柱建物群（南東から）

（２）掘立柱建物22-S0502（南から）

図版７　ＢⅠ地区　遺構　（１）掘立柱建物26-S0006（南から）

（２）掘立柱建物26-S0007（南から）

図版８　ＢⅠ地区　遺構　（１）小溝群 23G（南西から）

（２）溝23-S0010（北東から）

図版９　ＢⅡ地区　遺構　（１）全景（俯瞰）

図版10　ＢⅡ地区　遺構　（１）重複する大型建物群・住居群（俯瞰）

（２）重複する大型建物群・住居群（北西から）

図版11　ＢⅡ地区　遺構　（１）重複する大型建物１・２（俯瞰）

（２）大型建物４・５・６（南東から）

図版12　ＢⅡ地区　遺構　（１）大型建物５・４（東から）

（２）大型建物５（南東から）

図版13　ＢⅡ地区　遺構　（１）大型建物７（南東から）

（２）大型建物７（南西から）

図版14　ＢⅡ地区　遺構　（１）大型建物４ P6柱穴断面（南西から）

（２）大型建物４ P8柱穴断面（南西から）

図版15　ＢⅡ地区　遺構　（１）大型建物４ P3柱痕跡

（２）大型建物４ P4柱痕跡

図版16　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居9-S0001（東から）

（２）円形周溝14-S1505（北東から）

図版17　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S0001貼床上面（南東から）
（２）住居14-S0001床下面（北東から）
図版18　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S0003（南東から）
（２）住居14-S0003・周辺の住居群（南西から）
図版19　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S0006（南東から）
（２）住居14-S0006遺物出土状態（南から）
図版20　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S0006・周辺の住居群（西から）
（２）住居14-S0021（北西から）
図版21　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S0027 遺物出土状態（北東から）
（２）住居14-S0027・住居14-S0034（南西から）
図版22　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S0012（南西から）
（２）住居14-S0012（南東から）
図版23　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S0026（北西から）
（２）住居14-S0028（南東から）
図版24　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S0030 炭化材・土器の出土状態（南西から）
（２）住居14-S0030・方形周溝14‐S0030（南西から）
図版25　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S0030・方形周溝14‐S0033の関係断面（南西から）
（２）住居14-S0040（南東から）
図版26　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S1001（南西から）
（２）住居14-S1002（南東から）
図版27　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S1502（南東から）
（２）住居14-S1008（北西から）
図版28　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S1008と環濠（南西から）
（２）住居14-S1008・環濠断面（南西から）
図版29　ＢⅡ地区　遺構　（１）方形周溝14-S1510・住居14-S1524（北西から）
（２）住居14-S1524（北東から）
図版30　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S1509・方形周溝14-S1510（東から）
（２）住居14-S1511（南東から）
図版31　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居14-S2004（南西から）
（２）住居14-S1516・大型建物9柱穴（南東から）
図版32　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居15-S0001（西から）
（２）住居15-S0004～S0006（北から）
図版33　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居15-S0505・同15-S0509（北西から）
（２）住居15-S0509 炉跡（西から）
図版34　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居15-S0508（北東から）
（２）住居15-S0514（北西から）
図版35　ＢⅡ地区　遺構　（１）方形周溝20-S0001・住居20-S0002（北西から）
（２）住居20-S0003（北西から）
図版36　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居15-S0501・同15-S0511・同15-S0513（北西から）
（２）住居19-S1009・周辺の住居群（北西から）

図版37　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居19-S1012-1・2 遺物出土状態（南東から）
（２）住居19-S1015 遺物出土状態（南東から）
図版38　ＢⅡ地区　遺構　（１）住居19-S0011・住居19-0012（北東から）
（２）住居19-S0011（北西から）
図版39　ＢⅡ地区　遺構　（１）土坑14-S0029（北東から）
（２）土坑19-S0008（南東から）
図版40　ＢⅡ地区　遺構　（１）土坑14-S0048（南西から）
（２）土坑14-S0069（南東から）
図版41　ＢⅡ地区　遺構　（１）土坑18-S0504（西から）
（２）土坑18-S0505（西から）
図版42　ＢⅡ地区　遺構　（１）掘立柱建物18-S0012（東から）
（２）掘立柱建物13-S1001（東から）
図版43　ＢⅡ地区　遺構　（１）掘立柱建物19-S0005（南から）
（２）土壙墓10-S0002（南・西から）
図版44　ＢⅠ地区　遺物　土器　ＢⅠ地区出土縄文土器
図版45　ＢⅠ地区　遺物　土器
図版46　ＢⅠ地区　遺物　土器
図版47　ＢⅠ地区　遺物　土器
図版48　ＢⅠ地区　遺物　石器
図版49　ＢⅠ地区　遺物　石器
図版50　ＢⅠ地区　遺物　石器
図版51　ＢⅠ地区　遺物　石器
図版52　ＢⅠ地区　遺物　石器
図版53　ＢⅡ地区　遺物　土器　ＢⅡ地区出土縄文土器
図版54　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版55　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版56　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版57　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版58　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版59　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版60　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版61　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版62　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版63　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版64　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版65　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版66　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版67　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版68　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版69　ＢⅡ地区　遺物　土器

図版70　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版71　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版72　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版73　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版74　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版75　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版76　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版77　ＢⅠ・Ⅱ地区　遺物　土器・土製品　（1）土製勾玉
（2）畿内系 甕
（3）畿内系 甕
（4）山陰系 鼓形器台
図版78　ＢⅠ・Ⅱ地区　遺物　土器・炭化米　（1）山陰系 甕
（2）ジョッキ形土器 把手
（3）炭化米
図版79　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版80　ＢⅡ地区　遺物　土器
図版81　ＢⅡ地区　遺物　石器
図版82　ＢⅡ地区　遺物　石器
図版83　ＢⅡ地区　遺物　石器
図版84　ＢⅡ地区　遺物　石器
図版85　ＢⅡ地区　遺物　石器
図版86　ＢⅠ・Ⅱ地区　遺物　青銅器・鉄器
図版87　ＢⅠ・Ⅱ地区　遺物　鉄器
図版88　ＢⅠ・Ⅱ地区　遺物　鉄器

挿　図　目　次

ＢⅠ地区

第1図 調査位置図……1
第2図 調査区割り図……4
第3図 遺跡位置図……5
第4図 表層地質図……5
第5図 周辺遺跡分布図(1/25000) ……9
第6図 原口古墳測量図(筑紫野市史より抜粋,1/1600) ……10
第7図 調査風景 ……10
第8図 基本土層断面位置図(1/2500) ……11
第9図 土坑22-S0016 平面・断面図(1/40) ……12
第10図 土坑22-S0016 出土遺物実測図(1/4) ……12
第11図 土坑23-S0503 平面・断面図(1/40) ……14
第12図 土坑23-S0503 出土遺物実測図(1/4) ……14

第13図 ＢⅠ地区縄文～古墳時代遺構平面図(1/800) ……15
第14図 竪穴住居跡23-S0004・S0018 平面・断面図(1/60) ……16
第15図 竪穴住居跡23-S0007 平面・断面図(1/60) ……16
第16図 竪穴住居跡23-S0007・P0002・P0003・P0006 平面・断面図(1/60) ……16
第17図 竪穴住居跡23-S0007 出土遺物実測図(1/4) ……17
第18図 竪穴住居跡23-S0504 平面・断面図(1/60) ……18
第19図 竪穴住居跡23-S0505 平面・断面図(1/60) ……19
第20図 竪穴住居跡23-S0505 出土遺物実測図(1/4) ……19
第21図 竪穴住居跡27-S0009 平面・断面図(1/60) ……20
第22図 竪穴住居跡27-S0009・P0002 平面・断面図(1/20) ……20
第23図 竪穴住居跡27-S0009・P0001・P0003～P0010 断面図(1/40) ……20
第24図 竪穴住居跡27-S0009 出土遺物実測図(1/3) ……21
第25図 竪穴住居跡28-S0005 平面・断面図(1/60) ……22
第26図 竪穴住居跡28-S0005 出土遺物実測図(1/4) ……22
第27図 竪穴住居跡28-S0007 平面・断面図(1/60)遺物出土状態図(1/30) ……23
第28図 竪穴住居跡28-S0007 出土遺物実測図(1/4) ……23
第29図 土坑21-S0001・S0002 平面・断面図(1/40) ……24
第30図 土坑21-S0003 平面・断面図(1/40) ……24
第31図 土坑22-S0007 平面・断面図(1/40) ……25
第32図 土坑22-S0007 出土遺物実測図(1/4) ……25
第33図 土坑22-S0017 平面・断面図(1/40) ……25
第34図 土坑22-S0018 平面・断面図(1/40) ……25
第35図 土坑22-S0023 平面・断面図(1/40) ……26
第36図 土坑22-S1502 平面・断面図(1/60) ……26
第37図 土坑22-S1502 出土遺物実測図(1/4) ……26
第38図 土坑22-S1503 平面・断面図(1/60) ……27
第39図 土坑22-S1503 出土遺物実測図(1/4) ……27
第40図 土坑23-S0006 平面・断面図(1/40) ……28
第41図 土坑23-S0006 出土遺物実測図(1/4) ……28
第42図 土坑23-S0501・S0502 平面・断面図(1/40) ……28
第43図 土坑27-S0001 平面・断面図(1/60) ……28
第44図 環濠22-S1501 断面図(1/30) ……29
第45図 環濠22-S1501 出土遺物実測図(1/4) ……29
第46図 環濠22-S1514 断面図(1/20) ……30
第47図 環濠22-S1514 出土遺物実測図①(1/2,1/3) ……30
第48図 環濠22-S1514 出土遺物実測図②(1/4) ……31
第49図 環濠22-S1514 出土遺物実測図③(1/4) ……32
第50図 方形周溝28-S0009 平面・断面図(1/2,1/8,1/80) ……33
第51図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図①(1/1) ……34
第52図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図②(1/2,1/3,1/4) ……35

第53図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図③(1/4) ……37
第54図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図④(1/4) ……38
第55図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図⑤(1/4) ……39
第56図 ＢⅠ地区古代～中世遺構平面図(1/800) ……40
第57図 掘立柱建物22-S1010 平面・断面図(1/60) ……41
第58図 掘立柱建物22-S0501 平面・断面図(1/60) ……41
第59図 掘立柱建物22-S0502 平面・断面図(1/60) ……42
第60図 掘立柱建物26-S0005 平面・断面図(1/60) ……43
第61図 掘立柱建物26-S0006 平面・断面図(1/60) ……45
第62図 掘立柱建物26-S0007 平面・断面図(1/60) ……45
第63図 掘立柱建物26-S0008 平面・断面図(1/60) ……46
第64図 掘立柱建物27-S1005 平面・断面図(1/60) ……46
第65図 溝22-S0001・S0004・23-S0001 出土遺物実測図(1/2,1/4) ……49
第66図 溝23-S0002 出土遺物実測図(1/2,1/4) ……49
第67図 溝23-S0010・0011 平面・断面図(1/60) ……51
第68図 溝23-S0010・S0011 出土遺物実測図(1/4) ……51
第69図 各溝 断面(1/30・1/60) ……52
第70図 溝27-S0004・S0008・S1001 断面図(1/20) ……53
第71図 溝27-S0008 出土遺物実測図(1/2) ……53
第72図 柱穴22-P0522 平面・断面図(1/20) ……54
第73図 柱穴22-P0522 出土遺物実測図(1/4) ……54
第74図 柱穴22-P0101 平面・断面図(1/20) ……54
第75図 柱穴23-P0101 出土遺物実測図(1/2) ……54
第76図 井戸26-S0001 平面・断面図(1/40) ……55
第77図 ＢⅠ地区遺構に伴わない出土遺物実測図①(1/4) ……56
第78図 ＢⅠ地区遺構に伴わない出土遺物実測図②(1/1,1/2) ……58
第79図 ＢⅠ地区遺構に伴わない出土遺物実測図③(1/4) ……60
第80図 ＢⅠ地区遺構に伴わない出土遺物実測図④(1/3) ……61
第81図 ＢⅠ地区遺構に伴わない出土遺物実測図⑤(1/2,1/4) ……62
第82図 ＢⅠ地区遺構平面図(1/400)折込み ……63, 64

ＢⅡ地区

第83図 河川5-S0001・S0002 出土遺物実測図(1/2,1/4) ……74
第84図 調査区北東部遺構 平面・断面図(1/40,1/80,1/800) ……75
第85図 大型建物１[14-S1010] 出土遺物実測図(1/4) ……76
第86図 大型建物１[14-S1010] 平面・断面図(1/80) ……77
第87図 大型建物１[14-S1010] 断面図(1/40) ……78
第88図 大型建物２[14-S1027] 出土遺物実測図(1/4) ……78
第89図 大型建物１・２[14-S1010・S1027] 環濠新旧関係断面図(1/40) ……78
第90図 大型建物２[14-S1027] 平面・断面図(1/40,1/80)折込み ……79, 80

第91図 大型建物 3 [14-S0059] 出土遺物実測図(1/4) ……81
第92図 大型建物 4 [14-S0068] 出土遺物実測図(1/2,1/4) ……81
第93図 大型建物 3 [14-S0059] 平面・断面図(1/40,1/80) ……82
第94図 大型建物 4 [14-S0068] 平面図(1/80) ……83
第95図 大型建物 4 [14-S0068] 断面図(1/40) ……84
第96図 大型建物 5 [14-S1525] 出土遺物実測図(1/4) ……84
第97図 大型建物 5 [14-S1525] 平面・断面図(1/40,1/80) ……85
第98図 大型建物 6 [14-S2026] 平面・断面図(1/40,1/80) ……86
第99図 大型建物 7 [18-S0013] 平面・断面図(1/40,1/80) ……87
第100図 大型建物 8 [18-S0510] 平面・断面図(1/40,1/80) ……89
第101図 大型建物 9 [14-S1515] 平面・断面図(1/40,1/80) ……90
第102図 14グリッド南西部住居配置図(1/200) ……90
第103図 住居9-S0001 出土遺物実測図(1/4) ……91
第104図 住居9-S0001 平面・断面図(1/20,1/60) ……91
第105図 住居14-S0001 平面・断面図(1/40,1/60) ……93
第106図 住居14-S0001 出土遺物実測図(1/4) ……93
第107図 住居14-S0003 平面・断面図(1/60) ……94
第108図 住居14-S0003 出土遺物実測図(1/3,1/4) ……95
第109図 住居14-S0004・S0064 平面・断面図(1/60) ……97
第110図 住居14-S0004・S0064 出土遺物実測図(1/4) ……97
第111図 住居14-S0005 平面・断面図(1/40,1/60) ……98
第112図 住居14-S0005 出土遺物実測図(1/4) ……99
第113図 住居14-S0006 平面・断面図(1/60) ……100
第114図 住居14-S0006 出土遺物実測図(1/4) ……101
第115図 住居14-S0007 平面・断面図(1/60) ……102
第116図 住居14-S0007 遺物出土状態図(1/20) ……103
第117図 住居14-S0007 出土遺物実測図(1/2,1/3,1/4) ……104
第118図 住居14-S0012 平面・断面図(1/60) ……105
第119図 住居14-S0012-P5 平面・断面図(1/30) ……106
第120図 住居14-S0012 出土遺物実測図(1/1,1/4) ……107
第121図 住居14-S0018・S1002 平面・断面図(1/60) ……108
第122図 住居14-S0018・S1002 出土遺物実測図(1/4) ……109
第123図 住居14-S0021 平面・断面図(1/40,1/80) ……110
第124図 住居14-S0021 出土遺物実測図(1/4) ……111
第125図 住居14-S0023・S0063 平面・断面図(1/20,1/60) ……112
第126図 住居14-S0023・S0063 出土遺物実測図(1/4) ……113
第127図 住居14-S0026 平面・断面図(1/60) ……114
第128図 住居14-S0026-P1遺物出土状態図(1/20) ……114
第129図 住居14-S0026 出土遺物実測図(1/4) ……115
第130図 住居14-S0027・S0034・S0070 平面・断面図(1/60) ……116

第131図 住居14-S0027 遺物出土状態図(1/20) ……117
第132図 住居14-S0027 出土遺物実測図(1/4) ……118
第133図 住居14-S0027・S0034 出土遺物実測図(1/4) ……119
第134図 住居14-S0034 平面・断面図(1/60) ……120
第135図 竪穴遺構14-S0028 平面・断面図(1/60) ……120
第136図 住居14-S0030 平面・断面図(1/20,1/30)折込み ……121, 122
第137図 住居14-S0030 出土遺物実測図①(1/4) ……123
第138図 住居14-S0030 出土遺物実測図②(1/4) ……124
第139図 住居14-S0030 出土遺物実測図③(1/4) ……125
第140図 住居14-S0040 平面・断面図(1/60) ……127
第141図 住居14-S0040 遺物出土状態図(1/40) ……127
第142図 住居14-S0041 平面・断面図(1/60) ……128
第143図 住居14-S0041 出土遺物実測図(1/4) ……128
第144図 住居14-S1001・－2 平面・断面図(1/60) ……129
第145図 住居14-S1001・－2 出土遺物実測図(1/1,1/4) ……129
第146図 住居14-S1008 平面・断面図(1/30) ……131
第147図 住居14-S1008 出土遺物実測図(1/2,1/4) ……132
第148図 住居14-S1502 平面・断面図(1/40,1/60) ……133
第149図 住居14-S1502 出土遺物実測図(1/4) ……133
第150図 住居14-S1506 平面・断面図(1/60) 出土遺物実測図(1/4) ……133
第151図 住居14-S1509 平面・断面図(1/60) 出土遺物実測図(1/4) ……134
第152図 住居14-S1511 平面・断面図(1/60) ……135
第153図 住居14-S1511 出土遺物実測図(1/2,1/4) ……136
第154図 住居14-S1514 平面・断面図(1/40,1/60) 出土遺物実測図(1/4) ……137
第155図 住居14-S1516 平面・断面図(1/20,1/60) ……138
第156図 住居14-S1524 平面・断面図(1/20,1/60) ……139
第157図 住居14-S1524 出土遺物実測図(1/4) ……140
第158図 住居14-S2004 平面・断面図(1/60) ……141
第159図 住居15-S0001 平面・断面図(1/40,1/60) 出土遺物実測図(1/4) ……142
第160図 住居15-S0004 平面・断面図(1/60) 出土遺物実測図(1/4) ……143
第161図 住居15-S0005 平面・断面図(1/60) ……144
第162図 住居15-S0005 出土遺物実測図(1/4) ……144
第163図 住居15-S0006 出土遺物実測図(1/2,1/4) ……145
第164図 住居15-S0501 平面・断面図(1/60) ……146
第165図 住居15-S0501 出土遺物実測図(1/4) ……146
第166図 住居15-S0505 平面・断面図(1/60) ……147
第167図 住居15-S0505 出土遺物実測図(1/4) ……147
第168図 竪穴遺構15-S0507 平面・断面図(1/60) ……148
第169図 竪穴遺構15-S0507 出土遺物実測図(1/4) ……149
第170図 住居15-S0508 平面・断面図(1/60) ……149

第171図 住居15-S0508 出土遺物実測図(1/1,1/3,1/4) ……150
第172図 住居15-S0509 平面・断面図(1/60) ……151
第173図 住居15-S0509 出土遺物実測図(1/4) ……152
第174図 住居15-S0510 平面・断面図(1/40,1/200) ……153
第175図 住居15-S0510 出土遺物実測図(1/4) ……154
第176図 住居15-S0510下層不確定遺構 出土遺物実測図①(1/4) ……155
第177図 住居15-S0510下層不確定遺構 出土遺物実測図②(1/1) ……155
第178図 住居15-S0511平面・断面図(1/60) ……157
第179図 住居15-S0511 出土遺物実測図(1/4) ……157
第180図 住居15-S0513 平面・断面図(1/60) ……158
第181図 住居15-S0513 出土遺物実測図(1/4) ……158
第182図 住居15-S0514 平面・断面図(1/60) ……159
第183図 住居15-S0514 出土遺物実測図(1/4) ……159
第184図 住居18-S0507 平面・断面図(1/60) ……160
第185図 住居18-S0509 平面・断面図(1/60) ……160
第186図 住居19-S0011 平面・断面図(1/60) ……161
第187図 住居19-S0011 出土遺物実測図(1/4) ……161
第188図 住居19-S0012 平面・断面図(1/60) ……162
第189図 19グリッド南東部遺構配置図(1/100) ……163
第190図 住居19-S1009・－2 平面・断面図(1/60) ……164
第191図 住居19-S1009・－2・ S 1021 出土遺物実測図(1/4) ……165
第192図 土坑19-S1012-1・S1012-2 平面・断面図(1/40) ……166
第193図 土坑19-S1012-1・S1012-2,住居19-S1015 出土遺物実測図(1/4) ……167
第194図 住居19-S1014～S1018 平面・断面図(1/40,1/60) ……168
第195図 住居20-S0002 平面・断面図(1/60) ……169
第196図 住居20-S0002 出土遺物実測図(1/4) ……169
第197図 住居20-S0003 平面・断面図(1/60) 出土遺物実測図(1/4) ……170
第198図 各土坑 平面・断面図①(1/40) 10-S0010出土遺物実測図(1/4) ……172
第199図 各土坑 平面・断面図②(1/40) 14-S0015 出土遺物実測図(1/4) ……173
第200図 土坑14-S0029 遺物出土状態図(1/20) ……175
第201図 土坑14-S0029 出土遺物実測図①(1/4) ……176
第202図 土坑14-S0029 出土遺物実測図②(1/4) ……177
第203図 土坑14-S0031 平面・断面図(1/40) ……178
第204図 土坑14-S0031 出土遺物実測図(1/4) ……178
第205図 土坑14-S0036 平面・断面図(1/40) 出土遺物実測図(1/4) ……179
第206図 土坑14-S0048 平面・断面図(1/40) ……179
第207図 土坑14-S0048 出土遺物実測図(1/4) ……180
第208図 土坑14-S0057 平面・断面図(1/40) ……180
第209図 土坑14-S0069 平面・断面図(1/40) ……180
第210図 土坑14-S0069 出土遺物実測図(1/4) ……181

第211図 土坑14-S1005 平面・断面図(1/40)……181
第212図 土坑14-S1005 出土遺物実測図(1/1,1/4,1/6)……182
第213図 土坑14-S1519 平面・断面図(1/20)……183
第214図 土坑15-S0007 平面・断面図(1/40)……184
第215図 土坑15-S0007 出土遺物実測図(1/4)……184
第216図 土坑15-S0008 平面・断面図(1/40)……185
第217図 土坑15-S0008 出土遺物実測図(1/4)……185
第218図 土坑15-S0009 平面・断面図(1/40)……186
第219図 土坑15-S0009 出土遺物実測図(1/4)……186
第220図 土坑15-S0011 平面・断面図(1/40)……187
第221図 土坑15-S0515 平面・断面図(1/40)……187
第222図 土坑15-S0515 出土遺物実測図(1/4)……187
第223図 土坑15-S0516 平面・断面図(1/40)……188
第224図 土坑15-S0517 平面・断面図(1/40)……188
第225図 土坑15-S0517 出土遺物実測図(1/4)……188
第226図 土坑18-S0504・S0504-2 平面・断面図(1/60)……189
第227図 土坑18-S0504・S0504-2・S0505 出土遺物実測図(1/4)……189
第228図 土坑18-S0505 平面・断面図(1/60)……190
第229図 土坑19-S0008 平面・断面図(1/40)……190
第230図 土坑19-S0008 出土遺物実測図①(1/4,1/5,1/6)……191
第231図 土坑19-S0008 出土遺物実測図②(1/6)……192
第232図 土坑19-S1011 平面・断面図(1/40)……193
第233図 土坑19-S1011・S1020・S1024・S1029 出土遺物実測図(1/4)……193
第234図 土坑19-S1020 平面・断面図(1/40)……194
第235図 土坑19-S1023・S1032 平面・断面図(1/40)……194
第236図 土坑19-S1024・S1033 平面・断面図(1/40)……195
第237図 土坑19-S1025 平面・断面図(1/40)……195
第238図 土坑19-S1026 平面・断面図(1/40)……196
第239図 土坑19-S1027 平面・断面図(1/40)……196
第240図 土坑19-S1034・S1035 平面・断面図(1/40)……196
第241図 方形周溝14-S0033 平面・断面図(1/60,1/80)……197
第242図 方形周溝14-S0033 遺物出土状態図(1/20)……197
第243図 方形周溝14-S0033 出土遺物実測図(1/4)……198
第244図 円形周溝14-S1505 平面・断面図(1/60)……199
第245図 円形周溝14-S1505 出土遺物実測図①(1/4)……200
第246図 円形周溝14-S1505 出土遺物実測図②(1/8)……201
第247図 方形周溝14-S1510 平面・断面図(1/80)……202
第248図 方形周溝14-S1510 出土遺物実測図(1/4)……203
第249図 方形周溝20-S0001 平面・断面図(1/60)……203
第250図 方形周溝20-S0001 遺物出土状態図(1/40)……203

第251図 方形周溝20-S0001 出土遺物実測図①(1/4) ……204
第252図 方形周溝20-S0001 出土遺物実測図②(1/4) ……205
第253図 溝9-S0006・10-S0006・S0007 出土遺物実測図(1/4) ……206
第254図 溝14-S0011 出土遺物実測図(1/4) ……206
第255図 溝14-S1004 出土遺物実測図(1/2,1/4) ……207
第256図 溝18-S0503 断面図(1/60) 出土遺物実測図(1/4) ……208
第257図 各溝 平面・断面図(1/40,1/100)折込み ……209, 210
第258図 溝14-S1011 平面・断面図(1/40,1/100) 出土遺物実測図(1/2,1/4) ……211
第259図 環濠18-S0503 平面・断面図(1/30,1/400) ……212
第260図 環濠9-S0017遺物出土状態 ……212
第261図 環濠・区画溝 平面・断面図(1/50、1/400)折込み ……213, 214
第262図 環濠14-S1007 出土遺物実測図(1/4) ……216
第263図 環濠9-S0017 出土遺物実測図①(1/4) ……217
第264図 環濠9-S0017 出土遺物実測図②(1/4) ……218
第265図 環濠9-S0017 出土遺物実測図③(1/4) ……219
第266図 環濠13-S0002 出土遺物実測図①(1/4) ……221
第267図 環濠13-S0002 出土遺物実測図②(1/4) ……222
第268図 環濠13-S0002 出土遺物実測図③(1/4) ……223
第269図 区画溝9-S0016 出土遺物実測図(1/4) ……225
第270図 環濠内出土鉄製品実測図(1/2) ……226
第271図 大型柱穴配置図(1/200) ……227
第272図 各柱穴 平面・断面図(1/40) ……227
第273図 柱穴14-S0066 出土遺物実測図(1/4) ……228
第274図 柱穴14-P0104 石庖丁出土状態 ……228
第275図 柱穴14-P0104・P0171 出土遺物実測図(1/2,1/3) ……228
第276図 土器溜り19-S0007 出土土器実測図①(1/4) ……230
第277図 土器溜り19-S0007 出土土器実測図②(1/4) ……231
第278図 土器溜り19-S0007 出土土器実測図③(1/4) ……232
第279図 土器溜り19-S0007 出土土器実測図④(1/4) ……233
第280図 土器溜り19-S0007 出土鉄器実測図(1/2) ……233
第281図 掘立柱建物13-S0010 平面・断面図(1/60) ……234
第282図 掘立柱建物13-S1001 平面・断面図(1/60) ……235
第283図 掘立柱建物14-S0061 平面・断面図(1/60) ……236
第284図 掘立柱建物14-S0062 平面・断面図(1/60) ……237
第285図 掘立柱建物18-S0011 平面・断面図(1/60) ……238
第286図 掘立柱建物18-S0012 平面・断面図(1/60) ……239
第287図 掘立柱建物19-S0005 平面・断面図(1/60) ……240
第288図 掘立柱建物19-S0006 平面・断面図(1/60) ……241
第289図 土坑10-S0002平面・断面図(1/20) ……242
第290図 土坑10-S0002 出土遺物実測図(1/4) ……242

第291図 土坑14-S0039 出土遺物実測図(1/4) ……243
第292図 土坑14-S0039 平面・断面図(1/40) ……243
第293図 溝14-S0002・S1513 平面・断面図(1/40,1/80) 出土遺物実測図(1/4) ……244
第294図 溝18-S0014 出土遺物実測図(1/3,1/4) ……245
第295図 溝18-S0016 出土遺物実測図(1/4) ……246
第296図 溝18-S0501 断面図(1/30) ……246
第297図 柱穴13-P0150 出土遺物実測図(1/4) ……246
第298図 溝18-S0014～S0016 平面・断面図(1/80,1/400) ……247
第299図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図①(1/4) ……248
第300図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図②(1/1) ……249
第301図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図③(1/1) ……250
第302図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図④(1/2) ……251
第303図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図⑤(1/2,1/3,1/4) ……254
第304図 西日本の代表的な大型建物集成図 ……270
第305図 大型建物 7 想定案 ……270
第306図 陶質土器・河内産庄内甕実測図(1/4) ……275
第307図 大成里遺跡出土鉄鍬先 ……276
第308図 匙状異形鉄製品実測図(1/2) ……276
第309図 古代遺構配置図 ……277
第310図 ＢⅡ地区主要区域遺構配置図(約1/400)折込み ……317, 318

付　図 ＢⅠ地区遺構平面図
　　ＢⅡ地区遺構平面図

表　目　次

表 1 土坑22-S0016剥片類分類表 ……13
表 2 ＢⅠ地区 出土土器観察表 ……65
表 3 ＢⅠ地区 出土石器観察表 ……73
表 4 縄文晩期の土器編年と出土土器の並行関係 ……265
表 5 ＢⅠ・ＢⅡ地区出土 縄文時代石器製品点数及び使用石材一覧表 ……266
表 6 主要遺構消長表 ……268
表 7 九州出土の小銅鐸関連一覧 ……273
表 8 掘立柱建物一覧(古代～中世) ……279
表 9 ＢⅡ地区出土土器観察表 ……282
表10 ＢⅡ地区出土石器観察表 ……315
表11 ＢⅠ・Ⅱ地区出土鉄・青銅製品観察表 ……316

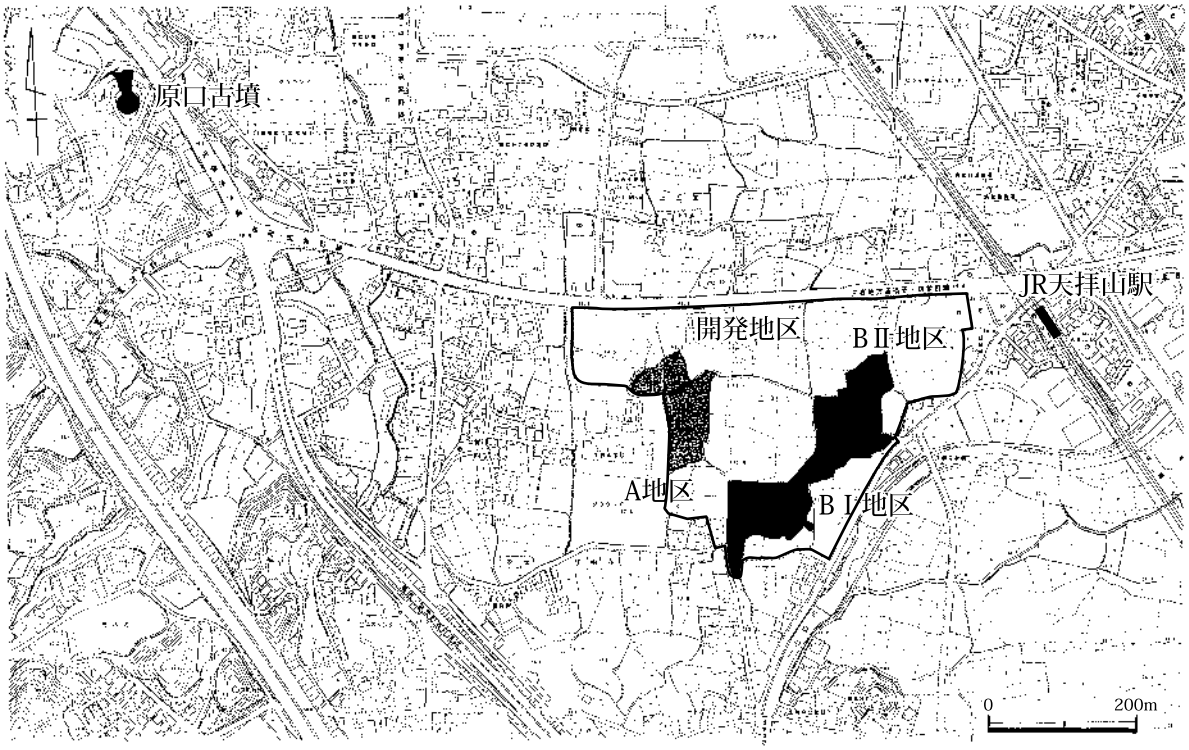
第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

今回の調査経緯は、筑紫野市大字立明寺577地内にイオンモール株式会社による（仮称）イオン筑紫野ＳＣ開発事業（約11,9ha）の計画が発端となる。当調査地は福岡県の中心から西寄りに位置し、福岡市からは南東に15㎞入った内陸部である。周辺は西部に背振山地、東部に三郡山地丘陵が連なり、谷筋は福岡平野と筑後平野を結ぶ幹線である。当地は地理的立地からも交通の要所として発展しており、数多くの遺跡が存在している。

筑紫野市教育委員会は、計画地の西側が周知の遺跡である立明寺地区遺跡に該当していることと、計画の内容から、速やかに遺跡の有無の確認、性格を把握するための試掘調査が計画された。試掘調査は、平成18年９月15日から同年11月８日までの期間に75本のトレンチによって実施された。調査の結果、西側の丘陵裾部と東側の低位段丘上に於いて弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての遺跡の広がりが新たに確認された。西側は弥生時代中期後半から後期にかけての甕棺墓群が確認されたことから、立明寺遺跡の東側の広がりと考えられた。また、東側の低位段丘上は、三ヶ所の広がりがみられ、時期的には弥生時代後期から古墳時代初頭、古代末から中世にかけての集落遺跡と考えられた。この調査結果をもとに従来の立明寺地区遺跡を含む範囲を立明寺地区遺跡Ａ地点とし、東側の新たに確認された遺跡は立明寺地区遺跡Ｂ地点として登録された。

イオンモール株式会社は、福岡県教育委員会、筑紫野市教育委員会と(仮称)イオン筑紫野ＳＣ開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査についての事前協議、具体的な着手への準備が進められた。今回の調査は、膨大な開発事業計画に伴い広域な調査面積を対象としたものであり、また、事業計画は平成19年８月に造成工事の着手、平成20年３月に竣工式を計画した緊急を要するものであった。筑紫野市教育委員会は他の開発に伴う発掘調査を予定しており、更に大規模な調査に対応できる体制を有してい



第１図 調査位置図

ないことから、当調査に対して慎重な構えが持たれた。イオンモール株式会社は行政機関独自では対応できないものと判断し、これらの計画を民間調査会社に業務委託する方向で検討を開始した。当計画の実施については、株式会社島田組と協議を行い、調査に向かっての具体的な計画が進められた。株式会社島田組は平成19年 4 月に当開発事業に伴う発掘調査の依頼を正式に受け、筑紫野市教育委員会と具体的な調査についての協議を行った。

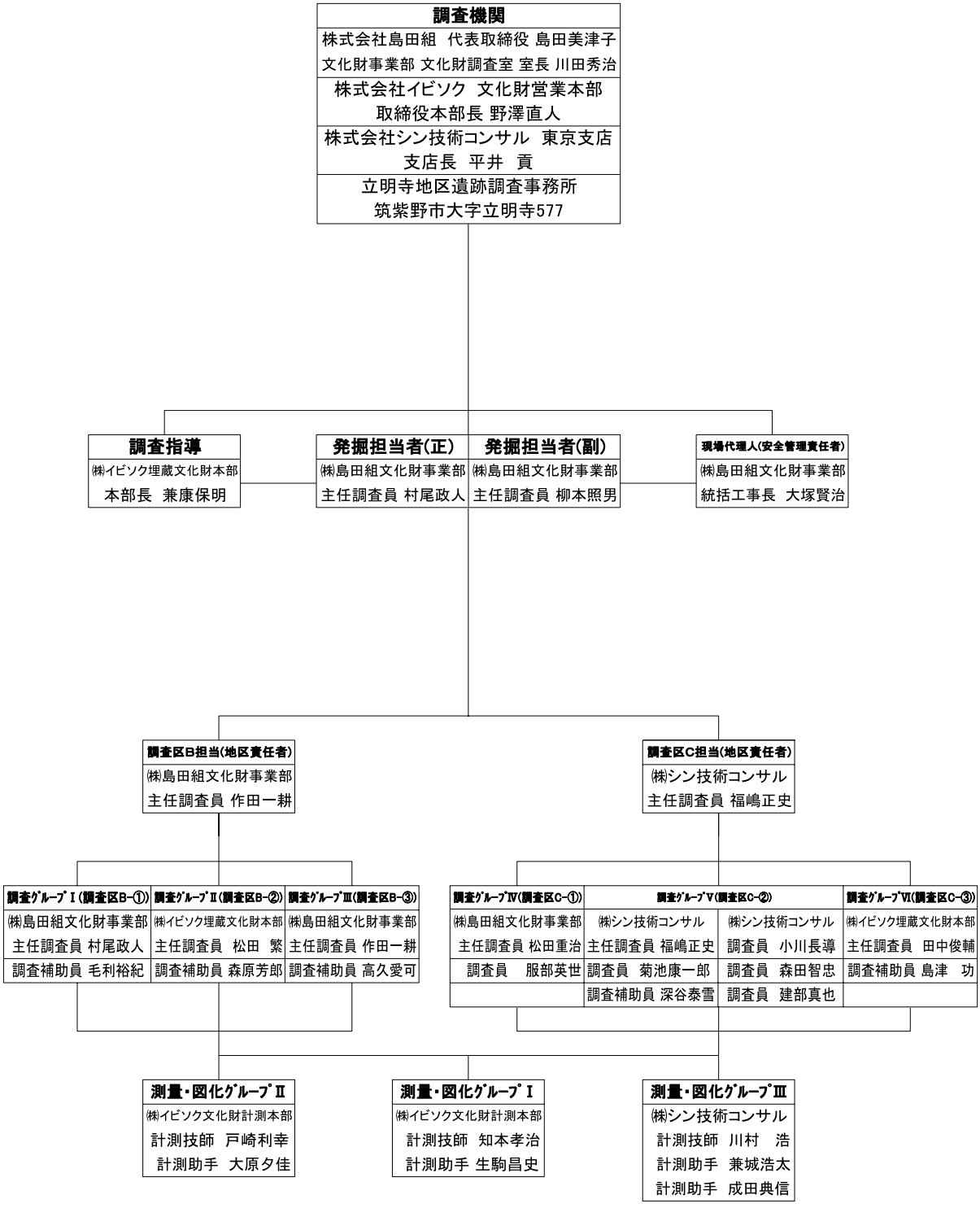
調査を対象とする遺跡の性格は、西側丘陵裾に広がる甕棺を主体とする墓域と東側の低位段丘に位置する集落跡に大きく二分され、その性格を大きく異にしていることが予測された。また、甕棺を主体とする箇所については、長期の調査期間を必要とすることから、特殊な調査体制の編制が考えられた。株式会社島田組は、甕棺墓に関わる調査期間を集落遺跡の数倍に及ぶものと想定し、当初の調査体制では予定されている造成工事の着手を履行できない可能性が高いと判断した。また、甕棺墓の調査に対応できる調査体制の編制を新たに試みたが、緊急な状態による組織の増員等の立て直しは不可能であった。調査体制については、筑紫野市教育委員会と株式会社島田組によって再三の協議を行った結果、甕棺墓を主体とする立明寺地区遺跡Ａ地点の調査は筑紫野市教育委員会によって実施し、低位段丘上に位置する集落予測地の立明寺地区遺跡Ｂ地点は株式会社島田組・株式会社イビソク・株式会社シン技術コンサルによる共同企業体にて実施することが決定した。イオンモール株式会社、筑紫野市教育委員会、株式会社島田組は、平成19年 6 月18日に（仮称）イオン筑紫野ＳＣ開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査についての三者協定を締結した。株式会社島田組は、大規模な調査に対応するための共同企業体（株式会社島田組、株式会社イビソク、株式会社シン技術コンサル）を結成し、平成19年 6 月22日、立明寺地区遺跡Ｂ地点（19,716㎡）の発掘調査届け出（文化財保護法第92条）を提出した。平成19年 7 月3日付けで福岡県教育委員会から調査承諾の通知を受け、現地調査を平成19年 7 月 5 日から同年 9 月28日まで実施した。平成20年 3 月17日付けで「埋蔵文化財発掘調査に伴う整理・報告書作成に関する覚書」を筑紫野市教育委員会と株式会社島田組の二者にて締結した。整理作業、報告書作成は平成19年 9 月29日から平成21年11月30日まで実施した。

第 2 節　調査体制

今回の調査体制は、イオンモール株式会社の計画する（仮称）イオン筑紫野ＳＣ開発事業に伴う調査組織として（株）島田組による単独の編制を試みた。しかし、広域な調査対象面積に対応した複数の調査グループの配置や測量部門等の配備の不足から、総合的な結論として単独の会社による組織の結成は不可能と判断した。（株）島田組は、これらの手薄な部門の補充、応援を株式会社イビソク、株式会社シン技術コンサルの 2 社に依頼し、共同企業調査体として計画を進めた。また、調査体制は民間調査組織であることから、その活用について筑紫野市教育委員会に打診等の協議が行われた。その結果、調査は行政管轄である筑紫野市教育委員会の指導のもとで実施する旨等を謳った内容の調査協定契約書を筑紫野市教育委員会、イオンモール株式会社、株式会社島田組の三者にて交わした。

調査体制は、広域な調査面積に対して十分に機能できる大規模な調査共同企業編制を採ることで計画を可能とした。その調査グループは、調査面積に対応した 7 班を配し、各班に各 1 名の主任調査員、調査員、補助員と測量技師等の員数を配した。また、調査地は北側のＢⅠ地区、南側のＢⅡ地区に南北に大きく分かれていることから、ＢⅠ地区とＢⅡ地区を別班とした上で、ＢⅠ地区に 4 班、ＢⅡ地区に 3 班の調査グループ班を配属した。測量・図化は、Ａグループ［(株）イビソク］がＢⅠ地区、Ｂグループ［(株）シン技術コンサル］がＢⅡ地区を主に担当した。

（仮称）イオン筑紫野SC開発事業に伴う 立明寺地区遺跡B地点発掘調査体制・組織図



第３節　調査の方法

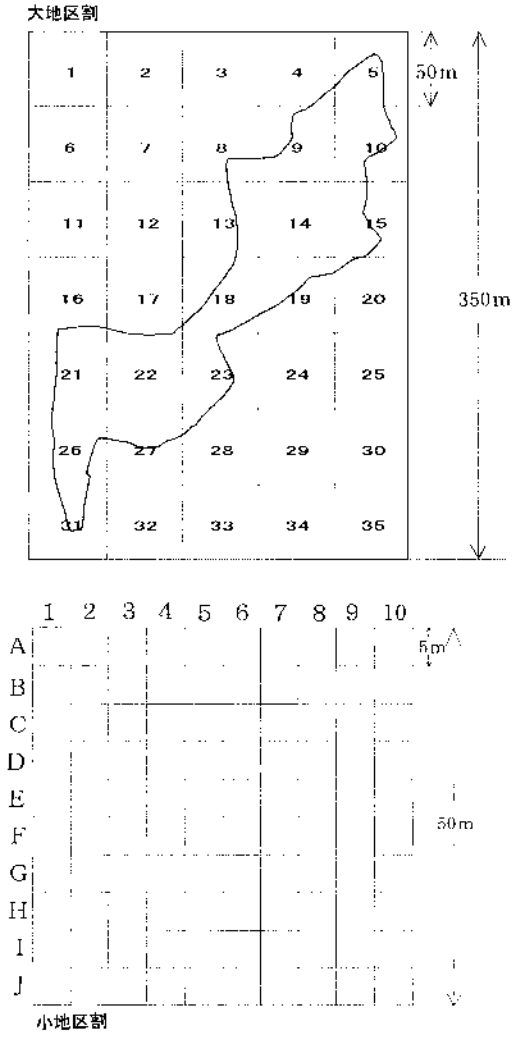
今回の調査は、（仮称）イオン筑紫野ＳＣ開発の予定されている約11.9haの対象地に試掘調査が行われた。試掘調査は筑紫野市教育委員会によって75本のトレンチが設定され、平成18年９月15日から開始された。その結果、開発地区の西側、東側、南側の３箇所に弥生時代中・後期、古墳時代、古代の遺構が数多く確認された。遺構は表土の耕作土、床土を除去した約20㎝下位の地山面にて検出でき、遺物包含層は既に削平を受けて存在していないことが判明した。検出された遺構の種別は、甕棺、竪穴住居跡、土坑、溝、ピット等があり、その種別によってはある一定の地域に集中している傾向がみられた。特に弥生時代中・後期期の甕棺群については西側の低位段丘上に多くみられ、弥生時代後期から古代に至る遺構は東側と南側に集中していた。これらの成果を今後の調査に反映できるように検討した結果、西側の甕棺群は天拝中学校建て替えの際に調査された立明寺遺跡の東側への広がりとして捉えることができる。また、東側、南側の弥生時代から古代に至る遺構群は、東側を北東方向に流れる山口川沿いの低位段丘上に立地する新たに発見された集落跡遺跡として捉えた。

今回の調査は、今日まで行われた周辺遺跡の調査成果と試掘調査の結果を踏まえた上で調査計画を立てた。調査対象地は大きく分類して西側（Ａ地区）の甕棺群、南側（ＢⅠ地区）、東側（ＢⅡ地区）の３箇所に分かれる。Ａ地区は筑紫野市教育委員会による実施となったことから、残りのＢⅠ・ＢⅡ地区の調査について計画通りに進めた。

調査方法としては、調査対象地であるＢⅠ・Ⅱ地区に大地区の調査地区割（第２図）を設定した。大地区は南北、東西幅50ｍの方眼にて１～35区として設定した。小地区割（第２図）は５ｍ方眼の地区を東西10箇所（１～10区）、南北10箇所（Ａ～Ｊ区）とした。また、大規模な調査対象面積であることから、調査担当の班数に小分けしたＢⅠ－１～ＢⅠ－３区、ＢⅡ－１～ＢⅡ－４区に７等分した。この調査区は調査担当区分割の仮のものであり、割付ラインとしては大地区、小地区のものを踏襲した。

各調査区割は、世界測地系基準の座標を設定し、全ての遺構は座標にて管理した。記録方法としては、調査の進捗状況に合わせて調査担当区分割にて全体遺構平面を空測にて行った。個々の断面、平面図化は写真測量のオルソを基本とし、一部はトータルステーションによる図化と手実測を行った。

調査は表土掘削、遺構検出、遺構掘削、遺構完掘、終了の各段階にて筑紫野市教育委員会調査指導職員による調査指導、検査を受け、平成19年９月28日に現地調査を終了した。



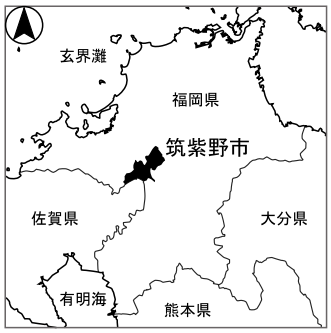
第２図 調査区割り図

第 2 章　遺跡の環境

第 1 節　遺跡の位置と地理的環境

1　位置

立明寺地区遺跡は福岡県筑紫野市大字立明寺に所在する。筑紫野市は福岡県中央部の西寄り、福岡市から南東15㎞に位置している。市域は東西15.9㎞・南北14.1㎞に広がり、その形は蝶が羽を広げた姿に似ている。市域の北部は主に太宰府市に接し、北東端部では糟屋郡宇美町に、西端部では大野城市・筑紫郡那珂川町に接する。東部は三郡山地を境に飯塚市に、南東部は朝倉郡筑前町に接する。市域の南部は小郡市・佐賀県三養基郡基山町に、南西端部では佐賀県鳥栖市とも接している。立明寺地区遺跡は、筑紫野市のほぼ中央部標高45m前後の微高地に位置する。

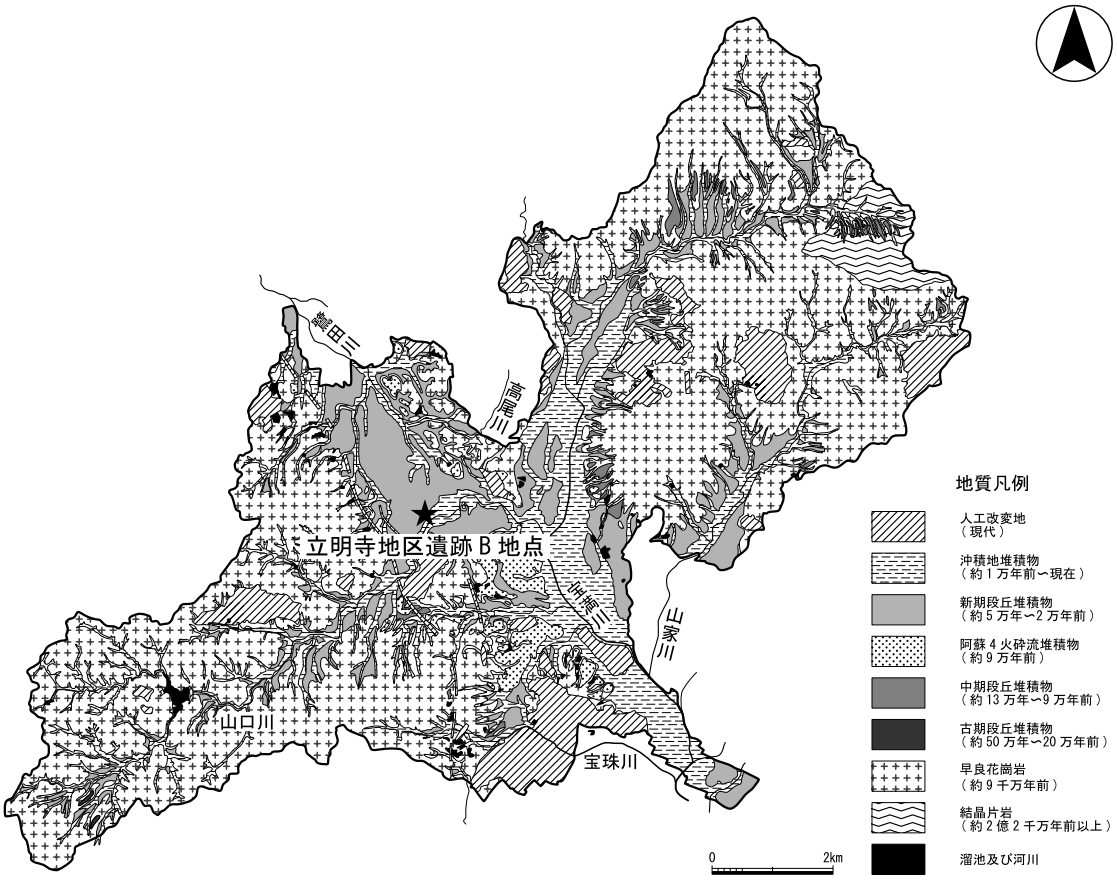


第 3 図 遺跡位置図

2　地理的環境

遺跡の所在する筑紫野市は、市域東部に海抜500～900m前後の三郡山地がそびえ、その西縁に海抜350m前後の丘陵性山地が広がる。市域西部には海抜400～600m前後の脊振山地がそびえ、その北縁に海抜300m前後の丘陵性山地（牛頸低山地）、牛頸低山地全縁の標高100m前後の丘陵が広がる。

三郡山地と脊振山地に挟まれた市域中央部には、御笠川・宝満川水系の河川により形成された海抜20～40m前後の二日市低地帯が、北西 - 南東方向に広がる。



第 4 図 表層地質図

二日市低地帯は、北側の福岡平野・南側の筑紫平野を繋ぐように、市域の中央部を北西‐南東方向に回廊状に貫く。二日市低地帯の西縁には、警固断層系とその延長部が位置し、山地と平野の境界を構成する。このため、筑紫野市の景観は、東西を山地に囲まれた盆地的景観と、北西方向と南西方向に開けた平野的景観の双方を持ち合わせている。

二日市低地帯の北部では、博多湾に注ぐ御笠川水系の鷺田川とその支流である高尾川が流れる。南南部では、脊振山地に源を発する山口川が東側に流れ、市域を南流する宝満川に合流し、筑後川から有明海に注ぐ。

二日市低地帯は、博多湾と有明海へと注ぐ 2 つの水系の分水界を有し、福岡平野・筑紫平野を繋ぐ地形的特徴を持つことから、北部九州と中・南部九州とを結ぶ重要な地域となっている。

海に開けた平野的景観と山に囲まれた盆地的景観を持ち、博多湾と有明海へと注ぐ 2 つの水系の分水界を有する地形的特徴を有する筑紫野市では、交通の要衝としての利便性と防御拠点としての閉塞性を合せ持つ自然地形の特色が古くから活かされてきた。

立明寺地区遺跡は、宝満川水系の山口川が、脊振山地の山裾部から二日市低地帯へと迂回しながら流れる部分の沖積段丘・低位段丘上に位置し、今回の調査地である立明寺地区遺跡B地区は、その南東端が山口川の旧河道に当たる。

第 2 節　歴史的環境

今回の調査地周辺の遺跡を中心として、中世までの歴史的環境を時代順に概観する（本文中の括弧内番号は第 5 図に対応する）。

旧石器時代　筑紫野市内でヒトの痕跡が確認されるのは後期旧石器時代前半期からである。筑紫野市から甘木市にかけて、多くの旧石器時代の遺跡があり、遺跡周辺では、野黒坂遺跡（1）・針摺遺跡（2）・峠山遺跡（3）・御笠地区遺跡E地点（4）・萩原遺跡（5）、原田地区遺跡（小郡市に跨がって広がる三国丘陵の北端部）などで、黒曜石・サヌカイトを主な材料とする尖頭器・台形石器・ナイフ形石器・細石刃などが出土している。

縄文時代　この時代の遺跡としては、後期ないし晩期のものが多く、塔原遺跡（6）・萩原遺跡・城ヶ原遺跡（7）・針摺遺跡・大曲り遺跡（8）・野黒坂遺跡・岡田地区遺跡（9）・常松遺跡（10）・永岡遺跡（11）などで、後期ないし晩期の土器・石器が出土している。それより前のものとしては、萩原遺跡で早期の押型文土器、城ヶ原遺跡で押型文土器・前期の轟B式土器・曽畑式土器、峰古野遺跡（12）で早期の押型文土器・撚糸文土器、針摺遺跡で中期の土器が出土している。

縄文時代の遺物、特に後期・晩期のものは、包含層や弥生時代以降の遺構埋土から出土しているものが多い。このことは、縄文時代後期・晩期の遺跡の立地と、弥生時代以降の大規模遺跡の立地が類似した状況であり、弥生時代以降の遺跡の形成により縄文時代の遺構が破壊されたことを示している[註1]。遺構としては、阿志岐シメノグチ遺跡（13）で晩期の方形プランを呈する竪穴式住居跡、久良良遺跡（14）で晩期の土坑状遺構、仮塚南遺跡（15）・諸田仮塚遺跡で晩期の陥し穴状遺構が検出されている。

弥生時代　弥生時代になると、遺跡の規模・出土遺物の量は圧倒的に増加する。塔原遺跡・五穀神山遺跡（16）・峯畑遺跡（17）・修理田遺跡（18）・桶田山遺跡（19）・八隅遺跡（20）・通り浦遺跡（21）・道場山遺跡（22）・脇田遺跡（23）・野黒坂遺跡・貝元遺跡（24）・立明寺遺跡A地点（25）・阿志岐シメノグチ遺跡（26）・御笠地区遺跡E地点・同F地点（27）・常松遺跡・永岡遺跡・

久良々遺跡・仮塚南遺跡・倉良遺跡（調査地の南東約2.5㎞地点）・大牟田西遺跡（28）・日焼遺跡（29）などで、集落・墓域に伴う遺構が検出されている。

永岡遺跡では甕棺墓を中心とする埋葬施設が二列状に配置された墓域が検出され、隅・西小田地区遺跡群（三国丘陵の北端部）で前期末～終末期の竪穴住居跡・甕棺墓を主体とする墓地群が検出され、中期末の一括埋納された中細型銅戈23本とこれに伴う祭祀土坑が見つかっている。隅・西小田遺跡群の甕棺墓の中には、棺内が赤色顔料で塗布され、ゴウボラ製貝輪 8 個を装着し、銅剣が副葬されている中期前半のものや、合計41個の貝輪を両腕に装着し、前漢鏡 1 面と鉄剣・鉄戈が副葬されている中期後半のものがある。また、永岡遺跡や隅・西小田遺跡の甕棺墓から出土した人骨には、頸が無いものや頸だけのもの、銅剣切先が嵌入したもの、石剣切先・石鏃を伴うもの、外傷や骨折の痕のあるものがある。これらは首長により率いられた集団の存在と、集団間の戦闘があったことを窺わせるものである。

古墳時代　この時代の遺跡としては集落跡・窯跡・古墳があるが、古墳の調査例が多い。

集落跡としては、脇田遺跡・野黒坂遺跡・大曲り遺跡・貝元遺跡・トドキ遺跡（30）・御笠地区遺跡（ 4 ・27・31・32）・日焼遺跡・仮塚南遺跡、隅・西小田地区遺跡・原田地区遺跡群（不別当遺跡）で、前期から中期の竪穴住居（群）が検出されている。

古墳は主に山裾の丘陵に分布している。前期の古墳としては、前方後円墳の原口古墳（33）、方墳（長方形墳）の古剣塚古墳群（調査地の北西約3.2㎞地点）・阿志岐B22号墳～B26号墳（34）、唐人塚古墳群（35）に先行して作られた石蓋土壙・木棺墓・箱式石棺墓からなる群集墓などがある。このうち原口古墳は、全長約80mの撥形に開く小さな前方部を持つ纒向型の系譜を引く古墳である可能性があり、三角縁神獣鏡 3 面などが出土している（第 6 図）。

横穴式石室を伴う中期・後期の古墳としては、前方後円墳 1 基を含む剣塚古墳群・唐人塚古墳群・カケ塚古墳（36）・八隅古墳群（20）・埴安神社古墳（調査地の北西約2.9㎞地点）・上の浦古墳（37）・古賀古墳群 1 号墳（38）・諸田仮塚遺跡・五郎山古墳（調査地の南東約3.5㎞地点）・大牟田西 1 号墳（28）・名越古墳群（調査地の南東約2.4㎞地点）などがある。このうち五郎山古墳は、周溝を持つ二段築成の円墳で、全長11.4mを測る複室両袖式の横穴式石室の玄室の奥壁・両側壁、玄門の両袖石に、船・家・武具類・人物・動物などの壁画が描かれている。

宮地岳西麓部には多くの群集墳があり、阿志岐古墳群A群 3 号墳（39）・同B群21号墳（40）・峰古野 1 号墳（41）・杉の谷古墳群（42）・老松神社古墳群（43）・天山古墳群（44）・脇道古墳群（45）などが分布し、宮地岳と狭長な平野部を挟み西側の丘陵上には、柚ノ木古墳群（46）・塚口古墳群（調査地の北東約4.1㎞地点）が分布する。今回の調査地の南側には、萩原古墳群（47）・立明寺古墳群（48）が分布し、隅・西小田地区遺跡では中期・後期の古墳群が、原田地区遺跡では後期の古墳群が検出されている。

窯跡は隅・西小田地区遺跡群第 8 地点・第10地点（池ノ上遺跡）で初期須恵器の窯跡が検出されている。

古代　筑紫野市は前節で述べたように、北部九州と中・南部九州とを結ぶ交通の要衝であった。市の北側に隣接する太宰府市には大宰府が設置され、大宰府政庁の南側には大宰府条坊が展開した。大宰府条坊は筑紫野市の北部までがその範囲である。奈良時代には大宰府から放射状に延びる官道が整備された。この官道は、周辺の遺跡でも検出されており、筑紫野市内では、岡田地区遺跡で豊後国に向けて整備された官道「西海道」に比定される 8 世紀中頃から 9 世紀かけて存続した道路とこれに伴う

掘立柱建物群・柵列群が検出されている。また、御笠地区遺跡A地点（調査地の北東約4.3㎞地点）で『万葉集』に登場する「蘆城駅家」に関連する官衙に比定される 8 世紀代の掘立柱建物群が、牛島宮崎遺跡（49）で御笠地区遺跡A地点に至る道路の側溝と考えられる同時期に機能していた溝 2 条が検出されている。

交通の要衝であった二日市低地帯とこれを挟む山地には、西暦663年に起きた朝鮮半島での白村江の戦いにおける倭・百済連合軍の敗戦に伴い、唐・新羅連合軍の侵攻に備え、敗戦の翌年（西暦664年）に水城が、その翌年（西暦665年）には日本最古の朝鮮式山城である大野城・基肄城が築かれた。そのうち基肄城が筑紫野市と佐賀県三養基郡基山町との県境に所在する。基肄城には大宰府防衛のために軍団が置かれたが大陸からの侵攻はなく、平安時代初めには軍団は廃止された。大宰府史跡第98次調査で出土した天平年間のものと推定される木簡に、基肄城に備蓄されていた稲穀を筑前・筑後・肥前に班給することを命じた内容が記されており、当時の基肄城の機能の一端を窺い知ることができる。筑紫野市内の古代山城としては、基肄城の他に宮地岳に築かれた阿志岐城跡（旧称、宮地岳古代山城跡）がある。築城時期を含め不詳であるが、その位置から大宰府との関連性が考えられる。

古代の居住域については、大宰府の郭内に人口が集中し、郭外でのヒトの居住は疎らであったと考えられる。郭内では大宰府条坊跡の各発掘調査で掘立柱建物群・井戸が多く検出されているが、郭外では先に記した官衙的な性格を有する岡田地区遺跡・御笠地区遺跡A地点以外では、貝元遺跡（362）で掘立柱建物群が検出されている程度である。

古代の墓域については、大宰府条坊跡第123次調査地の木棺墓・土壙墓群、峯火葬墓、唐人塚 6 号墳墓蔵骨器、樋田山遺跡の木棺墓・土壙墓、米噛火葬墓、結浦火葬墓、道場山遺跡の土壙墓、剣塚遺跡の木棺墓・土壙墓など奈良時代・平安時代前半の墳墓があり、これらは大宰府郭内の平地周辺の山麓・丘陵地帯に分布する。

古代には府郭の内外にいくつかの寺院が建立されたが、筑紫野市内では今回の調査地の北西側に位置する府郭南西部に 7 世紀末～ 8 世紀初頭頃に建立され、 9 世紀前半代まで存続した杉塚廃寺（50）、府郭南西の郭外に山田寺系の軒丸瓦と方形二段のくり込みのある舎利孔を有する塔心礎が残る塔原廃寺（51）がある。その南側に塔原廃寺の塔心礎が発祥の旧跡と口伝される武蔵寺（52）がある。その境内にある経塚群のうち 1 号経塚で発見された 2 本の銅板製経筒に、寛治 8 年（1094）・康和 5 年（1103）の紀年銘と「武蔵寺」銘が刻まれている。

中世　大宰府は、11世紀に入ると律令体制の崩壊とともに、政治的な都市としての機能は衰退していった。中世の遺跡としては、牛島宮崎遺跡で青磁碗が副葬された土壙墓 1 基・木棺墓 1 基、筑紫氏の館跡と推定される矢倉遺跡（調査地の南東約2.8㎞地点）で12世紀中頃から後半の白磁碗 2 個が副葬された土壙墓 1 基、若江天神社遺跡（調査地の南東約3.6㎞地点）で道路遺構、原田地区遺跡群で中世後半と考えられる地下式横穴が検出されている。青磁・白磁などの貿易陶磁器の存在は、中世に入っても、経済的な都市としての機能を維持していたことを示している。

註

註 1　水ノ江和同「二　筑紫野地域における縄文時代前期以降の遺跡について」 参考文献『筑紫野市史』資料編（上）所収

第 5 図 周辺遺跡分布図

第 6 図 原口古墳測量図(筑紫野市史より抜粋)

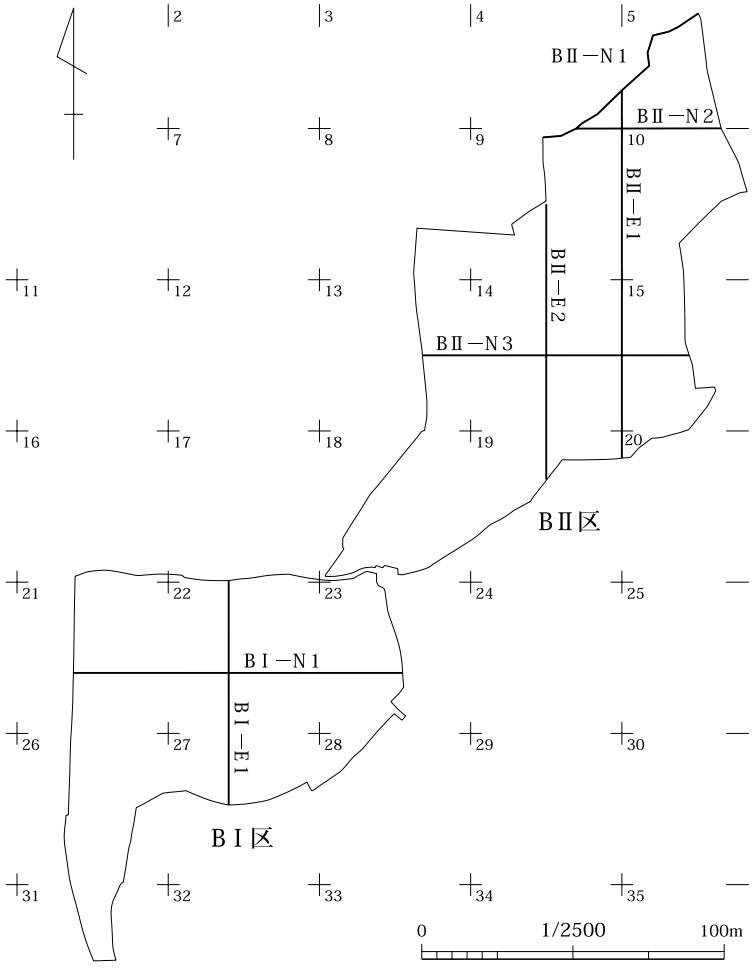
第 7 図 調査風景

第３章　調査の成果

第１節　層序

調査地は南北300ｍ、東西220ｍを測る縦長形を呈し、中央にて南側のＢＩ地区と北側のＢⅡ地区に大きく分離している。地形的には北東方向に流れる山口川左岸（北岸）の低位段丘上に位置する。従って、層序は北東側の比較的に低い段丘縁辺と低位段丘上では大きな違いを呈するが、今回の調査地は高低差の少ない平坦な低位段丘上に位置する。

層序は調査全域を均等に判断するための十字状セクションを調査地中央に設定（第８図）したが、地形の変換点については堆積土層の精細な状況を把握するために方向、形状を変えたものもある。ＢＩ地区は水田として利用されていたこともあり、比較的に広い平坦地であったことからＢＩ－Ｎ１とＢＩ－Ｅ１の２本からなる十字のセクションを設置した。ＢＩ－Ｎ１は北壁断面、ＢＩ－Ｅ１は東壁断面を図化した。ＢⅡ地区は東側の山口川へ下がる低位段丘の傾斜地に位置し、小分けされた水田が多く見られることから、北側のＢⅡ－Ｎ１（北東部北壁）、ＢⅡ－Ｎ２（北部北壁）、中央のＢⅡ－Ｅ１（中央東壁）、ＢⅡ－Ｅ２（中央東壁）、ＢⅡ－Ｎ３（南部北壁）の５箇所に設置した。土層はＢⅡ－Ｎ１にて北東から南西方向に流れていた自然流路による大きな土層の堆積がみられたが、基本的には後世の削平によって包含層のみならず、遺構本体及び地山面についても大きく失われていた。



第８図 基本土層断面位置図(1/2500)

以下、基本土層について記述した。

第１層：表土層は水田の耕作土及び表土である暗灰褐色土の単一層である。層厚は10～20㎝を測る。

第２層：水田耕作土直下にみられる水田の床土である。近現代に施工された淡灰黄色粘土層である。層厚は２～５㎝を測る。

第３層：二次堆積による遺物包含層である。調査地全域に確認できる土層ではないが、水田の落差地、低地にみられる。褐灰色（10YR4/1）砂質土。ＢⅡ地区の縁辺にみられる段丘上から削平された遺構埋土、遺物包含層等の堆積である。

第４層：地山に該当する二次堆積層である。各箇所によって違いがみられるが、橙色（7.5YR6/6）粘質シルト層、灰黄褐色（10YR4/2）砂質土、にぶい黄橙色（10YR5/4）極細砂層があり、下層には部分的にレンズ状の砂礫層が堆積している。

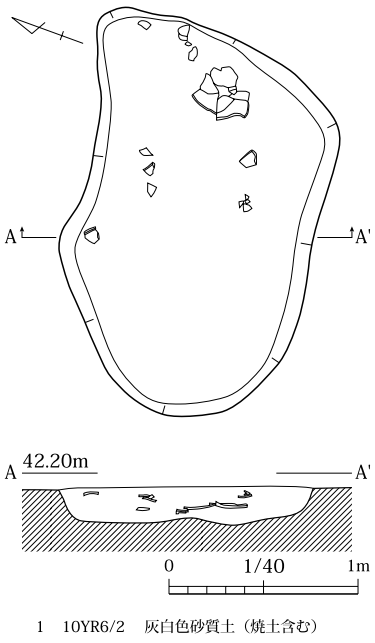
第２節　Ｂ１地区

第１項　縄文時代の遺構と遺物

１　土坑

土坑22-S0016（第９図）

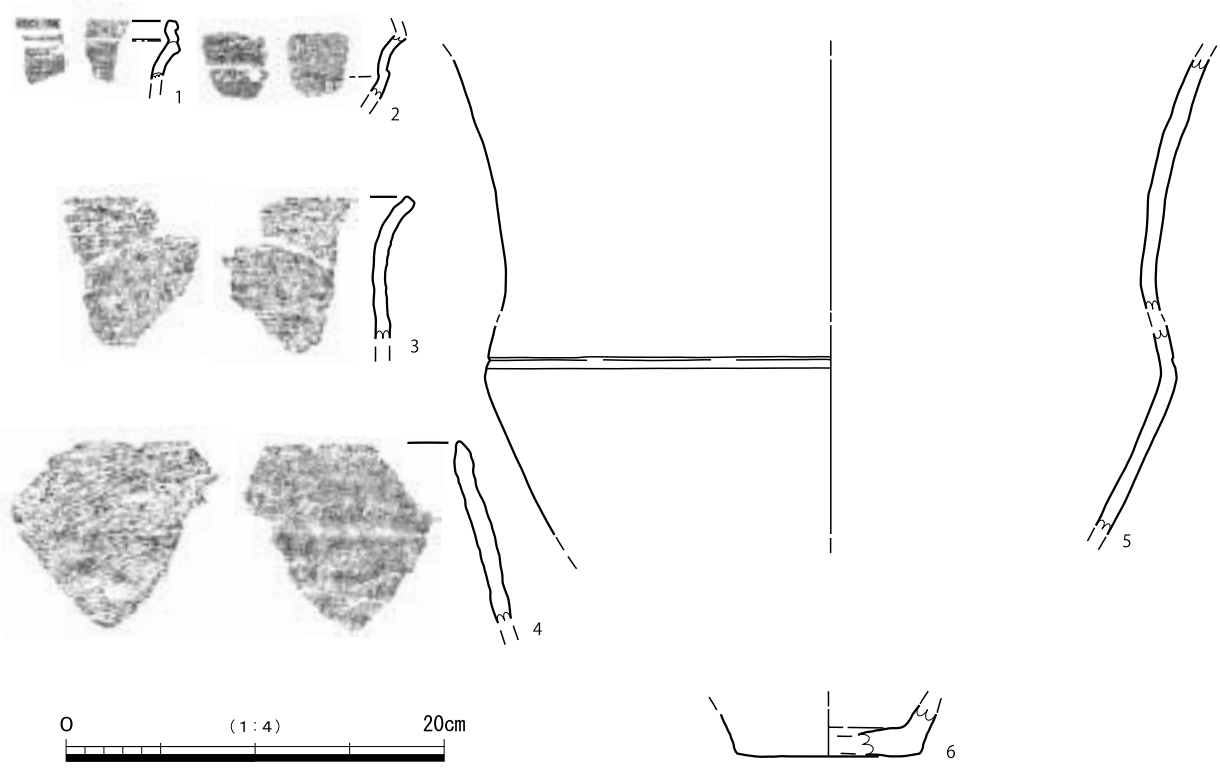
22グリッド10Ｇ地区において検出した土坑である。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形である。主軸方向はＮ-18°Ｗである。規模は長軸2.15m、短軸1.35m、検出面からの深さ0.20mを測る。土坑の覆土は焼土片、炭化物片を多く含んだ灰白色細砂質土が全面に広がっている。土層は灰白色土の単一層である。焼土、炭は二次堆積によるもので、壁面には被熱した痕跡は見受けられなかった。出土遺物は縄文土器、黒曜石のチップ、フレーク（表１）の細片が多く出土した。縄文土器は東側から圧壊した状態で出土しているが、据えられているという状態ではなかった。剥片の出土状況は、全面に広がっており、西半分からは図示したもの以外にも多数の出土がみられた。産地は乳白色の大分県姫島産、黒色の佐賀県腰岳産のものがみられる。



第９図 土坑22-S0016 平面・断面図

出土遺物（第10図・図版44）　出土した土器は１・２に見られる精製土器と３～５に見られる無文の粗製土器で構成されている。

１は精製の深鉢で、口縁は「く」の字状に内弯し、２条の沈線が巡りまた内面屈折部にも強いヘラミガキによる沈線が施されている。口縁端部は平らにおさめられ、口縁の幅が短小化傾向を示してい



第10図 土坑22-S0016 出土遺物実測図（1/4）

表１ 土坑22-S0016剥片類分類表

No.276-1	石材	石核	剥片系	砕片系	2次調整剥片	点数
サヌカイト（多久）		0	0	9	0	9
腰岳Ob	風化弱	2	12	73	2	89
	風化強	0	1	0	0	1
姫島Ob		0	0	3	0	3
計		2	13	85	2	102
No.276-2	石材	石核	剥片系	砕片系	2次調整剥片	点数
サヌカイト（多久）		0	5	5	0	10
腰岳Ob	風化弱	0	0	1	0	1
	風化強	0	0	0	0	0
姫島Ob		0	1	0	0	1
計		0	6	6	0	12
No.276-3	石材	石核	剥片系	砕片系	2次調整剥片	点数
姫島Ob		0	3	19	1	23
No.276-4	石材	石核	剥片系	砕片系	2次調整剥片	点数
サヌカイト（多久）		0	0	1	0	1
腰岳Ob	風化弱	1	3	38	0	42
	風化強	0	0	0	0	0
姫島Ob		0	0	1	0	1
計		1	3	40	0	44
No.276-5	石材	石核	剥片系	砕片系	2次調整剥片	点数
姫島Ob		0	1	12	0	13
No.276-6	石材	石核	剥片系	砕片系	2次調整剥片	点数
サヌカイト（多久）		0	0	6	0	6
No.276	石材	石核	剥片系	砕片系	2次調整剥片	点数
サヌカイト（多久）		0	1	3	0	4
腰岳Ob	風化弱	0	1	10	1	12
	風化強	0	0	0	0	0
姫島Ob		0	0	8	0	8
計		0	2	21	1	24

分類合計

合計	石材	石核	剥片系	砕片系	2次調整剥片	点数
サヌカイト（多久産）		0	6	24	0	30
腰岳産	風化弱	3	16	122	3	144
黒曜石	風化強	0	1	0	0	1
姫島産黒曜石		0	2	26	1	29
計		3	25	172	4	204

サヌカイト（多久産）は剥片にて搬入されている。
腰岳産黒曜石は石核～チップまである。
姫島産黒曜石は剥片石器のみ。
2次調整されたものが少ない⇒搬出された可能性がある。

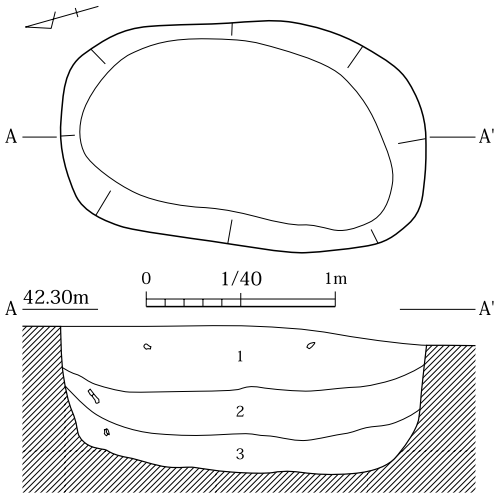
る。２は精製の浅鉢で口縁端部は欠損しているが、肩部から外反し屈折するものと考えられ、肩部には沈線を施している。３は深鉢で口縁部が外反し文様は施さず、条痕とナデ調整により仕上げられている。頸部の屈折が曖昧になり、粗製化していく。４は粗製の深鉢で内面をナデ調整、外面を条痕後ナデ調整が施され、口縁部は内傾し、端部にかけてはやや外反させて丸くおさめている。５は深鉢形土器で胴部は稜をなして屈曲し、肩部に浅い１条の沈線をめぐらす。頸部は内弯し口縁部は大きく広がる。内外面共にナデ調整が施され内面頸部・胴部に横方向の条痕が見られる。６は鉢の底部で平底を呈している。

石器（表１） この遺構からは、上記既述のとおり縄文土器や大分県姫島産・佐賀県腰岳産の黒曜石が多く出土しており、これらの剥片および破片の個数を一覧表にし、その傾向と特徴をまとめてみた。

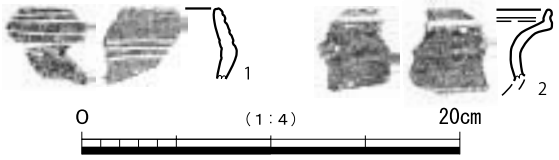
土坑23-S0503（第11図）

23グリッド２Ｉ地区において検出した土坑である。東側には竪穴住居跡23-S0504がある。耕作土直下にて検出した。平面形状は南北方向に長軸をもつ楕円形である。断面形状は逆台形を呈する。主軸方向はN-21°-Eである。規模は長軸1.93m、短軸1.17m、深さ0.77mを測る。覆土は１～３層共にわずかながら砂粒を含むものの、粘性のある土層である。出土遺物は上層、中層から縄文土器片が出土した。

出土遺物（第12図・図版44） 出土した縄文土器はいずれも小片で、１は深鉢形土器で広めの口縁部を有し、稜をもって内傾している。外面はヘラミガキ調整後、４条の沈線が施され内面にもナデ調整後屈曲部に３条の沈線が施されている。２は精製浅鉢形土器で「く」の字に口縁部が立ち上がり、内弯する頸部を介して胴部も「く」の字に屈折する。口縁部は直立気味になり、口縁部文様帯が狭く１条の沈線が施され、内外面共に丁寧にヘラミガキ調整されている。S0503出土の土器はS0016と同様、広田式の範疇に位置づけられると思われる。



第11図 土坑23-S0503 平面・断面図



第12図 土坑23-S0503 出土遺物実測図

第２項　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

１　竪穴住居

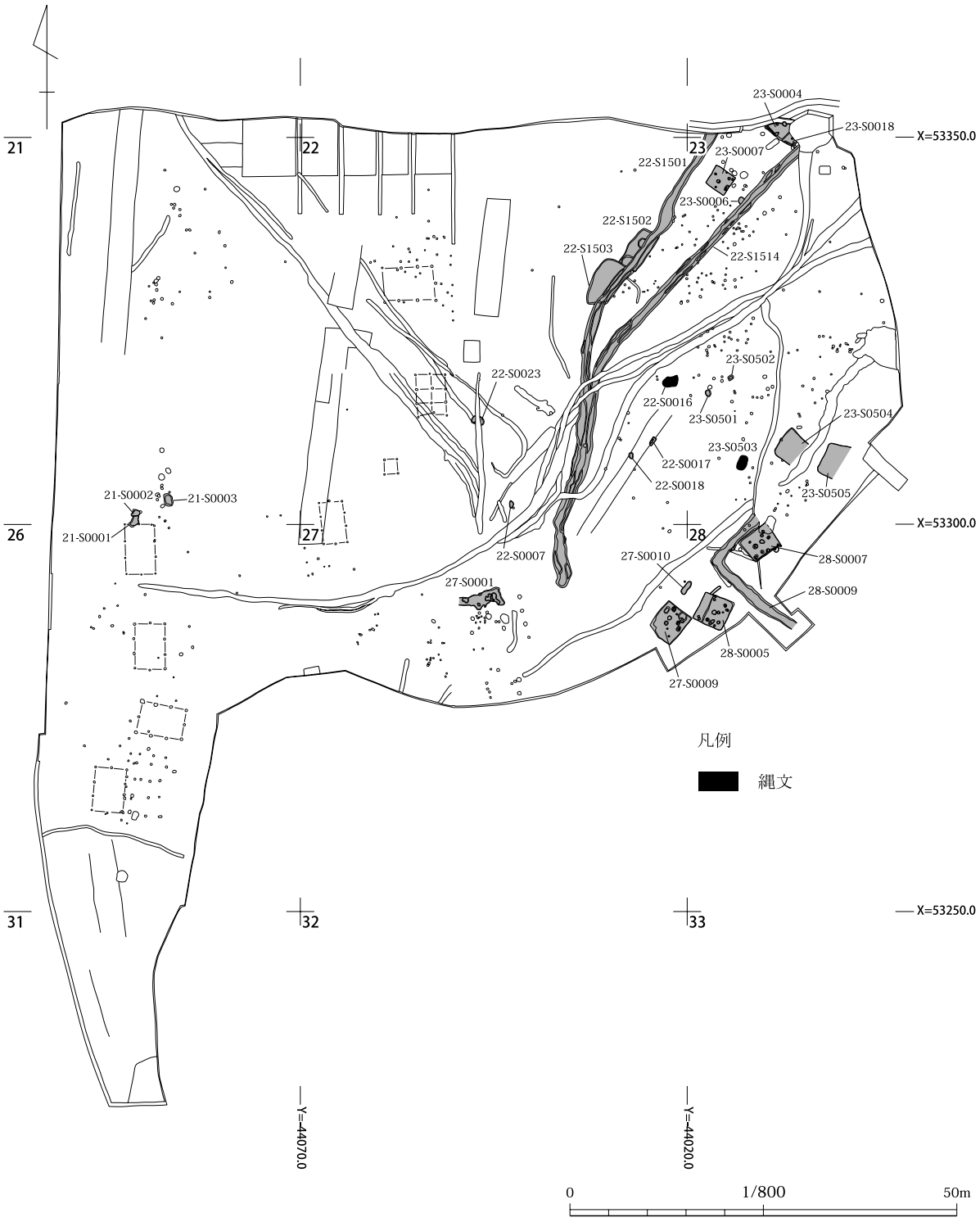
住居23-S0004（第14図）

23グリッド３Ａ地区において検出した竪穴住居である。北側は水路掘り方、攪乱によって切られ、南東側は近接した竪穴住居23-Ｓ0018を切っている。北側は調査区外である。竪穴住居の形状は方形と考えられるが、北側を水路によって切られていることから三角形状の検出に止まった。断面形状は逆台形である。主軸方向はＮ-44°-Ｅである。規模は長辺2.60ｍ、短辺2.40ｍ、検出面から深さ0.15ｍを測る。北東側に小型、大型ピット、南西辺に壁溝とピットを各１カ所検出した。大型ピットは住居の中央に設定された貯蔵穴の可能性がある。最大径0.64ｍ、深さ0.10ｍを測る。小型のピットは規模から主柱穴の可能性がある。壁溝はピットの位置で止まっており、南端まで達していない。壁溝の規模は検出長1.30ｍ、幅0.20ｍ、深さ0.05ｍを測る。遺構の覆土は黒褐色シルトの単一層である。出土遺物は弥生土器片が少量出土した。

住居23-S0007（第15図・図版２-１）

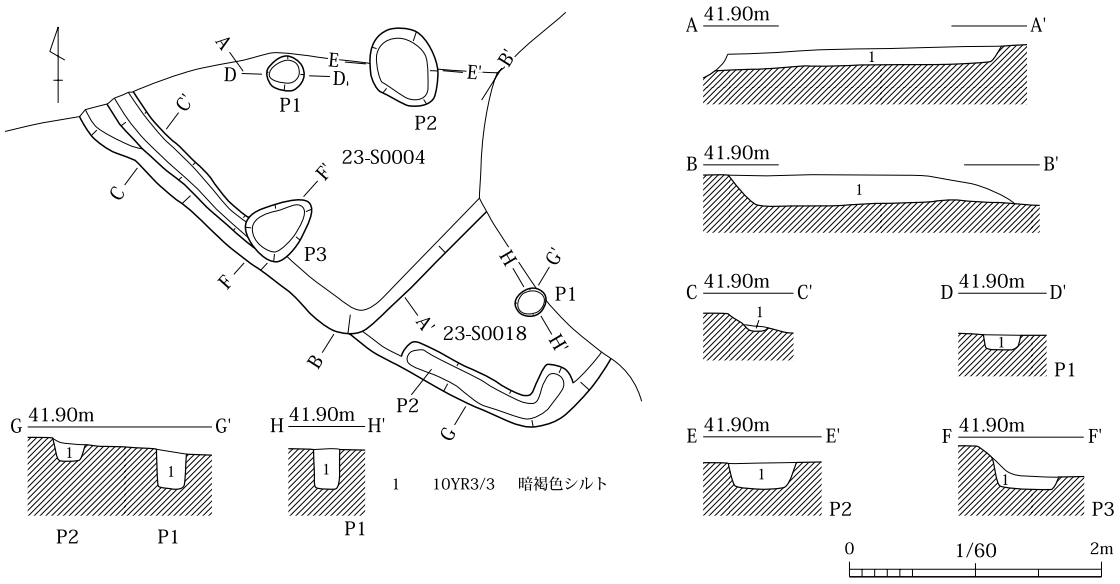
23グリッド１Ｂ地区において検出した竪穴住居である。住居は西、東側に走る環濠22-Ｓ1501、23-Ｓ1514と同一方向の辺を呈する。住居の西側上層にて多量の弥生土器が投棄された状態で検出した。遺物は二次焼成を受けており、出土状況から廃棄住居に伴うまとまった遺物として扱える可能性もある。平面形状は正方形、断面形状は逆台形を呈する。主軸方向はＮ-38°-Ｅである。規模は長辺2.85ｍ、短辺2.8ｍ、深さ0.08ｍを測る。中央に炉跡、東辺中央に貯蔵穴を有する。主柱穴は北辺中央と南辺中央に各１カ所、計２カ所を有する。規模は北側Ｐ１が直径0.15ｍ、深さ0.13ｍ、南側Ｐ５は直径0.20ｍ、深さ0.05ｍ、炉跡には東辺に小型のピットを有する。炉跡の規模は長辺0.8ｍ、短辺0.4ｍ、深さ0.15ｍを測る。壁、床面は褐色に変色しており、覆土には多くの炭片、焼土を含んでいた。住居の規模としては小型であることから、本来の規模は南北にベッド状の広がりを有した長方形を呈するものと考えられる。覆土は上層が焼土、炭を多く含んだ黒褐色シルト、下層はにぶい黄褐色シルトである。上層から検出した炭は短く破損しているが、放射状を呈することから焼失家屋の可能性が高い。遺物は弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第17図・図版45）　１～５は壺で、１は球形の体部から強く外反する広口壺である。頸部

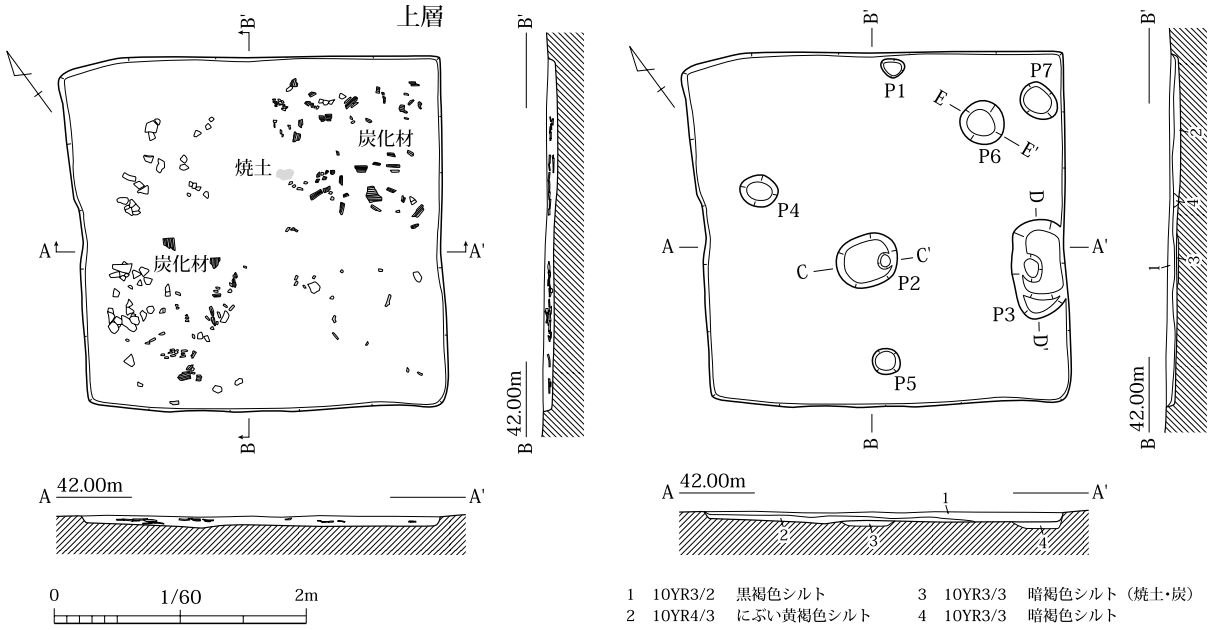


第13図 ＢＩ地区縄文～古墳時代遺構平面図

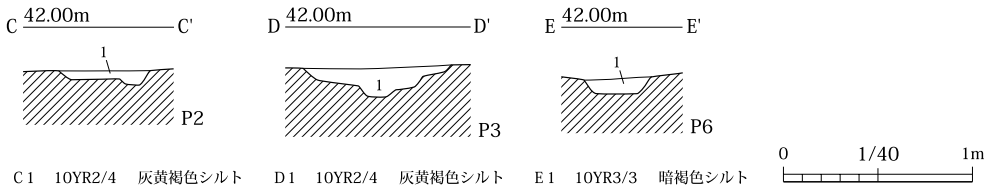
に低い突帯を巡らす。２・３は直口壺で２は刻み目を施した突帯を貼付する。３は球形の体部で内外面ともにハケ調整。４は球形に張った体部をもち、底部はやや凸レンズ状を呈する。５は口縁部が直立気味に立ち上がり、上端でやや外反する。底部は凸レンズ状を呈する。６は壺の底部でやや凸レンズ状を有する。７は高坏の口縁部である。坏部外面には鋸歯状のミガキが施されている。８は高坏の筒状脚部である。９は沓形土製支脚で、外面脚部は右下がりのタタキが施され、内面は粗雑にナデ上げ、器厚はやや厚めである。11は最小径が上部にある在地系の器台である。



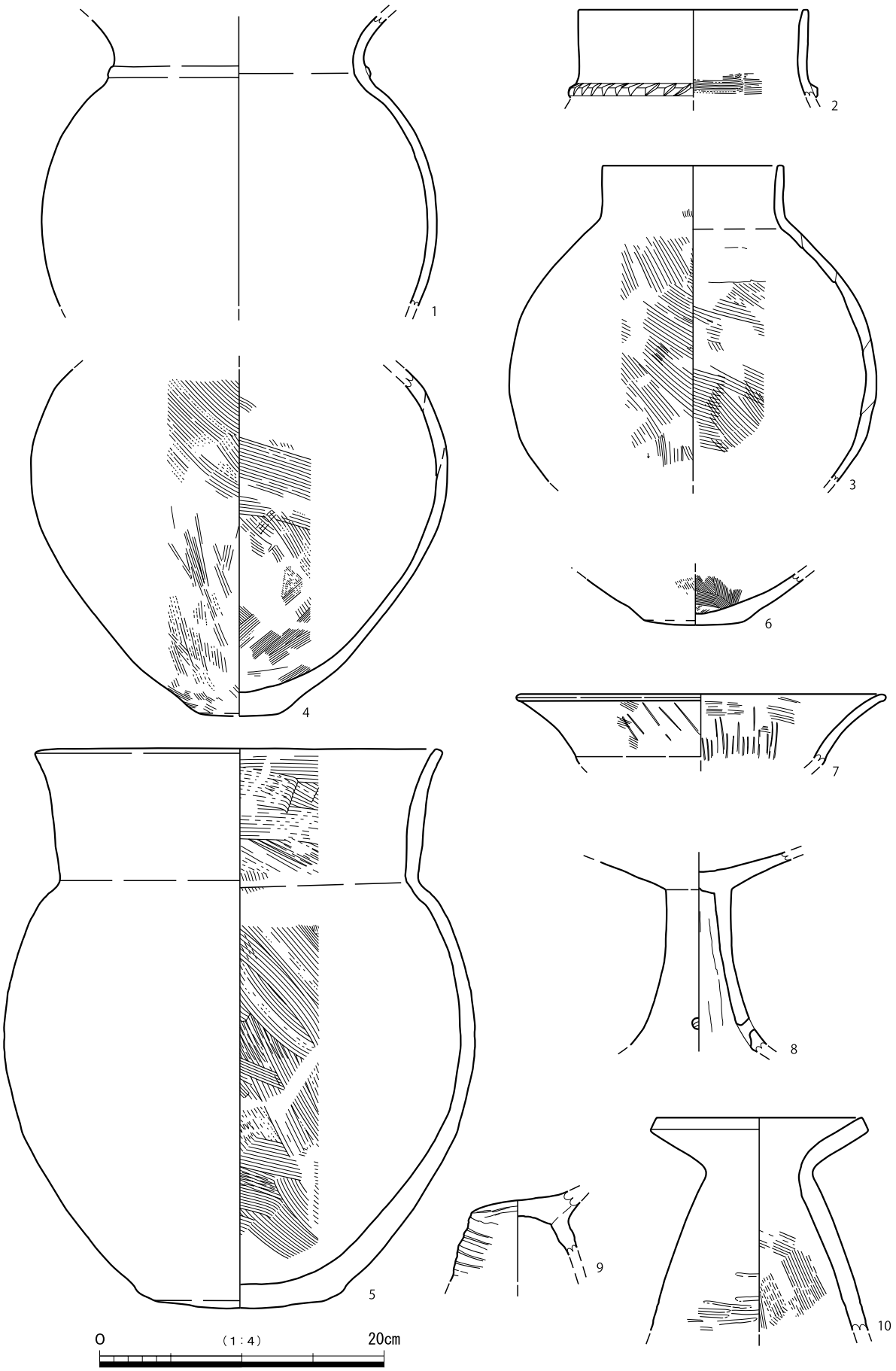
第14図 竪穴住居跡23-S0004・S0018 平面・断面図



第15図 竪穴住居跡23-S0007 平面・断面図



第16図 竪穴住居跡23-S0007・P0002・P0003・P0006 平面・断面図



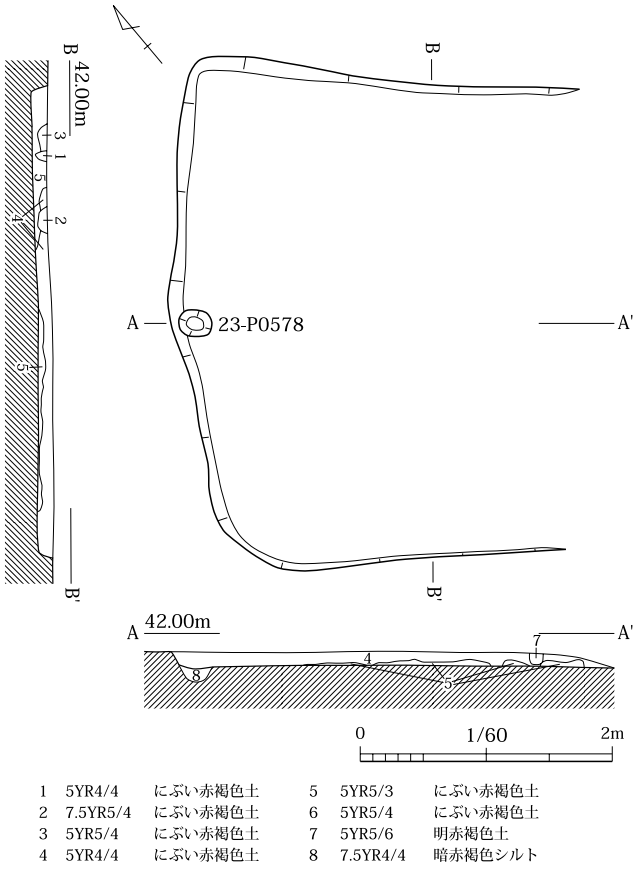
第17図 竪穴住居跡23-S0007 出土遺物実測図

住居23-S0018（第14図）

23グリッド３Ａ地区において検出した竪穴住居である。住居の北側は竪穴住居23-Ｓ0004と攪乱によって切られている。平面形状は方形を呈するものと考えられるが、残存は南西部の一角である。主軸方向はＮ-34°-Ｅである。規模は残存長辺1.6m、残存短辺1.45m、深さ0.10mを測る。南西辺に壁溝、北東側に柱穴を有する。壁溝は南西辺の一部と南東辺角部にのみ検出した。規模は全長1.25m、幅0.25m、深さ0.18mを測る。柱穴は位置関係から４本柱の主柱穴の可能性がある。規模は直径0.23m、深さ0.30mを測る。床面直上より弥生土器片が出土した。出土地点は被熱を受けている状態から炉跡の可能性がある。覆土は暗褐色シルトの単一層である。遺物は弥生土器が出土している。

住居23-S0504（第18図）

23グリッド３・４Ｈ、３・４Ｉ地区において検出した竪穴住居である。住居は東側に走る中世の溝と同一方向の辺を呈する。南東側は掘り込みが切れており、27-Ｓ0008と接しているほか北西辺の中央床面で23-Ｐ0578と南西辺で23-Ｐ0555と切り合っている。平面形状は正方形、断面形状は逆台形を呈する。主軸方向はＮ-40°-Ｅである。規模は長辺3.7m、短辺3.0m、深さ0.11mを測る。西辺中央に１カ所の小型のピットを検出したが、主柱穴は確認できなかった。覆土はにぶい赤褐色土の単一層である。遺物は床面直上から弥生土器が出土した。



1	5YR4/4	にぶい赤褐色土	5	5YR5/3	にぶい赤褐色土
2	7.5YR5/4	にぶい赤褐色土	6	5YR5/4	にぶい赤褐色土
3	5YR5/4	にぶい赤褐色土	7	5YR5/6	明赤褐色土
4	5YR4/4	にぶい赤褐色土	8	7.5YR4/4	暗赤褐色シルト

第18図 竪穴住居跡23-S0504 平面・断面図

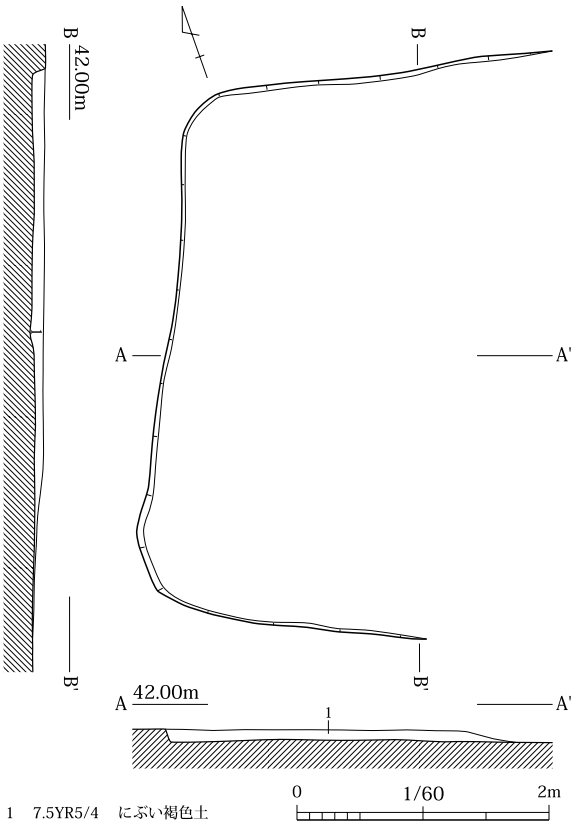
住居23-S0505（第19図）

23グリッド４Ｈ・Ｉ地区において検出した竪穴住居である。住居は西側に走る中世の溝と同一方向の辺を呈する。南東辺は掘り込みが切れて浅くなっていることから、明確なプランとして確認できなかった。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈する。主軸方向はＮ-20°-Ｗである。規模は長辺4.52m、短辺2.8m、深さ0.08mを測る。また、主柱穴についても確認できなかった。覆土はにぶい褐色土の単一層である。

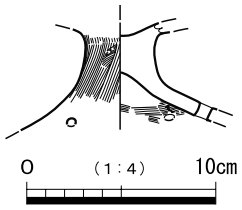
出土遺物（第20図・図版45）　１は脚付鉢の脚部である。脚上部から裾部にかけて大きく広がっている。脚部には小さな円形の透かしを有する。坏部、脚端部は欠損している。

住居27-S0009（第21図・図版５-２）

27グリッド10Ｃ地区において検出した竪穴住居である。住居は西側に走る中世の溝と同一方向の辺を呈する。平面形状は長方形、断面形状は逆台形を呈する。主軸方向はＮ-38°-Ｅである。規模は長



第19図 竪穴住居跡23-S0505 平面・断面図



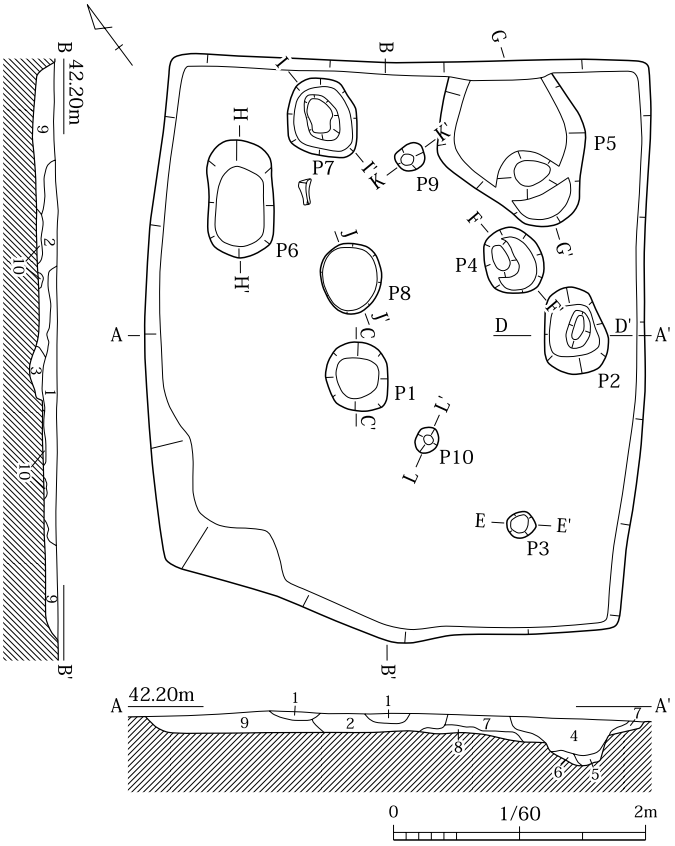
第20図 竪穴住居跡23-S0505 出土遺物実測図

辺4.56m、短辺3.92m、深さ0.15mを測る。東辺は浅くなっており明確なプランとして確認できなかった。住居内からは10箇所のピットを検出したが、主柱穴についても明確なものを確認することはできなかった。ピット間の距離から推測すると、北辺中央のＰ９、南辺のＰ10が２本柱としての主柱穴の可能性がある。北東側の土坑Ｐ５内からは砥石がまとまって出土した。土坑の規模は長辺1.25m、短辺1.1m、深さ0.13mを測る。遺物は床面直上から弥生土器が出土した。

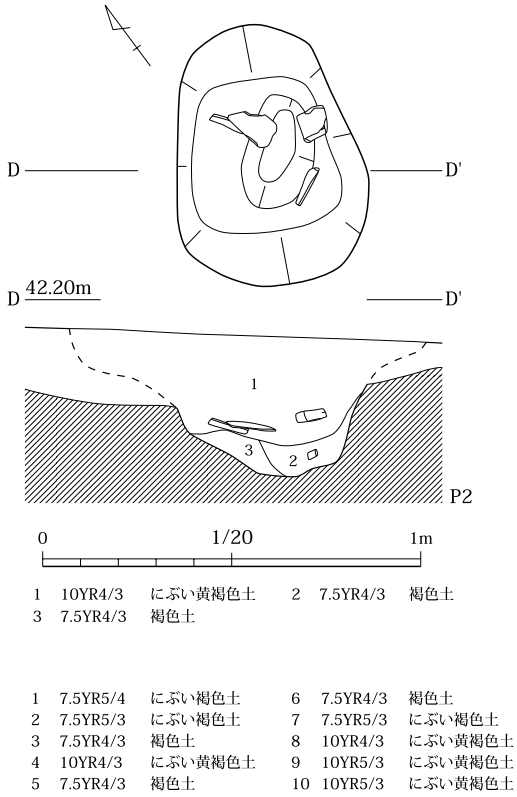
出土遺物（第24図・図版52）　１・２は小型の携帯砥石である。両者は共に長辺の４面を使用しているが、特に上面、側面は過度の使用によって凹状に磨り減っている。過度の使用により片側は欠損したものと考えられる。３は大型の砥石である。側辺全面を過度に使用していることから凹状に磨り減っている。使用面は平滑である。４は方形を呈する砥石と考えられるが、２方向の側面のみ残存、他は欠損している。上面のみ使用痕が観察できる。砥石は砂岩製である。また小片ではあるがやや凸レンズ状の底部等が出土している。

住居28-S0005（第25図・図版５-１）

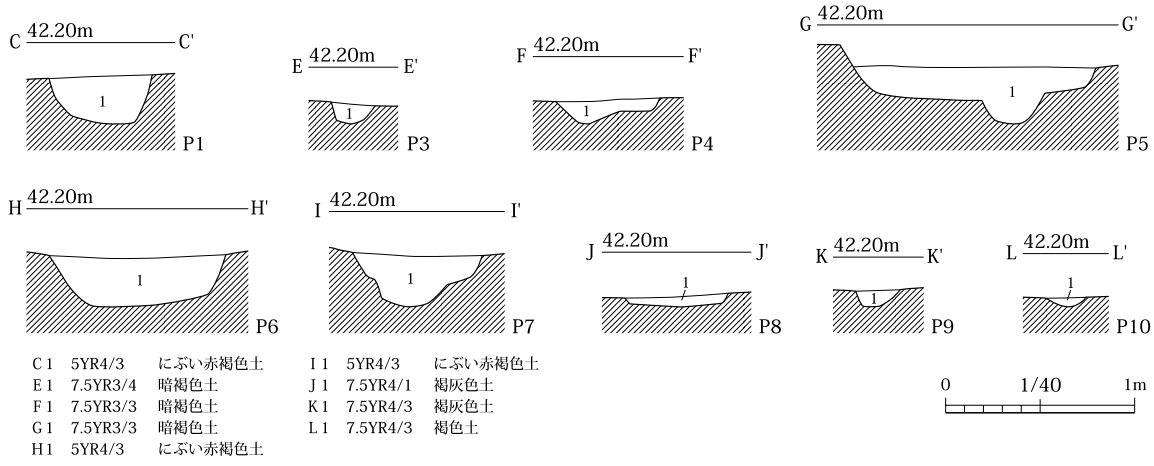
28グリッド１・２Ｂ、１・２Ｃ地区において検出した竪穴住居である。住居の北側に位置する溝28-Ｓ0001を切っている。西側にはほぼ同じ方位を有する竪穴住居27-Ｓ0009がある。平面形状は隅丸方形を呈する。主軸方向はＮ-21°-Ｅである。規模は長辺3.85m、短辺3.80m、平均深さ0.15m、炉跡（28-Ｓ0005Ｐ1）がある中央付近の深さは0.2mを測る。住居内西側にはベッド状遺構があり、A-A`ラインの上端幅が約1.1m、厚さ約0.1mあるが、この範囲においてはピット等の遺構を確認することができなかった。ベッド状遺構を構成する土層は東側壁際にも断面の一部が認められるが、平面的な広がりは確認できなかった。ベッド状遺構以外の部分からは１個の炉跡と８個のピットを検出した。炉跡は住居の中央に位置する28-S0005Ｐ１である。平面形状は円形を呈する。規模は直径0.55m、深さ0.07mを測る。覆土に炭化物を多く含んでおり、平面的位置も加味した上で炉跡と判断した。炉跡の他は平面的位置から28-Ｓ0005Ｐ２・３・４・11が柱穴の可能性を持つが、断面を観察すると浅く、Ｐ11以外は柱痕状の堆積も認められなかった。土層としてはＰ５に柱痕状堆積が認められるが、これに



第21図 竪穴住居跡27-S0009 平面・断面図



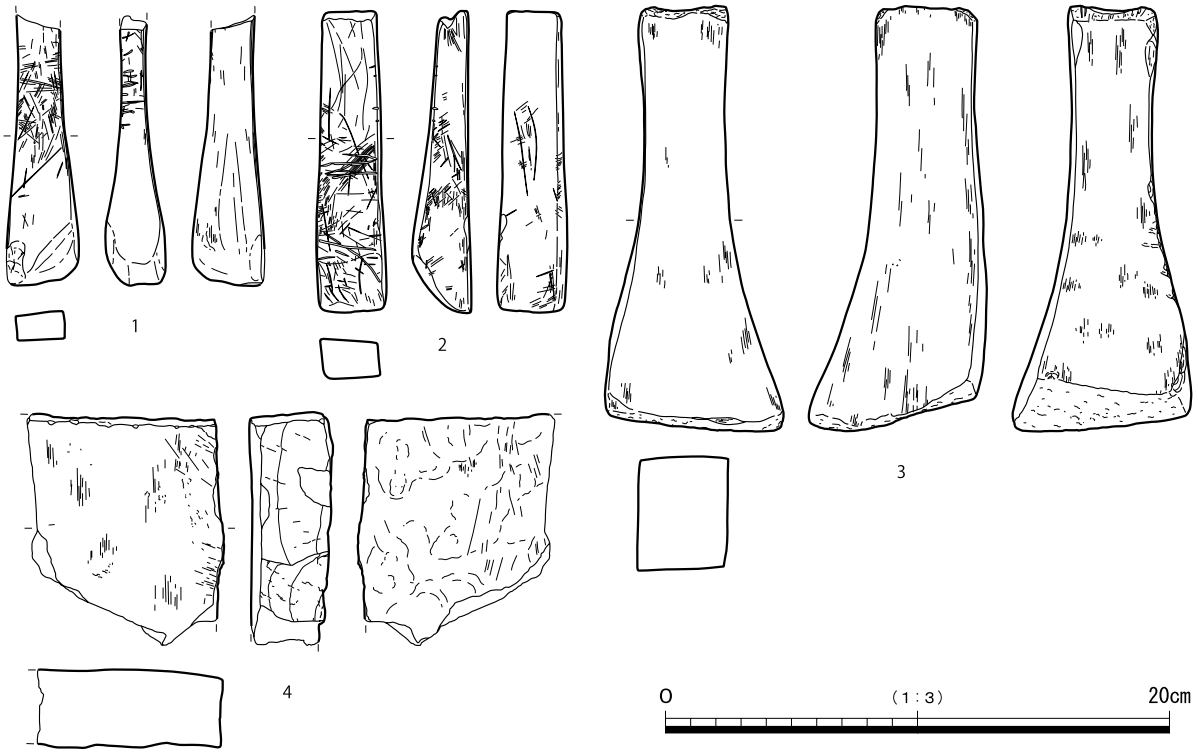
第22図 竪穴住居跡27-S0009･P0002 平面･断面図



第23図 竪穴住居跡27-S0009・P0001・P0003～P0010 断面図

対応するピットは検出できなかった。また、南北側にベッド状遺構を有した長方形の住居跡と推定すれば、北辺の中央Ｐ４、南辺中央Ｐ２が２本柱としての主柱穴の可能性がある。なお、貼り床・掘り方の区別は明確ではなかったことから検出できなかった。

出土遺物（第26図・図版45）　１～４は鉢である。１は小型で、口縁上端部が平たい。２は椀状を呈し、内面ハケ調整を施す。３はやや深みのある体部で、底部は丸底を意識している。４は杯状を呈する。底



第24図 竪穴住居跡27-S0009 出土遺物実測図

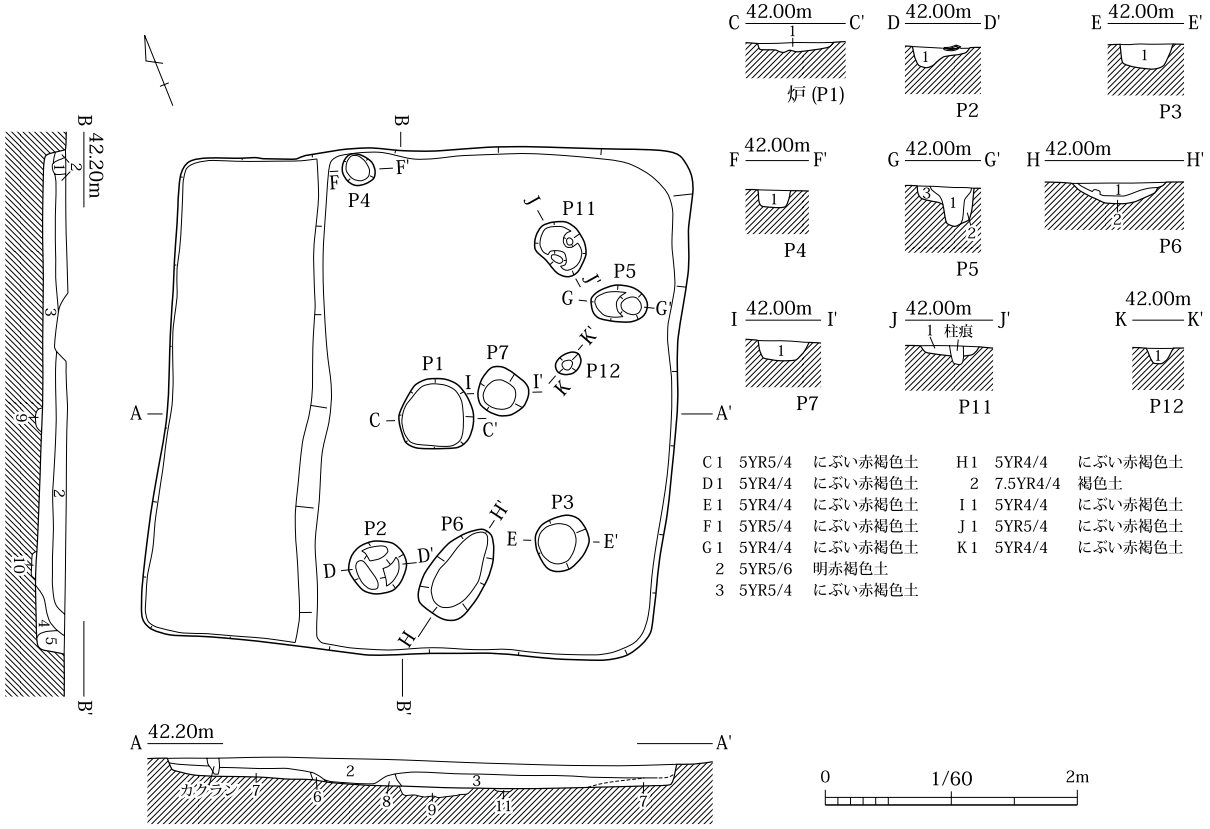
部は丸底を有し、二次焼成を受ける。２～４は外面体部下半にヘラケズを施す。５は脚付鉢の脚部である。脚部は短く緩やかに開く。

住居28-S0007（第27図・図版２-２）

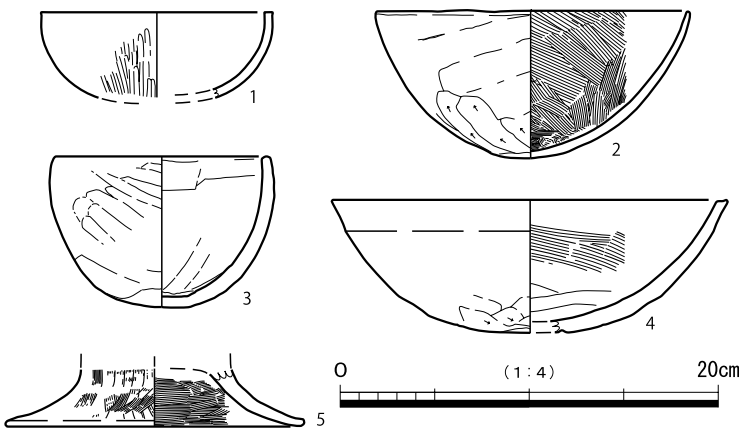
28グリッド２・３Ａ地区において検出した竪穴住居である。北西辺で28-Ｓ0009を切り、南西辺では28-Ｓ0003、北隅では28-Ｓ0007Ｐ11に切られている。28-Ｓ0003は遺構検出段階での切り合いがはっきりせず、この遺構と並行して掘り下げを行ったが、土師器の細片を含んでいたことから28-S0007の方が古出であり、Ｐ11は後出と考えられることから、この遺構を構成するものでないと判断した。平面形状は隅丸長方形を呈する。主軸方向はＮ-55°-Ｅである。規模は長辺4.30m、短辺3.44m、中央の深さ0.10m、南西部の深さ0.28mを測る。床面中央部には全長0.67m、幅0.48m、深さ0.09mを測る楕円形のＰ１がある。住居の中央に位置することや覆土に炭化物を多く含むことから、これを炉跡と判断した。Ｐ１以外では８個のピットを検出したが、東隅のＰ５は規模も小さく覆土が全く違うことから、遺構に伴うものでないと判断した。柱穴は当初４本柱を想定したが、それに適合するピットは検出できなかった。Ｐ１を挟むように南西側と北東側にそれぞれＰ２・３の柱穴を検出したことから、２本柱の竪穴住居跡と判断した。南東辺には壁溝が認められるが、他の辺では検出できなかった。ただ、南西辺に僅かに残っているが、壁との間に0.2mの隙間がある。これはＢ-Ｂ`の土層断面をみると９層は南西壁の地山が大きく崩れて流入し堆積したものと考えられることから、隙間が生じたものと判断した。なお、貼床・掘り方の区別が明確でなく、検出できなかった。

出土遺物（第28図・図版52）　１は在地系の甕である。口縁部は卵形の体部から直線的に屈曲する。内外面ともハケを施す。２は高坏の脚柱部である。脚部の器壁は薄く、垂直に延びた筒状を呈する。脚部外面は細かいヘラミガキを施している。３は平坦な砥石である。１側面を残し、他は欠損してい

る。使用は表、裏面の一部、側面にみられる。



第25図 竪穴住居跡28-S0005 平面・断面図

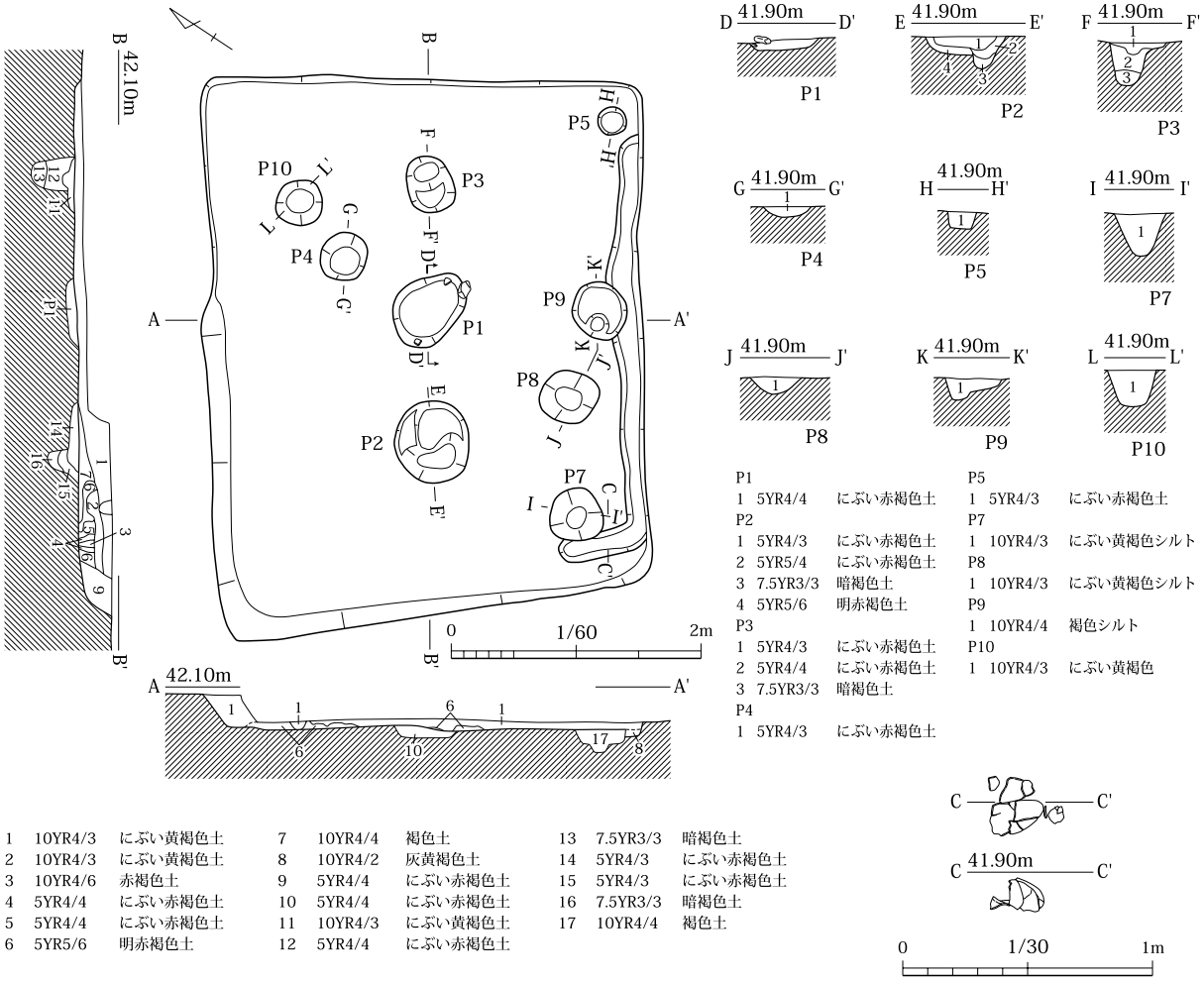


第26図 竪穴住居跡28-S0005 出土遺物実測図

２　土坑

土坑21-S0001（第29図）

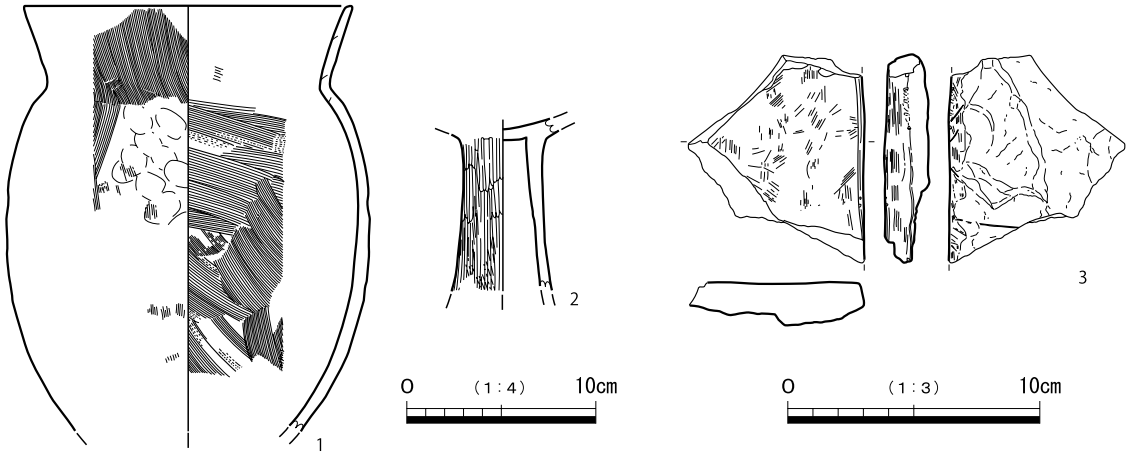
21グリッド６Ｊ地区において検出した土坑である。西側は21-Ｓ0002に切られている。平面形状は南北方向に長軸を持った楕円形を呈する。床面は一定でなく起伏がある。主軸方向はＮ-43°-Ｅである。規模は長軸1.7ｍ、短軸1.1ｍ、検出面からの深さ0.2ｍを測る。覆土は灰色砂質土の単一層で、水平に堆積している。出土遺物はなかった。



P1
1　5YR4/4　にぶい赤褐色土
P2
1　5YR4/3　にぶい赤褐色土
2　5YR5/4　にぶい赤褐色土
3　7.5YR3/3　暗褐色土
4　5YR5/6　明赤褐色土
P3
1　5YR4/3　にぶい赤褐色土
2　5YR4/4　にぶい赤褐色土
3　7.5YR3/3　暗褐色土
P4
1　5YR4/3　にぶい赤褐色土
P5
1　5YR4/3　にぶい赤褐色土
P7
1　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
P8
1　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
P9
1　10YR4/4　褐色シルト
P10
1　10YR4/3　にぶい黄褐色

1　10YR4/3　にぶい黄褐色土
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土
3　10YR4/6　赤褐色土
4　5YR4/4　にぶい赤褐色土
5　5YR4/4　にぶい赤褐色土
6　5YR5/6　明赤褐色土
7　10YR4/4　褐色土
8　10YR4/2　灰黄褐色土
9　5YR4/4　にぶい赤褐色土
10　5YR4/4　にぶい赤褐色土
11　10YR4/3　にぶい黄褐色土
12　5YR4/4　にぶい赤褐色土
13　7.5YR3/3　暗褐色土
14　5YR4/3　にぶい赤褐色土
15　5YR4/3　にぶい赤褐色土
16　7.5YR3/3　暗褐色土
17　10YR4/4　褐色土

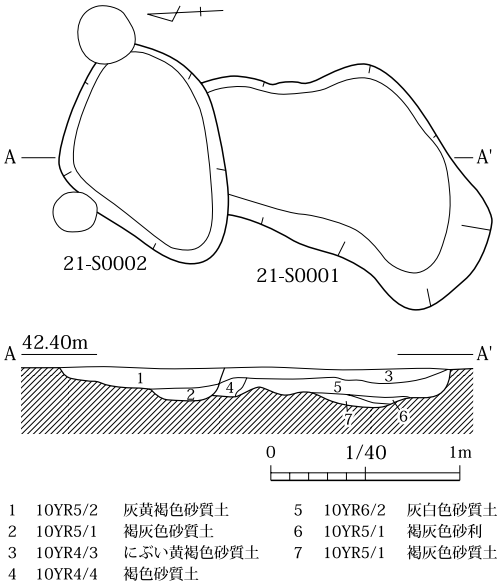
第27図 竪穴住居跡28-S0007 平面・断面図、遺物出土状態図



第28図 竪穴住居跡28-S0007 出土遺物実測図

土坑21-S0002（第29図）

21グリッド６Ｊ地区において検出した土坑である。東側は21-Ｓ0001を切り、北側の21-Ｐ12・13に切られている。平面形状は東西方向に長軸を持った楕円形を呈する。床面はやや丸みを持つ平底である。主軸方向はＮ-97°-Ｅである。規模は長軸1.24ｍ、短軸0.88ｍ、検出面からの深さ0.17ｍを測る。覆土は灰色砂質土の単一層である。出土遺物はなかった。

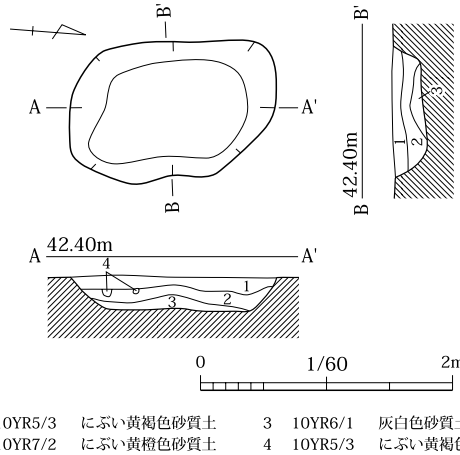


1　10YR5/2　灰黄褐色砂質土
2　10YR5/1　褐灰色砂質土
3　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
4　10YR4/4　褐色砂質土
5　10YR6/2　灰白色砂質土
6　10YR5/1　褐灰色砂利
7　10YR5/1　褐灰色砂質土

第29図 土坑21-S0001・S0002 平面・断面図

土坑21-S0003（第30図）

21グリッド７Ｊ地区において検出した土坑である。西側に21-Ｓ0001・0002が近接している。平面形状は南北方向に長軸を持った楕円形、床面は平底である。主軸方向はＮ-8°-Ｗである。規模は長軸1.63ｍ、短軸1.14ｍ、検出面から深さ0.28ｍを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層で、中間の２層でややマンガン分を多く含む。出土遺物はなかった。



1　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
2　10YR7/2　にぶい黄橙色砂質土
3　10YR6/1　灰白色砂質土
4　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土

第30図 土坑21-S0003 平面・断面図

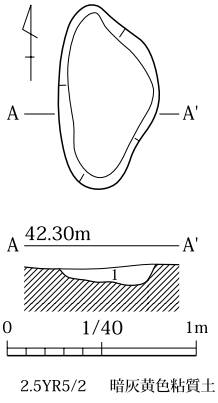
土坑22-S0007（第31図）

22グリッド６Ｊ地区において検出した土坑である。西側には溝22-Ｓ0005・0006、南東側にはピット22-Ｐ1が接する。平面形状は南北方向に長軸を持った楕円形を呈する。主軸方向はＮ-6°-Ｅである。規模は長軸0.99ｍ、短軸0.52ｍ、中央の深さ0.12ｍを測る。覆土は暗灰黄色粘質土の単一層である。遺物は砥石と弥生土器が出土した。

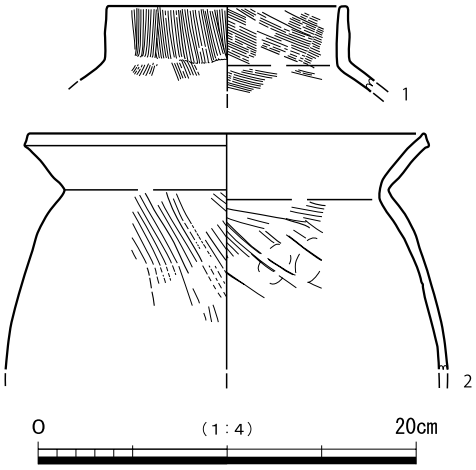
出土遺物（第32図）　１は短頸の直口壺で、内外面ともにハケを施し外面に媒が付着している。２は在地系の甕である。くの字状に外傾した口縁部を有する。内外面ともハケを施すが摩滅し不明瞭である。

土坑22-S0017（第33図）

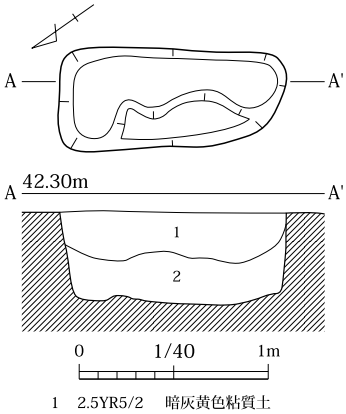
22グリッド10Ｈ地区において検出した土坑である。南西側に土坑22-Ｓ0018が近接する。平面形状は北東から南西方向に主軸を持っている。主軸方向はＮ-25°-Ｅである。規模は全長1.19ｍ、幅0.51ｍ、中央の深さ0.48ｍを測る。覆土は１・２層とも砂粒をわずかに含む粘質土である。出土遺物はなかった。



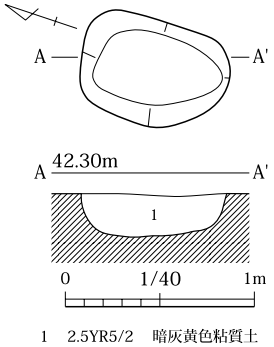
第31図 土坑22-S0007 平面・断面図



第32図 土坑22-S0007 出土遺物実測図



第33図 土坑22-S0017 平面・断面図



第34図 土坑22-S0018 平面・断面図

土坑22-S0018（第34図）

22グリッド９Ｉ地区において検出した小型の土坑である。北東側に土坑22-Ｓ0017が近接する。平面形状は南北方向に主軸を持った楕円形である。主軸方向はＮ-18°-Ｗである。規模は長軸0.80ｍ、短軸0.56ｍ、中央の深さ0.30ｍを測る。覆土は暗灰黄色粘質土の単一層である。形状、規模共にＳ0017と類似していることから同時期の可能性が高いが、出土遺物はなかった。

土坑22-S0023（第35図）

22グリッド５Ｈ地区において検出した土坑である。土坑の中央を溝22-Ｓ0001に切られ東西に分断している。西側は溝22-Ｓ0008を切っている。平面形状は東西方向に主軸を持った楕円形である。主軸方向はＮ-18°-Ｅである。規模は長軸1.64ｍ、短軸1.10ｍ、中央の深さ0.18ｍを測る。覆土は暗灰色粘細砂質にわずかな粘質土を含む土層である。出土遺物はなかった。

土坑22-S1502（第36図）

22グリッド９Ｃ地区において検出した土坑である。南側に隣接する土坑22-Ｓ1503と中央を南北方向に走る環濠22-Ｓ1501に切られている。耕作土直下にて検出した。平面形状は南北方向に長軸をもった長方形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、平坦な床面に２ヶ所の落ち込みがみられる。主軸方向はＮ-26°-Ｅである。規模は長軸検出長5.5ｍ、短軸2.90ｍ、深さ0.45ｍを測る。覆土は黒褐色シルト土層を中心とした５層がみられる。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第37図）１は鉢で口縁部が緩やかに外傾し、口縁端部を外方に折り曲げている。内外面ともにハケを施す。２は壺の底部で平底を呈する。３は甕の底部で小さな凸レンズ状を呈する。４は在地系の器台である。これら遺物には時期幅があり、３の甕が最も新しいと思われる。

土坑22-S1503（第38図）

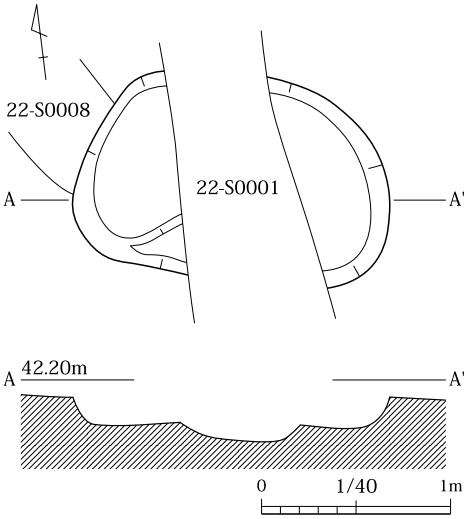
22グリッド８・９Ｄ地区において検出した土坑である。北側に隣接する土坑22-Ｓ1502と同様の形状を呈する。北側は土坑Ｓ1502を切っており、また、東側は南北方向に走

る環濠22-Ｓ1501に切られている。新旧関係は環濠22-S1501より古出で土坑22-Ｓ1502より新出である。平面形状は南北方向に長軸をもった長方形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、床面は平坦である。主軸方向はＮ-21°-Ｅである。規模は長軸6.60ｍ、短軸3.50ｍ、深さ0.40ｍを測る。覆土は黒褐色シルト土の単一層である。遺物は弥生土器片が出土した。

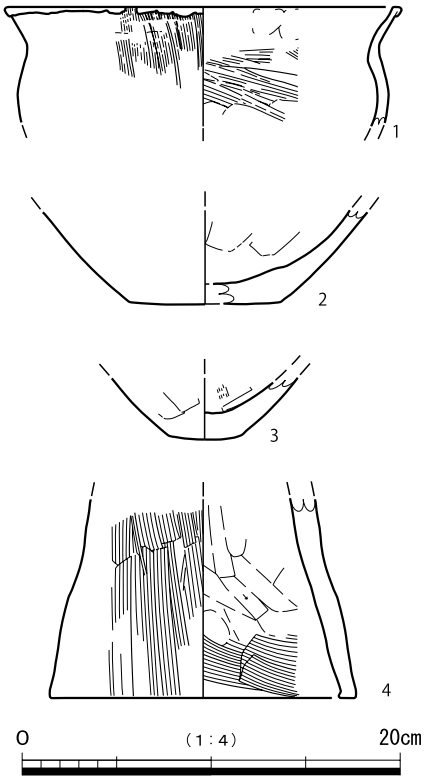
出土遺物（第39図）　１は高坏の脚部である。脚部は緩やかに外反し開く。

土坑23-S0006（第40図）

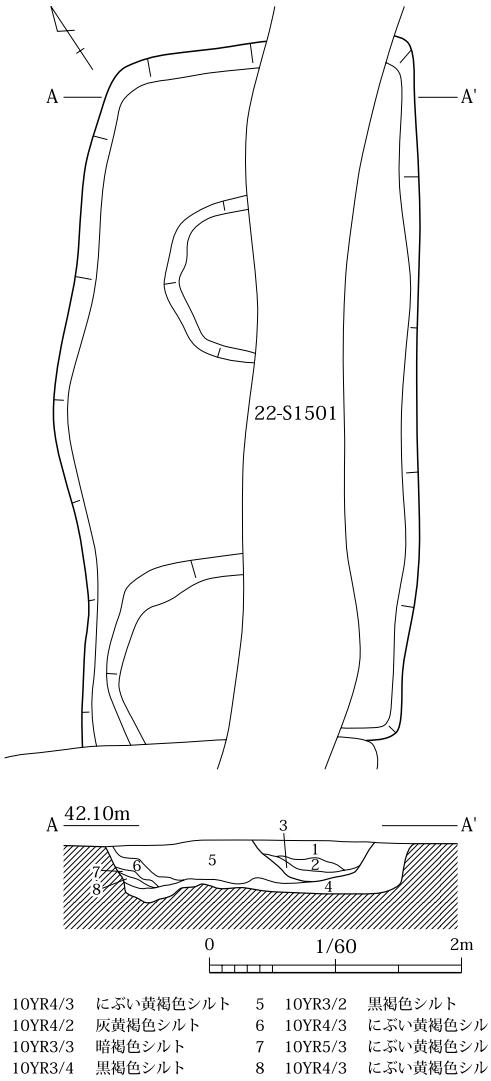
23グリッド２Ｂ地区において検出した小型の土坑である。東側は環濠22-Ｓ1514に切られている。平



第35図 土坑22-S0023 平面・断面図

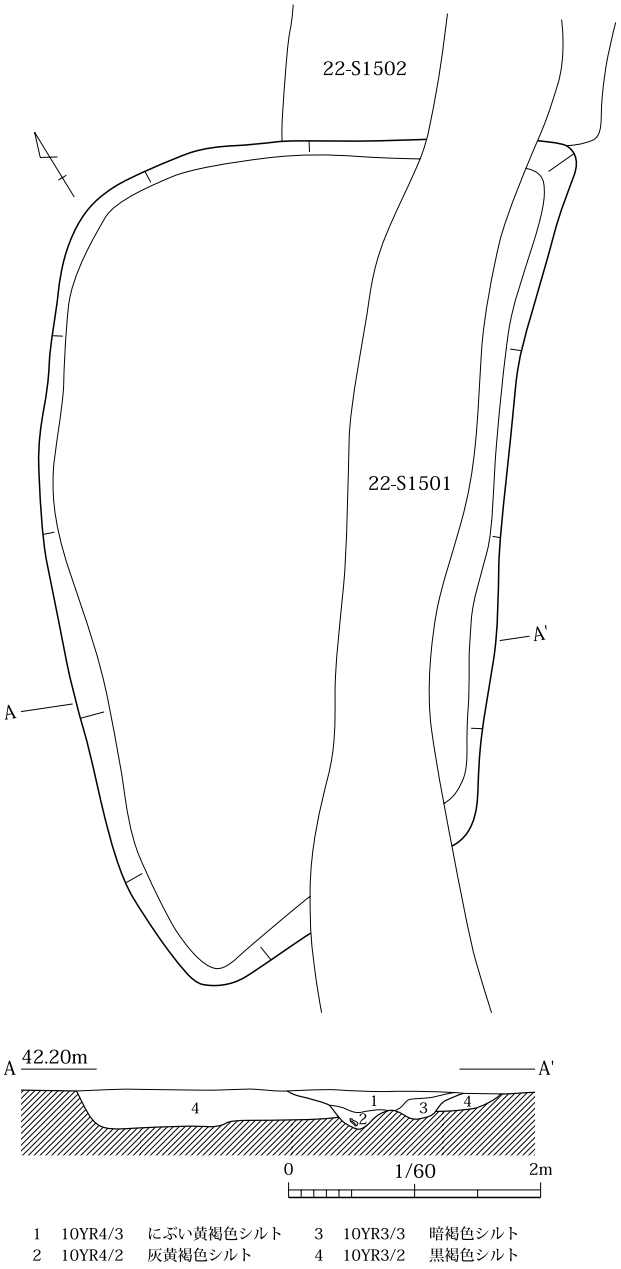


第37図 土坑22-S1502 出土遺物実測図

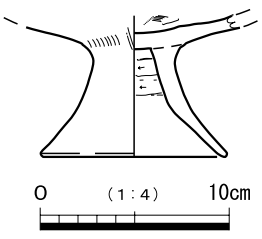


1	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	5	10YR3/2	黒褐色シルト
2	10YR4/2	灰黄褐色シルト	6	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト
3	10YR3/3	暗褐色シルト	7	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト
4	10YR3/4	黒褐色シルト	8	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト

第36図 土坑22-S1502 平面・断面図



第38図 土坑22-S1503 平面・断面図



第39図 土坑22-S1503 出土遺物実測図

面形状は南北方向に長軸をもつ楕円形である。断面形状は逆台形を呈する。主軸方向はN-18°-Wである。規模は長軸0.85m、短軸0.60m、深さ0.20mを測る。覆土は暗灰色土の単一層である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第41図） 1は口縁部が短く外傾する甕で、内外面ともにハケを施す。2は中型の甕で、口縁部は緩やかに屈曲し開く。

土坑23-S0501（第42図）

23グリッド１Ｇ地区において検出した小型の土坑である。北側にはピット23-Ｐ0505が接している。平面形状は南北方向に長軸をもつ楕円形である。断面形状は逆台形を呈する。主軸方向はＮ-16°-Wである。規模は長軸0.91m、短軸0.70m、深さ0.24mを測る。覆土はわずかながら砂粒を含むものの、粘性のある土である。遺物は出土しなかった。

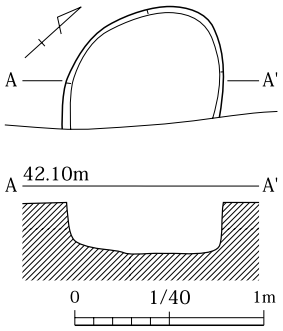
土坑23-S0502（第42図）

22グリッド２Ｇ地区において検出した小型の土坑である。南西側には土坑23-Ｓ0501がある。平面形状は北東から南西方向に長軸をもつ楕円形である。断面形状は逆台形を呈する。主軸方向はN-58°-Eである。規模は長軸0.73m、短軸0.65m、深さ0.24mを測る。覆土はわずかながら砂粒を含むものの、粘性のある土である。遺物は弥生土器が出土した。

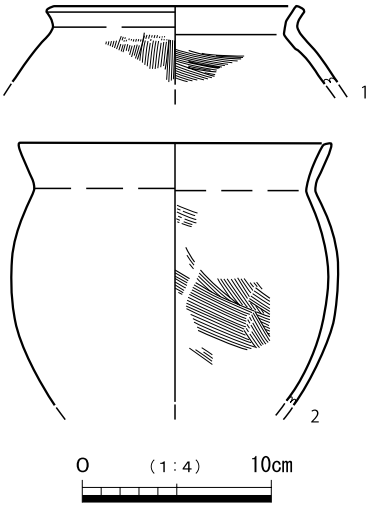
土坑27-S0001（第43図）

22グリッド５Ｂ・Ｃ、６Ｂ・Ｃ地区において検出した土坑である。平面形状は東西方向に長軸をもつ長方形であ

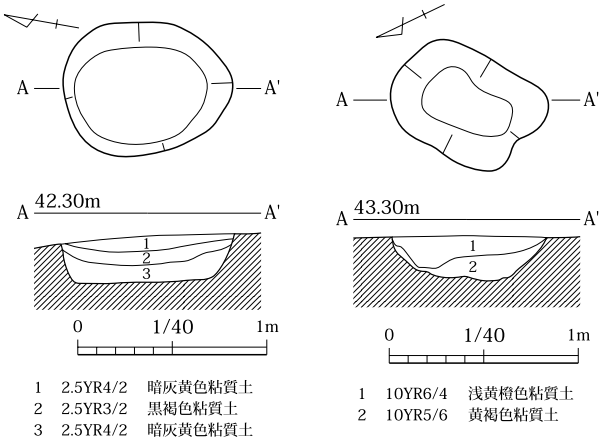
るが、全体に不整形で西側が削平にて欠落している。主軸方向はN-65°-Eである。規模は長軸5.5m、短軸2.2m、深さ0.15mを測る。覆土は砂質土に粘質土の混ざっていることから極めて新しい近現代の水田床土の混入の可能性もある。遺物は弥生土器が出土した。



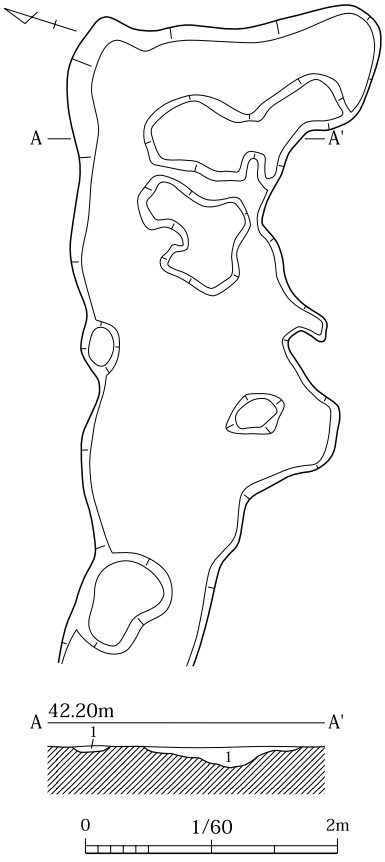
第40図 土坑23-S0006
平面・断面図



第41図 土坑23-S0006 出土遺物実測図



第42図 土坑23-S0501・S0502 平面・断面図



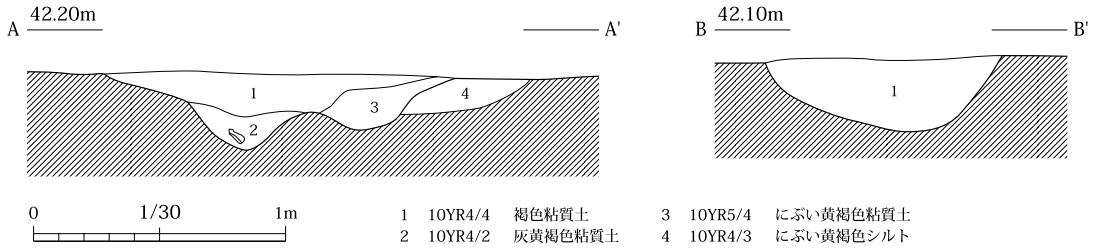
第43図 土坑27-S0001 平面・断面図

３　環濠・方形周溝

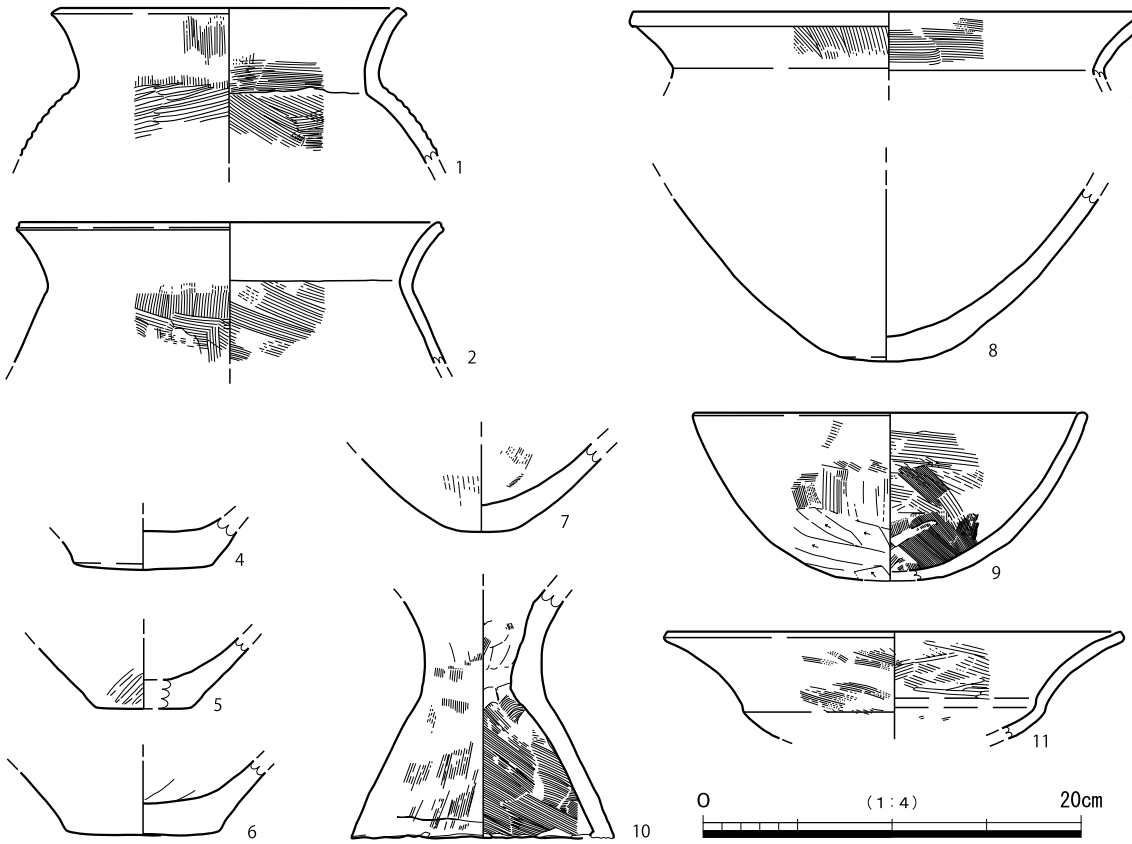
環濠22-S1501（第44図・図版１-１，２）

23グリッド１Ａ、27グリッド７Ｂ地区において検出した弥生時代の環濠である。溝の中央にて土坑22-Ｓ1502、Ｓ1503を切っている。また22-8Ｇ区にて環濠22-Ｓ1514を切っている。新旧関係は土坑22-Ｓ1502・Ｓ1503、環濠22-Ｓ1514が古出である。Ｓ1514と22-8Ｇ区から27-7Ｂ区間までは同一ライン上に位置する。平面形状は中央の８Ｅ地区にてわずかに折れた「へ」の字状を呈する。主軸方向はN-20°-Ｅである。規模は検出長64ｍ、幅0.80ｍ、深さ0.45ｍを測る。覆土のほとんどが褐色シルト層である。環濠の西側は弥生時代の遺構が稀薄であることから、当環濠が集落の最縁側に位置するものと考えられる。環濠は北側の調査地において13-Ｓ0002、18-Ｓ0002に継続している。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第45図）　１～３は在地系甕の口縁部である。１は張りのある体部から口縁部が外反し、外面体部にタタキを施す。２は緩やかに外反する口縁部をもち、内外面にハケを施す。３は口縁端部



第44図 環濠22-S1501 断面図

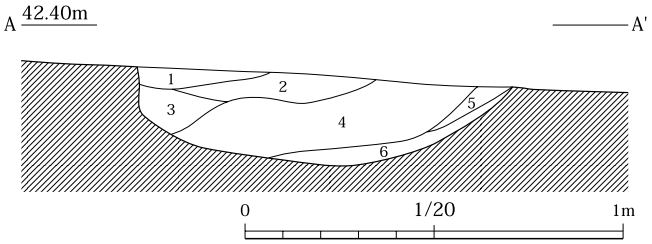


第45図 環濠22-S1501 出土遺物実測図

を上下に小さく拡張させ、外端面を有する。４～８は甕または壺の底部で、４は凸レンズ状、５・６はやや平底、７はやや尖り気味の丸底、８は丸底を呈する。９は椀状を呈する鉢で外面底部はヘラケズリを施す。10は在地系の器台で、最少径がほぼ中央に位置するもので、裾部はハの字に踏ん張るように開く。

環濠22-Ｓ1514（第46図・図版１-１，２）

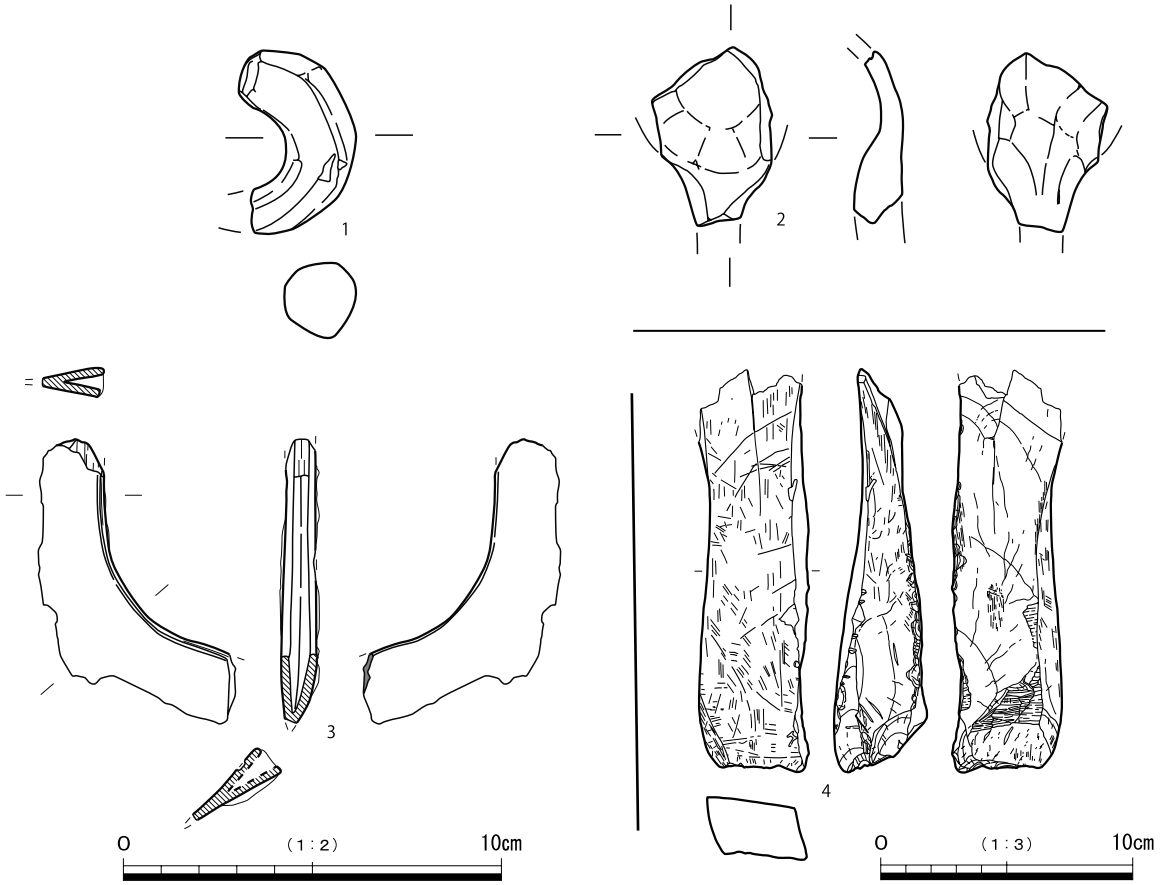
23グリッド３Ａ～８Ｇ地区において検出した弥生時代の環濠である。22-8Ｇ地区にて環濠22-Ｓ1501と合流する。新旧関係は22-Ｓ1501に切られている関係から古出である。本来は22-8Ｇ地区から27-7Ｂ地区間まで継続していたものと考えられる。平面形状は、中央の８Ｆ地区にて「へ」の字状に折れた形状を呈する。主軸方向はＮ-45°-Ｅである。規模は検出長67ｍ、幅1.80ｍ、深さ0.50ｍを測る。覆土は灰色、黄灰色砂質土層の６層がみられる。遺物は弥生土器、土師器が出土した。



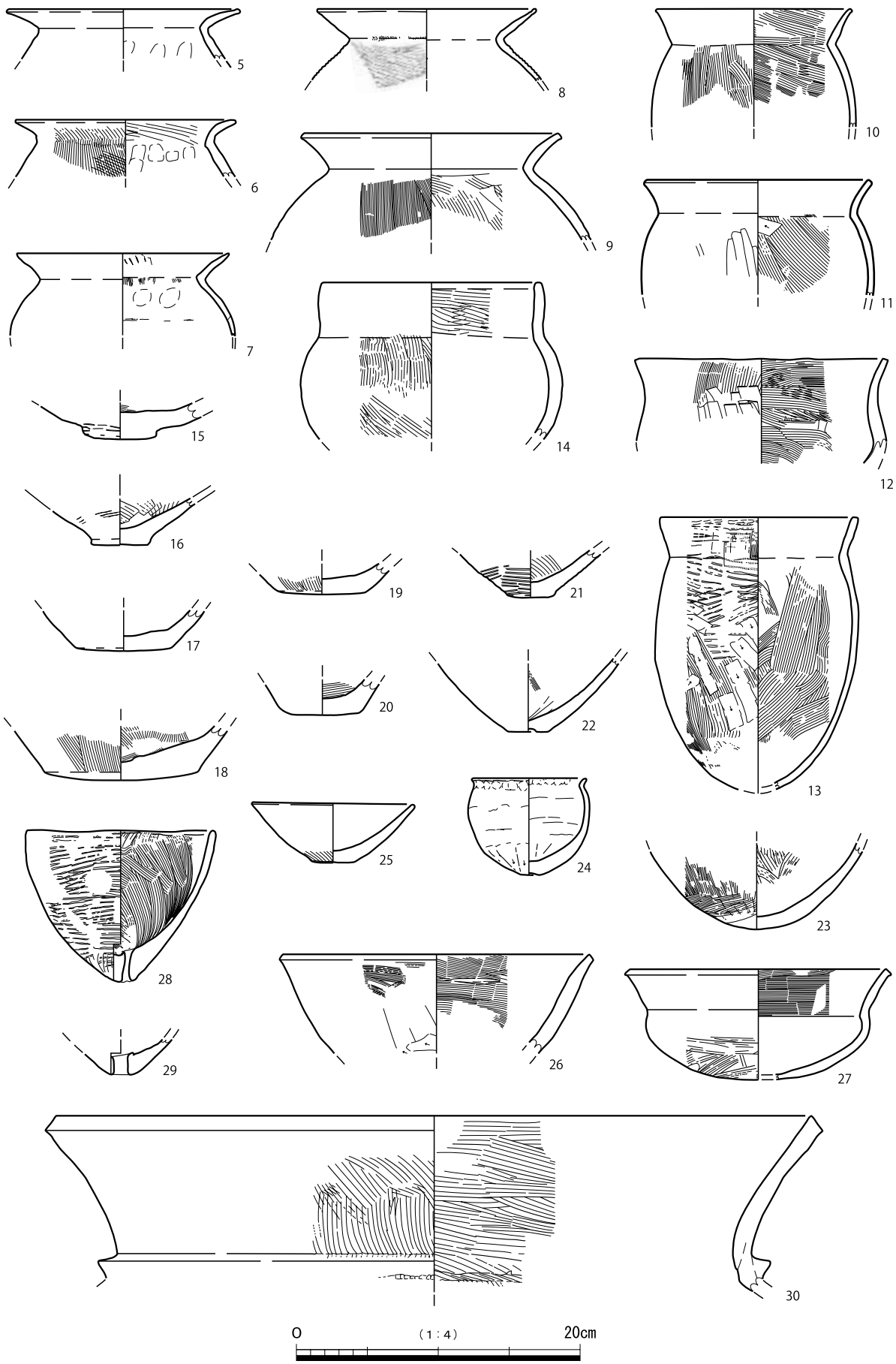
1	2.5YR5/1	黄灰色粘質土	4	5YR6/2	灰色砂利質土
2	2.5YR6/1	黄灰色粘質土	5	2.5YR6/2	黄灰色粘質土
3	5YR6/1	灰色砂質土	6	2.5YR6/1	黄灰色砂礫

第46図 環濠22-S1514 断面図

出土遺物①（第47図・図版51, 77, 86）　１は土製勾玉である。紐穴は未貫で確認できないが、頭部、尾部は丁寧に面取りによって仕上げている。２は土製の匙である。匙先端と枝部は欠損している。３は鉄製の凹字形鍬先であり、外縁及び片側耳部を欠損する。一部木質が残存しており、その木質が縦



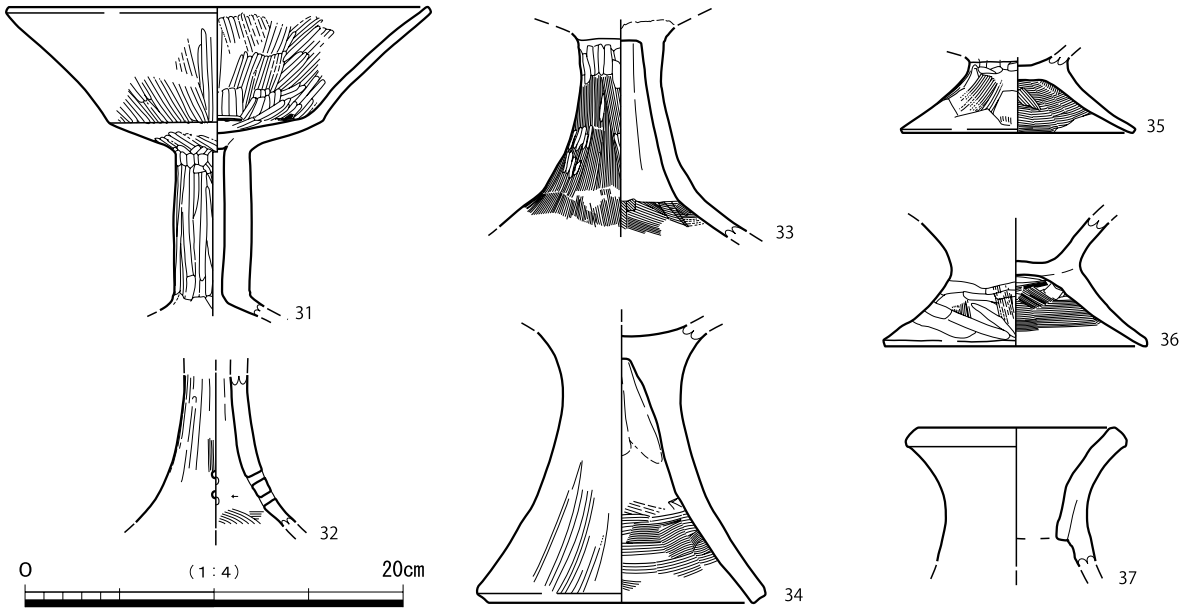
第47図 環濠22-S1514 出土遺物実測図①



第48図 環濠22-S1514 出土遺物実測図②

方向になるように傾きを調整して図化した。残存長7.5㎝、残存幅5.2㎝である。内縁には、柄を装着するためのＶ字溝がほどこされている。４は細長い砥石である。長辺の表・側面に滑らかな使用痕がみられる。表面は中央が緩やかに下がった弓状の使用面がみられる。材質は砂質頁岩である。

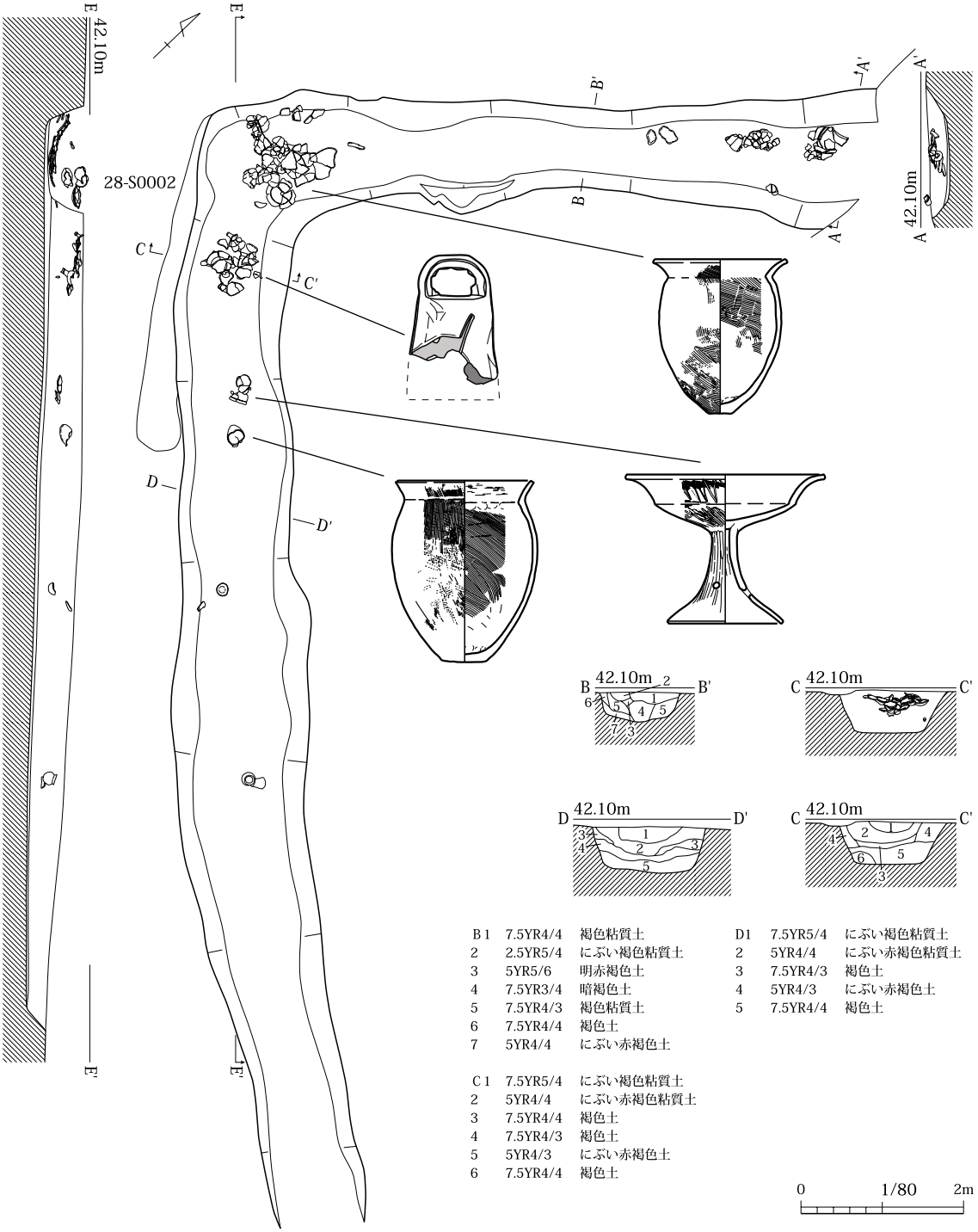
出土遺物②・③（第48図・図版45）　５～14は甕である。５・６は水平気味に大きく屈曲した口縁部を有する。７～９は畿内系の甕である。７は体部、口縁部共に器壁を薄く仕上げている。８は庄内式系の甕である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、端部は薄くつまみ出している。体部外面には細かいタタキを施し、内面は頸部手前までケズリを施している。９は張りのある体部から口縁部は鋭く外反する。外面に媒付着。10～13は在地系の甕で、10は内外面ともにハケを施す。12の口縁部はわずかに外反し、端部は角をもつ。13は卵形の体部から口縁部が外傾し、上端面を有する。外面はタタキを、内面はハケを施す。14は球形に張った体部と直口した口縁部を有する在地系の直口甕である。15～23は壺、甕の底部である。15は突出した底、16・21はタタキによって突出気味に整形された甕の平底である。17～19は凸レンズ状を呈する。22は中央に凹みをもつ平底、23は甕の丸底である。底部は厚手で古出のものが多く残存する傾向がみられる。24～27は鉢で、24は小型品で口縁部が短く、くの字形に屈曲する。底部はわずかに凹む。内外面とも口縁部周辺に指圧痕を施す。25は平底で杯状を呈する。26はやや器壁が厚く、口縁端部は外端面をもつ。27は浅い扁平球の体部から口縁部は外反し、端部を下方に小さく拡張する。28・29は甑である。底部には焼成前に円孔を穿っている。24～27は鉢である。30は頸部に突帯を貼付した大型の在地系甕である。内外面ともハケを施す。31～34は高坏である。31は坏部の稜は明瞭で、口縁部は上外方へ外反する。脚柱部は中空の筒状で、裾部で大きく屈曲し広がる。内外面ともヘラミガキを施す。32は緩やかに広がった筒状の脚柱部である。裾部には上下２段一組の円孔が2方向、ヘラミガキに先立って穿たれている。33は緩やかに外反し開き、34は長くハの字形に開く脚部である。35・36は台付鉢の脚部で、ハの字に開く。いずれもハケを施す。37は筒部の最小径が上位にある器台である。時期は概ね西新Ⅰ式古段階の様相を呈しているが、中にはやや古いものや新しいものもある。



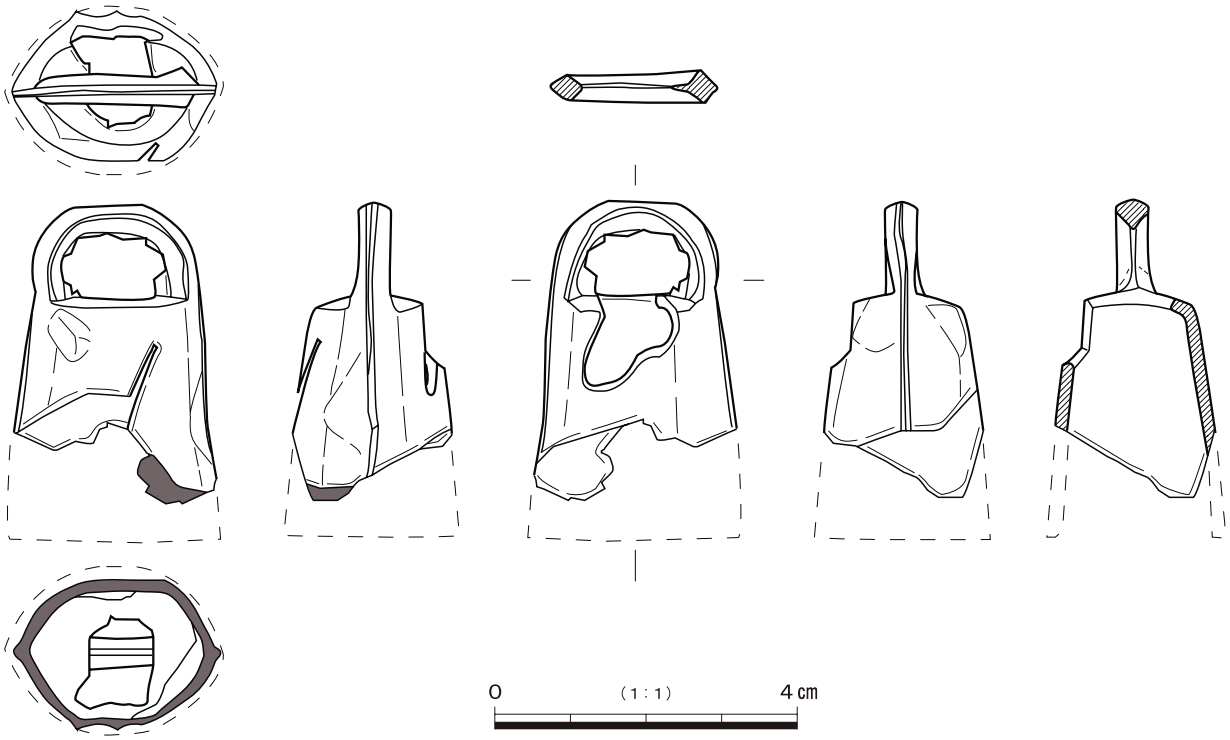
第49図 環濠22-S1514 出土遺物実測図③

方形周溝28-S0009（第50図・図版３，４）

28グリッド１Ａ・Ｂ、１・２Ｂ、３Ｃ地区において検出した方形周溝状遺構である。溝は28-2Ａ区の住居28-Ｓ0007を切り、溝28-Ｓ0002・0003に切られている。平面形状は28-1Ａ区にて「Ｌ」字状に折れた形状を呈する。東西方向の溝東端は、後世の削平によって浅くなり途切れていた。南北方向の溝南端は段丘縁辺にて途切れていた。東西溝の主軸はＮ-45°-Ｅ、南北溝の主軸はＮ-45°-Ｗ、である。規模は東西方向の検出長が7.7ｍ、南北方向の検出長は13ｍを測る。溝幅はＡ-Ａ`点にて1.61ｍ、深さ0.25ｍ、Ｂ-Ｂ`点にて0.96ｍ、深さ0.37ｍ、Ｃ-Ｃ`点にて1.32ｍ、深さ0.53ｍ、Ｄ-Ｄ`点にて1.28ｍ、



第50図 方形周溝28-S0009 平面・断面図



第51図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図①

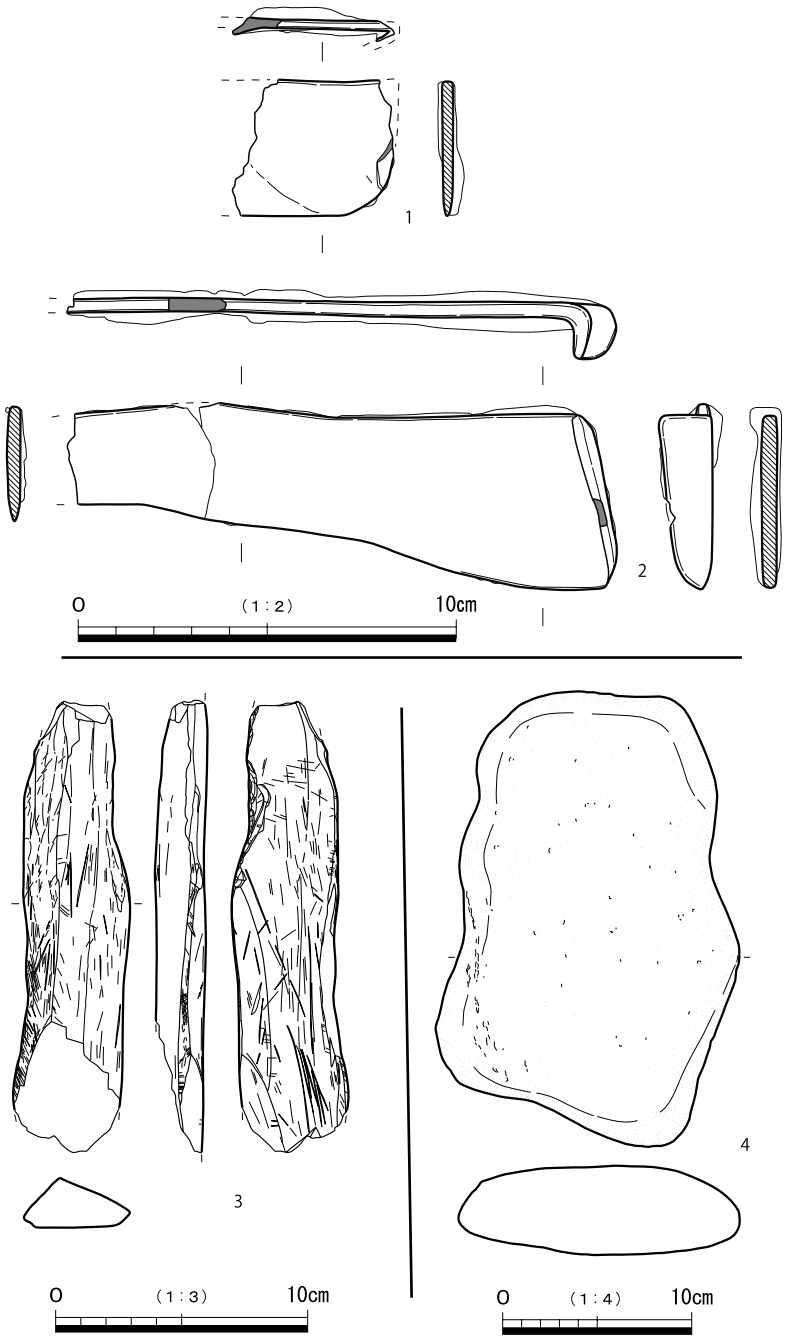
深さ0.56ｍを測る。覆土は上層、にぶい褐色土、中層、暗褐色砂質土、下層、褐色土の３層がみられる。最下層は砂層等による流水痕跡を示していないことから、流路ではなく何らかの区画溝と判断できる。また、土層観察の結果、埋没後に新たに再掘削されていることが観察され、多くの遺物も再利用後のものである。

遺物は下層から小銅鐸、弥生土器、再掘削後からは弥生土器～古式土師器が出土した。下層出土の遺物は溝底面に貼り付いたものは確認できなかったが、平均して下層の下位に集中していた。上層（再利用後）出土の遺物は、溝検出面に集中していた。出土状態から溝の機能が終了したと同時に遺物を廃棄したものと解釈できる。特に溝の「Ｌ」字状に曲がった交点に集中しており、著しく破損したものが多く見受けられた。時期は出土遺物から上層の弥生時代終末期（西新町Ⅰ式）と下層の弥生時代後期後葉（下大隈式新段階）の２時期が考えられる。

小銅鐸は溝底面に近い下層より紐を下に向けた天地逆の状態で出土した。小銅鐸は最も小さく、軽い紐が真下方向を向いた状態で確認できたことから、自然に埋没したものでなく、人為的に埋納されたものと解釈した。しかし溝埋土が黒褐色系であることから埋納穴は確認できていない。埋納は溝底面で止まっていることから底面が少し埋没した段階に行われた行為であることが窺われる。

出土遺物①（第51図・図版86）　金属製品は青銅製小銅鐸、鉄製鎌などがある。

第51図は小銅鐸で、下半部を欠損する。残存高4.0㎝、鐸身上端長径2.2㎝、鐸身上端短径1.4㎝、鐸身厚２㎜、鈕高1.2㎝、鈕最大幅2.2㎝、鈕最大厚４㎜である。鈕は断面菱形であり、内縁にはバリが残る。鐸身は上端から下端にいくにしたがい徐々に広くなる形状であり、文様はみられない。舞孔は１孔あり、その形はいびつである。Ａ面の鐸身中央には細長い透かしがみられ、型持孔の可能性が考えられる。Ｂ面の鐸身上半分には瓢形の透かしがみられ、舞孔につながる。この孔の周囲は丸みをもつことから、欠損よりも鋳造時のガス抜けによる変形が考えられる。鐸身の側縁には鰭はつかないものの、１条の突出した稜を確認できる。この稜は鋳型の合わせ目の可能性が高い。両側縁ともに鐸身



第52図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図②

中央付近で稜がずれることから、鋳型がずれていたものと思われる。なお、鐸身にはＡ面・Ｂ面ともに縦の稜が２本残っており、鐸身横断面形はやや扁平な六角形になる。

出土遺物②（第52図・図版48, 51, 87）　１は鉄製の手鎌である。別名、摘鎌ともいう。本体の半分と、折り返しの大半を欠損する。刃先がいびつに曲っており、土圧による変形が考えられる。全長3.6㎝、残存幅4.3㎝、背厚２㎜である。背と刃はともに直線的である。ただし刃隅は丸くなる。縦断面は厚さ２㎜の長方形であり、刃先だけ尖る。厚さが薄く、全長が短いことから手鎌としての用途を想定しているが、形状が類似する方形鍬先の可能性も残る。

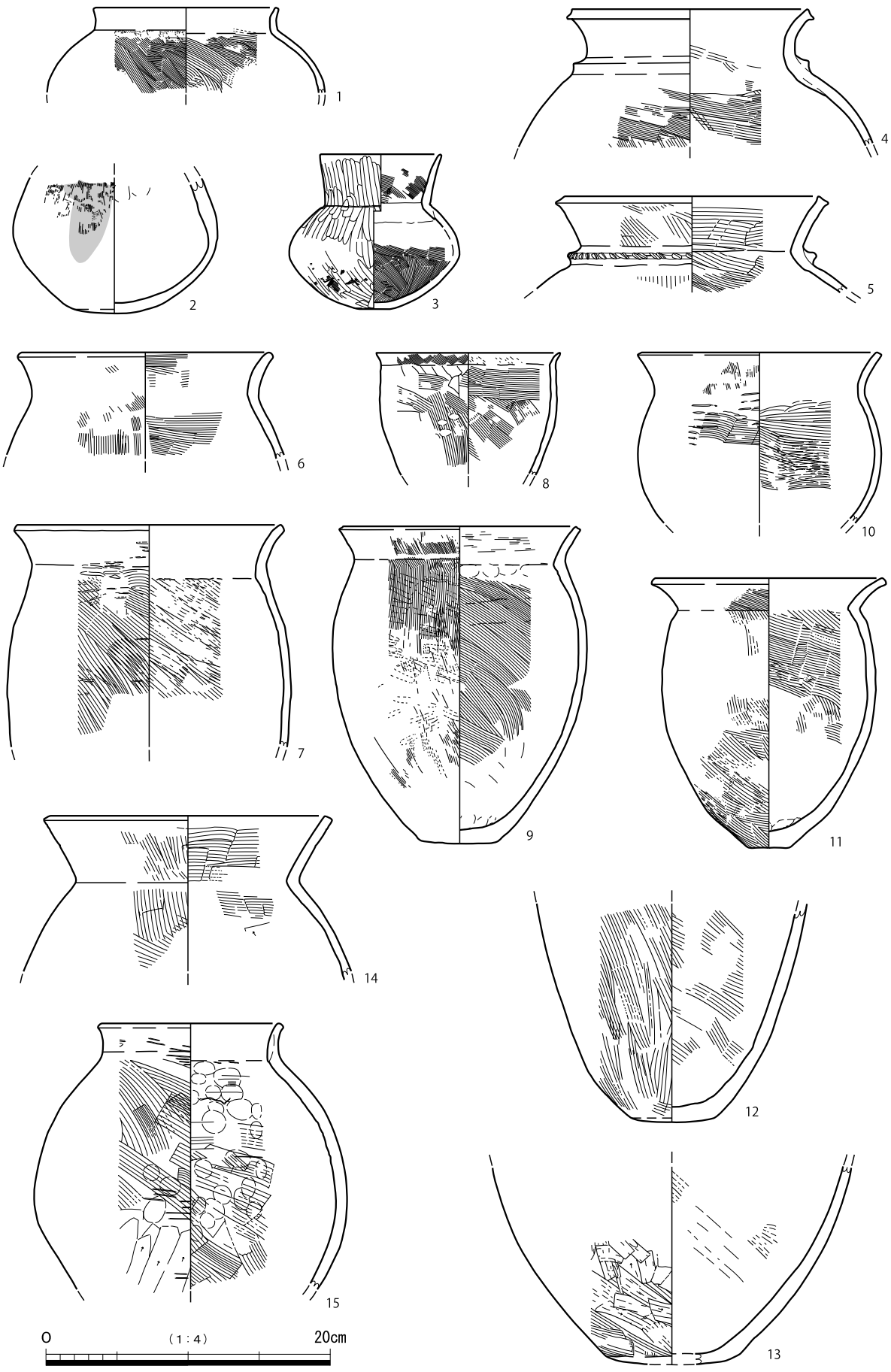
２は鉄製の鎌である。刃部先端を欠損する。残存長14.6㎝、最大幅4.7㎝、最大厚４㎜である。幅は基部が広い形状をなし、刃部先端にいくに従い徐々に狭くなる。基部の範囲はおよそ４㎝幅であり、そこには刃がほどこされていない。刃部の断面形状は楔形である。基部端から刃部先端方向に４～８

cmの範囲には窪みがみられるため、研ぎ減りが考えられる。背と刃ともに屈曲点がみられ、製作の単位を反映している可能性がある。基部端は強く折り返し、着柄角度はおよそ100度となる。刃を手前にして、折り返しを右に向けたとき、折り返しが上を向く甲技法（都出1967）に属する。基部付近に木質は確認できない。

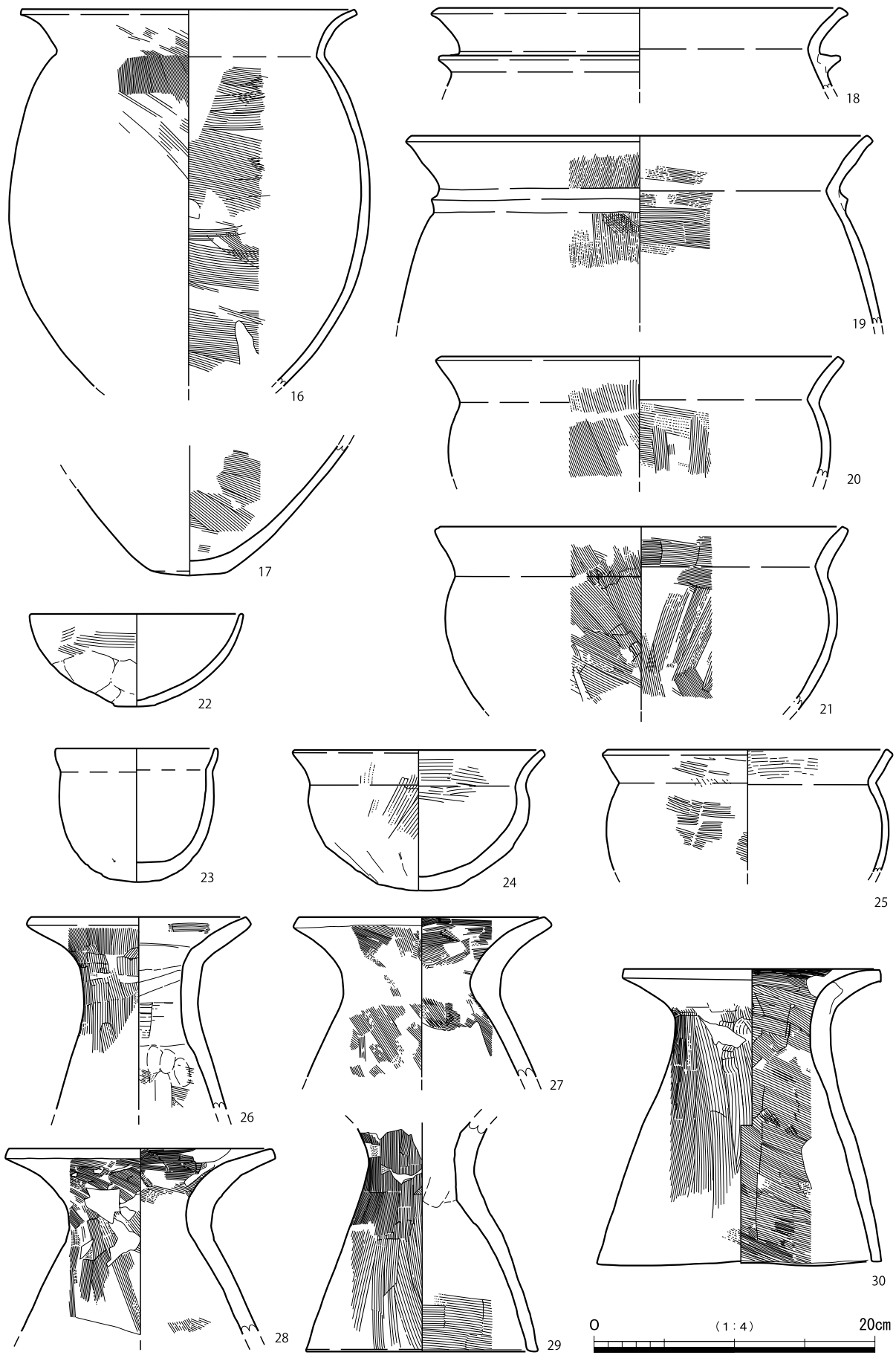
３・４は石製品で3は細長い中仕上げ砥石である。下端部は欠損している。両面を使用している。石材は細粒砂岩である。４は平坦な台石である。両面はほぼ平らであるが、表面はかすかに中央が凹面化する。裏面は波打ち凸レンズ状で、明らかな自然面である。辺端部は湾曲し側面は丸い。顕著な使用痕は確認できない。石材は花崗岩製である。

出土遺物（③～⑤）（第53～55図・図版46, 47）　出土遺物は下大隈式新段階と西新Ⅰ式段階の２時期に分けられるが、時期に対応した状態で層位的に取り上げることはできなかった。溝の出土遺物から、溝の機能衰退時期を下大隈式新段階、溝の掘り返しによる再利用を西新町Ⅰ式段階と考えられる。

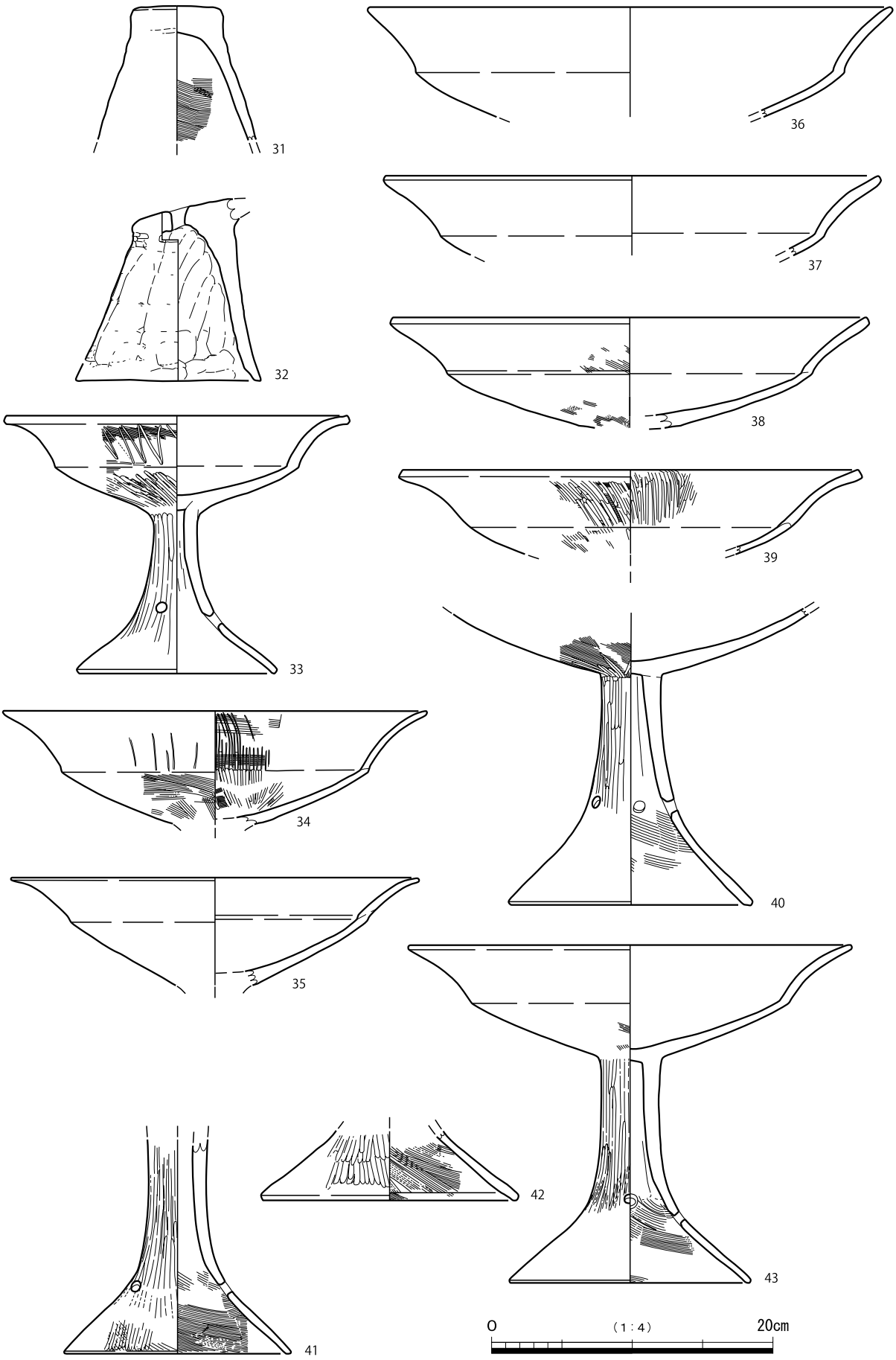
１～５は壺で、１は短く直立した口縁部を有した短頸壺で、体部は張りが強い。２の体部最大径は、中央よりやや下半に位置する。底部は凸レンズ状を呈する。３は小型壺で、体部は算盤玉状を呈し、口縁部は直線的に上外方へ開く。外面はヘラミガキ、内面はハケを施す。外面頸部に工具痕を残す。底部は小さな平底を呈する。４は張りの強い体部から口縁部は外反し、端部上下に小さく拡張させる。頸部には断面三角形の突帯をめぐらす。５は張りのある体部からくの字形に外傾した口縁部をもち、頸部には断面三角形を呈する突帯を貼付している。突帯頂部にはヘラ工具の小口にて刺突による刻目を施している。６～19は甕である。卵形状の体部から口縁部が外反するもの（６・７・９）、外傾するもの（14）、鋭く屈曲するもの（11・16）があり、９の底部はやや凸レンズ状を、11は小さな平底を呈する。いずれも内外面ともにハケを施す。８は小型品で、張りの弱い体部から短く外反した口縁部をもつ。端部はやや尖り気味におさまる。10は球形の体部から口縁部が緩やかに外反する。外面体部にタタキを施す。15はやや球形の体部から口縁部が立ち上がり、上端でわずかに外反する。端部は下方に小さくつまみだし面をなす。16・17は同一個体と考えられるが、接合面を持たないため別々に図化した。両方とも二次焼成を受ける。18・19は頸部に突帯を貼付する大型の甕で、18は口縁端部を下方に拡張し面をなす。12・13・17は甕の底部で凸レンズ状を呈する。20～25は鉢である。20・21は大型の鉢で、口縁部がくの字形を有し内外面ともにハケを施す。22は椀状を呈する鉢で、小さな平底をなす。23は口縁部がわずかに内傾し、底部は凸レンズ状を呈する。24は緩やかに外反する口縁部を有する鉢で、端部は外傾し面をなす。内外面ともにハケを施す。25は20・21の中型品で、口縁部は外傾し、外面にタタキを施す。26～30は在地系の器台で、いずれも最少径が上方に位置し受け部と裾部の見分けが明瞭である。26～28は端部が外傾し面を持つ。29は裾部が内弯気味に開き、30はハの字状に開く。外面はハケを、内面はハケまたはナデを施す。31～32は土製支脚である。31は受け部が水平で筒状に裾部が開く。32は受け部の一端に突起がつくもので、斜めの受け部中央に円孔を有する。体部内面は強いナデ調整を施す。外面に媒付着。33～43は高杯である。33はほぼ完形品で、杯部の稜は明瞭で口縁部は緩やかに外反し、端部は上方にわずかに拡張させる。口縁部外面はヘラによる鋸歯紋が施されている。脚部に三方向の円孔を穿つ。34はハケを施した後、細かいヘラミガキ調整を行う。35は杯部が深く、口縁部は外反し端部は丸くおさまる。36～40・43は大型の高杯で、36～38・43は稜が明瞭で口縁部は外反する。37～39はやや浅い杯部を呈する。40・41・43はなめらかに外下方に開く脚部に三方向の円孔を穿つ。脚裾部は外面ヘラミガキを、内面はハケを施す。



第53図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図③



第54図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図④



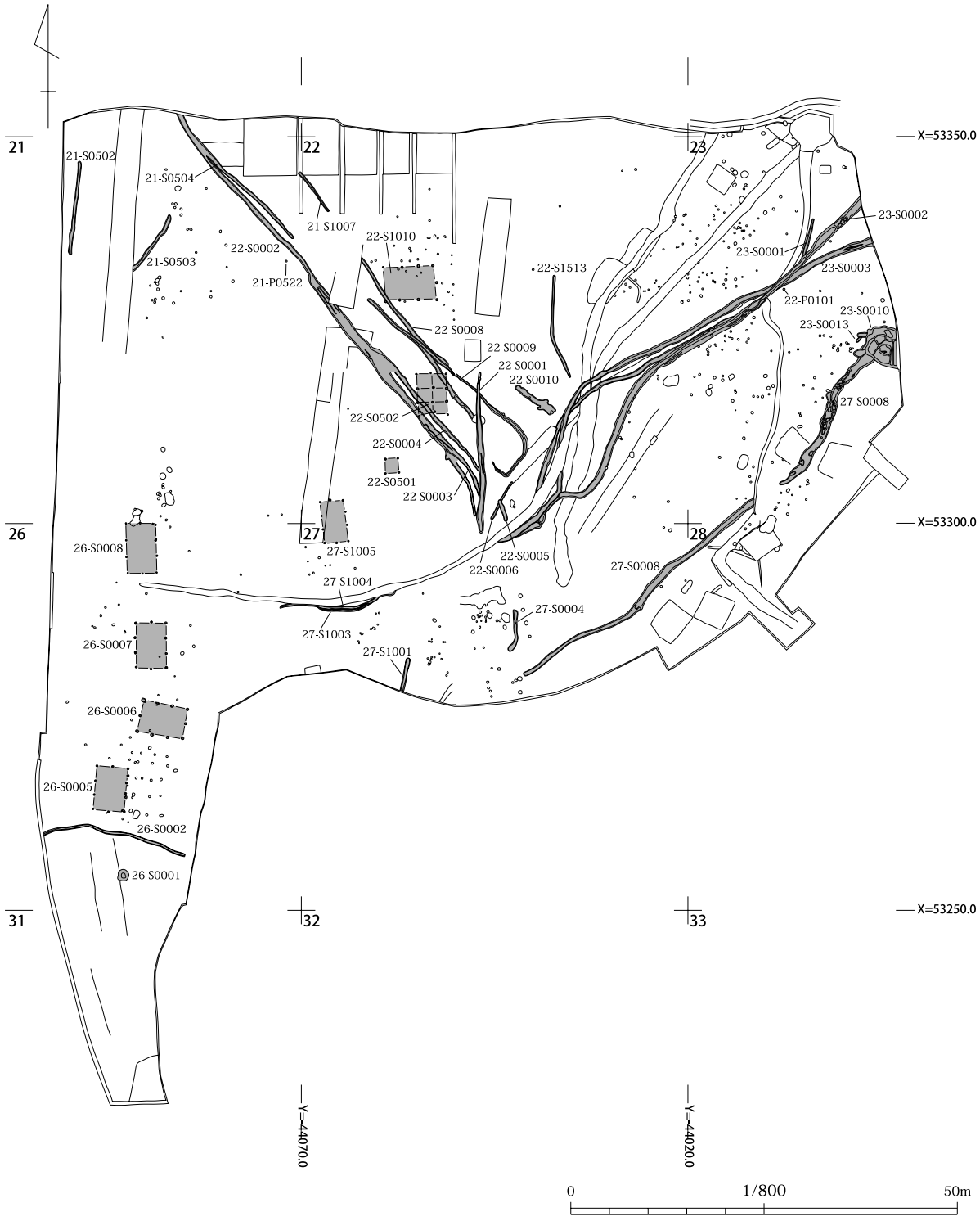
第55図 方形周溝28-S0009 出土遺物実測図⑤

第 3 項　古代～中世の遺構と遺物

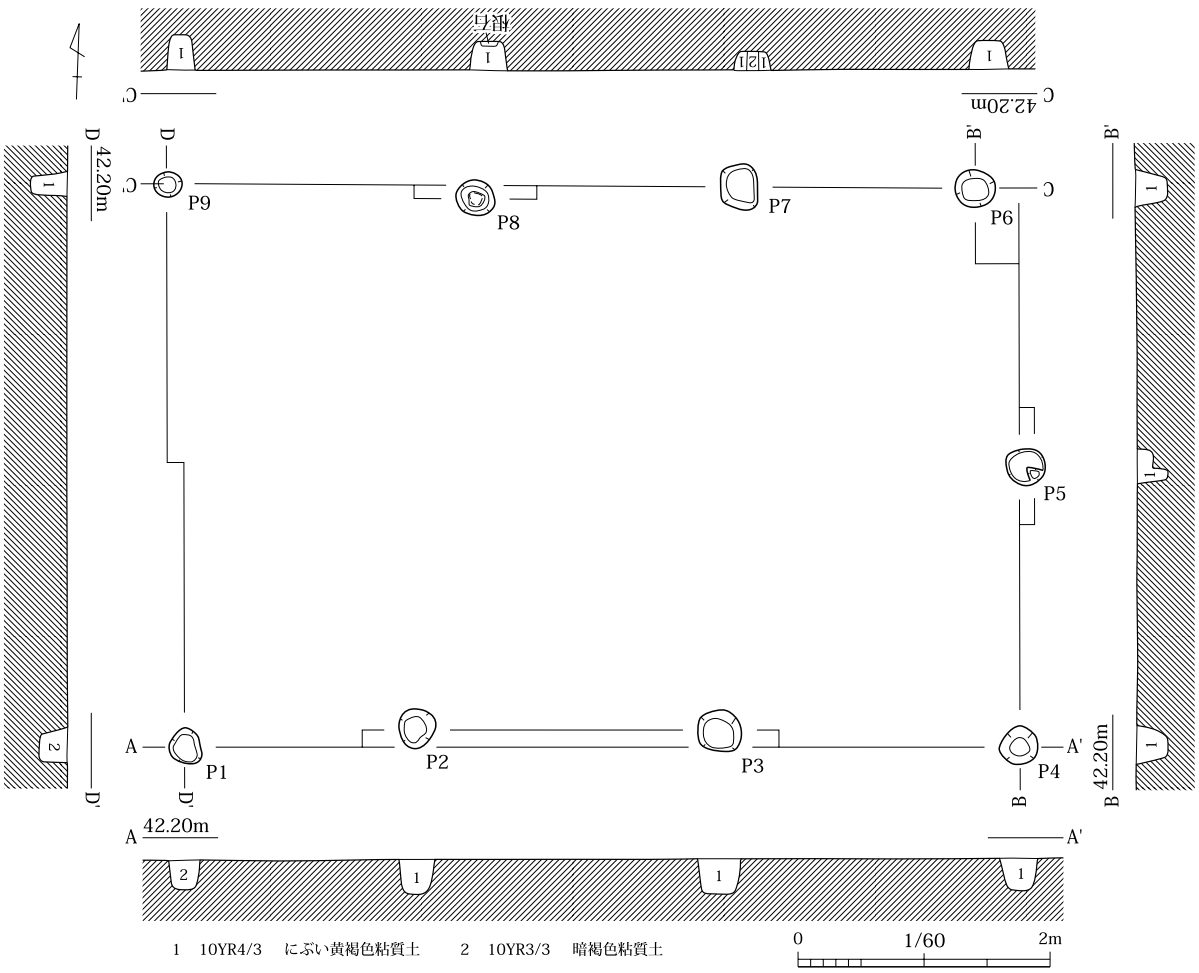
1　掘立柱建物

掘立柱建物22-S1010（第57図）

22グリッド 3 ・ 4 Ｄ地区において検出した東西棟の掘立柱建物跡である。 3 間× 2 間の側柱式建物である。桁行6.9m、梁桁4.7m、桁間1.9～2.4m、梁間2.2mを測る。西辺中央の柱穴は確認できなかった。主軸方向はN-87°-Wである。柱穴の形状は不整円形・楕円形を呈するものが多く見受けられるが、隅丸方形を呈する22-Ｐ1022、Ｐ1019がある。規模は直径0.20～0.40m、深さ0.18～0.30mを測る。

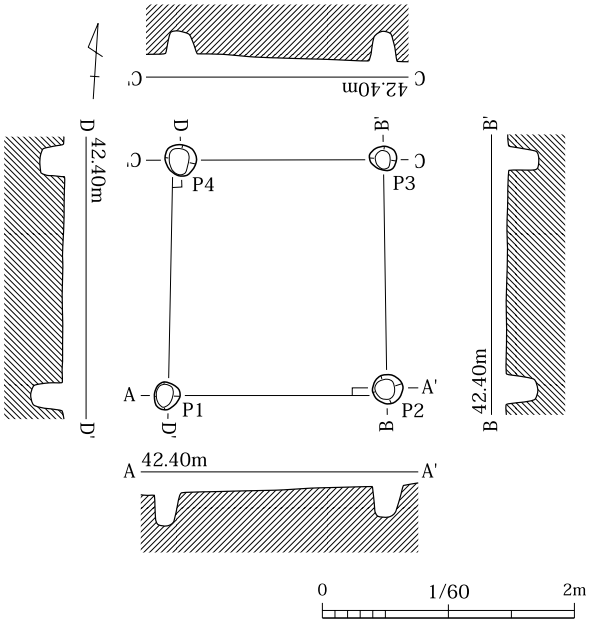


第56図 ＢⅠ地区古代～中世遺構平面図



第57図 掘立柱建物22-S1010 平面・断面図

柱痕は北辺東側22-Ｐ1022と東辺中央22-Ｐ1017にて検出した。北辺西側柱穴Ｐ1023の底には平坦な根石が敷かれていた。埋土はにぶい黄褐色シルト、黒褐色シルト、柱痕部分は暗褐色シルトである。遺物は土師器の小片が出土した。時期は中世と考えられる。



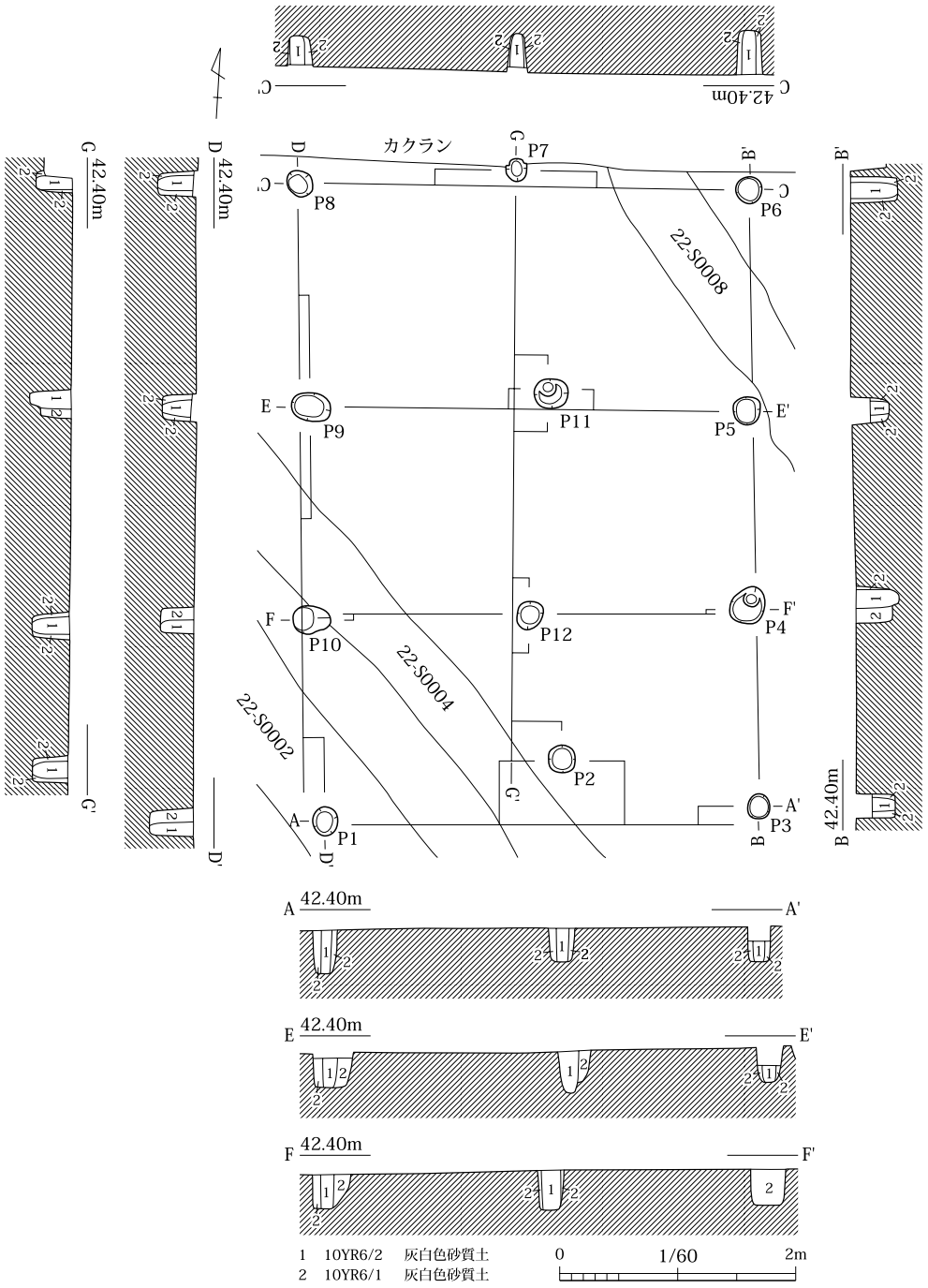
第58図 掘立柱建物22-S0501 平面・断面図

掘立柱建物22-S0501（第58図）

22グリッド３Ｉ地区において検出した掘立柱建物跡である。１間×１間、４本柱の建物である。周辺にて確認されている建物は３間×２間であることから、これらの建物と性格を異にする可能性がある。また、４本柱の規模から竪穴住居の支柱穴の可能性がある。桁行2.1m、梁桁2.0m、桁間1.9m、梁間1.75mを測る。主軸方向はN-3°-Wである。柱穴の形状は不整円形・楕円形を呈する。柱穴の直径0.20～0.30m、深さ0.28～0.36mを測る。柱痕は確認できなかった。埋土は褐灰色砂質土の単一層である。出土遺物が確認できなかったことから時期は不明である。

掘立柱建物22-S0502（第59図・図版 6 - 2 ）

22グリッド 4 G地区において検出した南北棟の掘立柱建物跡である。 3 間× 2 間の総柱建物である。桁行5.5m、梁桁3.9m、桁間1.8m、梁間1.9～2.0mを測る。主軸方向はN-4°-Wである。柱穴の形状は不整円形・楕円形を呈する。柱穴の規模は直径0.15～0.35m、深さは検出面から0.22～0.38mを測る。柱痕は各柱穴にて確認することができた。埋土は柱痕部が灰白色砂質土、掘り方埋土は灰白色砂質土で、地山ブロックが多く含まれていた。南辺中央の柱穴が北東にずれているが、周辺に別の建物となるような柱穴が存在せず、また各柱穴同様の柱痕が確認できたことから、同一遺構の柱穴と解釈した。出土遺物が確認できなかったことから時期は不明である。



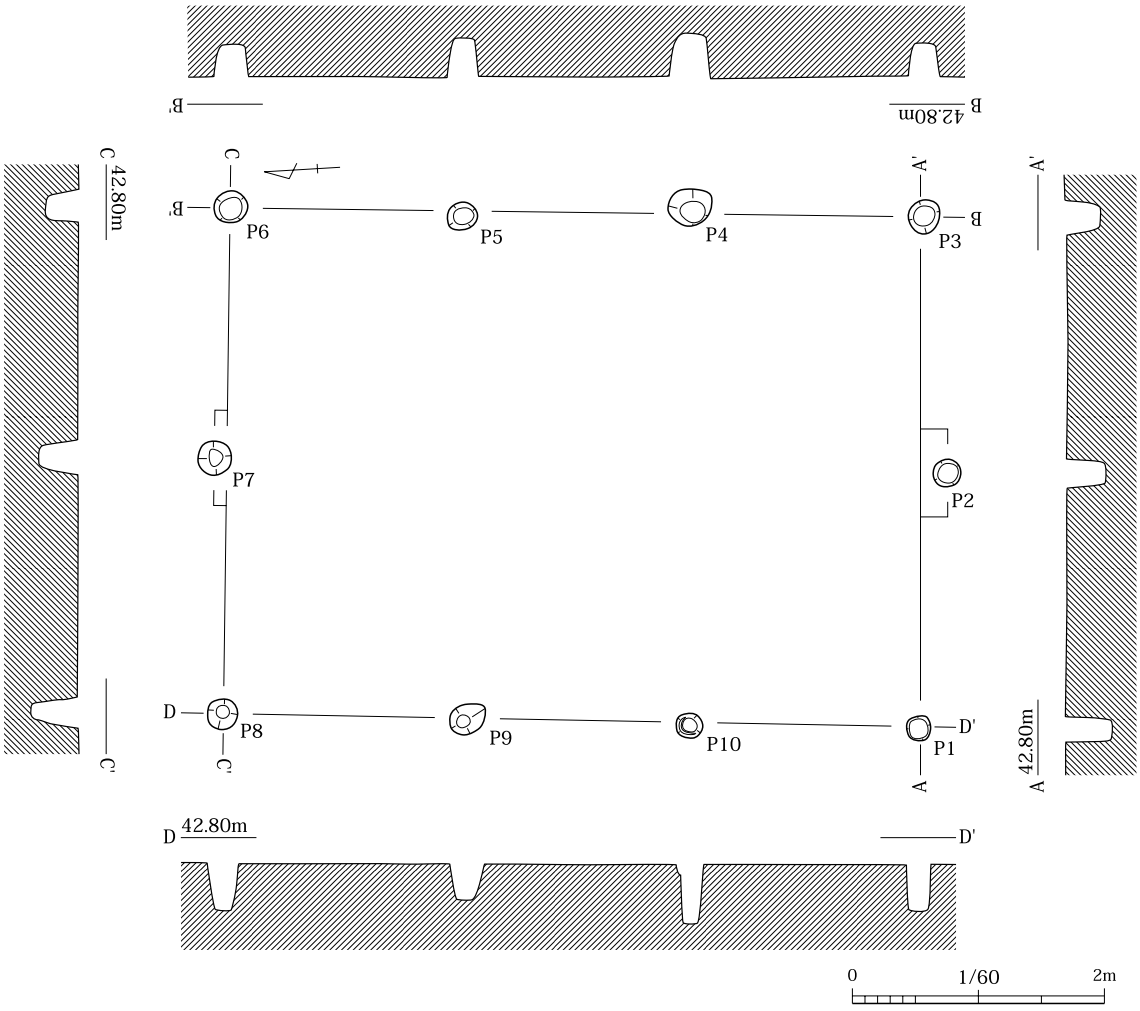
第59図 掘立柱建物22-S0502 平面・断面図

掘立柱建物26-S0005（第60図・図版６-１）

26グリッド５・６Ｇ地区において検出した南北棟の掘立柱建物跡である。３間×２間の側柱式建物である。桁行5.6m、梁桁4.35m、桁間1.8～1.9m、梁間2.0mを測る。主軸方向はＮ-3°-Ｅである。柱穴の形状は不整円形、楕円形を呈する。柱穴の規模は直径0.20～0.38m、深さは検出面から0.28～0.46mを測る。南辺の中央、南東角、東辺中央に建て替えと考えられる柱穴がみられる。埋土はにぶい黄褐色砂質土、黒褐色砂質土である。全ての柱穴が単層で、柱痕や根石等は確認できなかった。出土遺物は確認できなかったことから時期は不明である。

掘立柱建物26-S0006（第61図・図版６-１，７-１）

26グリッド７Ｅ・Ｆ地区において検出した東西棟の掘立柱建物跡である。周辺の建物は全て南北方向を向いているが、本建物のみが東西方向である。３間×２間の側柱式建物である。桁行6.35m、梁桁4.5m、桁間2.0m、梁間1.9～2.0mを測る。主軸方向はＮ-84°-Ｗである。柱穴の平面形状は、不整円形・楕円形であるが、北西隅のみ隅丸方形のプランを有する。両短辺中央の柱穴は直径0.30mを測る小型のものである。全ての柱穴で直径0.15mの柱痕を確認した。柱穴の規模は直径0.3～0.6m、深さは検出面から0.22～0.39mを測る。埋土は柱痕部がにぶい黄褐色砂質土、掘り方は褐色砂質土である。柱穴内からは根石、砂利等は全く確認されなかった。遺物は土師器の小片が出土した。時期は中世と考えられる。



第60図 掘立柱建物26-S0005 平面・断面図

掘立柱建物26-S0007（第62図・図版６-１，７-２）

26グリッド６Ｃ・Ｄ、７Ｃ・Ｄ地区において検出した南北棟の掘立柱建物跡である。３間×２間の側柱式建物である。桁行6.1m、梁桁4.2m、桁間1.9m、梁間1.9～2.0mを測る。主軸方向はＮ-2°-Wである。短辺中央の柱穴は外側に0.2m幅広くなっている。柱穴の形状は不整円形・楕円形を呈する。柱穴の規模は直径0.25～0.35m、深さは検出面から0.2～0.36mを測る。全ての柱穴で直径0.15mの柱痕を検出した。埋土は柱痕部がにぶい黄褐色砂質土、掘り方は褐色砂質土である。柱痕内から根石、砂利等は全く検出されなかった。出土遺物は確認できなかったことから時期は不明である。

掘立柱建物26-S0008（第63図・図版６-１）

26グリッド６Ａ地区において検出した南北棟の掘立柱建物跡である。３間×２間の側柱式建物である。桁行6.6m、梁桁4.0m、桁間2.0～2.15m、梁間1.9mを測る。主軸方向はＮ-2°-Wである。桁行中央の柱穴は外側に0.12m幅広くなっている。柱穴の形状は不整円形・楕円形を呈する。柱穴は小型のものが多く、規模は直径0.2m、深さは検出面から0.08～0.32mを測る。全ての柱穴は単一層であり、柱痕、根石等は確認できなかった。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。北東角、東辺北側に建て替えと考えられる柱穴がみられる。出土遺物は確認できなかったことから時期は不明である。

掘立柱建物27-S1005（第64図）

27グリッド１Ａ地区において検出した南北棟の掘立柱建物跡である。耕作土直下にて検出した。規模は周辺の建物の中でやや小振りに類する。構造は３間×２間の側柱式建物である。桁行5.5m、梁桁3.3m、桁間1.5～1.8m、梁間1.6mを測る。主軸方向はＮ-6°-Wである。桁行中央の柱穴のみ0.12m外側に幅広くなっている。柱穴の形状は北辺中央のみ方形、他は全て不整円形・楕円形を呈する。柱穴の規模は直径0.18～0.25m、深さは検出面から0.12～0.28mを測る。埋土は全て褐黄灰色砂質土である。出土遺物は確認できなかったことから時期は不明である。

２　溝

溝21-S0502（第69図・図版１-１，２）

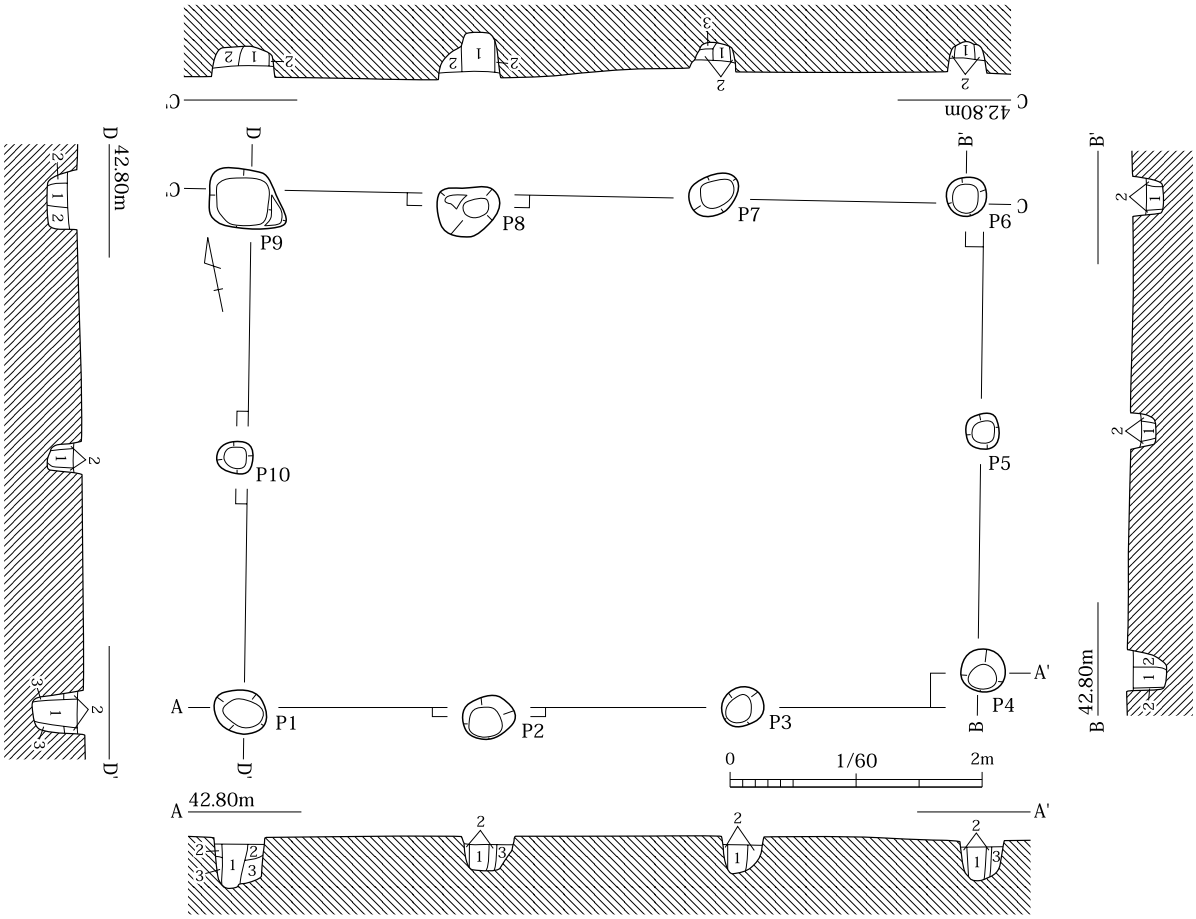
21グリッド５Ａ～Ｃ地区において検出した溝である。Ａ地区にて検出された南北方向の道路遺構に平行している。平面形状は南北方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-6°-Ｅである。規模は検出長12.2m、幅0.60m、深さ0.10mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土の単一層で出土遺物はなかった。

溝21-S0503（第69図・図版１-１，２）

21グリッド７Ｃ・６Ｄ地区において検出した溝である。平面形状は北東から南西方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-38°-Ｅである。規模は検出長8.90m、幅0.55m、深さ0.10mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質シルトの単一層で遺物は出土しなかった。

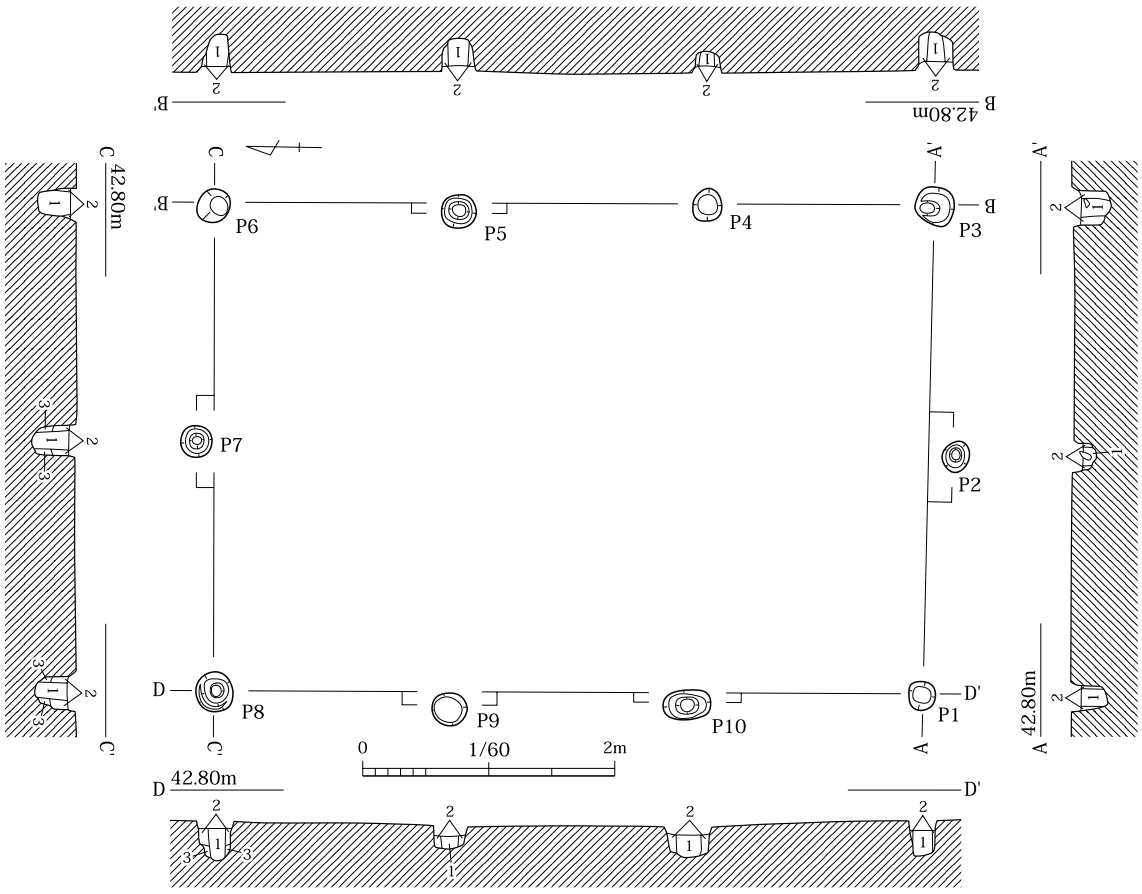
溝21-S0504（第69図・図版１-１，２）

21グリッド８Ａ～10Ｃ地区において検出した溝である。22-Ｓ0002と北側にて合流している。南側の溝22-Ｓ0009へ直線状に継続するものと考えられる。平面形状は北西から南東方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-45°-Wである。規模は検出長20.5m、幅0.50m、深さ0.80mを測る。覆土は灰黄褐色砂



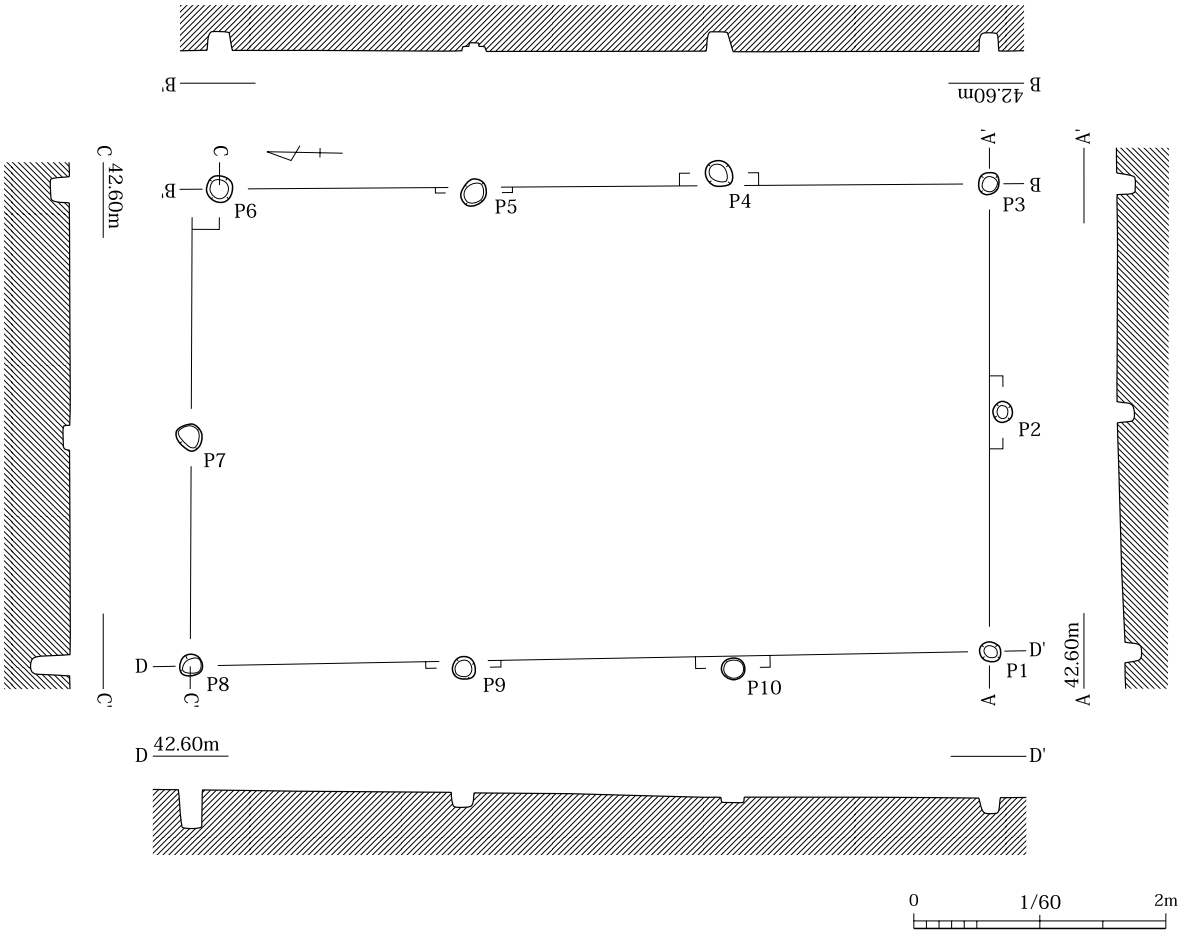
1　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　　2　10YR4/6　褐色砂質土　　3　10YR5/1　褐色砂質土

第61図 掘立柱建物26-S0006 平面・断面図

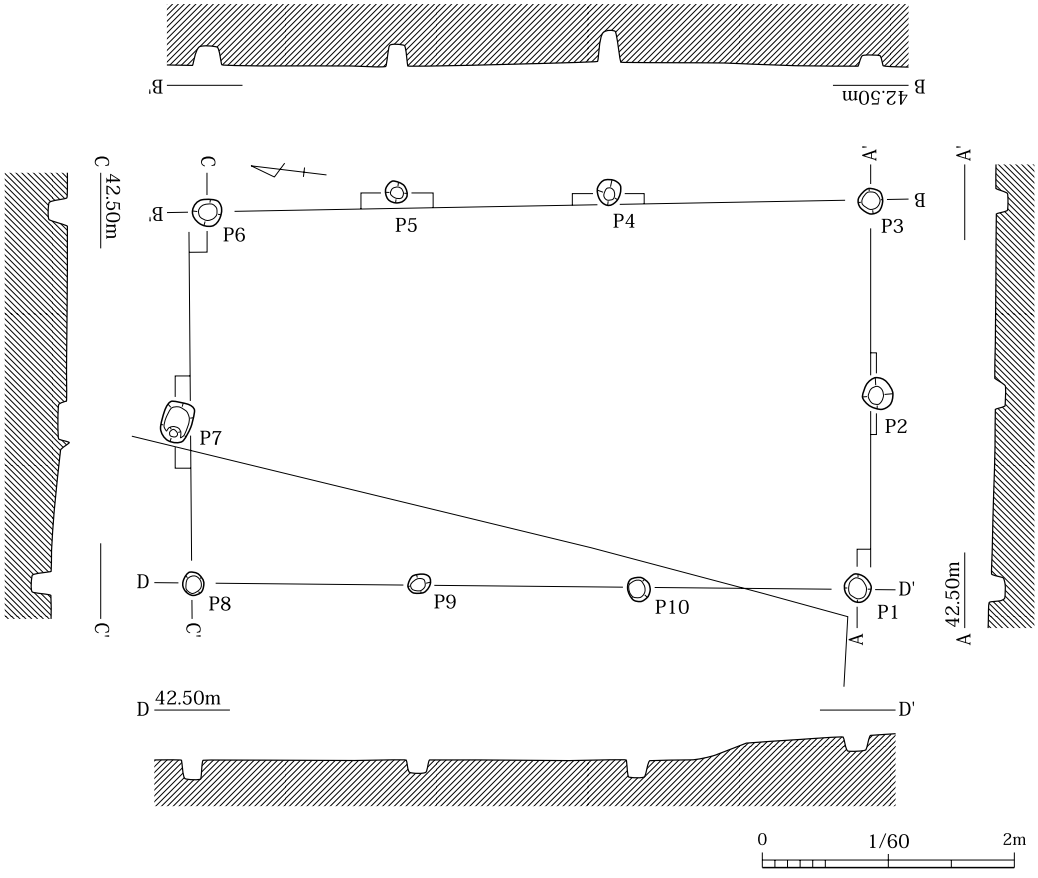


1　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　　2　10YR4/6　褐色砂質土　　3　10YR5/1　褐色砂質土

第62図 掘立柱建物26-S0007 平面・断面図



第63図 掘立柱建物26-S0008 平面・断面図



第64図 掘立柱建物27-S1005 平面・断面図

質シルトの単一層で遺物は出土しなかった。

溝21-S1007（第69図・図版１-１，２）

21グリッド10Ａ～22-1Ｂ地区において検出した溝である。南側の溝22-Ｓ0008へ直線状に継続するものと考えられる。平面形状は北西から南東方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-38°-Ｗである。規模は全長6.50ｍ、幅0.40ｍ、深さ0.12ｍを測る。覆土は褐配色砂質シルトの単一層で出土遺物はなかった。

溝22-S0001（第69図・図版８-１）

22グリッド５Ｇ～27-5Ａ地区において検出した溝である。北側の溝22-Ｓ0008、Ｓ0009、南側の溝22-Ｓ0002～0004を切っている。平面形状は南北方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-1°-Ｅである。規模は全長20.7ｍ、幅0.90ｍ、深さ0.14ｍを測る。覆土は暗灰黄色粘質土の単一層である。

出土遺物（第65図・図版47）　１は器高の低い土師皿である。底部はヘラキリを施している。２は土師器の椀である。体部の丸く張った深身を呈する。口縁部は上方へつまみ出している。時期は８世紀末と考えられる。

溝22-S0002（第69図・図版８-１）

21グリッド９Ｂ～22-5Ｉ地区において検出した溝である。北側は21-8Ａ区にて溝21-Ｓ0504と、南側は22-2Ｆ区にて溝22-Ｓ0004と枝分かれする。22-4Ｈ区にて溝22-Ｓ0003が切っている。平面形状は北西から南東方向へ直線状に走り、22-5Ｊ区にて真南へ弓なりに曲がる。主軸方向はＮ-42°-Ｗである。規模は全長23.6ｍ、幅1.10ｍ、深さ0.13ｍを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質シルトの単一層で遺物は出土しなかった。

溝22-S0003（第69図・図版８-１）

22グリッド４Ｈ～22-5Ｊ地区において検出した溝である。北側は22-4Ｈ区にて22-Ｓ0002を切っている。南側は22-5Ｊ区にて溝22-Ｓ0001に切られている。平面形状は北西から南東方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-38°-Ｗである。規模は全長12.5ｍ、幅0.60ｍ、深さ0.08ｍを測る。覆土は黄褐色砂質土の単一層で遺物は出土しなかった。

溝22-S0004（第69図・図版１-１，２）

22グリッド３Ｇ～22-5Ｉ地区において検出した溝である。北側は22-3Ｇ区にて溝22-Ｓ0002と枝分かれしている。南側は22-5Ｉ区にて溝22-Ｓ0001に切られている。平面形状は北西から南東方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-41°-Ｗである。規模は全長17.0ｍ、幅0.60ｍ、深さ0.08ｍを測る。覆土は灰黄色粘質土の単一層である。

出土遺物（第65図）　３は須恵器の坏身である。底部には貼り付け高台を有する。時期は８世紀中頃から後半と考えられる。

溝22-S0005（第69図・図版１-１，２）

22グリッド６Ｊ地区において検出した短い溝である。方向から北側の溝22-Ｓ0004に継続していた

可能性がある。北側は溝22-Ｓ0006を切っている。平面形状は北西から南東方向へ弓なりに走る。主軸方向はＮ-11°-Ｗである。規模は全長2.90ｍ、幅0.50ｍ、深さ0.10ｍを測る。覆土は暗灰黄色粘質土の単一層で遺物は出土しなかった。

溝22-S0006（第69図・図版１-１，２）

22グリッド６Ｊ地区において検出した溝である。中央は溝22-Ｓ0005に切られている。平面形状は北東から南西方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-36°-Ｅである。規模は全長5.50ｍ、幅0.30ｍ、深さ0.23ｍを測る。覆土は暗灰黄色粘質土の単一層で遺物は出土しなかった。

溝22-S0008（第69図・図版１-１，２）

22グリッド２Ｄ～22-5Ｈ地区において検出した溝である。４Ｆ区にて溝22-Ｓ0009、22-5Ｈ区にて土坑22-Ｓ0023に切られている。平面形状は北西から南東方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-36°-Ｗである。規模は全長25.0ｍ、幅0.60ｍ、深さ0.18ｍを測る。覆土は灰黄褐色砂質シルトの単一層で遺物は出土しなかった。

溝22-S0009（第69図・図版１-１，２）

22グリッド２Ｅ～22-6Ｉ地区において検出した溝である。４Ｆ区にて溝22-Ｓ0008を切り、22-5Ｇ区にて溝22-Ｓ0001に切られている。平面形状は北西から南東方向へ直線状に走り、22-6Ｈ区・６Ｉ区にて直角に曲がった釣り針状を呈する。主軸方向はＮ-51°-Ｗである。規模は全長36.0ｍ、幅0.60ｍ、深さ0.20ｍを測る。覆土は灰黄褐色砂質シルトの単一層で出土遺物はなかった。

溝22-S0010（第69図・図版8-2）

22グリッド６Ｇ・７Ｇ・Ｈ地区において検出した溝である。西側の22-Ｓ0002～0004・0009と並行していることから、同様の性格を有する溝の可能性がある。南側には弥生時代の環濠22-Ｓ1501・1514、中世の溝23-Ｓ0001～0003が近接する。平面形状は北西から南東方向へ直線状に走る。主軸方向はＮ-56°-Ｗである。規模は全長5.92ｍ、幅0.81ｍ、中央の深さ0.11ｍを測る。覆土は砂をわずかに含む粘質土の単一層で出土遺物はなかった。

溝22-S1513（第69図・図版１-１，２）

22グリッド７Ｄ区～７Ｇ地区において検出した溝である。平面形状は南北方向へ弓なりに走る。主軸方向はＮ-2°-Ｅである。規模は全長13.6ｍ、幅0.40ｍ、深さ0.14ｍを測る。覆土は褐灰色シルトの単一層で出土遺物はなかった。

溝23-S0001（第69図・図版１-１，２）

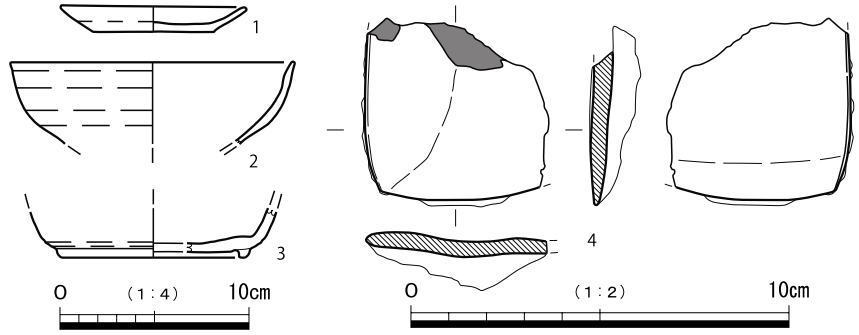
23グリッド４Ｃ区～22-7Ｉ地区において検出した溝である。同一方向に走る溝23-Ｓ0002・0003に切られており、新旧関係は古出である。平面形状は蛇行しながら北東から南西方向へ走る。主軸方向はＮ-60°-Ｅである。規模は全長54ｍ、幅0.70ｍ、深さ0.25ｍを測る。覆土はにぶい黄褐色シルトの単一層である。遺物は土師器皿、黒色土器椀、鉄製品が出土した。

出土遺物（第65図）　４は鉄製の不明製品である。片側側縁と刃先が遺存する。残存長4.8㎝、残存

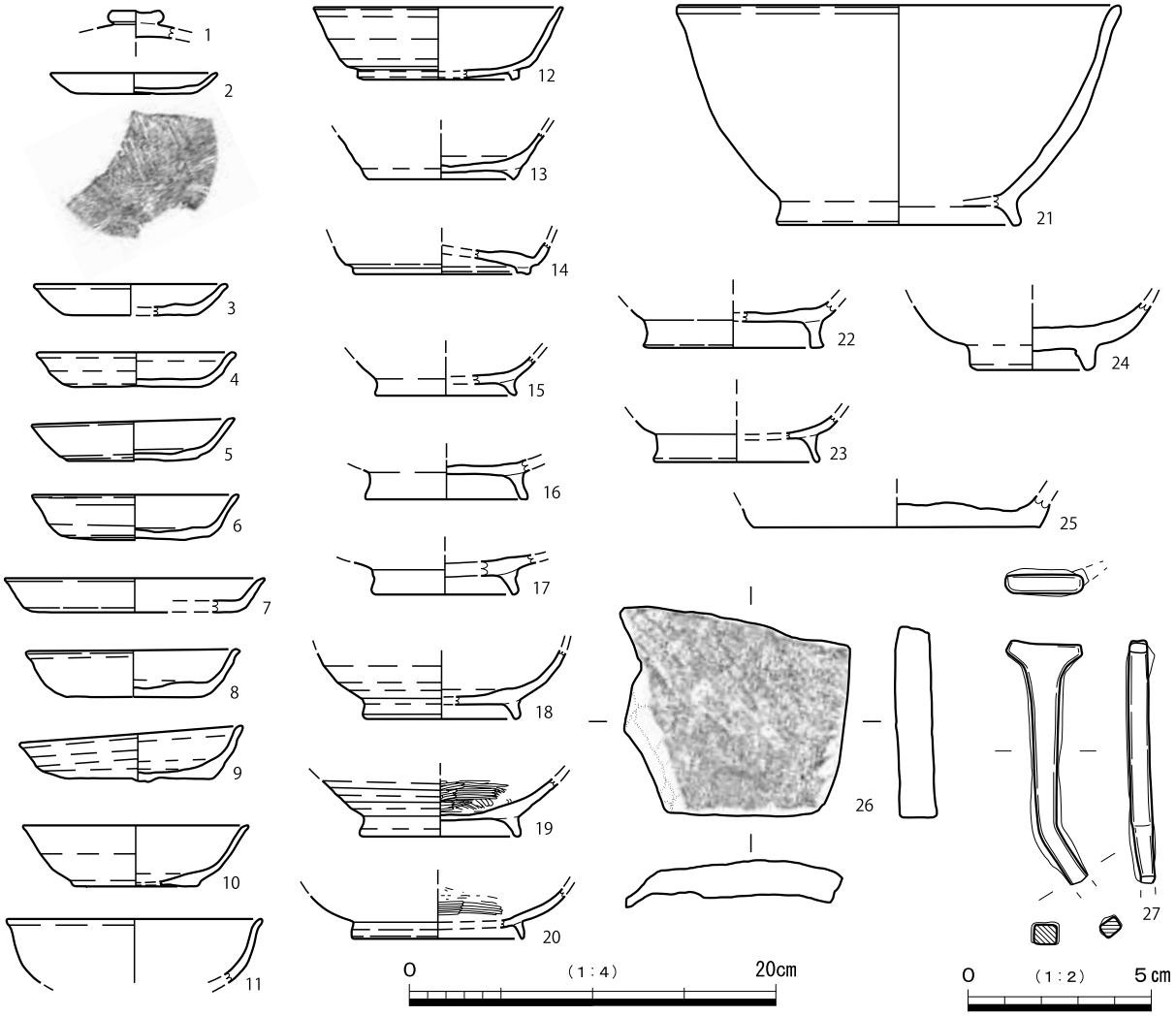
幅4.8㎝である。厚さ５㎜ほどの鉄板であり、中央付近に縦方向の稜が入る。下辺の断面形状が楔形となることから、刃先と考えられる。表面には直径１～５㎜ほどの孔が多数みられることから、鋳造品の可能性が高い。

溝23-S0002（第69図・図版１-１，２）

23グリッド５Ｂ区～27-7Ｊ地区において検出した溝である。23-Ｓ0001・0003を切っていることから最も新しい。平面形状は蛇行しながら北東から南西方向へ走る。主軸方向はＮ-57°-Ｅである。規模



第65図 溝22-S0001・S0004・23-S0001 出土遺物実測図



第66図 溝23-S0002 出土遺物実測図

は全長62ｍ、幅0.80ｍ、深さ0.55ｍを測る。覆土は暗灰黄色粘質土、暗灰黄色砂質土、にぶい黄褐色粘質土層である。遺物は土師器皿、黒色土器椀が出土した。

出土遺物（第66図・図版47）　１は須恵器の坏蓋である。扁平な宝珠つまみを有する。２～10は浅い器高の皿である。２は土師器の皿である。底部は回転糸切りを施している。３は土師器の皿である。底部はヘラキリを施している。４は土師器の皿である。内外面にナデを施している。５は土師器の皿である。底部には板状痕跡がみられる。内面に煤の付着がみられる。６は土師器の坏身である。底部はヘラキリを施している。７は須恵器の皿である。全体に回転ナデを施している。８は土師器の皿である。内外面共にナデを施している。９は土師器の皿である。底部はナデ調整と板状痕跡がみられる。10は土師器の坏身である。底部にはケズリ出し高台を有する。11は土師器の椀である。内外面ナデを施す。12は須恵器の坏身である。底部はヘラ切りを施し、貼り付け高台を有する。13は土師器の椀である。底部に貼り付け高台を有する。14は須恵器の坏身である。底部には低い貼り付け高台を有する。全体に歪みがみられる。15は土師器の椀である。底部には小さな貼り付け高台を有する。16は土師器の坏である。底部には貼り付け高台を有する。17は土師器の椀である。底部には高めの貼り付け高台を有する。18は土師器の椀である。高めの貼り付け高台を有する。19は土師器の椀である。底部は貼り付け高台を有し、ナデを施している。20は土師器の椀である。底部に貼り付け高台を有する。内面はヘラミガキを施している。21は土師器の椀である。底部は薄い貼り付け高台を有する。内面はヘラミガキを施している。22は須恵器の椀である。高めの貼り付け高台を有している。底部はヘラケズリを施している。23は土師器の椀である。底部には高めの貼り付け高台を有する。21は陶器の鉢である。底部には高めの高台を有する。25は瓦質陶器の底部である。底径は大きく平らである。24は窯の青磁椀である。全面に施釉を施している。内面にヘラガキの花弁を施している。26は格子目タタキを施した平瓦である。全体に摩滅している。28は鉄製の釘である。身部先端を欠損する。残存長6.6㎝、最大幅2.1㎝である。頭部はＴ字状に広がり、段を設けることなく身部に連続する。頭部頂はやや凹むため、使用された可能性が高い。身部は途中で屈曲する。身部断面形は長方形であり、先端にいくに従い方形に近くなる。

溝23-S0003（第69図・図版１-１，２）

23グリッド５Ｃ区～27-6Ａ地区において検出した溝である。23-Ｓ0001を切り、23-Ｓ0002に切られている。西側にみられる溝27-Ｓ1003・1004と同一規模、方向であることから、継続していたものと考えられる。平面形状は蛇行しながら北東から南西方向へ走る。主軸方向はＮ-64°-Ｗである。規模は全長65ｍ、幅0.90ｍ、深さ0.25ｍを測る。覆土は暗褐色細砂質シルト、黄褐色粘質シルト、にぶい黄褐色シルト土層である。遺物は土師器皿、黒色土器椀が出土した。

溝23-S0010（第67図・図版１-１，２）

23グリッド５・６Ｆ地区において検出した溝である。南西方向から走っている27-Ｓ0008より継続するものである。検出できた平面形状は楕円形を呈するが、東側の調査地外に延びていることから東西方向に細長いものと考えられる。西側には細く延びた小溝が２条みられ、中央から延びた溝内には小石を詰めているものがみられた。また、深く下がった中央の溝内は、27-Ｓ0008より流入した水量によって数多くの凹凸や集石がみられる。主軸方向はＮ-65°-Ｗである。規模は検出長6.0ｍ、幅5.0ｍ、深さ1.30ｍを測る。覆土は暗褐色細砂質シルト、黄褐色粘質シルト、にぶい黄褐色シルト土層である。

遺物は土師器皿、黒色土器椀が出土した。

出土遺物（第68図）　１は土師器の浅い小皿である。口縁部は上外方へ大きく外反する。底部に粘土巻き上げ痕を残している。内外面ナデを施している。２は土師器の浅い大皿である。口縁部は上外方へ大きく外反する。底部はヘラケズリを施している。３は土師器の椀である。口縁部は直線状に外反する。口縁端部は丸く厚手である。内外面ナデを施している。口縁端部に煤の付着がみられる。５・６は土師器の椀である。内外面ナデ調整、高めの貼り付け高台を有する。

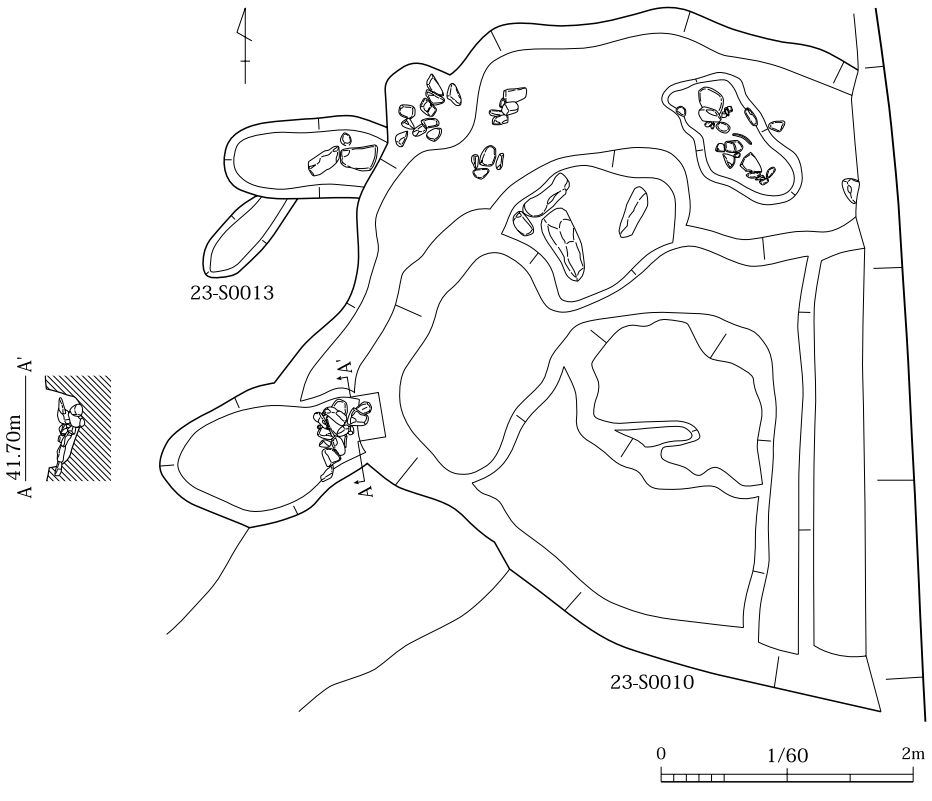
溝23-S0011（第67図・図版１-１，２）

23グリッド５・６Ｆ地区において検出した小溝である。南西方向から23-Ｓ0010へ継続するものである。検出できた平面形状は直線状を呈するが、西側に延びていたものが削平を受けたものと考えられる。流入した水量によって数多くの集石がみられる。主軸方向はＮ-76°-Ｅである。規模は検出長1.6m、幅1.1m、深さ0.20mを測る。覆土は暗褐色細砂質シルト、黄褐色粘質シルト、にぶい黄褐色シルト土層である。遺物は土師器椀が出土した。

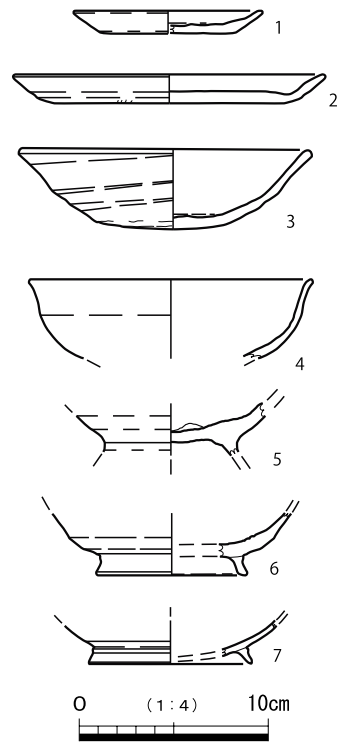
出土遺物（第68図）　４は土師器の椀である。深めの体部と直立気味に外反した口縁部、高めの高台を有する。内外面共に摩滅している。７は土師器の椀である。高めの「ハ」の字状高台を有する。内面に多くの煤が付着している。

溝26-S0002（第56図・図版１-１，２）

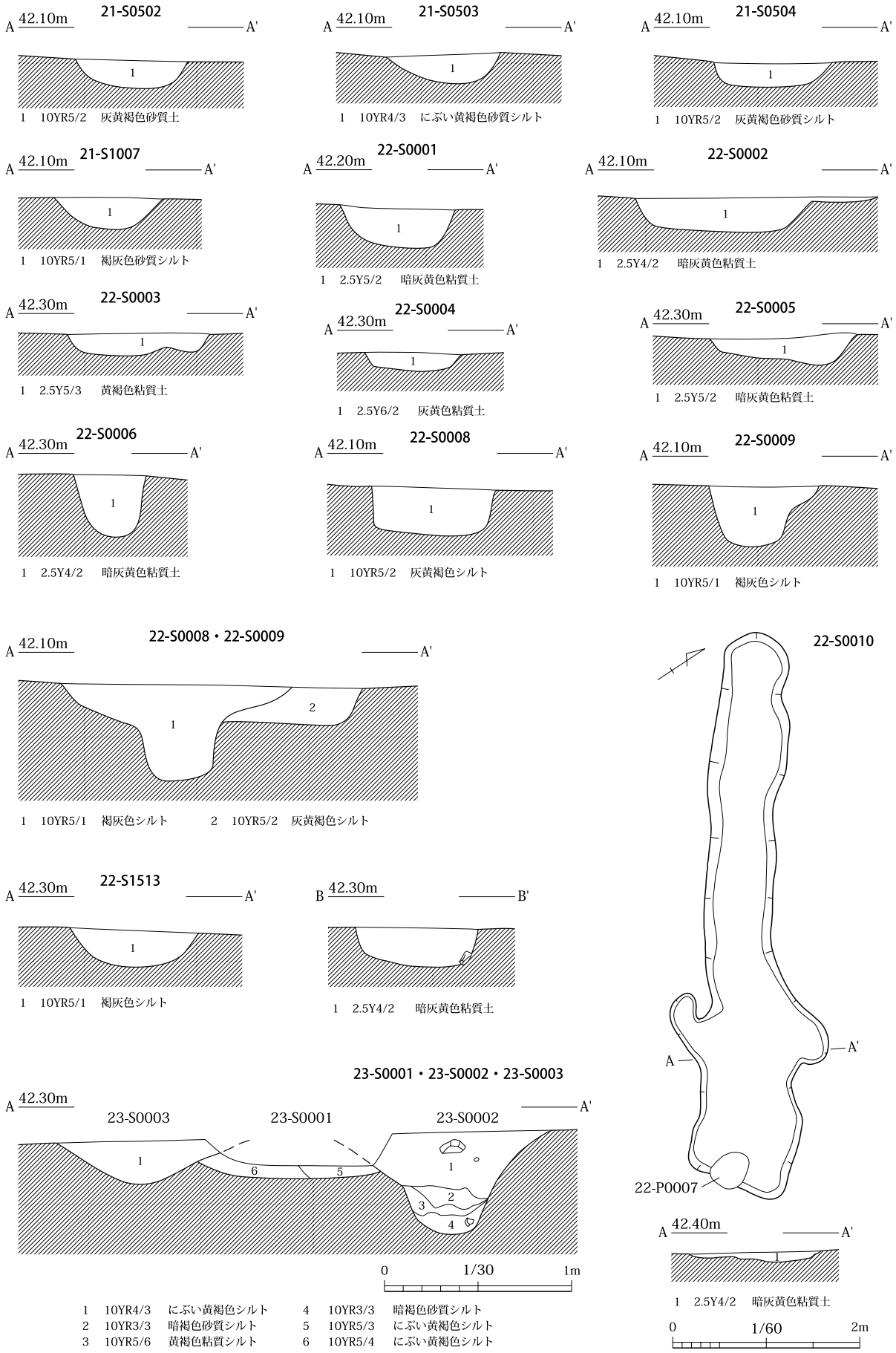
26グリッド４Ｈ～８Ｉ地区において検出した細長い溝である。掘立柱建物26-Ｓ0005と同一方向の



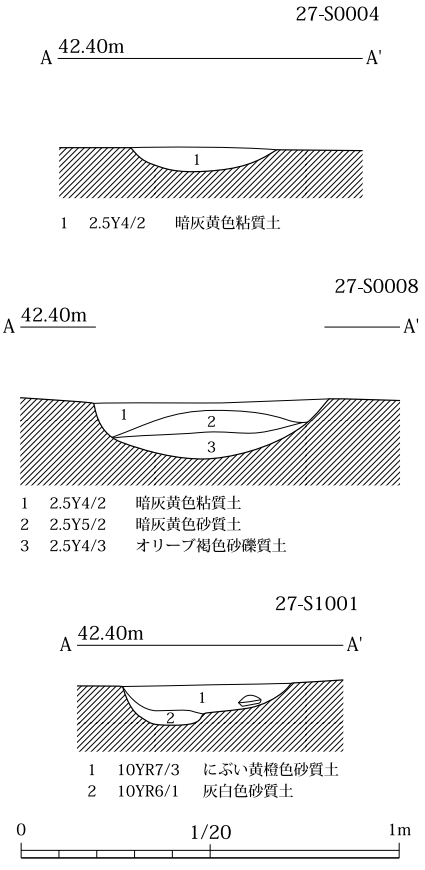
第67図 溝23-S0010・0011 平面・断面図



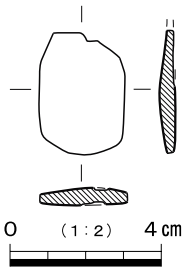
第68図 溝23-S0010･S0011
出土遺物実測図


21-S0502
A 42.10m A'
1
1 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
21-S0503
A 42.10m A'
1
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
21-S0504
A 42.10m A'
1
1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
21-S1007
A 42.10m A'
1
1 10YR5/1 褐灰色砂質シルト
22-S0001
A 42.20m A'
1
1 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
22-S0002
A 42.10m A'
1
1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
22-S0003
A 42.30m A'
1
1 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
22-S0004
A 42.30m A'
1
1 2.5Y6/2 灰黄色粘質土
22-S0005
A 42.30m A'
1
1 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
22-S0006
A 42.30m A'
1
1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
22-S0008
A 42.10m A'
1
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト
22-S0009
A 42.10m A'
1
1 10YR5/1 褐灰色シルト
22-S0008・22-S0009
A 42.10m A'
1
2
1 10YR5/1 褐灰色シルト
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト
22-S0010
A
A'
22-P0007
22-S1513
A 42.30m A'
1
1 10YR5/1 褐灰色シルト
B 42.30m B'
1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
23-S0001・23-S0002・23-S0003
A 42.30m A'
23-S0003
23-S0001
23-S0002
1
6
5
1
2
3
4
0 1/30 1m
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
3 10YR5/6 黄褐色粘質シルト
4 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
5 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
A 42.40m A'
1
1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
0 1/60 2m

第69図 各溝 断面



第70図 溝27-S0004･S0008･S1001 断面図



第71図 溝27-S0008 出土遺物実測図

東西方向に走っている。平面形状は直線状を呈する。主軸方向はN-76°-Wである。規模は全長19m、幅0.32～0.40m、深さ0.22～0.27mを測る。覆土は２層がみられ、上層はにぶい黄褐色砂質土、下層は褐色砂質土である。遺物は土師器の細片が出土した。

溝27-S0004（第70図・図版１-１，２）

23グリッド６Ｃ・Ｄ地区において検出した溝である。方向から北側の溝23-Ｓ0001に継続していた可能性がある。平面形状は南端が緩やかに曲がった弓状を呈する。主軸方向はN-2°-Eである。規模は全長0.6m、幅0.41m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂礫土の単一層で出土遺物はなかった。

溝27-S0008（第70図・図版１-１，２）

23グリッド５Ｆ～27-6Ｄ地区において検出した溝である。竪穴住居23-Ｓ0504を切っている。平面形状は蛇行しながら北東から南西方向へ走る。主軸方向はN-53°-Eである。規模は全長63m、幅0.70m、深さ0.26mを測る。覆土は上層から暗灰黄色粘質土、暗灰黄色砂質土、オリーブ褐色砂礫土である。遺物は鉄片と古代の須恵器片が出土した。

出土遺物（第71図）　１は鉄製の不明製品である。残存長3.2㎝、残存幅2.3㎝、厚さ５㎜である。中央付近がやや厚くなる。

溝27-S1001（第70図・図版１-１，２）

27グリッド３Ｄ・Ｅ地区において検出した溝である。南側は調査地外に延びている。平面形状は直線状を呈する。主軸方向はN-15°-Eである。規模は全長5.0m、幅0.45m、深さ0.15mを測る。覆土は上層がにぶい黄橙色砂質土、下層はにぶい黄橙色砂礫土で出土遺物はなかった。

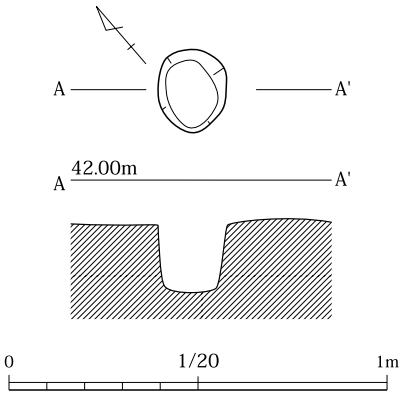
溝27-S1003（第56図・図版１-１，２）

27グリッド１・２Ｃ地区において検出した溝である。北側を同一方向に走る溝27-Ｓ1004に切られている。平面形状は蛇行しながら東西方向へ走る。主軸方向はN-73°-Eである。規模は全長13.0m、幅0.40m、深さ0.20mを測る。覆土は黄褐色砂礫土の単一層で遺物は出土しなかった。

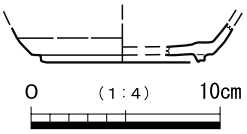
溝27-S1004（第56図・図版１-１，２）

26グリッド10Ｃ～27-3Ｂ地区において検出した溝である。南側の27-Ｓ1003を切っている。耕作土直

下にて検出した。平面形状は蛇行しながら東西方向へ走る。主軸方向はＮ-73°-Ｅである。規模は全長16.0ｍ、幅0.30ｍ、深さ0.15ｍを測る。覆土は黄褐色砂礫土の単一層で出土遺物はなかった。



第72図 柱穴22-P0522 平面・断面図



第73図 柱穴22-P0522 出土遺物実測図

３　柱穴

柱穴22-S0522（第72図）

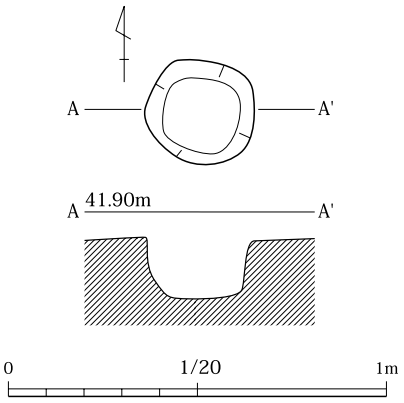
22グリッド10Ｄ地区において検出した柱穴である。北東側に溝22-Ｓ0002が近接している。平面形状は楕円形を呈する。規模は直径0.23ｍ、深さ0.18ｍを測る。覆土は黄褐色砂礫土の単一層である。遺物は須恵器の坏身が出土した。

出土遺物（第73図）　須恵器の坏身である。底部には低い貼り付け高台を有し、ナデを施す。

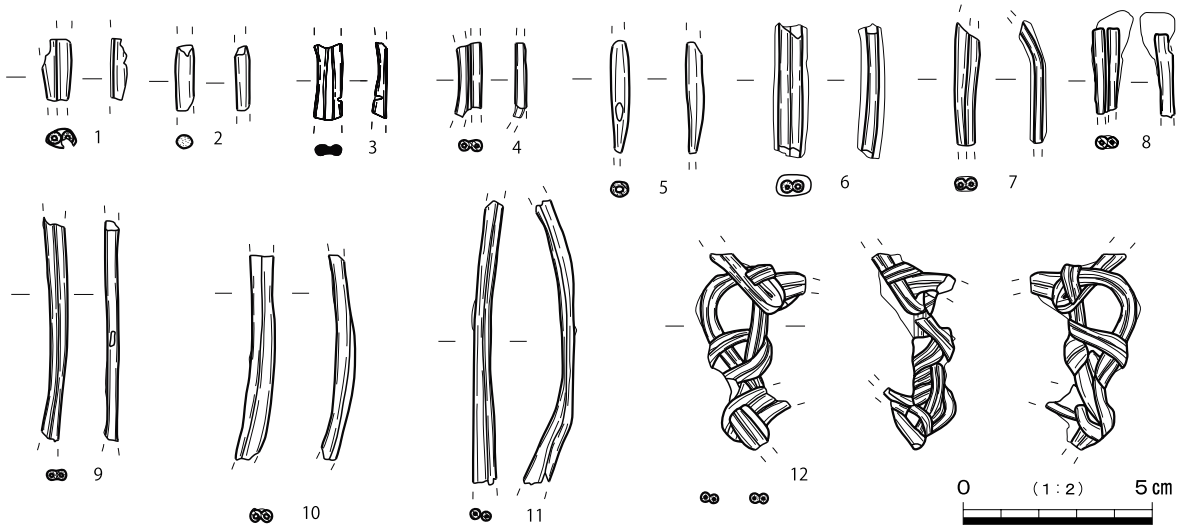
柱穴23-Ｐ0101（第74図）

23グリッドＳＤ地区において検出した柱穴である。北側に溝23-Ｓ0001～0003が近接している。平面形状は円形を呈する。規模は直径0.26ｍ、深さ0.16ｍを測る。覆土は黄褐色砂礫土の単一層である。遺物は弥生土器の小片と鉄製品が出土した。

出土遺物（第75図）　１～12は針金状金属製品である。出土遺物の中で比較的大きな破片を12点図化した。その多くが断面円形の鉄棒２条である。なお、円形断面の直径は３㎜を測り、その中心は錆により中空になる。１・３・４・６～12は断面が円形であり、２条からなる。また、２・５は同様の断面をなし、１条からなる。以下では個別に説明を加える。



第74図 柱穴22-P0101 平面・断面図



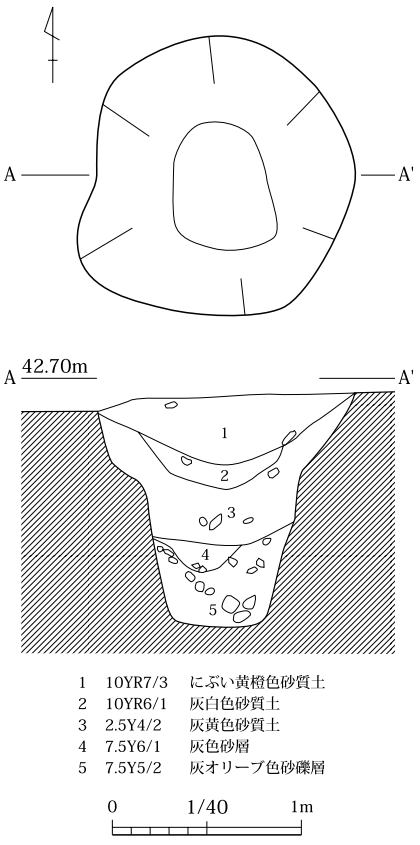
第75図 柱穴23-P0101 出土遺物実測図

１は残存長1.6㎝、残存幅８㎜である。２は残存長1.7㎝、残存幅５㎜である。３は残存長2.0㎝、残存幅７㎜である。２条の間に若干の隙間がみられる。４は残存長2.0㎝、残存幅７㎜である。５は残存長1.7㎝、残存幅５㎜である。１条よりなる。６は残存長3.5㎝、残存幅７㎜である。７は残存長3.2㎝、残存幅７㎜である。屈曲点を１箇所確認できる。８は残存長2.2㎝、残存幅７㎜である。９は全体的に緩やかな反りがはいる。残存長5.9㎝、残存幅７㎜である。10は残存長5.4㎝、残存幅1.0㎝である。全体的に反っており、かつ反時計周りに捩りが入る。11は弓なりに曲がっており、屈曲点を２箇所確認できる。残存長7.5㎝、残存幅1.3㎝である。12は２条一束の条線が絡み合った状態で結び目が良好に遺存する。複雑に巻いていることがわかる。残存長5.2㎝、残存幅2.9㎝である。これらの針金状金属製品の時期は、他の遺物を伴わないことから確定できない。しかしながら、類例が弥生時代の曲り田遺跡で確認できることを考慮すると、弥生時代～古墳時代の遺物の可能性も考えられる。

４　井戸

井戸26-S0001（第76図・図版６-１）

26グリッド６Ｊ地区において検出した井戸である。26-Ｓ0002より南側については、大きく削平を受けていることから深い遺構のみの検出に止まった。平面形状は円形を呈する。検出面から0.30ｍ下位にて幅0.10ｍの狭いテラス状の面を検出した。規模は直径1.5ｍ、深さ1.24ｍを測る。覆土は礫を多く含む砂質土が主体を占める。土層は上層からにぶい黄橙色砂質土、褐灰色砂質土、灰黄色砂質土、灰色砂層、灰オリーブ色砂礫層である。構造は素掘状で、井戸枠等の木製品は確認できなかった。遺物は黒色土器片や土師器片が出土しており時期は古代の範疇であろう。



第76図 井戸26-S0001 平面・断面図

第４項　遺構に伴わない出土遺物

１　縄文時代の遺物

遺構としては縄文時代晩期の土坑を２基確認したが、遺構検出中や新しい時期の遺構に混入した縄文時代の遺物も多くみられ、これらの遺物は遺構に伴わないので、ここでまとめて報告する。

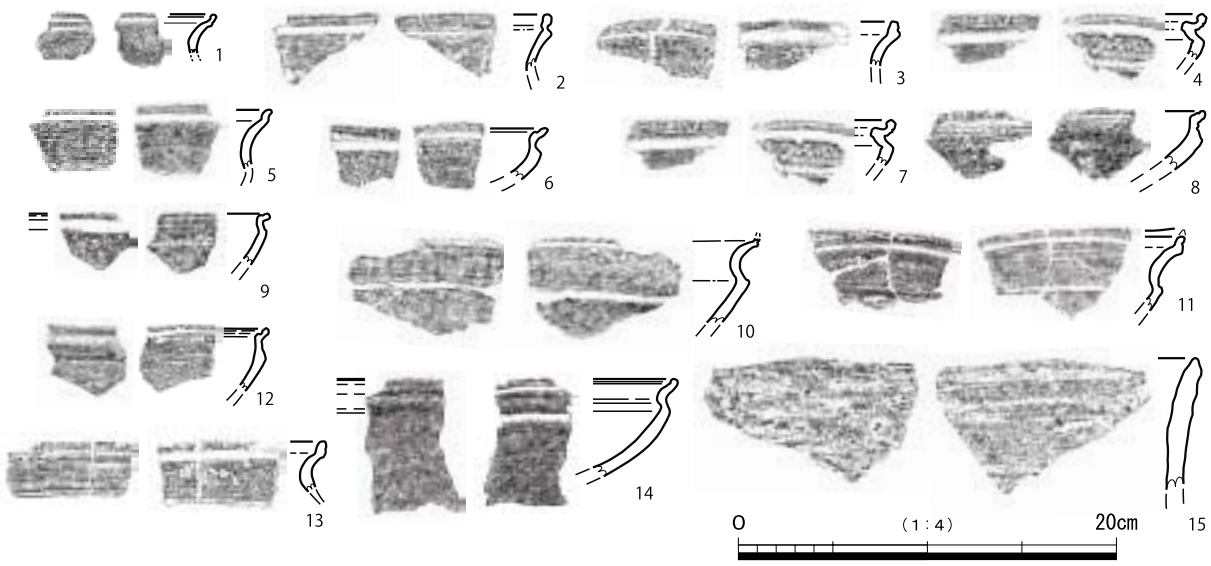
縄文土器（第77図・図版44）　縄文土器は精製の深鉢・浅鉢、粗製の深鉢が出土しており、中でも精製鉢の破片が目立ち、今回は比較的残りの良い口縁部を持つ精製の鉢14点、粗製の鉢１点を抽出し掲載した。小片のため、プロポーション全体の把握は難しいものの、その形態やその特徴はほとんどが広田式（小池1982）に対応するものと考えられ、以下それを個別に細かく形態を考察してみる。

精製の深鉢形土器（第77図１～４・図版44）　「く」の字形に口縁部が立ち上がり、内弯する頸部から胴部へ続くと思われる。口縁は波状と平縁のものがある。１は口縁部の屈折に稜をもつが鈍角となり外反気味で１条の沈線が巡り、内外面共にヘラミガキ調整されている。２は幅がやや広い口縁は明瞭な稜をなし「く」の字に屈折し、直立気味に立ち上がり、口縁外面には、１条の深い沈線がめぐり内面屈折部にも沈線が施され、内外面共にヘラミガキ調整されている。３は幅の狭い口縁部で稜をもって屈折し外面で直立するが、内面は肥厚し鈍くなっている。外面に細く浅い沈線が１条めぐり、端部は平坦に整えられ、内外面共にヘラミガキ調整されている。４は幅の狭い口縁部で稜をもって内傾し、外面に２条、内面に１条の沈線をめぐらす。外面はヘラミガキ調整されているが内面は不明である。

粗製の深鉢形土器（第77図15・図版44）　小片で全体の形態は不明であるが、口縁部が長めに外反し胴部と口縁部の境が明瞭でないものと思われる。外面は横方向の板状の条痕、内面も板状のナデ調整が施されている。

精製の浅鉢形土器（第77図５～14・図版44）　今回出土した浅鉢は、下記するＡ類からＤ類の４種類に分類することが出来た。

浅鉢Ａ類（第77図５・13図版44）　「く」の字形に口縁部が立ち上がり、内弯する頸部から胴部も「く」の字形に屈折して底部に移行する。頸部から口縁部にかけては緩やかに外反して広がる。波状



第77図 ＢＩ地区遺構に伴わない出土遺物実測図①

口縁部と平縁があるが、破片資料での区別は難しい。５は口縁部が外方に広がりわずかに屈曲している。沈線はなく、強いナデによる凹線が施されている。13は口縁部には１条の沈線が施され頸部への屈曲は鈍く丸味をもっている。

浅鉢Ｂ類（第77図６・７・14・図版44） 口縁部は屈折して立ち上がり、短尺で強く内弯する。頸部から胴部は「く」の字形に屈折して底部に続く。Ａ類に比べて頸部の内弯が強く短尺なために、15に見られるような肩部に文様を施さない。またＡ類同様、口縁部の文様の変化と屈折し頸部に至る部分に変化が見られる。６は屈曲した口縁部が外方へ開き、その端部は丸味をもつ。内面に１条の沈線をめぐらし、内外面共にヘラミガキ調整が施されている。７は口縁部・頸部共に短く、口縁部内面と頸部に凹線を施したような形状になっている。口縁部外面と頸部内面の屈折部分に１条の細く浅い沈線がめぐっており、内外面共にヘラミガキ調整がされている。14は頸部が他に比べて緩やかに内弯し、やや長く口縁部との屈曲の退化はほぼなくなり内面に浅い沈線を施している。内外面共にヘラミガキ調整されている。

浅鉢Ｃ類（第77図８・９・12・図版44） 頸部が無く、胴部から直接口縁部が屈折して立ち上がる形状で、口縁部の文様帯がやや広く凹線や沈線を施している。８はやや広めの口縁部外面に３条の沈線と内面に１条の沈線をめぐらす。調整は不明。９はやや広めの口縁部外面に「コ」の字状の凹線が１条と、内面に細くて浅い沈線が１条施されている。調整は内外面共に摩滅し不明。12は広めの口縁部をもち外面に２条の凹線と内面に１条の沈線を施している。

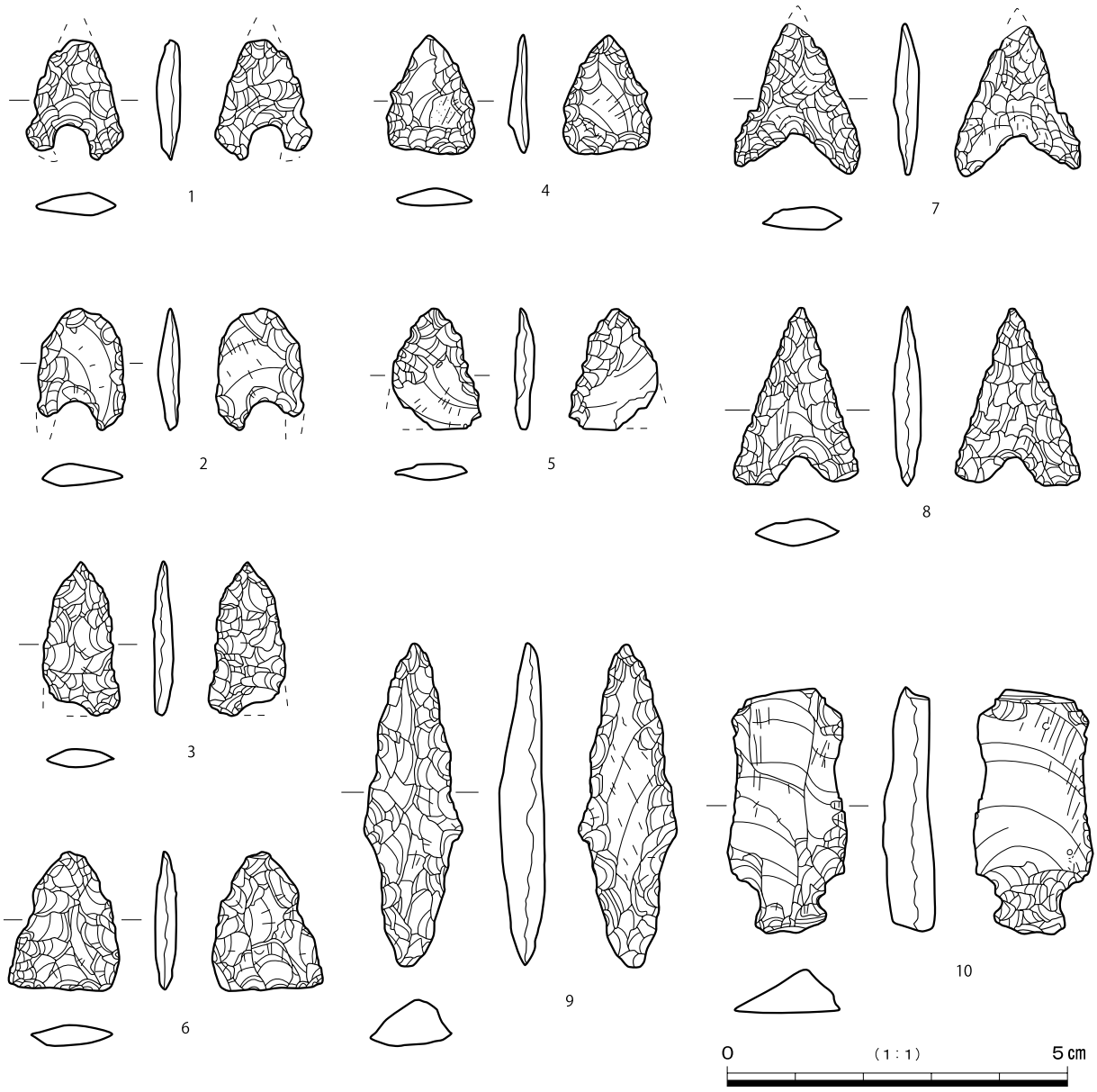
浅鉢Ｄ類（第77図10・11・図版44） 胴部から「く」の字形に屈折して内弯する長い頸部へと続き、口縁部は屈折して立ち上がる。10・11は胴部の屈折が明瞭で幾分突出気味になっており、口縁部はやや開き気味に屈折し波状口縁を呈している。10は口縁部が欠損し調整も不明であるが、11は内外面共にヘラミガキ調整されており、口縁部と肩部外面に１条の沈線が施されている。

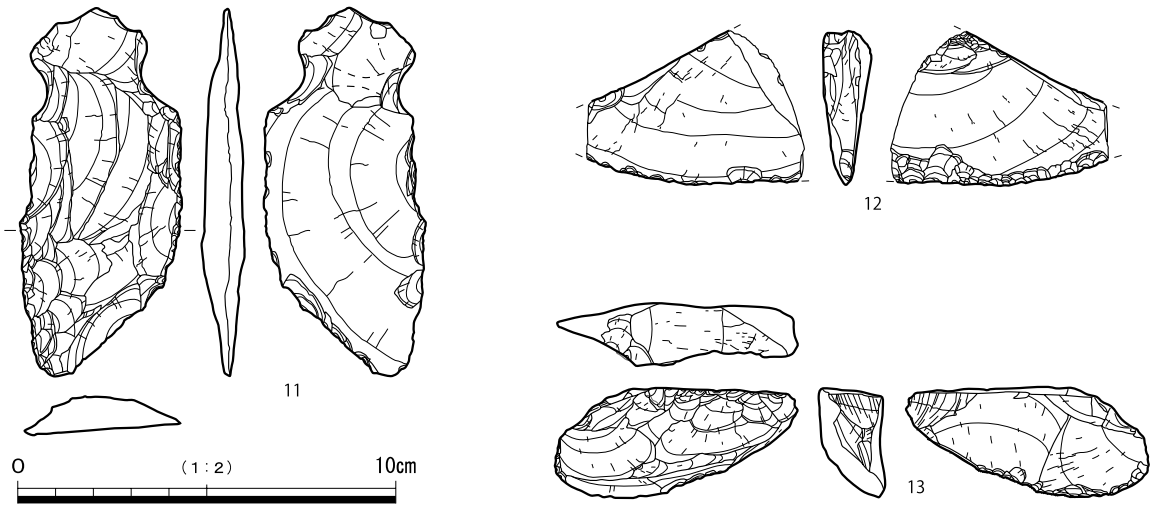
以上、上記した縄文土器は広田式Ⅰ～Ⅳ期（小池1982）のⅢ期にほぼ位置付けられ、深鉢・浅鉢共に口縁部は直立ないし外開き気味に屈折しており、沈線においては太目の沈線から細目の沈線へ退化する。その条数の減少と共に口縁幅が狭くなる傾向が垣間見られる。そしてⅢ期にみられた外開き口縁が更に開いて間延びした形状である。浅鉢５・14はⅢ期に相当し、その時期は晩期前葉と考えられるがS0016出土遺物の考察にもふれたように近年の調査による資料の増加により後期から晩期の編年研究が進み、広田式を後期末葉に位置付けているものもある。

出土石器（第78～80図・図版48～52） ＢⅠ地区出土の石器類を器別にまとめ図示した。残念ながら縄文時代の遺構から出土した石器はなく、包含層や新しい遺構の埋土から出土した多量の剥片、破片が広田式の鉢形土器と共に出土しているが、使用剥片や定形石器は確認することは出来なかった。石器全体の時期としては大半が縄文晩期広田式Ⅲ期のものと思われるが、ＢⅡ区を含めた調査区からは後期三万田式土器や、晩期夜臼式土器が出土しており、これらの時期の石器も含まれていると考えられる。また、石器に使用されている石材の統計はとっていないが圧倒的に漆黒色の佐賀県腰岳山黒曜石製が多く、次にサヌカイトを含む安山岩系のものと、あとは剥片や破片など、乳白色の大分県姫島産黒曜石も出土しているが、少量でＢⅠ地区での定形石器は見られない。

打製石鏃（第78図１～８・図版48） 今回は残存状態の良い８点を図示し、うち４点の腰岳産黒曜石（１・３・４・５）、残り４点が佐賀県多久産サヌカイトを含む安山岩系の石材を使用している。また、各石器の法量については表３に記している。

１は凹基鏃で先端と片方のカエシが一部欠損している。基部の抉りは深く、カエシの端部内斜めに





第78図 ＢⅠ地区遺構に伴わない出土遺物実測図②

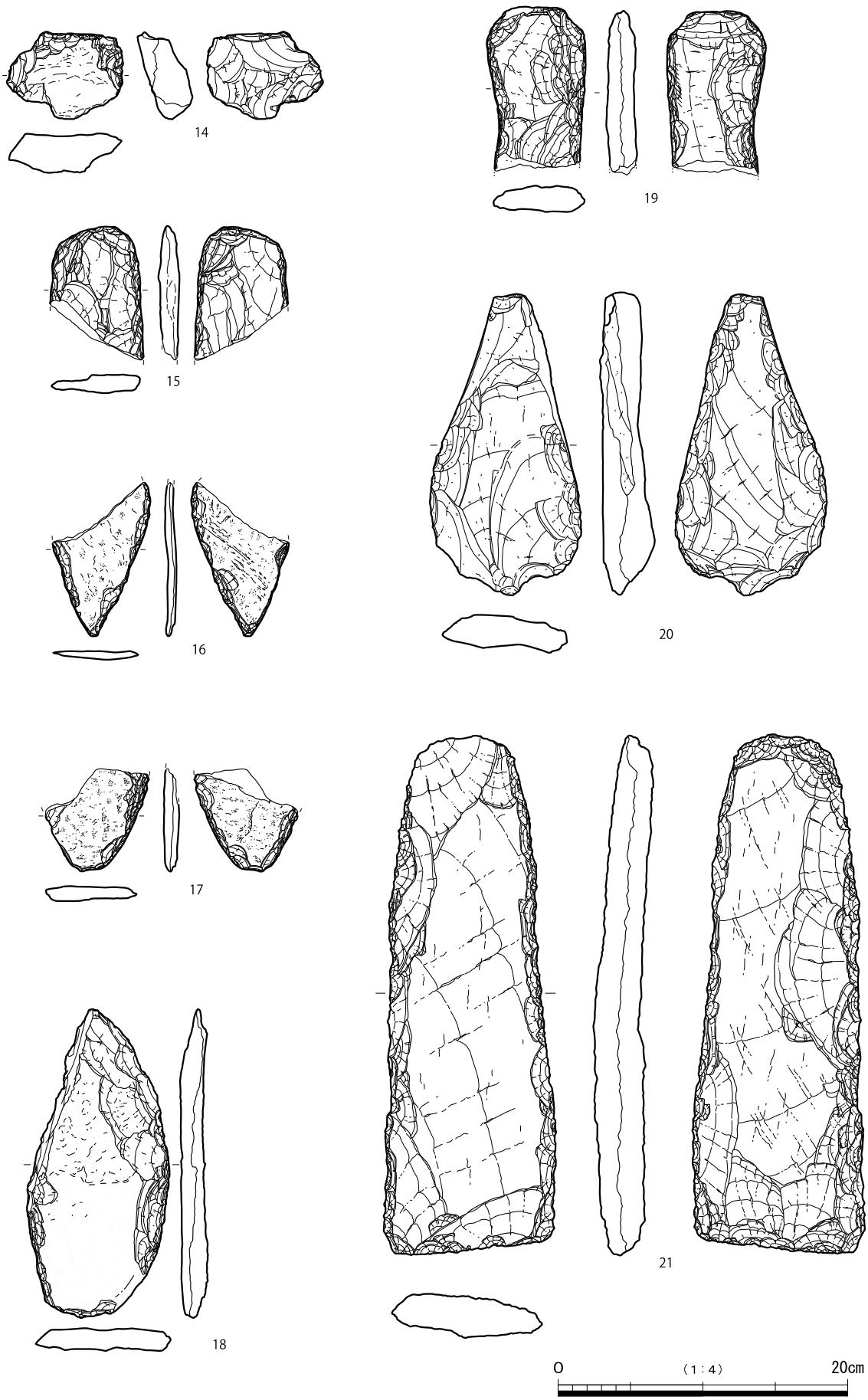
成形されている。石材は腰岳産黒曜石。 2 は五角形の凹基鏃で先端と片方のカエシが一部欠損している。基部の抉りは深く、表裏共に素材剥離面を残し調整が少なく、作りは粗雑である。石材は腰岳山産黒曜石。 3 は五角形の凹基鏃でカエシの一方が欠損している。先端は切り状に尖らせ基部の抉りは浅目で、カエシの端部はやや斜めに成形されている。石材はサヌカイト（多久産)。 4 はやや五角形の平基鏃で表裏共に素材剥離面を残し、薄い剥片素材の縁辺を少し加工調整し、整形してあり作りは粗雑である。石材は腰岳産黒曜石。 5 は未完成の石鏃で、表裏共に剥離面を残す。小型の削器として転用使用したと思われる。石材は腰岳産黒曜石。 6 は三角形の平基鏃で先端と片方のカエシが欠損している。調整は少なく粗雑である。石材は安山岩。 7 は三角形の凹基鏃で先端と縁辺の一部が欠損している。抉りは深目で作りも丁寧である。石材はサヌカイト（多久産)。8は三角形の凹基鏃でほぼ完形でカエシ端部は平坦に成形され、作りは丁寧である。石材は安山岩。

石槍（第78図 9 ・図版48） 9 は尖基鏃に含まれる可能性もある尖頭器状石器でほぼ完形。カエシの部分がやや張り出している。片面は一部分素材剥離面を残し、断面は三角形を呈している。作りはやや粗雑である。石材はサヌカイト（多久産)。

石匙・スクレイパー（第78図10～13・図版48-49） 10はつまみ形石器で、一端につまみ状の突起物がある小型のスクレイパーである。縦長剥片を利用しその剥片の両側に抉りを設けて折断している。表面の両縁部に一部細い剥離調整が施されている。表面に斜方向の使用痕が認められ、サイドスクレイパーとして用いられている。石材は腰岳産の黒曜石。11は縦型石匙で、横長剥片を利用し加工している。抉りはやや浅いが表裏共に滑らかに摩耗している。刃部は表面のみ両側縁部に調整を施している。石材は安山岩製である。12はスクレイパーで横長剥片を使用し縁辺調整のみで使用剥片的なものである。石材は多久産サヌカイト（安山岩系）でやや風化している。13は上面にほぼフラットな節理面を残して、石核を再利用したスクレイパーで、良質な多久産サヌカイト（安山岩系）のものである。船底形に剥離された石核の下端部に細い小剥離を施し転用している。

石核（第79図14・図版48） 片面がフラットでやや風化した茶褐色をした硅化木岩製で、不定形剥片採取の石核である。

扁平な打製石器（第79図15～21・図版49, 50） 扁平打製石斧でも各種あり、形態的には短冊形のもの15、大型で短冊形のもの21、楕円状形のもの18、刃が幅広で広がっていく幅広形のもの20、その他大型幅広形のもの小型の短冊形のもの等がある。今回は出土した中でも形の想定出来るもののみを図示した。15は基部側1/3のみ残存している片岩製で、表面・裏面共に横剥ぎの素材剥離面を大きく残し縁辺のみを調整されており、使用磨痕等はみられない。16は中央部1/4のみ残存しており、片岩製で表面・裏面共に自然面を残し、縁辺のみを調整している。17は刃部側1/4のみ残存している。片岩製で、表面・裏面共に自然面を大きく残し、縁辺のみを調整している。使用磨痕等はみられない。18は結晶片岩製で刃部側2/3を残存している。表面・裏面共に自然面を大きく残し表面のみ縁辺に調整を施している。刃部の縁辺部に摩耗は認められるが、使用時のものとは断定しがたい。19は片成岩製で基部側2/3を残存している。表面は鉾剥ぎの素材剥離面を一部残し、縁辺部は丁寧に調整されている。裏面は自然面を一部残し表面同様、縁辺部は丁寧に調整されている。使用磨痕は認められない。20は今山産の玄武岩で刃部側1/2を残存している。表面・裏面共に素材剥離面を残し、縁辺部に調整を施している。刃先は使用時の剥離とも考えられるが使用磨痕は認められない。21は結晶片岩製でほぼ完形と思われる。表面・裏面共に素材剥離面を残し、縁辺部に丁寧な調整を施している。使用磨痕は認められない。

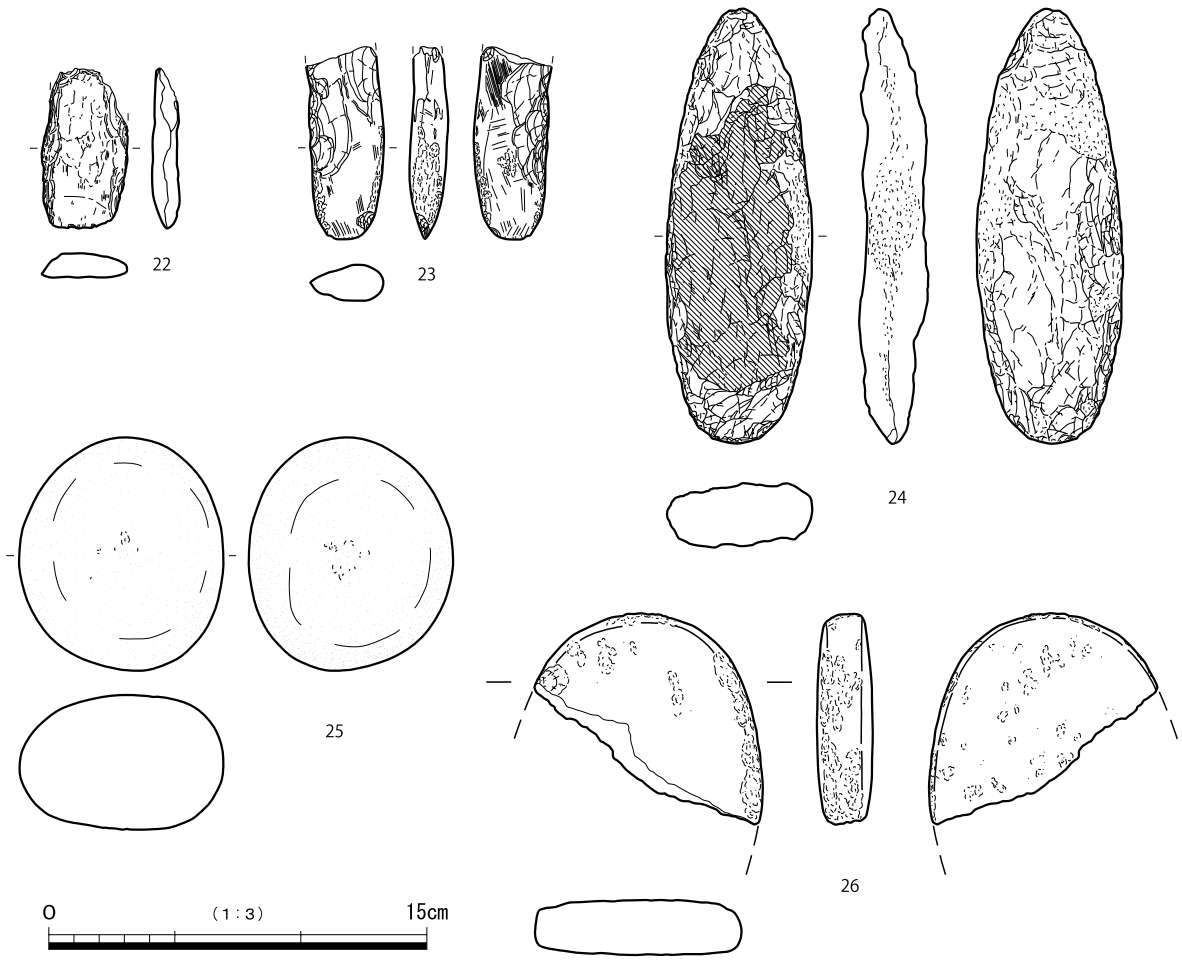


第79図 ＢⅠ地区遺構に伴わない出土遺物実測図③

磨製石斧（第80図22～24・図版50, 51） 扁平打製石斧の量にははるかに及ばないが、磨製石斧が大小各種出土し、形の分かる３点を図示した。22は緑色結晶片岩製の小型品で、研磨されていない部分も多い剥片の縁辺を調整し、仕上げに磨く。調整剥離が残存し刃部は直線刃で、両面より磨きを入れる両刃である。23は蛇紋岩製で、全体に研磨しているが、剥離凹部も多く残り、平面・側面共に片方に強く反っている。24は結晶片岩製で23と同様、平面が片方に強く反っている。丁寧な剥離により整形されているが、ほとんど研磨されず、未製品終わっている。これら（23・24）の２点は、片反り類（中間1997）に含まれる特徴的な石斧で、意図的に反り身形に作られ木をはつる手斧的着柄による工具、或いは刃部を柄と平行に着け斜めに上から打ち込む伐採具と考えられる。

磨石（第80図25・26・図版48） 25の磨石は河原石（花崗岩）の類で、表面と裏面中央部に敲打痕と周辺に磨痕が確認出来る。26は花崗岩製で全面が磨かれているが、表面と裏に敲打痕が見られ、側面にはより多くの敲打痕が見られる。

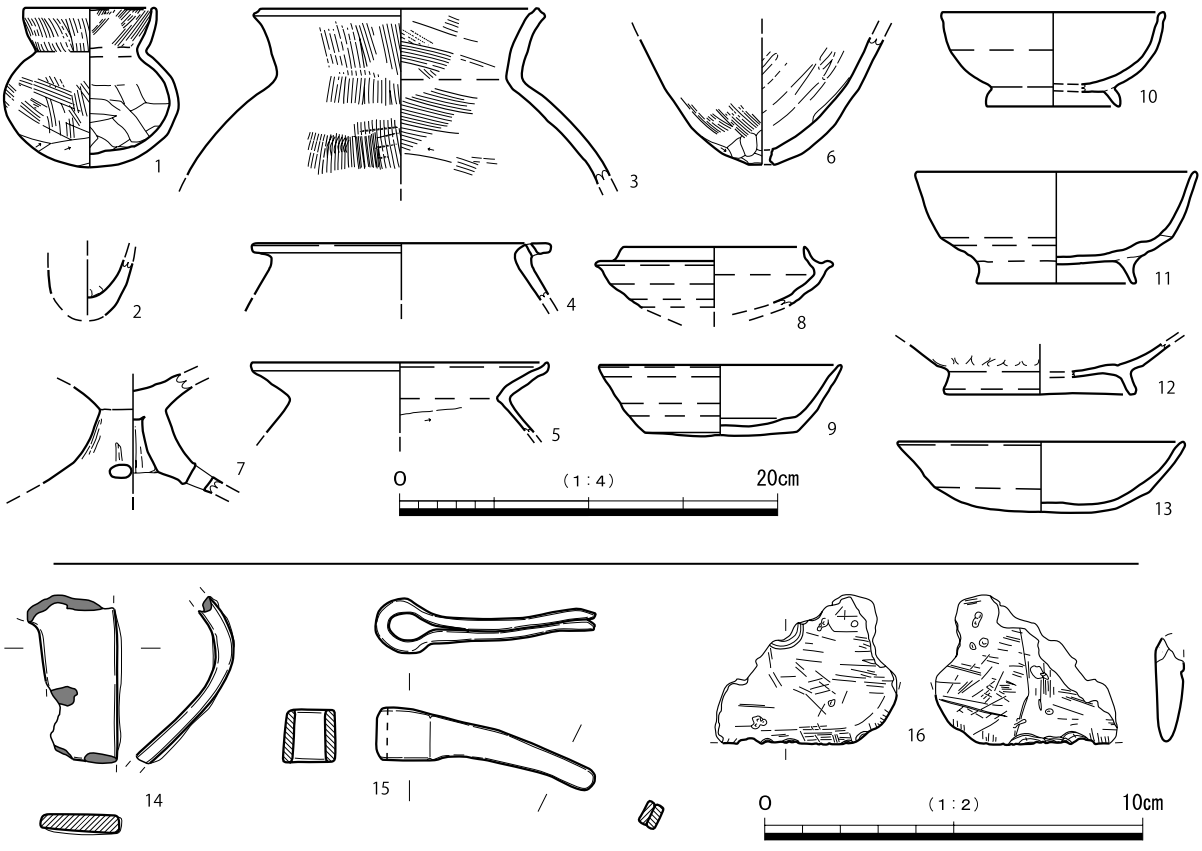
以上が、ＢＩ地区出土の遺構に伴わない遺物として図示した石器については、時期の判定は難しく、石鏃では（第78図７・８）７が縄文中期以前、８が早期の可能性がある。その他は、型式的にも年代幅が広く、中期以降から晩期に位置付けられる。しかし、扁平打製石斧や磨石等の石器類、出土している縄文土器の年代から大半が縄文時代後晩期のものと考えられる。



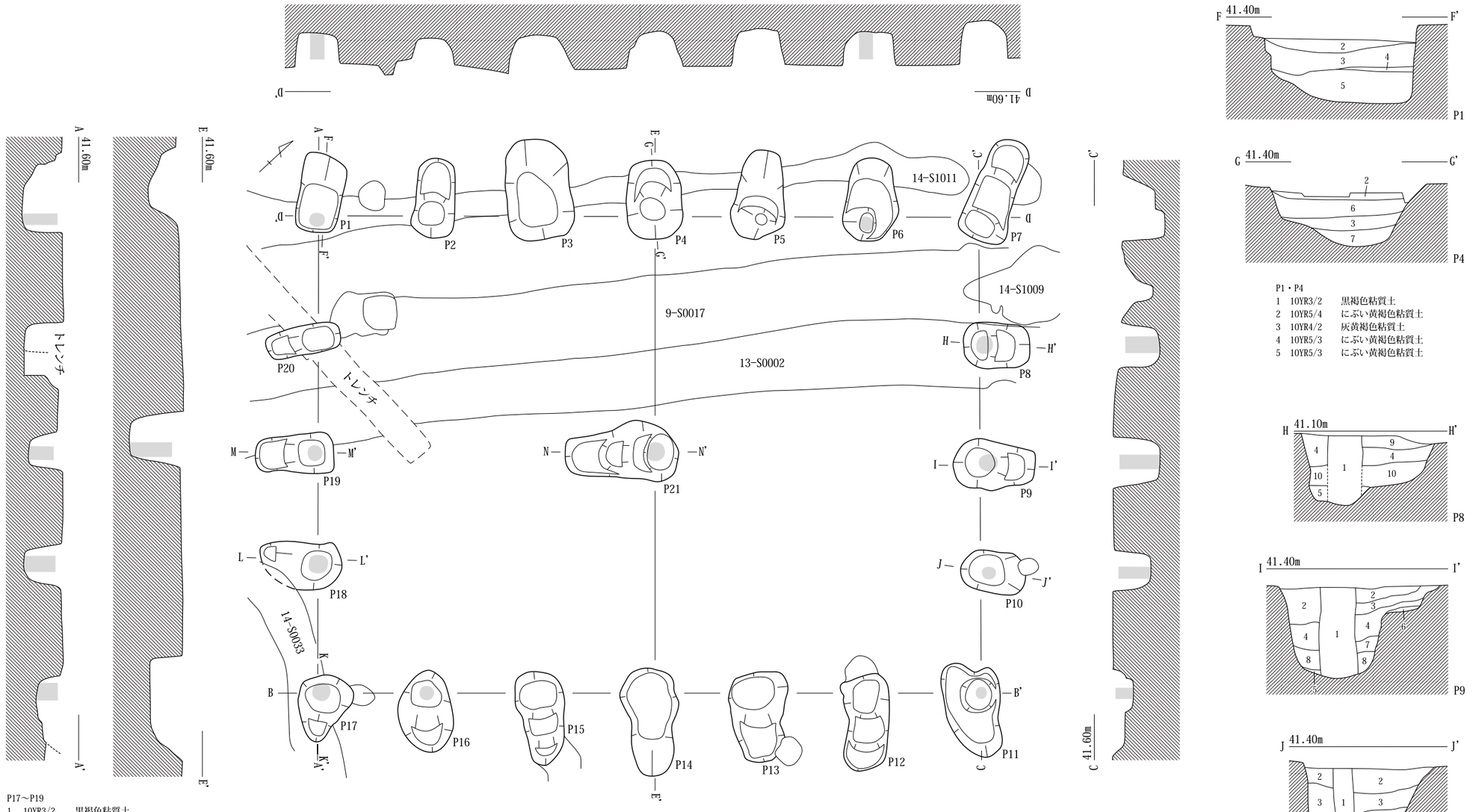
第80図 ＢＩ地区遺構に伴わない出土遺物実測図④

２　弥生～古墳時代・古代

土器・鉄器・石器（第81図）　１は小型丸底壺である。球形の体部と内弯した口縁部を有する。２は手づくね土器である。口縁部は欠損している。３は壺で、張りの強い体部から口縁部がくの字形に外反し、端部を上方に拡張させる。４は水平に鋭く屈曲した口縁部を呈する有蓋甕で、紐穴を有する。５は「く」の字状に鋭く屈曲した口縁部をもつ庄内系の甕で、口縁端部は上方へつまみあげる。６はやや尖り気味の丸底を呈した甑である。７は脚柱部が短い高杯脚部で、４方向の円孔を穿つ。８は須恵器の坏身である。受部は短く丸みをもち、口縁部は内傾しやや外反する。体部下半はヘラケズリを施している。古代の溝23-Ｓ0002に混入していたことから包含層として扱った。９は須恵器の坏身である。底部はヘラキリ後ナデ調整を施している。10は黒色土器の椀である。高い貼り付け高台を有する。摩滅により調整不明。11・12は土師器の椀で高い高台を有する。11は口縁端部に媒の付着が見られる。内面にヘラミガキを施す。13は土師器の杯である。内外面ナデを施す。14は鉄製の刀である。刃部の大半と、茎部先端を欠損する。関を境に、ほぼ直角に丸みを帯びつつ折れ曲がる。残存長4.4cm、刃部残存長８㎜、茎部残存長3.6cm、茎部最大幅2.0cm、厚さ４～５㎜である。茎部の断面は長方形であるが、刃側がやや薄い。目釘孔が、かろうじて一箇所確認できる。15は鉄製の不明製品である。以下では、袋部以外の部分を便宜的に刃部と表記して説明する。全長5.8cm、刃部長4.3cm、刃部幅0.6～1.2cm、袋部長1.5cm、袋部幅1.2～1.4cm、袋部外径1.4cm、袋部内径0.7cmである。刃部は２枚の彎曲する鉄板からなり、鍛接痕が明瞭にのこる。刃部の横断面は長方形であり、刃はほどこされていない。袋部は円筒状であり、刃部を構成する２枚の鉄板と連続する。16は石包丁である。刃部の一部のみ残存、他は欠損している。両面は顕著な磨痕と半損した紐孔が１箇所確認できる。刃部には使用痕と考えられる鋸状の痕跡がみられる。石材は凝灰岩（立岩産）である。



第81図 ＢⅠ地区遺構に伴わない出土遺物実測図⑤



P1・P4

1	10YR3/2	黒褐色粘質土
2	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土
3	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
4	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土
5	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土

P8～P10

1	10YR3/2	黒褐色粘質土
2	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土
3	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
4	10YR3/3	暗褐色粘質土
5	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土
6	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土
7	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土
8	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土
9	10YR5/6	黄褐色粘質土
10	10YR4/1	褐灰色粘質土

P17～P19

1	10YR3/2	黒褐色粘質土
2	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土
3	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
4	10YR5/2	灰黄褐色粘質土
5	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土
6	3と同じ	
7	2.5YR4/2	暗灰黄褐色粘質土
8	10YR4/4	褐色粘質土
9	10YR4/3	黄褐色粘質土
10	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土

P21

1	10YR3/2	黒褐色粘質土
2	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土
3	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
4	10YR5/3	暗褐色粘質土
5	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
6	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土
7	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト
8	10YR5/2	にぶい黄褐色シルト

0 1/40 1m

第90図 大型建物２[14-S1027] 平面・断面図

表２ ＢＩ地区 出土土器観察表（１）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第10図 1	22-S0016	口縁部			(3.10)			1㎜以上の長石と石英、1㎜以下の雲母を含む		内面:ヘラミガキ		縄P 2070
第10図 2	22-S0016	口縁部			(3.30)		外面:黒色	1㎜以上の長石と石英を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		縄P 2071
第10図 3	22-S0016	粗製深鉢 口縁部			(7.40)		内外面ともに	1㎜以上の長石と石英、金雲母		外面:ナデ 一部条痕		縄P 2069
第10図 4	22-S0016	深鉢 口縁部			(9.40)		内外面ともに	1ミリ前後の長石と石英、雲母を		外面:口縁部付近条痕 ナデ		縄P 2075
第10図 5	22-S0016	頸部～体部			(25.00)	(36.60)	内面:にぶい褐色	1～3㎜大の長石と石英、金雲母と1㎜以下の赤色酸化粒を含む		外面:ナデ、一部条痕 摩滅し不明瞭 摩滅し不明瞭	胴屈曲部沈線1条	縄P 2076
第10図 6	22-S0016	底部		(9.60)	(2.70)			1㎜以上の長石と石英、金雲母		外面:ナデ		縄P 2067
第12図 1	23-S0503	口縁部			(3.50)		内外面ともに	2㎜以下の石英、1㎜前後の長石、雲母を含む			4条のヘラ描き沈線	縄P0035
第12図 2	23-S0503	口縁部			(3.70)		外面:灰黄褐色	1㎜以下の長石と石英を含む		内面:ヘラミガキ		縄P0035
第17図 1	23-S0007	広口壺 頸部～体部			(20.10)	(27.90)		1㎜以下の長石と石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケの痕跡 摩滅し調整不明 内面:ハケの痕跡 摩滅し調整不明		P 0251
第17図 2	23-S0007	口縁～肩部	(16.00)		(6.20)			1㎜以下の長石と石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部磨滅し調整不明 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭	頸部刻目付突帯	P 0252
第17図 3	23-S0007	口縁～体部	(12.00)		(22.20)	(25.80)		1㎜以下の長石と石英、角閃石金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部下位ハケ後ヘラケズリ 内面:口縁部磨滅、体部ハケ後ナデ	外面黒斑	P 0253
第17図 4	23-S0007	体部～底部		5.40	(24.40)	(29.20)		1㎜以下の長石と石英、角閃石金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケを施すが磨滅し不明瞭、底部ナデ 内面:ハケ	外面黒斑	P 0254
第17図 5	23-S0007		(27.60)		39.30	(33.20)	内面:明赤褐色	1㎜前後の長石と石英、雲母を		外面:磨滅し調整不明瞭 内面:口縁部ハケ後ナデ、頸部ナデ、体部ハケ 底部ﾋ		P 0255
第17図 6	23-S0007	底部		7.10	(3.60)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:ハケの痕跡 摩滅し調整不明瞭 内面:クモの巣状ハケ	外面黒斑	P 0261
第17図 7	23-S0007	杯部	(25.60)		(5.00)		内外面ともに	1㎜前後の長石を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ		P 0256
第17図 8	23-S0007	脚柱部			(14.00)			1㎜以下の長石と石英を含む	良好	外面:杯部磨滅 脚部ヘラミガキ 内面:杯部磨滅 脚柱部絞り痕	スカシ	P 0258
第17図 9	23-S0007				(6.30)		内面:浅黄橙色	1㎜以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:タタキを施すが磨滅し 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 0259
第17図 10	23-S0007	器台	(14.40)		(15.00)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、角閃石	良好	外面:口縁部磨滅 脚部タタキ後ハケ 内面:口縁部ハケ、脚部ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 0260
第20図 1	23－S0505	高杯or鉢 脚柱部			(5.2)		内外面ともに 橙色	0.5～3mmの長石、石英を含む		外面:ハケ 内面:ナデ、ハケ		P 0322
第26図 1	28－S0005		(12.10)		(4.50)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、金雲母	良好	体部ヘラミガキ	外面黒斑	P 0379
第26図 2	28－S0005		16.40		7.80		内外面ともに	1～2㎜の長石含む	良好	外面:口縁部ナデ、体部～底部ヘラケズリ 内面:ハケ		P 0378
第26図 3	28－S0005		11.20				内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、底部ヘラケズリ後ナデ ヘラナデ、底部ナデ		P 0376

ＢＩ地区 出土土器観察表（２）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第*図 4	28－S0005		(20.80)		7.00			1mm以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:口縁部ヨコナデ、底部付近板ナデ 内面:ハケ・ナデ 摩滅し不明瞭	2次焼成	P 0377
第26図 5	28－S0005	台付鉢？ 脚部		13.80			内外面ともに	1mm前後の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む		外面:ハケ 内面:ハケ		P 0380
第28図 1	28－S0007	甕 口縁～体部	(17.30)		(22.50)	(19.10)	内外面ともに	1mm以下の長石と石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後体部下半ヘラケ		P 0388
第28図 2	28－S0007	脚柱部			(8.90)		内外面ともに	1mm以下の長石、石英を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:杯部ヘラミガキ 脚柱部磨滅し不明瞭		P 0389
第32図 1	22-S0007	直口壺 口縁～肩部	(12.60)		(4.50)		内外面ともに 灰黄褐色	1mm以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケを施すが磨滅し不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 0015
第32図 2	22-S0007	甕 口縁～体部	(21.00)		(12.50)	(23.40)	外面:灰黄褐色	1mm以下の長石、石英、金雲母	良好		外面黒斑	P 0014
第37図 1	22-S1502		(20.80)		(6.30)		外面:灰黄褐色	1mm以下の長石と金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ 摩滅し不明瞭 内面:口縁部指押さえ 体部ハケ・ナデ		P 0140
第37図 2	22-S1502	底部		(8.00)	(4.90)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英、角閃石	良好	外面:磨滅し調整不明		P 0143
第37図 3	22-S1502	甕 底部		(3.80)	(3.30)		内外面ともに 灰黄褐色	1mm以下の長石と角閃石を含む	良好	外面:ナデ 内面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭		P 0142
第37図 4	22-S1502	器台		(16.00)	(10.50)			1mm以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:ハケを施すが磨滅し不明瞭 内面:脚柱ヘラケズリ 裾部ハケ		P 0141
第39図 1	22-S1503	脚部		(9.60)	(7.45)		内外面ともに	1mm以下の長石と金雲母、赤色酸化粒を含む		外面:杯部ハケの痕跡 脚部磨滅し不明瞭 内面:杯部ハケ、脚柱部ケズリ、磨滅し不明瞭		P 0174
第41図 1	23-S0006	甕 口縁～体部	(12.80)		(4.10)		内外面ともに 黄橙色	1mm以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	内面:口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、体部ハケ		P 0247
第41図 2	23-S0006	甕 口縁～体部	(16.40)		(13.70)	(17.00)	内面:灰白色	1mm以下の長石と金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部タタキの痕跡 摩滅し不明瞭 内面:体部ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 0246
第45図 1	22-S1501	甕 口縁～体部	(17.80)		(8.20)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部タタキ後ハケ 内面:ハケ		P 0209
第45図 2	22-S1501	甕 口縁～体部	(22.00)		(7.45)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ハケ		P 0156
第45図 3	22-S1501	甕 口縁部	(27.00)		(3.50)		内外面ともに 灰黄褐色	1mm以下の長石と石英、金雲母角閃石を含む	良好	内面:ハケ		P 0155
第45図 4	22-S1501	底部		(7.40)	(2.70)		内面:暗灰黄色	1mm以下の長石と石英、角閃石	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明	2次焼成	P 0124
第45図 5	22-S1501	底部		(5.20)	(3.80)		外面:暗灰黄色	1mm以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:タタキの痕跡 内面:摩滅し調整不明		P 0157
第45図 6	22-S1501	底部		(8.10)	(4.00)			1mm以下の長石と石英、金雲母角閃石を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:板ナデの痕跡 摩滅し不明瞭	2次焼成	P 0154
第45図 7	22-S1501	底部		4.00	(4.70)		外面:明黄褐色	1mm以下の長石と石英、角閃石	良好	外面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭 内面:板ナデ・ハケ		P 0158
第45図 8	22-S1501	底部		(5.00)	(9.10)		内外面ともに	1～2mm以下の長石と石英、金雲母、角閃石を含む	良好	外面:体部ハケ後ナデ 底部仝		P 0127
第45図 9	22-S1501		(20.60)		(8.90)			1mm以下の金雲母を多くと、長石石英を含む	良好	外面:口縁～体部ハケ、中位～底部ヘラケズリ		P 0126
第45図 10	22-S1501	器台		(13.60)	(13.10)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ 摩滅し不明瞭 内面:脚部ナデ・指押さえ 裾部ハケ		P 0159

ＢＩ地区 出土土器観察表（３）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第45図 11	22-S1501	杯部	(24.00)		(5.70)		内外面ともに	1mm以下の長石、石英、角閃石	良好	外面:口縁部ヨコナデ後ハケ 杯部ハケ後ケズリか	口縁端部黒斑	P 0128
第47図 1	22-S1514	土製勾玉			残存長 (4.80)	厚 2.00	内外面ともに 灰黄褐色	1mm以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:ナデ		P 0055
第47図 2	22-S1514	さじ状 異形土器			残存長 (4.60)		外面:黄灰色	1mm以下の長石と金雲母を含む	良好	外面:ナデ		P 0056
第48図 5	22-S1514	甕 口縁～体部	(16.20)		(3.50)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケを施すが磨滅 内面:口縁部ヨコナデ、肩部ナデ・指押さえ		P 0039
第48図 6	22-S1514	甕 口縁～体部	(15.40)		(4.00)		内外面ともに	1mm以下の長石、石英、金雲母 赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後、体部ハケ 内面:口縁部ハケ 肩部指押さえ		P 0038
第48図 7	22-S1514	甕 口縁～体部	(15.00)		(5.80)	(15.80)	内外面ともに	1mm以上の長石と石英、1mm以下の雲母を含む	良好	頸部ハケ、体部ナデ		P 0035
第48図 8	22-S1514	甕 口縁～体部	(15.40)		(5.00)		内面:浅黄橙色	1mm以下の長石と金雲母を含む	良好	ハケ、体部タタキ 内面:口縁～頸部ヨコナデ 体部ヘラケズリ		P 0034
第48図 9	22-S1514	甕 口縁～体部	(17.80)		(7.50)		外面:灰黄褐色	1mm以下の長石と石英、金雲母	良好			P 0040
第48図 10	22-S1514	甕 口縁～体部	(13.60)		(8.30)	(14.30)	内外面ともに	1mm以下の長石と金雲母を含む	良好			P 0036
第48図 11	22-S1514	甕 口縁～体部	(15.60)		(8.10)	(16.30)	内外面ともに 褐灰色	1mm以下の長石と石英、角閃石を含む含む	良好	体部ヘラナデ・ハケ		P 0036
第48図 12	22-S1514	甕or鉢 口縁部	(19.80)		(7.40)		内外面ともに	1mm以下の長石と金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部ハケ 一部ナデ		P 0030
第48図 13	22-S1514	甕	(13.30)		(19.20)	(14.30)	内外面ともに	3mm以下の長石を含む		外面:口縁部タタキ後ハケ 体部タタキ後ヘラケズリ・ハケ 内面:口縁部磨滅、体部ハケ	外面黒斑・媒付着	P 0196
第48図 14	22-S1514	小型直口壺 口縁～体部	(14.60)		(11.00)	(18.40)	内外面ともに	1mm以上の長石、石英、赤色酸化粒と1mm以下の金雲母を含む	良好	内面:口縁部ヨコナデ・ハケ 体部ナデ・ハケ		P 0029
第48図 15	22-S1514	底部		5.00	(2.60)		内外面ともに	1～2mm以下の長石と石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:底部周縁タタキの痕跡 底部Ｅ 内面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭		P 0032
第48図 16	22-S1514	底部		4.00	(3.30)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英、金雲母	良好	底部Ｅ 内面:ハケ		P 0060
第48図 17	22-S1514	底部		(6.60)	(2.90)		外面:灰黄褐色	1mm以下の長石と石英、角閃石		外面:磨滅し調整不明		P 0043
第48図 18	22-S1514	底部		(10.80)	(3.80)		内外面ともに 浅黄色	1mm以下の長石、石英、角閃石	良好	外面:ハケ 内面:ハケ		P 0195
第48図 19	22-S1514	底部		(6.20)	(1.40)			1mm以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:ハケ 内面:磨滅し不明瞭 ナデか		P 0058
第48図 20	22-S1514	底部		(5.20)	(2.50)			1mm以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:ナデ 内面:ハケ		P 0059
第48図 21	22-S1514	底部		3.30	(3.30)			2mm以下の長石と石英を含む	良好	外面:タタキ 内面:ハケ		P 0057
第48図 22	22-S1514	底部		(2.80)	(5.20)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英、金雲母 赤色酸化粒を含む	良好	外面:ナデ 内面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭	外面黒斑	P 0041
第48図 23	22-S1514	底部			(5.50)		内外面ともに 暗灰色	1mm以上の長石と石英、1mm以下の金雲母を含む	良好	外面:体部ハケ 底部Ｅ 底部Ｅ	内外面媒付着	P 0042
第48図 24	22-S1514			1.30	7.80		内外面ともに	1～2mm以下の長石と石英を含	良好	外面:口縁部指圧痕、体部上位ナデ、下位ケズリ	外面黒斑	P 0033

ＢＩ地区 出土土器観察表（４）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第48図 25	22-S1514		(11.20)	3.00	4.25		内外面ともに	1㎜以下の長石、石英、金雲母	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部周縁ハケ		P 0044
第48図 26	22-S1514		(21.60)		(7.00)			1㎜以下の長石、石英、金雲母	良好	外面:口縁部ハケ 体部ナデ・ケズリ 内面:ハケ・ナデ		P 0046
第48図 27	22-S1514				7.80		内外面ともに	1㎜以下の長石、石英、角閃石 金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部磨滅、体部ハケ後ヘラナデ 内面:口縁部ハケ 体部磨滅し不明瞭	外面黒斑	P 0045
第48図 28	22-S1514					13.40	内外面ともに	1～2㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部タタキ後ヨコナデ、体部タタキ、底部付近タタキ後ハケ 内面:ハケ		P 0053
第48図 29	22-S1514				(3.00)			1㎜以下の長石、石英、金雲母	良好	外面:ナデ	外面黒斑・媒付着	P 0054
第48図 30	22-S1514	甕 口縁～頸部	(53.20)		(12.30)		内外面ともに	1～2㎜以下の長石、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ後ハケ 頸部ハケ 内面:ハケ	頸部貼付突帯	P 0197
第49図 31	22-S1514	口縁～脚柱部	(22.10)		(16.30)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、角閃石 赤色酸化粒を含む	良好	外面:杯部～脚部ヘラミガキ 内面:杯部ヘラミガキ 脚柱部絞り痕	内面口縁部媒付着	P 0048
第49図 32	22-S1514	高杯 脚柱部			(7.30)		内外面ともに	1㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	内面:脚柱部ケズリ後ナデ 裾部ハケ	上下一組で2方スカシ 外面黒斑	P 0198
第49図 33	22-S1514	高杯 脚柱部			(11.10)		外面:黒色 内面:橙色	1㎜以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:ハケ後ヘラナデ 内面:脚柱部ケズリ後ナデ 裾部ハケ		P 0049
第49図 34	22-S1514	高杯 脚部		(14.00)	(14.70)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、角閃石	良好	外面:ハケを施すが磨滅し不明瞭 内面:脚柱部ヘラナデ 裾部ハケ		P 0050
第49図 35	22-S1514	台付鉢 脚部		(12.10)	(4.00)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、金雲母 赤色酸化粒を含む	良好	内面:ハケ		P 0047
第49図 36	22-S1514	脚台 脚部		13.80	(6.80)		内外面ともに にぶい褐色	1～2㎜以下の長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好			P 0052
第49図 37	22-S1514	器台 口縁部	(10.40)		(7.30)		内外面ともに 灰白色	1㎜以下の長石と石英を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 0051
第53図 1	28-S0009	短頸壺 口縁～体部	(12.40)		(6.10)		内外面ともに	4㎜以下の長石・石英、微量の	良好	体部ハケ	内外面黒斑	P 0421
第53図 2	28-S0009	体部～底部		4.80	(14.50)	(14.80)	内外面ともに	1～2㎜以下の長石と石英を含	良好	外面:体部ハケを施すが磨滅し不明瞭、底部ナデ 内面:磨滅し不明瞭 底部ﾋﾞ		P 0441
第53図 3	28-S0009		8.40	2.90	10.90	11.90		1㎜以下の長石と石英、角閃石	良好	外面:口縁部ヘラミガキ、体部ハケ後ミガキ、底部ミガキ・ナデ 内面:ハケ	頸部工具痕	P 0439
第53図 4	28-S0009	口縁～体部	(16.50)		(9.70)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケを施すが不明瞭 ナデ、体部ハケ	頸部貼付突帯 外面黒斑	P 0433
第53図 5	28-S0009	口縁～体部	(17.80)		(6.70)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、角閃石	良好	肩部ハケ 内面:ハケ	頸部刻目付貼付突帯	P 0425
第53図 6	28-S0009	甕 口縁～体部	(17.40)		(7.50)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、金雲母	良好	内面:口縁部・体部ハケ 頸部ナデ		P 0412
第53図 7	28-S0009	甕 口縁～体部	(18.40)		(15.70)	(20.00)	内外面ともに にぶい黄褐色	1㎜前後の長石と石英、雲母を	良好	外面:タタキ後ハケ		P 0411
第53図 8	28-S0009	甕 口縁～体部			(8.60)	(12.80)	内外面ともに 灰黄褐色	1㎜以上の長石と石英を含む	良好	外面:ハケ	内外面媒付着	P 0416
第53図 9	28-S0009	甕	(16.30)	5.30	22.30	(18.00)	内外面ともに	1～2㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部タタキ後ハケ 内面:口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ、底部付近指圧痕		P 0409

ＢＩ地区 出土土器観察表（５）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第53図 10	28-S0009	甕 口縁～体部	(16.30)		(10.20)	(17.20)	内外面ともに 黄橙色	1mm以上の長石、石英、赤色酸化粒と、1mm以下の雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部タタキ後ハケ		P 0410
第53図 11	28-S0009	甕	(16.00)		(19.00)	(15.00)	外面:灰黄褐色 内面:暗灰色	1～2mm以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後一部ナデ ハケ後下位ナデ		P 0406
第53図 12	28-S0009	甕 体部～底部		5.80	(14.90)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:タタキ後ハケ 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 0413
第53図 13	28-S0009	甕 体部～底部		(9.40)	(13.80)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英を含む	良好	外面:タタキ後ハケ、一部ヘラケズリ、底部タタキ 内面:ハケ後ナデ、一部ヘラケズリ		P 0432
第53図 14	28-S0009	甕 口縁～体部	(19.20)		(11.50)		内外面ともに	1mm以下の長石と角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ 内面:口縁～肩部ハケ、体部ヘラケズリか		P 0431
第53図 15	28-S0009	甕 口縁～体部	(12.40)		(19.60)	(22.00)	内外面ともに	3mm以下の長石・石英と、1mm以	良好	外面:口縁部タタキ後ナデ、体部タタキ後ハケ・ナデ 指頭圧痕顕著		P 0405
第54図 16	28-S0009	甕 口縁～体部	23.60		(26.80)	(25.50)	外面:にぶい赤橙色 内面:浅黄橙色	1～2mm以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケを施すが磨滅し不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭	2次焼成 外面黒斑	P 0417
第54図 17	28-S0009	甕 体部～底部		5.40	(9.10)					外面:磨滅・剥離し調整不明 内面:ハケ後ナデ	2次焼成	
第54図 18	28-S0009	甕 口縁～肩部	(28.40)		(5.80)		内外面ともに	1mm以上の長石、石英、雲母と1mm以下の赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明瞭ハケ後ナデ	頸部貼付突帯	P 0427
第54図 19	28-S0009	甕 口縁～体部	(32.40)		(13.30)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英、金雲母		外面:ハケ 内面:ハケ	頸部貼付突帯 外面黒斑	P 0402
第54図 20	28-S0009		(28.20)		(8.60)		外面:灰色	1mm前後の長石と石英、角閃石を含む含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面:口縁部磨滅し不明		P 0422
第54図 21	28-S0009	口縁～体部	(28.60)		(13.00)			1mm以下の長石、石英、角閃石	良好	外面:ハケ		P 0451
第54図 22	28-S0009		15.00	3.00	6.60		外面:灰白色	1mm以下の長石と石英、角閃石	良好	外面:口縁部ハケ、体部ナデ・指押さえ、底部ナデ 摩滅し不明瞭		P 0424
第54図 23	28-S0009		(11.40)		(9.50)		内面:橙色	1～2mm以下の長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ・ヘラケズリ 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭	内外面丹塗りか？	P 0426
第54図 24	28-S0009		(17.60)				内面:にぶい褐色	1～2mm以下の長石と石英、1mm以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部中位タタキ後ハケ、体部下ケズリ		P 0414
第54図 25	28-S0009	口縁～体部	(20.60)		(8.70)			2mm以下の長石・石英を多くと金雲母を微量に含む	良好	外面:口縁部タタキ後ナデ、頸部ハケ、体部タタキ 内面:口縁部ハケ、頸部ヨコナデ、体部丁寧なナデ		449
第54図 26	28-S0009	器台 受部～脚部	15.30		(13.70)		内面:浅黄橙色	1～2mm以下の長石、石英、金雲母、角閃石を含む	良好	外面:指押さえ後ハケ 内面:口縁部ハケ、脚部ハケ・ナデ・指押さえ	外面黒斑	P 0404
第54図 27	28-S0009	器台 受部～脚部	(17.40)		(11.40)		内外面ともに	1mm以下の長石と石英を含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ後一部ナデ		P 0423
第54図 28	28-S0009	器台 受部～脚部	(18.80)		(13.20)		内外面ともに にぶい黄色	1mm以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:ハケ		P 0442
第54図 29	28-S0009	器台 脚部		16.40	(16.30)		内外面ともに	1～2mm以下の長石・石英、1mm以下の金雲母を含む	良好	外面:ハケ 内面:脚柱部ナデ 裾部ハケ・板ナデ	外面黒斑	P 0443
第54図 30	28-S0009	器台	18.00	20.00	21.30		内外面ともに	1mm以下の長石、石英、金雲母	良好	外面:ハケ 内面:ハケ後一部ナデ	外面黒斑	P 0419
第55図 31	28-S0009		台径 6.10		(9.60)		内外面ともに	1mm以下の長石、石英、金雲母	良好	外面:タタキ後ナデ 摩滅し不明瞭 内面:ナデ・ハケ	外面黒斑	P 0403
第55図 32	28-S0009			(13.10)	(12.80)		内外面ともに にぶい黄褐色	1mm以下の長石、石英、金雲母		外面:タタキ後ナデ 摩滅し不明瞭		P 0440

ＢＩ地区 出土土器観察表（６）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第55図 33	28-S0009		24.20	13.60	18.30		内外面ともに	1㎜以下の長石、赤色酸化粒を	良好	外面:口縁部ハケ後暗紋状のミガキ、杯部ハケ後ミガキ、脚部ミガキ 内面:杯部磨滅、脚柱部絞り痕、裾部磨滅	3方向スカシ	P 0494 P 0418
第55図 34	28-S0009	杯部	(30.00)		(8.10)		内外面ともに	1㎜以下の長石、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ		P 0429
第55図 35	28-S0009	杯部	28.80		(7.60)		内外面ともに	1～3㎜以下の長石、石英と1㎜以下の角閃石、赤色酸化粒を含	良好	外面:磨滅・剥離し調整不明 内面:磨滅・剥離し調整不明		P 0407
第55図 36	28-S0009	杯部	(37.00)				内外面ともに	1～2㎜以下の赤色酸化粒を多くと、1㎜以下の長石を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 0437
第55図 37	28-S0009	杯部	(35.00)		(4.60)		内外面ともに	1～2㎜以下の長石と赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明瞭		P 0436
第55図 38	28-S0009	杯部	(23.80)		(7.90)		外面:浅黄橙色 内面:灰白色	1～2㎜以下の長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケを施すが磨滅し不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭	内外面黒斑	P 0434
第55図 39	28-S0009	杯部	(32.40)		(5.90)		外面:にぶい黄褐色	1㎜前後の長石・石英を多く、雲母を少量含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ		P 0415
第55図 40	28-S0009	杯部～脚部		17.00	(21.05)		内外面ともに	1～2㎜以下の赤色酸化粒を多くと、1㎜以下の長石を含む	良好	外面:杯部ハケ後ミガキ、脚部ハケ後ミガキ、磨滅 内面:杯部磨滅、脚柱部絞り痕、裾部ハケ	内外面裾部黒斑 3方向スカシ	P 0438
第55図 41	28-S0009	脚部		(16.00)	(15.20)		内外面ともに	1㎜以下の長石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:脚柱部絞り痕 裾部ハケ	内外面裾部黒斑 3方向スカシ	P 0428
第55図 42	28-S0009	脚部			(5.00)		内外面ともに 灰白色	1㎜以下の長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	内面:ハケ		P 0435
第55図 43	28-S0009		(31.40)	17.00	24.00		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英、角閃石	良好	外面:杯部ハケを施すが磨滅 脚柱部ハケ後ヘラミガキ、裾部磨滅 内面:杯部磨滅、脚柱部ナデ 裾部ハケ	3方向スカシ	P 0430
第65図 1	22-S0001	皿	9.60		1.40		内外面ともに	1㎜前後の長石、石英を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ		P 0009
第65図 2	22-S0001	口縁部	(15.00)		(4.30)		内外面ともに 灰白色	1㎜前後の長石を含む	やや不良	外面:ヨコナデ 摩滅し不明瞭 摩滅し不明瞭		P 0008
第65図 3	22-S0004	須恵器 杯		高台径 (9.80)	(2.70)		内外面ともに 灰白色	1㎜前後の長石を少量含む	良好	外面:ナデ		P 0002
第66図 1	23-S0002	須恵器 蓋			(1.50)		内外面ともに 灰色	1㎜以下の長石を含む	良好	外面:ナデ	宝珠つまみ	P 0100
第66図 2	23-S0002	皿	(9.00)	(6.01	(1.20)		内外面ともに	4㎜以下の長石と、1㎜以下の石英、雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 底部回転糸きり 内面:ヨコナデ・ナデ		P 0177
第66図 3	23-S0002	皿	(10.40)	(6.80)	(1.70)		内外面ともに 灰白色	1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 底部ヘラ切り 内面:ヨコナデ・ナデ		P 0103
第66図 4	23-S0002	皿	(10.80)	(7.10)	1.90			1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 底部𠮟 内面:ヨコナデ・ナデ		P 0228
第66図 5	23-S0002	皿	(11.00)	(7.30)	2.15		内外面ともに 灰白色	1㎜以下の長石と石英を含む	良好	外面:ヨコナデ 底部板状の痕跡 内面:底部ナデ	燈明皿か 内面媒付着	P 0178
第66図 6	23-S0002	杯	(11.20)		2.40		内外面ともに 灰白色	3㎜以下の長石と2㎜以下の石英を含む	良好	外面:ナデ 底部回転ヘラ切り	内面黒斑・媒付着	P 0179
第66図 7	23-S0002	須恵器 皿	(14.00)		1.90		内外面ともに 灰色	1㎜前後の長石、石英、金雲母	良好	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ		P 0099
第66図 8	23-S0002	皿	11.20	7.40	2.60		内外面ともに にぶい黄色	1㎜以下の石英と金雲母を含む	良好	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ		P 0226

ＢＩ地区 出土土器観察表（７）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第66図 9	23-S0002	杯	(12.20)	(8.20)	3.90		内外面ともに	1mm以下の石英と金雲母を含む	良好	外面:回転ナデ 底部板状の痕跡 内面:回転ナデ		P 0227
第66図 10	23-S0002	杯	(12.30)	(6.80)	3.35		内外面ともに 明黄褐色	1mm以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:回転ナデ 高台削り出し 内面:回転ナデ 底部Ｅ		P 0230
第66図 11	23-S0002		(14.00)		(3.50)		内外面ともに	1mm以上の石英と、1mm以下の長石、雲母、赤色酸化粒を含む		外面:ヨコナデ		P 0233
第66図 12	23-S0002	須恵器 杯身	13.60	高台径 8.80	4.00		内外面ともに 灰色	1mm以下の長石を含む	良好	外面:ヨコナデ 底部ヘラ切り		P 0176
第66図 13	22-S0002	鉢or椀		高台径 (7.80)	(2.50)		内外面ともに	1mm以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヨコナデ 底部Ｅ		P 0229
第66図 14	23-S0002	須恵器 杯身		高台径 (9.60)	(1.70)		内外面ともに 灰色	1mm以上の長石、石英と1mm以	良好	外面:ナデ		P 0102
第66図 15	23-S0002	杯		高台径 (7.60)	(2.30)		内外面ともに	2mm以下の赤色酸化粒と、1mm以下の長石、金雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ		P 0104
第66図 16	23-S0002			高台径 (8.80)	(2.20)		内外面ともに 灰白色	1mm前後の長石と金雲母を含む	良好	外面:ナデ		P 0105
第66図 17	23-S0002			高台径 (8.00)	(2.10)		内外面ともに	1mm前後の石英、金雲母を含む	良好	外面:ナデ		P 0231
第66図 18	23-S0002			高台径 (8.60)	(3.80)		内外面ともに	1mm以下の金雲母と、1mm以上の長石を含む	良好	外面:ヨコナデ		P 0180
第66図 19	23-S0002			高台径 (8.80)	(3.20)		外面:浅黄色 内面:黒色	1mm前後の長石を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヘラミガキ		P 0232
第66図 20	23-S0002			高台径 (9.40)	(2.90)		内外面共に 淡黄褐色	1mm以下の長石と金雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヘラミガキ	内面黒斑	P 0181
第66図 21	23-S0002	陶器	(24.00)	高台径 (13.30)	12.00		内外面ともに 黄灰色	1mm前後の長石と石英、角閃石		摩滅し不明瞭 摩滅し不明瞭		P 0107
第66図 22	23-S0002	須恵器		高台径 (9.60)	(2.60)		内外面ともに 灰色	1mm前後の長石と金雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 底部ヘラ切り		P 0101
第66図 23	23-S0002			高台径 (9.00)	(2.50)		内外面ともに	2mm以下の赤色酸化粒と、1mm以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ナデ		P 0182
第66図 24	23-S0002	青磁		高台径 (6.20)	(3.70)		釉:オリーブ灰色 胎:灰白色	顕著な砂粒含まない	良好	外面:ナデ	龍泉窯系	P 0245
第66図 25	23-S0002	瓦質陶器 底部		(15.60)	(1.60)		外面:暗灰色 内面:黒色	1mm前後の長石と石英、雲母を		外面:ナデ 内面:指圧痕		P 0106
第66図 26	23-S0002	平瓦			(1.90)		内外面ともに	2～4mm前後の砂粒を含む		外面:格子目タタキ 摩滅し不明瞭 内面:磨滅し不明瞭		P 0098
第68図 1	23-S0010	Ⅲ	(10.00)	(7.20)	1.20		内外面ともに 灰白色	5mm以下の長石と、2mm以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:ナデ	粘土巻き上げ痕	P 0275
第68図 2	23-S0010	Ⅲ	(16.70)	(12.30)	1.50		内外面ともに	1mm以下の雲母、赤色酸化粒を	良好	外面:ヨコナデ 底部ナデ		P 0274
第68図 3	23-S0010		(15.10)		4.20		外面:浅黄橙色 内面:灰白色	1mm以下の長石と赤色酸化粒、		外面:ヨコナデ 内面:磨滅し不明瞭	口縁端部煤付着	P 0276
第68図 4	23－S0011		(15.00)				内外面ともに 灰白色	1mm前後の長石を含む		外面:磨滅し調整不明		P 0283
第68図 5	23-S0010	杯			(2.80)		外面:浅黄橙色 内面:黒色	2mm以下の長石、石英と1mm以下の雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ		P 0278

ＢＩ地区 出土土器観察表（８）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第68図 6	23-S0010			高台径 (7.80)	(3.30)		外面:にぶい黄褐色 内面:灰白色	2㎜以下の石英と、1㎜以下の長石と金雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヘラミガキ		P 0277
第68図 7	23ー S0011			高台径 (8.60)	(2.30)		内外面ともに 灰白色	1㎜前後の長石と石英を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヘラミガキ	内面媒付着	P 0282
第73図 1	22P0522	須恵器 杯		高台径 (8.00)	(2.00)		内外面ともに 灰白色	1㎜前後の長石を含む	良好	外面:ナデ 内面:ヘラミガキ		P 0216
第77図 1	包含層	口縁部			(2.10)			1㎜以下の長石と石英、雲母を		内面:ヘラミガキ		P 2074
第77図 2	包含層	深鉢 口縁部					内外面ともに にぶい褐色	1㎜以下の長石と石英を含む		摩滅し不明瞭 内面:ヘラミガキ 摩滅し不明瞭		P 2088
第77図 3	包含層	口縁部			(2.30)		外面:にぶい赤褐色	1㎜以上の長石を含む		内面:ヘラミガキ	口縁部沈線1条	P 2088
第77図 4	包含層	口縁部			(2.50)		外面:にぶい黄褐色	1㎜以上の長石と、1㎜以下の石英、雲母を含む		摩滅し不明瞭 内面:ヘラミガキ 摩滅し不明瞭		P 2124
第77図 5	包含層	口縁部			(3.10)		外面:灰黄褐色	1㎜以上の石英と長石、1㎜以下の雲母を含む		内面:ヘラミガキ 摩滅し不明瞭	山形口縁か	P 2114
第77図 6	包含層	口縁部			(2.90)		外面:灰黄褐色	1㎜以上の長石と石英、1㎜以下の雲母を含む		外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明	内面媒付着	P 2066
第77図 7	包含層	口縁部			(2.30)		外面:灰黄褐色 内面:オリーブ黒色	1㎜以上の長石と、1㎜以下の石英を含む		外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 2127
第77図 8	包含層	口縁部			(3.10)		外面:灰黄褐色	1㎜以上の長石と、1㎜以下の金	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:ヘラミガキ	内面口縁沈線1条	P 2078
第77図 9	包含層	口縁部			(2.70)		内面:明褐灰色	1㎜以上の長石と、1㎜以下の石英、雲母、赤色酸化粒を含む		外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 2096
第77図 10	包含層	口縁部			(4.80)		外面:灰黄褐色 内面:オリーブ黒色	1㎜前後の長石と石英、金雲母		内面:磨滅しているがヘラミガキを施す		P 2120
第77図 11	包含層	口縁部			(4.30)		内外面ともに 黒褐色	1㎜以下の長石と石英、金雲母	良好	内面:ヘラミガキ	山形口縁 口縁部下位に沈線1条	P 2117
第77図 12	包含層	口縁部			(3.40)		外面:灰黄褐色 内面:灰黄色	1㎜以上の長石と、1㎜以下の金	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨滅し不明瞭 内面:ヘラミガキを施すが磨滅し不明瞭		P 2126
第77図 13	包含層	口縁部			(2.90)		外面:灰黄色	1㎜以上の長石と石英、雲母を		外面:ヘラミガキを施すが磨滅し不明瞭 内面:ヘラミガキを施すが磨滅し不明瞭		P 2028
第77図 14	包含層	精製浅鉢 口縁部			(5.10)		内外面ともに 黒褐色	1㎜以下の長石と雲母を含む		内面:ヘラミガキ		P 2116
第77図 15	包含層	深鉢 口縁部			(7.00)			1㎜以上の長石と石英、1㎜以下の金雲母を含む		外面:ナデ	山形口縁か	P 2104
第81図 1	21G		6.80		8.45		内外面ともに	1～2㎜前後の石英と金雲母を含	良好	体部ハケ、底部付近ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ、体部～底部ナデ		P 0512
第81図 2	22G	手づくね土器			(2.95)		内外面ともに	1㎜以下の長石と石英を含む	良好	外面:ナデ	外面黒斑	P 0020
第81図 3	23G	口縁～体部	(14.40)		(9.30)		内面:浅黄橙色	1㎜以下の長石と石英、金雲母	良好	外面:口縁部ハケ、体部タタキ後ハケ、一部ナデ 内面:口縁部ハケ、体部ハケ一部ナデ		P 0224
第81図 4	22G	有蓋甕 口縁～体部	(15.40)				内外面ともに	1㎜以上の長石と石英を含む		外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 0513
第81図 5	23G	庄内甕 口縁部	(15.60)		(3.70)		内外面ともに にぶい黄褐色	1㎜以下の長石と石英、角閃石	良好	頸部～体部ハケ 頸部以下ヘラケズリ	河内系	P 0285

ＢＩ地区 出土土器観察表（９）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第81図 6	22G	体部～底部			(6.70)		内外面ともに	1mm前後の長石と石英、1mm以下の金雲母を含む	良好	外面:体部ハケ、底部周縁指押さえ 内面:ヘラナデ・指押さえ		P 0028
第81図 7	22G	脚柱部			(6.30)			1～2mm以下の長石と石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキか 摩滅し調整不明瞭 内面:脚柱部絞り痕	4方ヌカシ 外面黒斑	P 0121
第81図 8	23G	須恵器 杯身	(9.50)		(3.20)		内外面ともに 灰色	1mm以下の長石を含む	良好	外面:ヨコナデ		P 0225
第81図 9	23G	須恵器 杯	(12.80)	(8.20)	3.30		内外面ともに 灰色	1mm以下の長石と雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 底部ヘラ切り後ナデ		P 0514
第81図 10	27G	黒色土器	(11.50)	高台径 (7.00)	5.00		内面:暗灰色	1mm以下の長石を含む	良好	摩滅し不明瞭 内面:磨滅し不明瞭	内面炭素吸着	P 0514
第81図 11	27G		(14.80)	高台径 (8.40)	5.90		外面:灰白色 内面:灰黄色	1mm前後の長石と石英を含む	良好	外面:ヨコナデ・ナデ 底面ヘラミガキ	口縁端部煤付着	P 0368
第81図 12	27G			高台径 (10.10)	(2.70)		内外面ともに	1mm以下の長石を含む	良好	外面:高台貼り付け部指押さえ		P 0515
第81図 13	23G	杯	15.00					1mm以下の長石と石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指押さえ、底部ナデ ～底部ナデ.一部指押さえ		P 0321

表３ ＢＩ地区 出土石器観察表

挿図番号	調査区	出土遺構	種別	残存状況	法量(cm) 長	幅	厚	重量(g)	石材	備考	遺物番号
図24-1	ＢＩ-3	27-S0009 P2	砥石	ほぼ完形	10.8+	2.9	2.4	81.8	粘板岩(仕上げ砥石)	不明	1530
図24-2	ＢＩ-3	27-S0009 P2	砥石	完形	12.1	2.8	2.3	115.7	粘板岩(仕上げ砥石)	不明	1531
図24-3	ＢＩ-3	27-S0009	砥石	完形	17.1	7.2	7.1	763.9	砂岩(中砥石)	不明	1533
図24-4	ＢＩ-3	27-S0009 P2	砥石	？	9.3+	7.9	3.4	406.1	細粒砂岩(仕上げ砥石)	不明	1532
図28-3	ＢＩ-3	28-S0007	砥石	？	11.0	9.3	2.4	234.4	シルト岩(仕上げ砥石)	不明	1544
図47-4	ＢＩ-4	22-S1514	砥石	ほぼ完形	16.2+	4.4	3.7	275.5	粘板岩	不明	1518
図52-3	ＢＩ-3	28-S0009	砥石	？	18.1	4.3	2.0	182.8	粘板岩	不明	1543
図52-4	ＢＩ-3	28-S0009	台石	完形	24.1	16.1	4.7	2750	花崗岩	不明	1542
図78-1	ＢＩ-3	27グリット	石鏃	カエリの一部欠	1.8	1.4	0.4	0.7	黒曜石(腰岳産)	縄文後期後半	1536
図78-2	ＢＩ-3	27グリット	石鏃	カエリの一部欠	1.8	1.2	0.3	0.8	サヌカイト(多久産)	不明	1540
図78-3	ＢＩ-4	23グリット	石鏃	カエリの一部欠	2.3	1.1	0.3	0.7	蛇紋岩	縄文後期(後半)～晩期	1523
図78-4	ＢＩ-3	27グリット	石鏃	完形	1.7	1.3	0.3	0.6	黒曜石(腰岳産)	縄文早期～弥生前	1553
図78-5	ＢＩ-3	23グリット	石鏃	ほぼ完形	1.8	1.3	0.3	0.6	黒曜石(腰岳産)	不明	1528
図78-6	ＢＩ-3	23グリット	石鏃	ほぼ完形	2.1	1.6	0.3	1.1	サヌカイト(多久産)	縄文早期？	1527
図78-7	ＢＩ-3	27グリット	石鏃	ほぼ完形	2.2+	1.8	0.4	1.1	サヌカイト(多久産)	縄文中期以前	1554
図78-8	ＢＩ-3	22グリット	石鏃	ほぼ完形	2.6	1.8	0.4	1.4	サヌカイト(多久産)	縄文早期？	1503
図78-9	ＢＩ-4	22グリット	石槍	完形	4.8	1.5	0.7	4.0	サヌカイト(多久産)	弥生前期以降	1514
図78-10	ＢＩ-4	23グリット	剥片尖頭器	1/3欠	3.6+	1.8	0.8	4.4	不明	不明	1524
図78-11	ＢＩ-3	27グリット	石匙	完形	9.8	4.3	1.1	44.8			1534
図78-12	ＢＩ-3	27グリット	スクレイパー	？	4.1	5.8+	1.3	29.1	サヌカイト(多久産)	縄文後期以降	1535
図78-13	ＢＩ-3	27グリット	石核	？	2.9	6.7	1.6	31.2	サヌカイト(多久産)	縄文後期以降	1552
図79-14	ＢＩ-4	23グリット	石核	完形	6.3	8.5	2.6	141.7	硅化木岩	不明	1526
図79-15	ＢＩ-3	22グリット	石鏃	2/3欠	9.2+	6.2	1.3	104.8	片岩	不明	1509
図79-16	ＢＩ-3	22グリット	石鏃	2/3欠	10.6+	6.1	0.6	43.0	片岩	不明	1510
図79-17	ＢＩ-3	22グリット	石鏃	3/4欠	7.1+	6.3+	1.1	60.9	片岩	不明	1508
図79-18	ＢＩ-4	23グリット	石鏃	1/4欠	16.2	7.4	1.2	203.0	結晶片岩	不明	1525
図79-19	ＢＩ-3	22グリット	磨製石斧	ほぼ完形	6.4＋	3.4	1.1	36.8	蛇紋岩(変成岩)北松浦産	縄文後期	1507
図79-20	ＢＩ-3	28グリット	打製石斧	完形	15.8	7.9	2.9	333.2	玄武岩(今山産)	不明	1548
図79-21	ＢＩ-3	27グリット	石鏃	完形	27.2	9.0	3.9	832.6	結晶片岩	不明	1538
図80-22	ＢＩ-3	22グリット	磨製石斧	完形	17.4	5.8	2.7	430.3	結晶片岩	縄文晩期前半	1507-2
図80-23	ＢＩ-3	22グリット	磨製石斧	1/3欠	7.7＋	3.0	1.4	56.9	蛇紋岩	縄文	1506
図80-24	ＢＩ-3	22グリット	打製石斧	1/4欠	11.4+	6.9	2.2	253.4	蛇紋岩	縄文後期	1507-0
図80-25	ＢＩ-3	27グリット	敲き石	完形	9.4	8.2	5.4	658.6	自然石？	不明	1537
図80-26	ＢＩ-4	22グリット	摺石？	2/3欠	8.4+	9.2+	2.2+	243.5	花崗岩	縄文早期？	1517
図81-16	ＢＩ-3	22グリット	石包丁	小片	4.0＋	4.6＋	0.7	13.7	凝灰岩(立岩産)	縄文前～後期	1504

第３節　ＢⅡ地区

第１項　縄文時代の遺構と遺物

１　河川

河川１[5-S0001]（第84図）

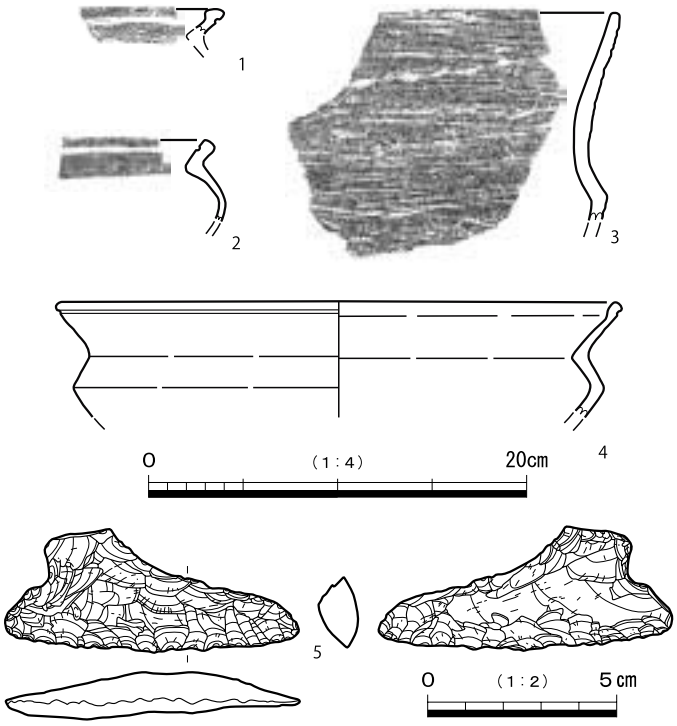
5-S0001は遺跡北部の浅い谷部中に存在する自然河川である。ＢⅡ区の北西部から北東部方向にかけて地形に沿いながら大きく弧状を描き、調査区北東端付近の低地部に向かう流路である。検出長66.8mを測り、幅はＢⅡ-1区北西端から南東方向に開口したトレンチで約8.18m、最深部の深さは約48㎝である。肩は北岸が急激に落ち込むのに対して南岸は緩やかな浅瀬状になっており、北岸から約1.8m付近では中州状の高まりが観察された。埋土は大きく２層に分層され、上層は粗砂を多く含む褐色の極細砂、下層は灰色の極細砂～粗砂の互層となっている。出土遺物は、下層で縄文土器と石器が出土する。上層の上部には黒褐色粘土層が周辺も含め広い範囲に認められることから湿原に変化していることが窺われる。因みに、弥生時代終末から古墳時代初頭に設置された区画溝は、この泥炭層の上部から開削されている。

出土遺物（第83図５・図版81）　横型のスクレイパーで完形品ある。佐賀県多久産サヌカイト製の縦長剥片を横に使い両面を丁寧に加工し、側縁に抉りを入れてつまみを作り出している。刃部は表裏面共に剥離調整を加えており、作りは非常に丁寧である。掻器と削器として使用されていたと考えられる。

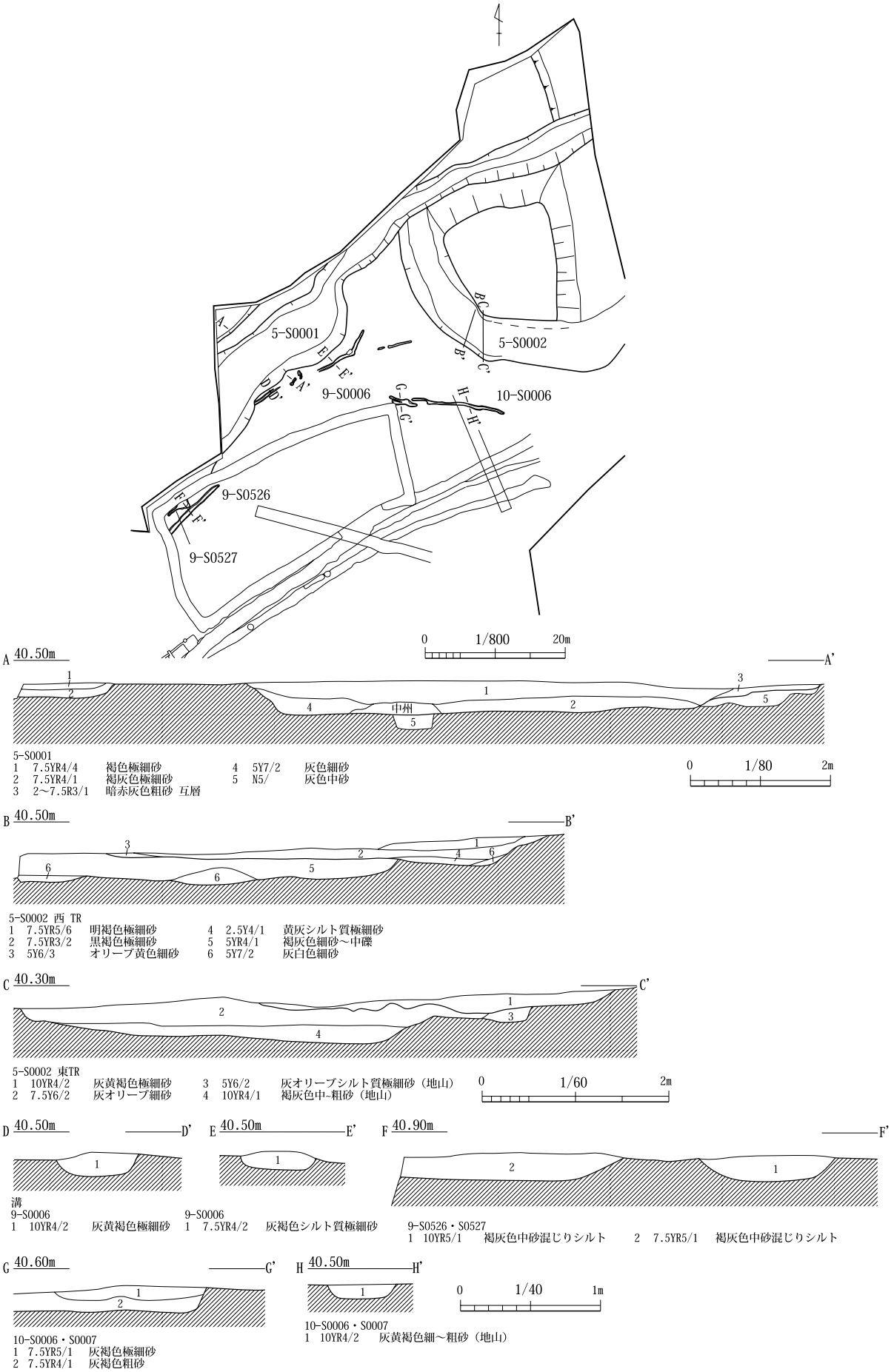
河川２[5-S0002]（第84図）

調査区北端中央付近から弧を描くように東方へ延びる流路で、北端を河川１[5-S0001]から分岐する。その形成から埋没過程までは5-S0001と同様であると考えられる。断面観察において２段階の変遷が認められる。古段階の河川の規模は幅6.68m、深さは最深部で約70㎝、埋土は大きく２層に分けられ、上層が灰オリーブ色の細砂、下層は褐灰色の中～粗砂が混在している。新段階になると、流れをやや北に移動するとともに縮小し、幅約5.1m、深さ約25㎝の規模となる。埋土は灰黄褐色極細砂の単層である。検出長は37.6mを測る。古段階の上層より縄文土器が出土している。

出土遺物（第83図・図版53）　浅鉢と深鉢を図示した。１と２の精製浅鉢は口縁部が短く内面や外面に横ヘラ描き沈線を施す。玉縁状の口縁部部を有し胴部が丸く張るもので、いずれも黒川式の代表的な器形である。



第83図 河川5-S0001・S0002 出土遺物実測図



第84図 調査区北東部遺構 平面・断面図

内外面共に丁寧な横方向のヘラミガキ調整により仕上げられている。時期が新しくなるにつれ口縁が短くなり外面の沈線も細くなる傾向がある。今回の調査では出土しなかったが口縁端部に小さなリボン状の突器が付くものが多い。

３は深鉢で長く外彎した口縁部を有し肩部にシャープな稜をつくる。口縁外面は横方向の条痕、内面は条痕の上を丁寧にナデ調整が施される。肩部外面は条痕の上から横方向のナデ調整、稜より下はやや右下がりの斜目条痕を施した後ナデ調整を行う。内面は横方向の条痕をナデで消している。

４の精製浅鉢は胴部が外方へ張り出し、頸部内面の稜がシャープになる。口縁部は長く端部付近の外面に沈線を施し、玉縁状に仕上げ胴部は算盤玉状に稜を持って張り出している。内外面共に横方向のヘラミガキ調整が施され、胎土は精良である。

第２項　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

１　大型掘立柱建物

ＢⅡ地区において、数棟の大型掘立柱建物を検出した。以下、便宜的に大型建物と呼称して報告する。

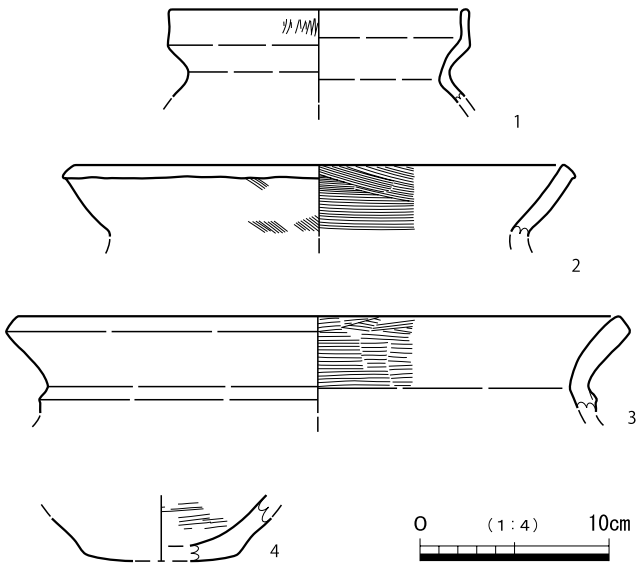
大型建物１[14-S1010]（第86図・図版11-1）

14グリッド１Ｄ・Ｅ～２Ｄ・Ｅ地区において検出した大型掘立柱建物である。大型建物２、環濠と重複しているが、切り合い関係からこの建物が最も先行する（第89図）。

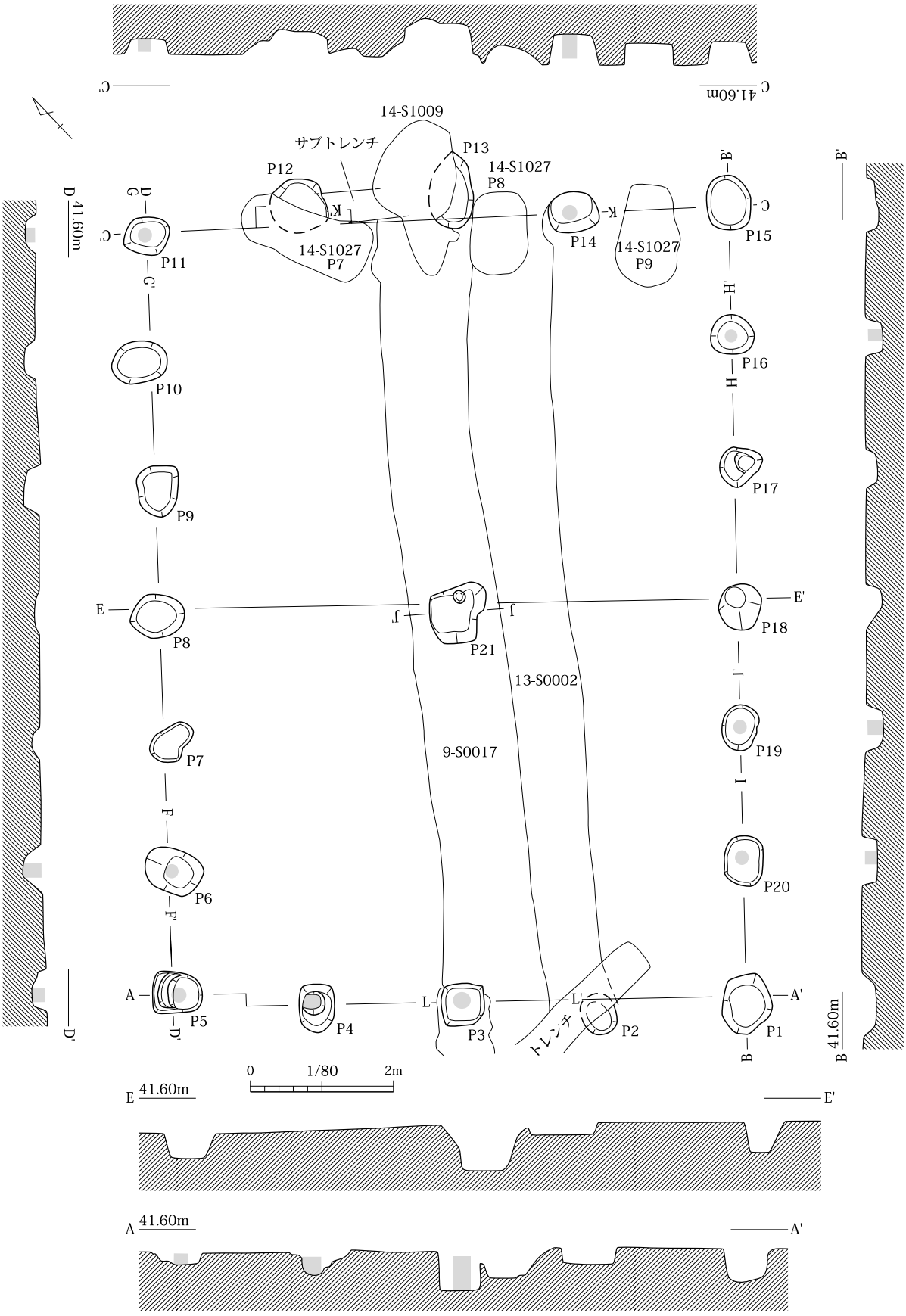
梁行４間、桁行６間、床面積約87㎡で、長軸を南西から北東方向に採る。梁行は２辺がほぼ等しく総長８ｍと8.1mであるが、桁行は10.6mと11.1mでそれぞれ総長が揃わず、平面形態が若干台形状を呈する。柱間隔は梁行側が平均２ｍ、桁行側は北西面が平均1.76m、南東面が平均1.85mである。

建物範囲中央には棟持ち柱と考えられるやや大型のピットが存在する。その規模は長径１ｍ、短径0.8mの不整楕円形を呈し、残存深度は60㎝である。柱穴は方形を基本とするが不整形のものが多く、底面のレベルも不均一である。柱穴は個々にばらつきがあるもののほぼ長辺0.7～0.8m、短辺0.5mを測り、残存深度は0.2～0.5mと他の大型建物に比べ浅い物ばかりである。しかし、長軸中央ラインのＰ３・P21・P13は他の者に比べ一段深く施されている。柱の径は柱痕跡から約20㎝と推定される。

出土遺物（第85図）　柱穴の埋土から僅かであるが土器片が出土している。但し、柱痕推定内部と分けて取り上げていないため、混入しているものも含まれている可能性もある。１はP20から出土している複合口縁壺の口縁部である。口縁部外面に粗い縦方向のハケが重複し幅の狭い崩れた鋸歯文状を描き出している。山陰系か。２、３はＰ３から出土した甕の口縁部である。口縁端部は角張り面を有する。３は頸部に小さな突帯をめぐらす。４はP11から出土した甕の底部で、凸レンズ状を呈する。



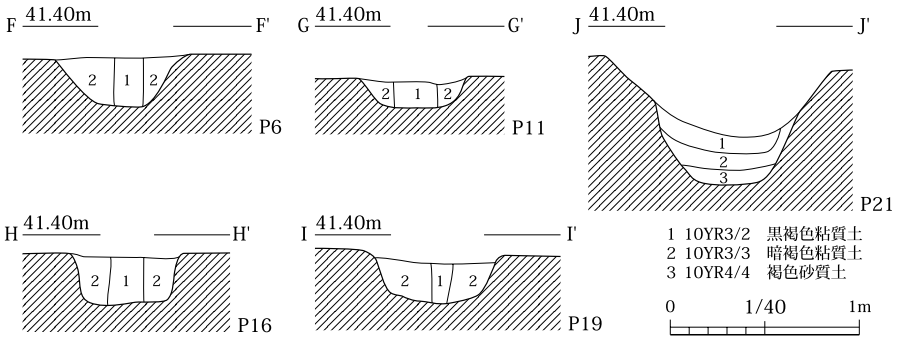
第85図 大型建物１[14-S1010] 出土遺物実測図



第86図 大型建物 1 [14-S1010] 平面・断面図

大型建物２[14-S1027]（第90図・図版11-1）

14グリッド１E～２E地区において検出した大型掘立柱建物である。大型建物１と大型建物３と重複するが、大型建物１より新しく、大型建物３より古いことが切り合い関係により確認できた（第93図Ｐ２）。

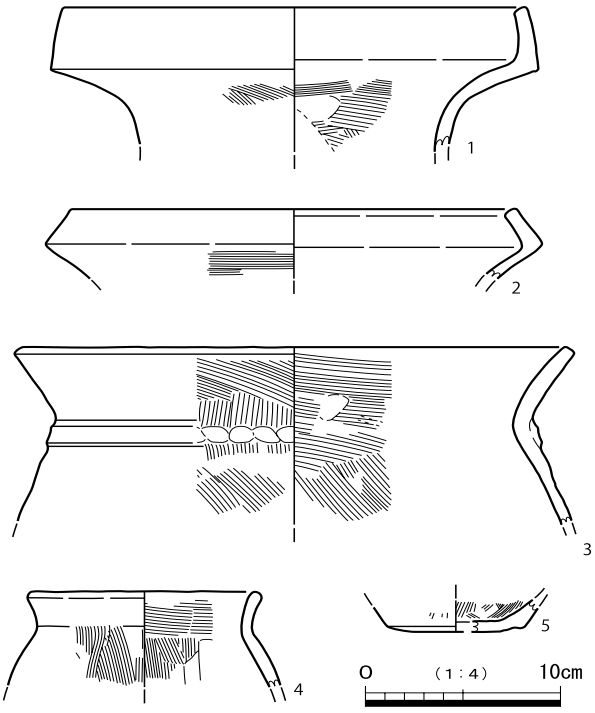


第87図 大型建物１[14-S1010] 断面図

梁行４間、桁行６間、総面積約95㎡で長軸を南西から北東方向に持つ。桁行は２辺とも総長が揃い11.5mであるが、梁行は２辺が揃わず北東面側は総長8.1m、南西面側は8.5mである。柱間隔は桁行側で平均1.92m、梁行側では2.02m～2.12mである。

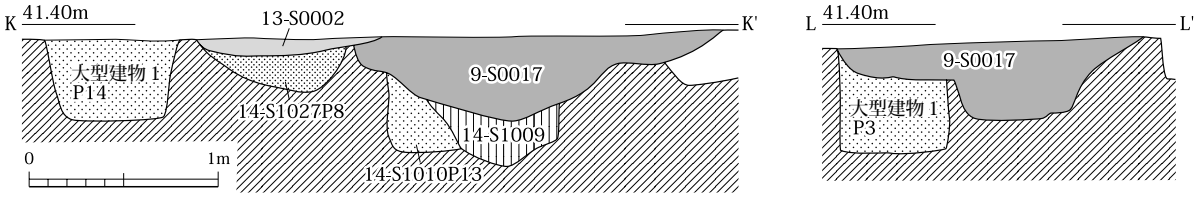
建物範囲中央に棟持ち柱とみられる大型のピットが存在する。その規模は長径２ｍ、短径１ｍの不整楕円形を呈し、残存深度は約0.9mで階段状に掘削されている。断面観察から径25㎝ほどの柱痕跡が認められ、建て直しの状況が看取される。また他の柱穴も同様に長辺が２m前後と大きく、内部もすべて階段掘りである。

立柱方向は柱穴の階段掘りの状況から推測すると4面すべて四方から中心に向けて起こされていることが窺える。

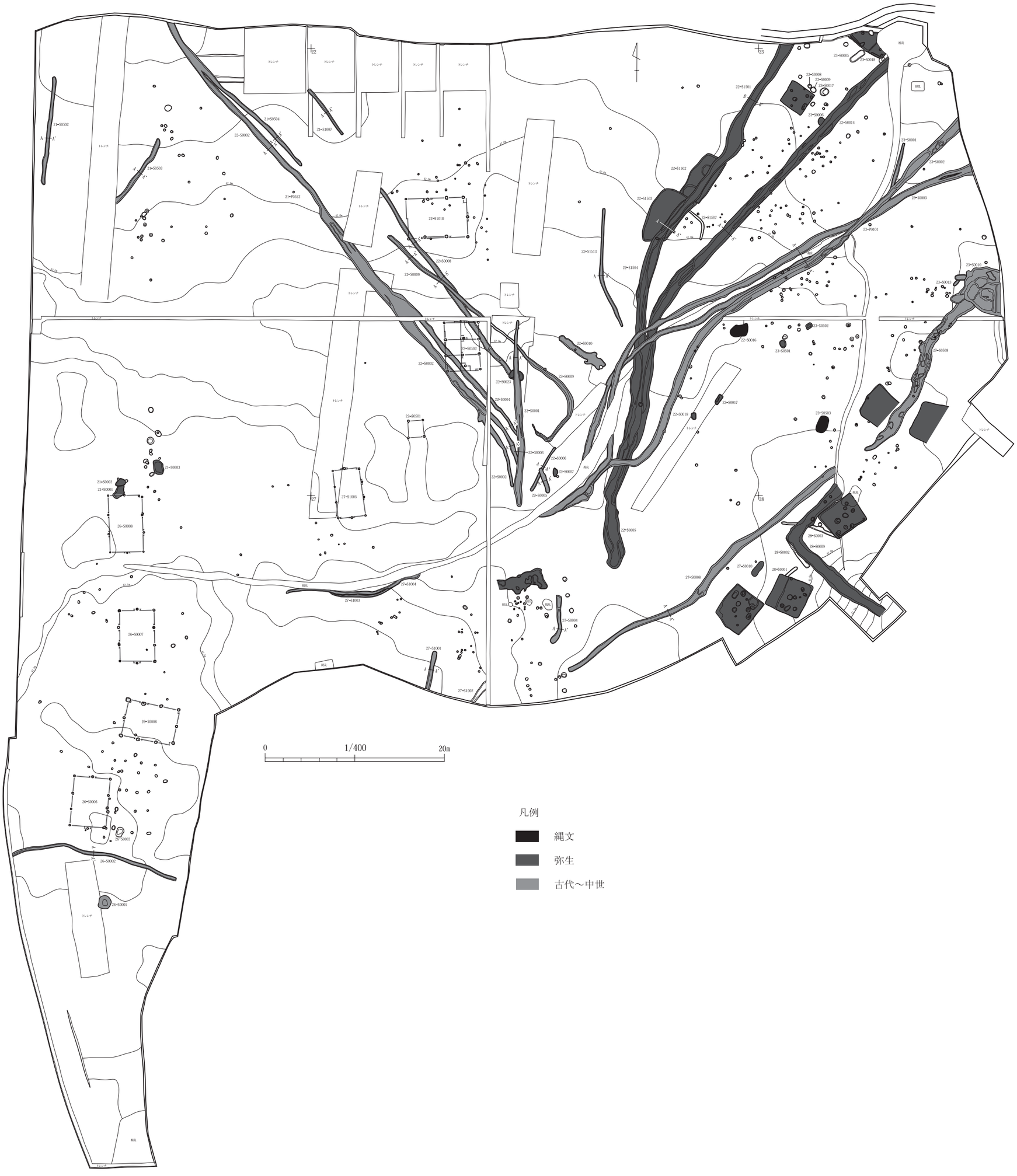


第88図 大型建物２[14-S1027] 出土遺物実測図

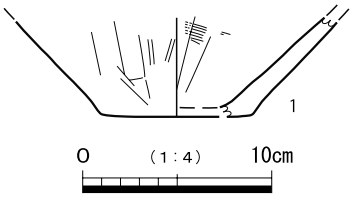
出土遺物（第88図） １と３はＰ７、２はP21、４はＰ２、５はP13から出土したものである。１・２は複合口縁壺である。１は口縁部の立ち上がりが内傾しているものの垂直方向近づいており、西新町Ⅰ式のものであろうか。２は逆くの字状口縁を有する。３～５は甕で、３は口縁部がくの字状に外傾し、頸部に指頭圧痕を施した突帯をめぐらす。これも西新町１式のものであろうか。４はやや直立気味に口縁部が立ち上がり、上端で外反する。内外面ともにハケを施す。小型壺の可能性もある。５は甕の底部で凸レンズ状を呈する。１と３は同一遺構からの出土であり、混入の可能性が高い。



第89図 大型建物１・２[14-S1010・S1027] 環濠新旧関係断面図



第82図 ＢⅠ地区遺構平面図



第91図 大型建物３[14-S0059]
出土遺物実測図

大型建物３[14-S0059]（第93図・図版10）

14グリッド２Ｆ～３Ｆ地区において検出した大型掘立柱建物である。大型建物２と重複関係にあるが、前述したように切り合い関係からこの建物が後築される。

桁行３間、梁行１間、総面積約33㎡である。大型掘立柱建物１・２と同様、南西から北東方向に長軸を持つ。総長は桁行約7.4m、梁間4.5mを測る。柱間隔は桁行側約2.5m、梁行側は1間4.5mであるから中央に束柱を考える必要があろう。

建物範囲中心の大型ピットは存在しない。柱穴も大型掘立柱建物２に比べ長辺1m前後とやや小型で、深度も0.3～0.8mと不均一である。

立柱方向はピットの階段掘りの状況から窺うと桁行側２面が向き合うように中心軸に向かって起こされている。柱の径は20㎝前後と判断される。

出土遺物（第91図）　図化できたのはＰ３から出土した１点のみである。平底気味の凸レンズ状を有する底部である。壺の底部であろうか。

大型建物４[14-S0068]（第94, 95図・図版11-2, 14, 15）

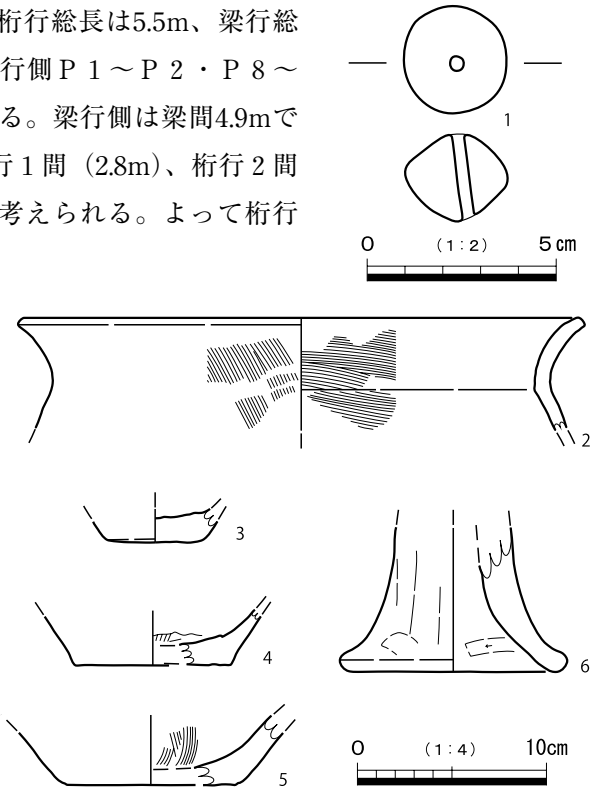
14グリッド５Ｆ～５Ｇ地区において検出した大型掘立柱建物である。大型建物3との間隔は３ｍ程度の隔たりしかない。住居14-S0012・S0021などと重複するがこれらに切られている。

この建物は梁行２間、桁行２間の平面プランを有しているが、検出状況から梁行１間、桁行２間の建物に梁行１間、桁行２間を増築したものと推定される特異な建物で、総面積は44，8㎡を有する。

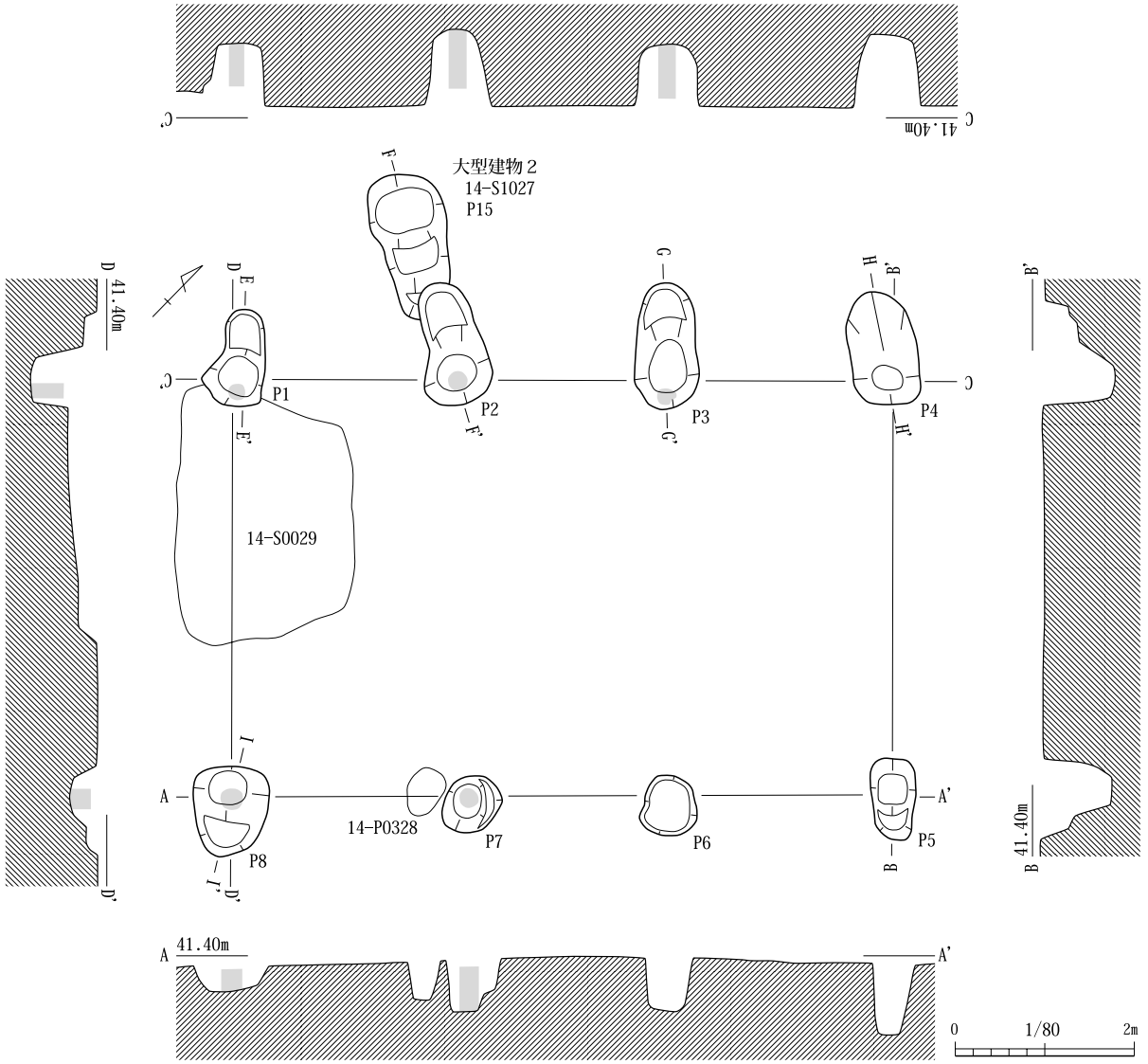
当初の建物は桁行２間、梁行１間、総面積約27㎡で、長軸を今までの大型掘立柱建物と同様に南西から北東方向に採る。桁行総長は5.5m、梁行総長は4,9mを測り、梁間は１間である。柱間隔は桁行側Ｐ１～Ｐ２・Ｐ８～Ｐ９が2.9m、Ｐ２～Ｐ３・Ｐ４～Ｐ９が2.6mを測る。梁行側は梁間4.9mであるから中央に束柱が必要になろうか。それに梁行１間（2.8m）、桁行２間（総長5.2m）、面積約14,5㎡を建て増ししたものと考えられる。よって桁行が当初建物と増築分では総長が0.3m程違ってきている。

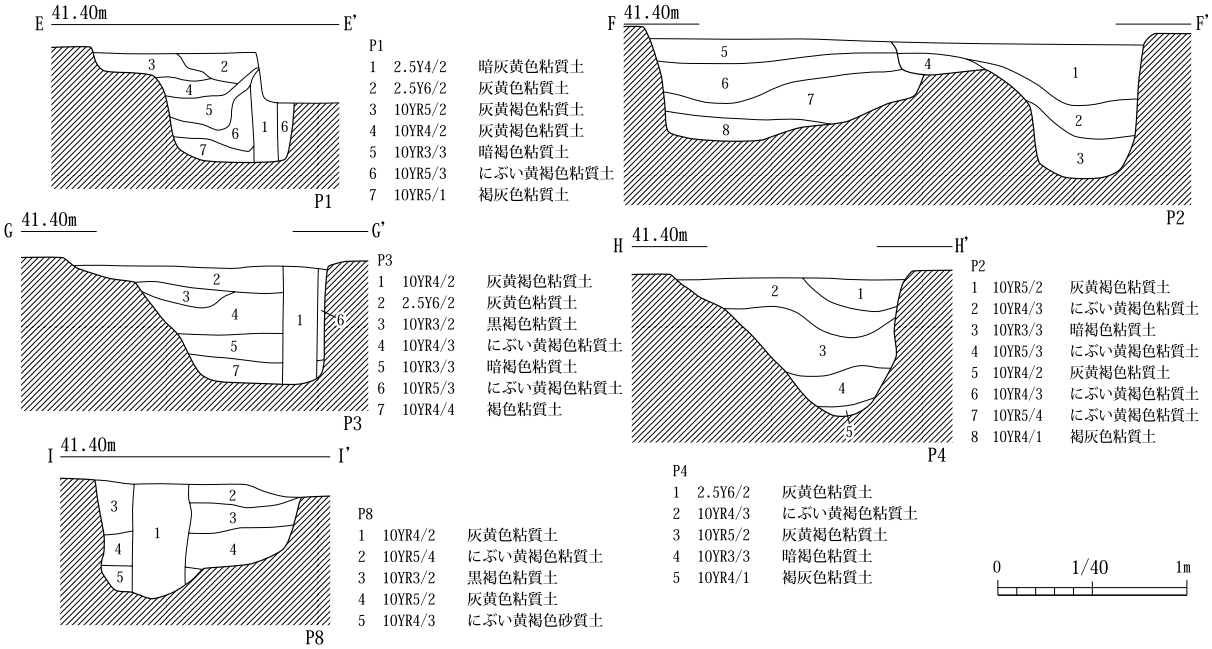
立柱方向は階段状ピットを参考にすれば各辺まちまちで、Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４は西方向に、Ｐ１は東方向に、Ｐ８は北方向にそれぞれ向く。増築した部分は北方向に揃えて起こしている。このようなことが看取されるが、増築部分のＰ５の柱穴はＰ３～Ｐ４からの直線軸を意識したのか北東側に柱穴を拡張して直線軸が通るように配慮してある。

柱穴は不整形ではあるが、隅丸長方形を基本にして長辺約1.5～２ｍと大型で、残存深度も約１～1.4mと深いものである。また底面には柱に

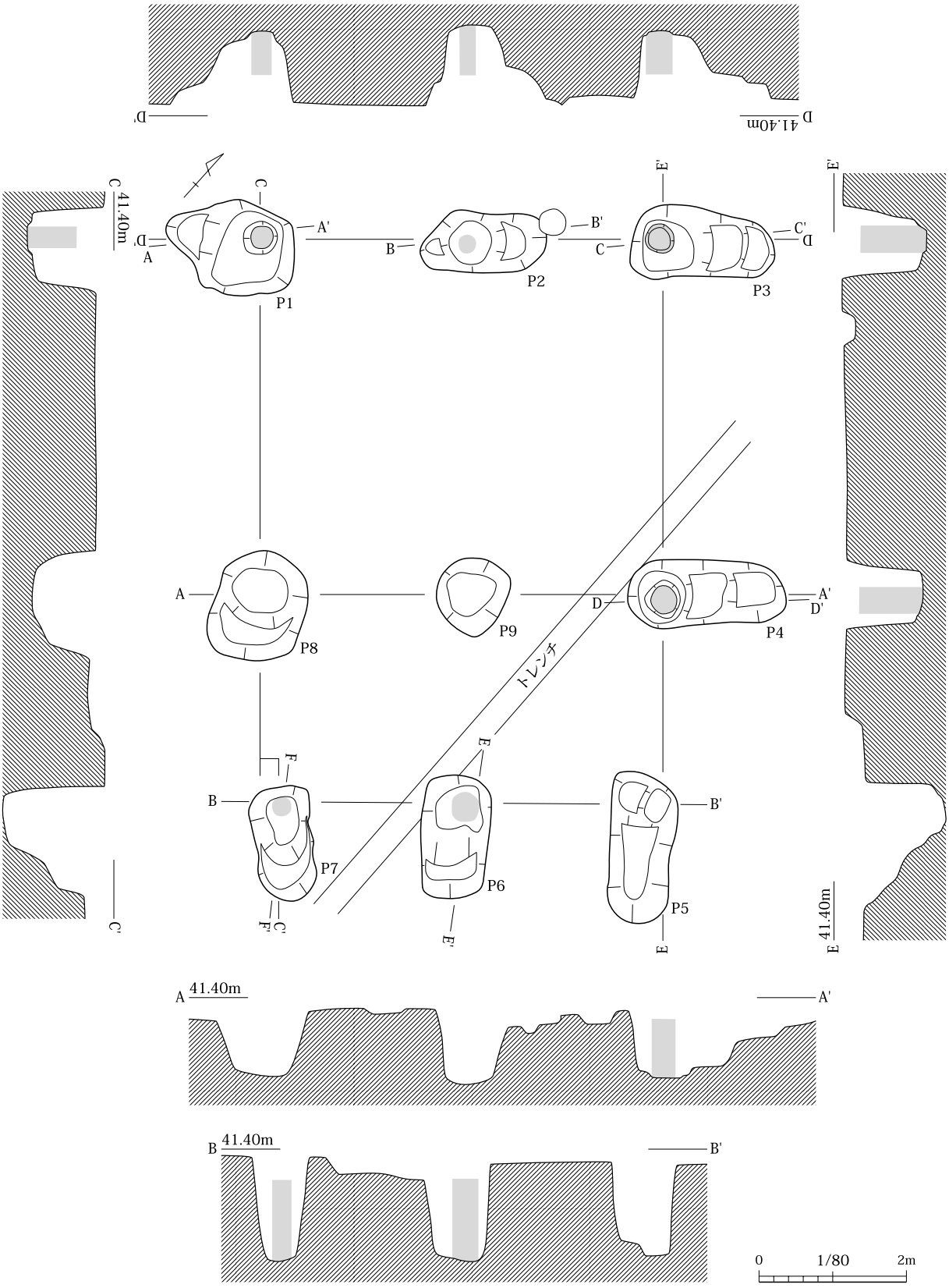


第92図 大型建物４[14-S0068] 出土遺物実測図





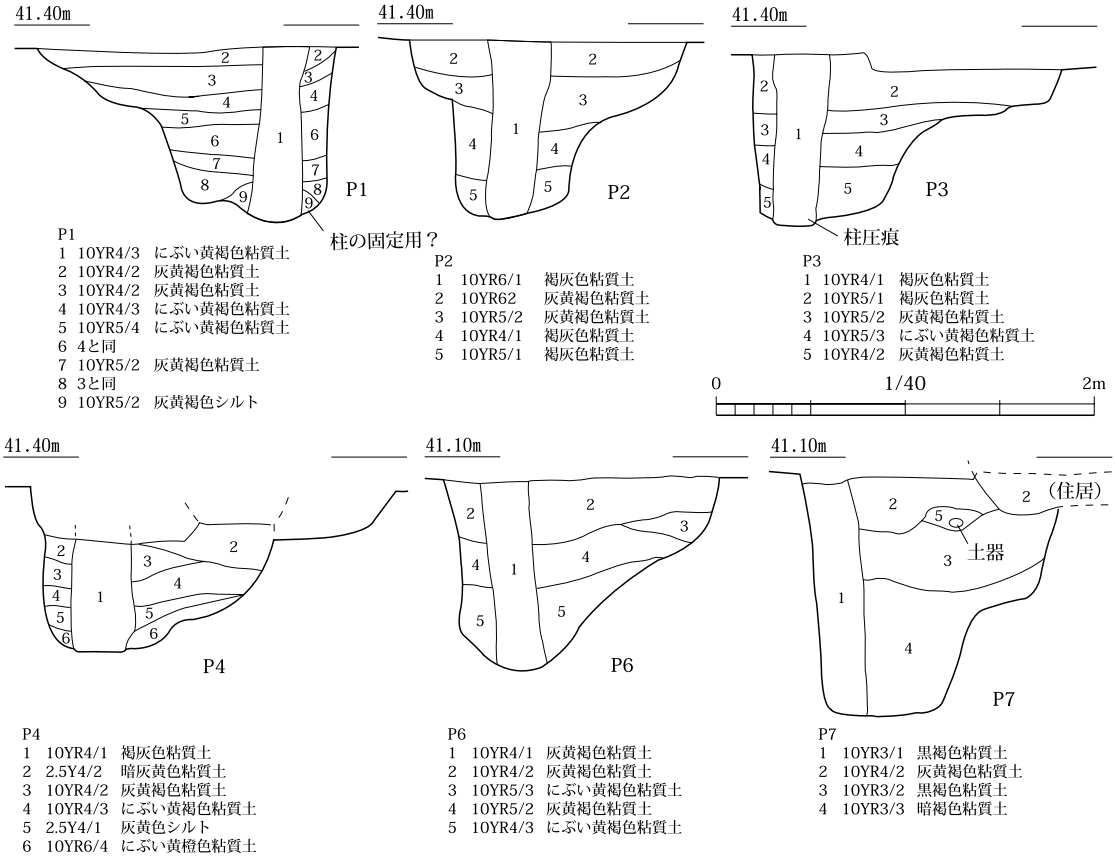
第93図 大型建物３[14-S0059] 平面・断面図



第94図 大型建物４[14-S0068] 平面図

かかる荷重痕跡が窪みとして残存するものもあり、柱の径も30㎝程度と推定される（図版14, 15）。

出土遺物（第92図）　１は最大径2.80㎝の土製玉で、中央頂部に径４㎜の穿孔を有し算盤玉状を呈する。２はＰ９から出土した甕で、口縁部は外反し端部に面を有する。３～５は底部である。３は平底



第95図 大型建物４[14-S0068] 断面図

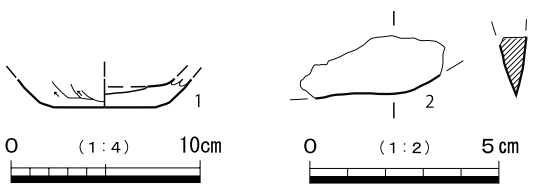
気味の凸レンズ状を有する。４は平底を有するとみられる。混入品か。５は平底気味の凸レンズ状を呈する。６は土製支脚の脚裾部とみられる。１・６はＰ１、３・４はＰ８、５はＰ２から出土したものである。

大型建物５[14-S1525]（第97図・図版12）

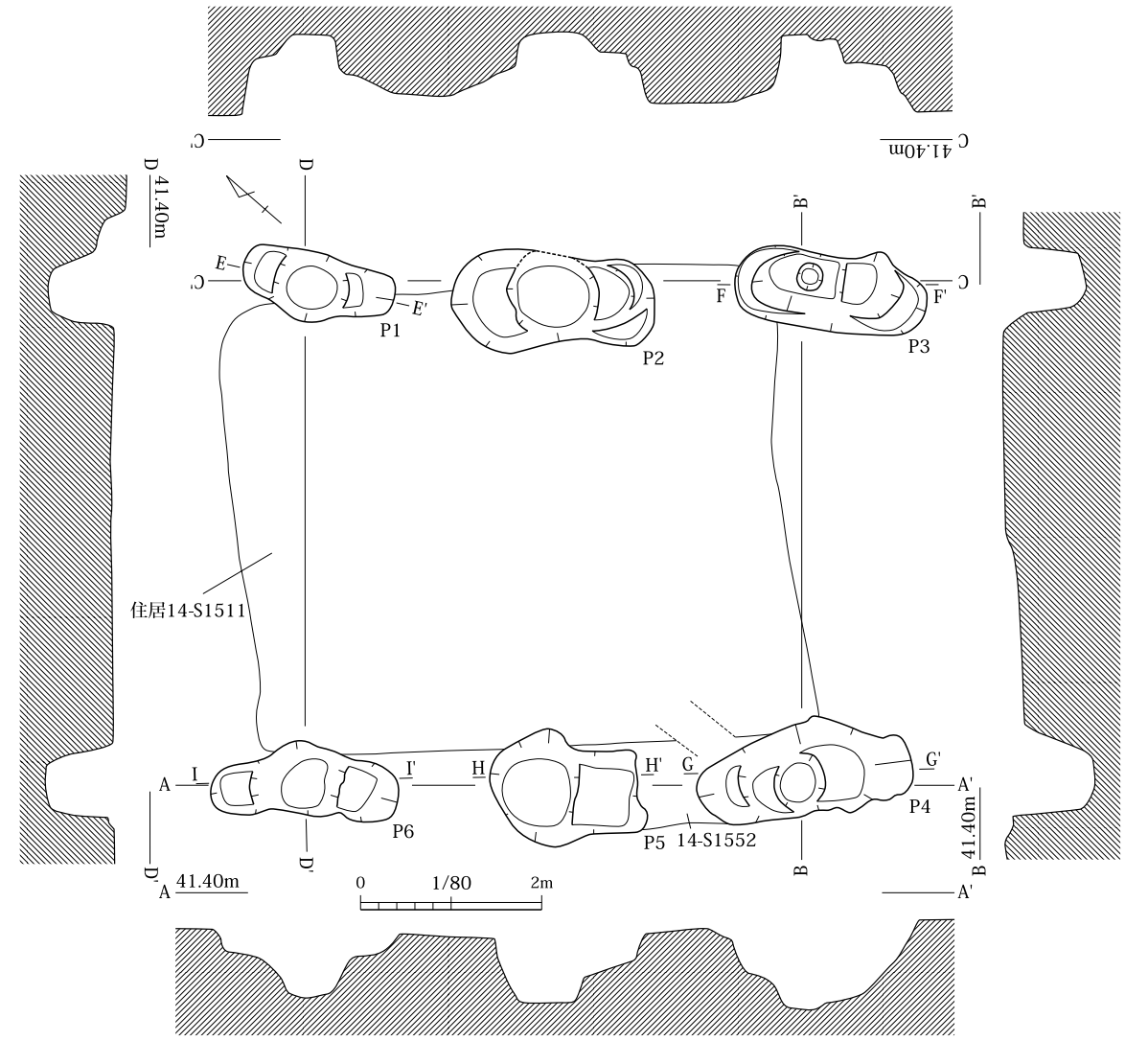
14グリッド６Ｅ地区において検出した大型掘立柱建物である。南西側３ｍに大型建物４が位置する。住居14-S0018・S1002・S1511などと重複するがこれらに先行する建物である。

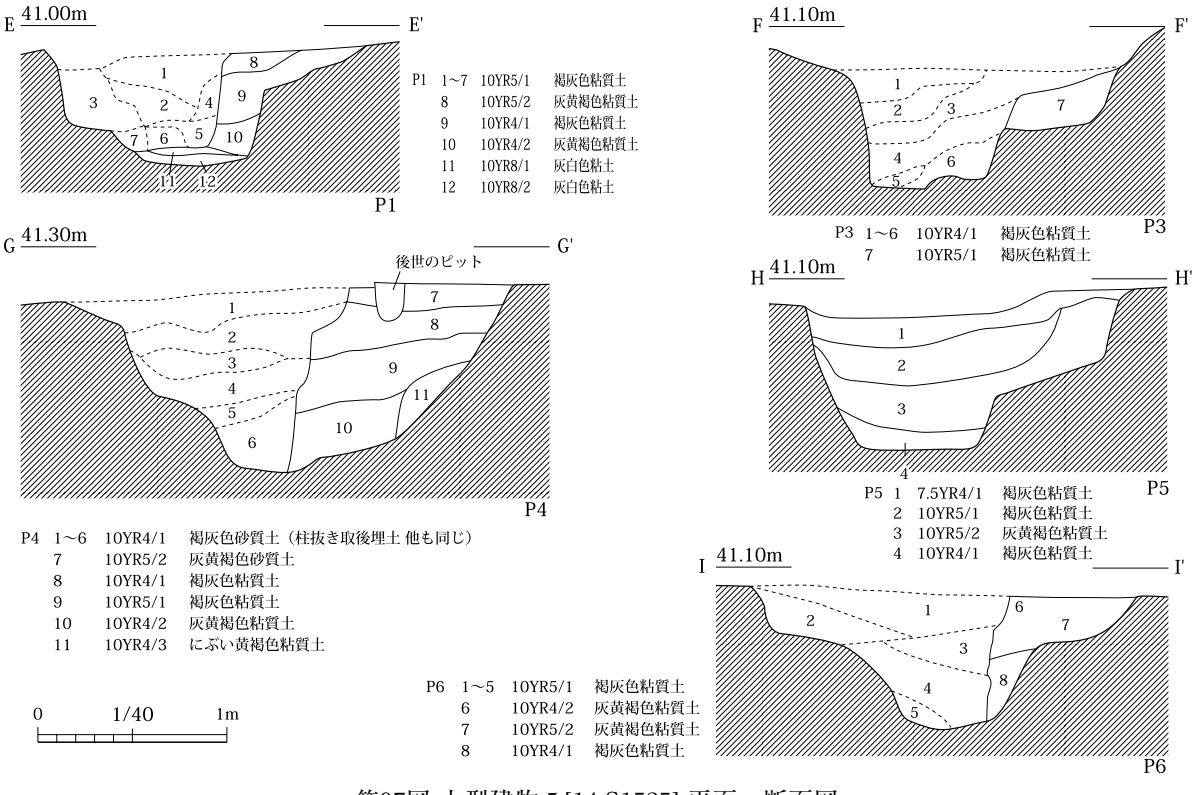
梁行１間、桁行２間、総面積約30㎡の建物で、主軸は大型建物建物４の長軸に並行し南東から北西方向に持つ。総長は梁間、桁行とも5.4～5.5mでほぼ正方形を呈する。桁行での柱間隔は、北東面側のＰ１～Ｐ３は平均2.7mであるが、南西面側のＰ４～Ｐ５は2.8m、Ｐ５～Ｐ６は2.6mと不均等の可能性がある。この建物は柱がすべて抜き取られている状況が観察された。また、柱穴が大型建物４と比べて遜色がないことが窺えることから柱の径も30㎝程度が想定される。柱穴は抜き取りにより不整形に拡張されて長軸が2mを超えるものがみられる。柱穴の残存深度は0.8～１ｍである。

出土遺物（第96図）　１はＰ５から出土した甕の底部で、平底に近い凸レンズ状を呈する。２はＰ１から出土した鉄製の不明製品で小片である。残存長1.7㎝、残存幅3.8㎝である。縦断面が楔形となることから、刃部の破片と思われる。



第96図 大型建物5[14-S1525] 出土遺物実測図





第97図 大型建物５[14-S1525] 平面・断面図

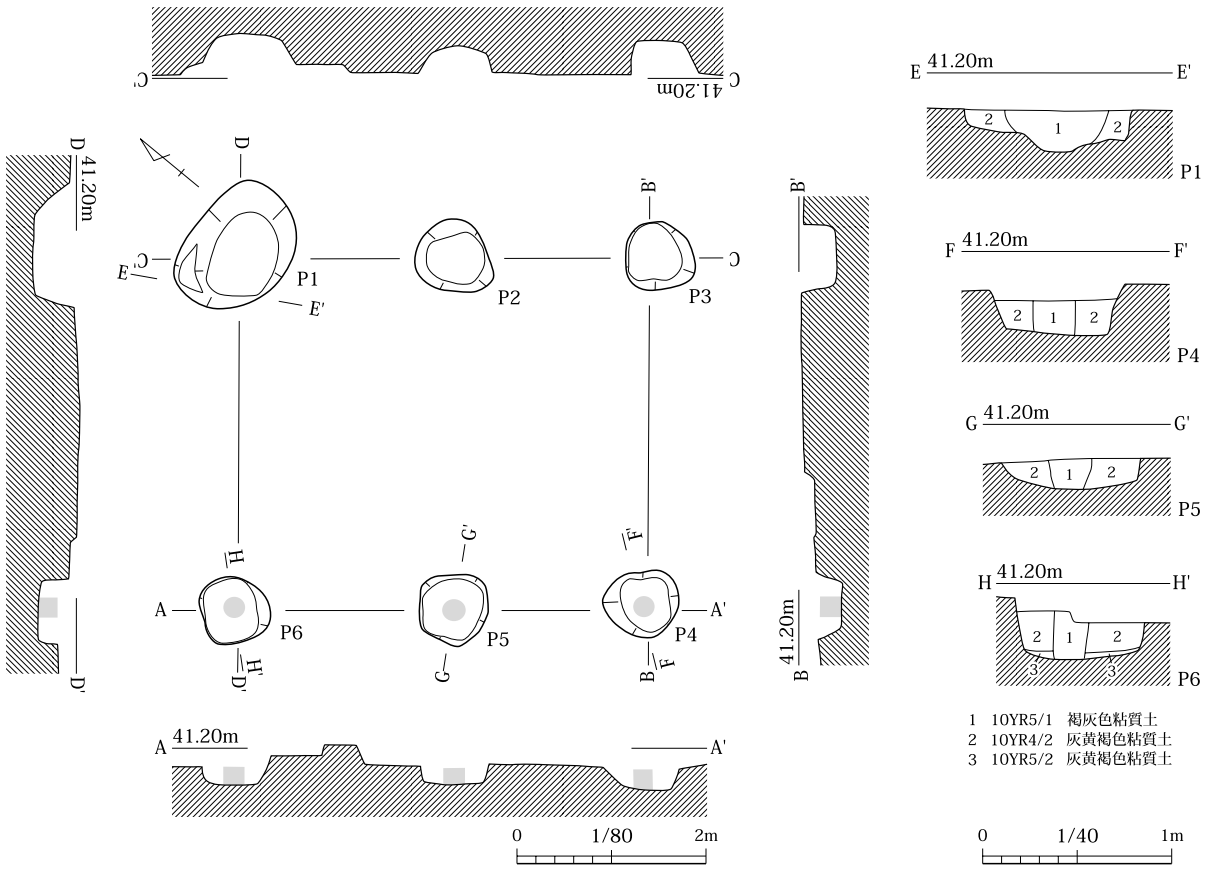
大型建物６[14-S2016]（第98図・図版11-2）

14グリッド６G地区において検出した梁行１間、桁行２間、総面積約16㎡の掘立柱建物である。今回検出した大型建物群のなかでは最も規模の小さい建物である。重複する住居14-S0012に先行する。大型建物４とも重複するが、直接的な切り合い関係がないので新旧関係は不明である。

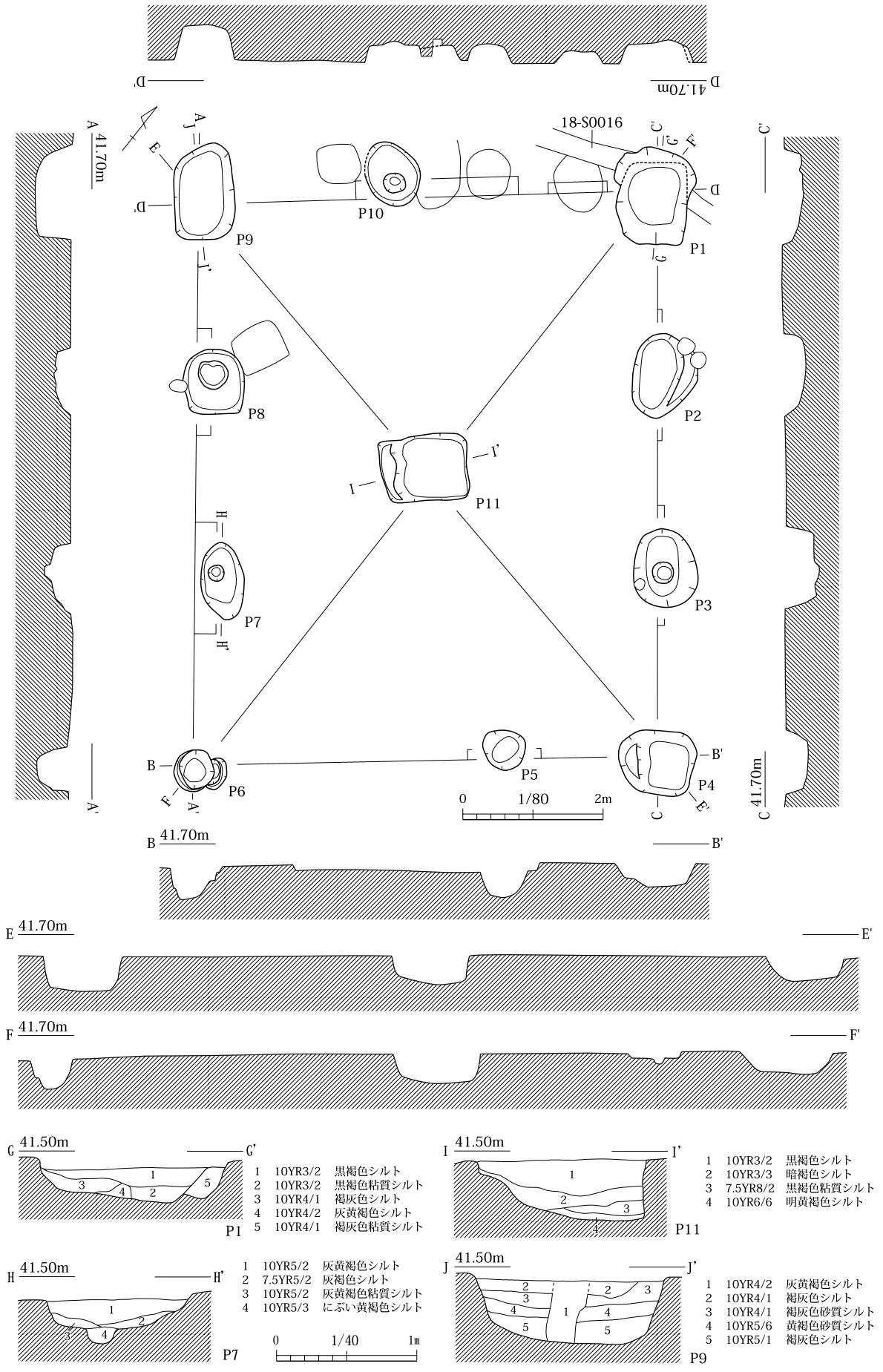
長軸を大型建物４・５と同様に南東から北西方向に採る。総長は梁間3.7m、桁行4.3mである。柱間隔は柱痕跡が確認されたＰ４～Ｐ５で２m、P5～P6で2.3mを測る。柱穴は不定形な円を呈し、残存深度も0.2～0.4mと浅いものである。柱の径は20㎝前後と推定される。遺物は出土していない。

大型建物７[18-S0013]（第99図・図版13）

18グリッド８Ａ～10Cにおいて検出した大型掘立柱建物である。掘立柱建物18-S0011、溝18-S0016と重複する。いずれも大型建物が古く、後者によって柱穴Ｐ１が壊されている。３間×１間または３間×３間の建物である。梁行は約8.2m、桁行は6.5～6.7m、梁間は2.7m～2.8mを測る。主軸方位を南東から北西方向に採る。P10は柱痕が検出されたためここに含めたが、北西辺中央から南西へずれている。対してＰ５は南東辺中央から大きく北東へずれており、規模からもP10と対応する棟持ち柱とは考えられない。この建物のものであったとしても束柱の可能性が高い。南東辺周辺では、約0.3m南東に離れて土坑が、約1.8m離れて大型の土坑がそれぞれ検出されてはいるが、形状や埋土が本建物の柱穴とは異なり、この建物にに伴うものとは考えにくい。柱穴平面形は略方形、楕円形、長方形と一定しておらず、深さも不揃いである。底面で柱痕が検出されたのはＰ３・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９・P10の



第98図 大型建物６[14-S2026] 平面・断面図



第99図 大型建物７[18-S0013] 平面・断面図

５ヶ所、土層で抜き取り痕が確認されたのはＰ１・Ｐ６の２ヶ所である。また、建物のほぼ中央に長方形の土坑を有するが、これは大型建物１・２と同様であり、この建物に伴うことは確実である。この土坑は南西側のみ斜めに、他の部分は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。埋土は水平堆積で明確に埋め戻した様相は確認できなかった。流れ込んだ小破片以外の遺物は出土せず、現時点では性格、用途ともに不明である。その他の各柱穴からも弥生土器破片が少量ずつ出土しているが図示できるものはなかった。

大型建物８ [18-S0510]（第100図）

18グリッド３Ｇ～４Ｅ地区において検出した大型掘立柱建物跡である。４間×２間、あるいはそれ以上の大型掘立柱建物と考えられる。西辺については、南北方向に４間を確認することができた。東辺については、断ち割り等を行ったが、確認することはできなかった。検出できなかった根拠としては、遺構を検出した地山面が東側へわずかに傾斜した状態で低くなっていることが要因と考えられる。この低くなった地山面は、後世の開発行為により削平されたものとみられる。

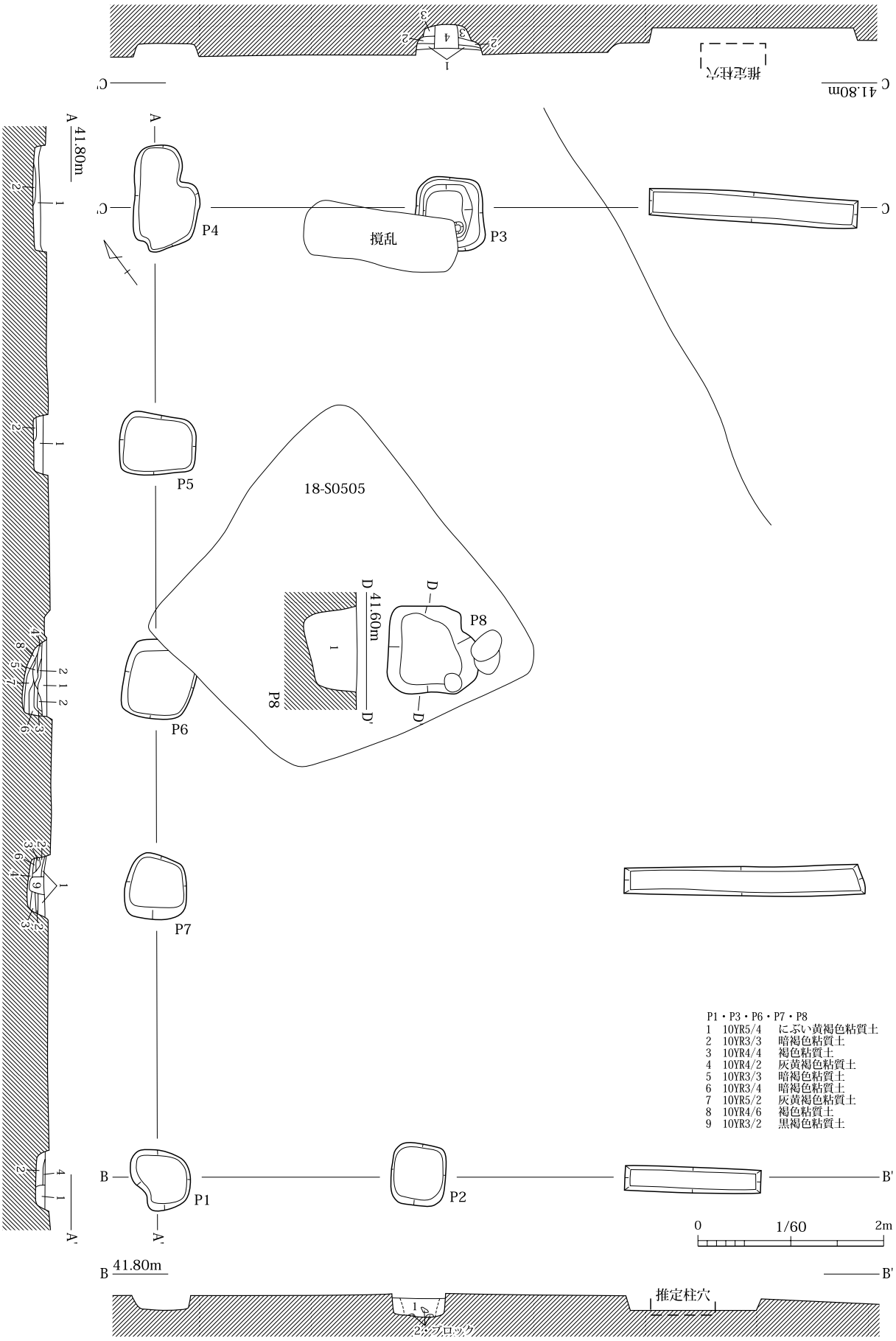
柱穴の形状は方形で、規模は径0.8m、深さ約0.2mを測る。この大きさから大型建物と考えられるが、検出した西辺は桁行総長14m、南辺梁行2.8m、あるいはそれ以上である。柱穴間は桁行側2.2m、南辺梁間は前述の通り2.8mであるが、北辺梁間は3.2mを測る。主軸は南西から北東方向に採る。柱穴内埋土は褐灰色粘質シルトの単一層で埋まっていた。遺物は弥生土器の小片が出土している。

大型建物９ [14-S1515]（第101図・図版31-2）

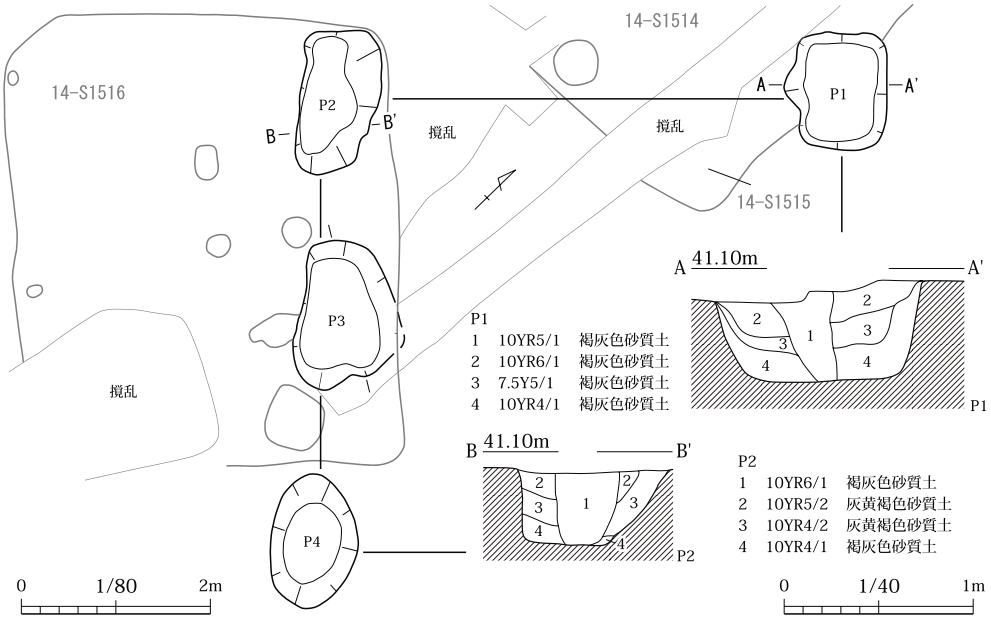
14グリッド10D地区において検出した大型掘立柱建物である。調査中に部分的に柱穴と認識できたものも存在するが、これらを有機的に結び付けてプランまで想定することはできなかった。だが、調査後の整理作業中の検討でプランを確認し大型掘立柱建物であることが判明した。そのために南東部に位置する桁行側２ヶ所の柱穴が未確認のままになってしまった。

以上のような状況であるが、想定されるプランは桁行き３間、梁行１間で、桁行総長約５m、梁行同5,5m、総面積27,5㎡を測り、主軸をＮ－47Ｗに採る。

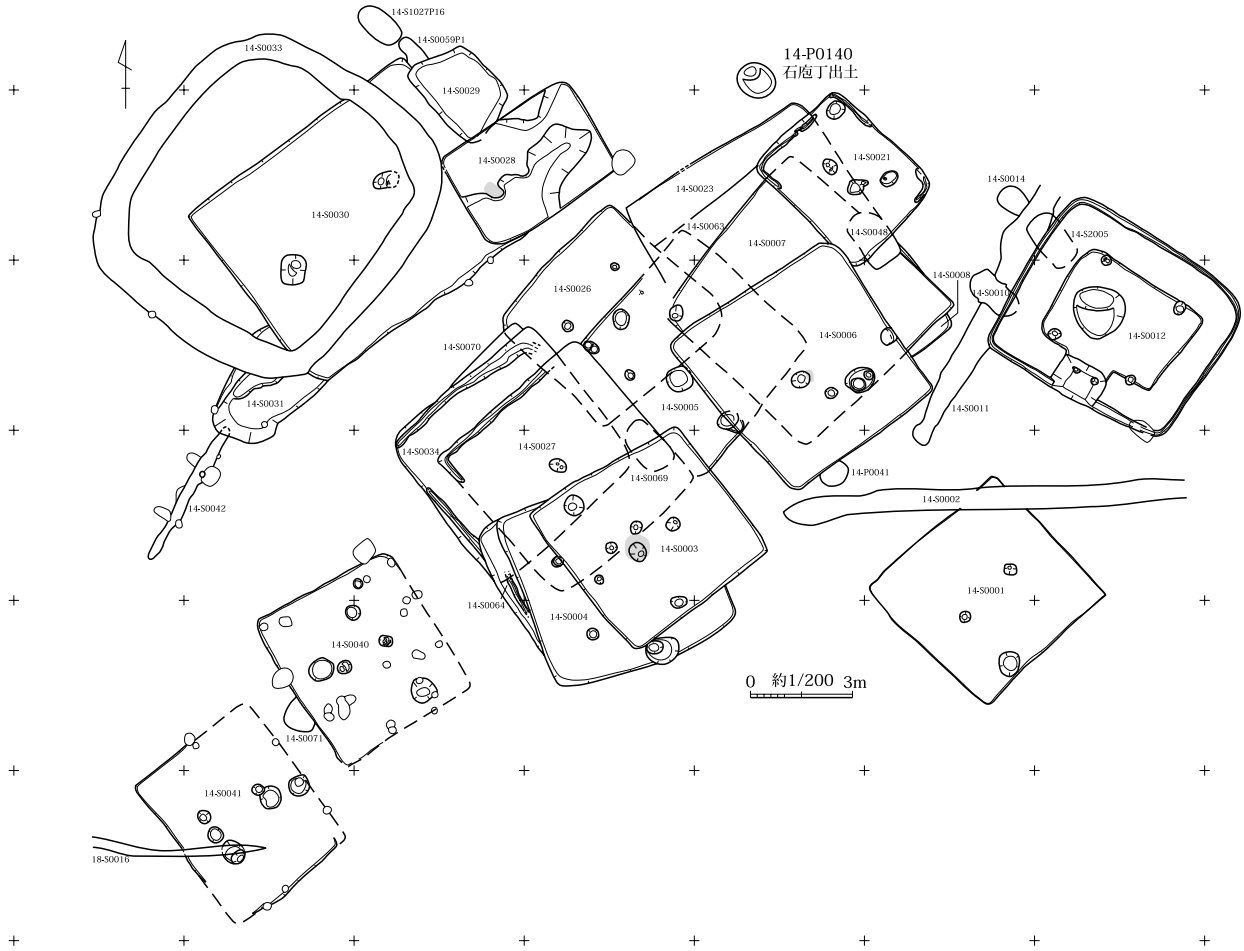
参考に柱穴Ｐ１とＰ４の概要を記しておく。Ｐ１の規模は、長辺1.24m、短辺0.96mの隅丸方形で、深さは検出面から0.54mである。土層断面から大型の柱痕を確認している。P4の規模は、長辺1.5m、短辺0.9mの楕円形プランで、深さは検出面から0.4mである。埋土は灰黄褐色砂質土で、水平に堆積する状況を確認している。



第100図 大型建物 8 [18-S0510] 平面・断面図



第101図 大型建物 9 [14-S1515] 平面・断面図

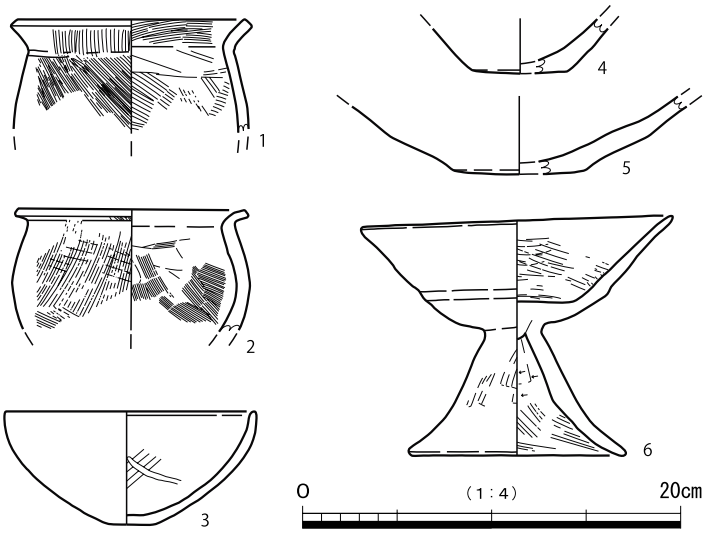


第102図 14グリッド南西部住居配置図

２　竪穴住居・竪穴遺構

住居9-Ｓ0001（第104図・図版16）

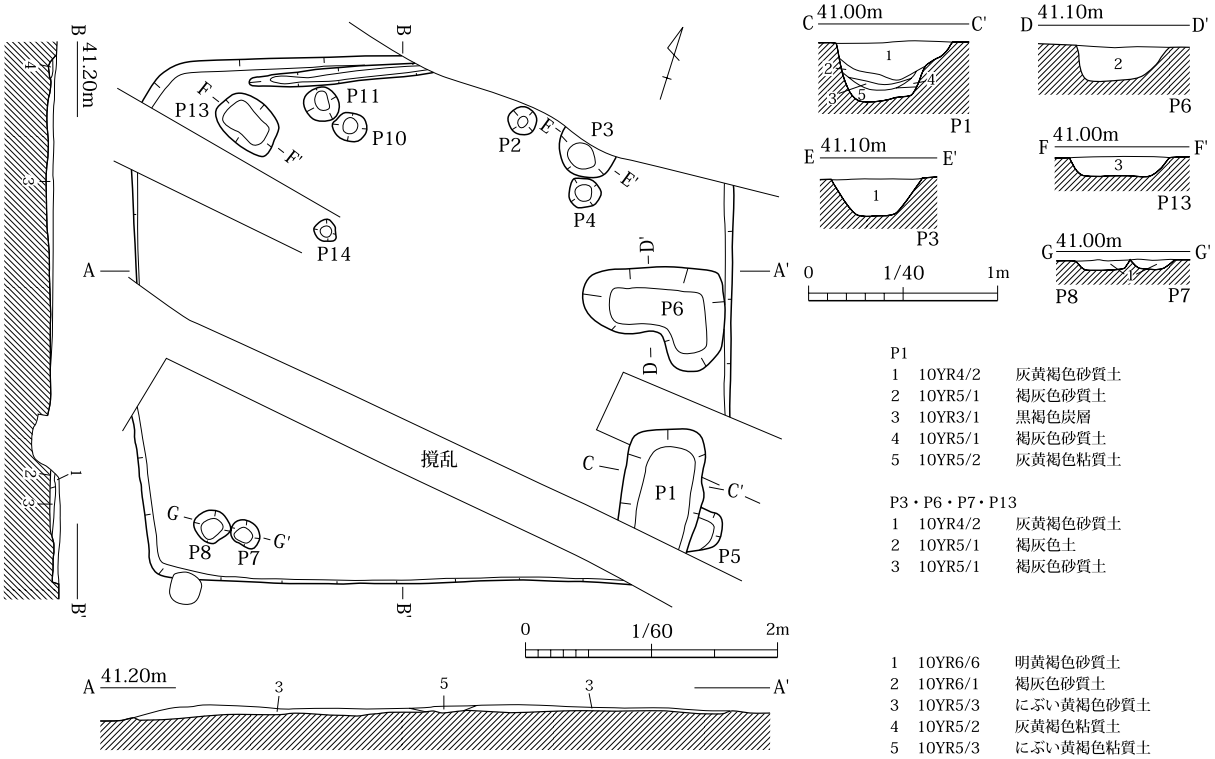
９グリッドの９Ｉ～９Ｊ地区において検出した竪穴住居である。円形周溝14-S1505と重複するが、切り合い関係からそれより新しい。また、南側に隣接する14－Ｓ1506と一部重複するとみられるが、後世の大きな削平と現代の撹乱により、残存状況は非常に悪く新旧関係はつかめなかった。長辺4.75ｍ、短辺4.2ｍを測る方形プランを呈し、深さは検出面から６㎝程度である。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、炭片を含む。中央部でチップ状の炭層（５層）を確認したが、住居存続中のものか住居廃絶に伴うものかは不明である。貼床は確認されなかった。住居内からは、縁辺部を中心に土坑、ピットを検出した。住居の東辺中央と南東隅では、それぞれ長辺１ｍ、短辺0.5ｍほどの土坑があり、貯蔵穴の可能性もある。また、北辺で側溝の残穴も確認した。中心部には目立った柱穴はなく、主柱穴については確認できなかった。



第103図 住居9-S0001 出土遺物実測図

出土遺物（第103図・図版54）

１・２は小型甕の上半部で体部外面に黒斑を有する。１は張りの弱い体部から頸部で外傾し口縁部に



第104図 住居9-S0001 平面・断面図

至る。口縁端部は角張り面を有する。内外面ともにハケ調整を行う。２は丸みのある体部から大きく外反した短い口縁部を有する。外面はタタキ後ハケ調整、内面はハケを施すが摩滅し不明瞭である。３は小さな凸レンズ状を呈する鉢で、椀形をなす。４は甕の底部で平底気味の凸レンズ状を呈している。５は壺の底部で凸レンズ状を呈し、体部へやや外弯し外方へ大きく開く。４・５とも摩滅が激しく調整不明である。６は他の土器に比べ新しい様相の高杯で、杯部にやや鈍い稜をもち口縁部は直線的に開く。脚部は緩やかに外反し裾端部に至る。杯部・脚部の接合は粘土充填法を用いる。この住居に伴うものは６の高杯のみで、他は混入品であるが、４、５は重複する円形周溝14-S1505に伴うものと考えられる。

住居14-S0001（第105図・図版17）

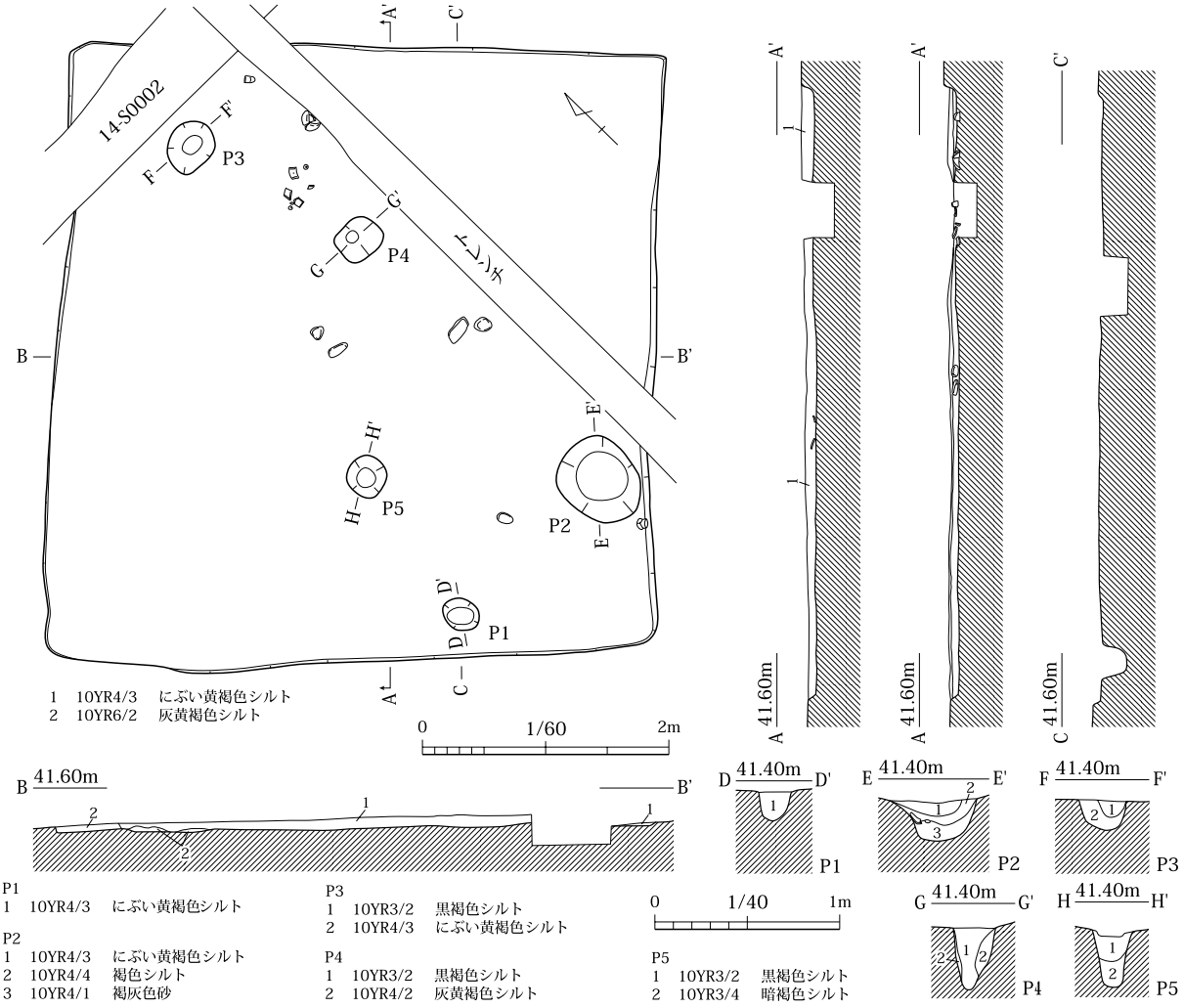
14グリッド５Ｉ～６Ｊ地区において検出した竪穴住居である。溝14-S0002と重複するが切り合い関係から14-S0001が古い。一辺約4.8ｍの正方形プランで主柱は2本である。主柱穴は略方形で、一方には抜き取り穴が断面にて検出された。径約14㎝。屋内土坑は南東壁際に位置し、土坑内には土器の投棄が認められた。貼床の硬化は弱く、周溝は検出されなかった。主柱穴の他に小さなピットが検出されたがいずれも掘方まで達しておらず柱穴とは考えにくい。床面、及び壁際から土師器が少量出土したほか、屋内土坑北の床下、貼り床埋土内から土器破片がまとまって出土している。

出土遺物（第106図・図版54）　１～２は床下埋土から出土した甕である。１は球形の体部から大きくし外反し口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面のハケも粗く、内面に輪積み痕を残し、器壁も厚い粗製な作りである。２は体部がやや長胴気味である。口縁部はくの字状に外折し端部は丸く仕上げる。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。３・４は粗製小型丸底壺で、共に丸底でやや横長の楕円形を呈した体部から上方に屈折しやや内弯した口縁部に続き端部は丸くおさめる。３は強い過熱を受けている。５は小型の手づくね鉢である。６～８は弱い稜をもつ高杯の杯部で、口縁部は直線的に立ち上がり上端で外反する。７がＰ２埋土、８は床面直上から出土した。これらの土器は古墳時代前期でも新しい様相を示している。

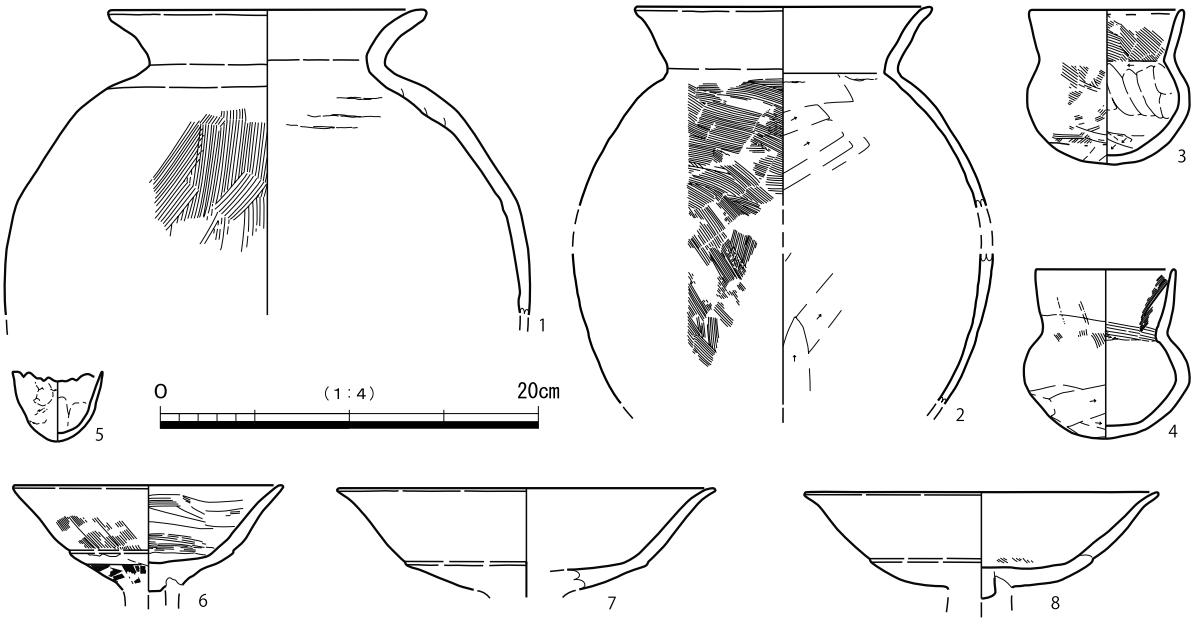
住居14-S0003（第107図・図版18）

14グリッド３Ｉ～４Ｉ地区において検出した竪穴住居である。住居14-S0005ほか6軒と重複する。14-S0003が最も新しい。プランは一辺4.6ｍ～5.1ｍの台形を呈し、主柱は２本である。主柱穴は略円形で、明確な抜き取り痕は検出されなかったが東のＰ３底部には柱痕と思われる径約11㎝の小ピットが検出された。屋内土坑は南東壁際に位置し、住居14-S0004柱穴と重複しているが、土坑の縁に小形鉢が投棄されていた。炉は住居中央やや南西寄りから検出された。床面から10㎝程掘り込んである。貼床の硬化は弱く、周溝も検出されなかった。床面直上から土器破片と鉄製の剣が出土したが、後者は残存状態が悪く実測に耐えなかった。また、埋土中層には５㎜～10㎝大の炭化材が比較的多く含まれ、焼失住居であることを窺わせた。

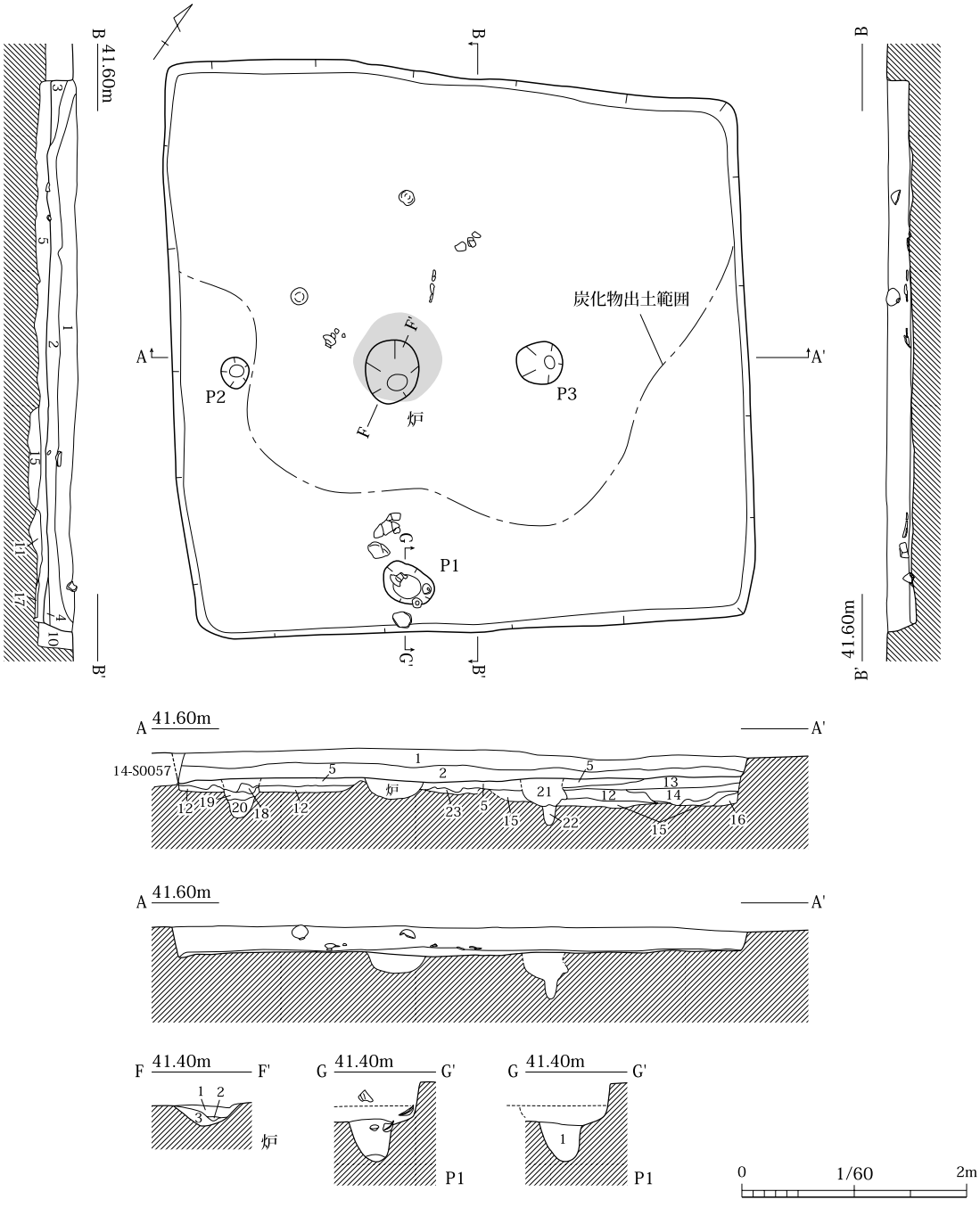
出土遺物（第108図・図版54, 55, 87）　１は高杯であるがややエンタシス形に太くて高さが若干低い脚柱部である。杯部屈曲はやや強い。２は小型器台で大きく開く脚部に透孔を有する。３～９はは小形鉢であるがそれぞれタイプが違う。４が最も新しいものである。３は丸底で外面ハケ調整、内面はヘラミガキで仕上げている。４は口縁部が外傾し、端部がやや尖り気味におさめる。５・６は平底を呈する。７は底部にヘラケズリを施して丸底に整形している。９は椀状を呈する丸底の鉢で、ハケを施



第105図 住居14-S0001 平面・断面図

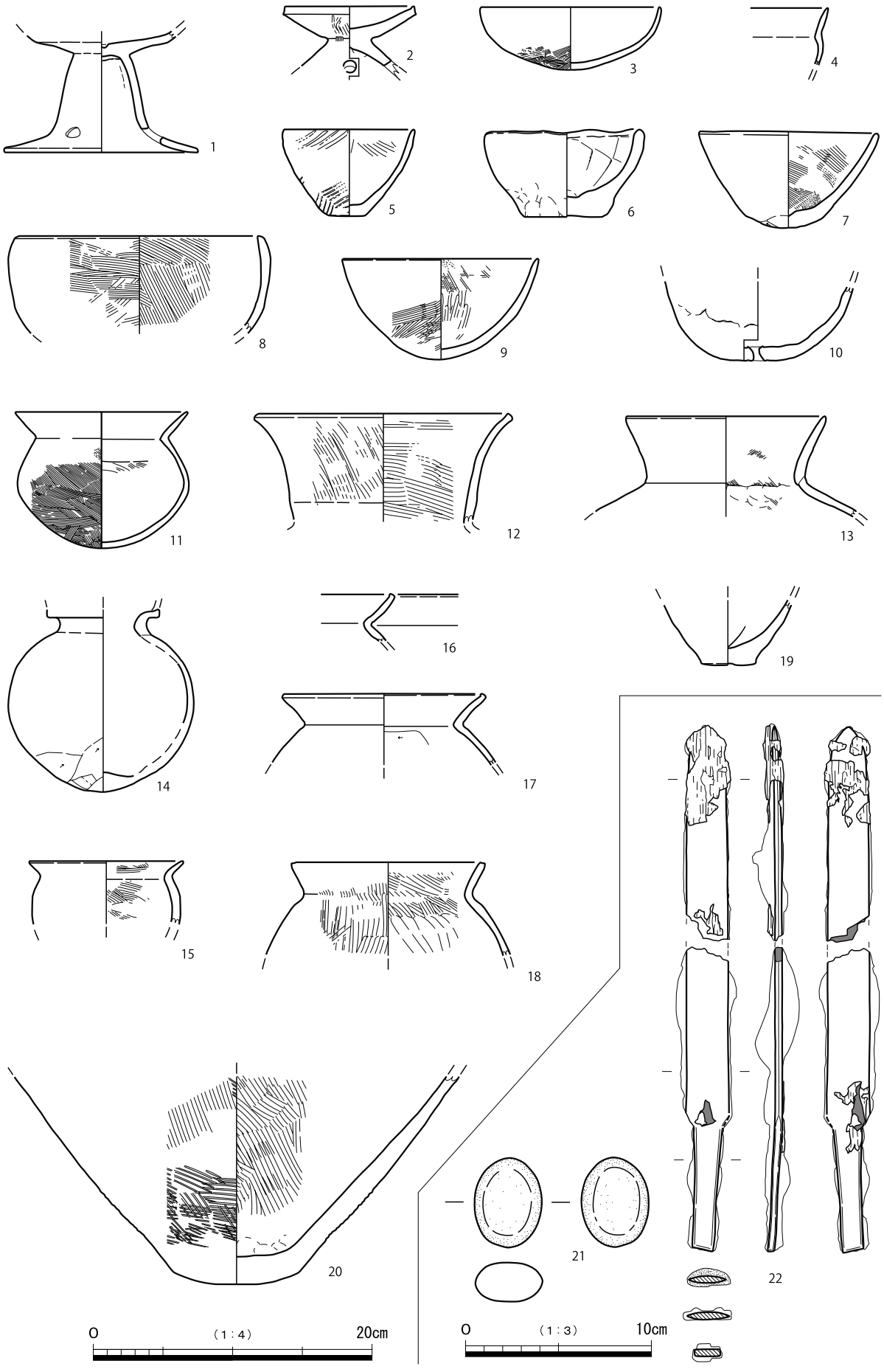


第106図 住居14-S0001 出土遺物実測図



14-S0003
1 10YR4/4 褐色シルト
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
3 10YR4/4 褐色シルト
4 10YR4/1 褐灰色シルトと黄褐色シルトブロックの混合層
5 10YR3/3 暗褐色シルト
6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
7 10YR5/2 灰黄褐色細砂シルト
8 10YR4/2 灰黄褐色シルト
9 10YR4/2 灰黄褐色シルトと黄褐色シルトブロックの混合層
10 10YR4/2 灰黄褐色シルト
11 10YR5/1 褐灰色砂質シルト
12 10YR3/2 黒褐色シルトと粗砂粒・灰黄褐色シルトの混合層
13 10YR3/2 黒褐色シルトと粗砂粒・褐色シルトの混合層
14 10YR3/2 黒褐色シルト
15 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
16 10YR4/4 褐色シルト
17 10YR7/6 明黄褐色シルトと粗砂粒・褐灰色シルトの混合層
18 砂礫
19 10YR4/2 灰黄褐色シルトと砂礫の混合層
20 10YR4/4 褐色シルトと砂礫の混合層
21 10YR4/2 灰黄褐色シルト
22 10YR4/2 灰黄褐色シルト
23 10YR4/2 灰黄褐色シルト

第107図 住居14-S0003 平面・断面図



第108図 住居14-S0003 出土遺物実測図

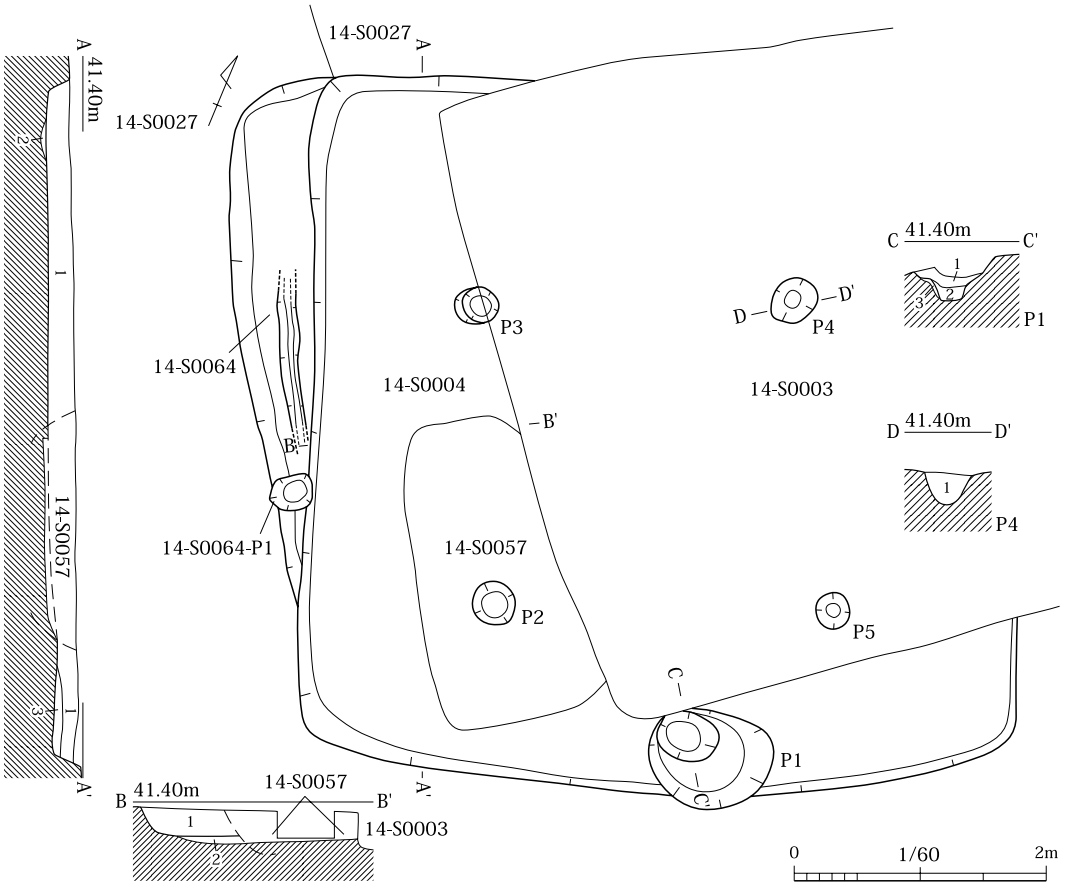
す。10は調整が粗雑な甑で、底部に穿孔を有する。11は体部中位に最大径を有した張りのある小型丸底甕である。口縁部は頸部から鋭く屈曲し端部は尖り気味である。12・13は広口壺で、12は頸部が長く口縁部が緩やかに外反し端部上方に小さく拡張させる。内外面ともにハケを施す。14はやや小型の二重口縁壺で、頸部は球形の体部から直立気味に立ち上がり、上端で屈曲して口縁部に至る。口縁部は欠損する。底部は尖り気味の丸底を呈する。15～20は甕である。15は在地系の小型甕で、球形の体部から口縁部は強く外反する。16・17は布留系甕でくの字状の口縁部で、16は内弯、17は外傾し端部はそれぞれ内方へ小さく肥厚させる。18は在地系粗製甕である。19・20は甕底部である。19は平底にちかい凸レンズ状で、20は丸底に移行気味の凸レンズ状を呈する。21は小型の磨石である。安山岩製で楕円形に摩耗している。22は鉄製の短剣である。床面からわずか上位で横に寝かされた状態で出土した。刃部中央で２片にわかれ接点はないものの、同一個体である。全長28.6㎝以上、刃部残存長21.1㎝、刃部最大幅2.3㎝、刃部厚４㎜、茎部長7.5㎝、茎部幅1.1～1.5㎝、茎部厚４㎜である。刃部は、フクラ状の切先をもつ。刃部横断面形は、凸レンズ状の両丸造であり、鎬はみられない。関の形状は判然とはしないものの、斜めに緩い弧を描きながら茎部へとつながるナデ関である。茎部は細長く、茎尻に向かって徐々に幅を狭める。茎尻は一文字だが、軸に対してやや斜めに傾く。茎部の横断面形は、長方形である。なお、Ｘ線透過写真で確認したが、錆が厚いため目釘孔の位置は特定できていない。刃部、茎部ともに木質が付着していることから、鞘と把を装着していたことがわかる。

住居14-S0004・S0064（第109図・図版18-2）

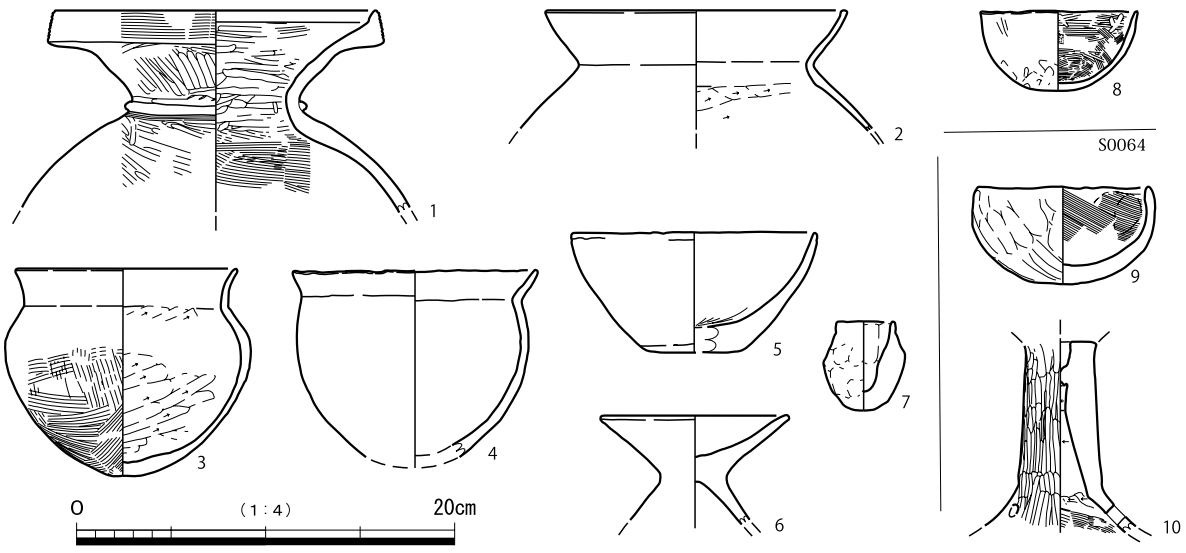
14グリッド２Ｉ～４Ｉ地区において検出した竪穴住居である。住居14-0027・14-S0034より新しく住居14-S0003や土坑14-0057より古い。重複関係はいずれも土層断面によって確認した。14-S0004と14-S0064の重複関係は、埋土断面の観察から前者が後者を壊して構築していることが確認されている。このため14-S0064の遺存状況は極めて悪く、南西壁、及び周溝と僅かな床面しか残っておらず、屋内土坑、柱穴も検出されなかった。14-S0004と14-S0003の重複部は前者のほうが浅いため掘方も残っていないが、柱穴と思われるものだけは14-S0003の床下から検出された。その配置から方形4本柱竪穴住居跡と推定される。柱穴はいずれも略楕円形で、柱痕が検出されていないこと、重複する14-S0003がほぼ同時期と推定されることから柱は抜き取られているものと考えられる。屋内土坑は南壁際に位置する。貼床の硬化は弱く、埋土との違いはほとんど分からないほどであった。周溝は検出されなかった。埋土から遺物が出土したが、14-S0004・S0064に伴うものか否かは不明である。

出土遺物（第110図・図版55, 61）　１～８は14-S0004出土遺物。９・10はS0064出土遺物である。１は広口壺で、口縁端部を上方に拡張させ外端面に擬凹線をめぐらし、頸部に貼り付け突帯を施す。西部瀬戸内からの搬入品と思われる。２は布留系の甕で、口縁部がやや内弯し、端部を内方に肥厚する。内面頸部やや下からヘラケズリを施す。３・４は小型の甕で、３は体部最大径が上方に位置し、口縁部は外反する。底部は小さな丸底を呈する。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。５は平底に近いレンズ状を呈する鉢で、内外面ともナデ調整を施す。６は小型器台の受け部である。７は手づくね鉢の完形品で、口縁部が尖り気味である。８・９は小型の鉢で椀状を呈する。内面ハケ調整を施す。10は高杯脚部で、筒状の脚柱部から屈曲し下外方へ開く。外面はヘラミガキを施し、裾部に２方向の円孔を有す。1はS0064の、２はS0003の、９はS0004からの混入品であろうか。

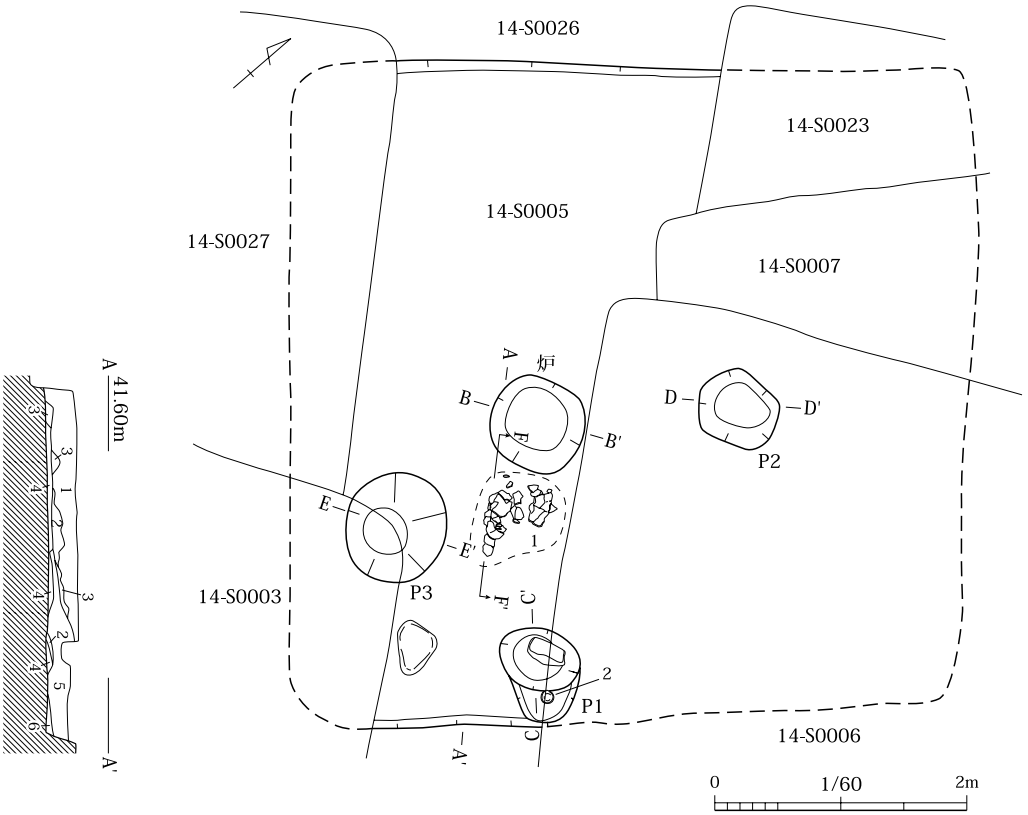
住居14-S0005（第111図）



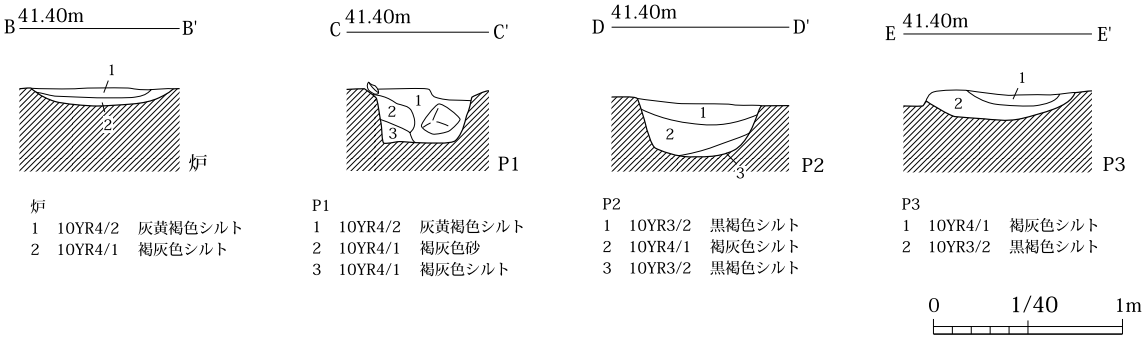
第109図 住居14-S0004・S0064 平面・断面図



第110図 住居14-S0004・S0064 出土遺物実測図



1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト・炭化物
3　焼土
4　10YR4/1　褐灰色シルト
5　10YR4/2　灰黄褐色シルト
6　10YR4/1　褐灰色シルト・炭化物



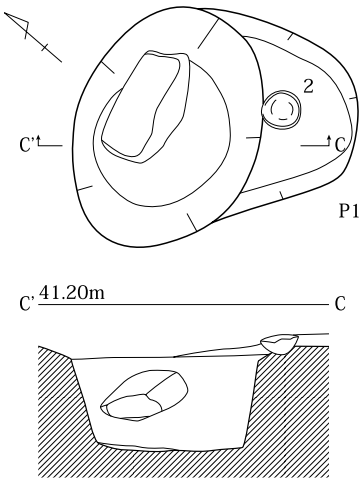
炉
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/1　褐灰色シルト

P1
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/1　褐灰色砂
3　10YR4/1　褐灰色シルト

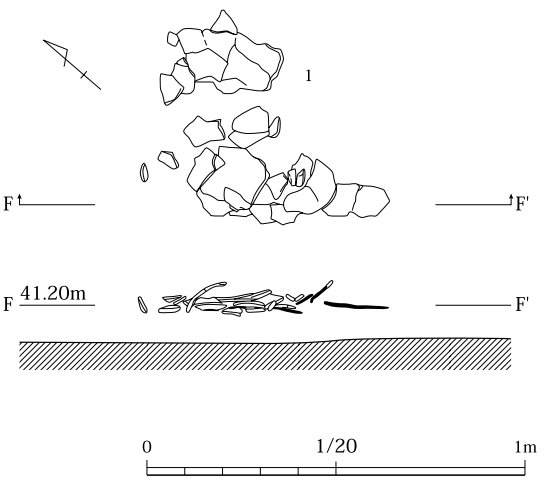
P2
1　10YR3/2　黒褐色シルト
2　10YR4/1　褐灰色シルト
3　10YR3/2　黒褐色シルト

P3
1　10YR4/1　褐灰色シルト
2　10YR3/2　黒褐色シルト

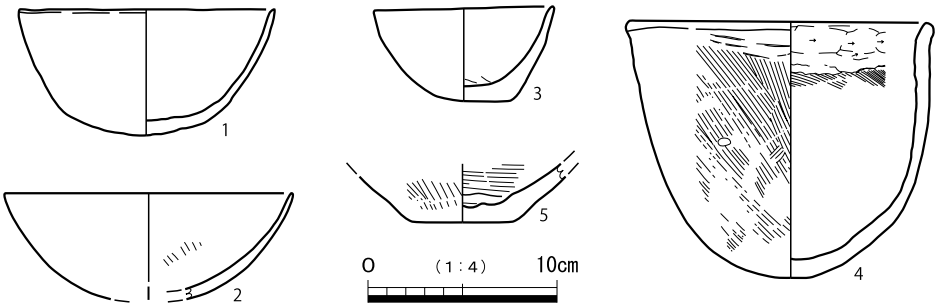
14-S0005　P1



14-S0005　出土状況



第111図 住居14-S0005 平面・断面図



第112図 住居14-S0005 出土遺物実測図

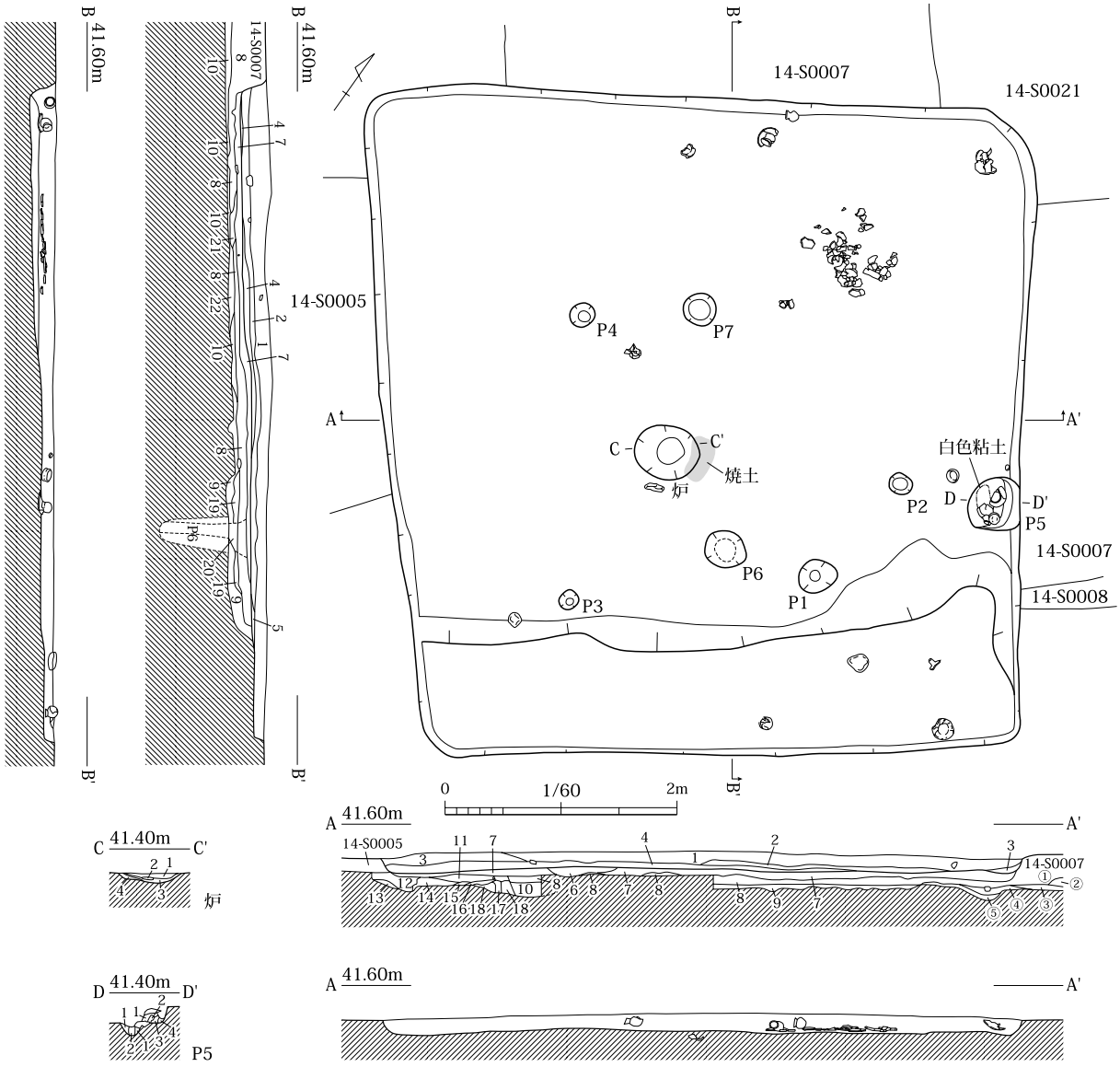
14グリッド３Ｈ～３Ｊ地区において検出した竪穴住居である。住居14-S0026より新しく、住居14-S0023ほか６軒よりも古いと推定される。全体の３分の２程は壊されており、南東、及び北西壁の一部と床面が帯状に残存していた。なお、明確な主柱穴は検出されなかった。残存する部分は壁間約5.3ｍを測り、また、北東側で重複する14-S0023ほか４軒より若干ながら掘方が深く北東壁の位置だけは大まかに判別できたため、一辺約5.3ｍの正方形竪穴住居と推定できる。屋内土坑は南東壁際に位置し、炉は住居中央やや南西よりに検出された。なお、炉の南西にあるＰ３埋土にもかなり多量の焼土が含まれていた。位置的はこの住居以外ではあり得ないので、本住居に伴う第二の炉跡かもしれない。床面の硬化はやや強く、周溝は検出されなかった。屋内土坑内に30㎝大の割石と土師器の杯が、また、炉跡付近の床面に甕破片が投棄されていた。

出土遺物（第112図・図版55）　１～４は鉢で、１・２は椀状を呈し、１はやや尖り気味の丸底で内外面ともに摩滅が顕著である。３は小型品で平底を呈す。４は器高がある丸底を呈した鉢で、直線的に立ち上がる体部から口縁部は僅かに外反する。外面に粗いハケを施す。５の甕底部の形状は平底気味の凸レンズ状を呈し、体部への移行はやや外弯して外斜上方へ開く。

住居14-S0006（第113図・図版19）

14グリッド４Ｈ地区において検出した竪穴住居である。住居14-S0007ほか6軒と重複する。14-S0006が最も新しく、長辺約5.7ｍ、短辺約5.1ｍの略台形2本柱竪穴住居跡である。主柱穴（Ｐ６・Ｐ７）は略円形で明確な柱痕が検出されなかったこと、柱穴内がほぼ単一土層で埋められていたことから柱は抜き取られたものと推定される。住居南東壁際にはベッド状遺構に類似する段差が認められるが、この部分は本来の地山が砂礫層であり、意図して削りだしたものか不可抗力で段差が残ったものか判断に苦しむ。段差表面の一部には僅かに土を貼っている。屋内土坑は北東壁際に位置し、炉は住居ほぼ中央で検出された。貼床の硬化はやや強く、床面では主柱穴以外にも小型のピットが検出されたが、位置や規模から柱穴とは考えにくいものが多い。床面直上や屋内土坑内から小型丸底壺や高杯、甕破片が出土したが、特に小型丸底壺の比率と完形品の多さが特筆される。

出土遺物（第114図・図版56）　１～４は高杯である。１～３は杯部の屈曲が弱く口縁部がやや外反しながら大きく伸び、４は脚部がエンタシス状に膨らむなど、新しい要素を示す。いずれも外面、内面ともに摩耗して調整は不明瞭であるが一部にハケが残る。５は小型の鉢で椀状を呈する。６～10は小型丸底壺で、いずれも床面直上から出土している。残存状態がよく、９の底部が欠けているが他の４点は完形品である。６～８の底部は丸底であるが、10は底部が厚くやや尖り気味である。８と９の形態は小型丸底BタイプとCタイプに近い。11は小型壺である。12は在地系の複合口縁壺で、外面口



1	10YR4/4	褐色シルト
2	10YR4/4	褐色シルト
4	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト
3	10YR3/3	暗褐色シルト
5	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト
6	10YR3/3	暗褐色シルト
7	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト
8	10YR3/3	暗褐色シルト
9	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト
10	10YR4/2	灰黄褐色シルト
11	10YR4/2	灰黄褐色シルト
12	10YR3/3	暗褐色シルト
13	2.5Y4/1	黄灰色シルト
14	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト
15	10YR7/6	明黄褐色シルト
16	10YR5/6	黄褐色シルト
17	10YR3/1	黒褐色砂
18	10YR4/1	褐灰色砂
19	10YR4/2	灰黄褐色シルト
20	10YR4/1	褐灰色シルト
21	10YR4/2	灰黄褐色シルト
22	10YR4/1	褐灰色シルト

P5

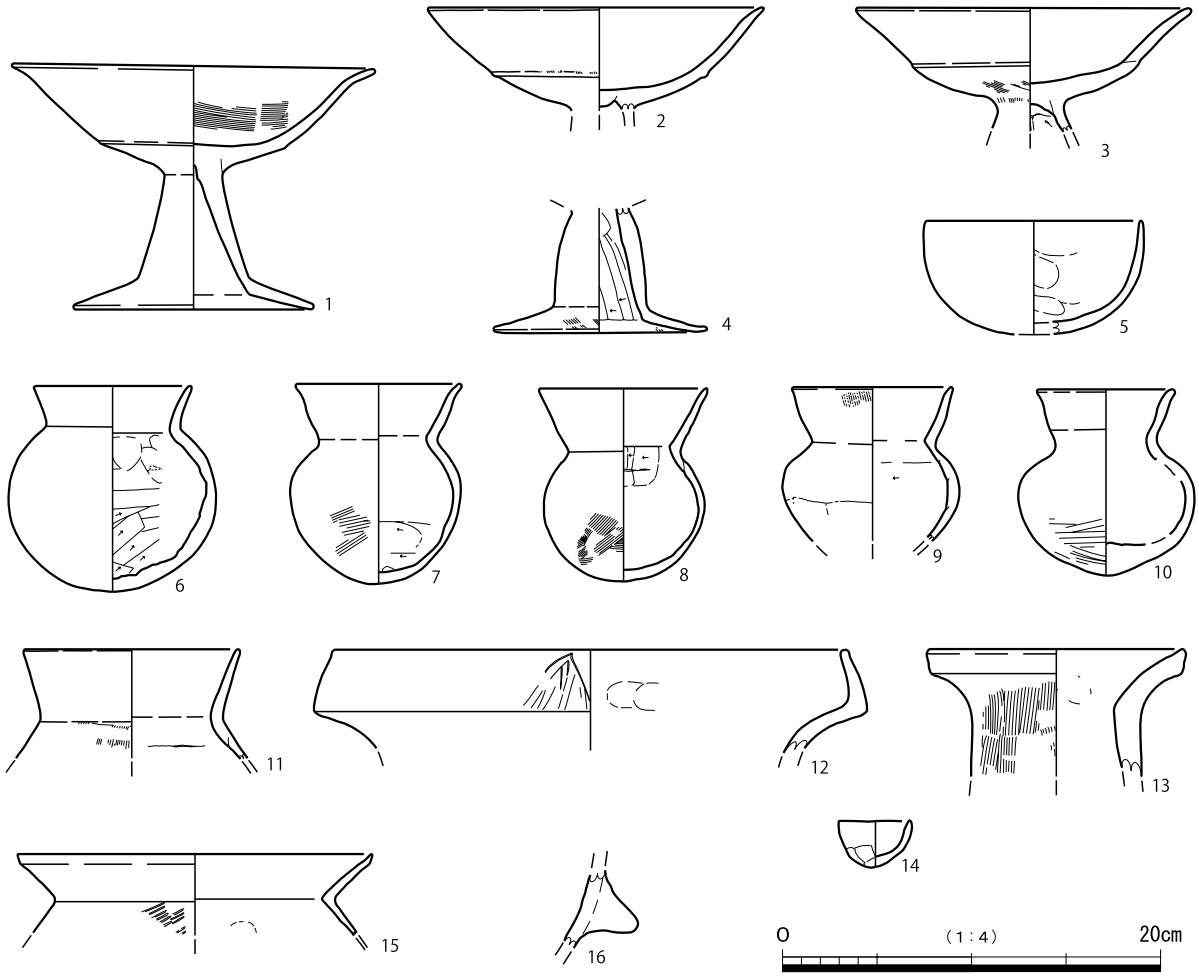
1	10YR3/2	黒褐色土シルト
2	10YR7/1	灰白色粘土
3	2.5Y4/3	にぶい黄褐色シルト
4	10YR3/2	黒褐色シルト

炉

1	10YR3/2	黒褐色シルト
2	10YR3/1	黒褐色シルト
3	5YR6/6	橙色焼土
4	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト

第113図 住居14-S0006 平面・断面図

縁部にヘラ描き鋸歯文を施す。13は在地系の器台で、最少径を上方にもつ。14は小型の手づくね鉢である。15の甕は河内産庄内甕で搬入品である。口縁部は鋭くくの字状に屈曲し、端部は上方につまみあげる。外面は右上がりの細かい叩きめ痕、内面は頸部までへら削りが施されるので鋭い稜線を作る特徴がある。 6 は鉢形の器形に三日月形の把手を付した土器である。12・13・15は明らかに他の遺物よりは古く、重複する住居からの混入品とみられる。遺構の構築時期は床面直上から出土した小型丸底壺が指標となろう。

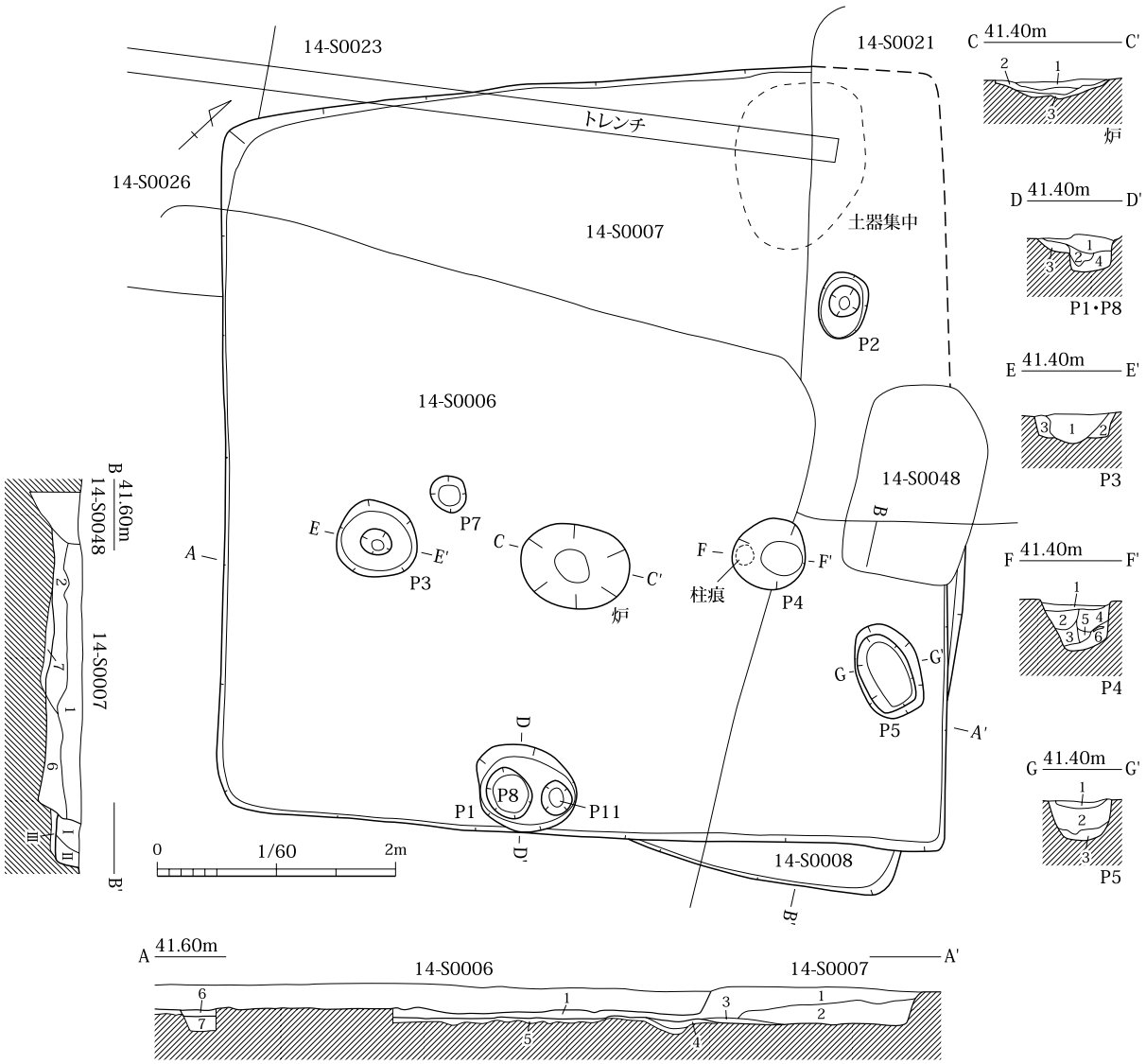


第114図 住居14-S0006 出土遺物実測図

住居14-S0007・S0008（第115, 116図・図版20）

14グリッド４Ｈ～５Ｈ地区において検出した竪穴住居である。住居14-S0026ほか３軒より新しく、住居14-S0021・14-S0006、及び土坑14-S0048より古い。14-S0007と14-S0008の新旧関係は、埋土の断面観察から前者が新しく後者が古いことが確かめられている。14-S0008はほとんどが壊されており、南壁と西壁の一部が僅かに検出されたのみである。14-S0007より浅いため掘方も残存せず、この住居に伴う柱穴も検出されなかった。14-S0007はより新しい14-S0006より深く掘り込まれているため床面、掘方ともに残存しており、規模は比較的正確に判明した。長辺約4.7m、短辺約4.1mのやや歪んだ方形プランを呈し、主柱２本の住居跡である。主柱穴（Ｐ３・Ｐ４）は略楕円形でＰ４の土層断面で柱抜き取り痕らしき土層が確認された。Ｐ３は底面中央が僅かに窪み、これが柱痕だと思われるが、土層断面をみるかぎり抜き取られたようである。Ｐ４での抜き取り痕径は約11㎝、Ｐ３の窪み底径も約11㎝である。屋内土坑は南東壁際に位置する。貼床の硬化はやや硬く、炉は住居中央やや南東よりで検出された。床面では複数のピットが検出されたものの、これらの住居に伴うものとそうでないものがあるようである。なお、図中でＰ５としたピットは14-S0008の屋内土坑である可能性もある。14-S0007の北西壁際床面には高杯破片が集中して投棄され、南東壁に貼り付くように小型壺の完形品が出土している。

出土遺物（第117図・図版57）　掲載した遺物は全て14-S0007から出土したものである。１～５は高



1　10YR3/3　暗褐色シルト
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト
3　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
4　10YR3/2　黒褐色シルト
5　10YR4/2　灰黄褐色シルト
6　10YR4/2　にぶい黄褐色シルト
7　10YR4/2　灰黄褐色シルト

炉
1　10YR4/3　灰黄褐色シルト
2　10YR4/1　褐灰色シルトと炭化物・焼土の混合
3　7.5YR6/2　灰褐色シルトと焼土・炭化物の混合

P1
1　10YR3/2　黒褐色シルト
2　10YR3/3　暗褐色シルト
3　10YR4/1　褐灰色シルト
4　10YR4/1　褐灰色シルト

P2
1　10YR3/3　暗褐色シルト
2　10YR3/2　黒褐色シルト
3　10YR6/6　明黄褐色　シルト

P4
1　10YR3/2　黒褐色シルト

P5
1　10YR4/1　褐灰色シルト
2　10YR6/6　明黄褐色シルト
3　10YR4/1　褐灰色シルト

P6
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
3　10YR4/2　暗灰黄褐色シルト
4　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
5　2.5YR4/3　オリーブ褐色シルト
6　2.5YR4/3　オリーブ褐色シルト

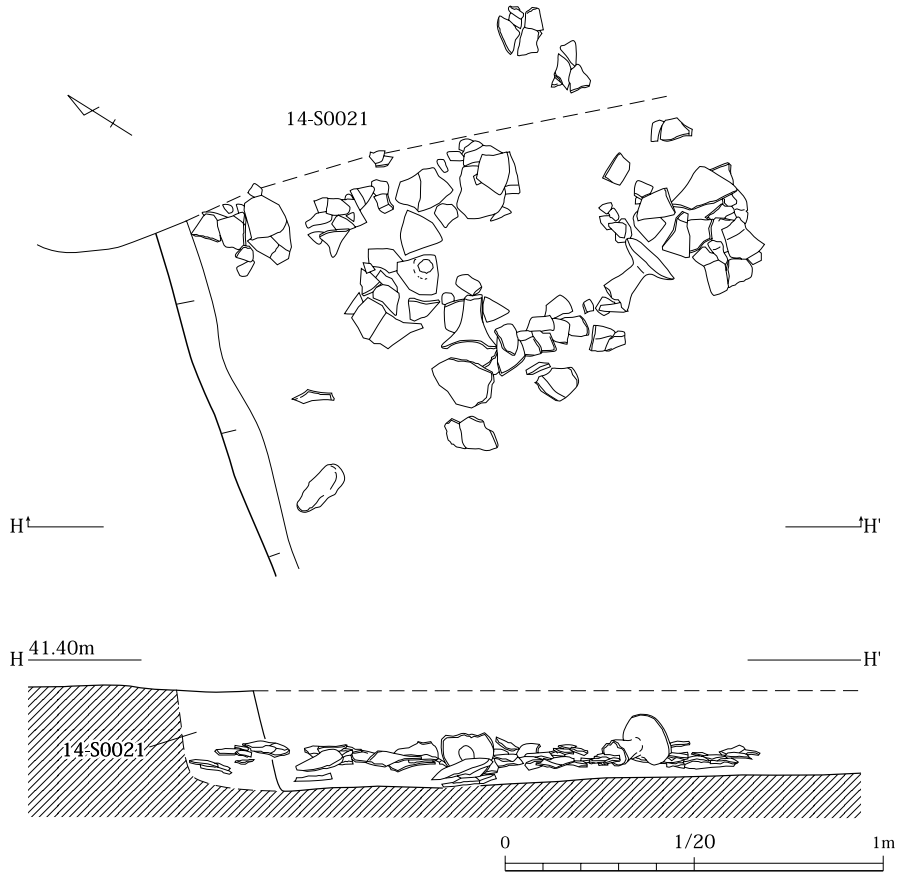
P7
1　10YR5/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト
3　10YR4/1　褐灰色砂

P10
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
3　10YR6/1　褐灰色砂

P11
1　10YR5/1　褐灰色シルト
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト

14-S0008
Ⅰ　10YR4/2　灰黄褐色
Ⅱ　10YR4/2　灰黄褐色シルト
Ⅲ　10YR3/3　暗褐色シルト

第115図 住居14-S0007 平面・断面図

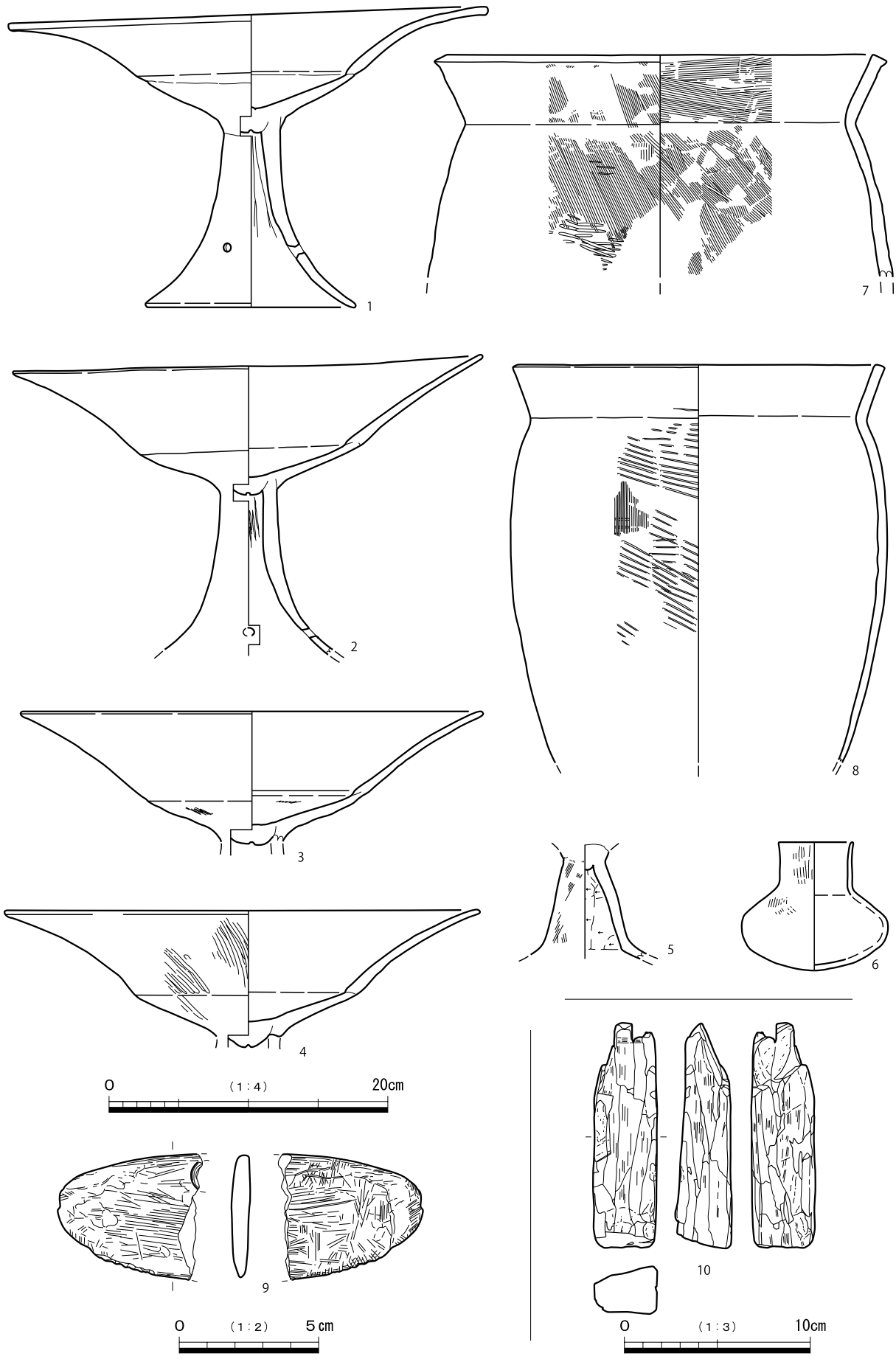


第116図 住居14-S0007 遺物出土状態図

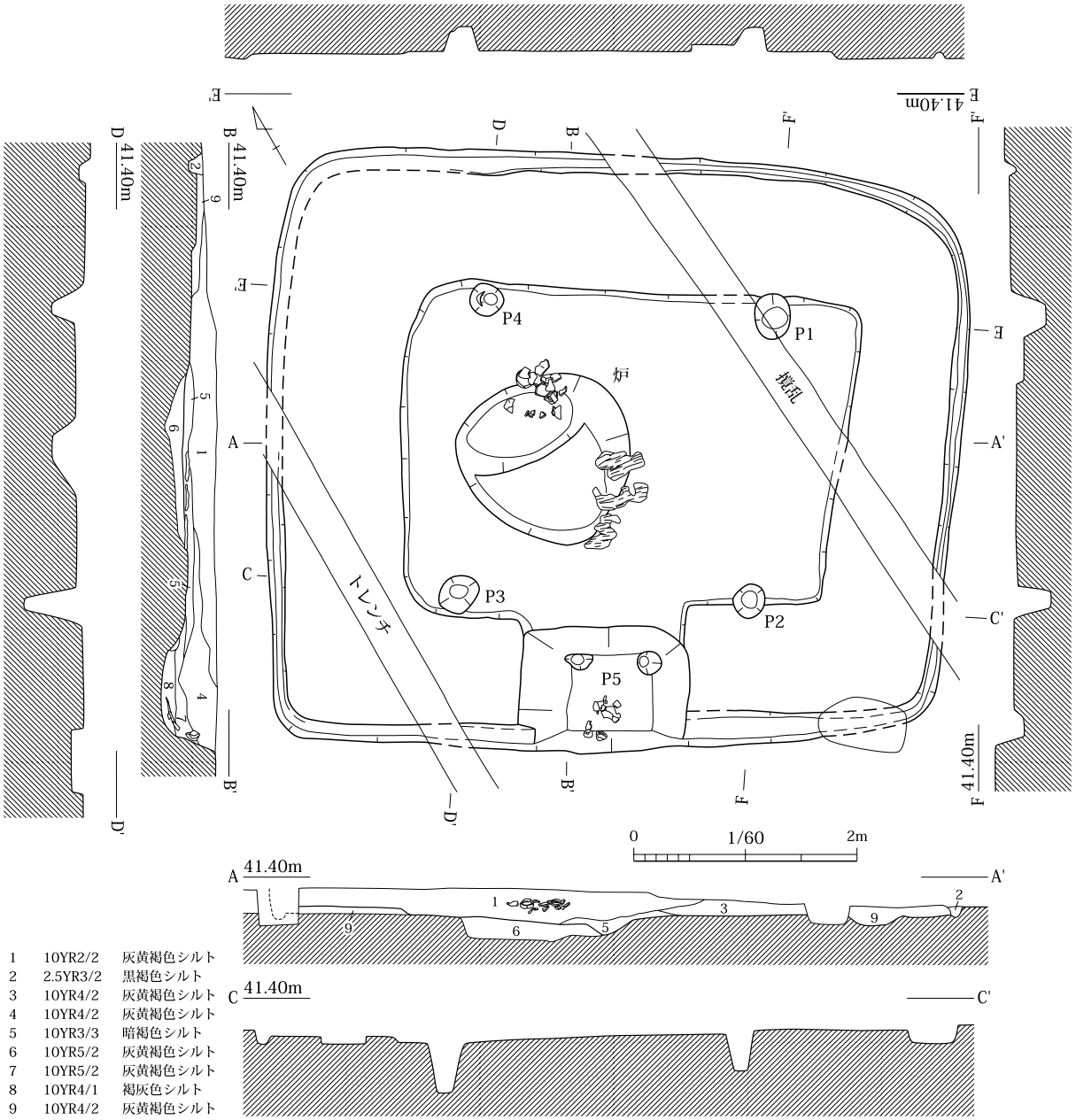
杯である。いずれも床面直上に投棄されたもので、１～６は狭い範囲にまとまって出土した。器形は杯部の屈曲が弱く直線的で、口縁部は緩く外反しながら大きく開く。脚部には３方向の円孔を施す。１・２は杯部と脚部で色調が全く異なり、杯部は橙色、脚部は浅黄色である。２個体ともに同様に違うこと、杯と脚の接合部で明確な境界があることから、製作時に異なる粘土を使い分けたものと考えられる。ただし、外面には赤色塗彩が施されていることから、使用時にはこの色の違いは重要視されていないものと思われる。６は小型の直口壺で、扁平球な体部より口縁部が直行する。この器形の壺はこの遺跡では顕著ではない。内面底部に赤色塗彩を施す。７・８は甕で、タタキの上からハケを施している。７・８共に張りの弱い体部から口縁部は緩く外傾する。７は口縁端部下方を拡張し外端面をなす。８の口縁部は丸みをもちおさめる。高杯が集中する範囲に混じって出土した。９は石包丁破片である。本来楕円形であるが、全体の2/3を欠失している。10は砥石である。石質のせいか裂けるような形で細かい破片に分解していた。この住居では高杯破片が集中して出土した以外、出土遺物はそれほど多くない。

住居14-S0012（第118, 119図・図版22）

14グリッド６Ｈ地区において検出した竪穴住居である。大型建物４・６、溝14-S0011と重複するが、この住居が最も新しい。方形プランを呈し主柱は4本である。規模は5.3m×6.3mを測り、周囲には幅約0.1mの壁溝を回らす。同じく周囲幅約１mの範囲に床面より5㎝程高くベット状の施設をコの字形に配し、中央よりやや西側に炉跡、南西側面中央に1.5m×１m、深さ0.2mの土坑状遺構P5を有する。Ｐ５遺構内北側底面両端には浅い窪み痕跡が認められ、これらを梯子状器物の基部痕跡と考えれば建



第117図 住居14-S0007 出土遺物実測図



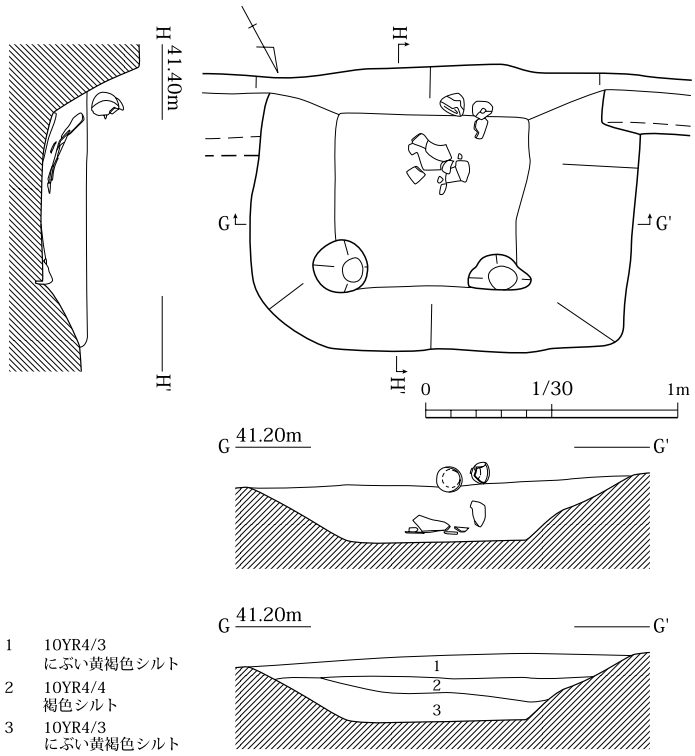
第118図 住居14-S0012 平面・断面図

物主軸を南西から北東に持つことから、この遺構は出入り口の施設と想定される。貼床はないが床面より1段高いベット状部分のみが盛土により貼床状に整形されている。

出土遺物（第120図・図版57）　土器と鉄器が出土しているが、すべて廃絶後の埋土中からのものである。器種は甕、鉢、高杯類、土製支脚などである。１は小型器台、２は外形が左右対称ではなく歪であるが、低脚の高杯か鉢の脚部である。３，４は高杯脚部であるが、３は脚柱内部下半が中空で、上半部は中実のままの特異な脚部である。４は屈折部に４方向の円孔を有する。５～７・17は鉢で５～７は平底を呈する鉢である。５は口縁部が短く外反する。17の底部はやや平底を呈し、口縁端部は上方につまみあげやや尖り気味におさまる。８はやや平底を呈する小型壺である。14・15は在地系の甕で、14は口縁外端面と頸部突帯に刻み目を施す。内外面ともにハケ調整である。15は小型の甕で、球形の体部から口縁部が緩やかに外反する。９～11は畿内系の甕で、10は布留系で、口縁端部は上方に小さくつまみあげる。11は口縁部叩き出しの庄内系であるが、胎土は地元産と思われる。13・16は

甕の底部で丸底を呈する。18の土製支脚は在地系の沓形であるが、外面に透かし孔とヘラ状工具による刺突痕がある特異な支脚である。19は鉄製の鏃である。有茎式に属す。茎部先端を欠損する。刃部は縁全体が欠損しているものの、本来の形状をある程度留めていると判断できる。残存長2.9㎝、残存幅1.3㎝である。刃部は、フクラ状の切先をもつ圭頭形である。茎部断面は、長方形である。

これらの土器の底部は、小型鉢を除けば、小さな平底を残したようなものから15のような丸底のものまで存在する。



第119図 住居14-S0012-P5 平面・断面図

住居14-Ｓ0018・S1002（第121図・図版12-1）

14グリッド５D地区において検出した重複する竪穴住居である。住居14-S1511、大型建物5等と重複するが、14-S0018が最も新しい。

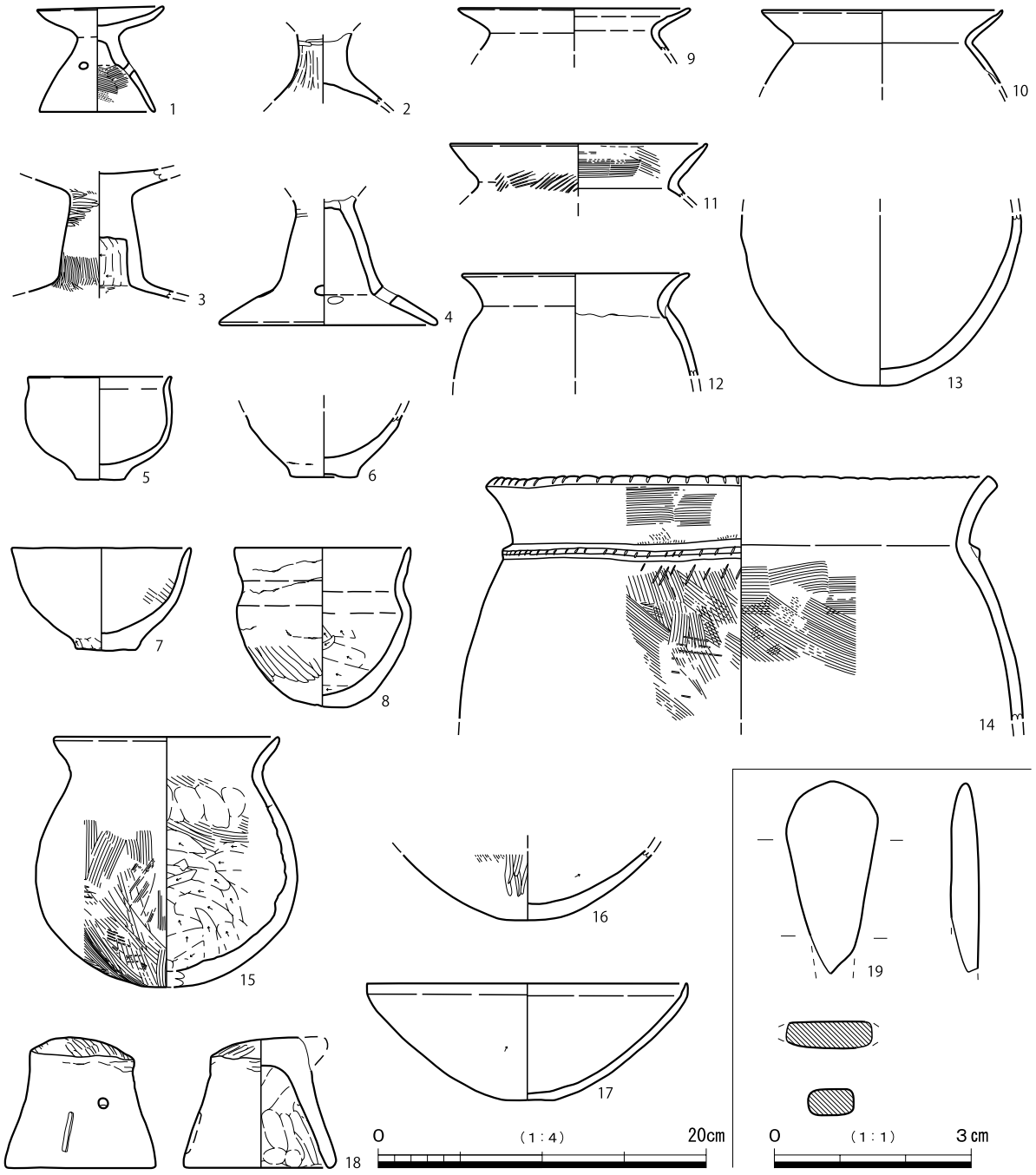
14-S0018は長辺6.2m、短辺4.6mの長方形を呈し、床面までは10㎝を測る。貼床、主柱穴は確認できなかった。

14-S1002は大型建物５を切るが、他の住居には切られる。小型ではあるが、長辺4.0m、短辺3.2mの長方形を呈し、床面までの深さは20㎝である。貼床、主柱穴とも確認できなかった。

出土遺物（第122図・図版57・58）　１～４は14-S0018、５～８はS1002の出土遺物である。１・２は高杯杯部で、１・２とも杯身内底面がほぼ平坦で杯部に明瞭な稜をもち、口縁部は斜め上方に直線的に開く。杯部・脚部の接合は円板充填法を用いる。３は山陰系の複合口縁壺で、肩部に綾杉紋を施す。４は凸レンズ状の甕の底部である。この住居の遺物にしては古すぎるので、住居14-S1002の混入品とみられる。５は頸部が斜め上方に短く直線的に開く短頸壺である。６は甕で、口縁部がやや緩やかに外反する。内外面にハケ調整を施す。甕はこの住居にしては新しすぎるため、住居14-S0018の混入品とみられる。７は丸底気味の凸レンズ状底部を有するの椀状の鉢である。口縁部が上端で内傾する。内外面ともにハケ調整。８は凸レンズ状の底部を有する小型鉢で、口縁部はくの字状に外傾し外端面をなす。

住居14-S0021（第123図・図版20-2）

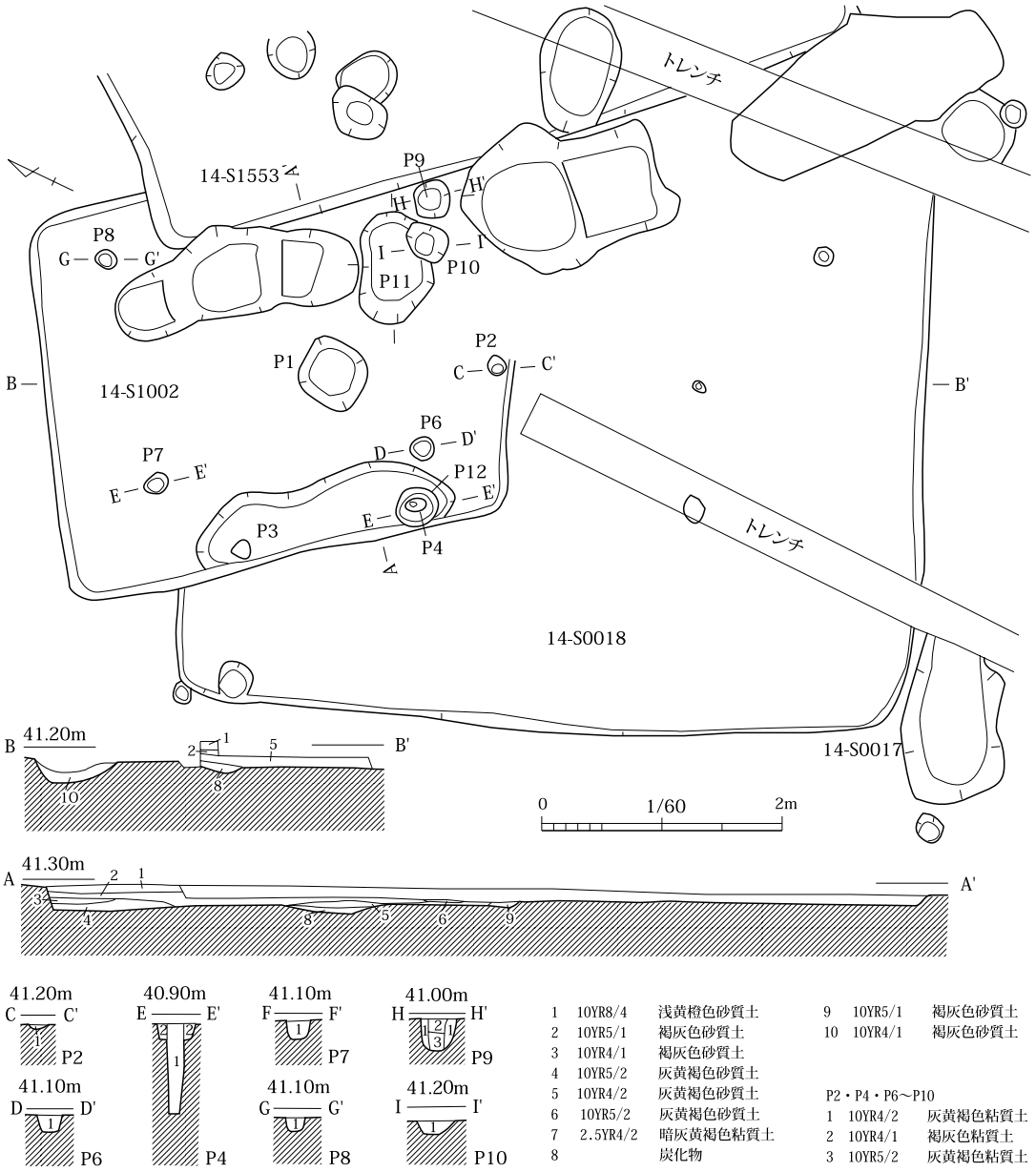
14グリッド４Ｇ～５Ｇ地区において検出した竪穴住居である。住居14-S0023ほか２軒より新しく、住居14-S0006より古い。また、土坑14-S0048とも重複し、それより新しい。主柱穴が1ヶ所の長辺約4.3m、短辺約3.4mの長方形竪穴住居跡である。14-S0006との重複は僅かなので、壁、及び床面はほとんど壊されていない。主柱穴は住居内北西よりに位置する。略楕円形で、底面に柱痕が認められる



第120図 住居14-S0012 出土遺物実測図

が柱は抜き取られていると考えられる。柱痕の径は約11cm。貼床は住居の中央部で認められ、硬度はやや硬い。外周付近は地山、もしくは重複住居の埋土を床面としていた。周溝は北部と東隅で検出された。炉は住居中央やや南東よりで検出され、細長い礫を仕切りとして使用していた。床面で土坑が2基検出されたが、位置や形状から他の住居のような屋内土坑とは異なるものかもしれない。床面で完形に近い土師器が出土したほか、埋土上層に多量の土師器破片が集中して埋蔵されていた。住居埋没後に何らかの理由で一括投棄されたものと思われ、床面出土の遺物とは時期が異なる可能性がある。

出土遺物（第124図・図版58）　1は手づくねの鉢で小型品である。2は裾部が強く屈折して大きく開く高杯脚部である。3～6は鉢に分類されるが、3は皿形を呈し、4は扁平球の体部から口縁部がやや内弯気味に立ち上がる。5・6は椀状を呈するが、5は平底をなす。7・8は台付鉢で、床面直



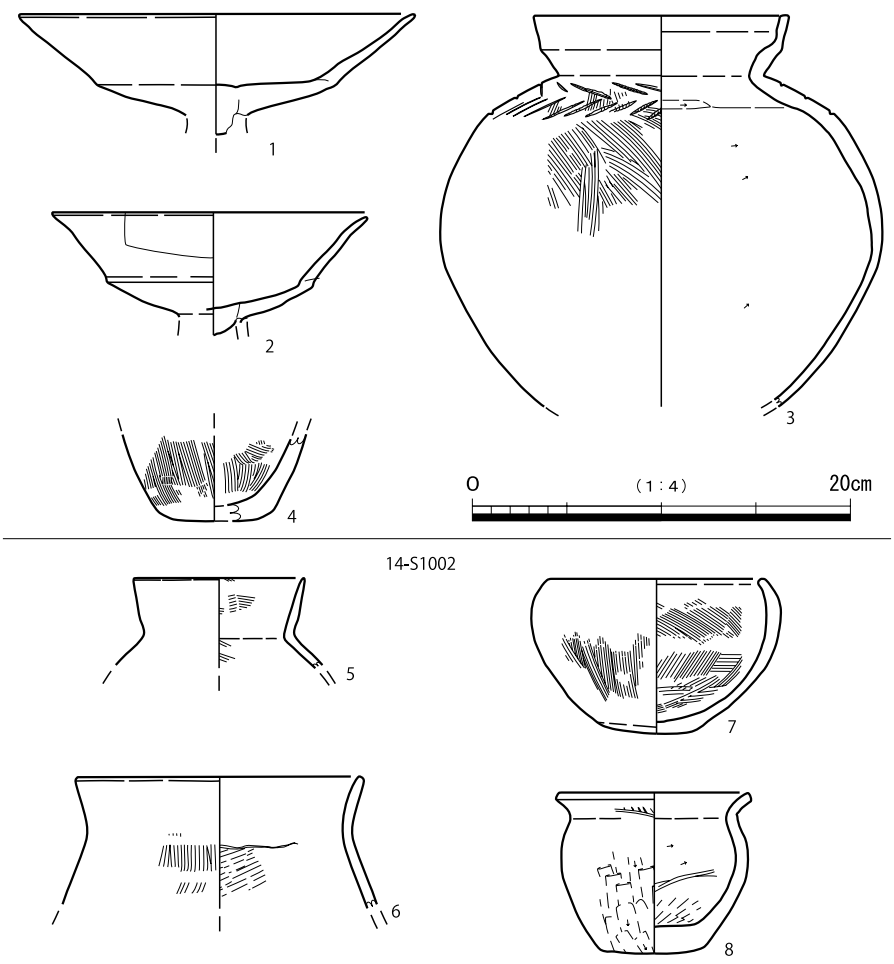
1	10YR8/4	浅黄橙色砂質土	9	10YR5/1	褐灰色砂質土
2	10YR5/1	褐灰色砂質土	10	10YR4/1	褐灰色砂質土
3	10YR4/1	褐灰色砂質土			
4	10YR5/2	灰黄褐色砂質土			
5	10YR4/2	灰黄褐色砂質土	P2・P4・P6～P10		
6	10YR5/2	灰黄褐色砂質土	1	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
7	2.5YR4/2	暗灰黄褐色粘質土	2	10YR4/1	褐灰色粘質土
8		炭化物	3	10YR5/2	灰黄褐色粘質土

第121図 住居14-S0018・S1002 平面・断面図

上からの出土である。９～11は壺で、いずれも埋土からの出土で、このうち10・11は埋土最上層の土器集中部からの出土である。９は口縁部が直線的に開く壺で、端部は丸くおさまる。10は器壁が薄く、扁平球の体部から口縁部は鋭く屈折し、斜上方に開く。内面口縁部に非常に細かいヘラミガキを施す。外面に赤彩を施している痕跡が見られる。精製品である11はくの字状に大きく開く口縁部を有する。端部は外傾し面をなす。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。12～14は庄内～布留系の影響を受けた甕である。12は口縁部がやや内弯、13は外反するもので、いずれも端部は丸くおさまる。14の口縁部は受け口状を呈し、外面肩部には1条の沈線が施されている。

住居14-S0023・S0063（第125図・図版20-1）

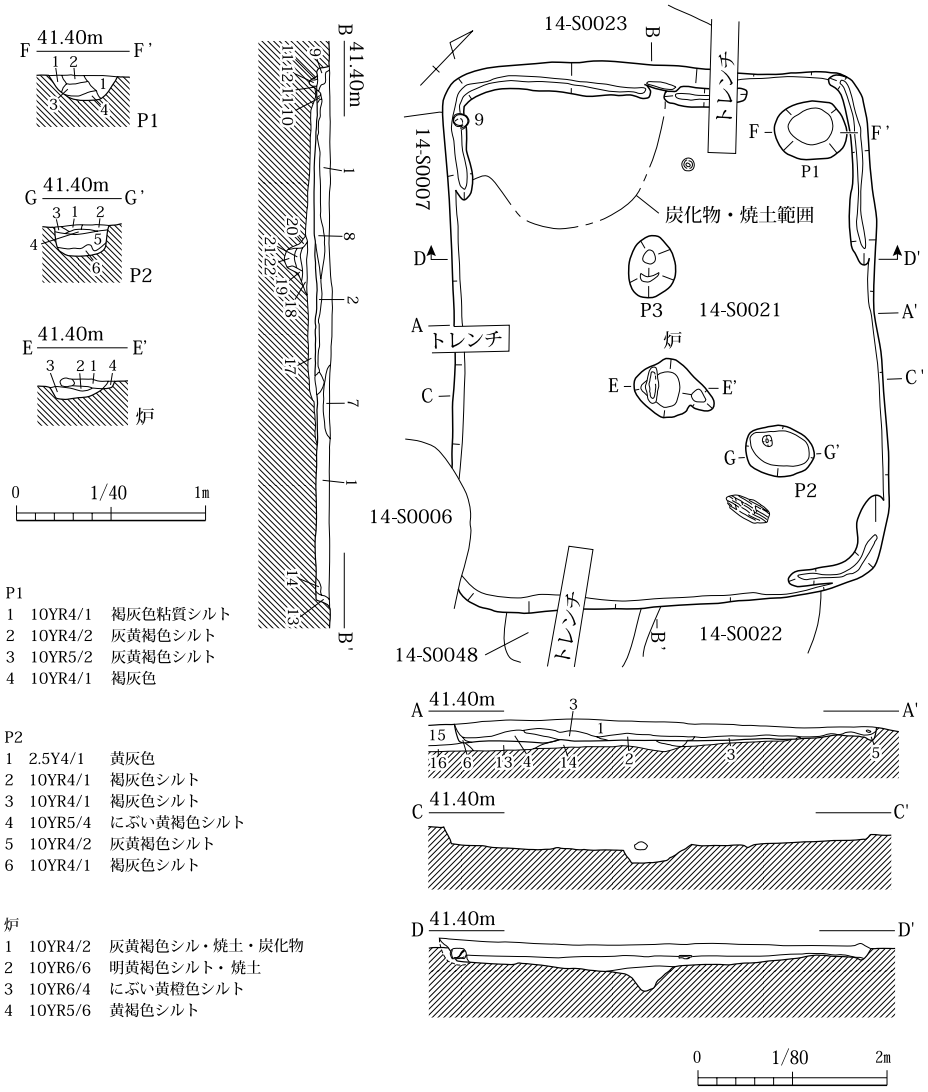
14グリッド３Ｇ～４Ｇ地区において検出した竪穴住居である。住居14-S0026・14-S0005より新しく、14-S0007ほか３軒の住居より古い。14-S0023と14-S0063の新旧関係は、埋土断面の観察から前者が新しく後者が古い。14-S0023は全体の3分の2以上を壊されており、南西・北西壁と床面の一部が残存、



第122図 住居14-S0018・S1002 出土遺物実測図

14-S0063は西壁のほんの一部しか残存していなかった。ただし、後者は14-S0023掘方面で僅かに北西壁が残存しており、かろうじて規模や平面形が類推できる。重複住居の掘方面でもこれら２軒に伴うと思われる炉、屋内土坑、ピットが検出されたが、明確な主柱穴は検出されなかった。このため柱数が不明だが、残存部と掘方の一部から推定すると14-S00023は一辺約6.5ｍ、14-S0063は一辺約6.6ｍ前後となる。いずれも方形プランであろう。屋内土坑は、14-S0023が南西壁際と推定される位置から、14-S0063は北西壁際付近で検出された。いずれも土坑内に土器破片を投棄している。なお、住居14-S0007の炉と重複して検出された屋内土坑に類似する土坑は、位置や検出層位から14-S0063か14-S0008のいずれかに伴うものであるが、特定できない。２軒ともに貼床の硬化は弱く、周溝は検出されなかった。炉は14-S0023に伴うとみられるものが14-S0007床下から検出された。14-S0023埋土からは土器破片がやや多く出土しているが、いずれも混入したもので住居に伴うものではない。ただし、屋内土坑から出土した壺のみは本住居に伴うものとしてよいであろう。14-S0063は屋内土坑からの出土遺物以外に図示し得るものはなかった。

出土遺物（第126図・図版61）　１～５は14-S0023からの出土遺物である。１は高杯である。杯部と脚部で異なる胎土を使用しており、色調が全く違う。14-S0007出土のものと同段階とみられ、混入した可能性がある。２は屋内土坑から出土した在地系の壺である。口縁部は丸みのある体部より緩やかに外反し、端部を上方につまみあげる。内外面ともにハケを施す。３は甕で口縁部は外傾し、端部に面をなす。４は甕の底部で、凸レンズ状を呈する。５は砂質頁岩製の砥石である。偏平で表裏両面を使用している。14-S0023からの出土遺物をみると、図示できなかったものも含めて、甕と壺に古い要素を持つものが認められる。14-S0063出土遺物は６の１点のみ。屋内土坑からの出土で、複合口縁壺である。頸部に貼り付け突帯をめぐらせ、内外面にハケ調整を施す。14-S0023、14-S0063の重複関係からしてもともに14-S0007より古い。



P1
1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト
4 10YR4/1 褐灰色

P2
1 2.5Y4/1 黄灰色
2 10YR4/1 褐灰色シルト
3 10YR4/1 褐灰色シルト
4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
5 10YR4/2 灰黄褐色シルト
6 10YR4/1 褐灰色シルト

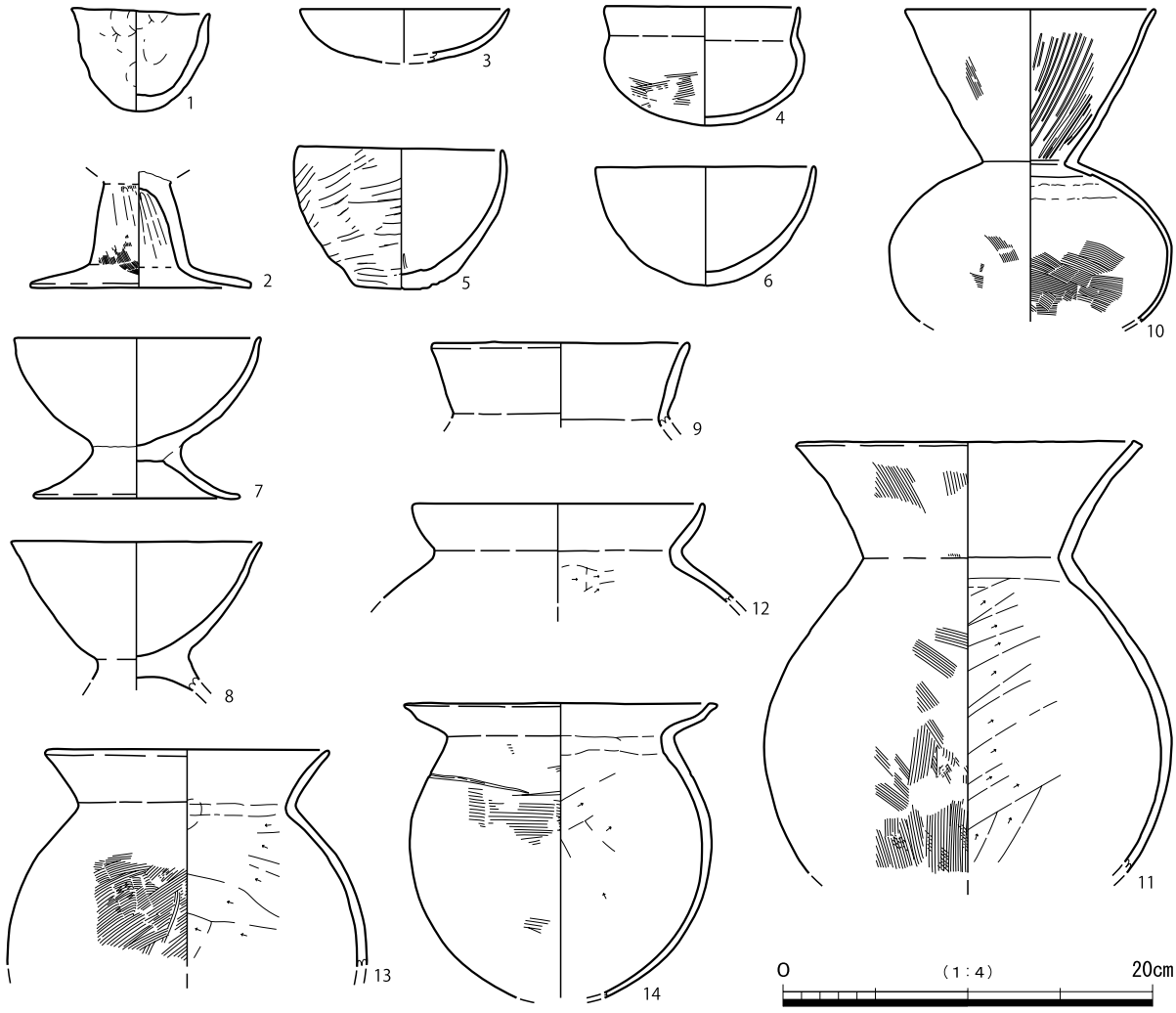
炉
1 10YR4/2 灰黄褐色シル・焼土・炭化物
2 10YR6/6 明黄褐色シルト・焼土
3 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
4 10YR5/6 黄褐色シルト

14-S0021
1 10YR/2 暗褐色シルト
2 10YR3/3 暗褐色シルト
3 10YR3/2 黒褐色シルト
4 10YR4/1 褐灰色シルト
5 10YR3/2 黒褐色シルト
6 10YR4/1 褐灰色シルト
7 10YR4/2 灰黄褐色シルト
8 10YR4/1 褐灰色シルト
9 10YR4/1 褐灰色シルト
10 10YR4/1 褐灰色シルト
11 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
12 10YR4/1 褐灰色シルト
13 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
14 10YR5/1 褐灰色粘質シルト
15 10YR4/2 灰黄褐色シルト
16 10YR5/1 褐灰色粘質シルト
17 10YR4/1 褐灰色シルト
18 10YR4/2 灰黄褐色シルト
19 10YR4/1 褐灰色シルト
20 10YR4/1 褐灰色シルト
21 10YR4/1 褐灰色シルト
22 10YR4/1 褐灰色シルト

第123図 住居14-S0021 平面・断面図

住居14-S0026（第127, 128図・図版23-1）

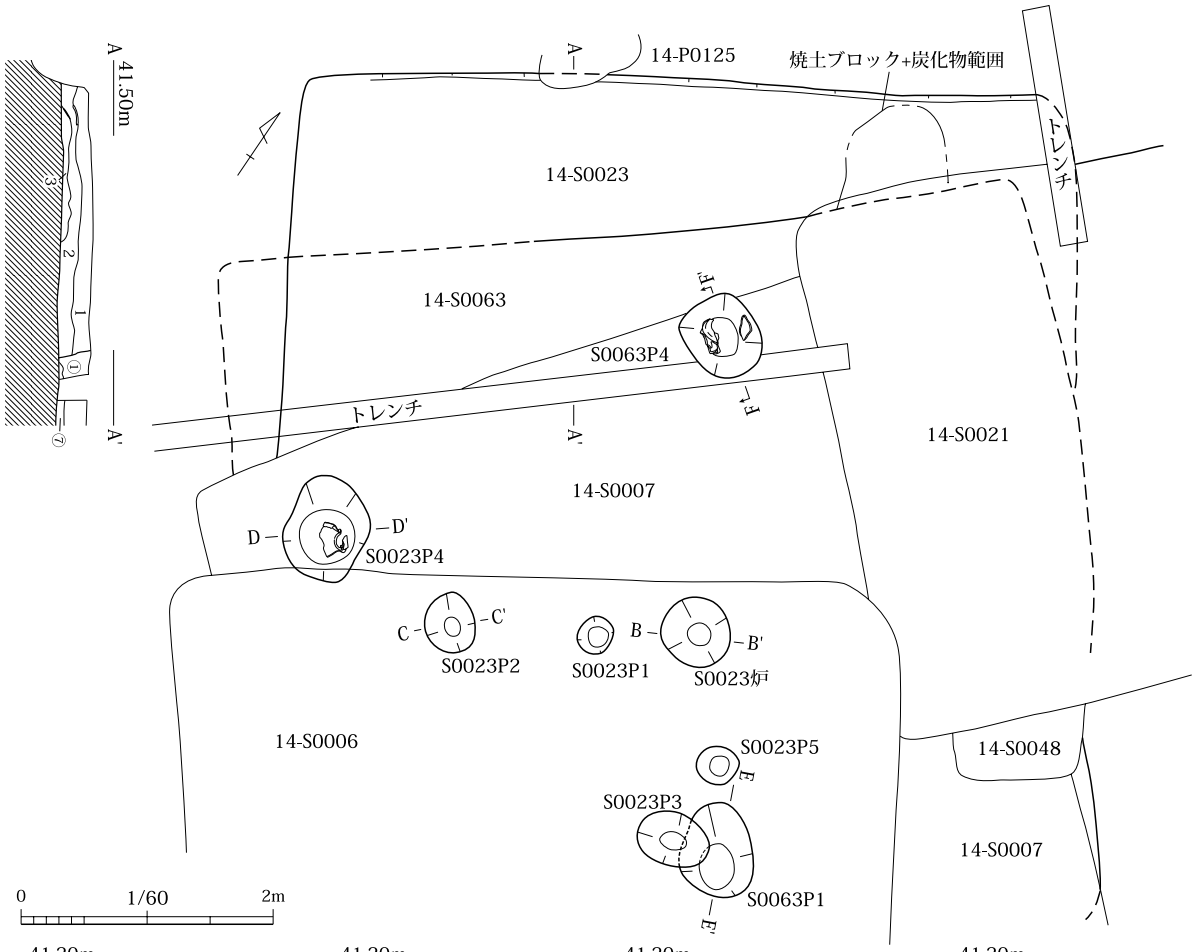
14グリッド２Ｈ～４Ｈ地区において検出した竪穴住居である。住居14-S0005ほか８軒と重複するが14-S0026が最も古い。壁、床面ともに大部分を壊され、北西壁と北西部床面が部分的に検出されたのみである。正確な大きさは不明だが掘方ではこの住居の南西壁が僅かに残存していた。それから推定すると一辺約4.9mの方形となる。主柱穴は６ヶ所で検出され、炉や屋内土坑との位置関係からみても6本柱の住居と推定される。ここでは14-S0026以外に６本柱の竪穴住居はない。柱穴の平面形は略円形または楕円形で、いずれも土層から柱は抜き取られていると判断された。底面には径９～10㎝の柱痕が残る。Ｐ６では柱痕とみられる窪みが底面の２ヶ所で検出され、埋土でも埋め戻し、掘り直しの様相が看取できた。屋内土坑は南西壁際に位置し、中に壺、及び甕破片の投棄が行われていた。貼床の硬化はやや硬く、炉は住居中央で検出された。掘方面では炉の南東部に土坑が検出された。位置的

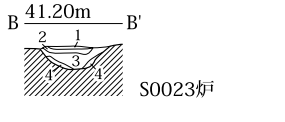


第124図 住居14-S0021 出土遺物実測図

に本住居に伴うものと考えている。前述の屋内土坑や埋土から弥生終末期の土器が出土したほか、床面直上から砥石４点と鉄製品が出土したことが特筆される。なお、後者は残存状態が悪く図示できなかった。

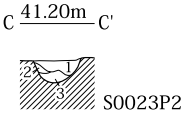
出土遺物（第129図・図版59）　１・２は高杯である。１は中実で脚はハの字に開く。２は完形品で、５と共に出土した。脚部は裾が短く、杯部は強く屈曲し口縁部は外反する。３は製塩土器である。４～７は鉢で５～７は平底の椀状を呈する。なお、２・５～７は住居14-S0007・S0023・S0063との重複部から出土した。出土した深度が前２者の掘方面より下であるためここに含めたが、14-S0063の掘方面検出ができなかったため、これらの土器が14-S0063出土である可能性も残されている。８・９は手づくね土器。８は壺形で、今回の調査ではこの一例だけである。10・11は複合口縁壺である。10は口縁部がが直立気味である。11は屋内土坑内部からの出土品である。幅の広い口縁外面に鋸歯文、頸部突帯には刻目を施す。西部瀬戸内からの搬入品とみられる。12・13は在地系の甕である。12は口縁部が外反し、頸部の屈曲が強く胴部は中程に最大径を持ち、底部は器壁が厚く尖り底である。外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整を施す。13の底部は平底であり、12の比べれば時期差が窺える。15～17は砥石である。14は屋内土坑横の壁際に置かれたような状態で出土した２点が接合した。接合面は摩耗しており、折損後も使用されたことを示している。住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。





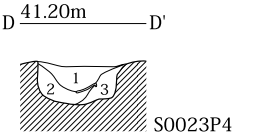
14-S0023
1　7.5YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト
3　10YR5/2　灰黄褐色シルト

炉
1　10YR5/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト
3　10YR4/2　褐灰色灰・褐灰色シルト
4　7.5YR4/2　褐灰色シルト・炭

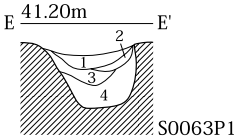


P1
1　10YR3/2　黒褐色シルト

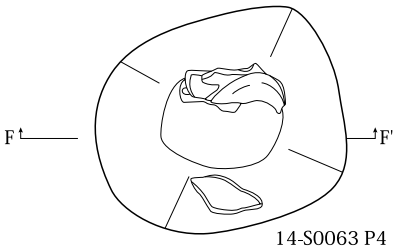
P2
1　10YR3/1　黒褐色シルト
2　10YR4/6　褐色シルト
3　10YR4/1　褐灰色

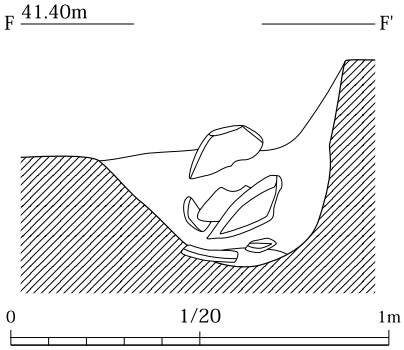


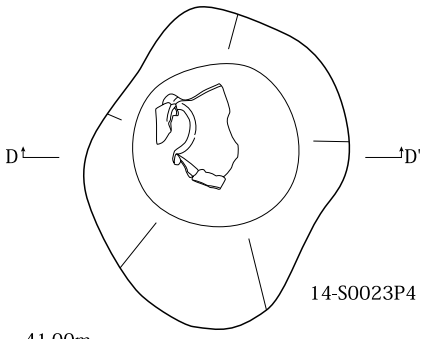
14-S0063
1　10YR3/2　黒褐色シルト
2　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
3　10YR4/2　灰黄褐色シルト
4　10YR3/2　黒褐色シルト
5　2.5Y3/1　黒褐色シルト
6　10YR3/1　黒褐色シルト
7　10YR3/2　黒褐色シルト
8　7.5YR4/1　褐灰色シルト

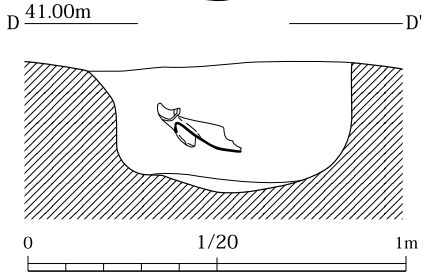


P1
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/1　褐灰色シルト
3　7.5YR4/1　褐灰色シルト
4　10YR5/6　黄褐色シルト

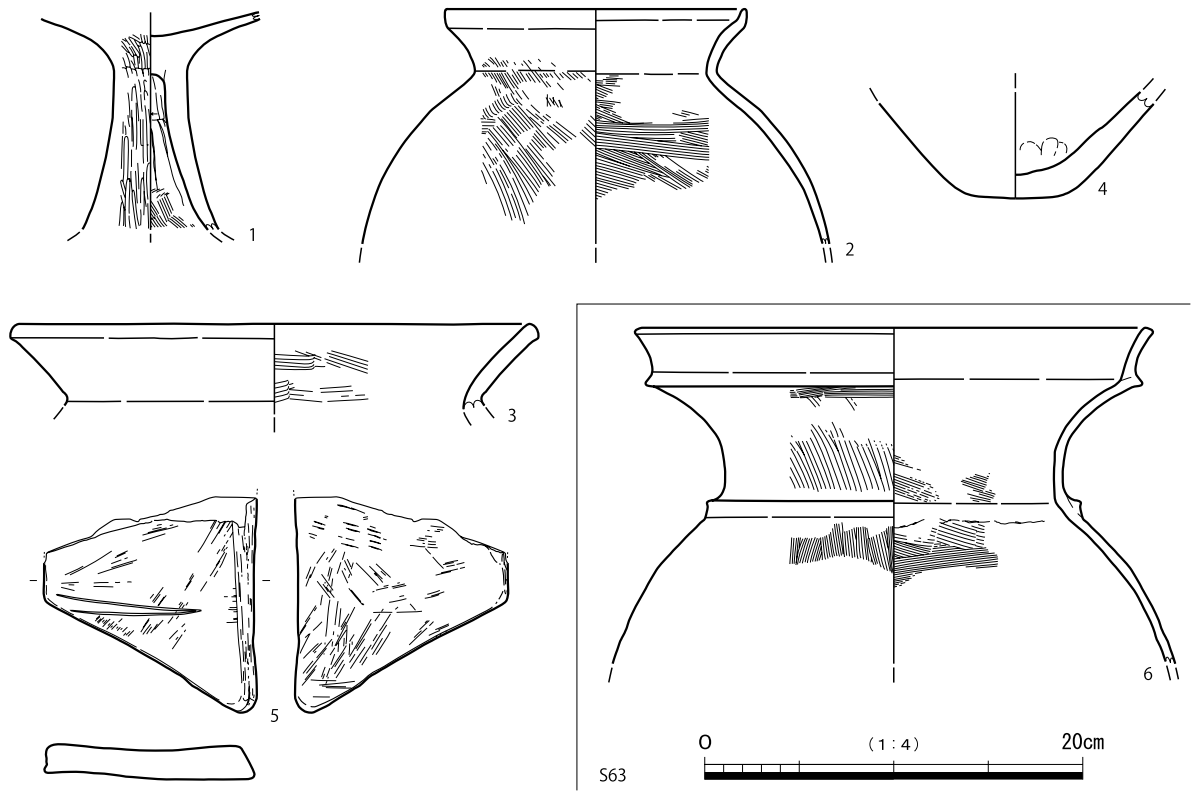








第125図 住居14-S0023・S0063 平面・断面図

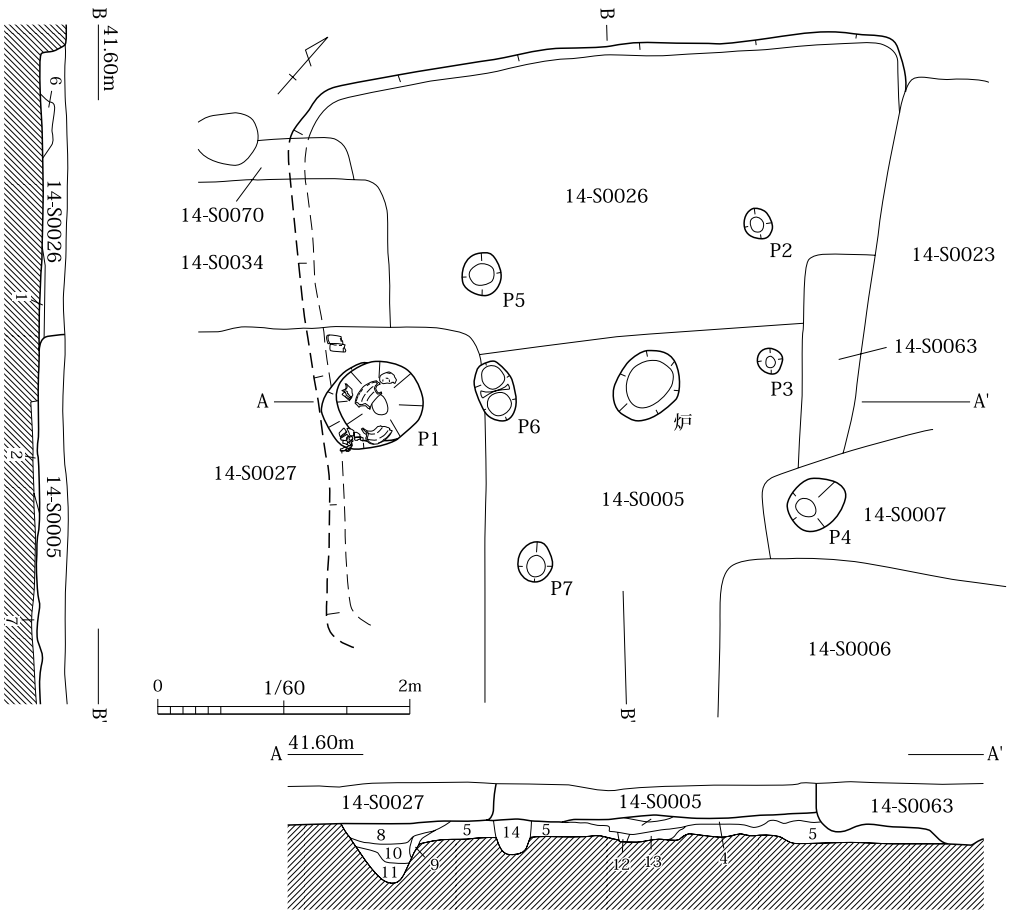


第126図 住居14-S0023・S0063 出土遺物実測図

18は鉄製の鏃である。有茎式に属す。茎部端を欠損する。残存長6.5㎝、刃部長1.7㎝、刃部最大幅2.3㎝、茎部残存長4.8㎝、厚さ６㎜である。刃部は、フクラ状の切先をもつ圭頭形であり、凸レンズ状の両丸造である。茎部は刃部側が最も幅広く、茎部端にいくに従い弧を描きながら徐々に狭くなる。茎部断面は長方形である。

住居14-S0027・S0034・S0070（第130, 131, 134図・図版21-2）

14グリッド２Ｈ～３Ｉ地区において検出した竪穴住居である。５軒の住居と重複する。住居14-S0026・14-S0005より新しく、住居14-S0003ほか２軒より古い。３軒の新旧関係は埋土断面の観察によると14-S0070が最も古く、14-S0027が最も新しい。最も状態がよい14-S0027でも壁・床面は約2分の1しか残存せず、14-S0034は西側の壁と壁際の床面のみ、14-S0070に至っては壁の一部が検出されたのみである。主柱穴は14-S0027、14-S0034に伴うと思われるものがそれぞれ２ヶ所（14-S0027P1・Ｐ２、14-S0034P2・Ｐ４）検出されている。14-S0027は北東―南西壁間が約5.2ｍであるが、南東の主柱穴の位置からみて北西―南東壁間は少なくとも5.6ｍ以上あり、やや長方形の２本柱住居と考えられる。14-S0034は北東―南西壁間約5.6ｍ、北西―南東壁間5.3ｍ以上の方形住居である。14-S0070は方形と推定されるが詳細は不明である。主柱穴をはじめこの住居に伴う施設は全く検出されなかった。14-S0027の主柱穴は楕円形、円形であり、Ｐ２底面には柱痕と考えられる痕跡が２ヶ所検出された。径約９㎝。Ｐ１では明確な柱痕がなく、土層も埋め戻しによる単一層なので、柱は抜き取られているものと推定される。14-S0034主柱穴のうちＰ２は円形で、底面に径約14㎝の小ピットが検出された。土層では柱抜き取り痕が認められる。もう一方の主柱穴は14-S0027の炉に重なり、僅かな痕跡しか検出できなかった。径約11㎝の小ピットである。屋内土坑は、14-S0027に伴うものは検出されなかった。14-S0034は北東壁際に位置する。貼床の硬化は14-S0027、14-S0034ともにやや強く、14-S0003床下か

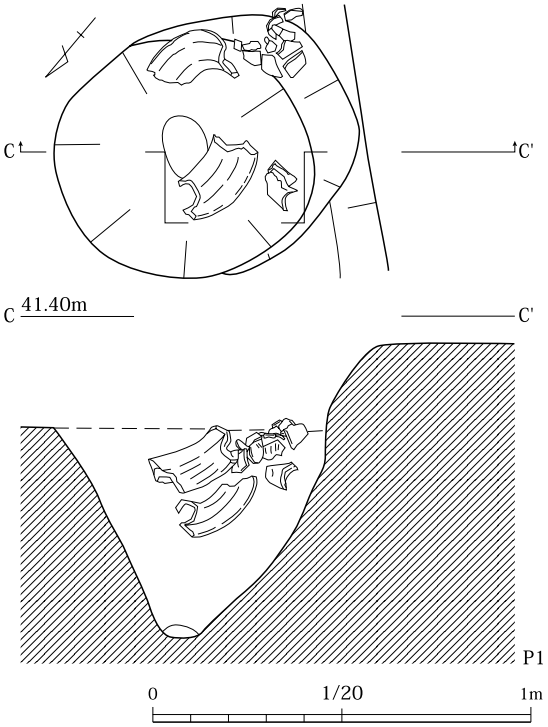


1	2.5Y4/1	褐灰色シルト	6	10YR4/2	灰黄褐色シルト	11	10YR4/2	灰黄褐色シルト
2	2.5Y3/1	黒褐色シルト	7	10YR4/2	灰黄褐色シルト	12	10YR3/2	黒褐色シルト
3	10YR3/2	黒褐色シルト	8	10YR4/3	黄褐色シルト	13	10YR3/2	黒褐色シルト
4	10YR3/1	黒褐色シルト	9	10YR4/2	灰黄褐色シルト	14	10YR3/3	暗褐色シルト
5	10YR4/1	褐灰色シルト	10	10YR3/2	黒褐色シルト			

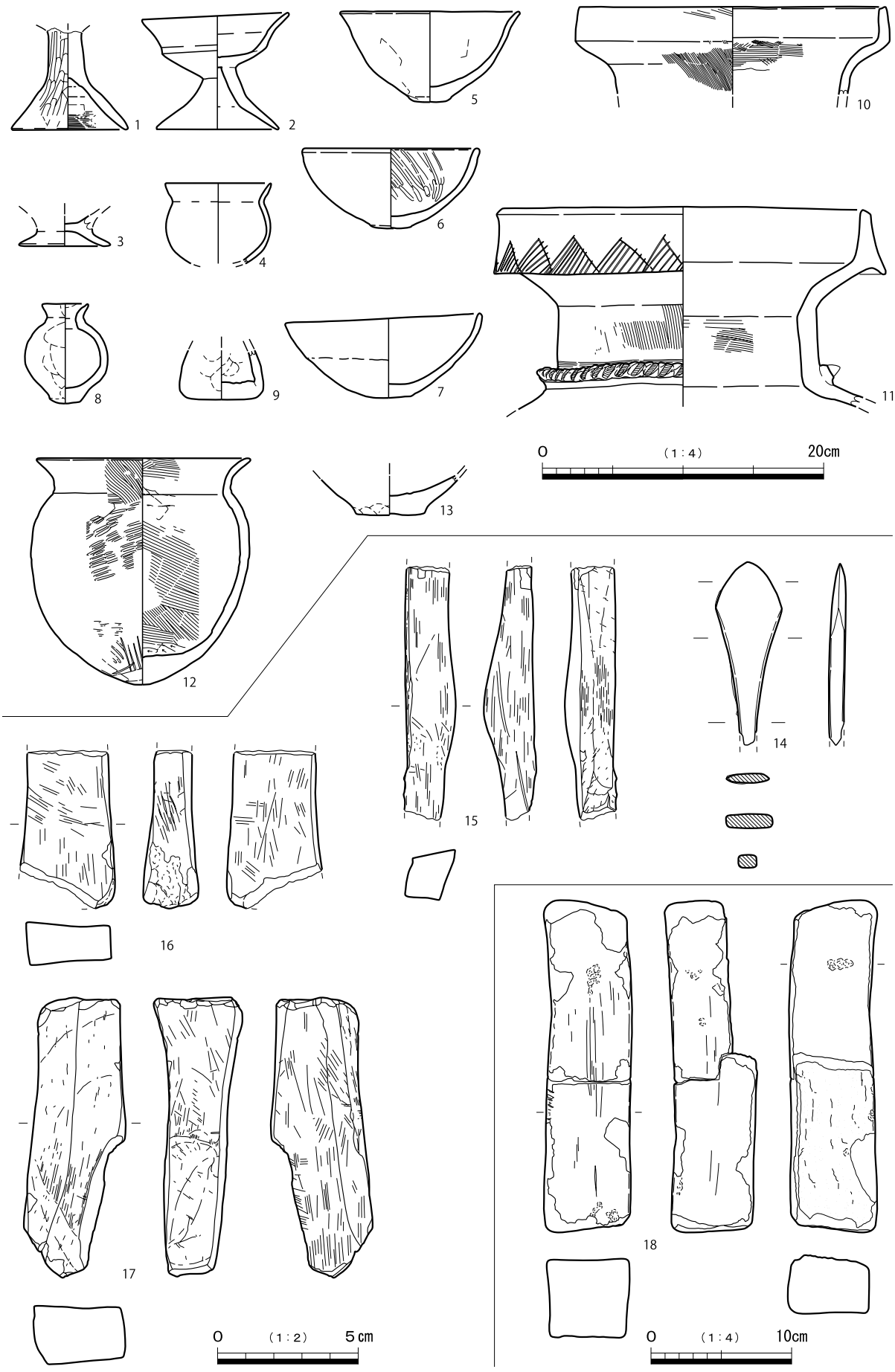
第127図 住居14-S0026 平面・断面図

ら14-S0027に伴うと推定される炉が検出された。14-0027床面直上には甕と高杯それぞれ数個体分の破片が集中して投棄されていた。

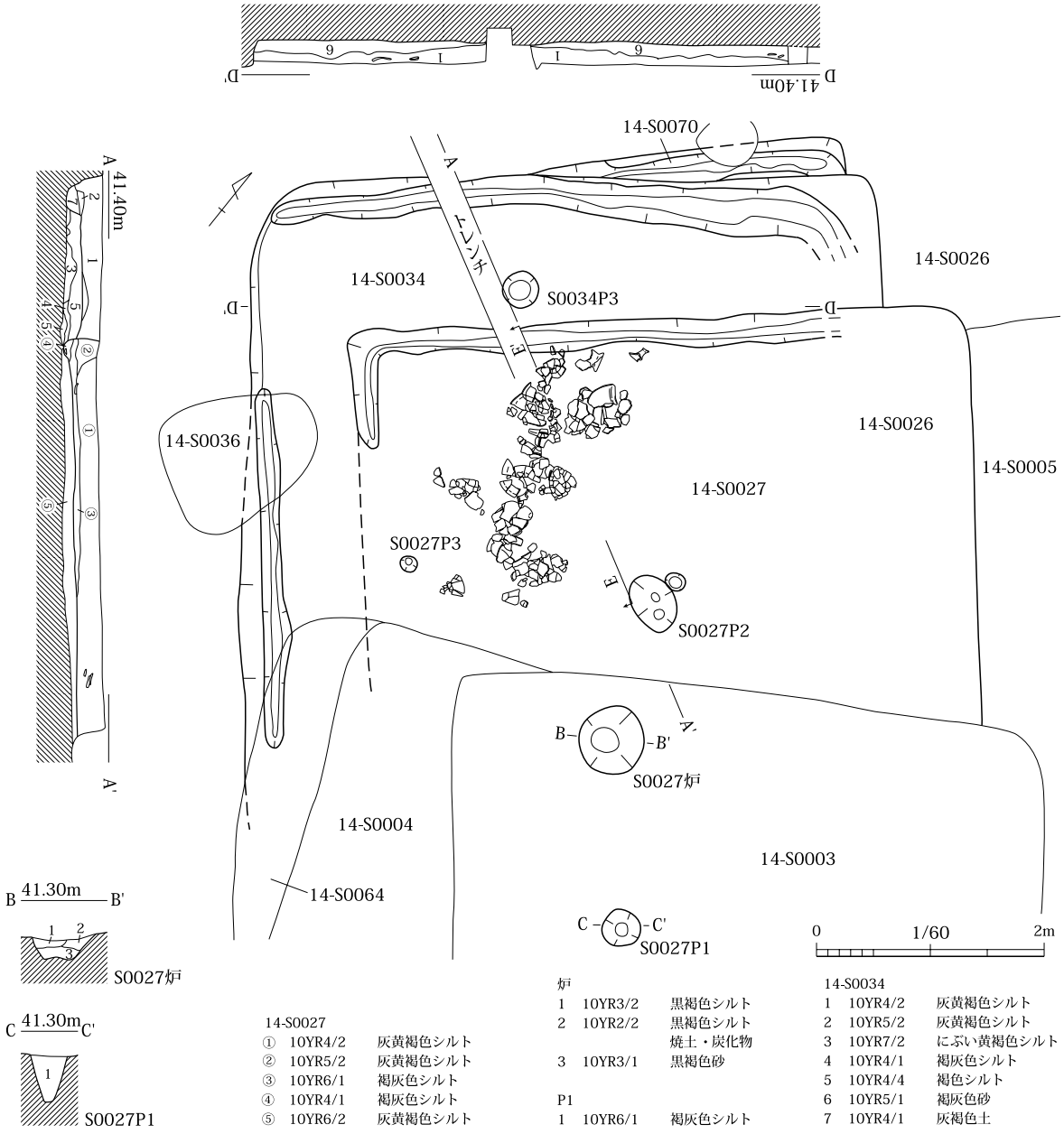
出土遺物（第132, 133図・図版59, 60）　1～19が14-S0027、20～25が14-S0034出土である。1～4は高杯で、床面上の土器集中部からの出土である。杯部の稜は明瞭で、口縁部は外反し大きく開く。脚部に1は4方向、2は3方向の円孔を有する。14-S0007出土のものに酷似し、ほぼ同段階と思われる。5は器台で、受け部が内傾し袋状口縁を呈する。外面はハケ、タタキを施す。6・7は鉢で、椀状を呈し丸底である。8は複合口縁壺で、頸部に突帯を貼り付けた痕跡が見られる。内外面ともにハケ調整を施す。9～15、17～19は甕である。9は小型の甕で、球形の体部から口縁部



第128図 住居14-S0026-P1遺物出土状態図



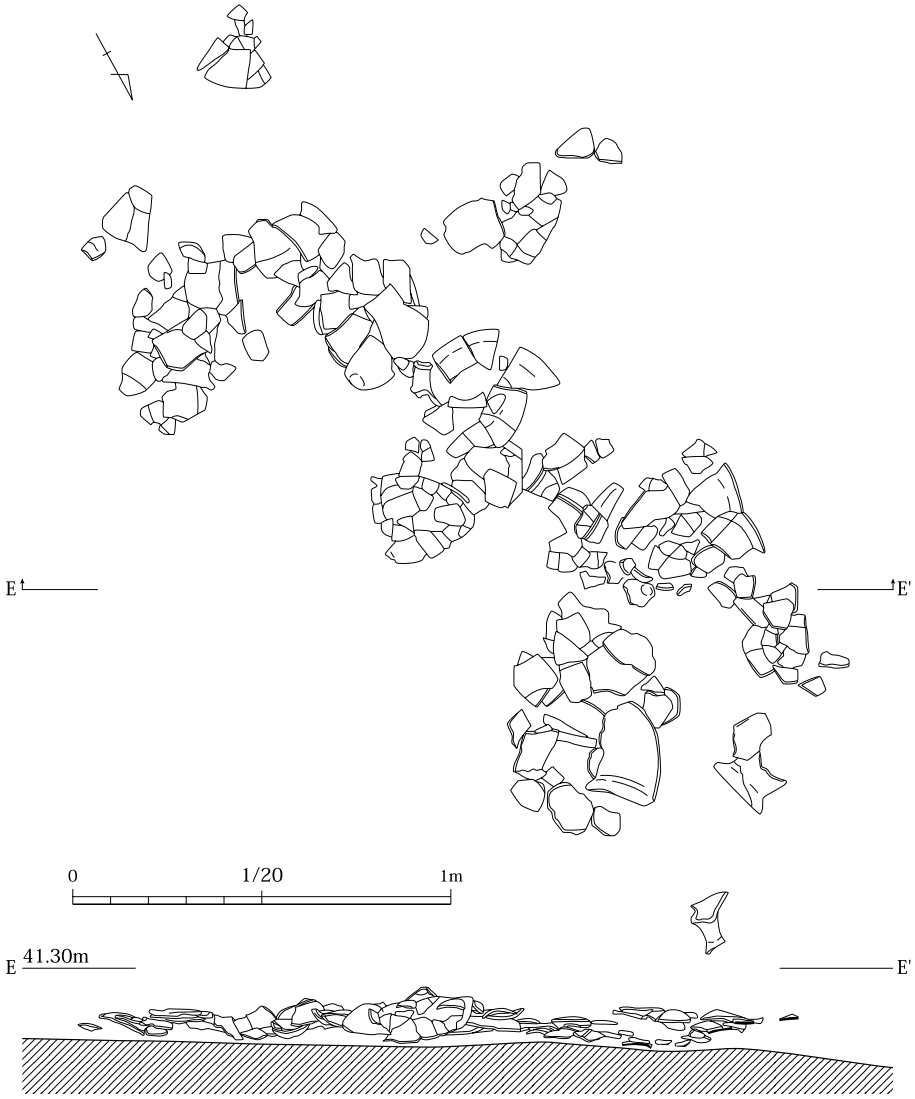
第129図 住居14-S0026 出土遺物実測図



第130図 住居14-S0027・S0034・S0070 平面・断面図

は直立気味に立ち上がる。13の口縁部は張りの弱い長胴の体部から外傾する。外面に媒付着し、二次焼成を受ける。16は長胴の体部を有し、口縁部が短く直立する短頸壺である。内外面ともハケ調整を施す。18は頸部と胴部下位に突帯を巡らす在地系の甕である。底部は凸レンズ状を呈するものが14・15・18、丸底が16・17・19である。16・17を除きこれら甕の多くは床面直上からまとまって出土したものであり、同時に投棄されたものと考えられる。20・21は椀状を呈する鉢で、外面にヘラケズリを施す。22は凸レンズ状を、23は丸底を呈する壺の底部である。24・25はは甕である。いずれも埋土中から出土しており、本住居が埋め戻される際に投棄されたものと考えられる。14-S0034は14-S0027より古い構築であるが、位置・規模・主軸方位や出土遺物の様相からおそらく14-S0027直前の時期であろう。

竪穴遺構14-S0028（第135図・図版23-1）

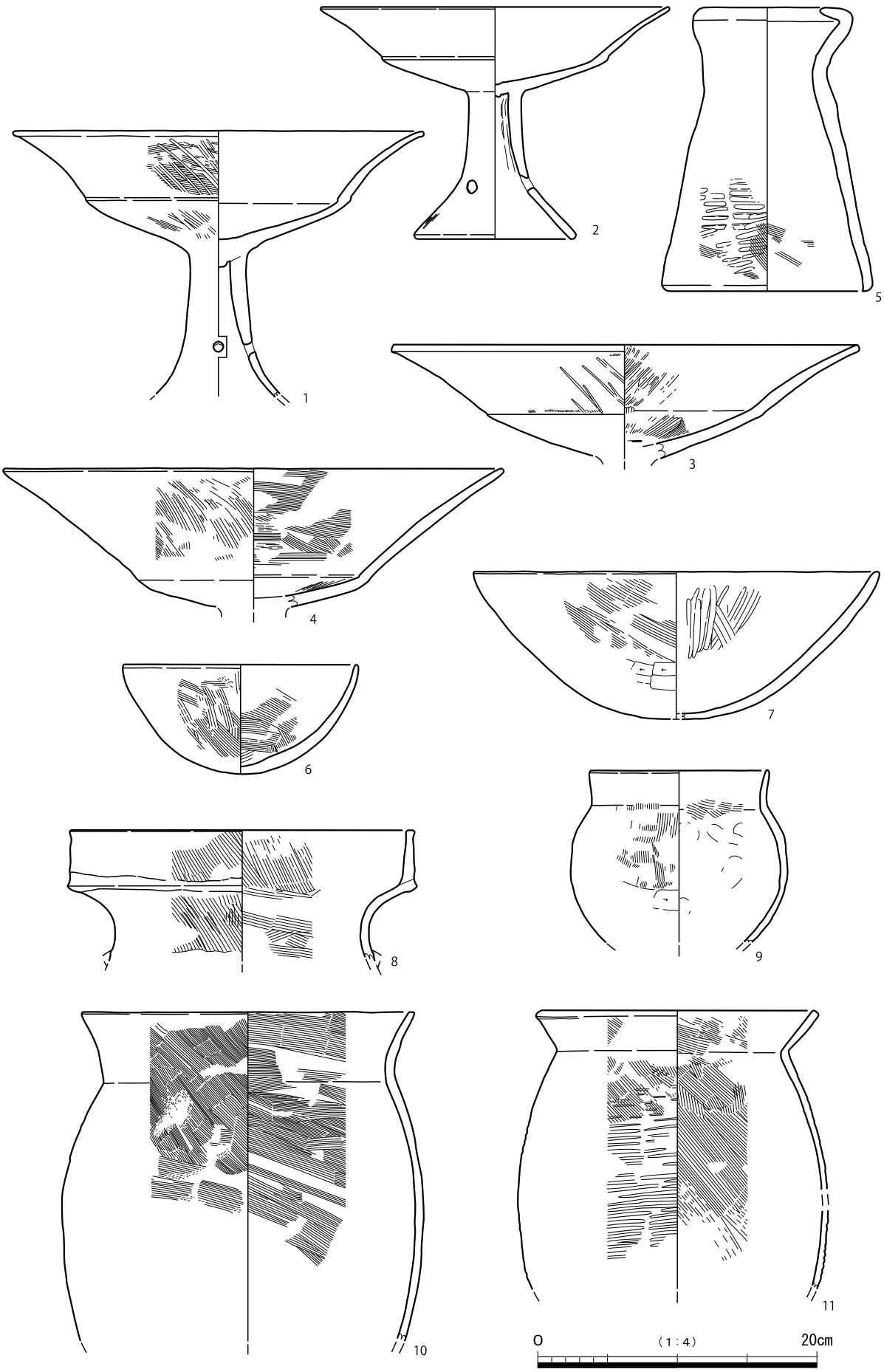


第131図 住居14-S0027 遺物出土状態図

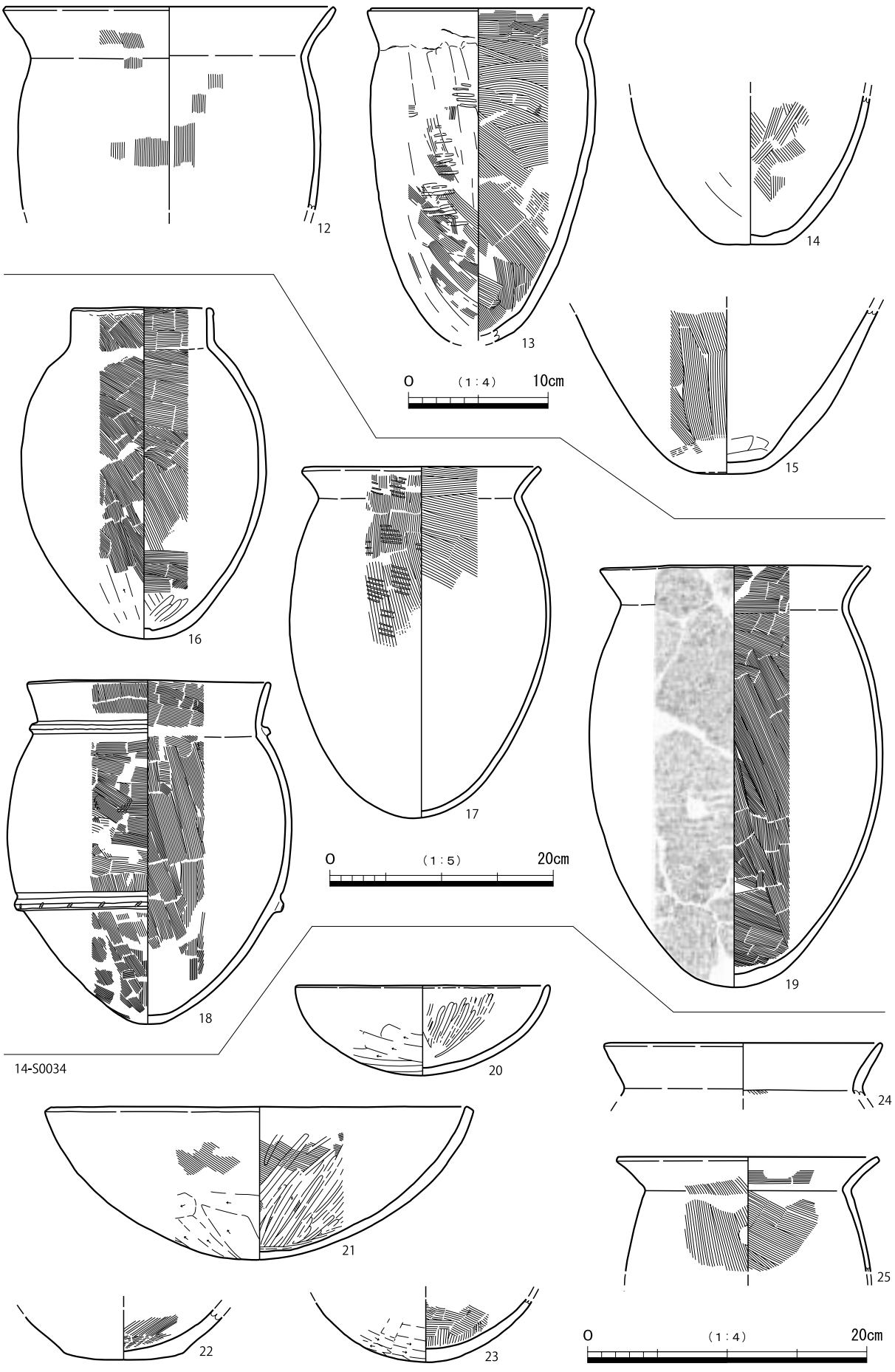
14グリッド２Ｇ～３Ｇ地区において検出した竪穴遺構である。住居14-S0030と土坑14-S0029、及び大型建物３と重複するがこの住居が最も新しい。長方形のプランであるが柱穴、床面、屋内土坑などの構造が認められず、住居とは認め難い。底面にて小ピットが検出されたものの、本遺構には伴わないものと判断している。埋土から遺物が若干出土しているが全て破片であり、本跡に伴うと判断されるものはない。なお、埋土は底面直上を除き人為的に埋め戻された様相を呈する。埋土から布留系の甕破片が出土しており、これより新しい遺物が認められなかった。

住居14-S0030（第136図・図版24, 25-1）

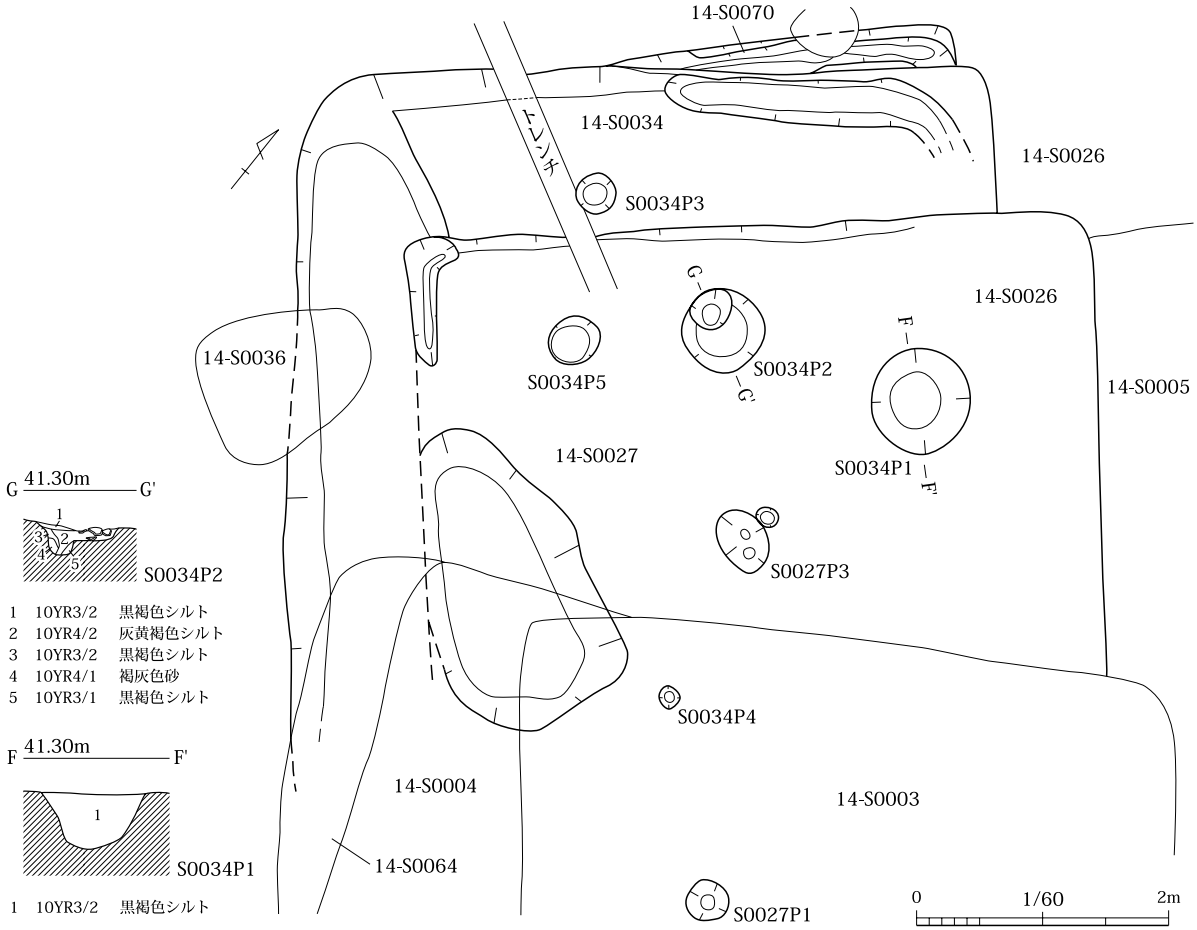
14グリッド１Ｇ～２Ｈ地区において検出した竪穴住居である。方形周溝14-S0033、竪穴遺構14-S0028、土坑14-0029・14-S0031、及び大型建物３と重複する。この住居は大型建物３と土坑14-S0031より新しく、その他の遺構よりは古い。長辺約8.0ｍ、短辺約6.4ｍを測る長方形プランで、主柱穴が２ヶ所で検出されたことにより、主柱２本の大型住居である。今回調査した中では最も大型な住居である。主柱穴は略長方形で、Ｐ２には底面と土層断面で柱痕と思われる痕跡が確認された。いずれも径約12㎝。Ｐ１はどちらも検出されず、柱を抜き取った後に埋め戻しているようである。周溝に壊さ



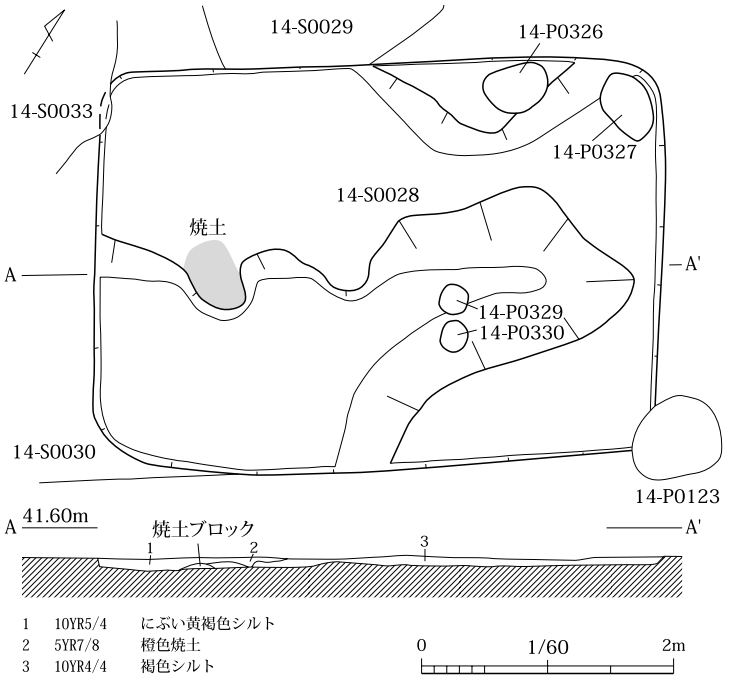
第132図 住居14-S0027 出土遺物実測図



第133図 住居14-S0027・S0034 出土遺物実測図



第134図 住居14-S0034 平面・断面図



第135図 竪穴遺構14-S0028 平面・断面図

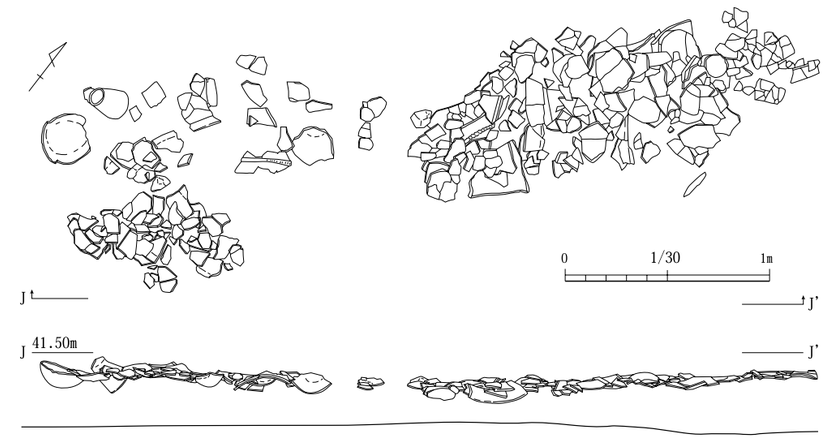
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
3 10YR4/1 褐灰色シルト・焼土・炭化物
4 7.5YR5/1 褐灰色シルト
5 5YR5/1 橙色焼土
6 5YR5/1 褐灰色シルト・焼土
7 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト
8 10YR4/2 灰黄褐色シルト
9 7.5YR4/1 褐灰色シルト
10 10YR4/2 灰黄褐色シルト
11 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
12 10YR4/2 灰黄褐色シルト
13 10YR5/1 褐灰色シルト
14 10YR4/1 褐灰色シルト
15 7.5YR4/1 褐灰色シルト
16 10YR6/6 明黄褐色シルト
17 10YR6/6 明黄褐色シルト
18 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
19 10YR4/1 褐灰色シルト

P1
1 10YR4/1 褐灰色シルト
2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト

P2
1 10YR4/1 褐灰色シルト
2 2.5Y7/6 明黄褐色シルト

P3
1 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土

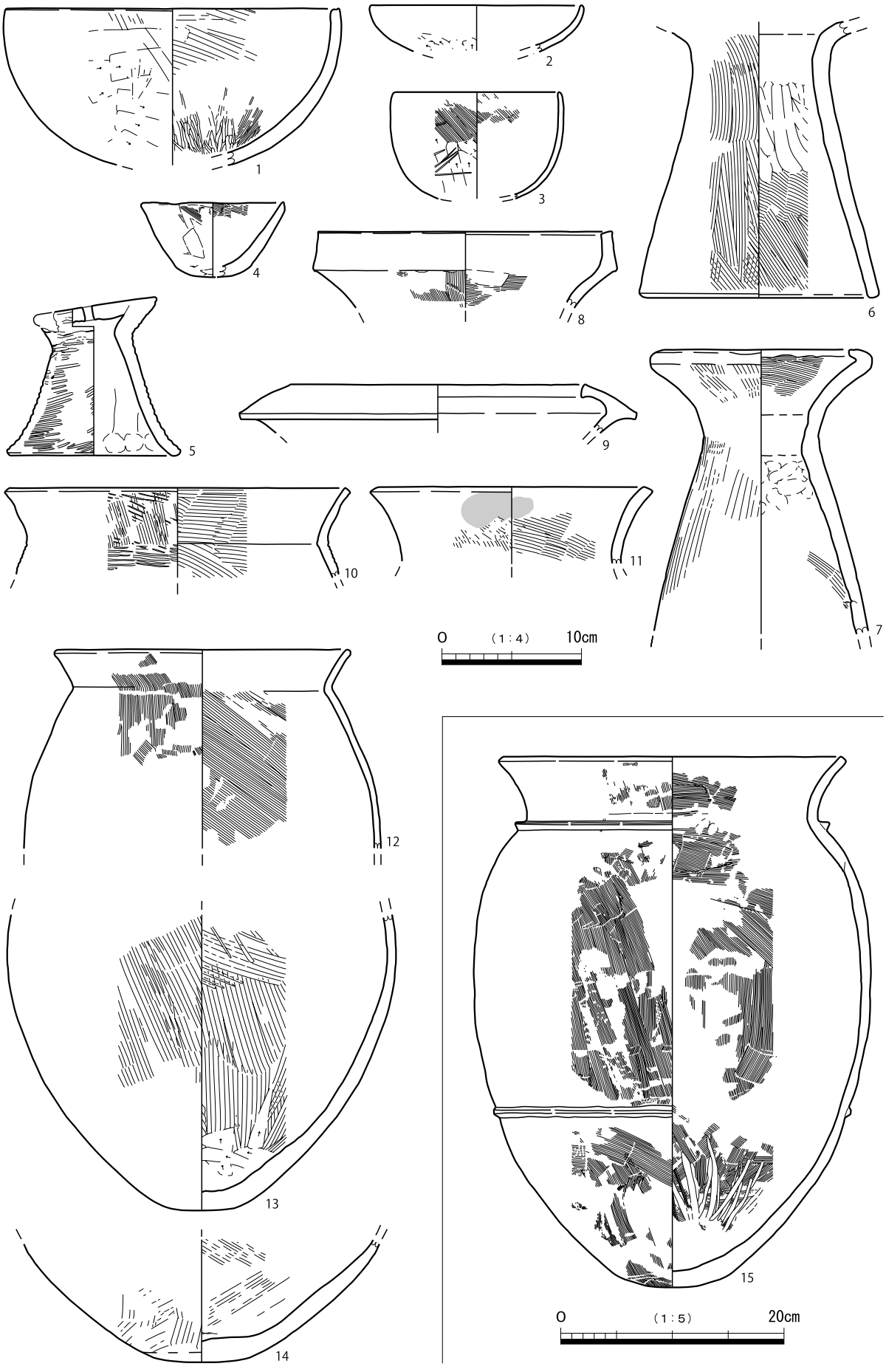
炉
1 2.5YR3/1 黒褐色炭化物・焼土多量



a. 遺物出土状態図

b. 炭化材出土状態図

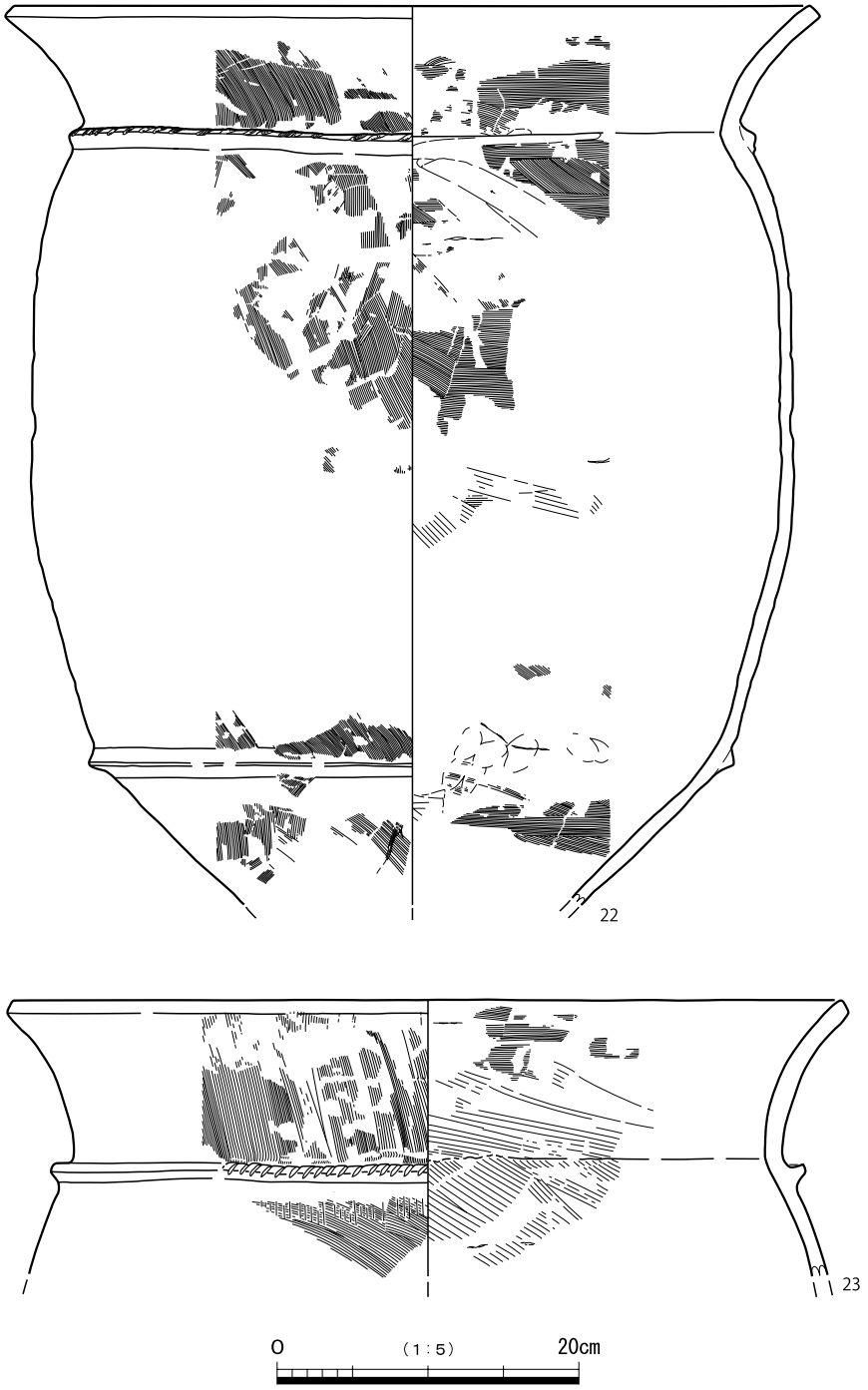
第136図 住居14-S0030 平面・断面図



第137図 住居14-S0030 出土遺物実測図①

第138図 住居14-S0030 出土遺物実測図②

れているもののベッド状遺構が住居北東壁際にあり、床面上に幅約1.2m、高さ15㎝以上の規模で土を盛っている。屋内土坑は南東壁際に位置するが深さ約14㎝で他の住居に比べて著しく浅い。炉は主柱穴の間で検出したが、周溝は検出されなかった。貼床の硬化は強く、床面で２ヶ所、14-S0033底面で１ヶ所ピットが検出されたがいずれも本跡に伴うものか否か、疑問が残る。床直上と埋土中からは部分的に原形をとどめた炭化材が出土しており、本跡が最終的に焼失したことを示している。本跡の埋土上層には甕を主体とした弥生土器破片が集中して出土し、土層断面で確認された埋没後の掘り込みと併せて、何らかの祭祀的行為が行われたことを窺わせる。掲載した遺物の大部分はこの埋土上層で出土した遺物であって、これらは本遺構の構築時期や廃絶時期とは若干の時間差が考えられる。この



第139図 住居14-S0030 出土遺物実測図③

住居の時期に最も近いと思われるものは床直上で出土した甕底部破片（21）であるが、投棄されたと推定される出土状況からこの住居に伴うものとは言い難い。

出土遺物（第137～139図・図版61）　1～4は鉢に分類される。4はヘラケズリで凸レンズ状の底部を作り出している。5は沓形の土製支脚。ヘラ状の突起部を有し、土器集中部から出土した。6・7は器台でいずれも埋土中からの出土である。7は袋状口縁を呈すし、6・7とも最少径は上方に位置する。8・9は在地系の壺口縁部である。9の口縁部は袋状を呈し、弥生時代中期まで遡り得る破片である。いずれも埋土中から出土している。10～23は甕である。16・17は同一個体だが残存状態の都合で実測図を分けてある。10・21を除き、甕類はいずれも土器集中部に一括して投棄されたものであ

り、他の住居跡出土遺物に比べると在地系甕の割合が多いことが特筆される。図示した中では15～20、22・23等が相当する。底部が残存するものをみるといずれも平底に近い凸レンズ状を呈し、完全な丸底は見あたらない。21の甕底部は床面直上からの出土である。ヘラケズリで底部を凸レンズ状に整形する。形状を見る限り埋土上層の土器集中部から出土したものと差異はみられない。

住居14-S0040（第140図・図版25-2）

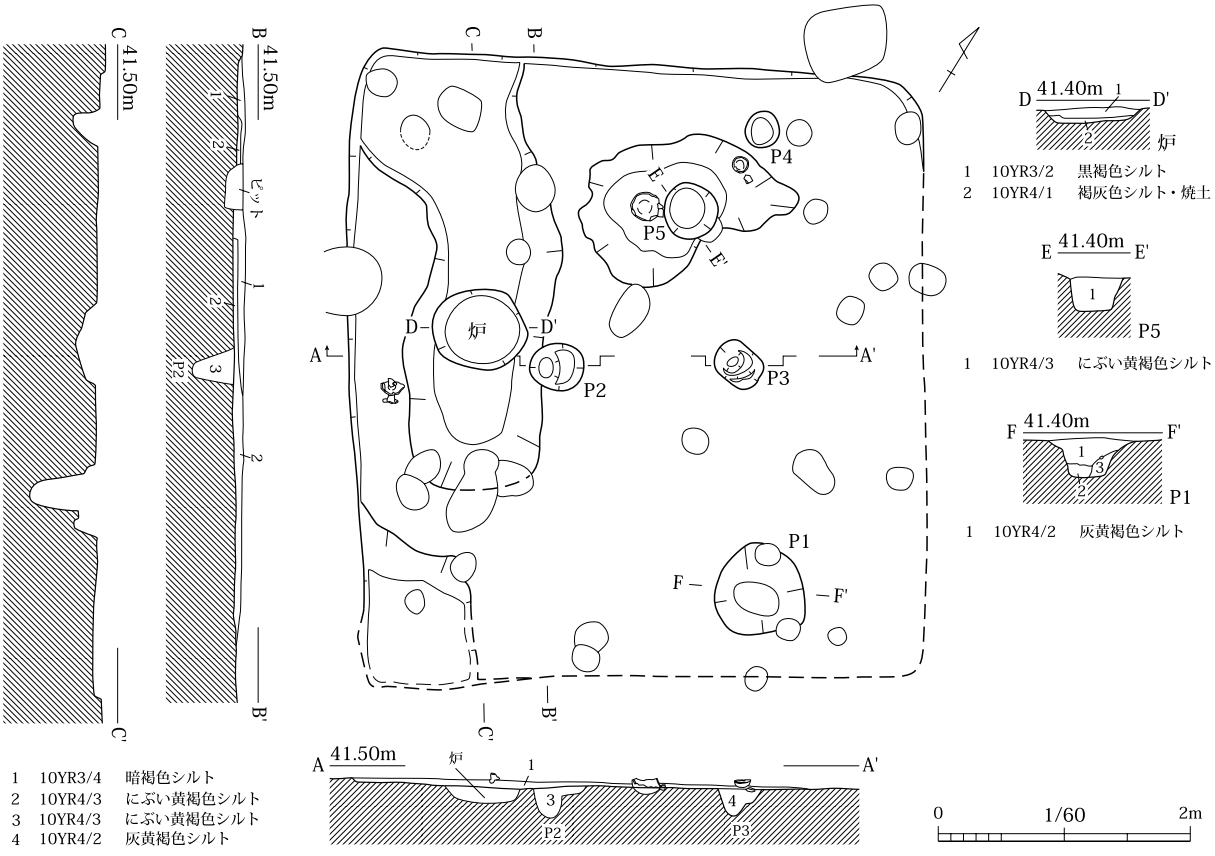
14グリッド１Ｉ～２Ｊ地区において検出した竪穴住居である。掘立柱建物14-S0062と土坑14-S0071に重複するが前者より古く、後者より新しい。残存状態が悪く床下の２分の１程度しか検出されなかった。北西・南西壁はかろうじて確認され、それぞれ約4.5m、約5.0ｍを測る。主柱穴が２ヶ所で検出されているので２本柱の長方形竪穴住居である。主柱穴は略楕円形で埋土は人為的に埋められた様相を呈する。底面に柱痕と推定される小ピットがあり、径約17～18㎝を測る。屋内土坑は南東壁際と推定される位置にあり、炉は南西主柱穴脇で検出された。この範囲内からピット多数が検出されたが本住居に伴うと断定できるものはない。掘方の窪みで検出されたピット（Ｐ５・Ｐ６）のみが本遺構に伴うものとして図示する。Ｐ５を覆うように甕２分の１個体分の破片が集中して出土しているほか、掘方埋め土から復元可能な高杯破片が２個体分出土した。

出土遺物（第141図・図版61）　１・２は高杯で、１は床面直上からの出土である。杯部の稜は明瞭で、裾部は低く屈曲する。２は埋土中からの出土で、図上での復元を行った。１より古い要素もあるが、杯部上半が大きく開くことなどからほぼ同段階のものと思われる。３は鉢で椀状を呈する。４・５は壺で、４は複合口縁壺、５は小型壺で、丸底を呈す。６は甕で内外面ともハケ調整を施す。７は在地系の甕で、口縁部は緩やかに外反し端部にわずかに膨らみをもつ。内面はヘラ削りが施され、底部は丸底を呈す。

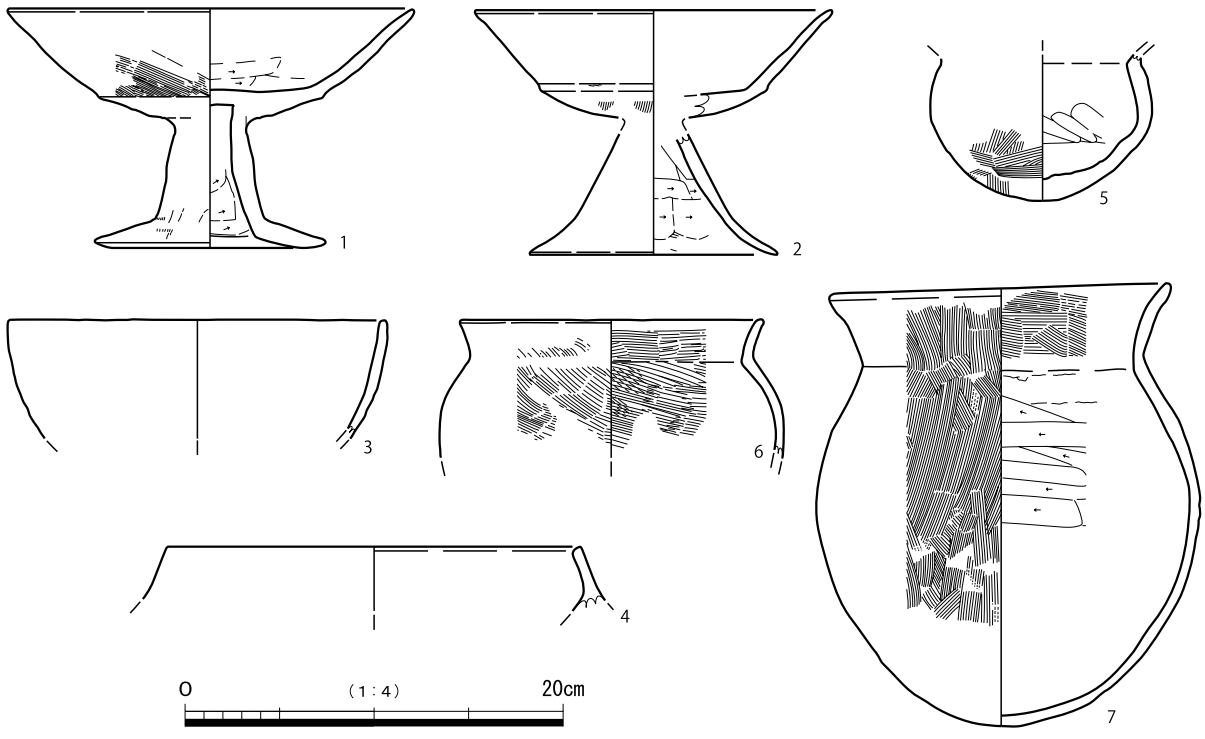
住居14-S0041（第142図）

13グリッド10Ｊ～19グリッド１Ａ地区において検出した竪穴住居である。古代の溝18-S0016に一部壊される。残存状況は悪く、壁はほとんど残っていない。かろうじて西隅付近と南東の一部で検出できたが正確な規模は分からない。北西壁―南東壁間は約5.2ｍを測り、これを長辺とすると短辺は主柱穴の位置から4.2m前後と推定される。主柱穴は２ヶ所であり、２本柱長方形竪穴住居である。主柱穴は略円形で柱痕は検出されなかった。Ｐ１埋土がほぼ水平堆積で埋まっていること、Ｐ２埋土が単一土層であることから柱は抜き取られた可能性が高い。なお、主柱穴近くに同程度の深さのピットが２ヶ所検出され（Ｐ４・Ｐ５）古い柱穴の可能性がある。屋内土坑は検出されなかった。壁際にあるＰ３は、規模は他の住居の屋内土坑に近いが主柱穴との位置関係が異常なため、屋内土坑とはみなさなかった。炉は主柱穴Ｐ１の南東横に位置する。貼床の硬化は弱く、周溝は検出されなかった。掘方では住居西側がやや高くなっているがベッド状遺構ではない。住居埋土や床下埋め土から破片の状態で遺物が出土している。

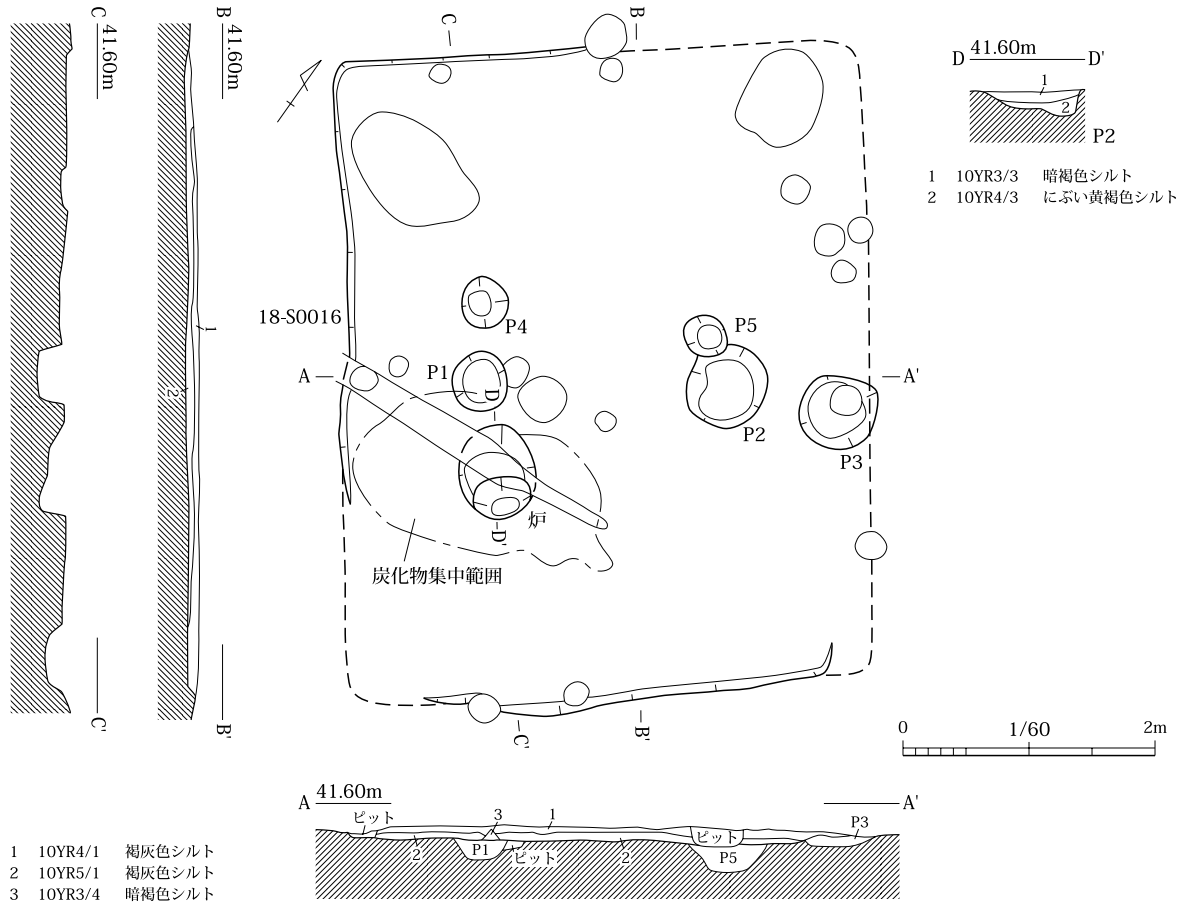
出土遺物（第143図・図版61）　１は鉢で椀状を呈する。２は砲弾型の甑である。底部に一穴を設ける。１・２とも外面にヘラケズリ、内面にハケを施す。３は甕で、ピットを覆うような状態で出土した。４は短頸壺の口縁部と思われる。５はやや尖り気味の丸底を呈する。６は凸レンズ状の底部であるが、後者は埋土中出土の破片なのでこの遺構の構築とは時期差が考えられる。７は手づくねの小型鉢で、底部に凹みがある。



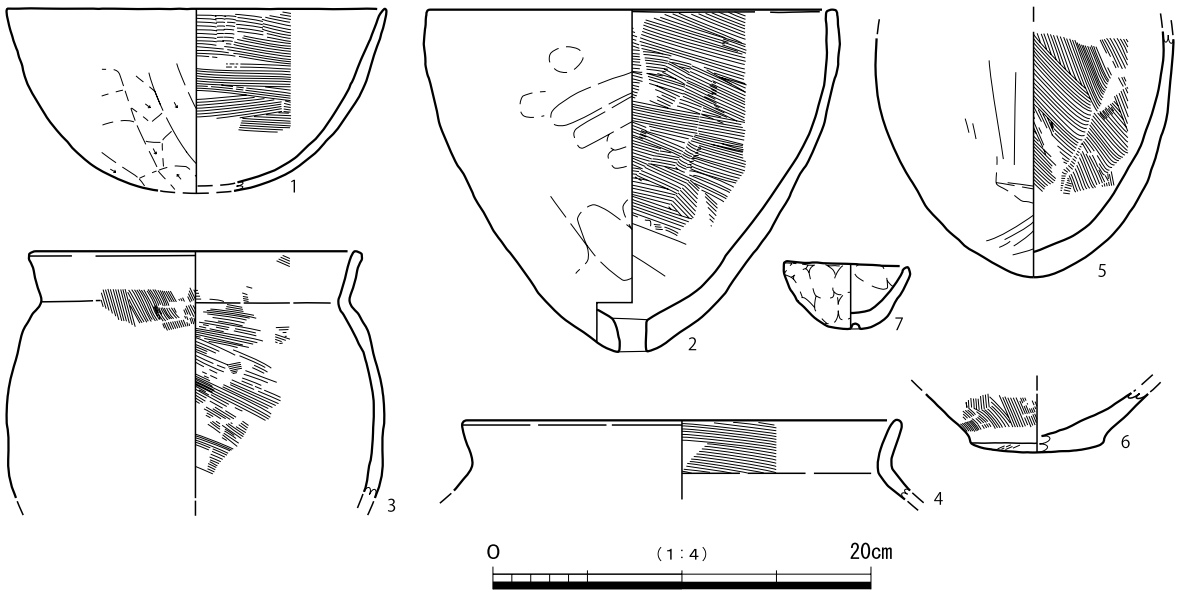
第140図 住居14-S0040 平面・断面図



第141図 住居14-S0040 遺物出土状態図



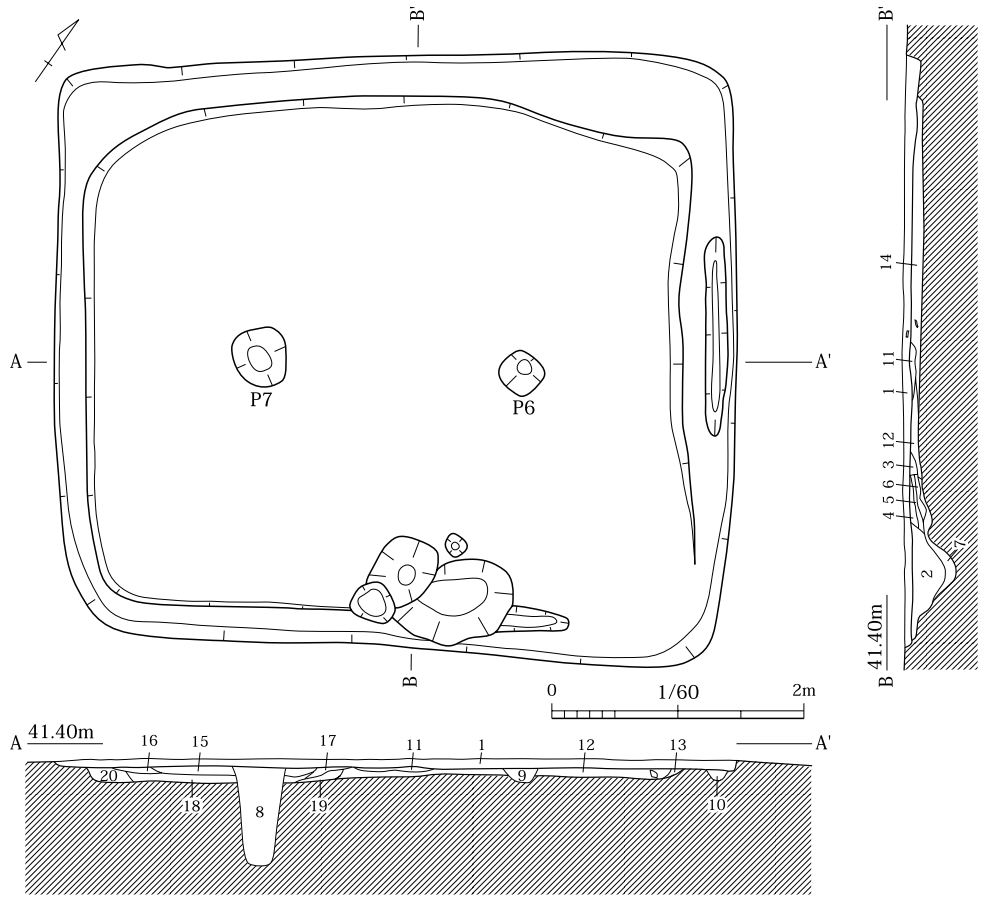
第142図 住居14-S0041 平面・断面図



第143図 住居14-S0041 出土遺物実測図

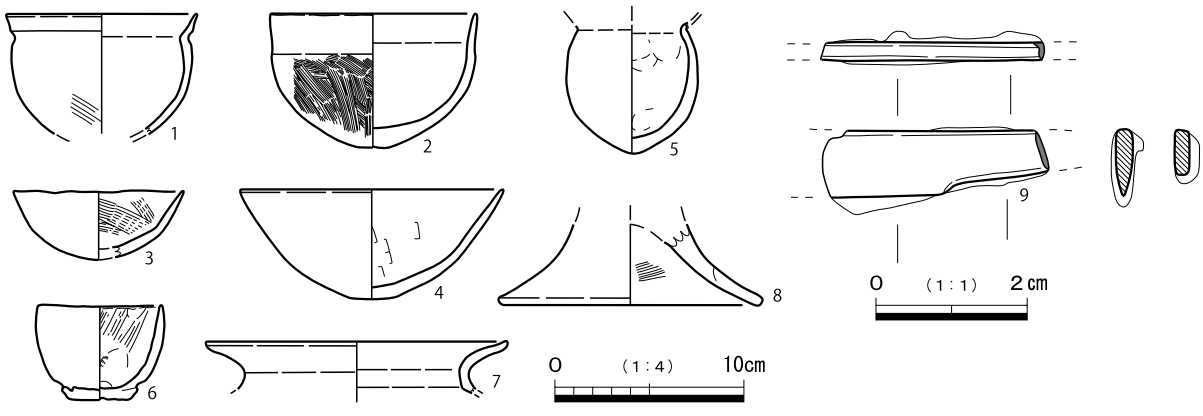
住居14-Ｓ1001・－２（第144図・図版26-1）

14グリッド４Ｅ地区において検出した重複する竪穴住居である。住居14-S1001は長辺4.55m、短辺4.0mの長方形を呈し、深さは12㎝を測る。炉は長軸80㎝、短軸65㎝の規模で住居の中央部に配され、



1	10YR5/1	褐灰色砂質土	6	10YR5/1	褐灰色極細砂	11	10YR7/6	黄橙色極細砂	16	2.5YR7/2	灰黄色極細砂
2	5YR4/2	灰褐色砂質土	7	7.5YR5/6	明褐色極細砂	12	7.5YR5/1	灰褐色極細砂	17	7.5YR7/8	黄橙色極細砂
3	7.5YR7/8	黄橙色極細砂	8	7.5YR5/1	褐灰色極細砂	13	7.5YR5/6	明褐色極細砂	18	7.5YR4/2	褐灰色砂質土
4	7.5YR5/1	褐灰色砂質土	9	7.5YR4/1	褐灰色砂質土	14	10YR4/1	褐灰色砂質土	19	7.5YR5/1	褐灰色極細砂
5	7.5YR5/6	明褐色極細砂	10	7.5YR5/1	褐灰色極細砂	15	7.5YR4/1	褐灰色砂質土	20	7.5YR4/1	褐灰色粗砂

第144図 住居14-S1001・－２ 平面・断面図



第145図 住居14-S1001・－２ 出土遺物実測図

主柱は２本である。主柱穴の規模は、南西側が長軸45㎝、短軸40㎝の楕円形で、深さは75㎝を測る。一方、南東側は直径30㎝の円形で、深さ10㎝程度と浅い。柱間距離は２ｍである。調査では北西壁付近の長軸3.3m、短軸0.8mの長楕円、中央部北東壁よりの長軸2.4m、短軸2.1mのいびつな長方形、南東壁沿いの長軸1.6m、短軸1.0mの楕円形の3箇所の不整形な土坑を遺構と認識し完掘したが埋土の状況、不自然な形などからこの住居に伴わないものと判断している。

住居-2は14-S1001を0.2～0.4m拡張したもので、長辺5.15m、短辺4.5mの長方形を呈し、床面まで７㎝を測る。この床面は14-S1001の床面より５㎝上方に設けられているため、拡張に伴って埋め戻したものとみられる。主柱穴の移動はみられない。炉跡は南東壁中央で検出したが新旧があり、古いものは長軸0.9m以上、短軸0.6m、深さ0.4mの楕円形で、新しいものがその北西に長軸0.6m、短軸0.45m、深さ0.2mの規模で設置されている。壁溝は北西壁沿いで検出した。検出長1.45m、幅0.17mを測り、深さは10㎝である。なお、南東壁沿いでも検出長0.5m、幅0.18mの小溝を検出したが、古い方の炉跡に切られているため、この溝が壁溝であるかは不明である。

出土遺物（第145図・図版61）　１～４は鉢である。１は底部を欠損するが丸底とみられる。頸部は屈折し、斜め上方に短く開く口縁部を有する。口縁端部は細く仕上げる。頸部外面の屈曲部は強い横ナデにより、有段状の口縁外面を作る。２は小さな平底気味の底部を有する。体部上半から口縁端部までは垂直気味に立ち上がる。頸部は弱い横ナデにより口縁部と区別される。３・４は椀状を呈する鉢で、丸底から直線的に外斜上に開く体部を有する。５・６は手づくね土器である。５は尖底、６は平底である。７は畿内系甕の口縁部で、頸部から大きく開く口縁部を有し、口縁端部は上方へつまみあげる。８は脚台の脚部でハの字に開く。

９は鉄製の刀子である。刃部先端と茎部端を欠損する。残存長3.0㎝、刃部残存長1.6㎝、刃部幅９㎜、茎部残存長1.4㎝、茎部幅６～７㎜、背幅２㎜である。刃部は断面楔形である。刃部と茎部は連続してつながり、緩やかな弧を描く片関によって区分される。茎部は刃部方向が若干幅広い。茎部断面は長方形である。

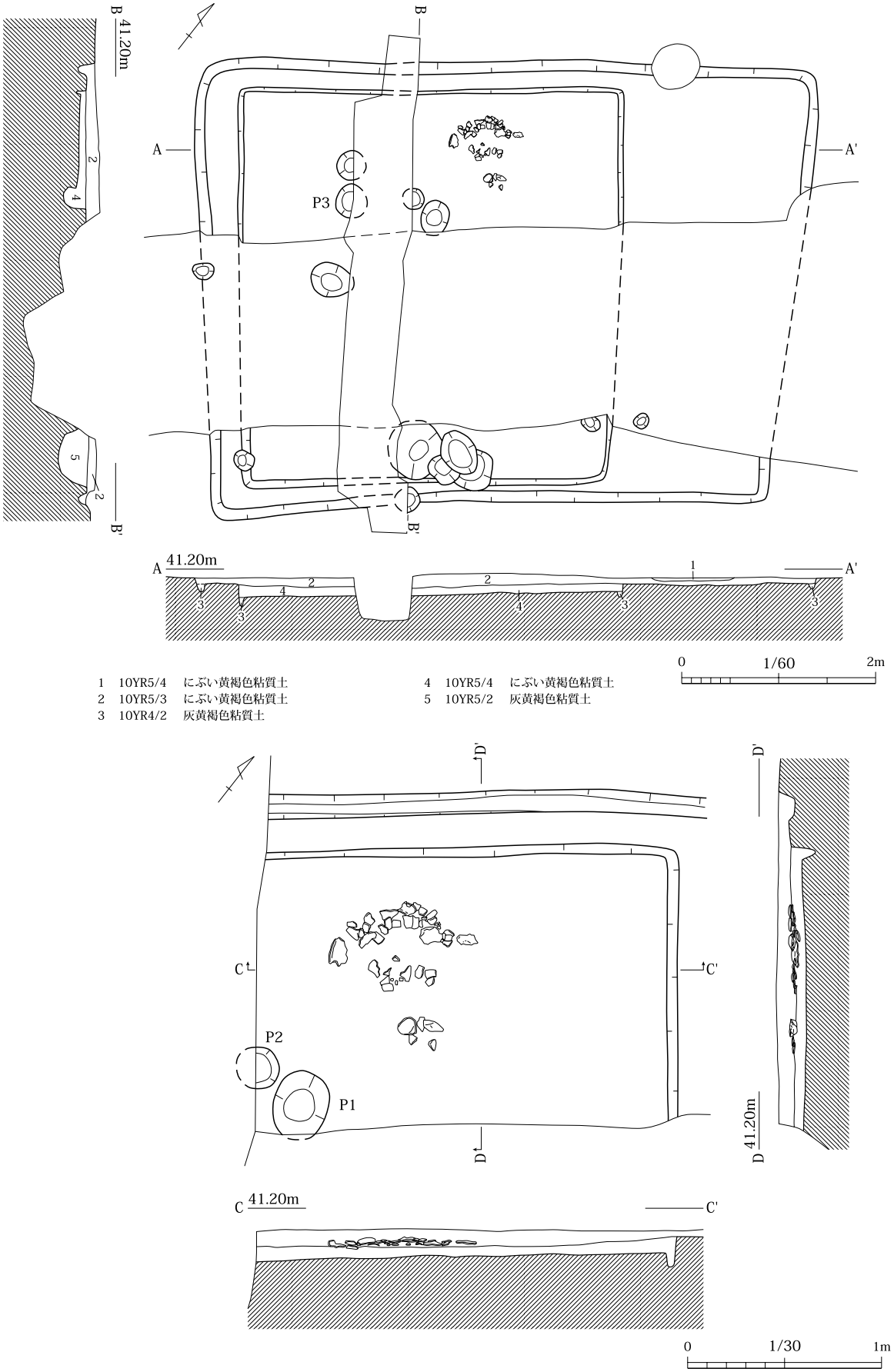
住居14-S1008・一２（第146図・図版27-2, 28-1）

14グリッド４Ａ～５Ａ地区において検出した重複する竪穴住居である。環濠によって中央部分が大きく破砕され二分されているが、方形プランの住居である。中央部を破壊されているため明確にし難いが、主柱は２本と想定される。残存状況は悪く、床面までわずか10㎝弱しか残存していなかった。

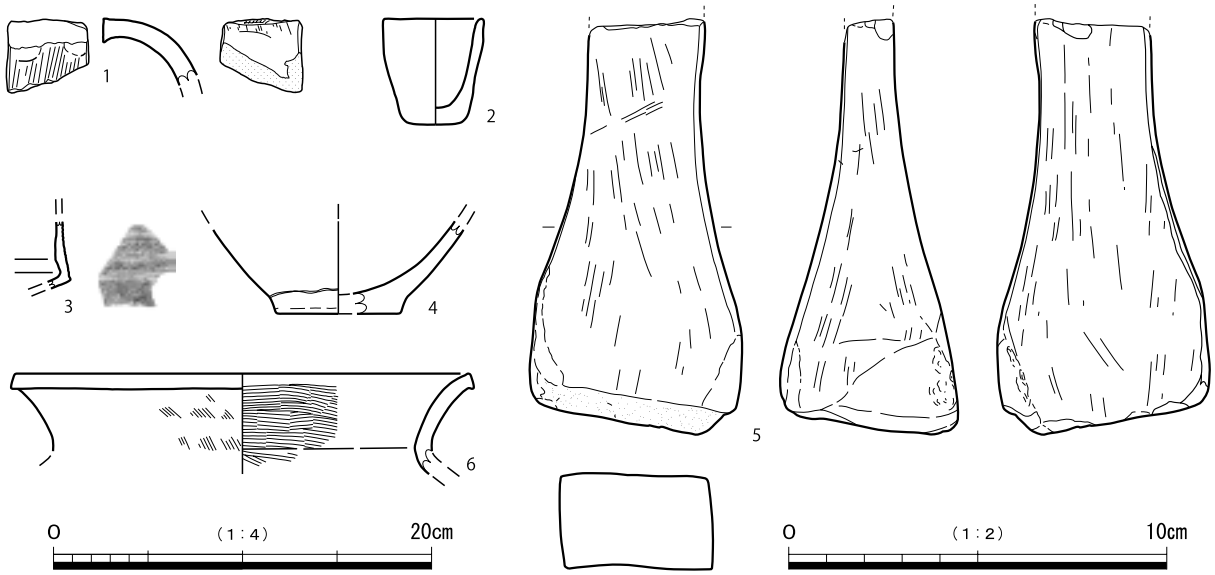
14-Ｓ1008は１辺約４ｍを測る正方形である。周囲に壁溝を有するが、幅は狭く板壁が想定される。この住居に伴うとみられる屋内ピット（P-1012）が南壁中央近くに存在する。

14-Ｓ1008-2は14-S1008を拡張して作られた住居で、短辺4.6m×長辺６ｍの長方形を呈している。出土遺物はこの新しい住居の床面から出土している。

出土遺物（第147図・図版61図）　出土している遺物は土器と砥石である。１はジョッキ形鉢の把手である。２は小型の粗製土器である。３は精製された胎土で赤褐色を呈し、外面にたまき貝の稚貝を用い、細かい綾杉紋を施す。山陰地方からの搬入品である。細片のため器形は難しいが、脚柱を伴う有段の特殊鉢の可能性がある。４は甕の底部で平底を呈す。５はP1012のピットから出土した甕の口縁部である。口縁部は外反し、端部は上下に小さく拡張し面をなす。内外面ともハケを施す。６は砥石で、残存長10,5㎝、最大幅5,5㎝、端部厚さ4,5㎝、使用部最小厚さ1,5㎝を測り、四面とも良く使用され、石材は砂岩である。



第146図 住居14-S1008 平面・断面図



第147図 住居14-S1008 出土遺物実測図

住居14-S1502（第148図・図版27-1）

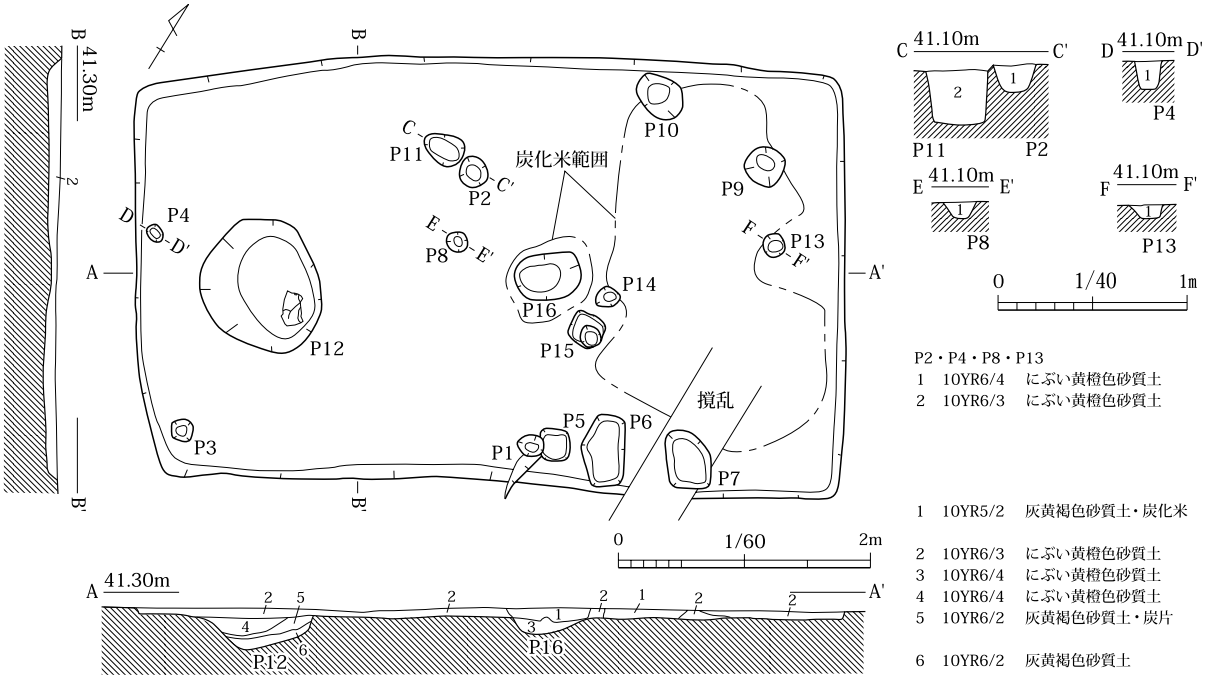
14グリッド６Ａ～７Ａ地区において検出した竪穴住居である。長辺5.62m、短辺3.32mを測る長方形プランで、深さは検出面から10～18㎝である。東にむけて緩やかに落ち込む。埋土は灰黄褐色砂質土（１層）、にぶい黄褐色砂質土（２層）である。長軸の中央をピット（Ｐ４・Ｐ８・P13）が約2.4mで等間隔に並ぶため、これらが主柱穴である可能性が高い。特異なこととして、床面上に炭化物が広範囲に出土している。なかでも東半分の範囲から炭化米が層状に出土している。その状態を見ると、炭化米中に細い繊維質や茎状のものが存在し、それらが束状になっていることが観察された。このようなことから穂積された稲穂を束にして家屋内の上部に設けられた棚状施設の上に保存されていたことが想定され、それが火災によって崩落したものと考えられる。同様な事例が住居15-S1509でも見られる。

出土遺物（第149図）　甕の底部破片で、やや尖底気味の凸レンズ状を呈し、体部へやや内弯し外方へ大きく開く。外面体部に煤が付着している。外面には縦方向のハケが施され、内面はナデ調整である。

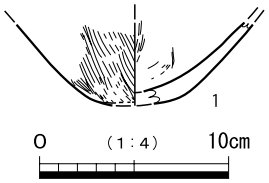
住居14-S1506（第150図・図版16-2）

９グリッド９・10Ｊ～14グリッド９・10Ａ地区において検出した方形プランの竪穴住居である。南東隅は現代の建物基礎によって破壊されている。住居9-S0001、円形周溝状遺構14-S1505と重複する。前者との新旧関係は不明であるが、後者とはそれをを切っているので新しい。確認できた規模は長辺4.50m、短辺3.72mである。検出面から床面までの深さは良い部分でもわずか８㎝程度である。埋土は灰黄褐色砂質土の一層で、貼床は確認されなかった。

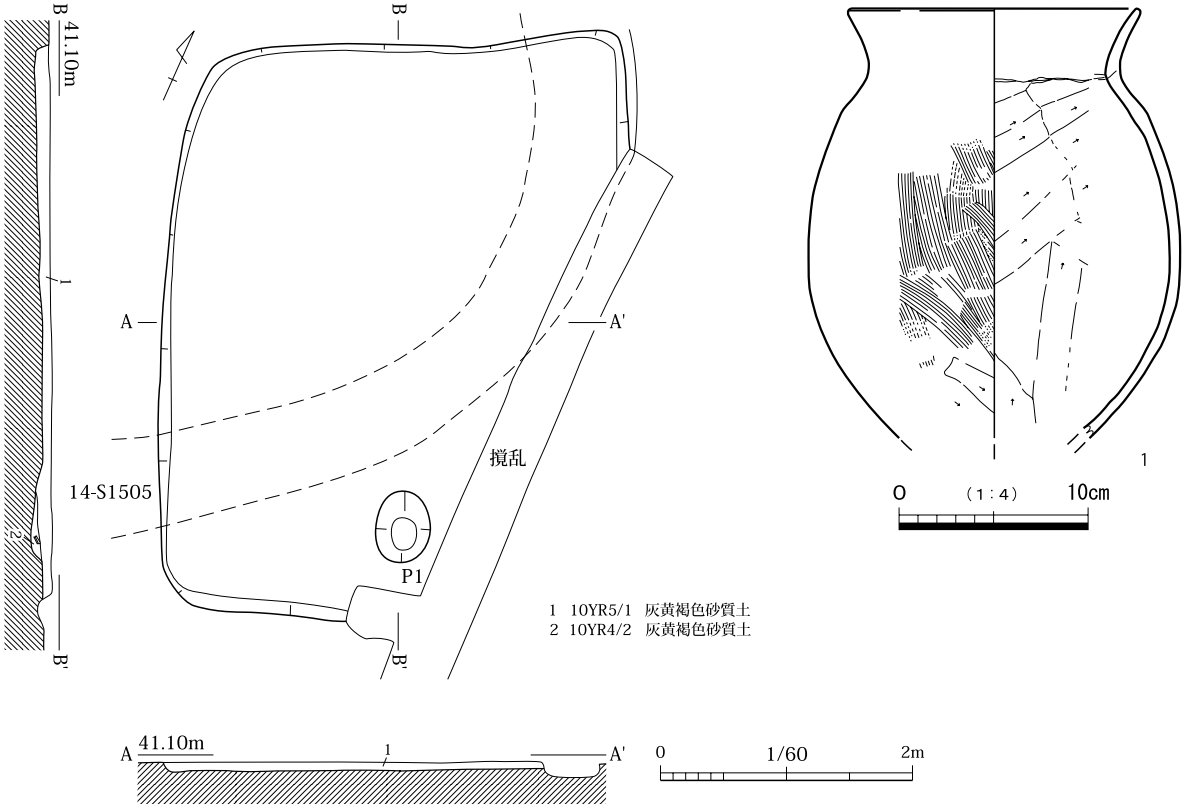
出土遺物（第150図）　甕で、卵形状の体部から頸部で緩やかに外反し口縁端部は丸くおさめる。体部外面はハケ目、内面はヘラケズリ調整が施される。



第148図 住居14-S1502 平面・断面図



第149図 住居14-S1502 出土遺物実測図



第150図 住居14-S1506 平面・断面図、出土遺物実測図

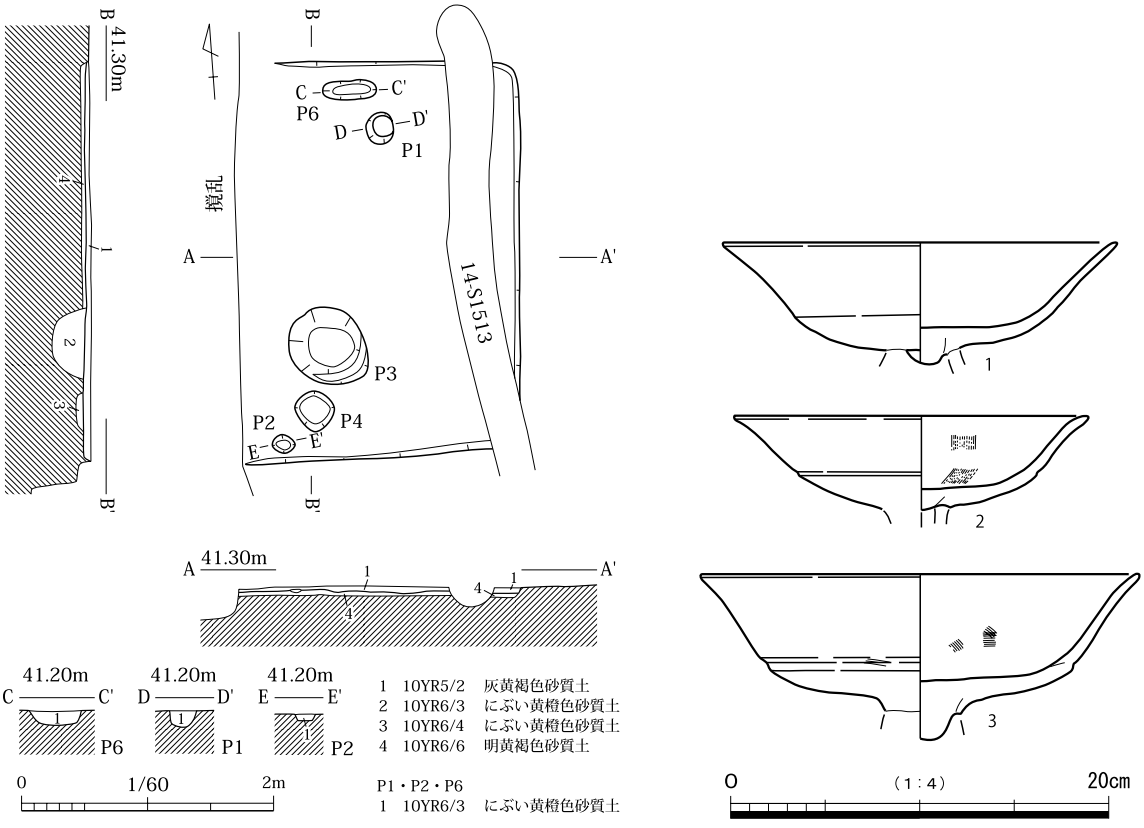
住居14-S1509（第151図・図版30-1）

14グリッド８Ｄ地区において検出した竪穴住居である。住居の西側は撹乱で削平されている。方形周溝状遺構14-S1510と重複するがこの住居が新しい。規模は残存する南北方向で3.20ｍ、深さは検出面から８㎝である。埋土は灰黄褐色砂質土の一層で、明黄褐色砂質土の貼床（４層）を確認している。主柱穴は確認できなかった。

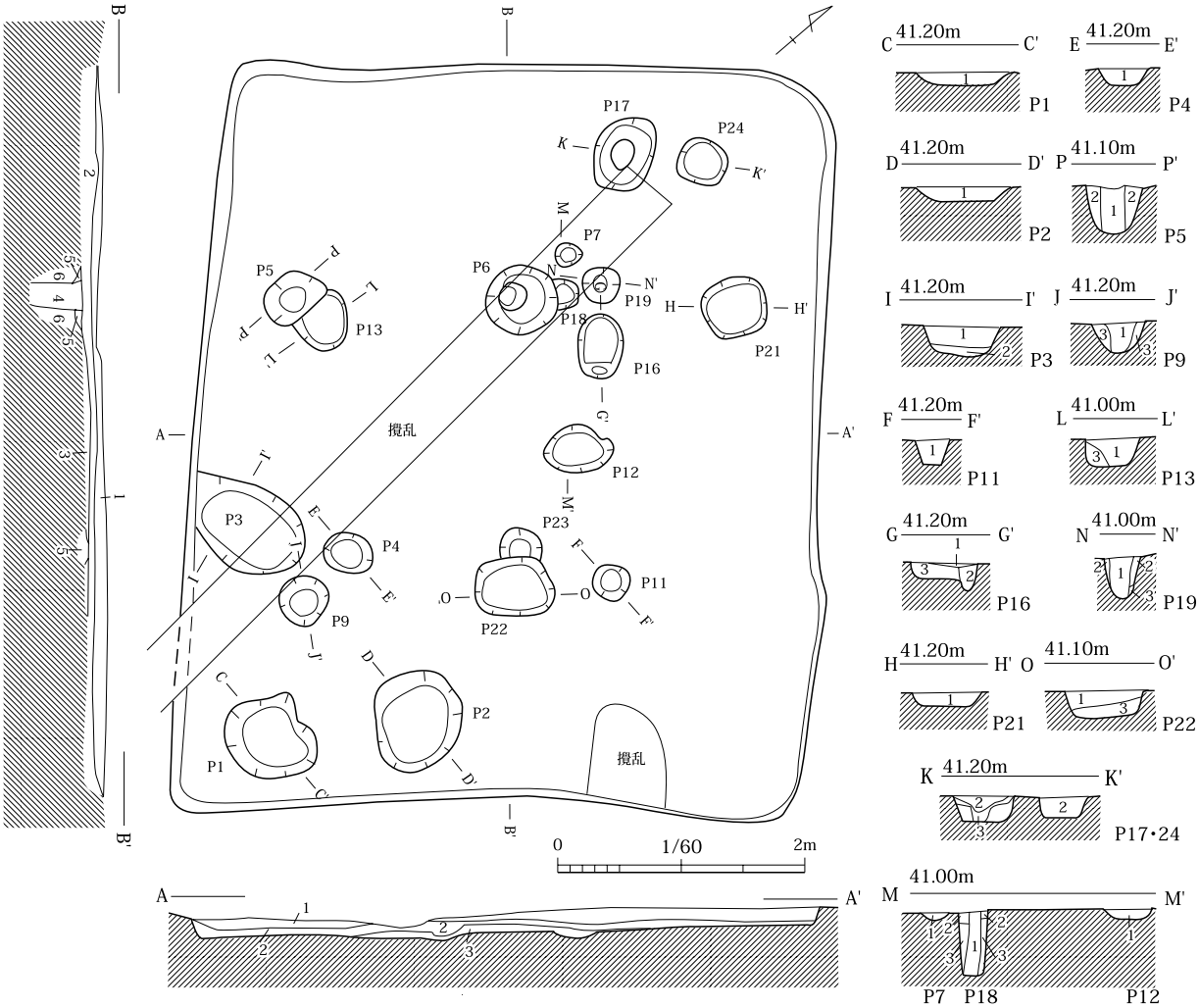
出土遺物（第151図・図版61）　１～３は高杯の杯部である。それぞれ口縁部は緩やかに外反し上方に開く。すべて粘土充填技法をもちいている。杯部の稜が不明瞭な１とやや明瞭である２・３に分類できるが同一タイプである。西新町Ⅱ式よりは新しい様相を示している。

住居14-S1511（第152図・図版30-2）

14グリッド６Ｅ地区において検出した竪穴住居である。方形周溝状遺構14-S1510、大型建物５、住居14-S0018同じく住居14-S1002と重複する。14-S1510、大型建物５、14-S1002より新しく、14-S0018より古いものである。長辺6.02ｍ、短辺5.16ｍを測る長方形プランで、深さは検出面から14～20㎝である。埋土は灰黄褐色砂質土と褐灰色砂質土が水平に堆積している。貼床は確認できなかった。住居内では21基の土坑、ピットを確認したが、どれがこの住居に伴うものなのか不明なものが多い。その中で、配置から中央付近で検出したＰ６とP22は主柱穴の可能性があり主柱2本の住居と想定される。



第151図 住居14-S1509 平面・断面図、出土遺物実測図



1 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
2 10YR6/1 灰褐色砂質土
3 10YR3/2 黒褐色炭
4 10YR6/2 灰黄褐色砂質土
5 10YR5/2 灰黄褐色粘質土

P1･P2･P3･P4･P9･P11･P16･P17･P21･P22･P24
1 10YR6/1 褐灰色砂質土
2 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
3 10YR7/2 にぶい黄橙色砂質土

P5･P19
1 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質土
2 10YR5/6 黄褐色砂質土
3 10YR4/4 褐色砂質土

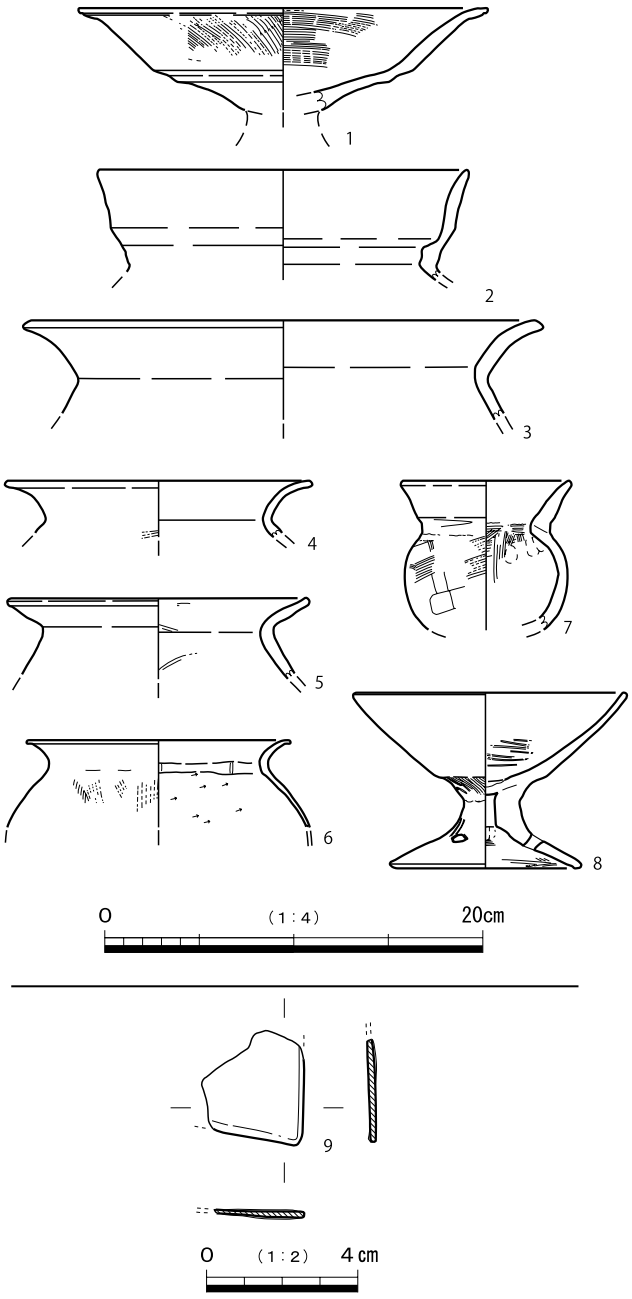
P7･P12･P13･P18
1 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
2 10YR5/1 褐灰色砂質土
3 10YR6/6 明黄褐色砂質土

第152図 住居14-S1511 平面・断面図

出土遺物（第153図・図版62）　1は明瞭な稜をもつ高杯杯部で、口縁部は端部付近で短く外反する。2は山陰系の複合口縁である。甕よりは壺であろうか。3～6は甕である。3・4・6は口縁部が外反し、5は外傾する。6は内面ヘラケズリがなされている。7は小型壺である。8は杯部が深く、脚注部が短い高杯で、裾部に3方向の焼成前穿孔を施す。9は用途不明の鉄は製品で小片である。任意の傾きではあるが、残存長3.0㎝、残存幅2.7㎝、厚さ1～2㎜である。直線的な側縁が2辺残存している。

住居14-S1514（第154図）

14グリッド10D地区において検出した竪穴住居である。大型建物8のＰ1と重複するが切り合い関係からこの住居が新しい。長辺5.32m、短辺4.30mの長方形プランで、深さは検出面から10㎝である。主柱穴は確認できなかった。埋土は、灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が水平に堆積している。



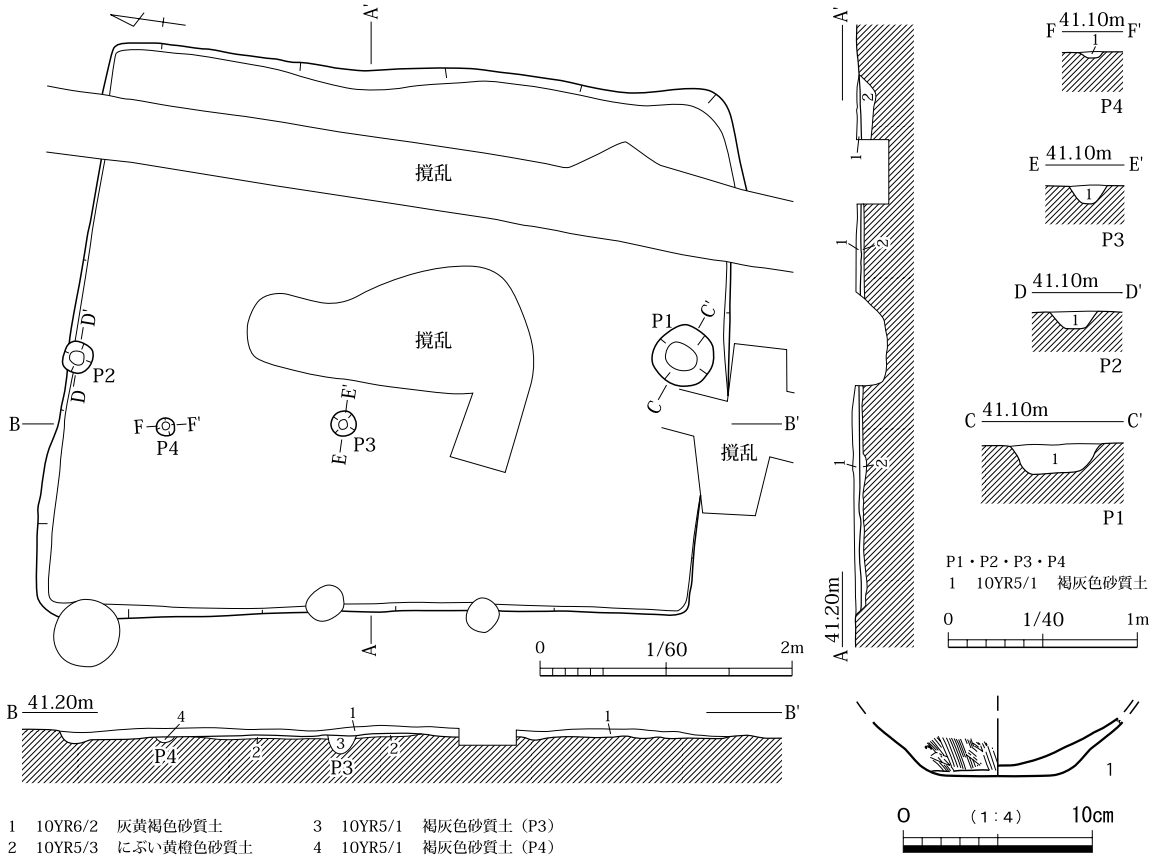
第153図 住居14-S1511 出土遺物実測図

にぶい黄褐色砂質土には炭片がチップ状に混入しており、しまりが弱く、ピット上に堆積することから貼床ではない。住居の東を南北に開削された現代の建物基礎部からの土層断面を確認したが貼床は確認できなかった。

出土遺物（第154図） 壺の底部で凸レンズ状を呈し、体部へやや外弯し外斜上方へ大きく開く。外面はハケ調整が施される。

住居14-S1516（第155図・図版31-2）

ＢⅡ-３区中央部で検出された竪穴住居である。大型建物８の柱穴と重複するが切り合い関係からこの住居が新しい。長辺4.80ｍ、短辺4.08ｍの長方形プランで、深さは検出面から0.06～0.10ｍである。主



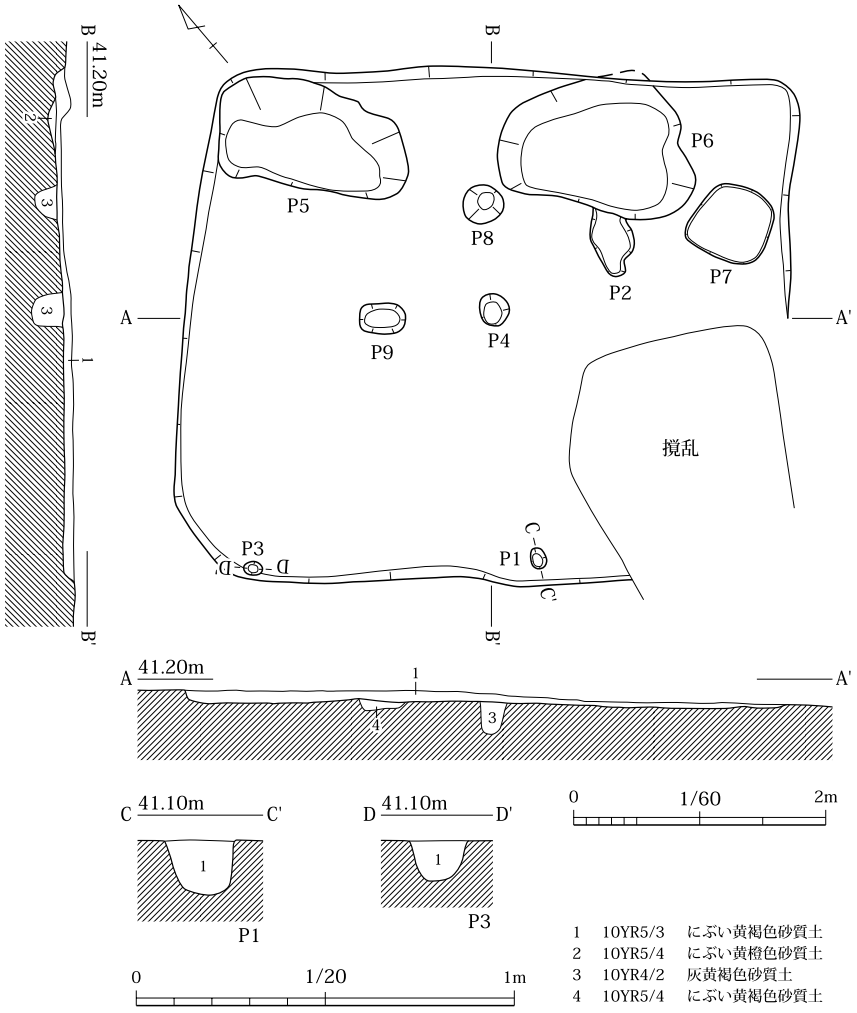
第154図 住居14-S1514 平面・断面図、出土遺物実測図

柱穴、貼床は確認できなかった。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。なお、遺物は少量で図化に耐えうるものはなかった。

住居14-S1524（第156図・図版29）

14グリッド６Ｃ～７Ｃ地区において検出した竪穴住居である。方形周溝状遺構14-S1510と住居北側で重複するが、14-S1510に切られている。この周溝状遺構の北側では住居の北壁は検出できなかったので溝内に存在したと思われる。規模は残存する東西方向で3.90ｍ、南北は推定で３ｍ程度を測るので、やや長方形プランを呈する。深さは検出面から10～12㎝である。埋土は灰黄褐色砂質土の一層である。主柱穴についてはＰ４，Ｐ６が推定されるが、主軸に直行するため確証がない。また、住居の中央部で、１ｍ四方の炭層を検出したが、焼土、土坑等は確認できず、炉跡などの施設に伴うものかどうかは不明である。住居の西辺近くの床面直上では、土器片が押しつぶされたような状態で出土している。

出土遺物（第157図・図版62）　１は球形の体部から口縁部が直立する短頸壺で、外面はハケを、内面はヘラケズリを施す。２は甕で、口縁部は卵形の体部から頸部がくの字状に外傾し、底部は凸レンズ状を呈する。３・４いずれも壺の底部で凸レンズ状を呈す。５・６は鉢で、５は口縁までほぼ直線的に伸び端部がやや尖り気味である。底部は凸レンズ状をなす。７は製塩土器の脚底部である。８は



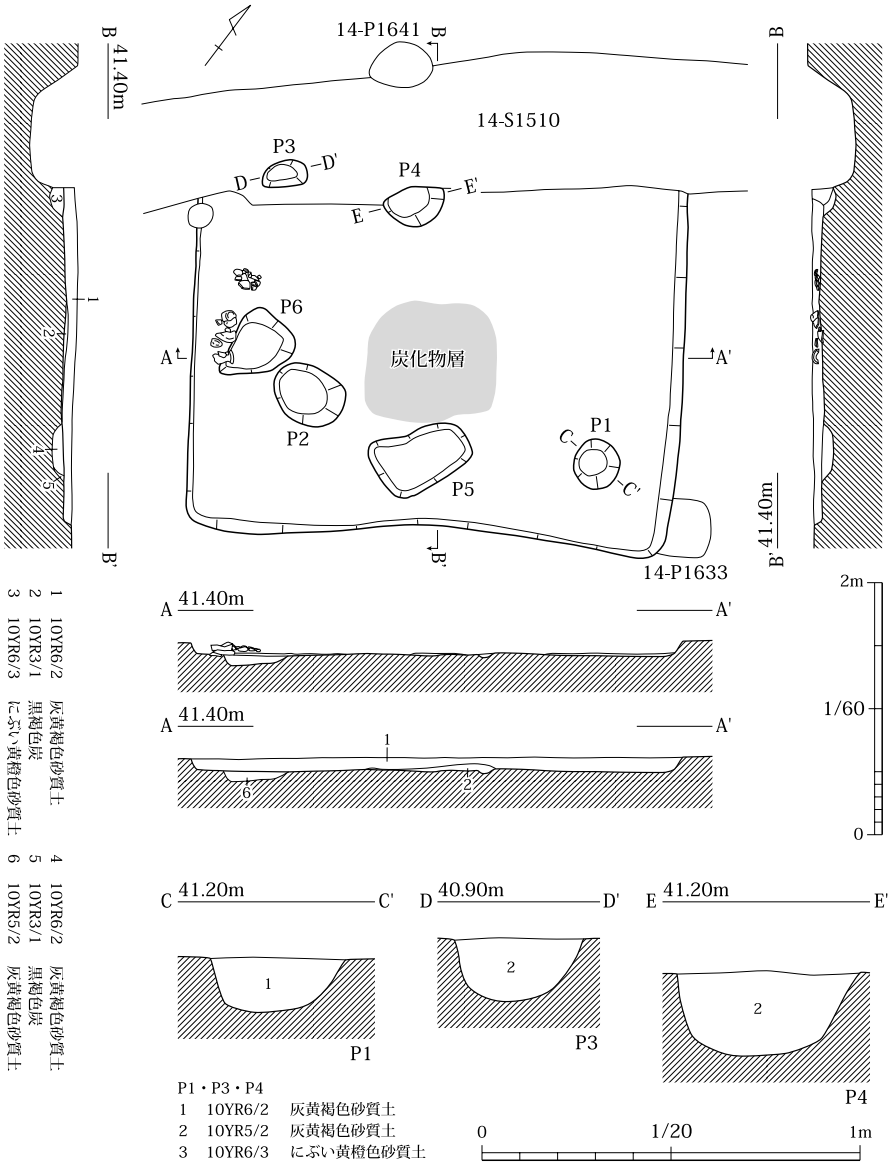
第155図 住居14-S1516 平面・断面図

器台で最小径が上方に位置する。器壁が厚く、内外面ともハケを施す。

住居14-S2004（第158図・図版31-1）

14グリッド８Ｇ～９Ｇ地区において検出した竪穴住居である。現代の建物基礎により部分的に破壊されている。規模は6.30ｍ×6.30ｍを測り、正方形プランである。検出面からの深さは最深で８㎝と非常に残りが悪く、南コーナー付近では壁は残存していなかった。地山は明黄褐色砂質土で、マンガン質を多く含んでおり、床は直床と考えられる。西側を中心にベッド状遺構と呼ばれるテラスを確認している。残りは良くないが、入り口と考えられる南側中央を除き、全周していた可能性が高い。主柱穴は４本柱（Ｐ２・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８）と考えられる。いずれも円形プランで、径0.20～0.37ｍ、深さ0.27～0.37ｍを測る。中央で検出されたP17は大部分を壊されているが、埋土に炭がみられることから炉の可能性が考えられる。また南壁・東壁際では貯蔵穴と考えられる屋内土坑を確認した。土器の細片が少量出土しているが図化できるものはない。

住居14-Ｓ2010（図版36-1）



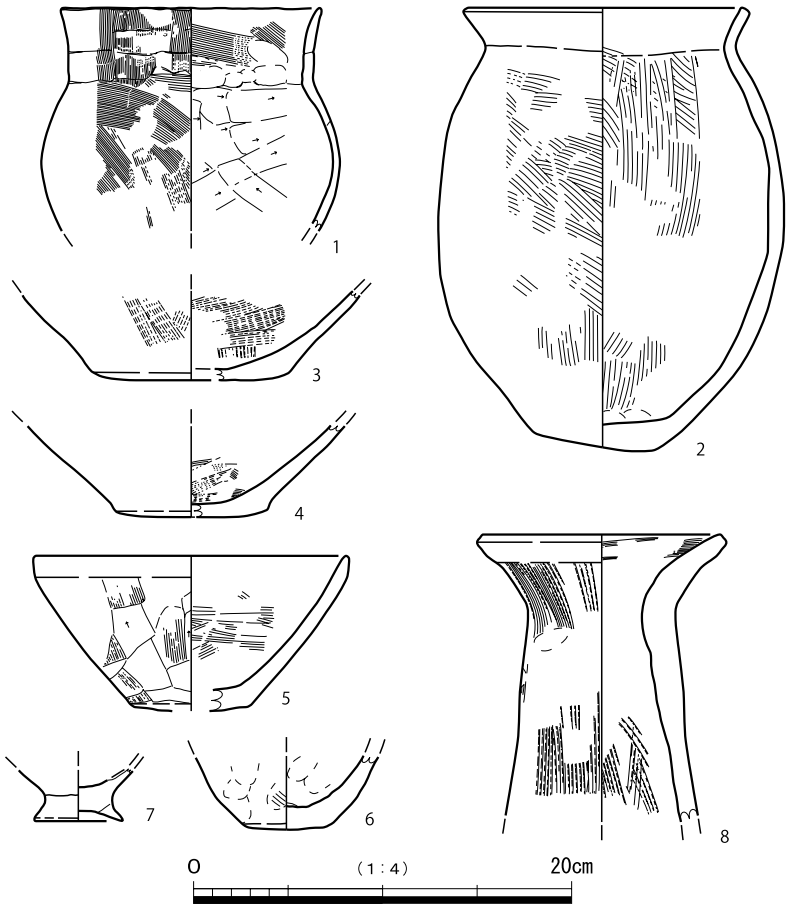
第156図 住居14-S1524 平面・断面図

14グリッド９Ⅰ～10Ⅰ地区において検出した竪穴住居である。住居14-S0501と重複するがそれに切られている。一辺４ｍ弱の正方形プランを呈し、検出面から床面までの残存深度は10㎝程度である。主柱穴、貼床等は確認することができなかった。遺物は出土していない。

住居15-S0001（第159図・図版32-1）

15グリッド２Ｄ地区において検出した竪穴住居である。長辺5,80m、短辺5.14mを測る方形プランである。検出面からの深さは10～20㎝である。精査の結果、貼床等の痕跡は確認されず、主柱穴についても確認できなかった。南東隅で焼土塊が混入する炭層を検出したが、炉としての構造物は無かった。なお、中央部では径0.94ｍの浅い円形の落ち込みがあり、これが炉跡と考えられる。

出土遺物（第159図）　１は短頸壺で、口縁部が直線的に立ち上がる。２・３は甕である。２の口縁部は卵形状の体部からくの字に屈折し外傾する。体部全体に縦方向のハケ目を、体部下半にはヘラケ



第157図 住居14-S1524 出土遺物実測図

ズリを施す。３は古い様相を残す平底の壺底部である。４・５は鉢でいずれも椀状を呈する。４は手づくねの鉢で、口縁部がやや内傾する。５はやや大型の鉢で、丸底を呈する。

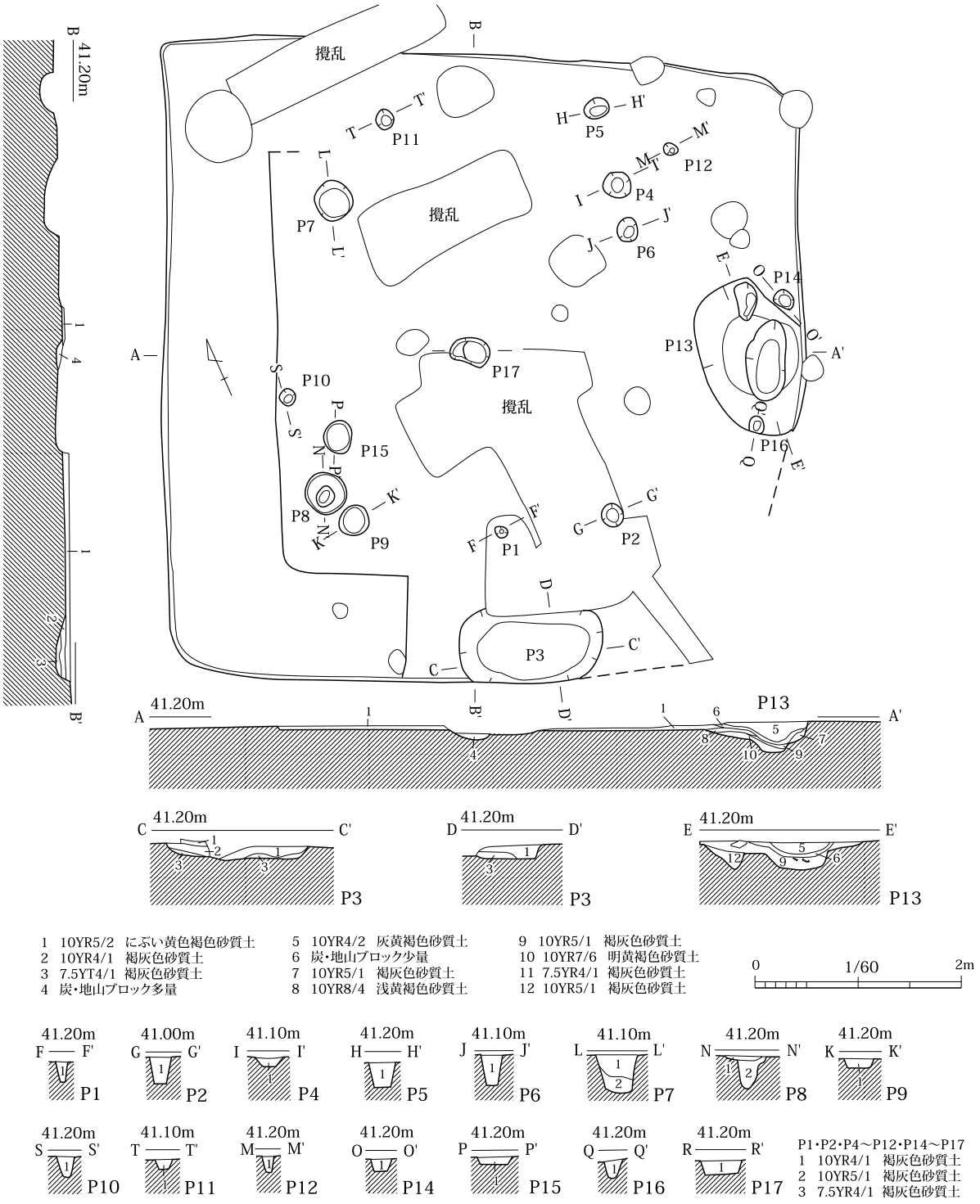
住居15-S0004（第160図・図版32-2）

15グリッド４Ｄ地区において検出した竪穴住居である。南側で住居15-S0005・６と重複するが、この住居が最も新しい。東側が台地先端部の緩傾斜地に当たることから住居の東半分は消失していた。規模は南北5.30ｍを測り、方形プランである。検出面から床面までの深さは10㎝程である。床面はフラットであるが、貼り床等の痕跡は確認されなかった。柱穴Ｐ１が主柱穴の可能性がある。南端部で径10～20㎝の礫を数個確認しているが、用途は不明である。

出土遺物（第160図）　１は甕の口縁部で、緩く湾曲する頸部を有する。外面に縦方向、内面には横方向のハケ目を施す。２は鉢で、口縁部が直立気味に立ち上がる椀状を呈する。内外面はハケ調整がなされているが、内面にはヘラミカギも施される。

住居15-S0005（第161図・図版32-2）

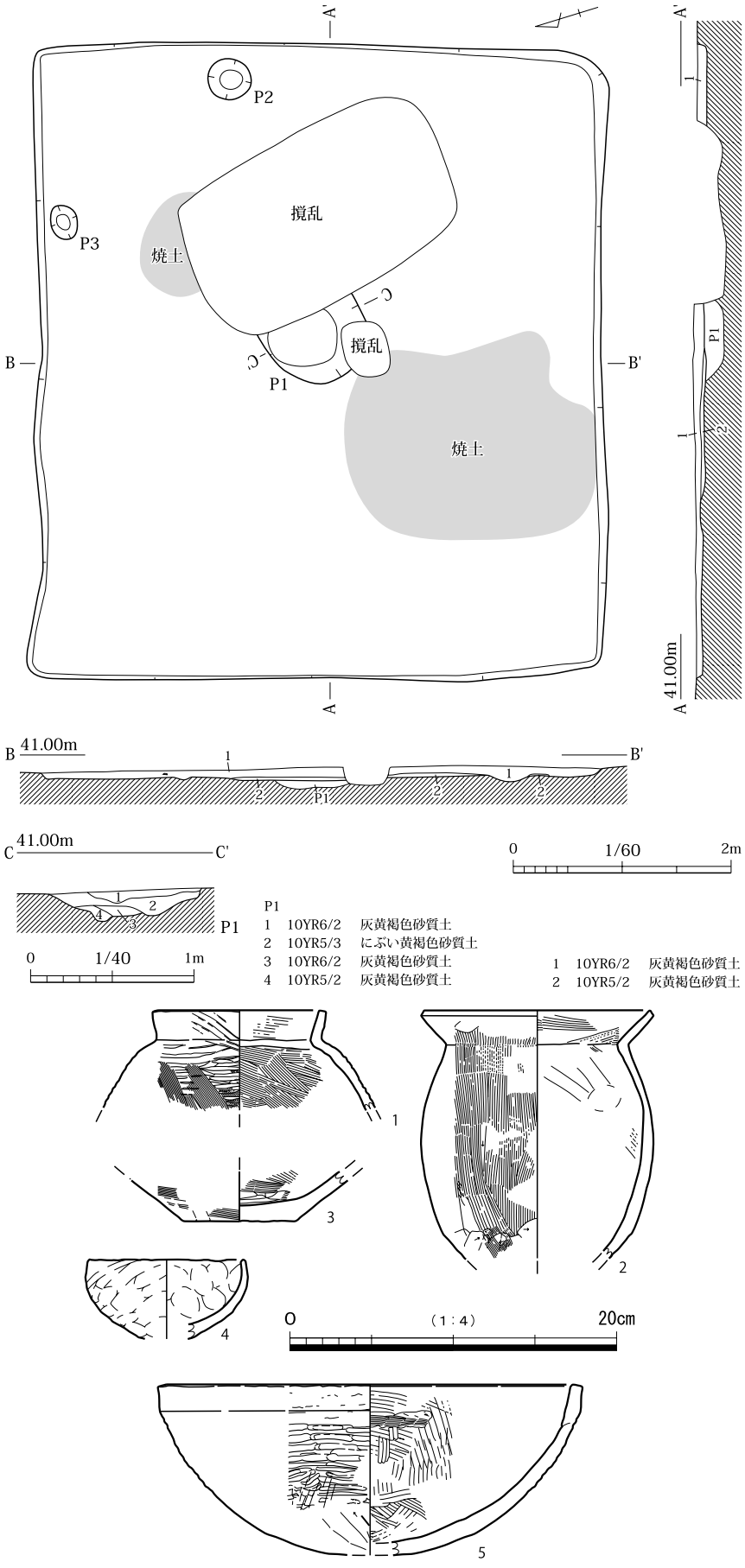
15グリッド４Ｅ地区において検出した竪穴住居である。住居15-S0004・６と重複するが15-S0006よ



第158図 住居14-S2004 平面・断面図

り新しく、15-S0004よりは古いものである。15-S0004同様、東半分は消失している。規模は南北4.60ｍを測り、方形プランである。検出面から床面までの深さは60㎝である。また、主柱穴を含む柱穴は確認できなかった。中央部で炭層を確認しているので炉跡の可能性がある。

出土遺物（第162図）　１は甕で、口縁部は丸みをもつ体部から直線的に立ち上がり、口縁端部は外傾し面をもつ。外面は粗い叩き整形である。口縁部内外面にはハケ目調整を、体部外面にはタタキ目による調整が施される。２～５は鉢である。２は口縁部が内傾し、底部はかなり丸底に近い凸レンズ



第159図 住居15-S0001 平面・断面図、出土遺物実測図

第160図 住居15-S0004 平面・断面図、出土遺物実測図

状を呈している。３は浅鉢で、内面はヘラミガキ、外底面はヘラケズリによる調整が施される。４・５は椀状で、４はやや尖り気味の丸底を呈する。

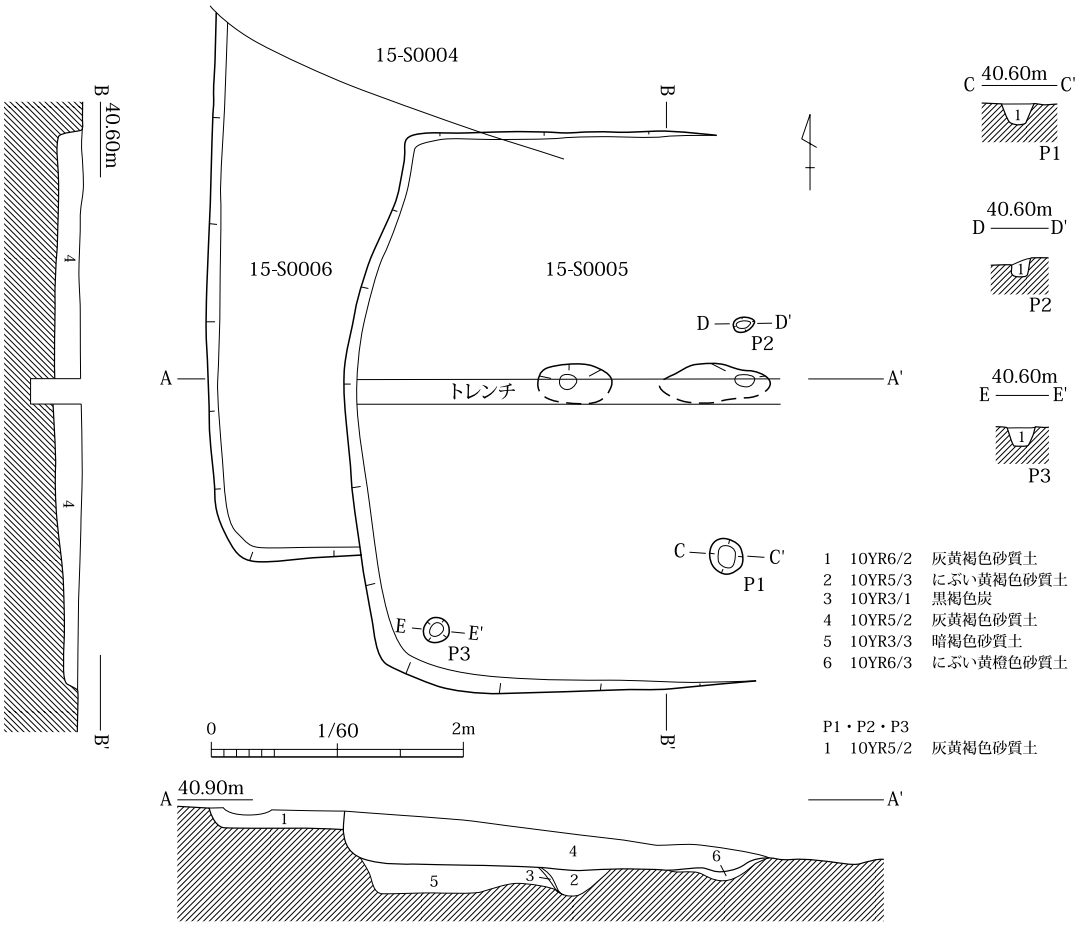
住居15-S0006（第161図・図版32-2）

15グリッド４Ｅ地区において検出した竪穴住居である。前述した二住居と重複するが、この住居が最も古い。前二者の住居により大半を失い、西壁部分の南北４ｍ、東西１ｍの範囲しか残存していないが、方形プランの住居と思われる。検出面から床面までの深さは14㎝である。床面はフラットであるが、貼床等の痕跡は確認されなかった。また、主柱穴も確認できなかった。

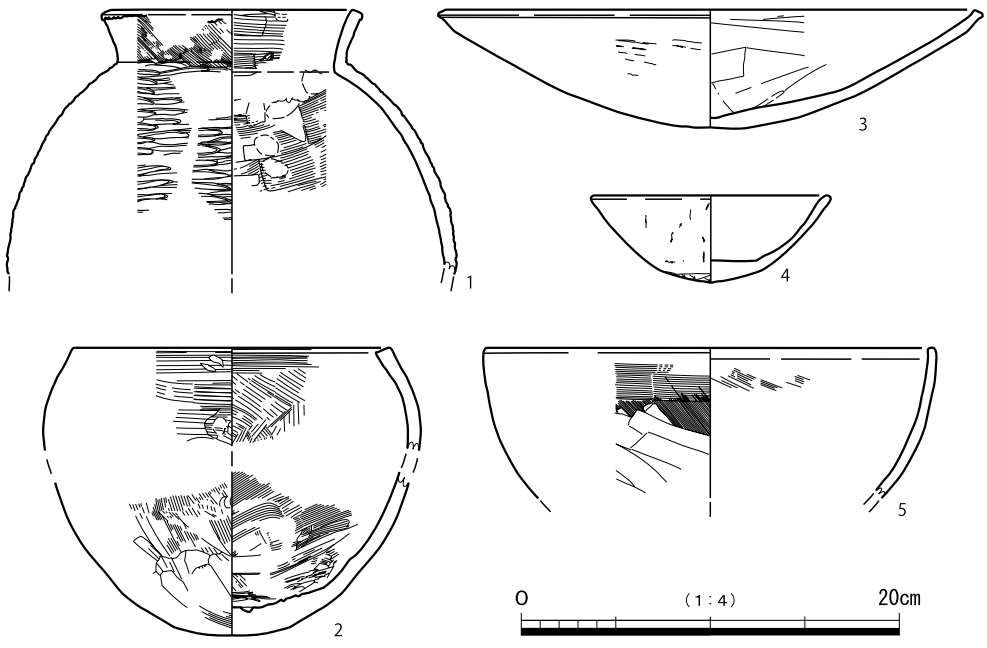
出土遺物（第163図）　１は椀状の鉢で、外面はヘラケズリ後ナデ調整を行い、内面にはハケを施す。２は壺の底部でややレンズ状を呈し、内外面及び底部にハケ目調整を施す。３は筒状の鉄製品で、上下端を欠損する。残存長1.6㎝、幅1.1㎝、厚さ1.0㎝を測る。中央には縦方向の合わせ目が確認できる。工具の袋部である可能性が高い。

住居15-S0501（第164図・図版36-1）

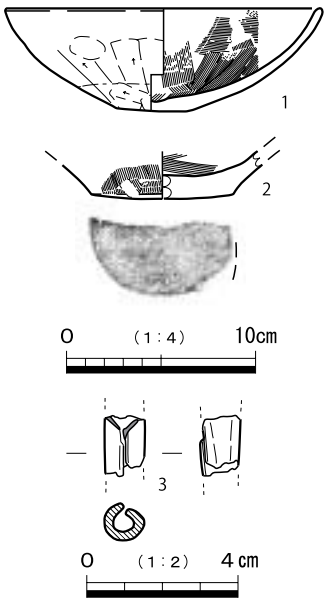
14グリッド10Ｉ地区において検出した竪穴住居である。調査当初に設定した南北基準畦のサブトレンチによって東側の一部を確認した。住居14-2009・S2020と重複するがこの住居が最も新しい。長辺4.83m、短辺3.58mを測る長方形プランで、検出面から床面までの深さは15㎝程である。調査区南西から北東にのびる落ち込み地形の、自然埋没後に建てられたと考えられ、落ち込み地形の埋土はきわ



第161図 住居15-S0005 平面・断面図



第162図 住居15-S0005 出土遺物実測図



第163図 住居15-S0006 出土遺物実測図

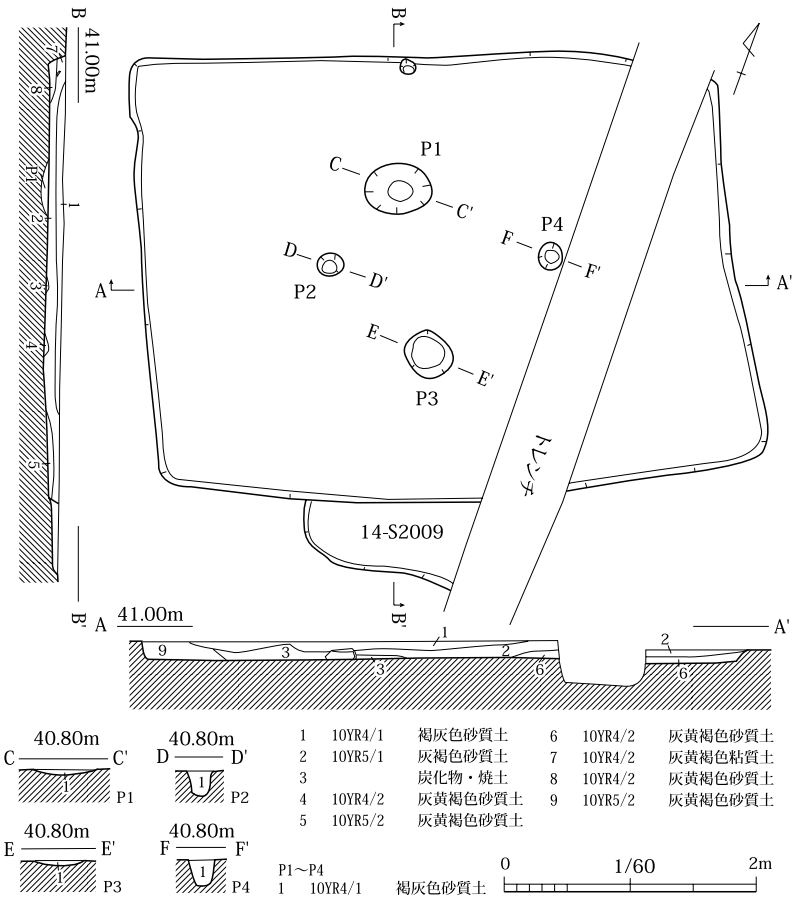
めて均質で、淡黄色や黄白色、灰色の細砂を主体としている。床はほぼ平坦で貼り床は確認されていない。遺構検出時に第165図３、４の完形遺物が横転した状態で出土し、床面直上からも遺物が出土している。主柱穴はＰ２（径0.2m・深さ0.21m）・Ｐ４（径0.22m・深さ0.2m）の２本柱と考えられる。

出土遺物（第165図・図版62）　１は丸底を有した単孔式の有孔鉢である。底部に焼成前の穿孔がある。２は馬蹄把手付鉢で、口縁部下方に把手の剥離痕が残る。３・４は丸底の甕で、３の口縁部は卵形の体部から頸部がくの字に屈折し外傾する。外面体部はタタキ後ハケ、体部下方はタタキ後ヘラケズリを施すし、二次焼成を受けている。内面はハケ及びヘラケズリ調整を行う。４は畿内系の甕で、口縁部は張りのある体部から頸部がくの字に屈折し、口縁部は緩く内湾し短部は内側に小さく肥厚させる。外面体部上方はタタキ後ハケ、下方もタタキ後ハケ調整を行う。内面底部付近は指頭圧痕が顕著である。器厚は他の甕に比較し明らかに薄い。外面は庄内系、口縁部と内面底部は布留系であり、畿内系甕を模倣し作成されている。５は山陰系の鼓形器台で、口縁部・脚部ともに欠損している。

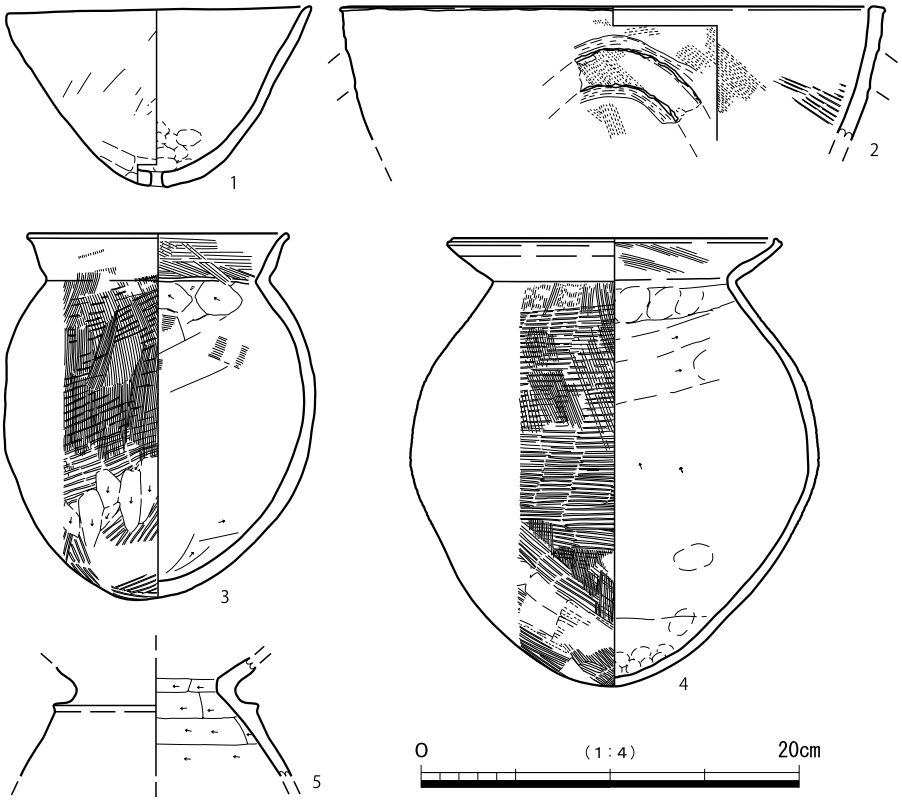
住居15-Ｓ0505（第166図・図版33-1）

15グリッド２Ｈ地区において検出した竪穴住居である。住居15-S0509を切り、部分的に攪乱により壊されている。長辺6.20ｍ、短辺5.20ｍを測り、やや不整形な長方形プランを呈している。検出面から床面までの深さは25㎝前後である。埋土には全体的に炭化物ブロックが混じっており、北側を中心とした床面上では炭化物の広がりが見られた。ベルト周辺では植物遺体が良好に残っており、ある程度の束が方向を変えて重ねられていた。直下からは部分的に炭化材が確認されている。周辺部は残りが悪く、ほとんどが炭化材の破片と思われる。これらは火災に伴い屋根が崩れ落ちた残骸の可能性があり、本住居は焼失家屋と考えられる。床面はほぼ平坦で、貼り床等の痕跡は認められない。主柱穴は確認されなかったが、２本柱なら配置からＰ８・Ｐ９の可能性がある。なお、南西側の浅いくぼみ（Ｐ６）および周囲の床面では炭化米が出土しており、埋土にも少量含まれている。これは住居15-S0509と重複している場所であり、この住居から大量の炭化米も出土していることから、15-S0509の炭化米である可能性が高い。また下部においても東側の住居15-S0510下層にまで広がる弥生時代早期の不確定遺構（流路？）が存在する。

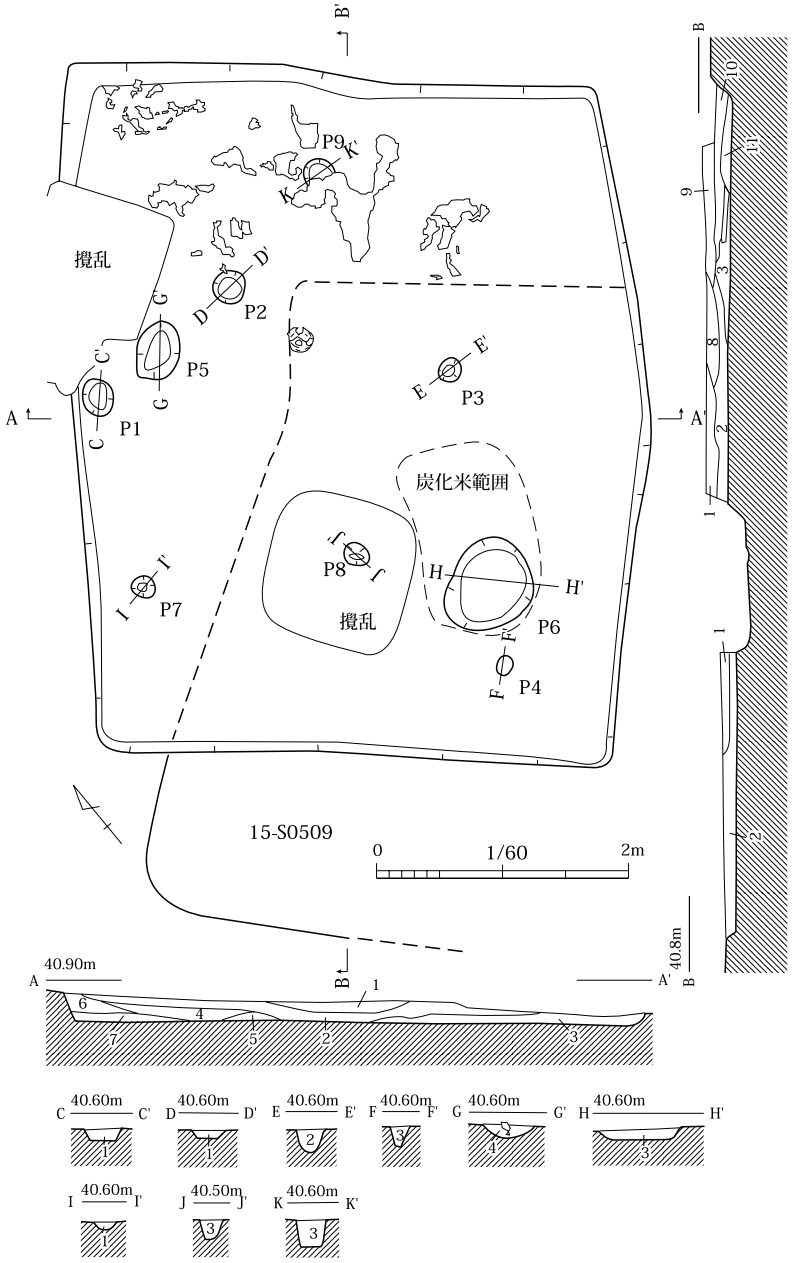
出土遺物（第167図・図版62）　前述したように三遺構が重複しているため、出土遺物に多少混乱が生じている。明らかに６，７は下層の不確定遺構に伴うもので、15-S0510下層土器と同様、弥生時代早期の底部であり、６は底部外面に二次焼成を受け、７は外底面に木葉痕が残る。１・２はタイプの違う鉢である。１は口縁部が大きく内湾し、丸底で扁平な形状を呈する。２は緩く内側に弧状を描く鉢で、丸底を有すると思われる。口縁端部に面を持たせている。３は高杯の杯部で、口縁部が大きく外反するタイプである。これは下大隈新段階に相当し、住居15-S0509からの混入品である。４は脚台



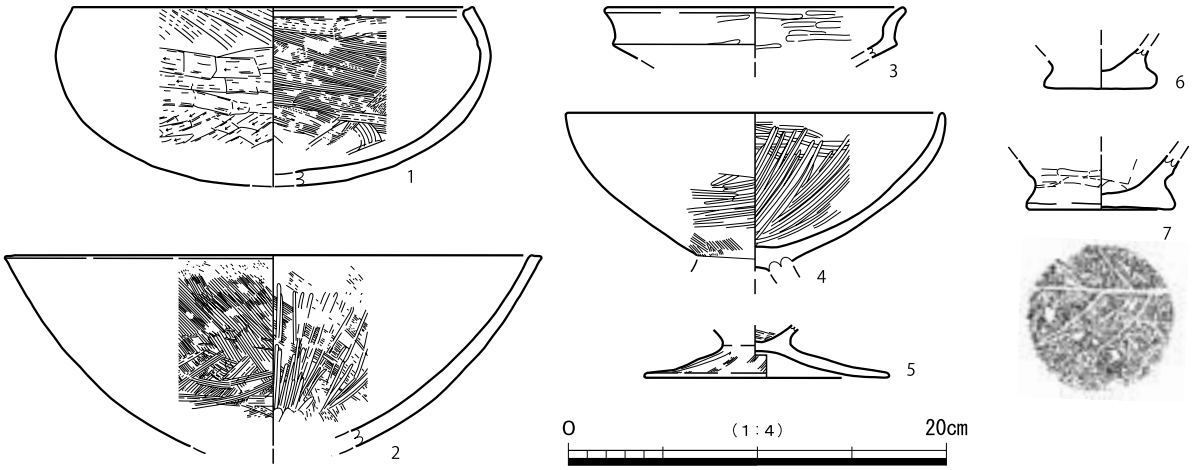
第164図 住居15-S0501 平面・断面図



第165図 住居15-S0501 出土遺物実測図



第166図 住居15-S0505 平面・断面図



第167図 住居15-S0505 出土遺物実測図

付鉢の鉢部である。５は上部に壺か鉢がのる台部である。

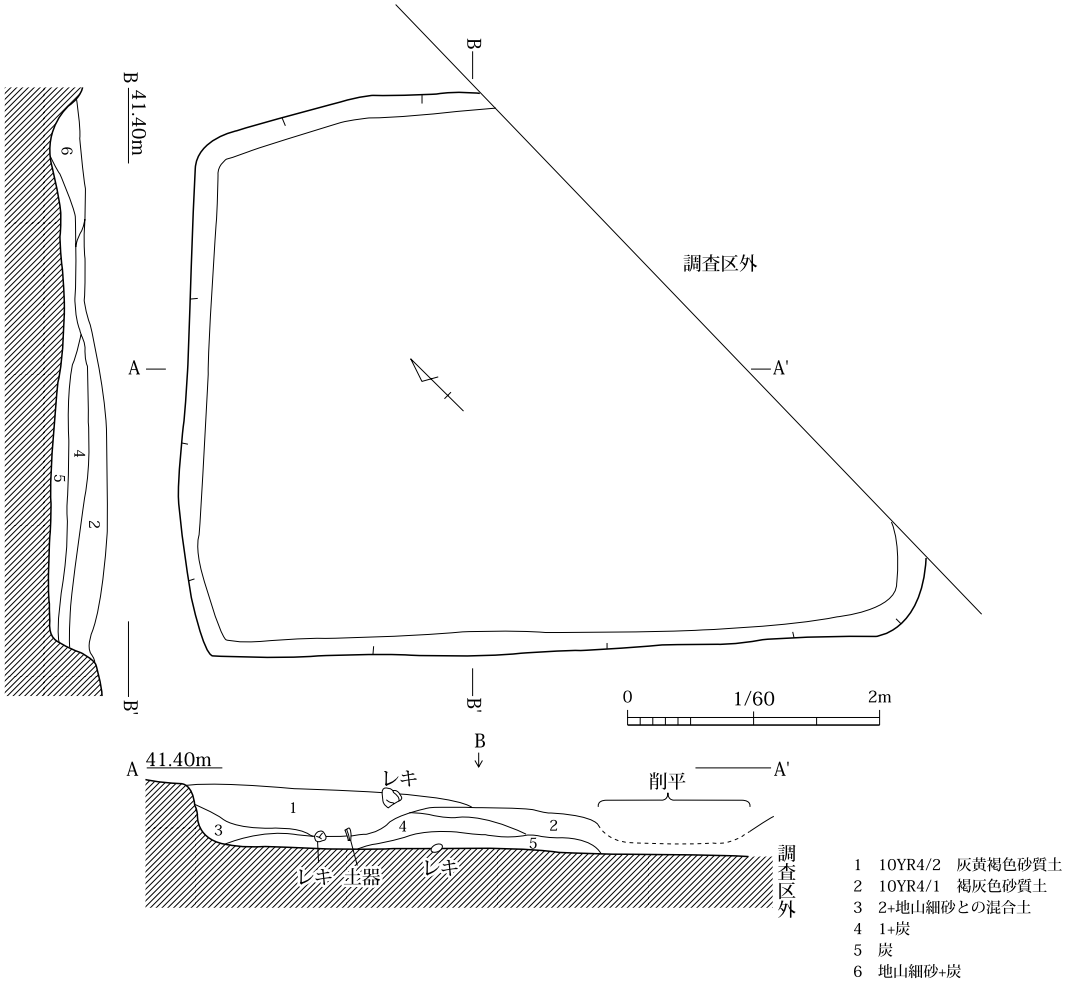
竪穴遺構15-S0507（第168図）

15グリッド５Ｇ地区において検出した方形竪穴遺構である。長辺3.02m、短辺2.30ｍを測る長方形プランで、東側は調査区外に出る。検出面からの深さは25㎝前後を測る。上層に焼土ブロック・炭ブロックを大量に含んだ層があり、地山直上にも炭層が広がる。底面は平坦である。柱穴等の遺構は無く、周囲の住居と比べても規模の小ささ、埋土の様相から、竪穴住居とは考えにくい。

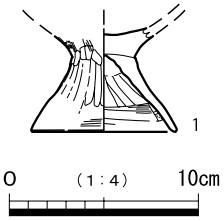
出土遺物（第169図）　台付小型鉢の脚部で、ハの字状に開く。

住居15-S0508（第170図・図版34-1）

15グリッド４Ｉ～５Ｉ地区において検出した竪穴住居である。土坑15-S517と重複するが、この土坑を切っている。一辺5.70ｍを測る方形プランである。検出面からの深さは0.20～0.30ｍを測る。床面はほぼフラットな直床であるが、東に向けての傾斜を有する。貼床等の痕跡は確認されなかった。地山は径1～２ｍｍの微礫主体で、径２㎝内外の礫を多く含む層である。柱穴は４本柱で、Ｐ２（径0.37ｍ・深さ0.23m）、Ｐ３（径0.52ｍ・深さ0.30m）、Ｐ４（径0.38ｍ・0.39m）、Ｐ５（径0.38ｍ・深さ0.12m）が該当する。平面形はいずれも円形である。住居の中央部では径0.67ｍ・深さ12㎝の浅い円形の掘りこみがあり、埋土には炭が含まれることから、炉と判断される。床面直上では土器が数個体



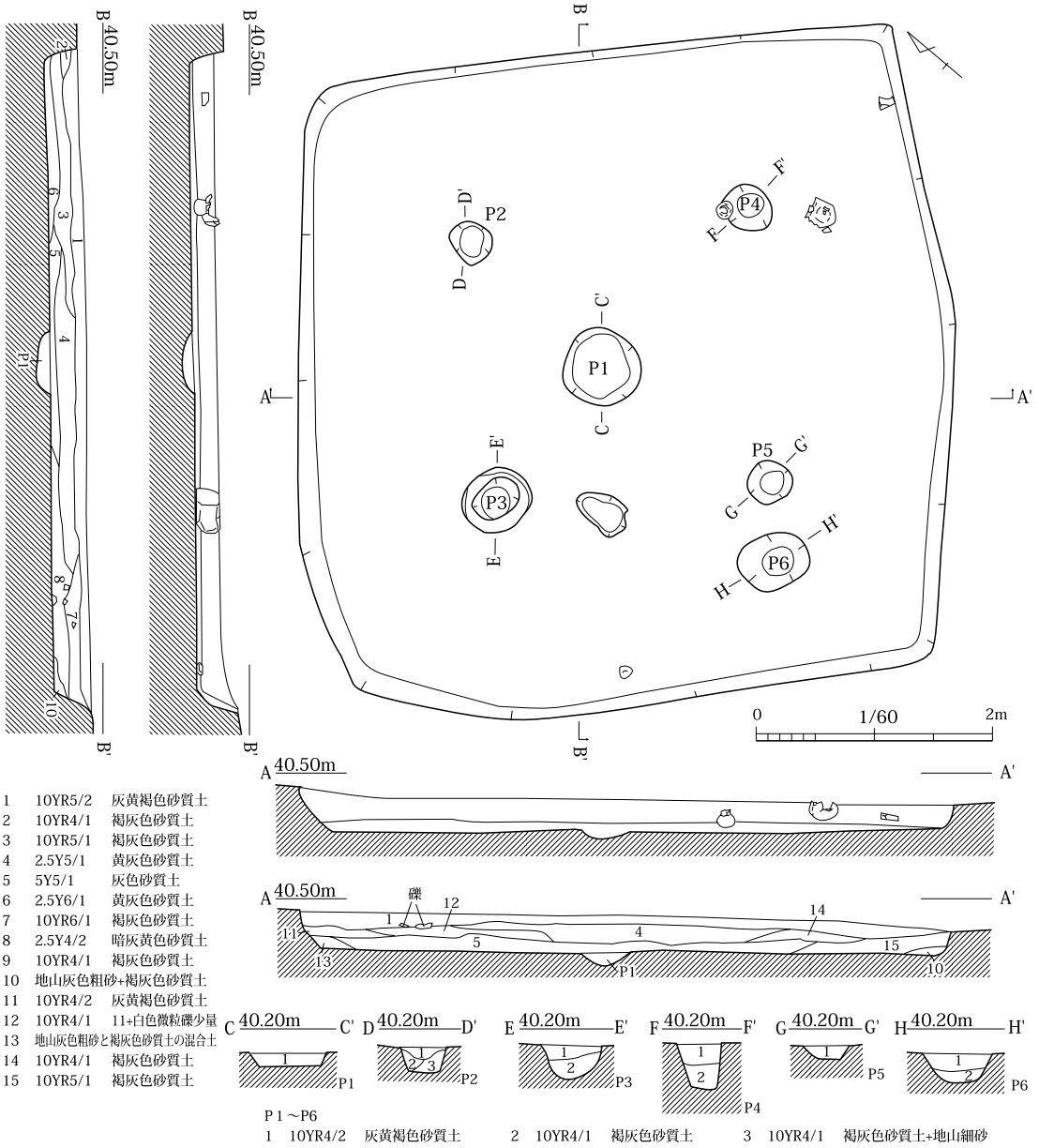
第168図 竪穴遺構15-S0507 平面・断面図



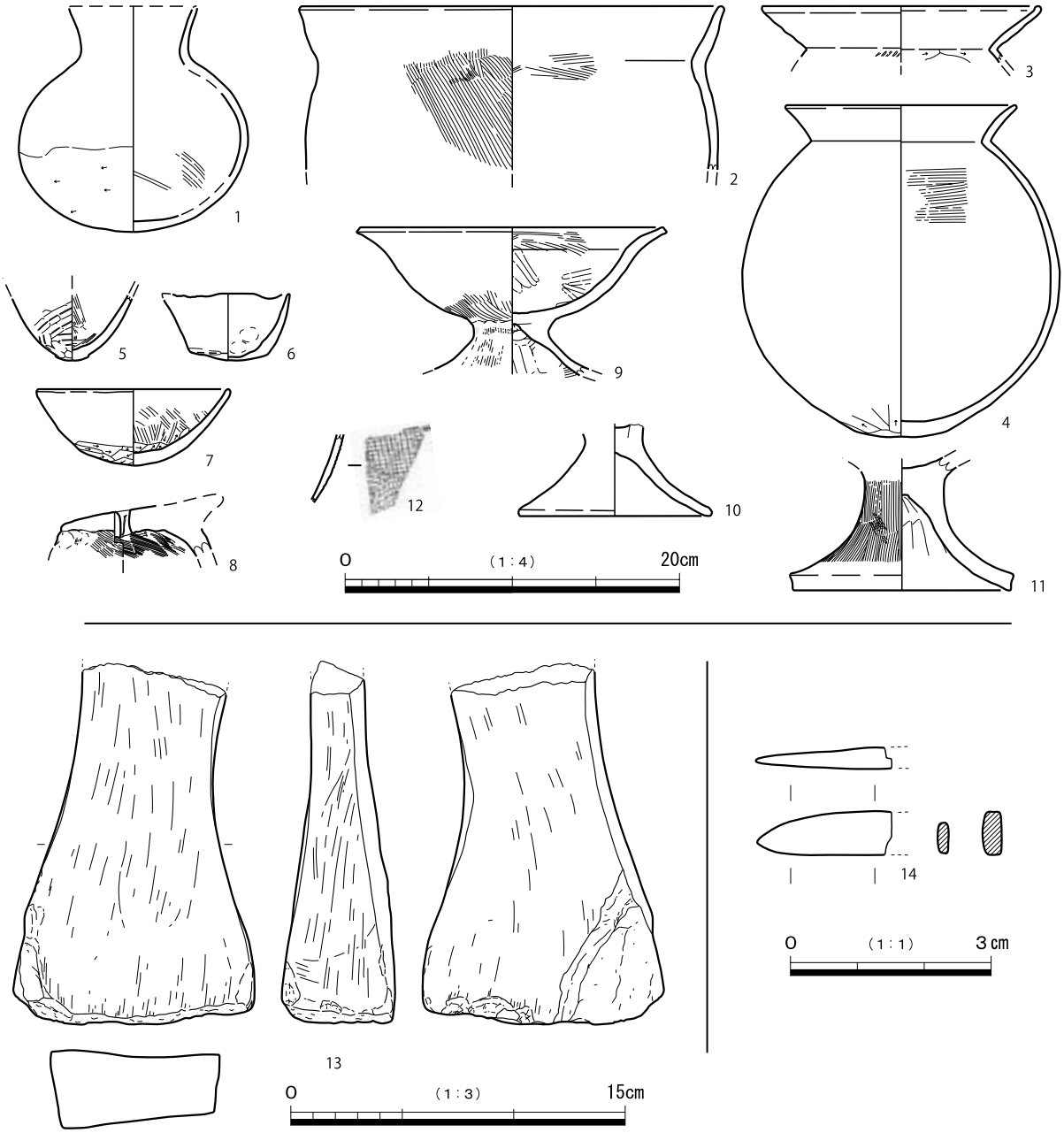
第169図 竪穴遺構15-S0507 出土遺物実測図

出土した他、中央の西寄りでは長さ約40㎝、高さ約20㎝の石が座った状態で出土しており、台石と考えられる。

出土遺物（第171図・図版62）　1の口縁部はやや扁平な丸い体部から直立気味に立ち上がる。口縁端部は欠損している。外面体部は底部にかけてヘラケズリ、内面はハケ及びナデ調整される。2～4は甕で2は張りの弱い体部をもつ甕で、外面ハケ調整を施す。内面に黒斑を有する。3は口縁部がくの字に屈折し、口縁端部は内方に小さく肥厚させる。外面は細い叩き目、内面はヘラケズリで胎土は生駒西麓産であることから搬入された庄内甕である。4の口縁部は球形の体部から鋭く屈折し外反する。内外面ともに底部黒斑を有し、二次焼成を受ける。5～7は鉢で5はやや凸レンズ状の底部で古い様相を残す鉢である。6は手づくねの鉢で外面に黒斑を有する。7は椀状を呈し、内外面ともに底部にヘラケズリ



第170図 住居15-S0508 平面・断面図

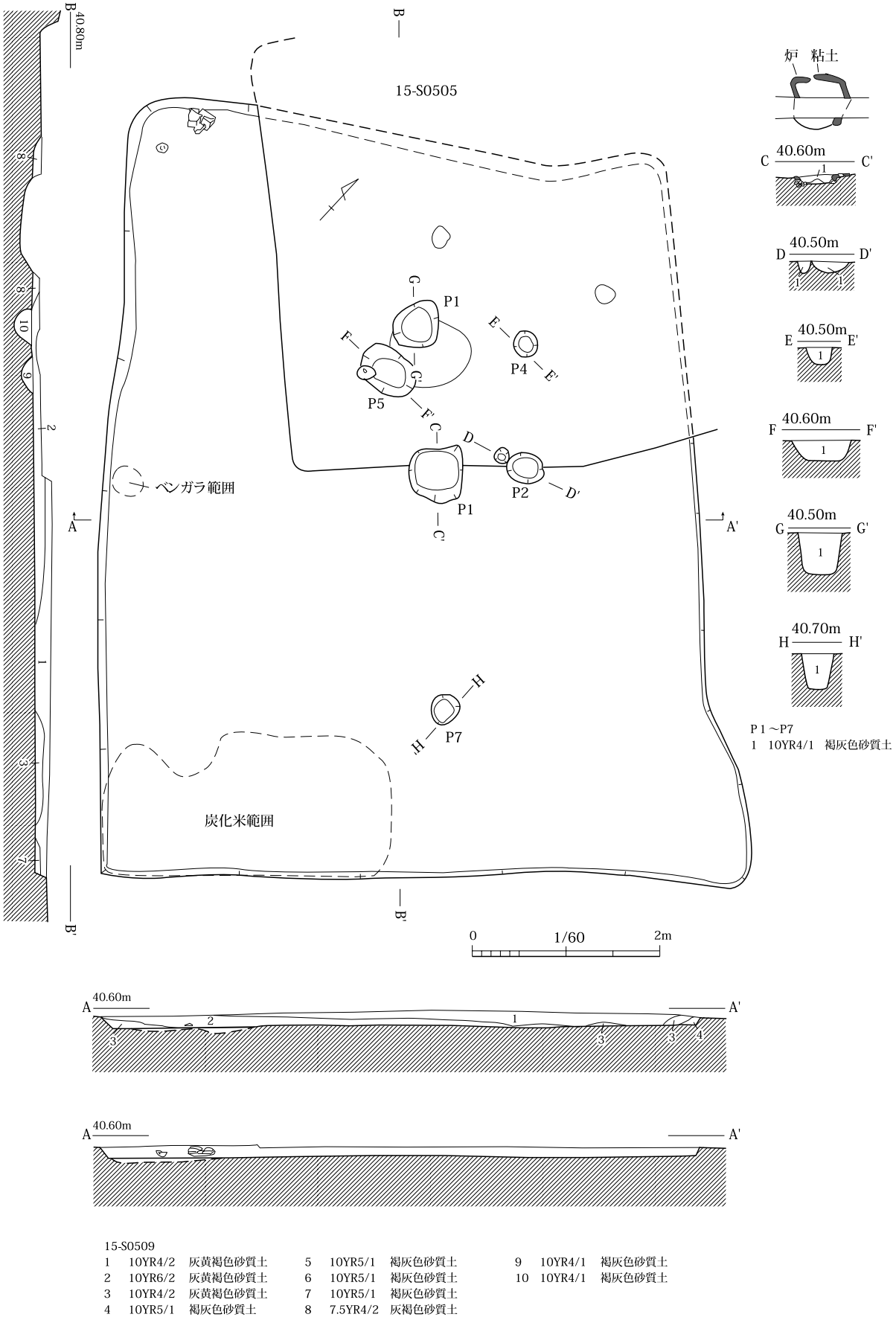


第171図 住居15-S0508 出土遺物実測図

を施す。８は沓形土製支脚である。受部中央に穿孔が一つある。９は台付鉢で、口縁部が上方で外反する。外面脚部に丹塗りと思われる痕跡がある。10・11は高杯脚部で、いずれもハの字に開く。12は陶質土器である。細い格子目タタキを外面の全面に施しているが、叩き分けの部分が観察される。器形は、方向を違える叩き目から短頸壺の体部下半と考えられる。13は砥石である。４面で使用痕が見られる。14は鉄製の刀子である。切先から刃部の途中まで残存する。錆などの影響により、外縁は本来の形状を保っていないものと思われる。そのため断面は一見長方形であるものの、本来は楔形であった可能性が高い。残存長4.0㎝、残存幅1.3㎝、背厚２～６㎜である。

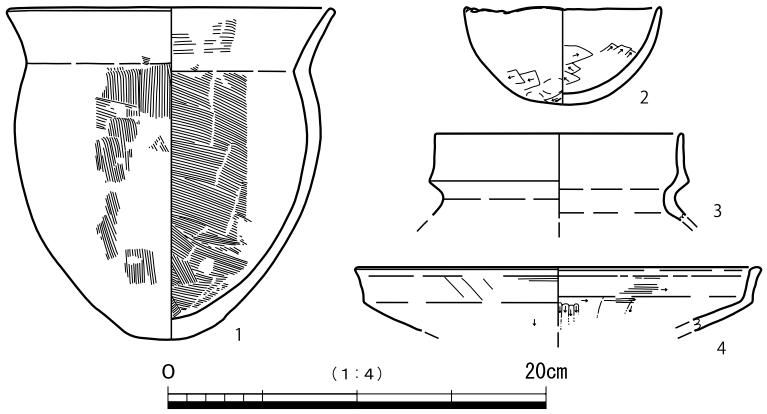
住居15-S0509（第172図・図版33）

15グリッド２Ｈ～３Ｉ地区において検出した比較的大型の竪穴住居である。北側を住居15-S0505と



第172図 住居15-S0509 平面・断面図

北側部分で重複するが、その住居に切られている。長辺8.43m、短辺7.04mを測る少し不整形な長方形プランを呈する住居である。検出面から床面までの深さは15㎝前後を測る。床面はフラットな直床で、貼床等は認められなかった。主柱穴と想定されるピットは確認されていない。床面中央部では炉跡を検出している。炉壁を囲うように白色の粘土を貼りめぐらせているが、全周はしていない。被熱の痕跡が認められないことから、炉壁形成土の中に貼り付けたものと考えられる。住居の南西側では、炭化米が多く出土している。埋土中にも焼土ブロックと共に炭化米が多く含まれており、床面でもこびりつくようにして出土している。全体的に粒がまばらな感を受けるが、密集している部分もあり稲穂の束のままの可能性も考えられることから住居14-S1502と同様、屋内の棚状施設に保管されていたものが火災に伴って落下したものと判断される。また西側壁際では、埋土中からベンガラが出土した。微量で、細かな粒状のものである。床面からは確実に浮いており、出土状況は住居15-S0513とよく似ている。



第173図 住居15-S0509 出土遺物実測図

出土遺物（第173図） 1は凸レンズ状の底部をもつ台付甕で、口縁部は張りの弱い体部から緩やかに外傾し口縁部端部は面をなす。脚部は貼り付け痕のみ残る。2は椀状を呈する鉢である。3は複合口縁部をもつ山陰系の壺である。4は口縁部が短く立ち上がる高杯の杯部で、内外面ともにヘラミガキを施す。これらの土器群のなかでは古相を示しており混入品とみられる。

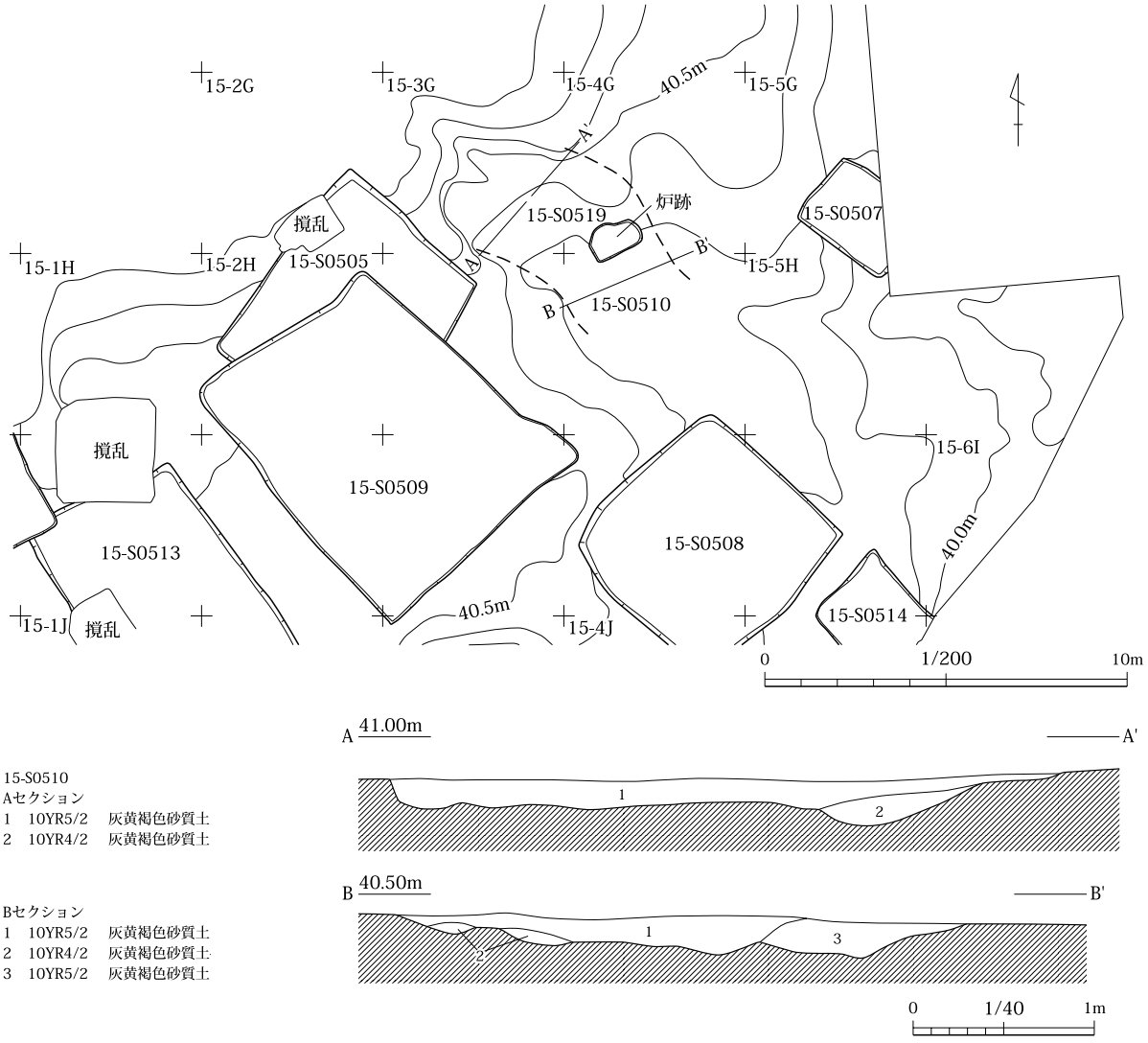
住居15-Ｓ0510（第174図）

15グリッド４Ｇ～４Ｈ地区に位置する住居である。精査を試みたが確実に住居跡を検出することはできなかった。しかし、後述する炉跡を根拠に住居と判断した。

炉跡15-S0519は４Ｈ基準杭の東１m付近で検出した浅い掘りこみ状の遺構である。規模は長辺1.45m、短辺0.9mを測るやや不整形な楕円形プランを呈する。検出面から底面までの深さは６㎝前後である。埋土は焼土・炭層からなることから炉と考えられ、本来竪穴住居に伴っていたものと判断される。よって後世の削平により炉跡部分だけがかろうじて残存していたものと解釈した。

出土遺物（第175図） 1は複合口縁壺で、口縁部が斜め上方に直線的に開く。口縁部外面に鋸歯紋をめぐらす。2は口縁部が短く直立する甕の上半部である。3は尖底気味の丸底を有する大型鉢である。4はジョッキ形土器の把手である。

15-S0510下層不確定遺構（第174図） 上記遺構の精査途中、どうしても竪穴住居の輪郭が掴めなかったため、サブトレンチを二本設定して確認に努めたがそれでも検出できず、炉跡の存在から上述したような結論を導き出した。しかし下層において、新たに弥生早期の遺物が出土する落ち込みを検出した。この落ち込みは隣接する住居15-S0505下層にまでは確実に広がっているようである。上部に重なる住居のために全体を確認するまでには至らなかったが、この位置が台地の傾斜面に位置し、南西部の19グリッドにおいては、この斜面に沿って幅４～５mの自然流路を確認している。この位置がそ



第174図 住居15-S0510 平面・断面図

の流路の延長線上に当たることから、この下層遺構もこの自然流路である可能性が考えられる。

出土遺物（第176図・図版63）　壺と甕が出土している。壺形土器は１・２の口縁部が２点。甕形土器は３～９の７点と、底部は10・11・12の計３点で、計12点を図示した。甕形土器は底部から内傾しながら立ち上がり、口縁部には刻目突帯を施さずに口唇部に直接刻目を入れる３・４をⅠ類。

Ⅰ類と同様の器形を有するが、口縁部に一条の刻目突帯を張り付けたもの５・９をⅡ類。

胴部上半で「く」の字に内側に屈曲する甕形の器形で、口縁部と胴部屈曲部に刻目突帯を張り付けるもの６～８をⅢ類とした。

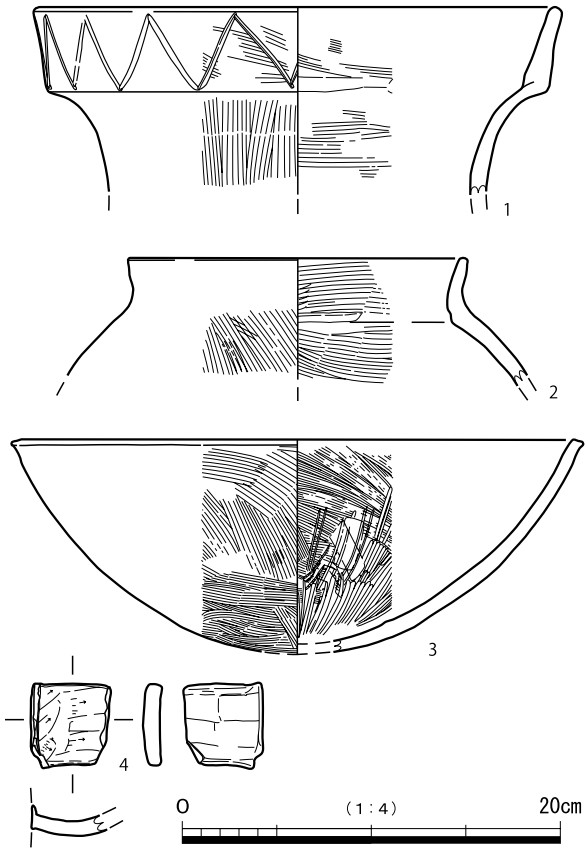
【壺形土器】

１は、口径15.8㎝、口縁部がわずかに外反し端部を折り曲げて丸くおさめる。外面は横方向のヘラミガキ後縦方向にヘラ押さえ調整をし、焼成前に丹を塗布する。内面はナデ調整が施され、口縁端部から約２㎝の幅で帯状に横方向のヘラミガキ調整を行い、丹の塗布が認められる。

２は、口径15.6㎝、口縁部は大きく外反し端部を丸くおさめる。内外面の調整は１と同様で、外面全面と内面の口縁端部から約２㎝の幅で焼成前に丹を塗布している。

【甕形土器Ⅰ類】

３は、小片のため口径復元が不可能であったが、大きなものではない。口縁部がわずかに外反するが口唇部は平坦で角ばっている。口唇部の刻目は小さく「Ｖ」字を呈し、口縁に対しまっすぐ施文されている。外面は、板状工具により横方向のナデ調整が施され、内面には指圧痕と板状工具による擦痕が縦方向に入る。４の口縁部はあまり外反しない。口縁端部の刻目は棒状工具で１㎝前後の間隔で施文している。外面は、板状工具により右下がりの斜横方向のナデ調整、内面には指圧痕と板あるいはヘラ状工具による擦痕がみられる。



第175図 住居15-S0510 出土遺物実測図

【甕形土器Ⅱ類】

５は、小片のため口径復元が不可能であったが器厚や形状から小型品と考えられる。突帯は口縁端部から斜めに下り、断面三角形を呈す。刻目は棒状工具で下から引きあげるようにして施文している。体部の外面は、横方向に板状工具による擦痕と粘土紐の接合痕が認められる。内面も外面と同様、横方向の擦痕と接合痕が認められる。

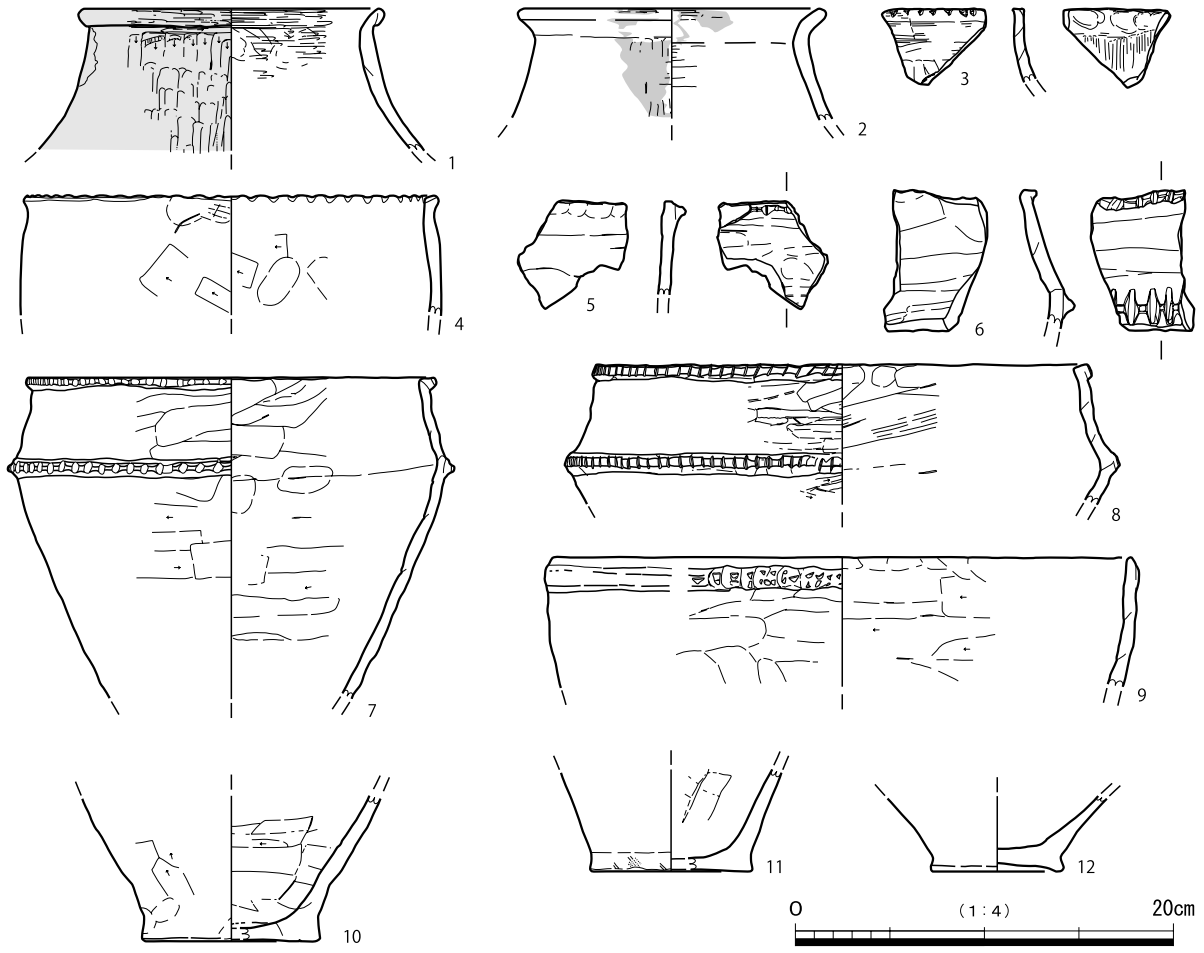
９は、復元口径31.2㎝、突帯は口縁端部から斜めに下り低い断面三角形を呈す。刻目は貝殻状の工具を押しあて小さな逆断面三角形の刻目が２～３列並ぶ。体部外面は、横方向の条痕を施すが板状あるいはヘラ工具のナデによって消されている。内面も外面同様、条痕をヘラ状工具によりナデ消しており、指圧痕と接合痕が認められる。

【甕形土器Ⅲ類】

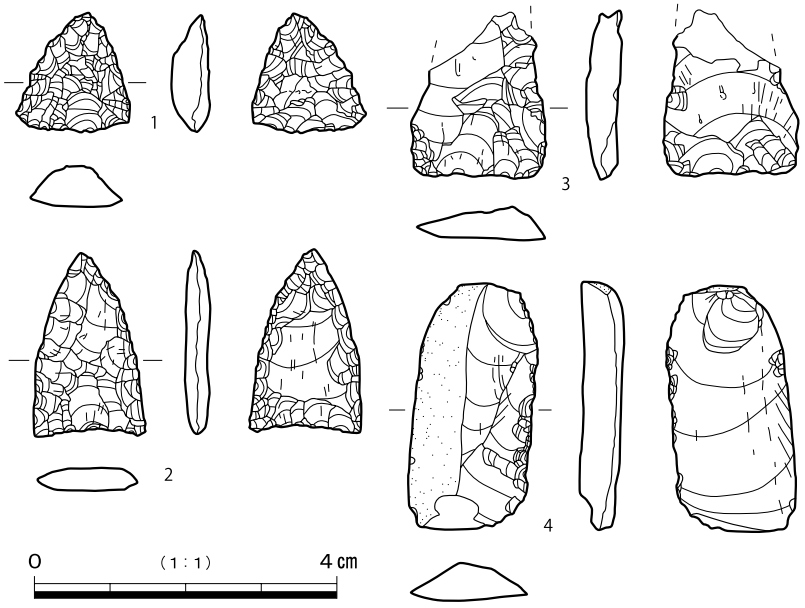
６は、小片のため口径復元が不可能であった。その器厚や形状からやや大きめの甕と考えられる。胴屈曲部は鋭く内傾する。口縁端部の突帯は平坦に断面三角形を呈し、刻目は細い棒状工具で施文している。胴屈曲部の突帯は断面三角形を呈し、口縁端部同様に棒状工具により深くしっかりと施文している。体部の調整は、内外面ともに横方向の板状工具による擦痕が認められ、さらに内面には指圧痕がある。

７は胴屈曲部が鋭く内傾する。口縁端部の突帯は端部より平坦に張り出され、断面三角形を呈し、刻目は棒状工具で下から上へ押し上げるように施文している。屈曲部の突帯も断面三角形を呈し、口縁部同様に棒状工具で下から上へ押し上げるように施文している。体部の調整は、外面に一部貝殻条痕が残っているが、内外面ともに板状工具による擦痕が認められ、さらに内面には指圧痕がある。

８の胴屈曲部は６・７に比べ、少しゆるやかである。突帯は口縁部、同屈曲部ともに「コ」の字を呈し、刻目はヘラ状工具により施文している。調整は、内外面ともに一部貝殻条痕が残っており、上からヘラ状工具による横方向の擦痕が認められる。その他、外面に粘土の接合痕が、内面には接合痕と指による押圧痕がある。



第176図 住居15-S0510下層不確定遺構 出土遺物実測図①



第177図 住居15-S0510下層不確定遺構 出土遺物実測図②

10～12は壺または甕の底部で、その形状は低い台形状をなし、ほぼ水平である。体部へは外傾し、直線的に上がる。12は外面ヘラ状工具によって横方向に削る。外底部は周縁部から中心に向かってヘラケズリ調整が施され、ややあげ底になっている。体部へは10・11に比べ傾きが大きくやや内湾気味に上がる。12は甕形土器Ⅱ類の底部によく見られるが、10・11は不明である。

これらの遺物は福岡・早良平野の弥生時代成立期の土器編年（山崎純男1980）と比較・検討し、10～12にみられる底部の形状や調整法から夜Ⅰ・夜臼Ⅱａ。甕形土器Ⅰ類の３は夜臼Ⅰ。４は夜臼Ⅱａ。甕形土器Ⅱ類の５は、夜臼Ⅱａ。甕形土器Ⅲ類は胴屈曲部が鋭く内傾しており、夜臼Ⅰないし夜臼Ⅱａに位置付けるのが無難と考えられる。

石器（第177図・図版82）

15-S0510下層の遺構からは、前述した縄文晩期夜臼Ⅱ式併行器の土器と共に図示した石鏃（１～３）と剥片石器４が出土している。

１は、腰岳産黒曜石製の石鏃で、やや歪な三角形を呈した平基鏃で両側辺の調整に比べ、基部の調整は粗雑である。

２は、多久産サヌカイト製の石鏃で凹基類に分類されるが、基部の抉りは孤状で浅い小形の剥片素材から縁辺部を調整し製作されており、裏面中央には素材剥離面が大きく残っている。

３は、腰岳産黒曜石製の石鏃未製品で、２同様小形の剥片素材から縁辺部を調整し製作されている。表面の右側縁と基部を調整しているが、最終的な仕上げまでは至らず裏面は未調整のままである。

４は、腰岳産黒曜石製の使用剥片で原石面を残す縦長剥片である。一部調整した側縁部の一部に、使用痕と思われる微細剥離が認められる。

以上、２・３の石鏃は、形や調整方法から縄文時代後期から弥生時代早期のものと考えられる。

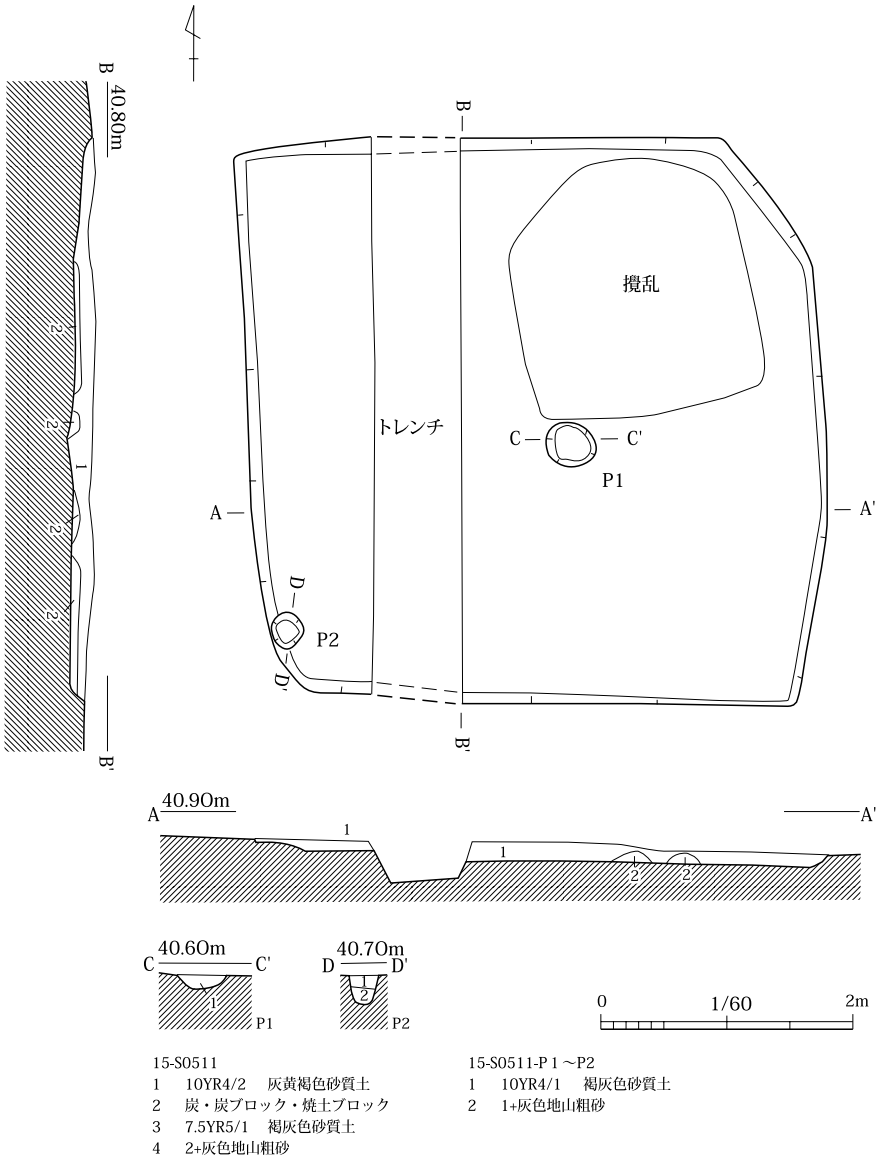
住居15-S0511（第178図・図版36-1）

14グリッド10～J15グリッド1J地区にかけて検出した竪穴住居である。試掘トレンチ調査時に一部が検出されている。一辺3.83ｍ～3.76ｍを測るやや不整形な方形プランである。検出面からの深さは0.15ｍ前後を測る。床面はほぼ平坦で、貼り床等の痕跡は確認できない。地山は灰色の粗砂と径３～５㎝の礫層で、地山直上には炭と焼土ブロックの層が広がっている。主柱穴や炉等は確認できなかった。

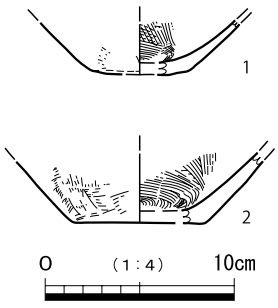
出土遺物（第179図）　１・２はは弥生土器の甕の底部である。１は凸レンズ状を呈し、２は平底である。共に外方へ直線的に広がり立ち上がる。

住居15-S0513（第180図・図版36-1）

15グリッド１Ⅰ～２Ｊ地区にかけて検出した竪穴住居である。一部が現代の井戸にかかっており、未調査箇所がある。また西北端の隅部分を住居5-S0501によって切られている。長辺7.45ｍ、短辺5.08ｍを測る不整形長方形プランである。検出面から床面までの深さは0.20ｍ前後である。床面は南東側にやや下っており、貼り床等は確認されていない。地山は灰色や淡黄色の粗砂が主体で、南東へいくにつれて径３㎝前後の礫を大量に含む層へと変化している。礫は埋土にも多く含まれている。明確な主柱穴は確認されていないが、平面プランから２本柱が想定され、Ｐ４が該当する可能性がある。床面直上では土師器が出土しており、また住居の南東壁際埋土中ではベンガラが出土している。検出面でベンガラの細かい粒を確認しており、下層でも多少のまとまりをもっていたが、ほとんどは埋土に



第178図 住居15-S0511平面・断面図

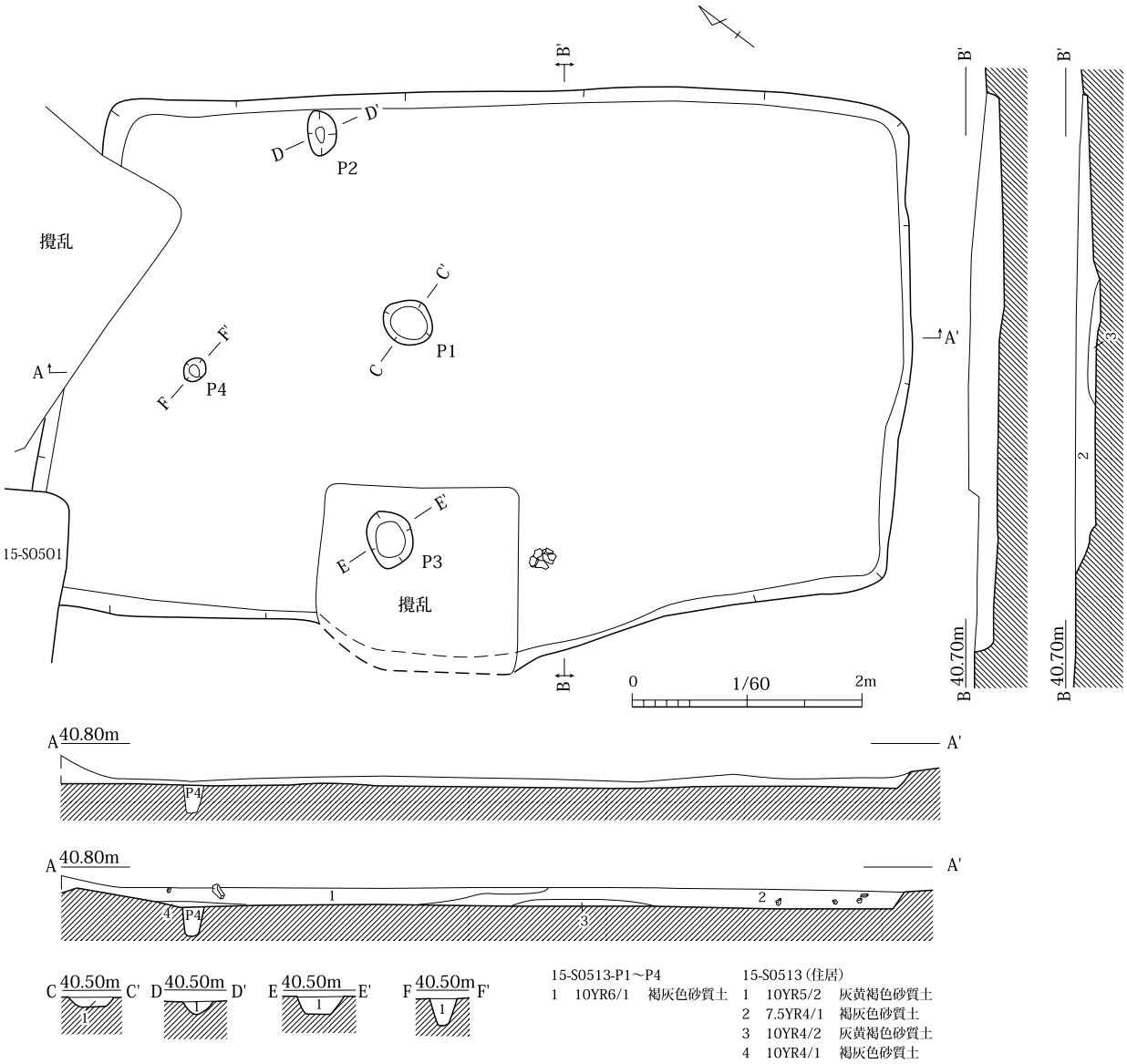


第179図 住居15-S0511 出土遺物実測図

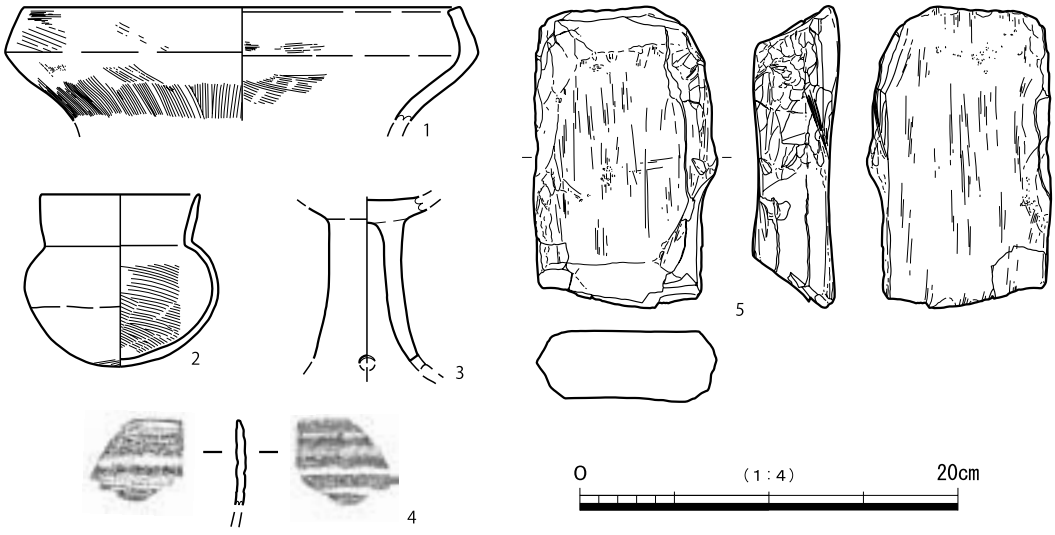
混じった極小の粒で、最大でも径２～３㎜である。これらは、床面から浮いた状態で出土しており、同じベンガラが出土した住居15-S0509と様相が酷似している。

出土遺物（第181図・図版64）　１は複合口縁壺の口縁部で、立ち上りが内傾する。２は小型丸底壺で、口縁部はやや扁平な球形の体部より直立する。３は高杯の脚部である。下半の屈折部に円形の透かしを施す。４はろくろ整形され、内外面ともに擬凹線化していることから楽浪系土器とみられる。焼成はあまく、灰褐色系の色調である。外面は光線によっては細い蓆席文の痕跡らしきものがみられる。５は砥石である。両端が欠損しているが、２方向に使用痕が見られる。

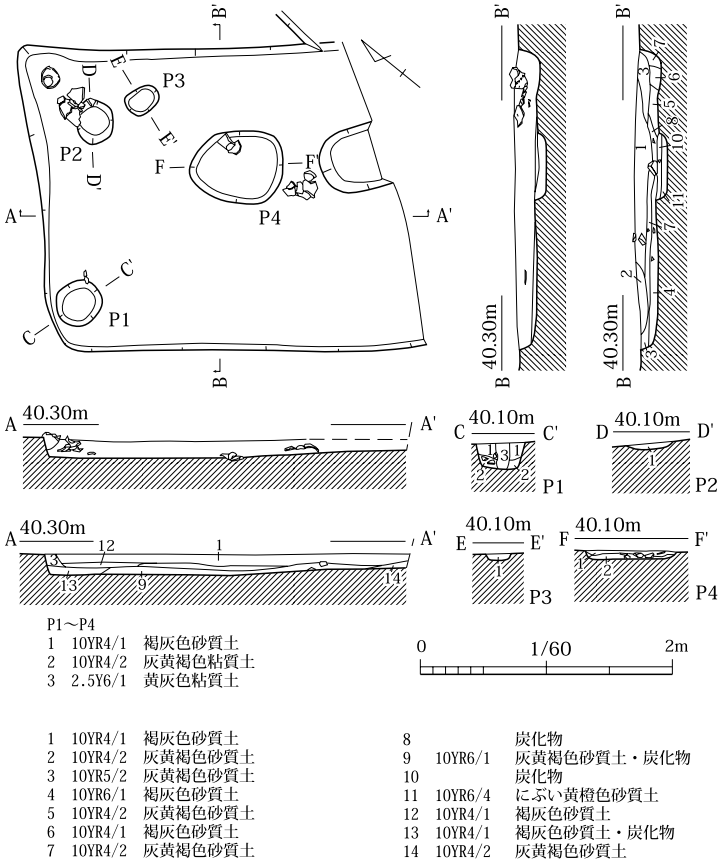
住居15-S0514（第182図・図版34-2）



第180図 住居15-S0513 平面・断面図



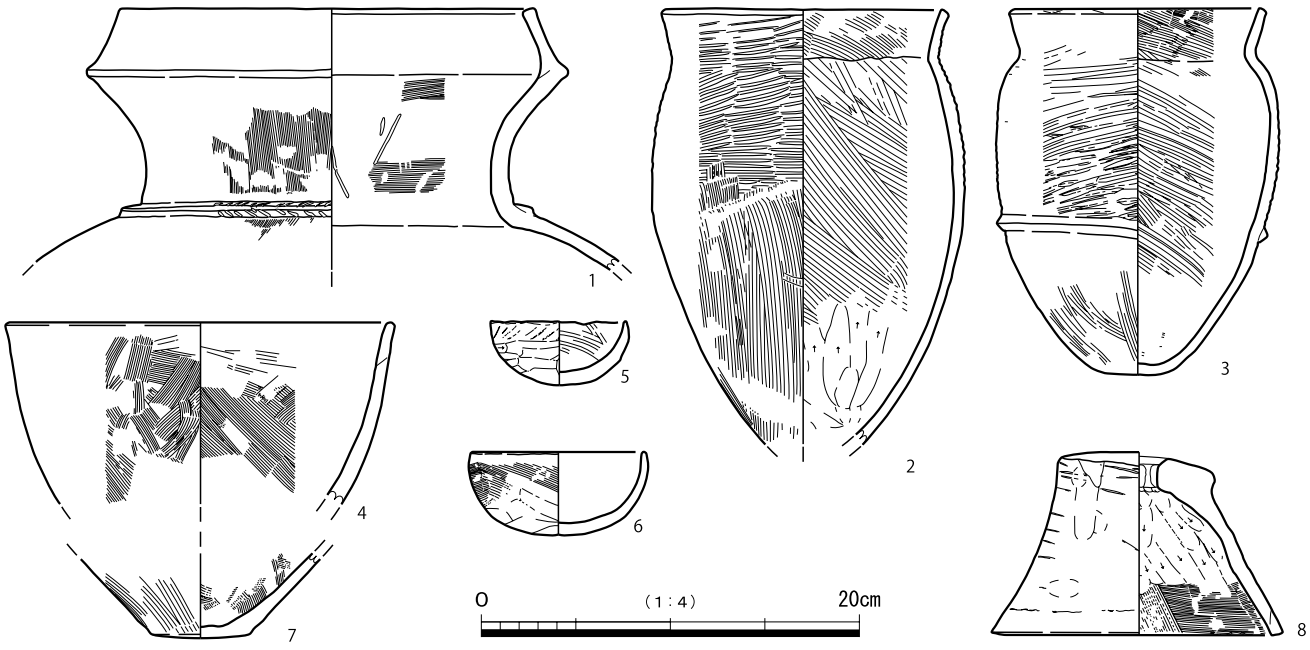
第181図 住居15-S0513 出土遺物実測図



第182図 住居15-S0514 平面・断面図

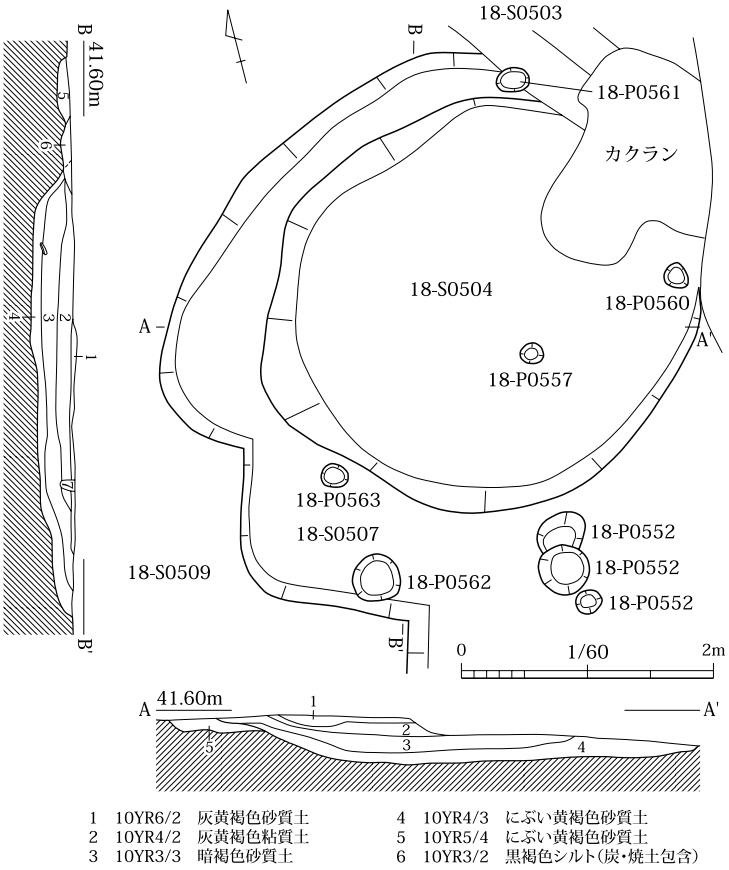
15グリッド６Ｉ～６Ｊ地区にかけて検出した竪穴住居である。南東側の端部は調査区外に出る。長辺2.8m以上、短辺2.4mを測る長方形プランである。検出面から床面までの深さは20㎝前後を測る。貼り床は確認されていないが、地山直上埋土は地山と灰黄褐色砂質土の混合土であり、その上層には炭ブロックの層が広がっているため、４・５・６・７・13・14層で床面を形成していた可能性も考えられる。主柱穴は確認できなかったが、配置からＰ１、Ｐ２が該当する可能性がある。床面中央部では径0.73m・深さ0.18mの掘りこみが検出され、炭・焼土層がみられることから、炉の可能性が考えられる。なお北コーナー付近では、方形周溝20-S0001と同様の入れ子状になった土器が床から浮いた状態で出土している。

出土遺物（第183図・図版64）　１は口縁部が逆くの字の複合口縁壺である。頸部下半には刻み目を



第183図 住居15-S0514 出土遺物実測図

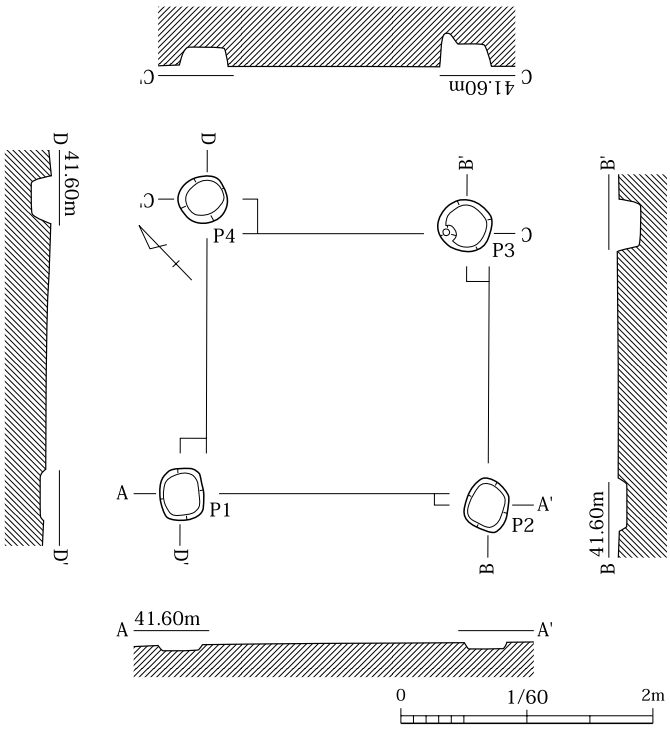
施した貼り付け突帯が巡る。２は長胴の甕で、外面体部上方にはタタキを、下半にはハケ調整を施す。内面は口縁から体部にかけハケを施す。３は凸レンズ状を呈する甕で、体部中位に貼り付け突帯を一条巡らす。４・５は鉢で椀状を呈する。４の口縁部は緩やかに立ち上がり、端部を丸くおさめる。内外面ともにハケ調整を施す。６はてづくねの鉢で口縁部は尖り気味にまとまる。７は甕の底部片で平底気味の凸レンズ状を呈する。８は沓形の土製支脚で、受け部がやや水平で穿孔を一つ有する。外面はタタキを、内面はナデ及びハケ調整を施す。



第184図 住居18-S0507 平面・断面図

住居18-S0507（第184図）

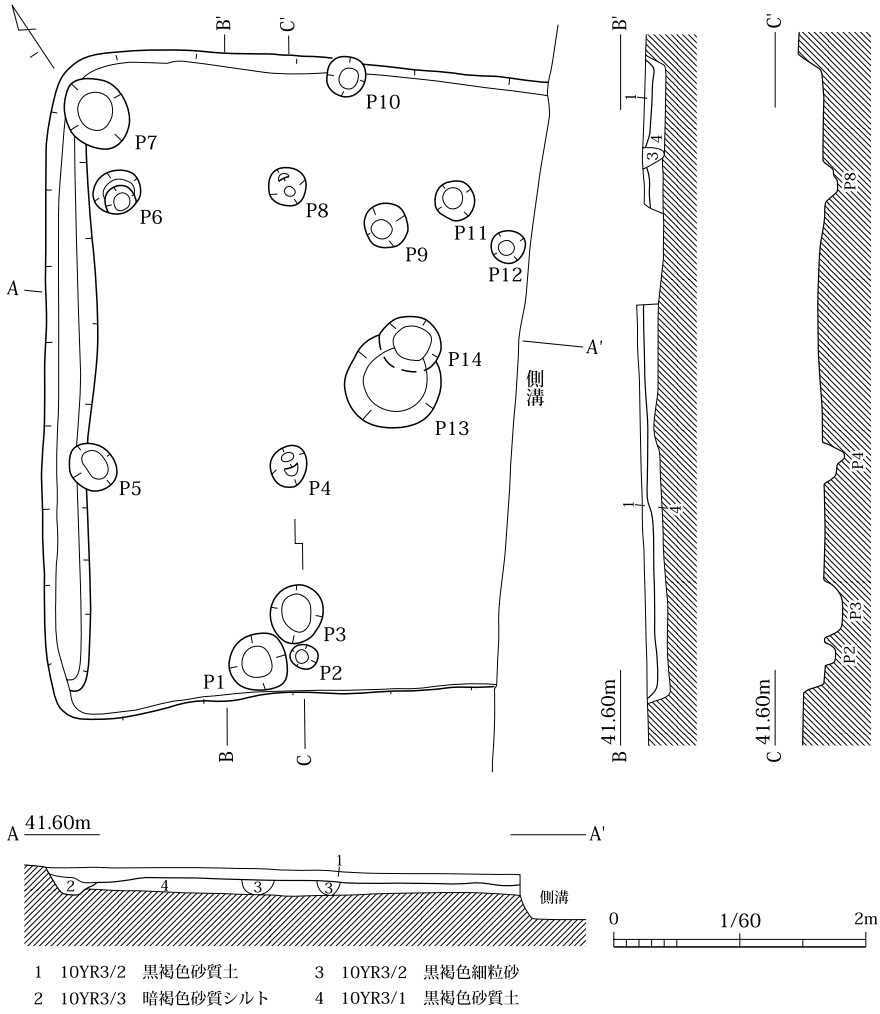
18グリッド６Ｄ地区において検出した竪穴住居跡である。土坑18-S0504、－2と重複するが、この住居が最も古い。遺構の大部分をこれらの土坑によって破壊され、残存する部分は南西隅の一部分だけである。形状は方形プランであるが、規模、主柱穴等は不明である。遺物は弥生土器が出土している。



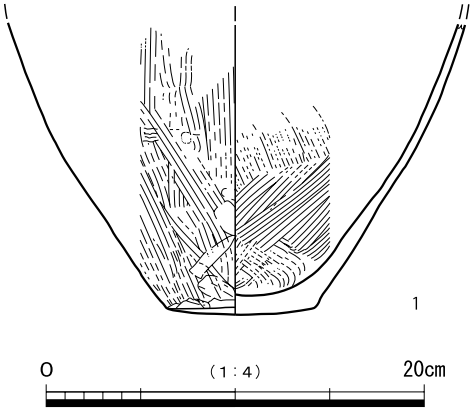
第185図 住居18-S0509 平面・断面図

住居18-S0509（第185図）

18グリッド５Ｄ地区において検出した１間×１間の建物である。規模から竪穴住居の主柱穴の可能性が高いと判断した。前述の住居、土坑と重



第186図 住居19-S0011 平面・断面図



第187図 住居19-S0011 出土遺物実測図

複するが新旧関係は不明である。柱穴間は長辺2.2m、短辺2.1m、柱穴の直径0.38m、深さ16cmを測る。埋土は褐灰色シルト土層の単一層である。遺物は弥生土器の小片が出土している。

住居19-S0011（第186図）

19グリッド４Ｄ～５Ｄ地区にかけて検出した竪穴住居跡である。南西側は調査区外に出る。長辺5.2m、短辺3.8m以上の方形プランの住居である。検出面から床面までの深さは20cmを測り、北西辺にて壁溝を検出した。床面は均一した平坦面で、主柱穴はＰ３とＰ８と考えられる。埋土は褐灰色粘質シルト系で埋まり、上層、下層の大きく２層に分層できた。

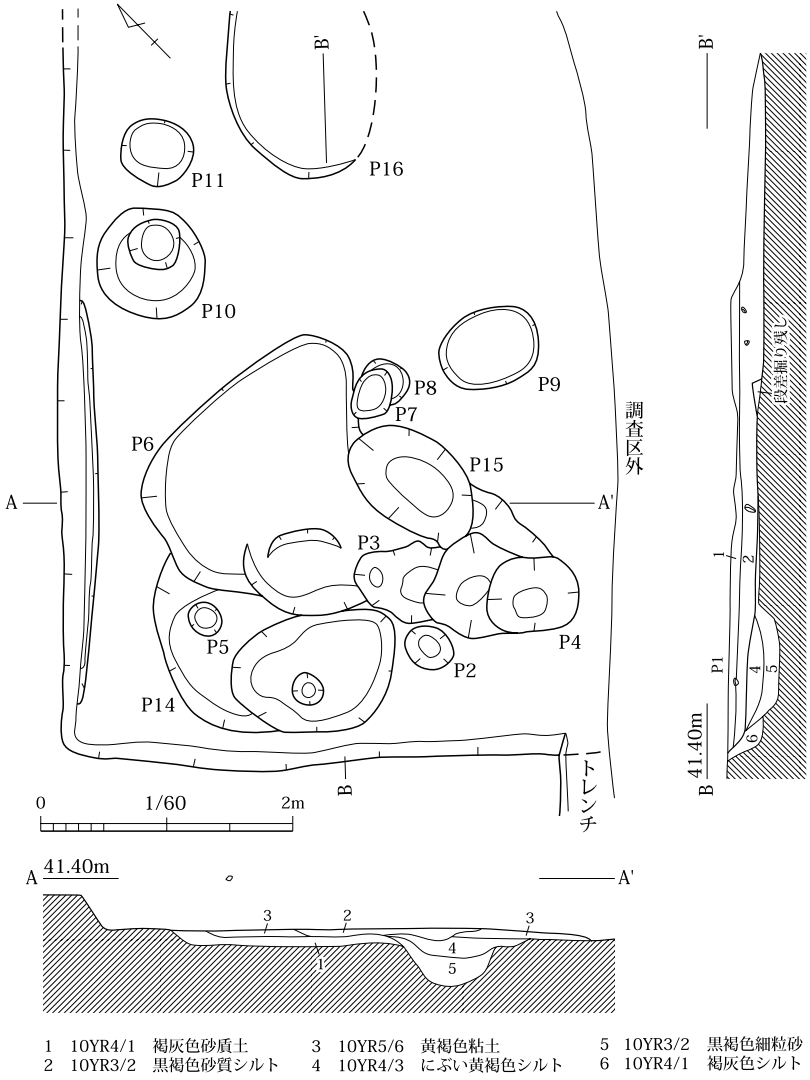
出土遺物（第187図）

甕の体部～底部である。底部は器壁が厚く、平底気味の凸レンズ状を呈する。

住居19-S0012（第188図）

19グリッド５Ｃ地区において検出した竪穴

住居跡である。平面形状は長方形を呈する。北西側は傾斜地に変換することから消滅し、南西側は調査区外に出る。長辺5.6m以上、短辺4.2m以上を測る方形プランの住居である。検出面から床面までの深さは18㎝を測り、北西辺にて壁溝を検出した。主柱穴の一つはＰ２と考えられるが、北東側は確認できなかった。床面は数多くの土坑によって凹凸を呈し、特に南側については、切り合った状態の土坑がみられる。埋土は褐灰色粘質シルトで、土層では上層、下層の２層に分層できた。遺物は弥生土器が出土している。



第188図 住居19-S0012 平面・断面図

住居19-S1009・－2

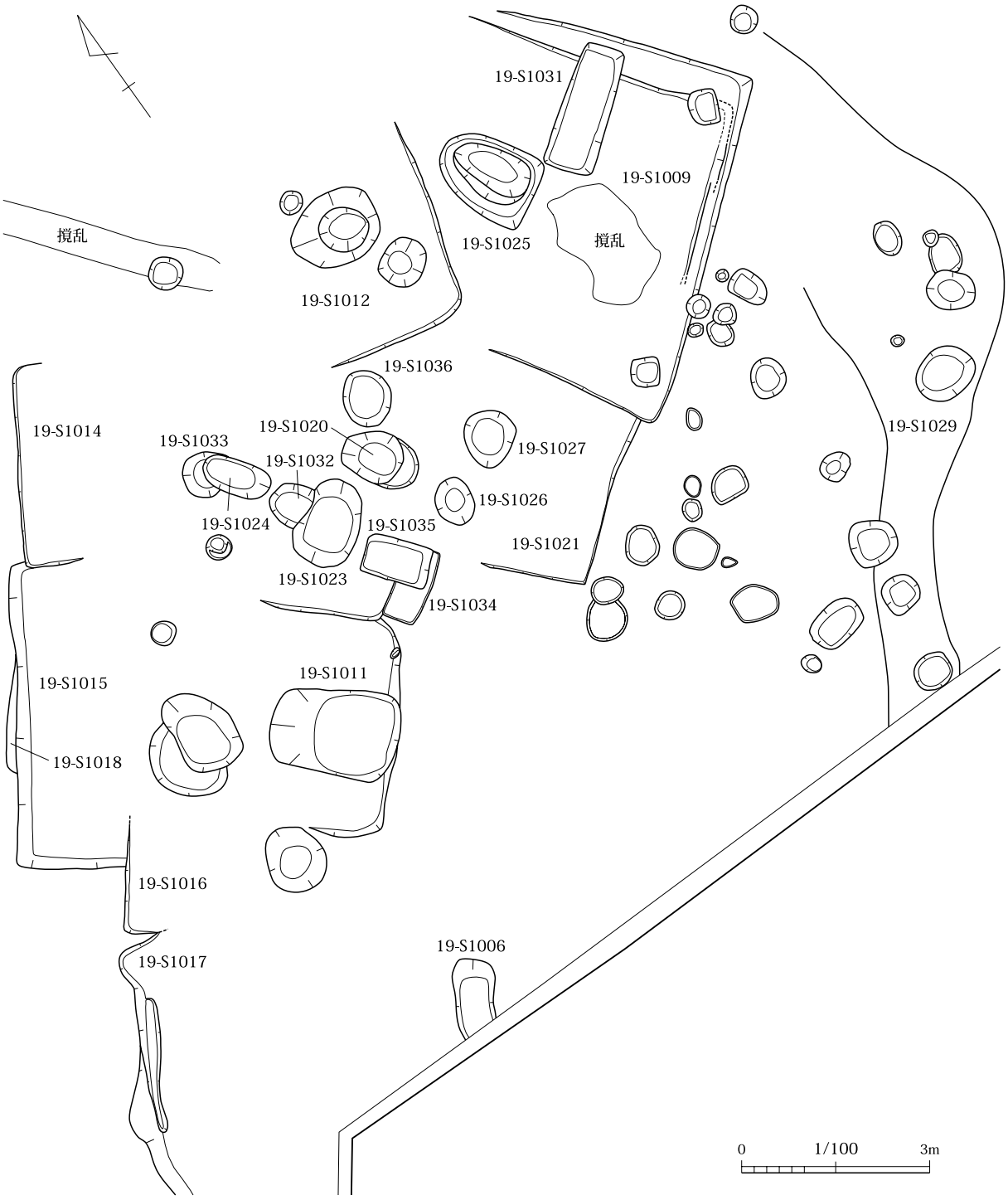
（第190図・図版36-2）

14グリッド９Ｊ～19グリッド９Ａ地区にかけて検出した竪穴住居である。この付近のベースは拳大の礫・灰色中砂・黄褐色シルト～極細砂の３種が重なり合う段丘層で、そのうえ切合う遺構埋土のほとんどが黒色細砂で酷似していた。

この住居、19-S1009－2、19-S1012、19-S1021等の住居と重複するが、19-S1021はこれらの住居に切られ、－2はこの住居を拡張している。それぞれ北西側が後世の削平を受け消滅している。19-S1009は長辺2.1m以上、短辺2.0m以上を測る方形プランの住居と考えられるが、現存するのは南東隅のみである。検出面からの深さは14㎝を測り、埋土は黒褐色細～粗砂である。炉跡・主柱穴は検出できなかった。

19-S1009-2は長辺5.7m、短辺4.5m以上の規模を有する方形プランの住居である。検出面から床面までの深さは6㎝を測る。埋土はベースの明黄褐色極細砂ブロックと炭化物を多く含む褐色の細砂である。炉跡、主柱穴は検出できなかった。

19-S1009の下部において検出した遺構には、土坑19-S1025、同19-S1031、柱穴19-P1051、同19-P1055

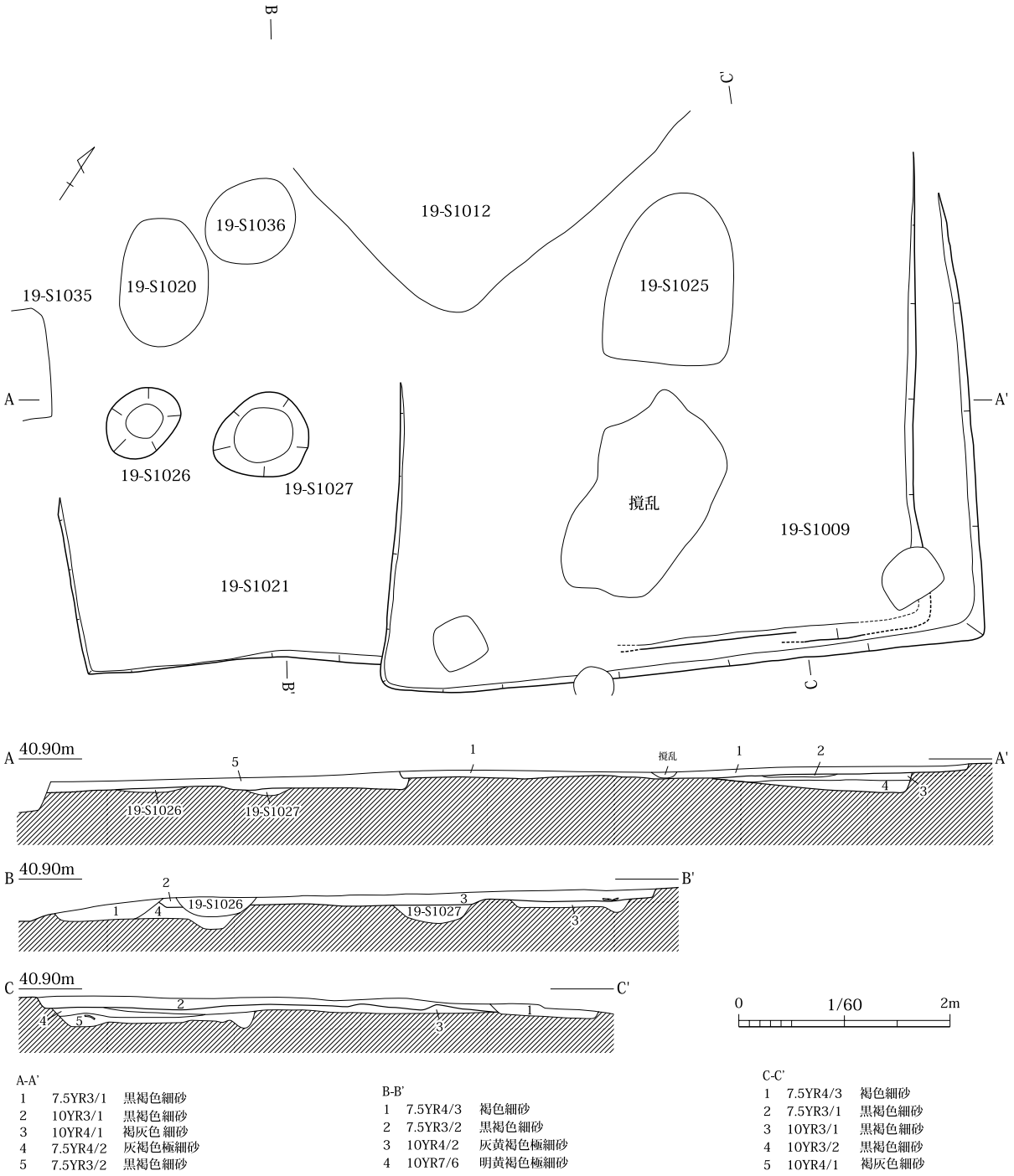


第189図 19グリッド南東部遺構配置図

等があるが、その配置からこの住居には伴わないと考えられる。

出土遺物（第191図４，５）　４はしっかりした平底を有する大型壺の底部である。５は甕の底部で、やや丸みを帯びた凸レンズ状の底部を有する。

住居19-S1012（第189図）



A-A'

1	7.5YR3/1	黒褐色細砂
2	10YR3/1	黒褐色細砂
3	10YR4/1	褐灰色細砂
4	7.5YR4/2	灰褐色極細砂
5	7.5YR3/2	黒褐色細砂

B-B'

1	7.5YR4/3	褐色細砂
2	7.5YR3/2	黒褐色細砂
3	10YR4/2	灰黄褐色極細砂
4	10YR7/6	明黄褐色極細砂

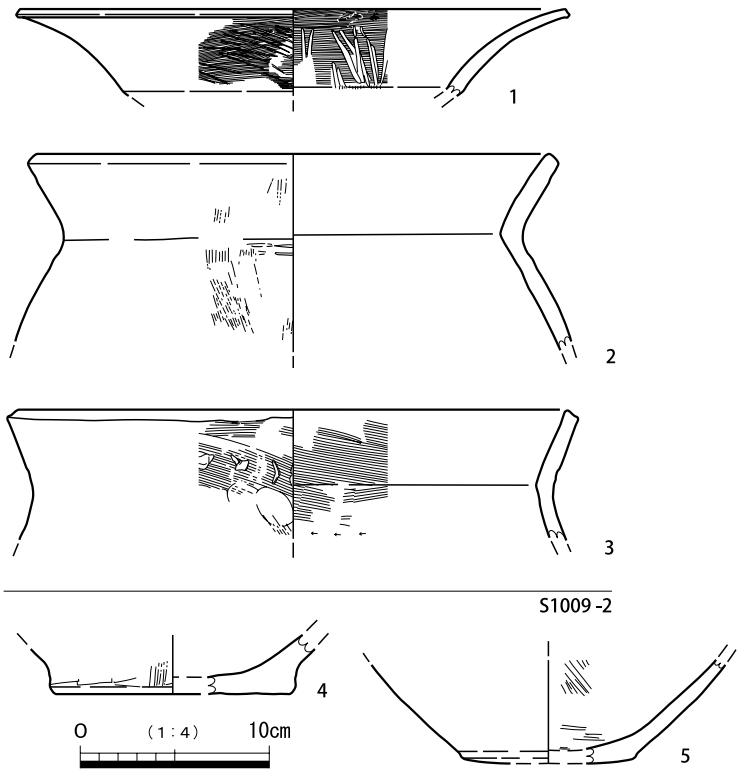
C-C'

1	7.5YR4/3	褐色細砂
2	7.5YR3/1	黒褐色細砂
3	10YR3/1	黒褐色細砂
4	10YR3/2	黒褐色細砂
5	10YR4/1	褐灰色細砂

第190図 住居19-S1009・－2 平面・断面図

住居19-S1009の床面において検出した竪穴住居である。主軸方位を19-S1009や住居19-S1021と大きく異にし、ほぼ南北に主軸を採る。遺構の北西半は地形変換点のため消滅しており、長辺約3.4m、短辺約2.4mを検出したのみである。床面までの深さは約10㎝を測る。埋土はベースの明黄褐色シルトブロックを多く含む暗赤褐色の極細砂の単層である。柱穴の存在は確認できなかった。

出土遺物は何点かあるが、そのうちほぼ完形に近い高杯が床面より浮いた状態で出土している、これは上下逆さに据えられたまま潰れたと想定できるもので、住居排絶後の住居が埋まりきるまでの間



第191図 住居19-S1009・－2・S1021 出土遺物実測図

に、何らかの祭祀行為がなされた可能性も否定できない。

土坑19-S1012-1、19-S1012-2（第192図・図版37－1）は住居19-S1012の床面において検出したもので屋内土坑と考えられる。19-S1012-1は中央付近に配され、19-S1012-2は南東部に存在する。位置的に炉跡の可能性があるのは19-S1012-1であるが、埋土中に焼土や炭化物を含まない。規模は19-S1012-1が長軸約1.45m、短軸約1.18mの楕円形状を呈し、長軸を19-S1012と同じくする。床面からの深さは約50㎝である。埋土は２層に分層され、上層が明黄褐色シルトブロックを多く含む暗褐色極細砂、下層は黒褐色シルトと明黄褐色が混淆している。19-1012-2は長軸約0.78m、短軸約0.65ｍの楕円形で、主軸は住居のそれに対し斜交する。深さは約56㎝を測る。埋土は暗褐色中砂混じり極細砂の単層で、明褐色砂質シルトと混淆する。両者とも埋土の上方から弥生終末～古墳前期の土器がまとまって出土しており、これらの土坑の埋没過程で投棄されたものと考えられる。

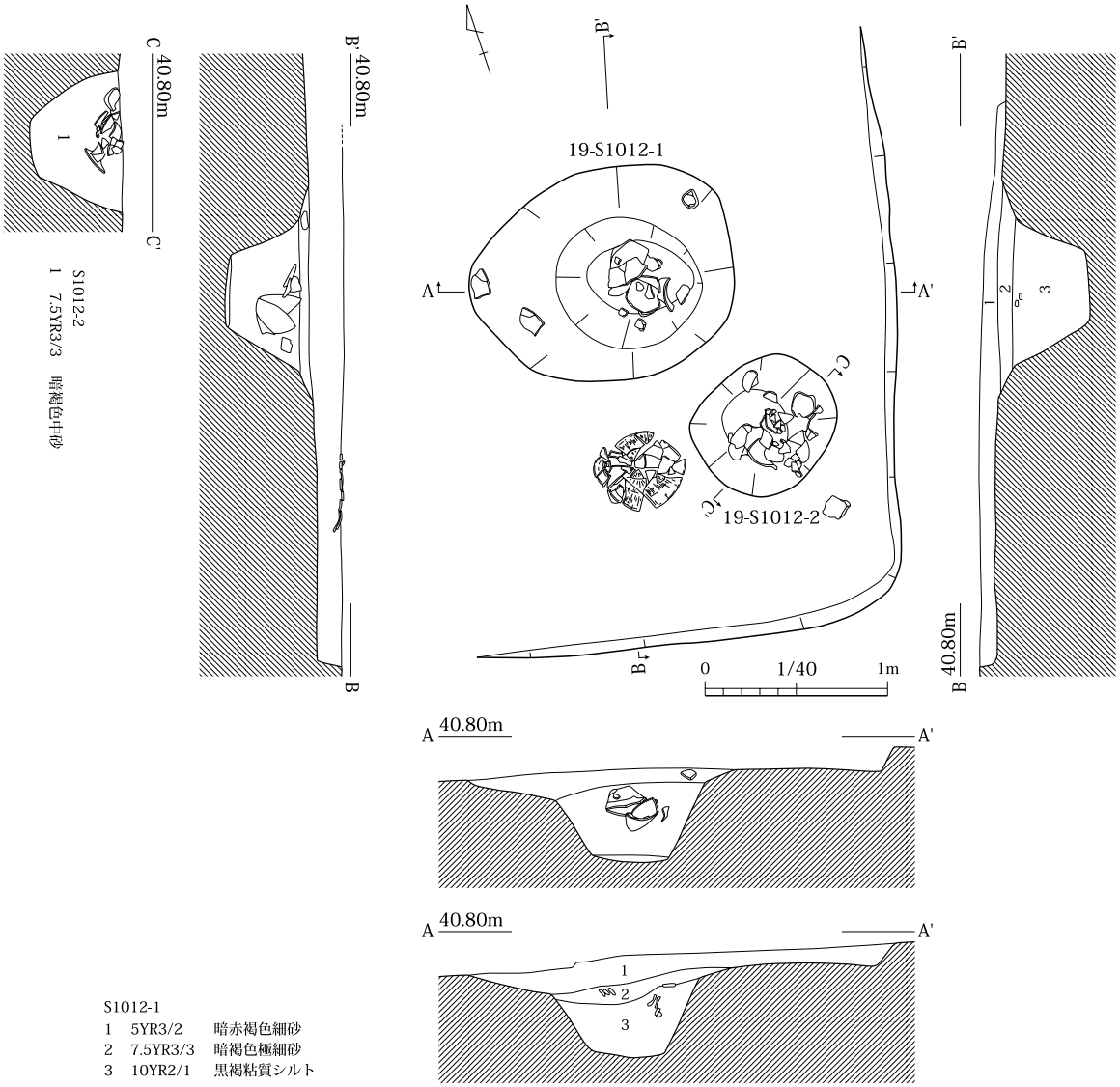
出土遺物（第193図・図版64）　１・２は高杯で、１は杯部の稜がなく直線状に広がる口縁部をもち、端部下方に拡張する。内外面ともに上半分に二次焼成を受ける。２はほぼ完形品で杯部は丸い底部から中央付近で屈曲し、外反気味に開く口縁部を有する。脚柱部は円柱状をなし、裾端部に黒斑を有する。３・４は甕である。張りの弱い体部から口縁部はくの字状に外傾する。内外面ともにハケを施す。５・６は底部で、５はやや尖り気味の丸底、６は平底を残す凸レンズ状を呈する。

住居19-S1014（第194図）

14グリッド７Ｊ地区で検出した竪穴住居である。住居19-S1015と重複するが、これより新しい。南東側が傾斜面にあたるため消失し、北西部のみを検出した。約3.4m×1.0m以上の規模を持ち、深さは約16㎝である。埋土は２層からなり、ともに褐灰色粗砂混じり細砂である。北西辺から50㎝東において５～６㎝程度の段が検出され、ベッド状遺構を伴う可能性がある。出土遺物は甕が１点、出土しているが、細片のため図化するには至らなかった。

住居19-S1015（第194図・図版37-2）

14グリッド７Ｊ～19グリッド６Ａ地区にかけて検出した竪穴住居である。南東部が傾斜面にあたる



第192図 土坑19-S1012-1・S1012-2 平面・断面図

ため消滅している。住居19-S1014，同19-S1016，同19-S1018と重複するが、北東端を19-S1014に、南西部を19-S1016に切られ、19-S1018は大半を切っている。方形プランの住居で、4.9m×1.75mが現存し、深さは約25㎝を測る。埋土は褐灰色粗砂混じり細砂の単層である。

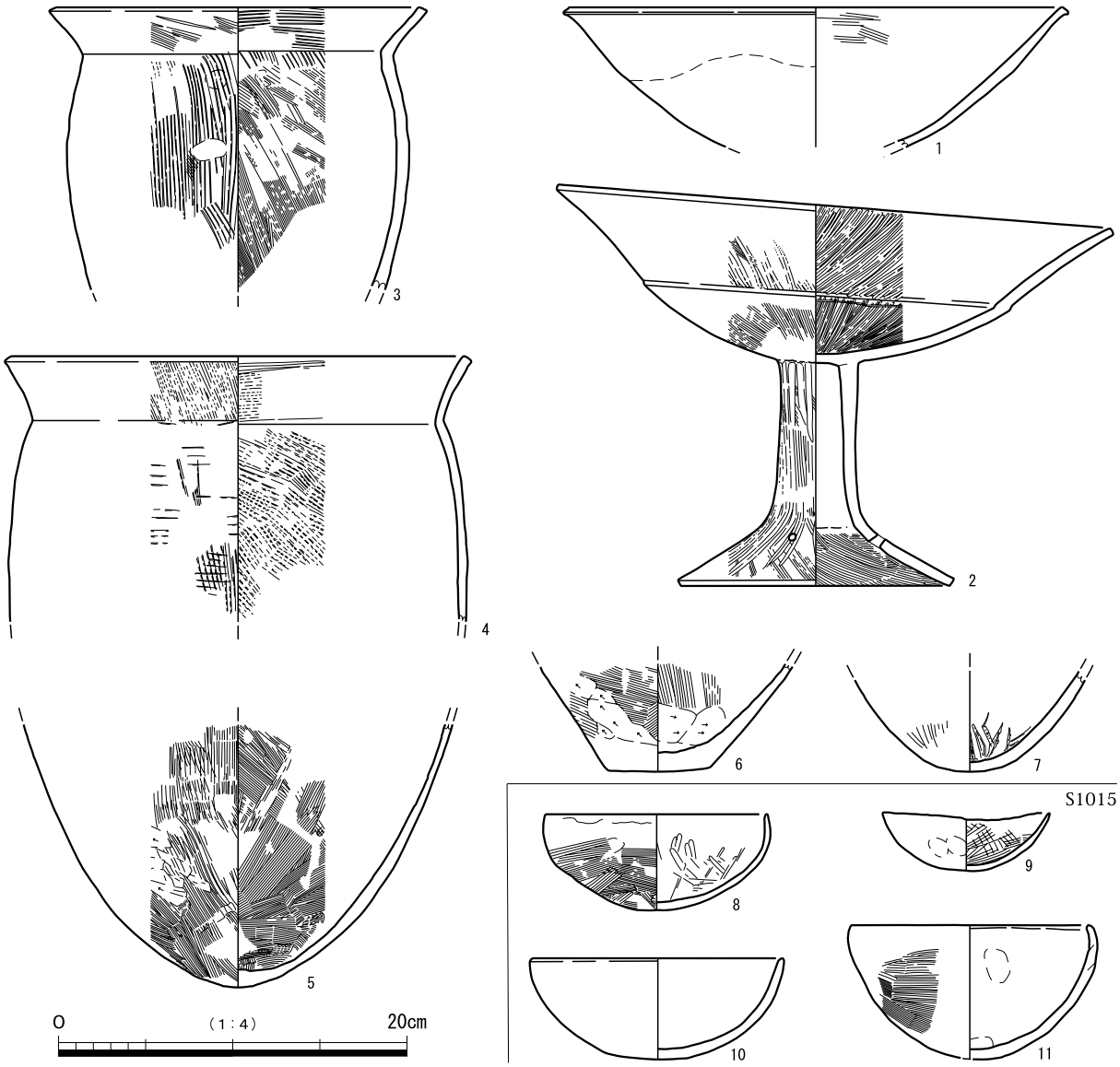
出土遺物（第193図８～11、図版64）　８～11は椀状を呈する鉢で、いずれも外面に黒斑を有する。

住居19-S1016（第194図）

19グリッド6Ａ～７Ａ地区で検出した竪穴住居で、西端部のみを検出した。住居19-S1015，同19-S1017と重複し、19-S1015を切っている。19-S1017との関係は重複箇所が消失しているため、前後関係は不明である。

出土遺物には甕の体部や口縁部片があるが、いずれも図化するに至らなかった。

住居19-S1017（第194図）



第193図 土坑19-S1012-1・S1012-2,住居19-S1015 出土遺物実測図

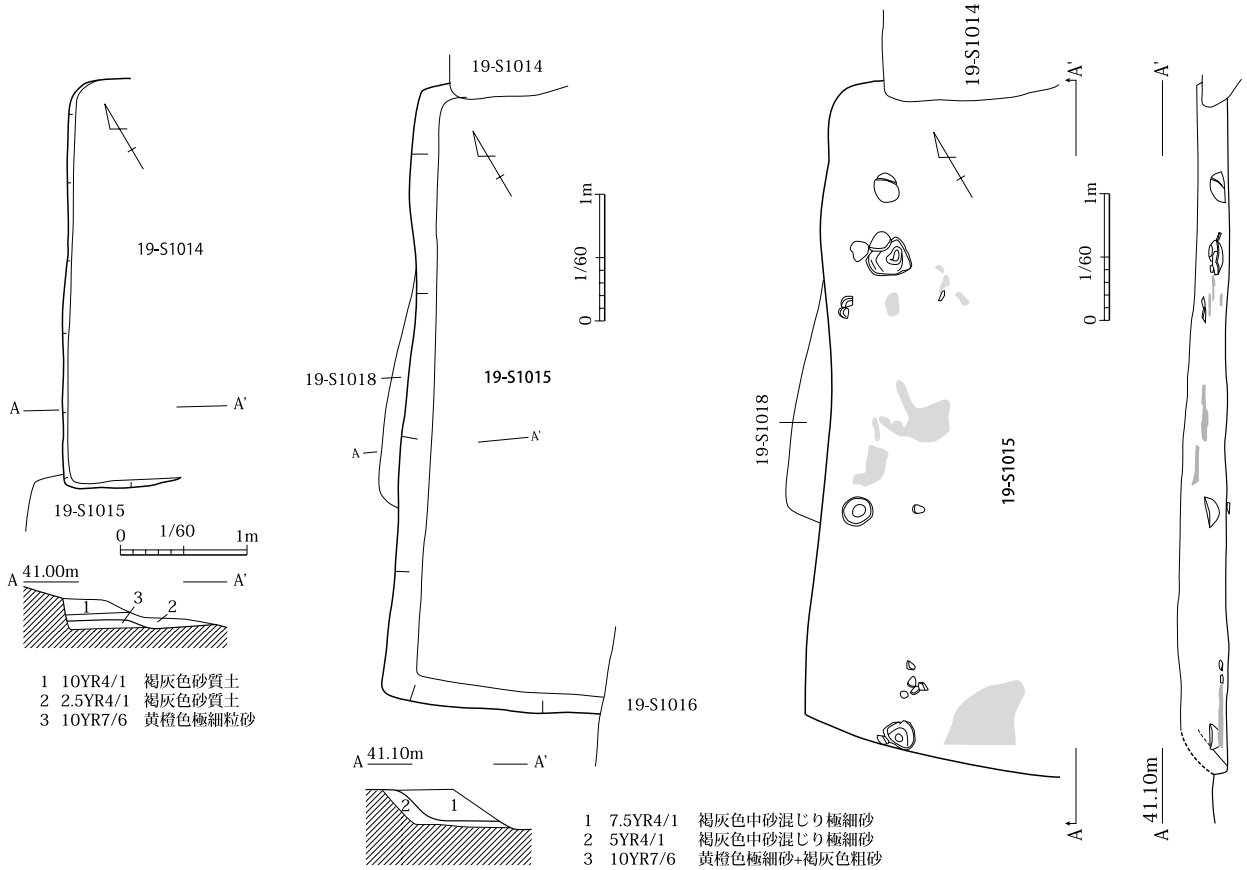
19グリッド７Ａ地区において検出した竪穴住居のコーナー部と思われる遺構である。0.7m以上×0.5m以上の規模を持ち、深さは約30㎝である。主軸方位を他のほとんどの住居群と異にし、住居19-S1012とほぼ同一の方位を採る。出土遺物はなく、時期も明確にできない。

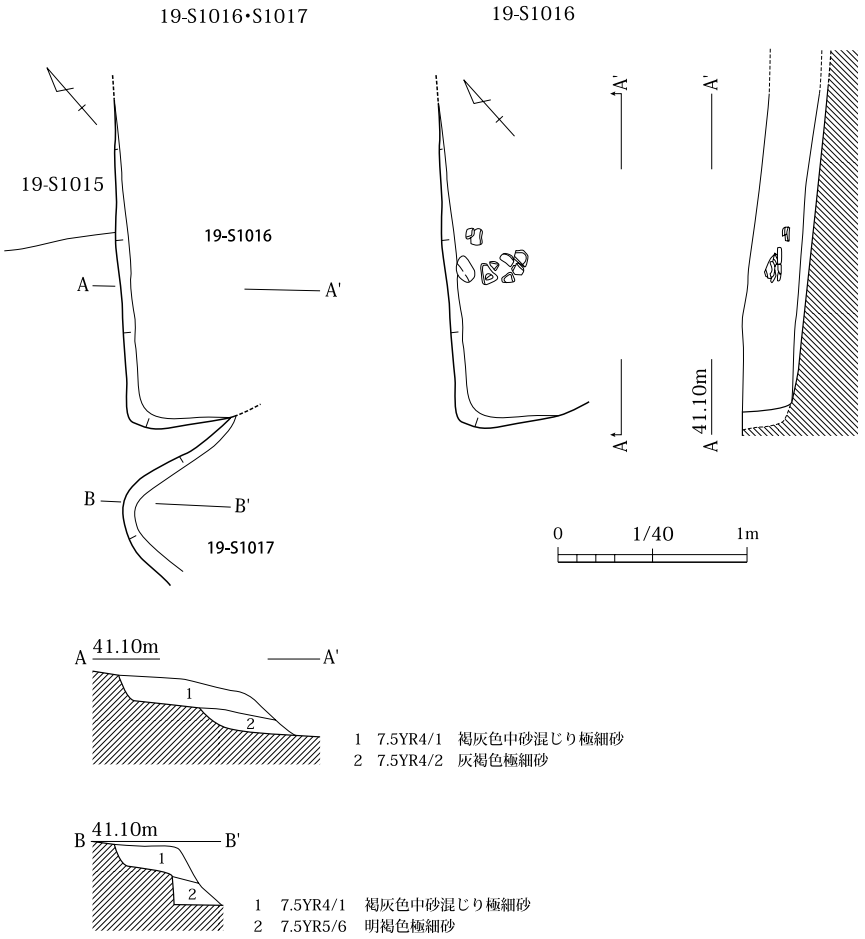
住居19-S1018（第194図）

19グリッド６Ａ地区～14グリッド７Ｊ地区にかけて検出した竪穴住居のである。住居19-S1015と重複するが、その大半を19-S1015に切られている。床面は19-S1015より深い位置にあり、検出した規模は2.0m×1.7m、床面までの深さは30㎝を測る。褐灰色粗砂混じり細砂の埋土中に炭化物や焼土を多く含むこと、床面に炭化材が散らばることから焼失家屋と考えられる。主柱穴は検出できなかった。

住居19-S1021（第189図）

19グリッド８Ａ地区において検出した竪穴住居である。住居19-S1009と重複するが、この住居に東部を切られている。長辺2.9m以上、短辺2.7m以上の方形を呈する住居で、深さは10㎝を測る。埋土は





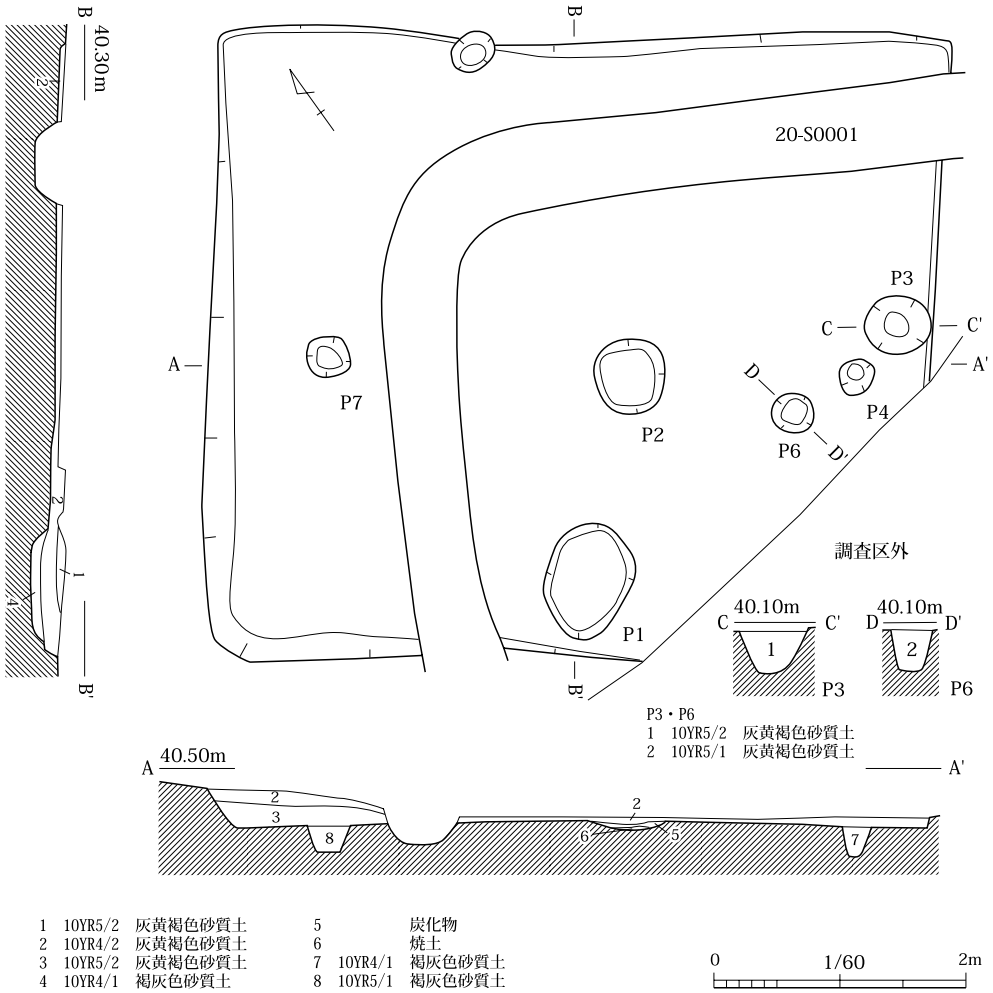
第194図 住居19-S1014～S1018 平面・断面図

ベースの明黄褐色極細砂のブロックを多く少量含む細～中砂である。炉跡、主柱穴は検出できなかった。

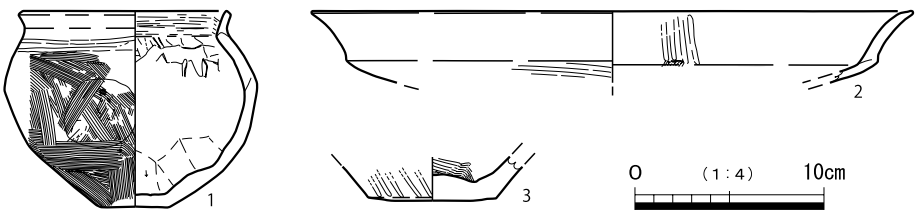
出土遺物（第191図１～３）　１は大きく外反する高杯の口縁部である。内外面ともにハケ調整後、細かいヘラミガキを施す。２・３は甕で、２の口縁部はくの字状に屈曲し、端部は外傾し面をなす。３は口縁端部わずかにつまみあげる。内外面ともにハケを施し、外面に粘土塊が付着している。

住居20-S0002（第195図・図版35）

15グリッド３Ｊ～20グリッド３Ａ地区にかけて検出した竪穴住居である。土坑15-S0516、方形周溝状遺構20-S0001と重複するが、方形周溝状遺構に切られ、土坑は切っている。南東コーナー部は調査



第195図 住居20-S0002 平面・断面図（1/60）



第196図 住居20-S0002 出土遺物実測図

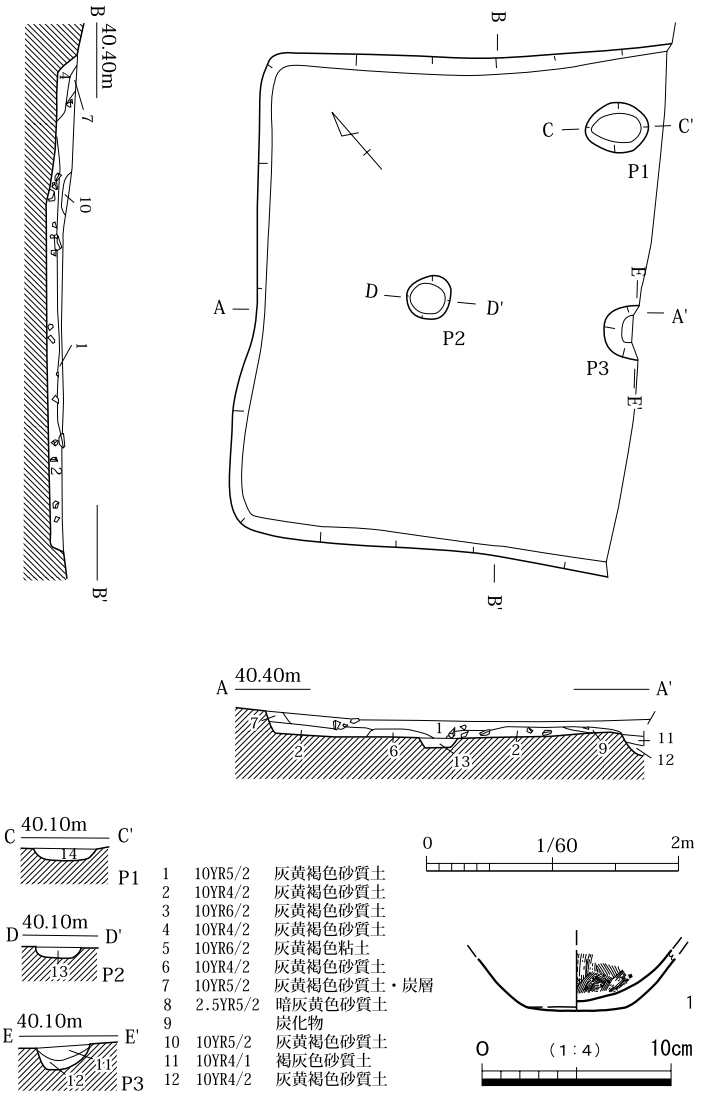
区外に出るが、長辺5.9m、短辺5.1ｍを呈する長方形プランと考えられる。南へ下る傾斜面に位置するため、検出面から床面までの深さは、西側で0.3m、それ以外は0.05ｍ前後である。床面はおおむね平坦の直床で、貼床は確認されなかった。主柱穴は、その配置からＰ４（径0.3m・深さ0.26m）とＰ７（径0.34m・深さ0.22m）と想定され、主柱２本の住居と考えられる。また、中央やや南寄りに炉を確認した。その規模は径約0.6ｍの円形プランで、浅く掘り窪められた地床炉と考えられる。

出土遺物（第196図）　１は小さな平底気味の凸レンズ状を呈する短頸壺で、口縁部は短く外傾する。外面体部は原体の異なるハケを施す。内面体部に丹塗りの痕跡が見られる。２は口縁部が短く緩やかに外反する高杯杯部である。３はレンズ状を意識した壺の平底で、外面底部に棒状の圧痕が見られる。

住居20-S0003（第197図・図版35-2）

20グリッド２Ａ地区において検出した竪穴住居である。南東側は調査区外に出るため、全形は不明であるが、炉跡がＰ３と判断されるため、長辺3.2m以上、短辺４ｍの長方形プランと推定される。検出面から床面までの深さは0.15ｍ前後である。地山は径0.02～0.05mの礫層からなり、埋土中にも多く混入していた。床面はおおむねフラットで、0.20～0.30mの灰黄褐色粘土が部分的に認められることから、これらは貼床の可能性がある。調査区壁際のＰ３は、埋土中に炭や焼土がみられ、炉跡と考えられる。主柱は平面プランから２本柱とみられ、その一つの主柱穴がＰ２と想定される。他の一つは調査区外である。

出土遺物（第197図）　レンズ状を呈する甕の底部である。内面にハケ調整が施される。



第197図 住居20-S0003 平面・断面図、出土遺物実測図

３　土坑

土坑10-S0003（第198図）

10グリッド２Ｈ地区において検出した土坑である。長軸1.84ｍ、短軸1.41ｍの不整楕円形で、深さは検出面から48㎝を測る。検出面から15㎝付近で、幅30㎝ほどのテラス状の平坦面が土坑の東半分に廻る。埋土はにぶい黄橙色砂質土の単一層である。出土遺物はなかった。

土坑10-S0009（第198図）

10グリッド２Ｇ地区において検出した土坑である。中央部を環濠13-S0002によって切られ、二分される溝状（舟形）土坑である。長辺3.35ｍ、短辺1.11ｍの長方形を呈し、深さは検出面から42㎝を測る。埋土は灰黄褐色砂質土の単一層である。遺物は弥生土器の細片が出土している。

土坑10-S0010（第198図）

10グリッド５Ｇ地区において検出した土坑である。長軸1.76ｍ、短軸1.02ｍの楕円形を呈し、深さは検出面から８～16㎝である。埋土はにぶい黄褐色砂質土とにぶい黄橙色砂質土が水平に堆積している。

出土遺物（第198図）　坑内より弥生土器の底部片が2点出土している。１は平底を呈するが、２は凸レンズ状の底部である。型式差があり、１は混入品か。

土坑13-S0001（第198図）

13グリッド９Ｉ地区において検出した土坑である。環濠13-S0002に接する。長軸約1.5ｍ、短軸約1.4ｍの不整三角形土坑である。壁は緩く斜めに掘り込まれ、深さは約14㎝。底面はほぼ平坦で中央部付近に深さ約5㎝の小ピットがある。柱痕、または柱抜き取り痕は検出されなかった。埋土は単一層で、弥生土器片が少量出土した。

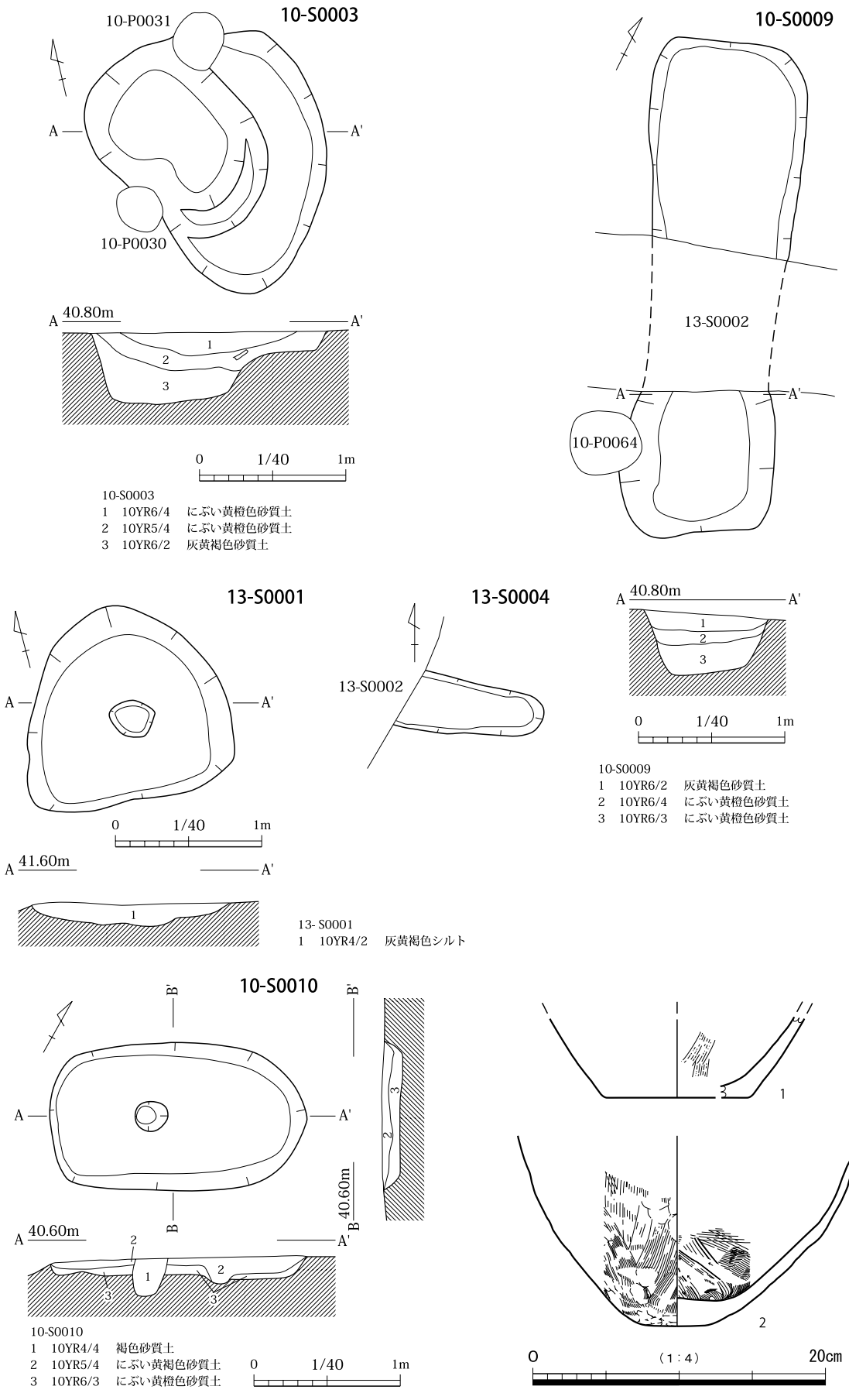
土坑13-S0004（第198図）

13グリッド10H地区において検出した土坑である。環濠13-S0002と重複するが、本遺構が古いと思われる。長軸約1.0ｍ以上、短軸約0.4ｍの溝状土坑である。短軸での断面は浅いU字型で、深さは約４㎝。平面形や位置、重複関係から、13-S0003・00005～0007溝の延長の可能性も捨てきれない。埋土から弥生土器破片がごく少量出土した。

土坑14-S0015（第199図）

14グリッド５Ｇ地区において検出した土坑である。大型建物４・６の柱穴２ヶ所と重複する。本遺構の方が新しいと思われるが、一部では埋土上層がまったく同質であったことから新旧関係を断定できない所もあった。長軸約2.1ｍ、短軸1.0ｍ以上の長方形土坑である。壁は斜めに掘り込まれ、底面は凹凸が多く中央部がやや窪む。深さは最深部の窪み部で31㎝。埋土上層は自然堆積を示し、下層は人為的に埋め戻された様相を呈する。埋土から弥生土器破片が少量出土した。

出土遺物（第199図）　台付鉢の脚部でハの字状に開く。内外面ともにハケを施す。肥後地方の野辺田式に類似するようであるが西新町遺跡でも類例があり、在地系か搬入品か不明である（西新町遺跡Ⅵ参照）。



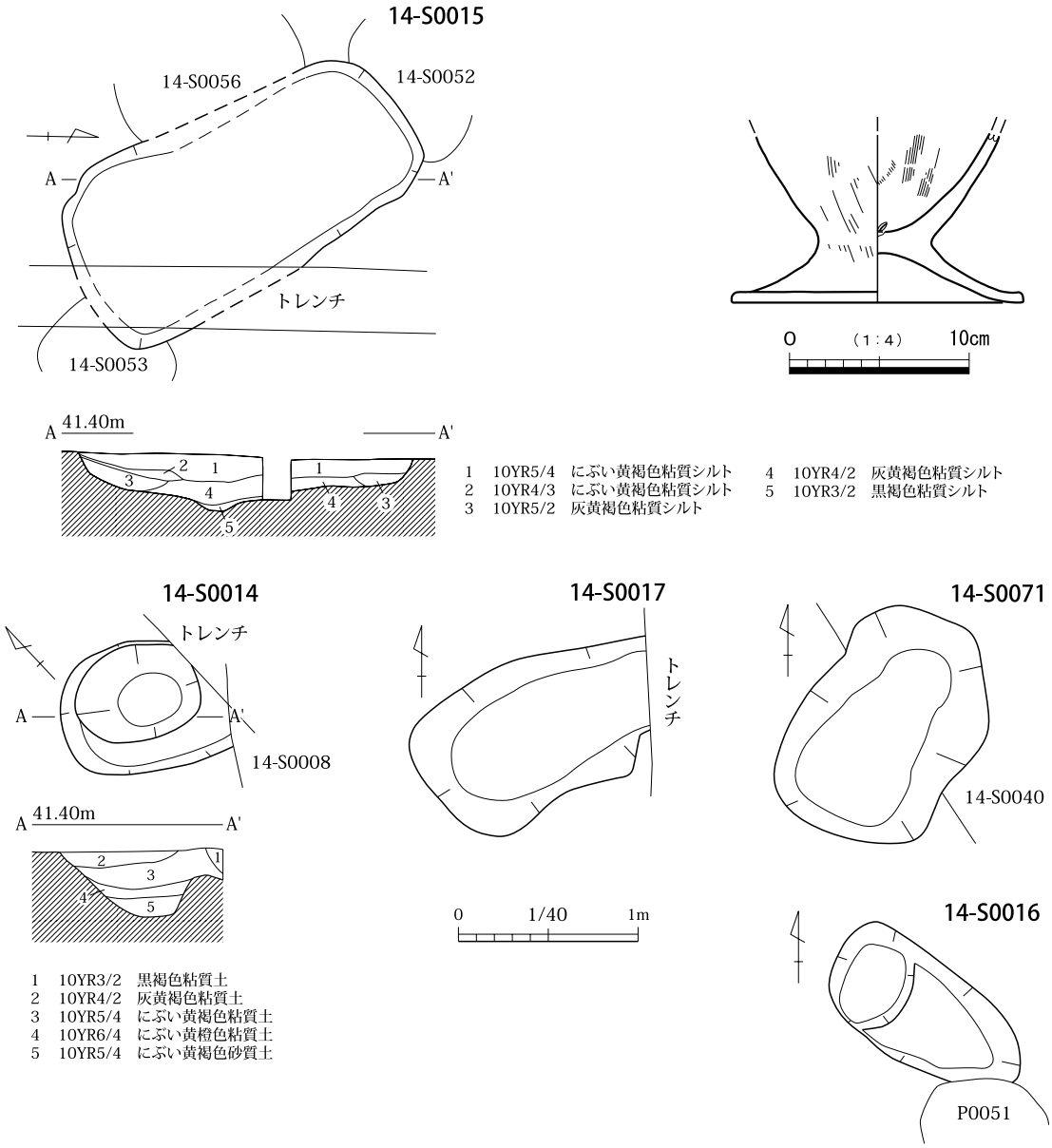
第198図 各土坑 平面・断面図①、10-S0010出土遺物実測図

土坑14-S0016（第199図）

14グリッド５Ｇ地区において検出した土坑である。一部ピットに壊されている。長軸約1.2m、短軸約0.6mの楕円形で、上端からやや斜めに掘り込まれている。底面は北半で一段深くなり、深さは最深部で26㎝を測る。規模や底面の形状は掘立柱建物の柱穴を思わせるが、深さや埋土の質がそれとは異なる。埋土は住居跡の埋土に似ており、弥生時代の甕破片が少量出土した。

土坑14-S0017（第199図）

14グリッド５Ｆ地区において検出した土坑である。サブトレンチで一部壊されている。長軸1.4m以上、短軸約0.8mで、短い溝のような形状である。底面は浅いU字型で、確認面からの深さは約15㎝である。埋土から弥生土器破片が少量出土した。



第199図 各土坑 平面・断面図②、14-S0015 出土遺物実測図

土坑14-S0029（第200図・図版39-1）

14グリッド２Ｆ～２Ｇ地区にかけて検出した土坑である。住居14-S0030と大型建物３[14-Ｓ0059]の柱穴、及び竪穴遺構14-S0028に重複する。前2者より新しく、後者より古い。長軸約2.9m、短軸約2.0mの台形を呈する。壁はやや斜めに掘り込まれ、底面は緩く凹凸があるもののほぼ平坦である。埋土は２層に分かれるが、後述する理由で人為的に埋められたものと判断される。坑内の南西壁から北隅近くにかけて、弥生土器破片が大量に出土した。これらの破片は壁際に近いほど厚く重なっており、北へ行くほど疎らになる。南西壁際から投棄した行為が容易に想像される出土状況である。出土した層位は１層下半から２層中が多いが、１層中からも同一個体の破片が出土していることや縦になって出土した破片もあることから、土坑を埋めながら土器破片を投棄したと考えるのが自然である。土器以外の出土遺物は人頭大の自然礫のみで、焼土あるいは炭化物、その他祭祀を窺わせるような遺物は出土しなかった。出土土器は接合して器形復元可能なものが多いが、完形に復元できる個体はそれほど多くない。これは土器破片が一時期に一括して廃棄されたことを示すと同時に、使用していた土器をそのまま投棄したものではないことも示している。現時点では、この土坑については、主として土器破片投棄のための「ゴミ穴」であろうと考えている。あるいは建築部材等の有機物も廃棄されたかもしれないが、調査でそれを裏付ける事実は確認できなかった。

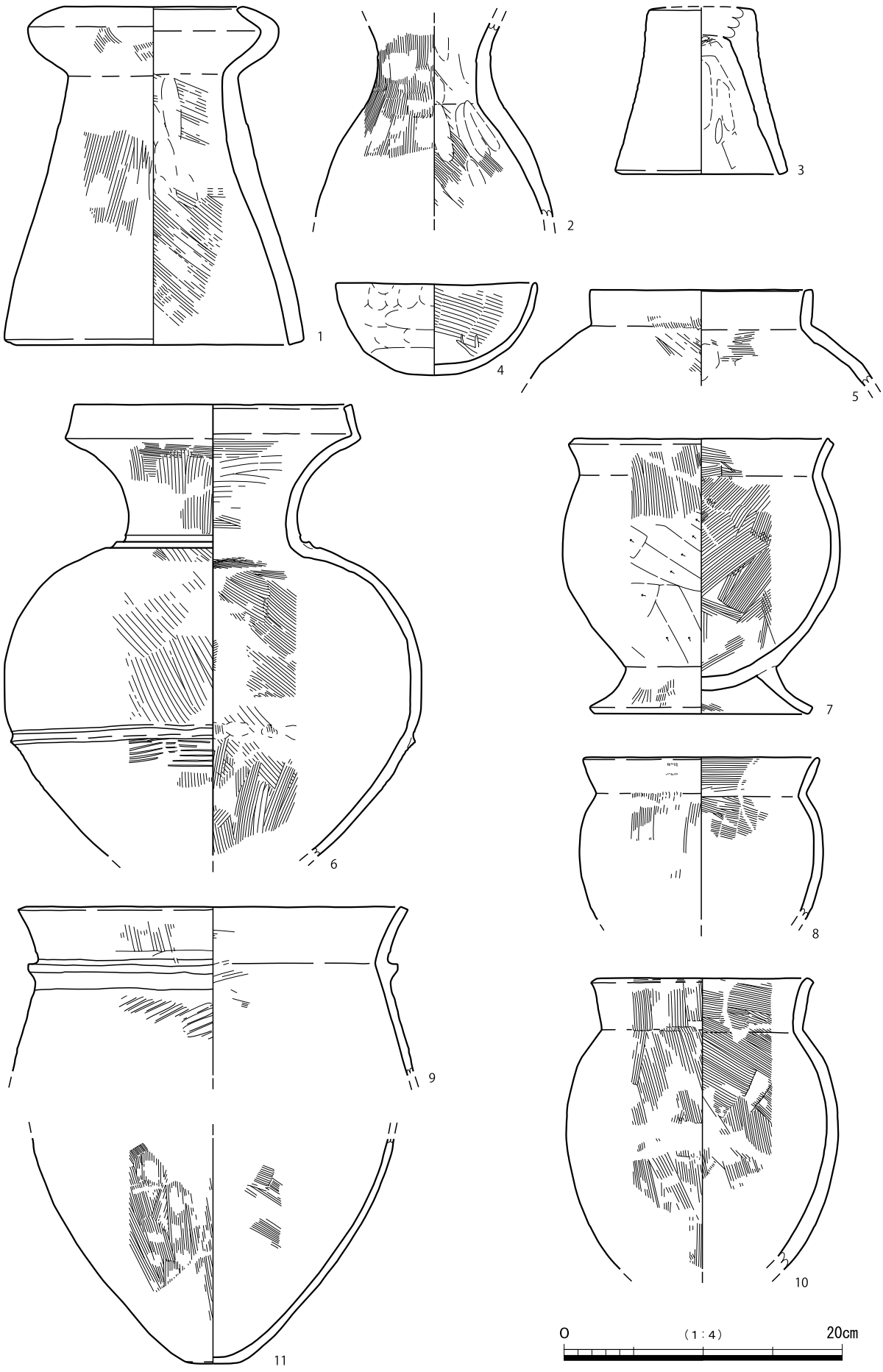
出土遺物（第201, 202図・図版65）　１・２は器台。１は袋状口縁部を呈し、脚部はハの字に開く。２は下半部が内弯しており、この遺跡では類例がない形状である。内外面ともにハケを施す。３は沓形の土製支脚である。上端には舌状の突起があった可能性が高いが残存していない。４は椀状を呈する小型鉢。５～６はいずれも壺である。５は短頸壺、６は複合口縁壺で、いずれも在地系のものである。６は外面頸部と胴部に断面三角形の突帯をめぐらせ、体部下半にタタキを施す。７は台付甕で丸い底部にハの字に開く短い脚台が付く。８～11、14～16は甕で、すべて在地系である。16は大型の甕で、甕棺の可能性もある。肩部と胴下部に突帯を巡らし、口縁部と突帯にハケ状工具による刻目を施す。底部が残存するものは2点で、11はレンズ状、16は丸底を呈する。12・13は大型の鉢で、口縁部は張りの弱い体部からやや外反気味に屈折する。12は丸底で、外面上半にハケ、下半にヘラケズリを施す。図示した遺物はいずれも坑内に集中投棄されていたものであり、出土状態に差はない。これらの遺物の様相は住居14-S0030と方形周溝14-S0033でまとまって出土した土器群とほぼ同じであり、極めて近い距離にこれらの土器の集中投棄が行なわれていることからも、両遺構への土器投棄と本遺構の構築が同時に行なわれた可能性が考えられる。また、土器の投棄が３遺構同時に行なわれたとすれば、方形周溝14-S0033が埋没した後の行為であろう。

土坑14-S0031（第203図）

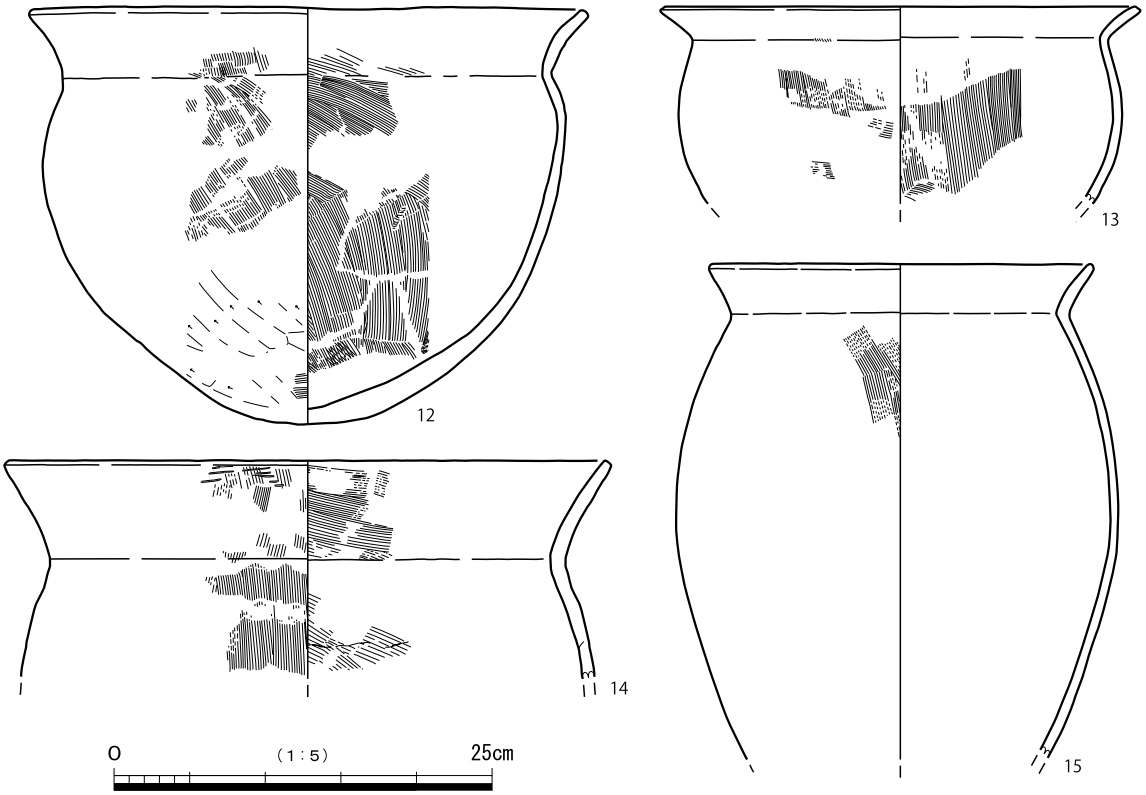
14グリッド１Ｈ地区において検出した土坑である。住居14-S0030、方形周溝状遺構14-S0033と重複する。本土坑が最も古く、東半はこれら二つの遺構によって壊されて正確な規模や平面形、深さなどは不明である。長軸3.1m以上、短軸約2.5mを測り、西壁にテラス状の段差を有する。壁は斜めに掘り込まれ、底面は凹凸が多い。西壁際は溝状に一段深く掘られている。本遺構はいったん埋め戻した後に再掘削が行われた様相を示しており、底面の溝状掘り込み部は再掘削以前の古い土坑である。新旧いずれの埋土からも弥生土器破片が出土しているが、古い土坑の埋土から出土したものはいずれも小さく、図示できなかった。

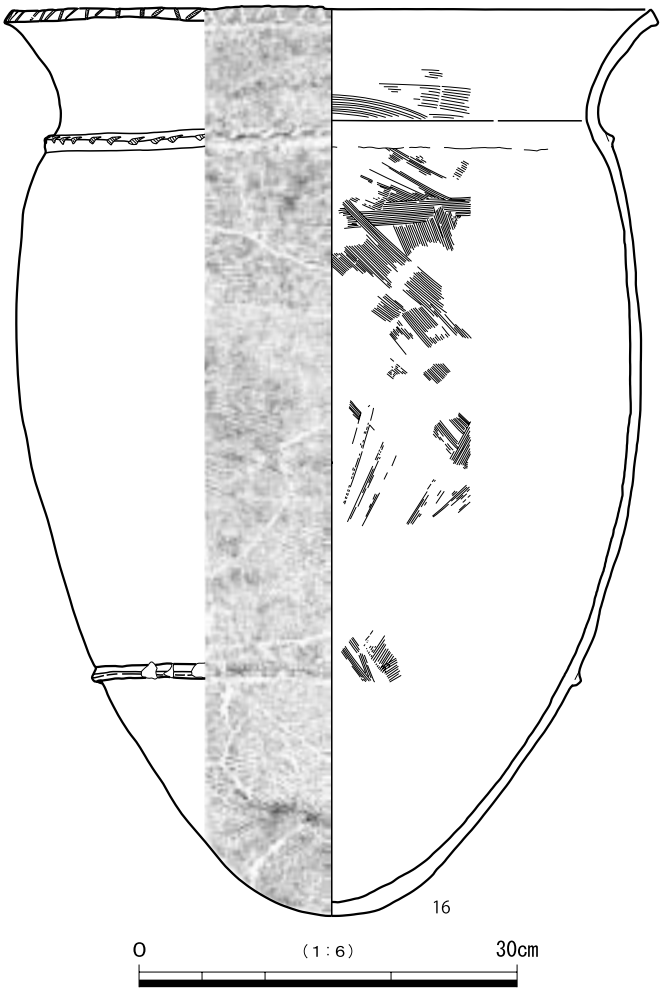
出土遺物（第204図・図版65）　１は器台。２は台付鉢である。台部に円形透孔を設ける。３は脚台

第200図 土坑14-S0029 遺物出土状態図

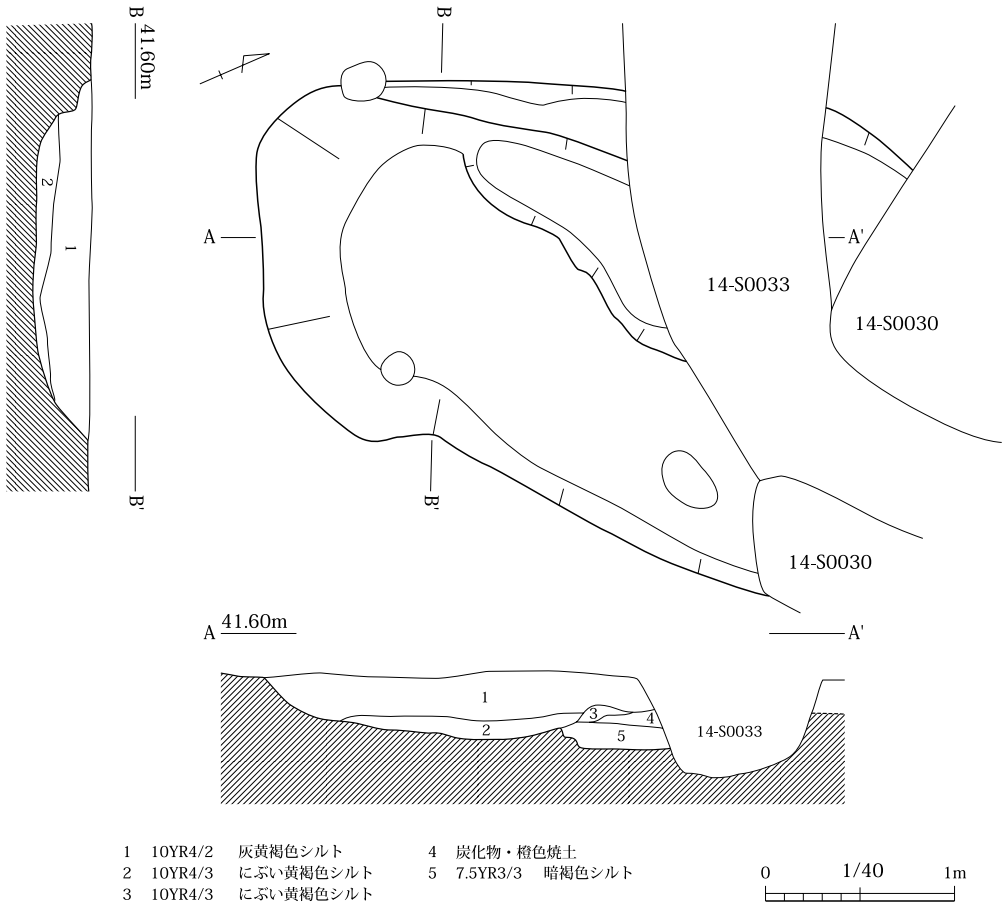


第201図 土坑14-S0029 出土遺物実測図①

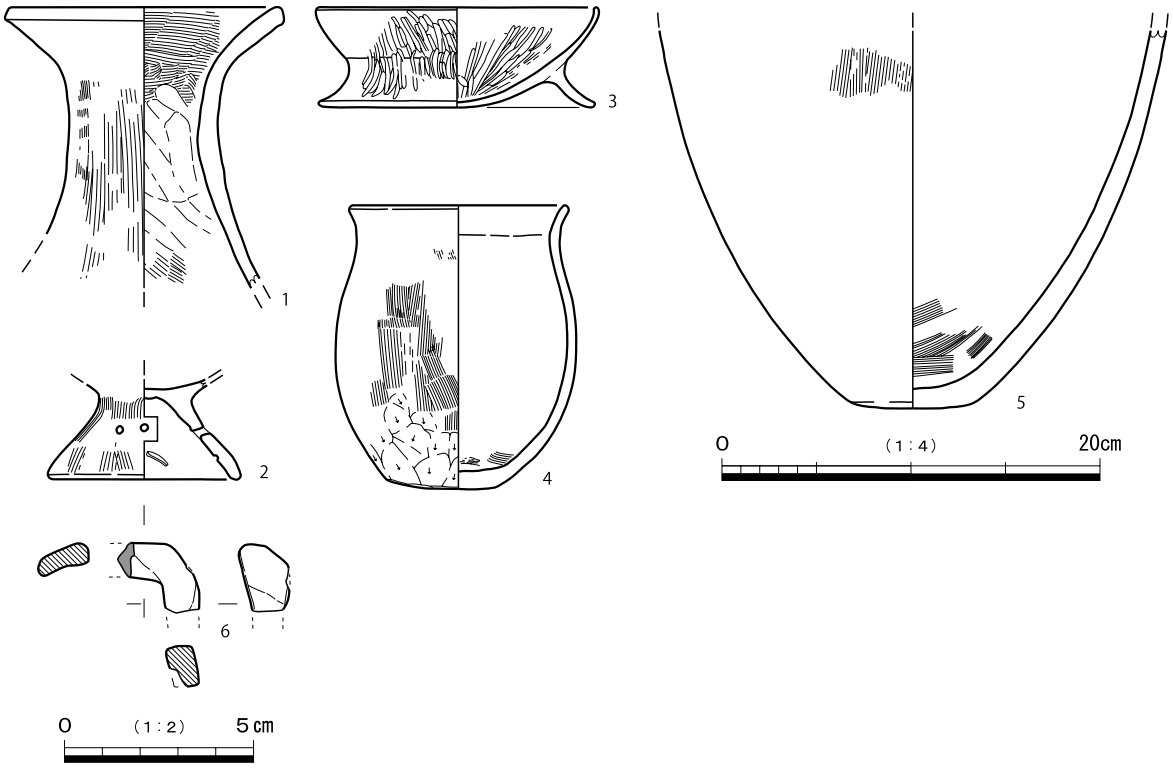




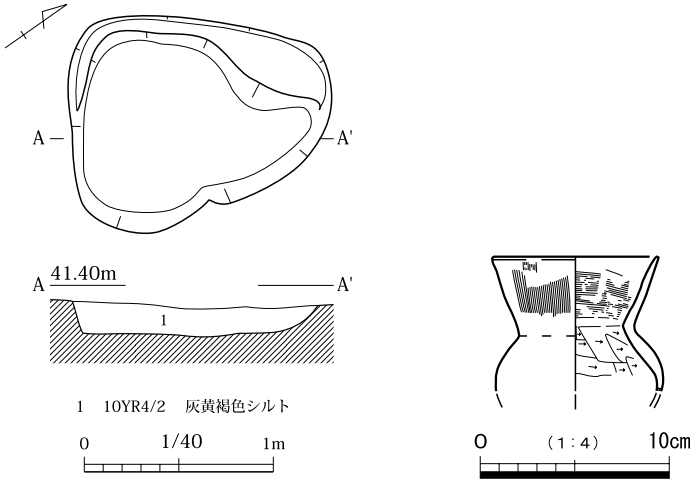
第202図 土坑14-S0029 出土遺物実測図②



第203図 土坑14-S0031 平面・断面図



第204図 土坑14-S0031 出土遺物実測図



第205図 土坑14-S0036 平面・断面図、出土遺物実測図

付鉢であるが、浅い椀形の鉢部にスカート状の脚台を付した特異な形状を呈する。前掲の土坑14-S0029の脚付鉢と同系の製作方法であり、脚部の形状もよく似ている。４・５は甕で、４は平底、５はレンズ状底部を有する。

６は鉄製の不明製品である。両端を欠損する。残存長1.8㎝、残存幅2.1㎝、最大厚1.4㎝である。断面長方形であり、部分的に捩りが入る。鏃の屈曲部の可能性がある。

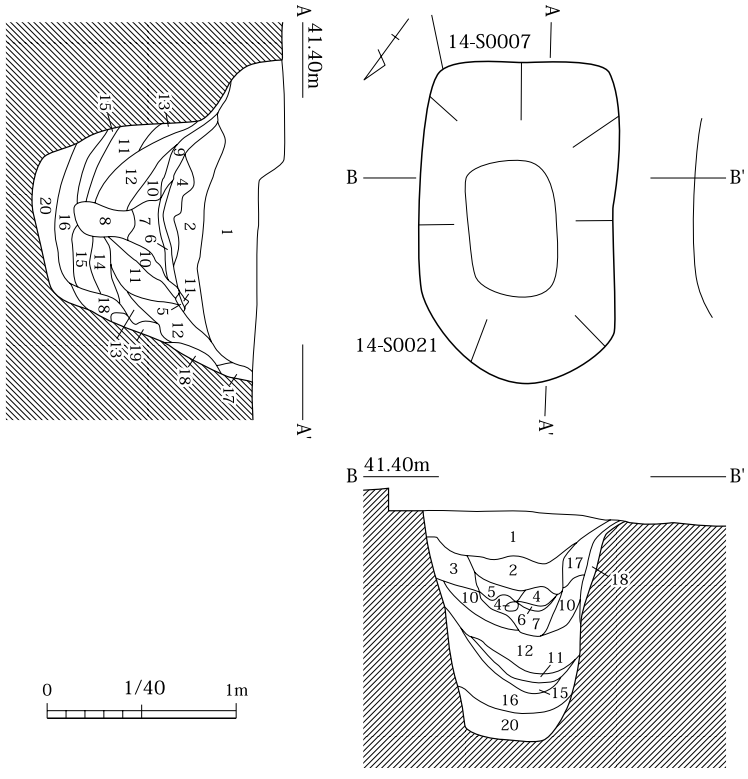
土坑14-S0036（第205図）

14グリッド２Ｉにおいて検出した土坑である。住居14-S0034と重複するが、本遺構が新しい。長軸約1.4ｍ、短軸約1.2ｍの不整三角形を呈する。壁はやや斜めに掘り込まれ、底面は一部で段差を持つが概ね平坦である。埋土は単一土層で、埋め戻されたものと考えている。弥生土器破片が出土したが、いずれも破片であり重複する住居14-S0034埋土中の遺物が流れ込んだような状態で出土したものもある。

出土遺物（第205図）　布留系の小形丸底壺である。残存状態は悪く外面には細かいハケが僅かに残る。

土坑14-S0048（第206図・図版40-1）

14グリッド５Ｇにおいて検出した土坑である。住居14-S0021・14-S0007ほか3軒の住居と重複する。14-S0021掘方から検出され、

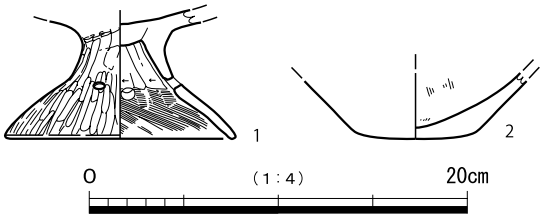


1	10YR4/2	灰黄褐色シルト	11	10YR4/1	褐灰色シルト
2	10YR4/2	灰黄褐色シルト	12	10YR4/2	灰黄褐色シルト
3	10YR6/4	にぶい黄褐色シルト	13	2.5Y4/1	褐灰色シルト
4	10YR3/1	黒褐色シルト	14	10YR4/3	黄褐色シルト
5	10YR4/1	褐灰色シルト	15	2.5Y4/1	褐灰色シルト
6	7.5Y4/1	褐灰色シルト	16	2.5Y4/2	暗灰黄色シルト
7	2.5Y4/1	褐灰色シルト	17	2.5Y4/1	褐灰色シルト
8	2.5Y4/1	褐灰色シルト	18	10YR4/1	褐灰色砂
9	10YR6/4	にぶい黄褐色シルト	19	2.5Y4/2	暗灰黄色シルト
10	2.5Y4/1	褐灰色シルト	20	2.5Y4/1	褐灰色礫

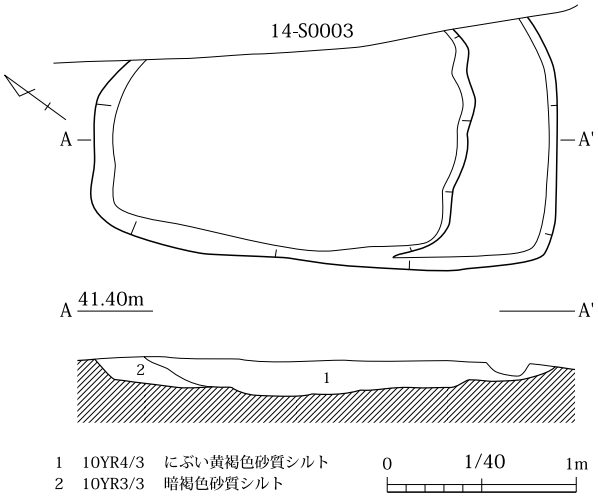
第206図 土坑14-S0048 平面・断面図

土層断面でも同住居より古く、他の住居跡より新しいことが確認されている。長軸約1.6m、短軸約1.0mを測る、砲弾型の平面形を呈する。壁はやや斜めに掘り込まれ、底面は平坦である。深さは約1.2m。埋土は下半部が自然堆積を示すが、上半部は埋没後に再掘削を行っていることを示している。平面では確認できなかったが、土層断面から推定すると南北に長い断面漏斗形のピットが、この遺構の上端から掘り込まれたことが判る。ピットの上端は本遺構の上端とほぼ完全に重なるが、南壁以外はこの遺構の平面形をほとんど改変していないように思われる。また、土層断面を見る限り南壁も大きく削ってはいないと考えてよさそうである。位置的には重複する14-S0021住居の主柱穴である可能性もあるが、ピット平面形が不明なこととピット埋土、特にその下半は自然埋没を示して柱痕や抜き取り痕が検出されなかったことから柱穴と断定できず、住居跡の平面図には掲載していない。本土坑とピット双方の埋土から弥生土器破片が出土した。

出土遺物（第207図・図版65）　１は脚付鉢と思われる。脚部はやや内弯し、透孔３単位を有し外面はヘラミガキで仕上げる。２の甕底部は平底を残すが、凸レンズ状を有する。底面を含めて外面調整不詳。二点共に埋土中に紛れ込んだものとみられ、本土坑の構築時期を示すものではないと考える。



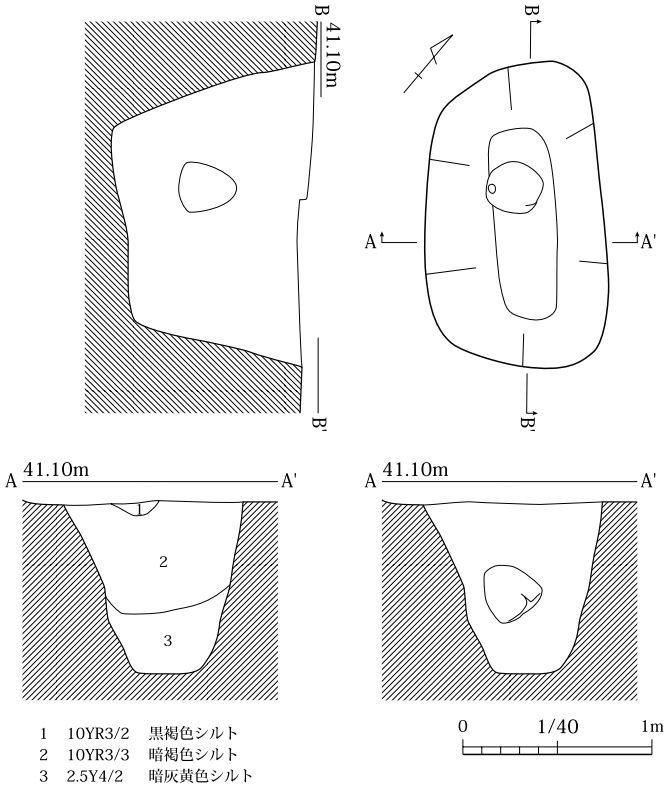
第207図 土坑14-S0048 出土遺物実測図



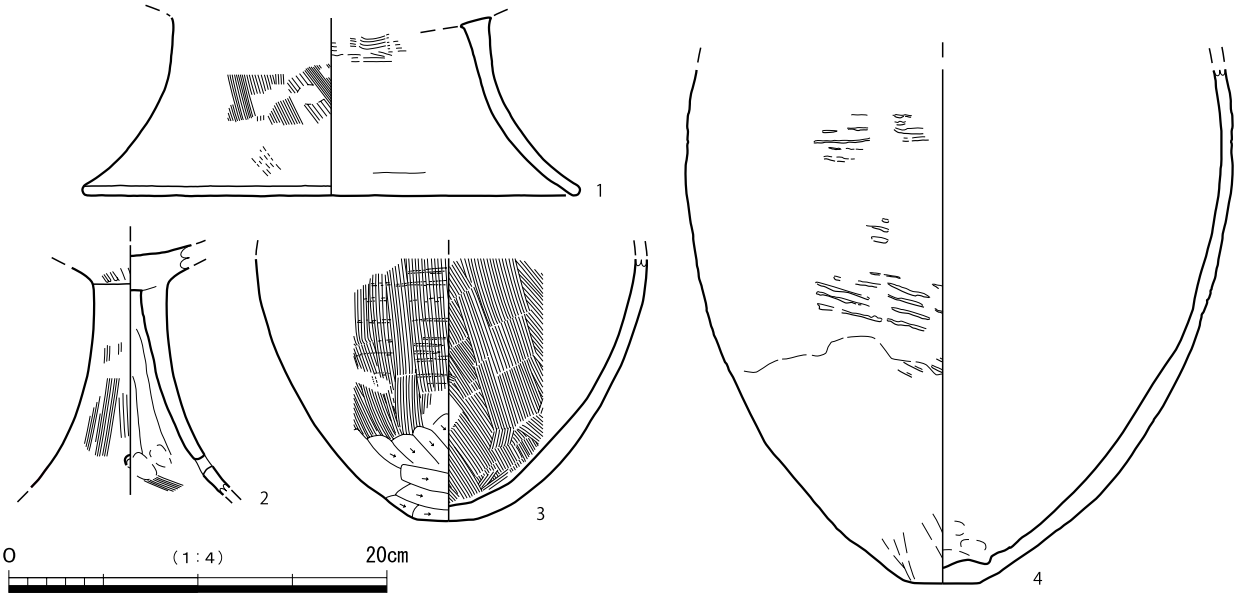
第208図 土坑14-S0057 平面・断面図

土坑14-S0057（第208図）

14グリッド３Ｊ地区において検出した土坑である。住居14-S0003・14-S0004と重複する。土層断面ではこの遺構が最も新しいことが確認されたが、14-S0003掘削時に本土坑を検出できなかったので平面図ではこの遺構が古いようにみえる。検出された限



第209図 土坑14-S0069 平面・断面図



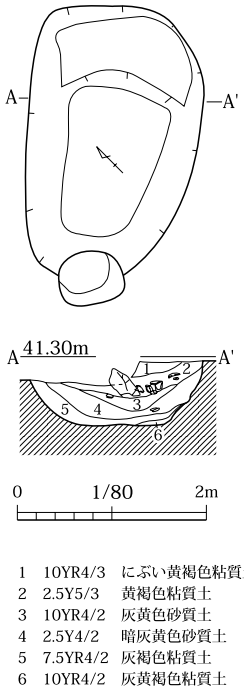
第210図 土坑14-S0069 出土遺物実測図

りでは長軸約2.1m、短軸1.4m以上の不整長方形と推定される。壁は上半でやや斜めに掘り込まれ、下半は緩く底面へつながる。底面は小さな段差をもつが概ね平坦である。深さは最深部で22㎝を測る。埋土は自然堆積と思われる。埋土中から布留系甕破片が出土したが、遺構の構築時期を示す資料ではなく混入品と思われる。この土坑は重複関係から古墳時代初頭以後と推定されるが、より新しい段階の遺物が出土していないことから住居14-S0003・14-S0004とほとんど時期差がないとみておきたい。

土坑14-S0069（第209図・図版40-2）

14グリッド３Ⅰ地区において検出した土坑である。住居14-S0003ほか２軒ないし３軒の住居と重複する。検出されたのは14-S0003掘方面であり、それより古いことは確実である。長軸約1.6m、短軸約0.9mの不整長方形を呈する。壁は斜めに掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。深さは検出面から91㎝を測る。埋土はおそらく人為的に埋められたものである。埋土中層から口縁部を欠く甕１個体が出土したほか、弥生時代の土器破片が比較的多く出土した。

出土遺物（第210図・図版65）　１は大型台付壺か鉢の台部である。精製された胎土を有し、焼成はあまく灰褐色系の色調を有することから瓦質土器風の感がある。２は高杯脚部で、裾部に円孔を有する。３・４の甕はいずれも底部をヘラケズリで整形しており、小さな平底を残す凸レンズ状である。重複する住居跡からの出土遺物には同様の底部を持つものがなく、これらの遺物が最も古い様相を呈している。



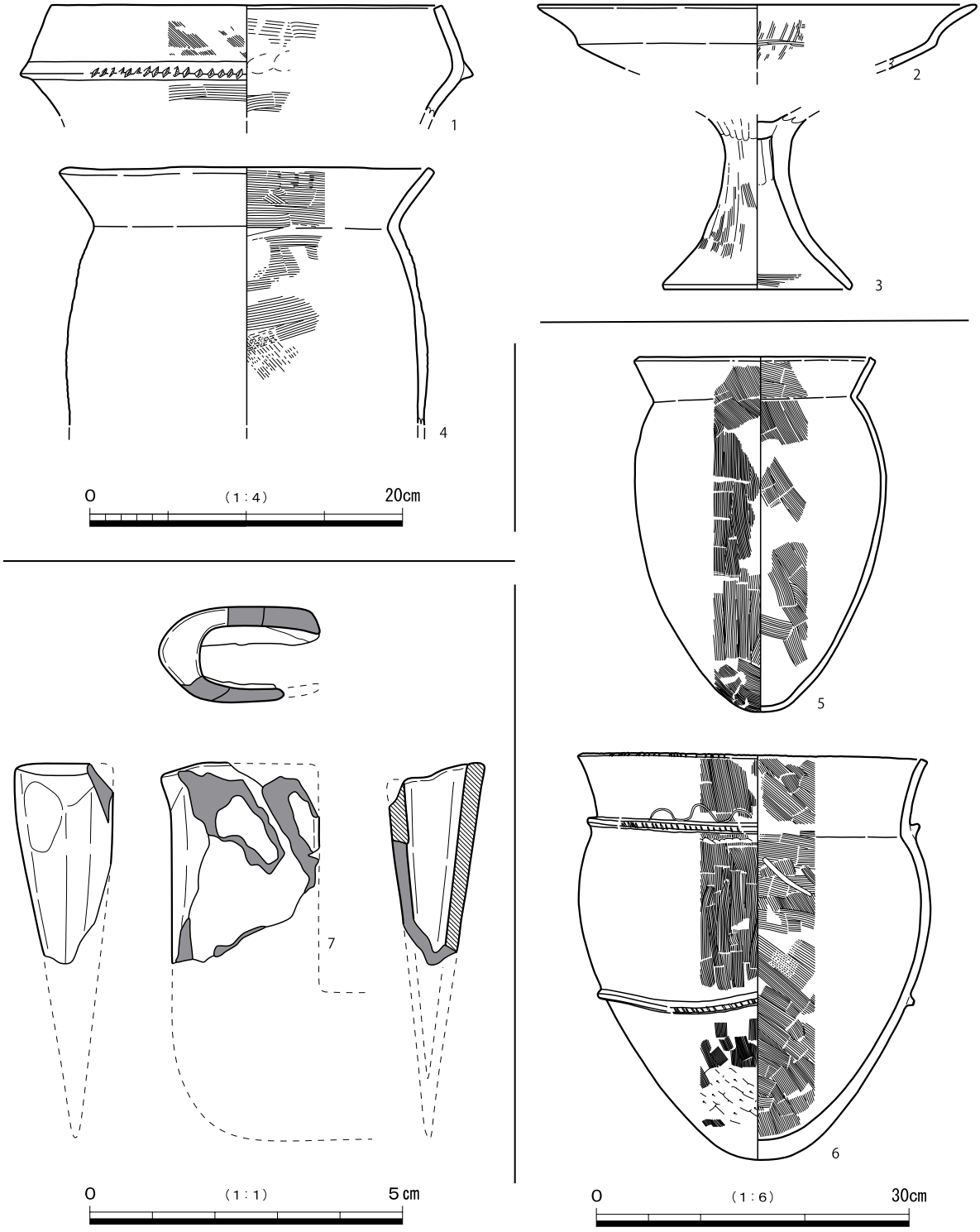
第211図 土坑14-S1005 平面・断面図１

土坑14-S1005（第211図）

14－３D地区において検出した土坑である。長軸３m、短

軸1.8ｍの不整楕円形を呈する。深さは確認面より約70㎝を測る。大型建物１、環濠と重複するが大型掘立柱建物１より新しく、環濠13-S0002より古い時期のものである。埋土の状況からは柱穴とは考えられないが、土坑の北東部に１段平坦部があり、階段状にも取れることから柱穴の可能性も存在する。その場合には大型掘立柱建物２に付随するものであろうか。しかし、組み合う柱穴がみあたらない。

出土遺物（第212図・図版86）　土器と青銅製鍬先片が出土している。１は複合口縁壺の口縁部である。逆くの字状に屈折する部位に断面三角形の突帯を貼付け頂部に刻み目を施す。２，３は高杯であ



第212図 土坑14-S1005 出土遺物実測図

る。２の杯部は口縁部との稜が明瞭で、口縁部は短く外反する。３の脚柱部は杯部との接合に円板充填法を用い脚部はなめらかにハの字状に開く。４は在地型の中型甕で体部外面にタタキメの痕跡がみられる。５，６はやや大型の甕で、図は1/6に縮小してある。５は長胴の体部から口縁部がくの字状に屈折し、端部を上内方に小さく拡張させる。内外面ともハケを施す。６は頸部と体部下半に刻み目突帯を配し、頸部に大きな弧状の崩れた波状文を部分的に線刻する。底部は凸レンズ状の小さな丸底を有している。

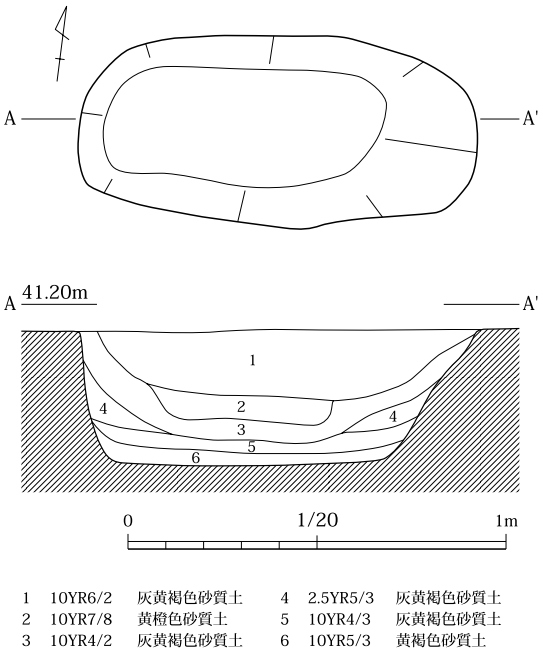
７は青銅製の鍬先である。もともとは凹字形の形状であるが、欠損のため片側上端のみしか遺存していない。残存長3.2㎝、残存幅2.5㎝である。横断面の形状は「⊂」形となり、先端に向かって狭まる。なお、部分的ではあるが端面を確認できる。縦断面の形状は上端が最も広く、刃先にいくにしたがい徐々に狭くなる。側面上端は逆三角形状に突出し、そのすぐ下は窪む。

土坑14-S1519（第213図）

14グリッドＤ地区において検出した土坑である。長軸1.04ｍ、短軸0.5ｍの隅丸長方形を呈し、長軸方向を東西に採る。深さは確認面から36㎝を測る。埋土は灰黄褐色砂質土と、下層で黄褐色砂質土と炭を多く含む灰黄褐色砂質土が薄く重なっている。周辺の土坑にこのような埋土は無く、他の土坑とは性格が異なると考えられる。

土坑15-S0007（第214図）

15グリッドＣ～４Ｃ地区にかけて検出した土坑である。長軸2.12ｍ、短軸1.96ｍの不整円形を呈する。確認面からの深さは52㎝である。埋土はにぶい黄褐色砂質土と灰黄褐色砂質土が水平に堆積している。床面は平底である。埋土の中層で高台付土師器が出土しているが、これは新しい時期のピットなどの遺構が埋土中に存在していたものと判断される。



1　10YR6/2　灰黄褐色砂質土　　4　2.5YR5/3　灰黄褐色砂質土
2　10YR7/8　黄橙色砂質土　　5　10YR4/3　灰黄褐色砂質土
3　10YR4/2　灰黄褐色砂質土　　6　10YR5/3　黄褐色砂質土

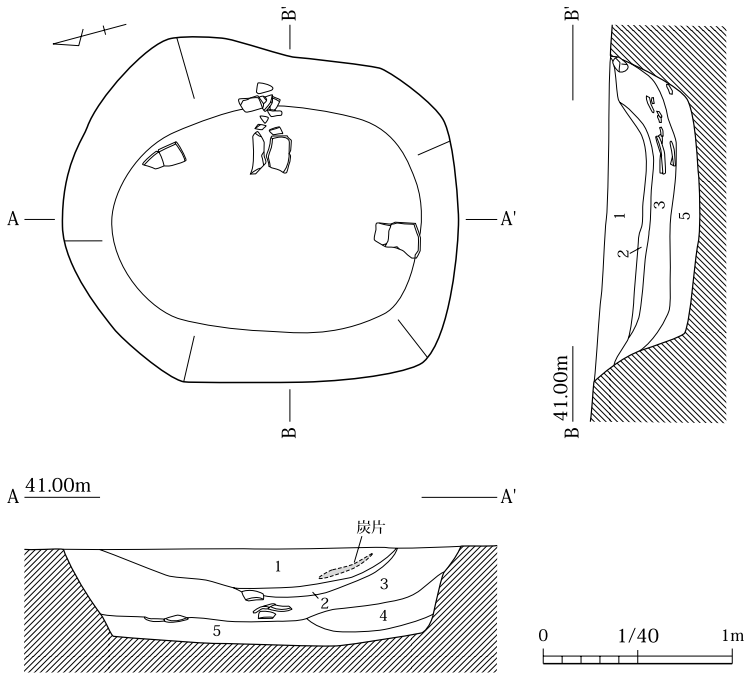
第213図 土坑14-S1519 平面・断面図

出土遺物（第215図・図版66）　１は高杯の杯部である。口縁部との稜が明瞭で、口縁部は短く立ち上がり外反する。２は甕の口縁部で、口縁外端面に調整時の指頭痕を残す。３は小型の短頸壺で、口縁部は短く直口する。内外面にヘラミガキを施す。４は短く外反する口縁部を有する壺で、底部をヘラ削り調整を施し、不安定でわずかに平底状を呈する。５は大型の鉢である。体部を欠損するが、丸底気味になるものと思われる。内外面ともハケ調整を施す。

土坑15-S0008（第216図）

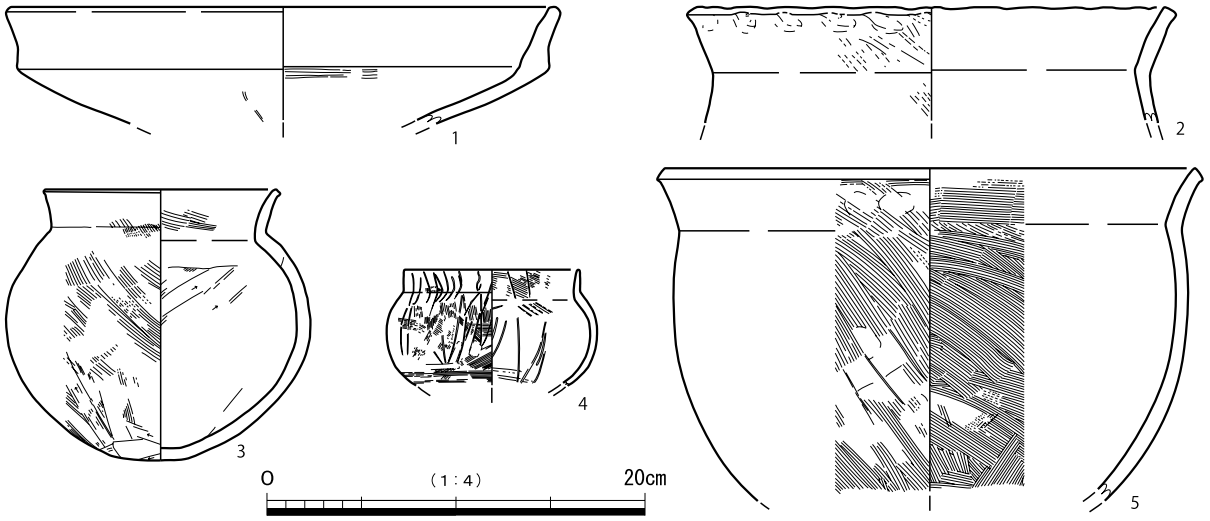
15グリッドＢ地区において検出した土坑である。長軸1.92ｍ、短軸1.60ｍの不整円形を呈する。深さは確認面から46㎝を測る。床面は平底である。

出土遺物（第217図）　１は小型の甕で、張りの

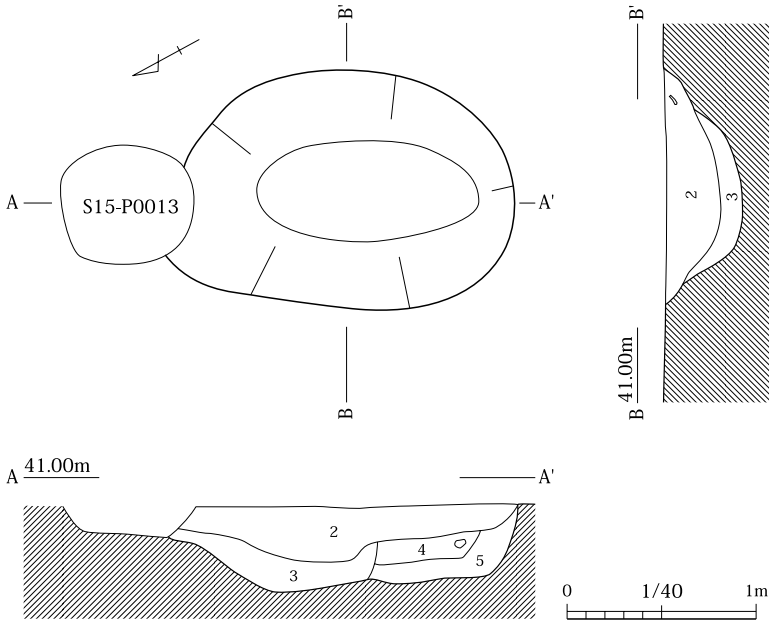


1　10YR6/2　灰黄褐色砂質土
2　10YR5/2　灰黄褐色砂質土
3　10YR6/3　にぶい黄橙色砂質土
4　10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土
5　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土

第214図 土坑15-S0007 平面・断面図

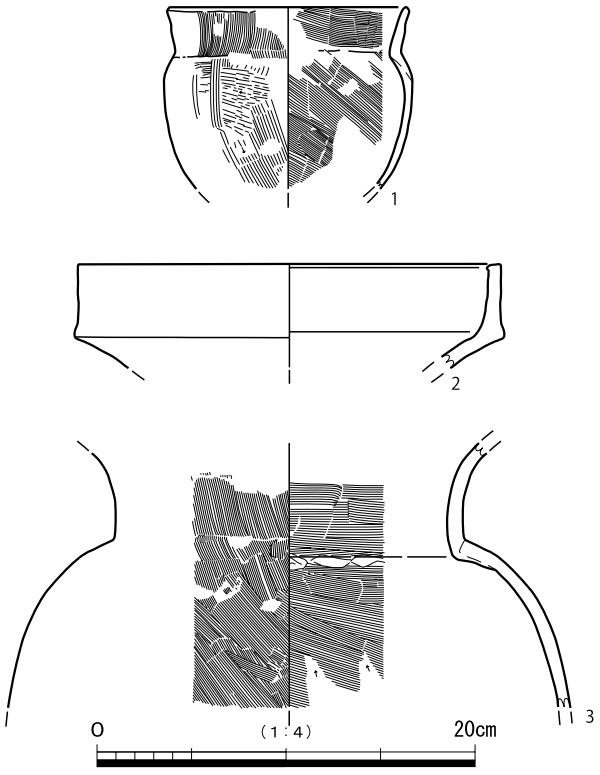


第215図 土坑15-S0007 出土遺物実測図

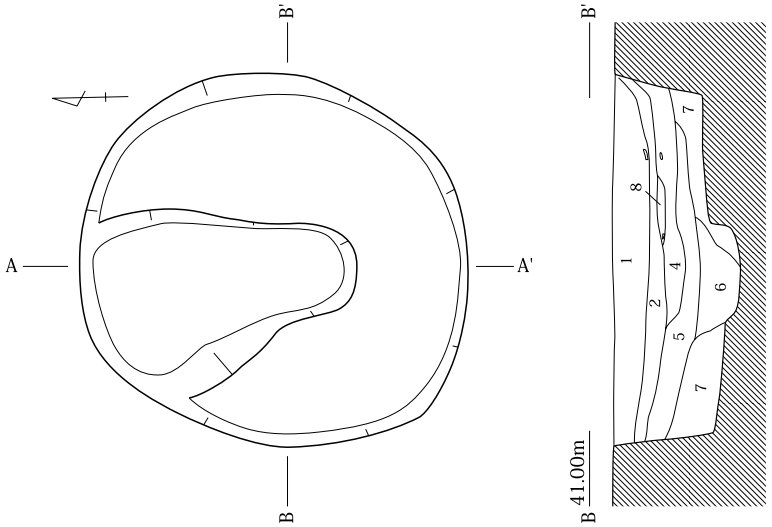


1　10YR5/2　灰黄褐色砂質土
2　10YR4/4　褐色砂質土
3　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
4　10YR6/1　褐灰色砂礫
5　10YR5/6　黄褐色砂質土

第216図 土坑15-S0008 平面・断面図



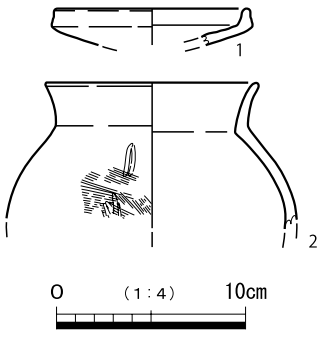
第217図 土坑15-S0008 出土遺物実測図



1	10YR4/4	褐色砂質土	5	10YR4/4	褐色砂質土
2	10YR3/4	暗褐色砂質土	6	10YR4/2	灰黄褐色砂質土
3	10YR6/1	褐灰色砂質土	7	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質土
4	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土	8	10YR3/3	暗褐色砂質土(炭含む)

第218図 土坑15-S0009 平面・断面図

弱い体部から直線的に外傾する口縁部をもち、内外面ともハケを施す。２は複合口縁壺で、外面に黒斑を有する。３は壺の頸部から体部上半で、外面体部に赤色顔料痕が見られる。



第219図 土坑15-S0009 出土遺物実測図

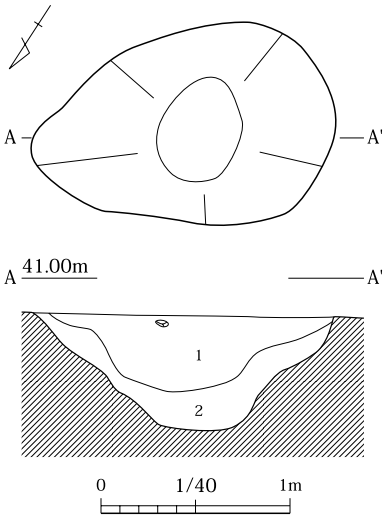
土坑15-S0009（第218図）

15グリッド１Ａ地区において検出した土坑である。直径約2.1mの円形を呈する。検出面からの深さは0.68ｍを測る。坑内は下半で二段に成形されている。床面の中央部を径50㎝、深さ10㎝ほど掘り窪め北側に向かって斜めに開放する。用途は不明である。

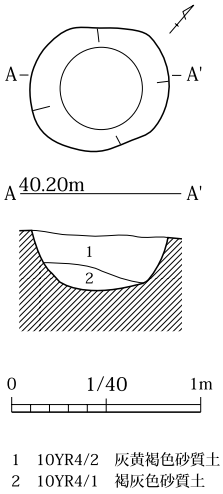
出土遺物（第219図）　１は小型器台の受部である。２は甕で口縁部を弧状に外反させ、端部は丸くおさめる。外面に媒が付着する。

土坑15-S0011（第220図）

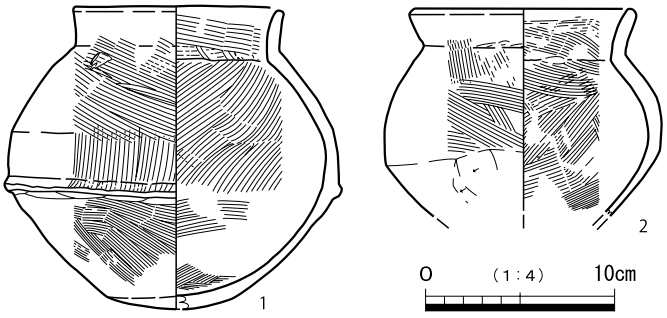
15グリッド２Ａ地区において検出した土坑である。長軸1.6m、短軸1.1mの不整楕円形を呈する。深さは検出面から62㎝である。床面は緩やかな弧状を呈する。弥生土器片か古式土師器片が出土してい



第220図 土坑15-S0011 平面・断面図



第221図 土坑15-S0515 平面・断面図



第222図 土坑15-S0515 出土遺物実測図

る。

土坑15-S0515（第221図）

15グリッド６Ｈ地区において検出した土坑である。やや楕円形気味であるが、直径約0.70ｍの円形を呈する。検出面からの深さは30㎝を測る。底面はやや丸味を持つ。埋土から古式土師器の小型壺２個体が横位で並んで出土している。

出土遺物（第222図）　１は体部中位に突帯を有する短頸壺である。底部は丸底であるが、凸レンズ状の名残が窺える。内外面ともハケ調整を施す。２は口縁部を短く外反させる小型壺である。底部を欠損するが、体部下半に粗いヘラケズリを施す。１・２とも器壁が厚く、ハケ仕上げの土器である。

土坑15-S0516（第223図）

15グリッド４Ｊ地区において検出した土坑である。長軸１ｍ、短軸0.66ｍの楕円形を呈する。検出面からの深さは45㎝を測る。方形周溝状遺構20-S0001、住居20-S0002に切られる。底面はやや丸味を持つ平底である。弥生土器か古式土師器片が出土している。

土坑15-S0517（第224図）

15グリッド４Ｊ地区において検出した土坑である。住居15-S0508に切られる。長軸1.6m以上、短軸0.54ｍのやや不整形な楕円形を呈する。検出面からの深さは42㎝を測る。底面はやや平底に近い。

出土遺物（第225図）　１・２とも甕で、１は張りの弱い体部から頸部

が緩やかに外反し、口縁端部下方をわずかに拡張させる。２はくの字状に外傾する口縁部で、端部は外端面をなす。内外面ともにハケを施す。

土坑18-S0504・－2（第226図・図版41-1）

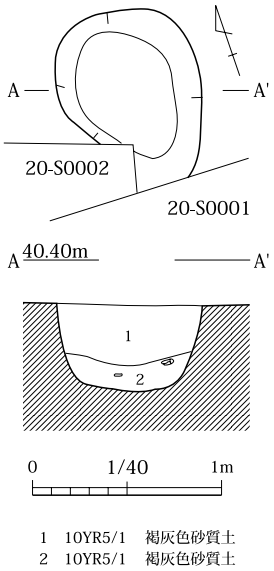
18グリッド６Ｄ～７Ｄ地区にかけて検出した重複する大型土坑である。また、これらは溝18-S0503、住居18-S0507とも重複する。南側に位置する18-S0507が最も古く、次に西側に重なるS0504-2をS0504が切るが、S0503には切られる。S0504の規模は、直径約3.3mの円形を呈する。深さは検出面から40㎝を測る。埋土は褐灰色粘質シルトで、土層では概ね上層、中層、下層の３層に分層できる。西側にS0504-2が、平面形状は崩れ歪でいるが土坑と認識した。西側部分の一部のみの残存である。長辺3.9m、短辺0.4～0.7mの範囲で、その深さは検出面から18㎝を測る。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第227図１）　器台の上半部で、最小径を上方にもつ。体部外面はタタキ整形を施している。

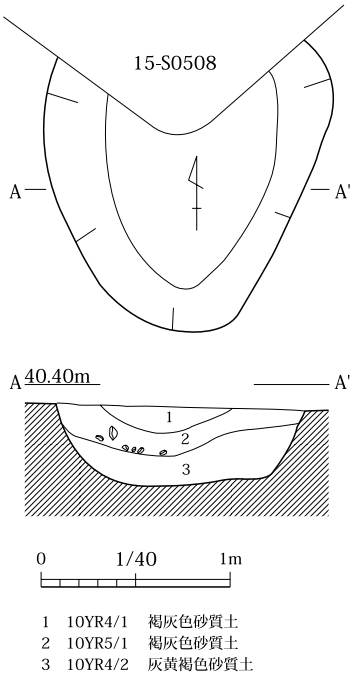
土坑18-S0505（第228図・図版41-2）

18グリッド５Ｆ地区において検出した土坑である。大型建物９（18-S0510）の柱穴と重複するが、その柱穴を切っている。長軸3.25m、短軸3.1mの逆台形を呈する。検出面からの深さは15㎝を測る。底面は平坦な状況にて確認できた。東側には大型の土坑と柱穴が切り込んでいるがこれらとの新旧関係は明確にできなかった。埋土は褐灰色粘質シルトで埋まっていた。土層では上層、中層、下層の大きく３層が分層できた。遺物は弥生土器が出土した。

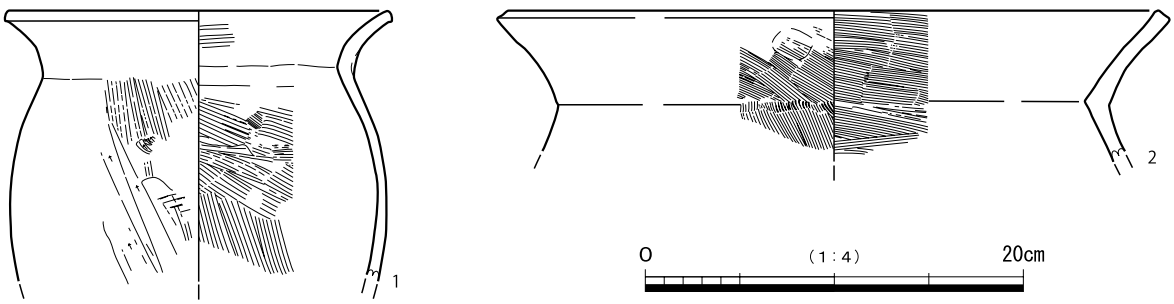
出土遺物（第227図２）　甕の体部から底部である。砲



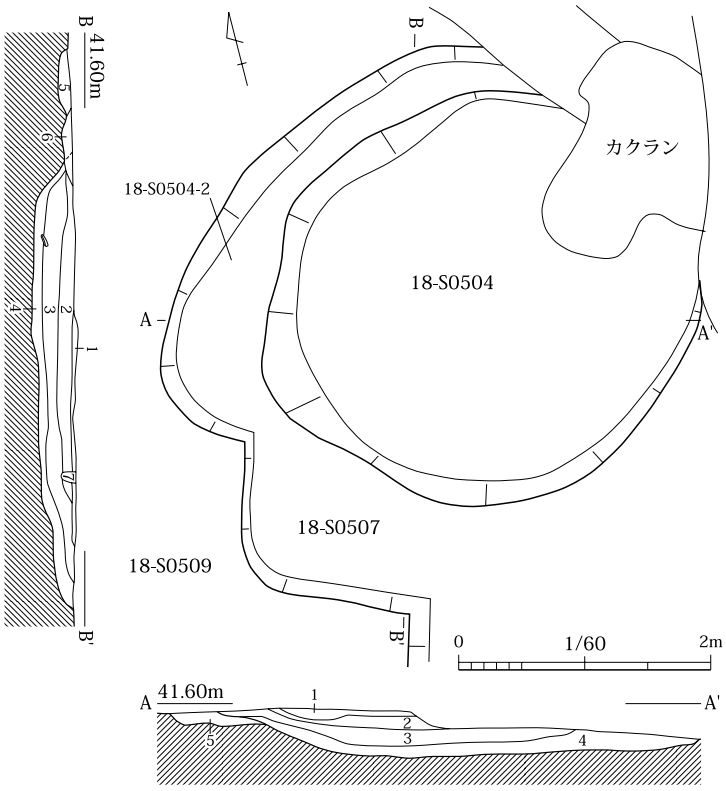
第223図 土坑15-S0516 平面・断面図



第224図 土坑15-S0517 平面・断面図



第225図 土坑15-S0517 出土遺物実測図



第226図 土坑18-S0504・S0504-2 平面・断面図(1/60)

第227図 土坑18-S0504・S0504-2・S0505 出土遺物実測図

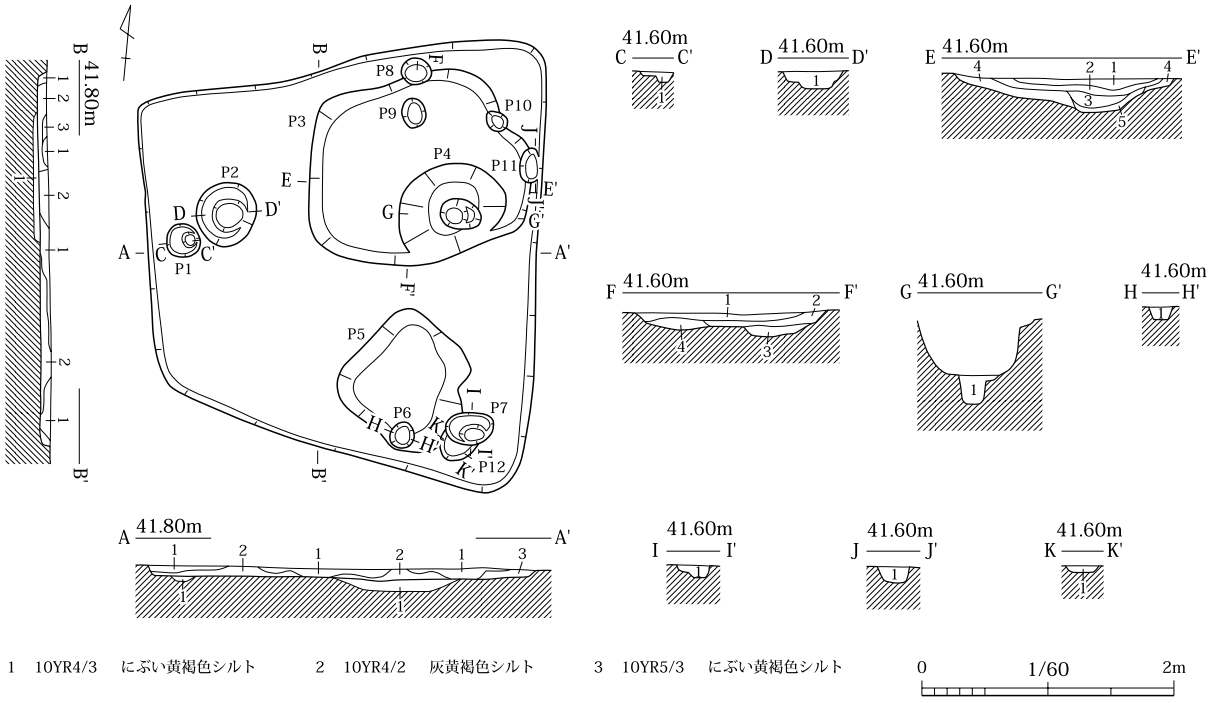
弾型を呈し、凸レンズ状であるが、僅かに平底を残す。体部外面は粗いハケを施している。

土坑19-S0008(第229図・図版39-2)

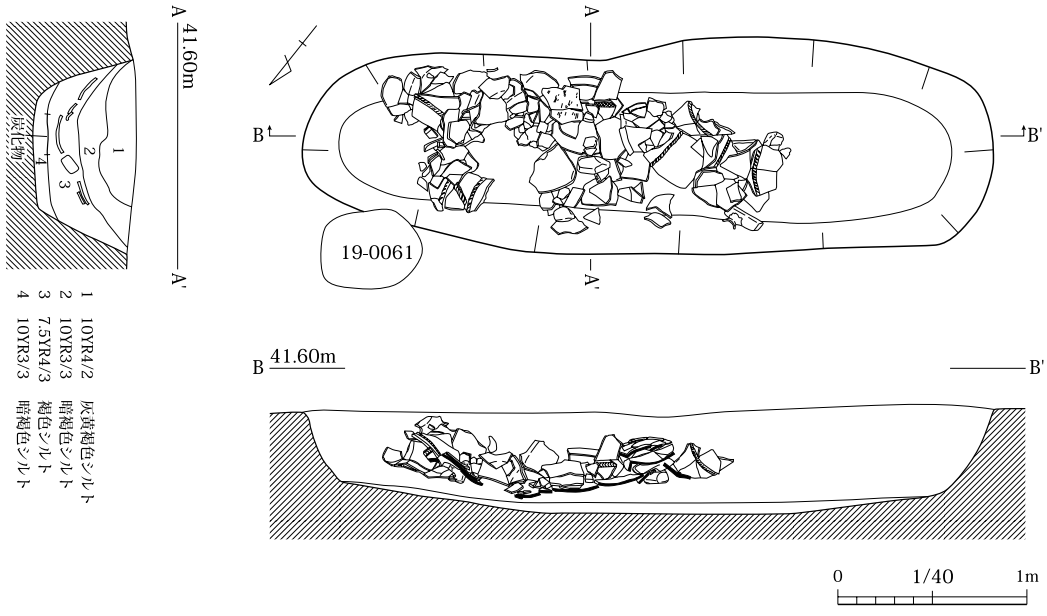
19グリッド２Ａ～３Ａにかけて検出した溝状土坑である。南へ約2.1m離れて、溝19-115が隣接する。新しいピットに一部壊されるがその他に重複する遺構はない。長軸約3.7m、短軸約1.1m。主軸方位はN-53°-Eで、前述の溝とほぼ並行する。壁はやや斜めに掘り込まれ、横断面は逆台形に近い。底面は中央部で若干低くなり、深さは検出面から55㎝を測る。埋土は調査時の所見では自然堆積である。埋土最下層上面の一部で炭化物が薄いシート状となって堆積していた。土坑底面、および壁面には被熱赤化した部分はなく、埋土中への焼土の混入もごく微量であるが、出土遺物の中に二次的に被熱、赤化した破片が多くみられることから、土坑内で火を焚いた可能性が高い。この炭化物から１～５㎝程上位の埋土中に弥生土器が大量に投棄されていた。甕（５）一個体分がまとまって出土したほかは同一個体の破片が広範囲に散らばっており、破砕した後に投棄されたことを示している。接合可能な破片が多かったが、全体を復元できるものは僅かであった。土器の他、人頭大の自然礫が出土しているが、祭祀的な行為を窺わせる遺物は出土しなかった。

出土遺物(第230, 231図・図版66, 67)

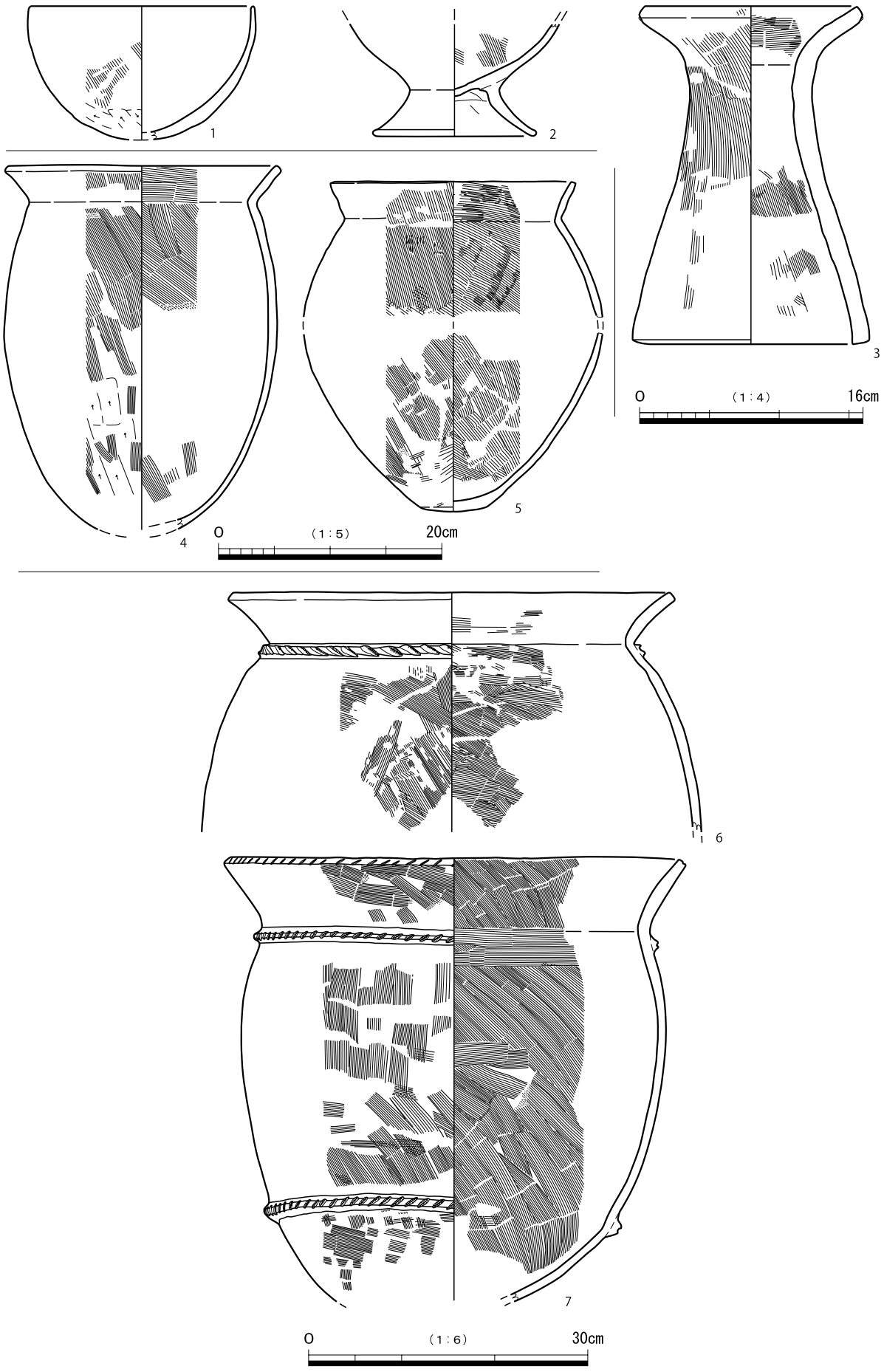
１は椀状の丸底の鉢である。２は脚付鉢。丸底の鉢に脚を付し、強くヘラでなでつけている。３は器台で下半部がやや内弯気味である。内外面ともハケを施す。４・５は甕である。４は丸底、



第228図 土坑18-S0505 平面・断面図

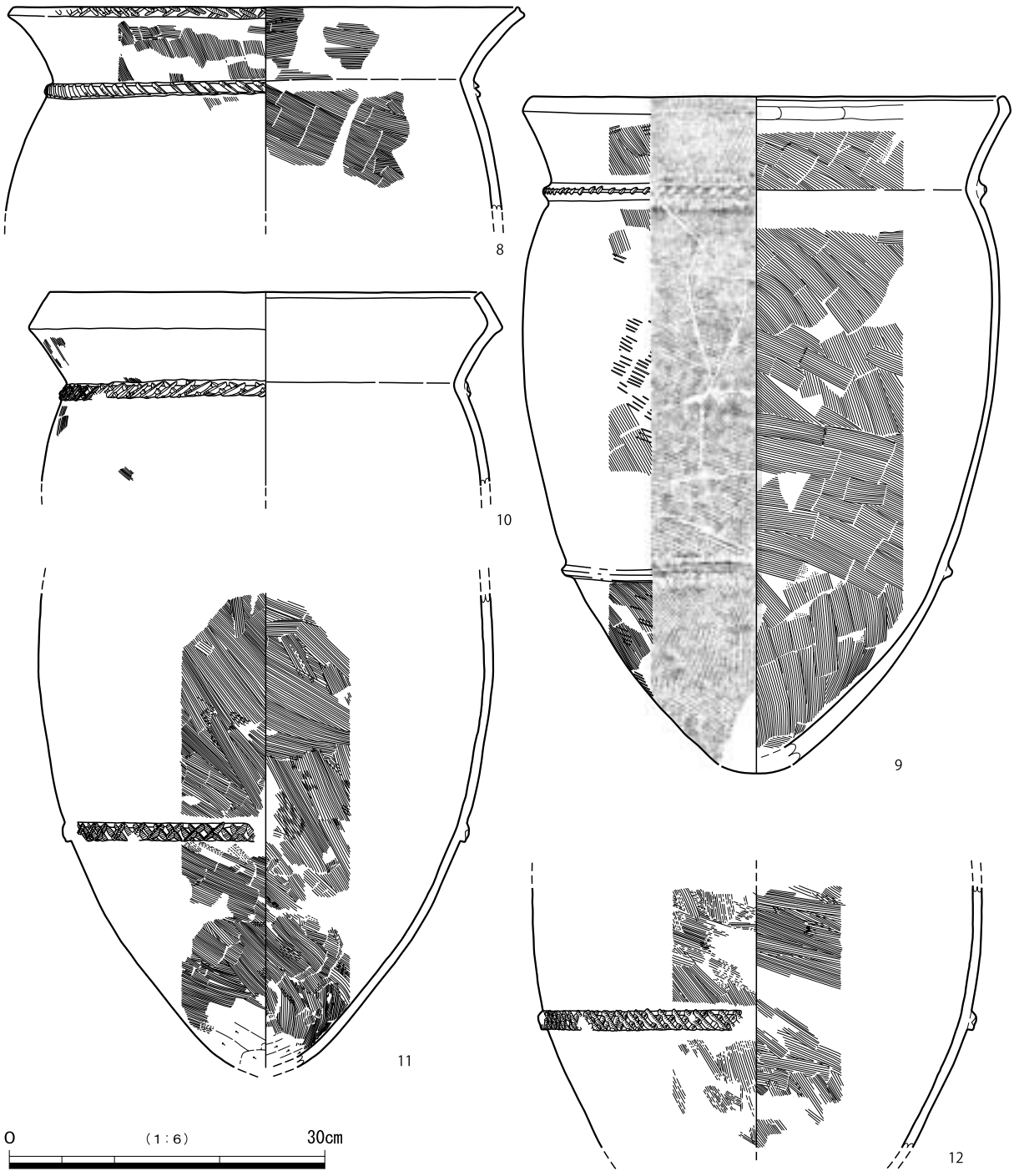


第229図 土坑19-S0008 平面・断面図



第230図 土坑19-S0008 出土遺物実測図①

５は底面を削って凸レンズ状に整形している。６～12は大型甕である。甕棺として製作されたものが含まれるかもしれないが、中には９のように内面に煤が付着しているものもあり、煮沸に使用していたものらしい。いずれも肩部と胴部に突帯を巡らし、突帯にはハケ工具による刻目を施す。口縁部は長胴の体部からくの字状に屈折し、８は端部を小さくつまみあげ、９は内方へ大きく拡張、10は上端で逆くの字に内傾させる。底面まで残存するものはなかったが、いずれも丸底と推定される。



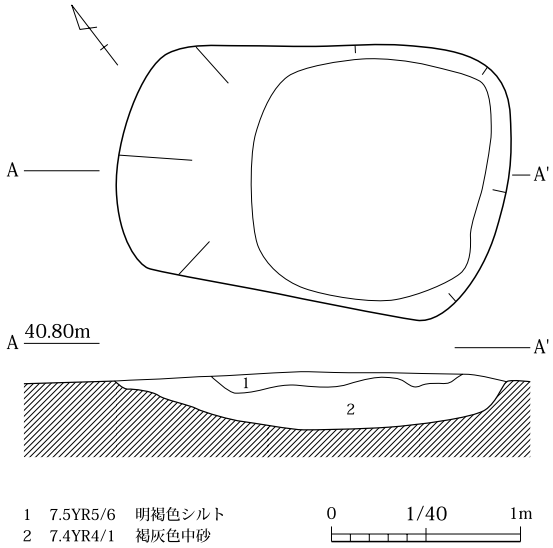
第231図 土坑19-S0008 出土遺物実測図②

土坑19-S1011（第232図）

19グリッド７Ａ地区において検出した土坑状の遺構である。その規模は長軸2.05m、短軸1.34mを測る、プランを検出できた南東辺と南西辺が直線状で、断面形状は舟底形を呈する。出土遺物は年代幅が広く弥生後期～古墳時代初頭ごろの土器に混じって細片ながら縄文晩期の土器片が混入している。

出土遺物（第233図１）　椀状の鉢で丸底を呈す。内外面ともハケ調整であるが、底部外面はヘラケズリが施される。

土坑19-S1020（第234図）



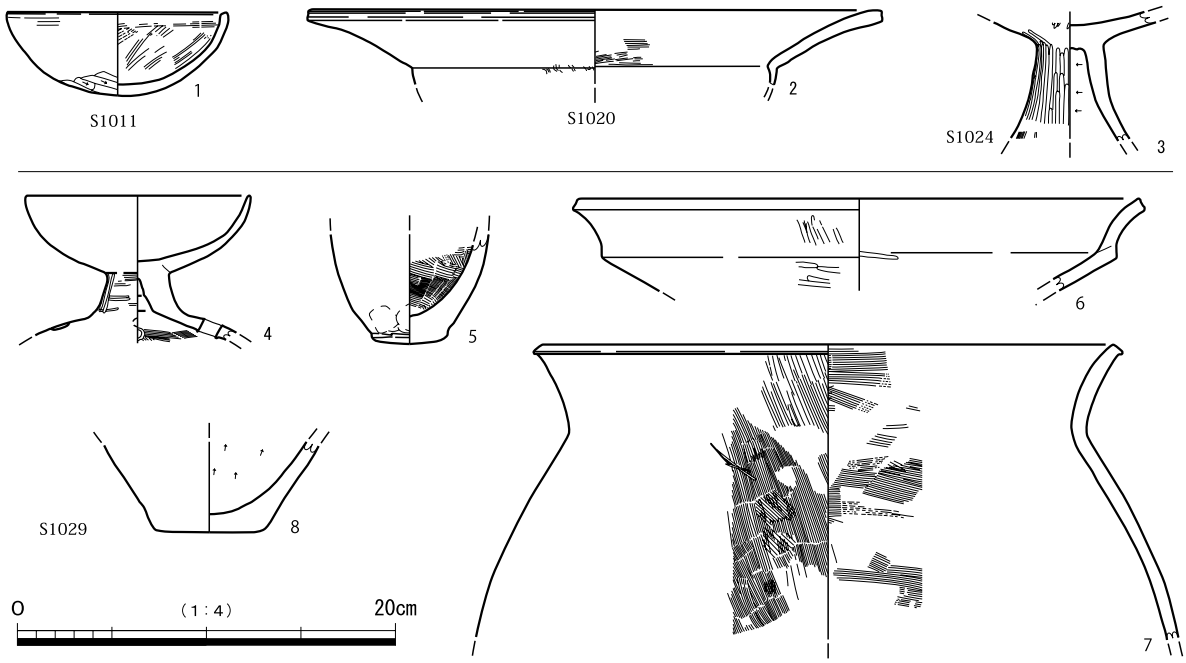
第232図 土坑19-S1011 平面・断面図

19グリッド８Ａ地区において検出した土坑である。長軸1.25m×短軸約0.72mを測る。深さは約46㎝で、埋土は灰黄褐色極細砂である。出土遺物は弥生後期の高杯の杯部や甕の口縁部が出土している。

出土遺物（第233図２）　有段高杯の口縁部である。丸い体部から屈曲して外反気味に大きく開き、端部をやや肥厚させる。全体に磨滅が著しいが、内外面にところどころハケメが認められる。

土坑19-S1023（第235図）

19グリッド８Ａ地区において検出した土坑である。土坑19-S1032と重複するが、これを切っている。長軸1.4m、短軸0.95mの



第233図 土坑19-S1011・S1020・S1024・S1029 出土遺物実測図

楕円形を呈し、深さ約60㎝を測り、埋土は５層に分層される。なお埋土の１・３・４は柱材の抜取り痕の可能性があり柱穴とも考えられる。出土遺物はない。

土坑19-S1024（第236図）

14グリッド７Ｊ地区～19グリッド８Ａ地区にかけて検出した土坑である。土坑19-S1033と重複するが、これを切る。長軸約1.1m、短軸約0.55mの楕円形を呈し、深さは約40㎝を測る。埋土は４層に分層される。出土遺物は弥生終末～古墳初頭の高杯が１点出土している。

出土遺物（第233図３）　高杯の杯底部から脚柱部である。杯部内外面および脚柱部外面はヘラミガキ、脚柱部内面にはヘラケズリが施される。

土坑19-S1025（第237図）

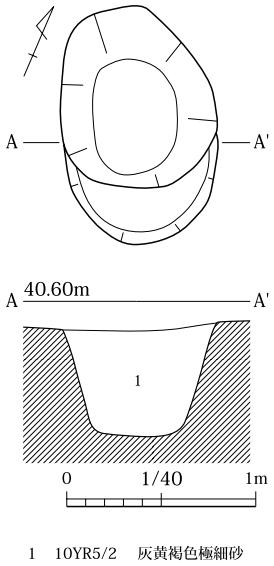
14グリッド８Ａ地区において、住居19-S1009の完掘後に検出した土坑である。長軸1.62m、短軸1.18mの砲弾型を呈し、南東部は直線状であるが北西部は円い。深さは35㎝を測る。埋土はベースの明黄褐色シルトのブロックを含む灰黄褐色粗砂混じり細砂の単層である。位置関係から、19-S1009もしくは住居19-S1009-2の屋内土坑である可能性もあるが、明確にできない。

土坑19-S1026（第238図）

19グリッド８Ａにおいて、住居19-S1021の床面で検出した土坑である。長軸0.76m、短軸0.6mの楕円形状を呈し、深さは27㎝を測る。埋土はベースの明黄褐色シルトブロックを少量含む黒褐色細～中砂である。

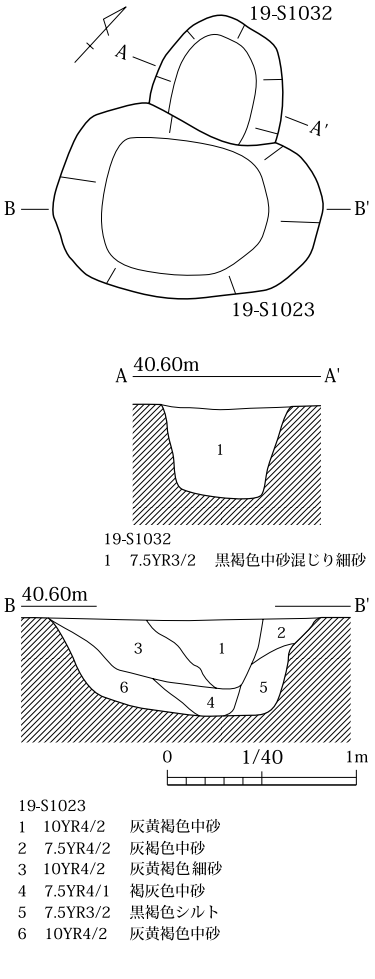
土坑19-S1027（第239図）

19グリッド８Ａにおいて、19-S1021の床面で検出した土坑である。直径0.8m前後の不正円形を呈し、深さは約13㎝を測る。埋土はベースの明黄褐色シルトブロックを少量含む黒褐色細～中砂である。出土遺物はなかった。



1　10YR5/2　灰黄褐色極細砂

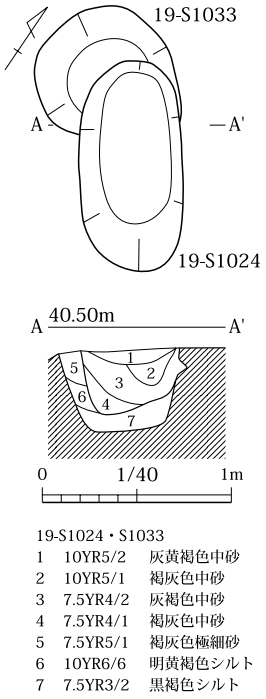
第234図 土坑19-S1020 平面・断面図



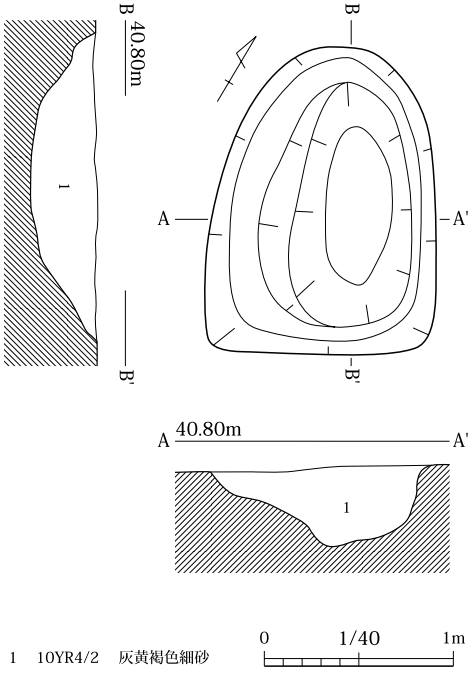
19-S1032
1　7.5YR3/2　黒褐色中砂混じり細砂

19-S1023
1　10YR4/2　灰黄褐色中砂
2　7.5YR4/2　灰褐色中砂
3　10YR4/2　灰黄褐色細砂
4　7.5YR4/1　褐灰色中砂
5　7.5YR3/2　黒褐色シルト
6　10YR4/2　灰黄褐色中砂

第235図 土坑19-S1023・S1032 平面・断面図



第236図 土坑19-S1024・S1033 平面・断面図



第237図 土坑19-S1025 平面・断面図

溝状土坑19-S1029（第189図）

調査区南端、19グリッド９Ｂ地区～10A地区にかけて検出した溝状土坑である。検出長約10.6m、最大幅約2.57mを測る。調査は全面を発掘したわけではなく、住居19-S1009に設定した北西‐南東トレンチを延長して埋土と堆積状況を確認し、その他の箇所は表面に露見する遺物を取り上げたのみである。19-S1009と重複するが、これに先行する。埋土は暗褐色中砂である。

出土遺物（第233図４～７）　４は低脚付鉢である。杯部は椀状を呈し、裾部は短い脚柱部からやや内弯気味に開く。瀬戸内地域からの搬入品であろうか。５は手づくね鉢の底部で凸レンズ状を呈する。内面ハケ調整を施す。６は高杯杯部で口縁部は短く外反し、短部は外傾面をなす。７は甕で、内外面ともハケを施す。８は平底の甕底部である。

土坑19-S1032（第235図）

19グリッド８Ａ地区において検出した土坑である。土坑19-S1023と重複するが、これに切られている。長軸0.53m以上、幅0.7mを測り、平面形状は楕円形を呈するものと考えられる。深さは約54㎝である。出土遺物はなかった。

土坑19-S1033（第236図）

14グリッド10Ｊ地区において検出した土坑である。土坑19-S1024と重複するが、これに切られている。長軸0.7m、幅0.6m以上の円形に近い楕円形を呈し、深さは60㎝を測る。埋土は３層に分層される。出土遺物はなかった。

土坑19-S1034（第240図）

19グリッド８Ａ地区において検出した土坑である。土坑19-S1035と重複するが、これに切られている。長軸約1.24m、短軸約0.58mの長方形を呈し、深さは約35㎝を測る。埋土は比較的均質の黒褐色極細砂である。出土遺物はなかった。

土坑19-S1035（第240図）

19グリッド８Ａ地区において検出した土坑である。土坑19-S1034と重複するが、これを切っている。長軸1.03m、短軸0.67mの長方形状を呈し、深さ24㎝を測る。埋土は２層に分層され、上層はベースの明黄褐色極細砂をブロック状にやや多く含む黒褐色細砂、下層は中～粗砂を多く含む黒褐色細砂である。出土遺物はなかった。

土坑19-S1036（第189図）

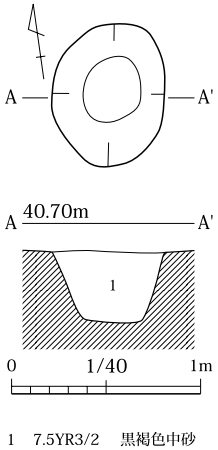
14グリッド８Ｊ地区～19グリッド８Ａ地区において検出した土坑である。長軸2.7m、短軸2.34mの長方形状を呈し、深さは25㎝を測る。断面形状は舟底形を呈し、埋土はベースの明黄褐色極細砂ブロックを下半に多く含む灰褐色極細砂である。出土遺物はなかった。

４　円形・方形周溝遺構

方形周溝14-S0033（第241, 242図・図版24, 25-1）

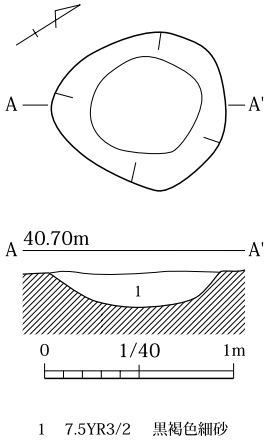
13グリッド10G～14グリッド２Ｈ地区にかけて検出した方形周溝遺構である。住居14-S0030、大型建物２（14-S1027）等と重複するが、切り合い関係からこの遺構が最も新しい。土層断面では14-S0030が完全に埋没してからこの周溝が構築されたことがわかり、掘削時にも同住居の埋土とは色調や土質が違うことが明瞭に感じられた。長辺約9.3m、短辺約8.7ｍを測る。四隅は丸味を持ち、断面形はU字形を呈する。確認面からの深さは0.4～0.5ｍを測り、東側が相対的に深い。埋土は基本的に自然埋没を示し、盛り土の崩落と思われる土層は確認されなかった。周溝内部には建物、土坑いずれの痕跡も確認されず、性格不明である。北東辺の覆土上層から甕を主体とした弥生土器破片が集中して出土した。14-S0030で検出された土器集中部とも近く、一連の行為だった可能性も考えられるが、周溝がほぼ埋没した後のものであり、直接この遺構に伴うものではない。

出土遺物（第243図・図版67）　１・２は高杯で



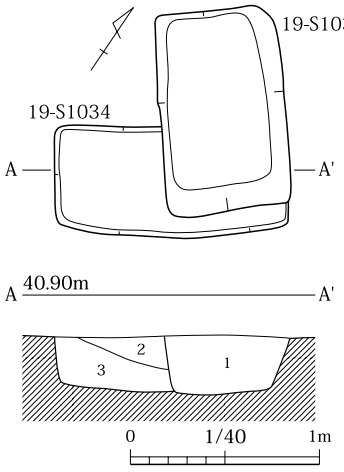
1　7.5YR3/2　黒褐色中砂

第238図 土坑19-S1026 平面・断面図



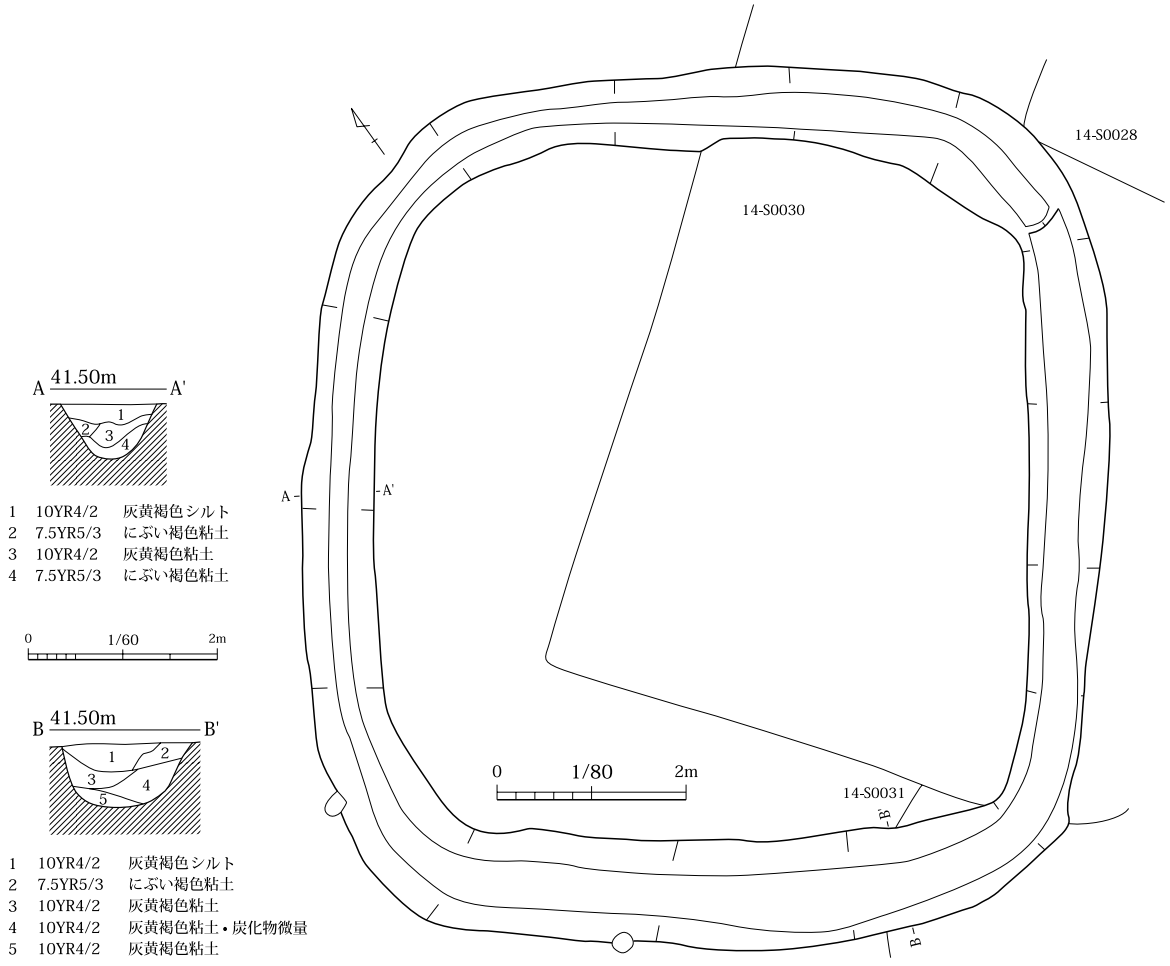
1　7.5YR3/2　黒褐色細砂

第239図 土坑19-S1027 平面・断面図



19-S1034・S1035
1　7.5YR3/2　黒褐色中砂
2　10YR3/2　黒褐色中砂
3　10YR3/1　黒褐色細砂

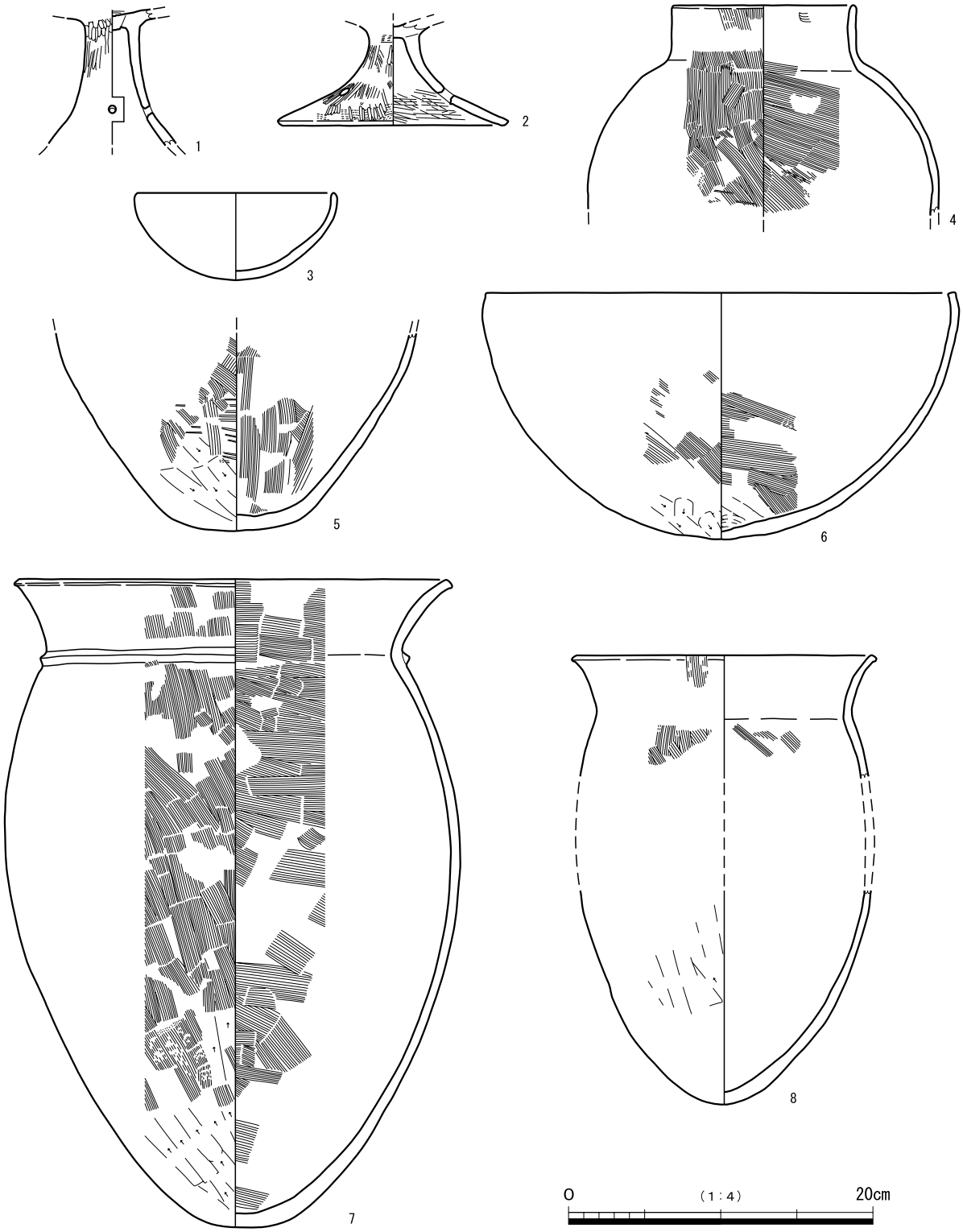
第240図 土坑19-S1034・S1035 平面・断面図



第241図 方形周溝14-S0033 平面・断面図

第242図 方形周溝14-S0033 遺物出土状態図

ある。2 の脚柱部には 3 方向の円孔を穿つ。3 ・ 6 は鉢で、椀状を呈する丸底の鉢で、6 は大型で口縁部が少し内傾する。4 は在地系直口壺。内外面にハケを施す。5 ・ 7 ・ 8 は甕である。5 は上部にタタキとハケ、下部から底部にかけてヘラケズリを施し、底部をレンズ状に整形する。7 は甕で、頸部に断面三角形の貼り付け突帯をめぐらせ小さな凸レンズ状底部を有する。8 は丸底の甕である。いずれも土器集中部からの出土であり、一括投棄されたものである。前述のようにこの遺構に伴うもの



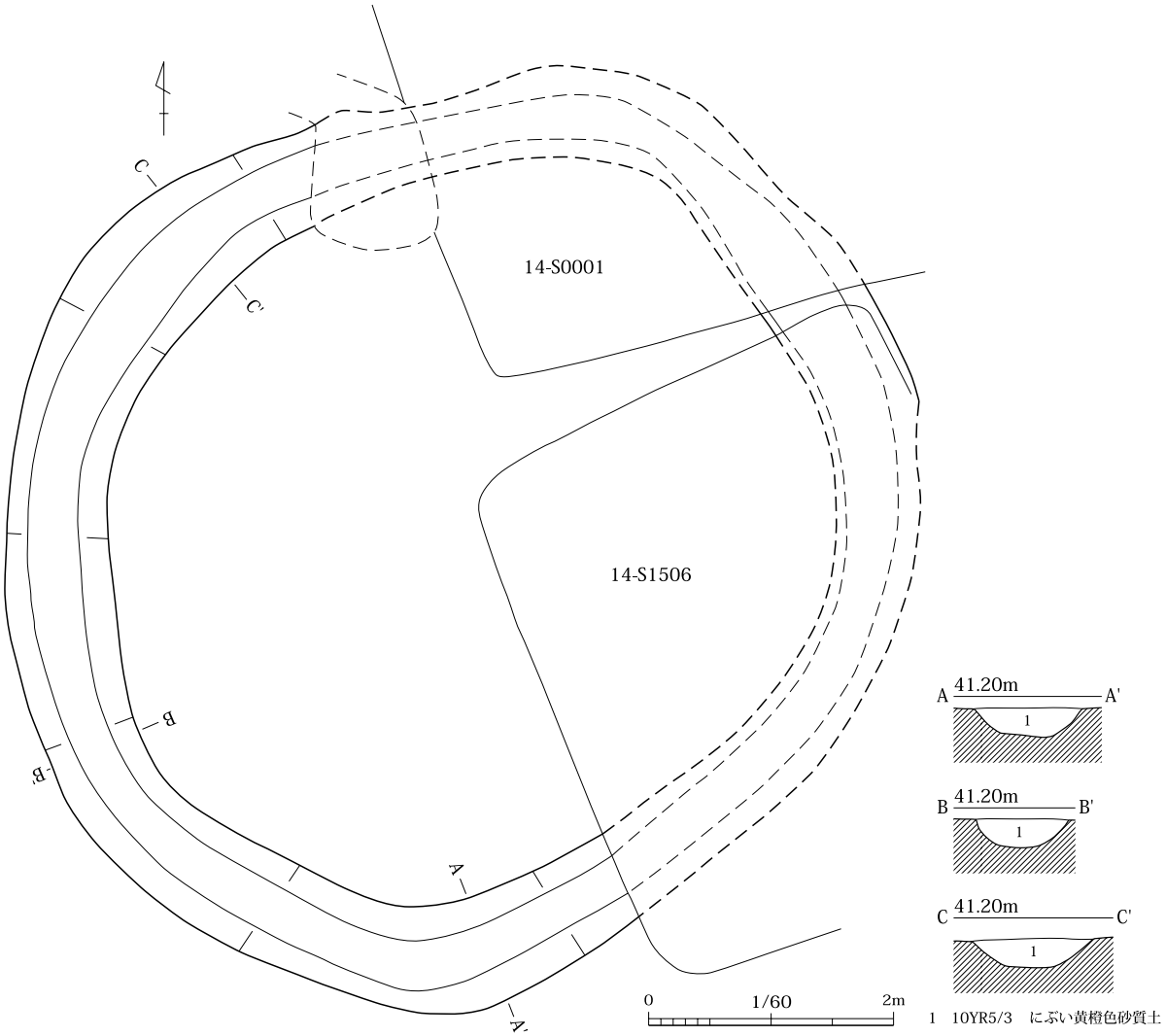
第243図 方形周溝14-S0033 出土遺物実測図

ではない。

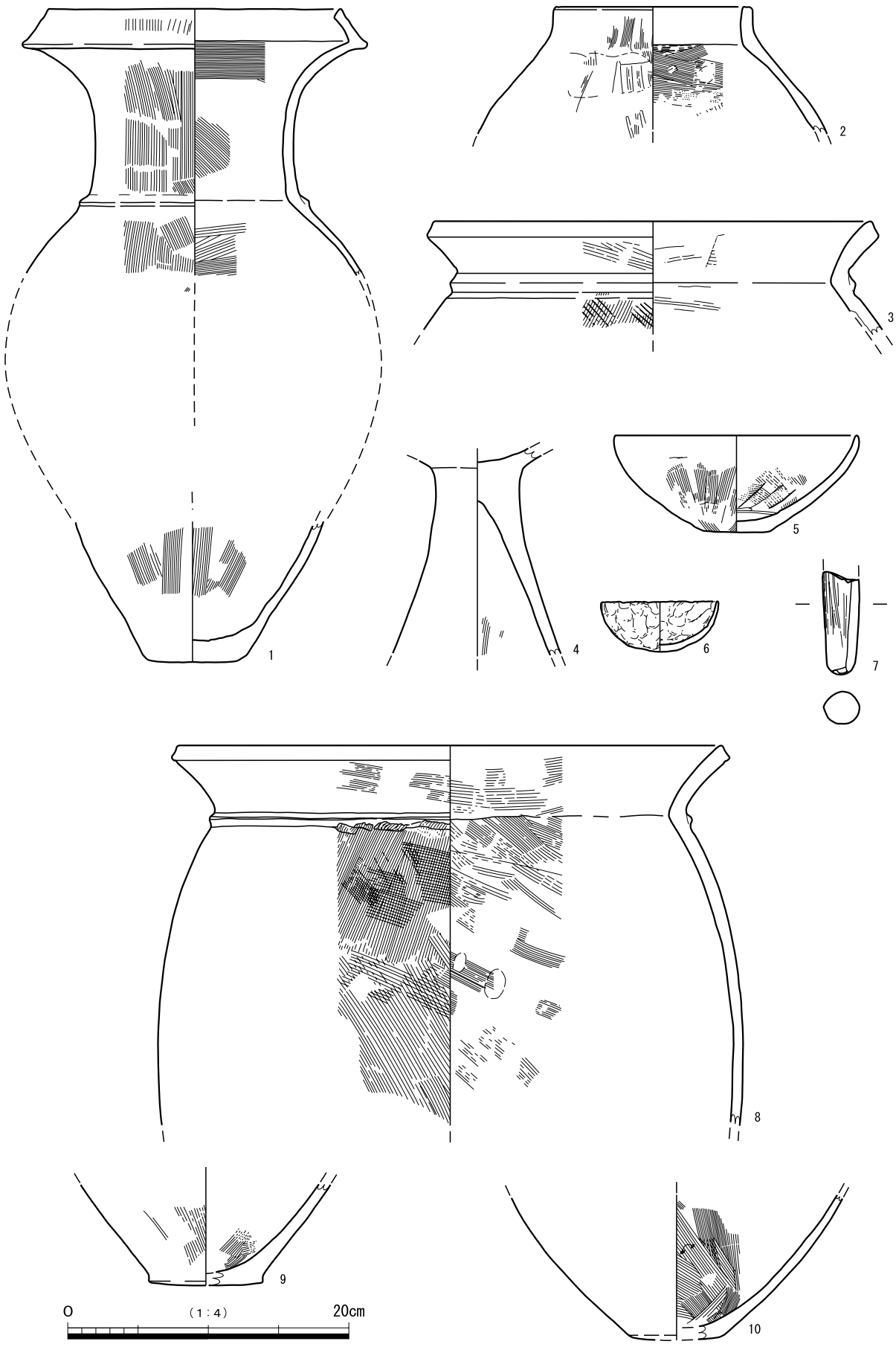
円形周溝14-S1505（第244図・図版16-2）

14グリッド９Ｊ～10Ｊ地区にかけて検出した円形周溝遺構である。住居9-S0001・14-S1506と重複するが、それら住居に切られる。規模は7.30～7.60ｍを測る円形プランで、周溝の幅は0.78～0.90ｍ、深さは検出面から22㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色砂質土の単一層である。周溝に囲まれた内部では大きく削平されていることもあってか、他の遺構は全く検出されなかった。

出土遺物（第245, 246図・図版67）　１は逆くの字形の口縁部を有する複合口縁壺である。底部はややレンズ状を意識した平底を呈する。頸部下方に一条の貼り付け突帯を巡らし、内外面にハケ調整を施す。東九州系であろうか。２は口縁部の短い直口壺で、内外面ともにハケを施す。３・８・11は大型の甕で、口縁部はくの字に屈曲し端部は外傾し面をなす。３・11は張りのある体部で、８は張りの弱い体部をもつ。３・８は頸部に貼り付け突帯が一条巡る。11は頸部下位に一条の貼り付け突帯を、腹部には刻み目を施した二条の貼り付け突帯を巡らす。ともに内外面にハケ調整を施す。４は長脚の高杯脚部である。５は平底を呈する鉢で、口縁端部がやや尖り気味におさまる。６は手づくねの鉢で椀状を呈する。７は棒状土製品で用途不明。９・10は甕の底部で、９は凸レンズ状であるが平底の名残

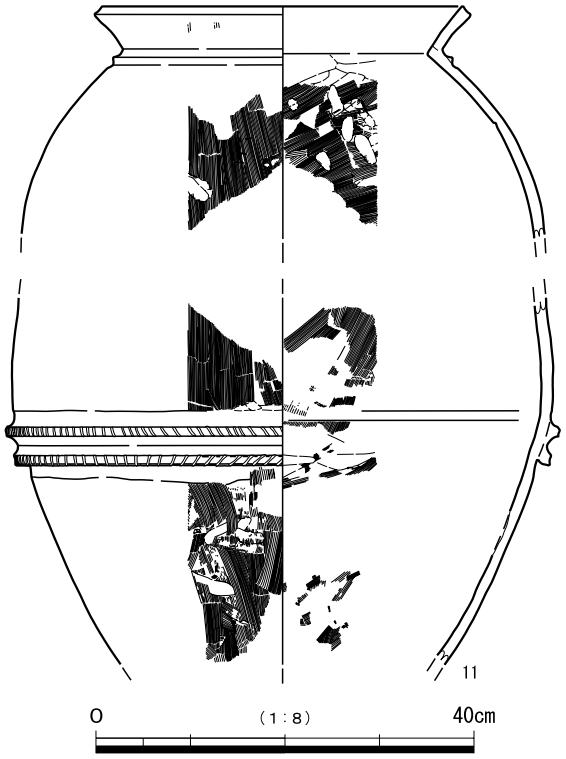


第244図 円形周溝14-S1505 平面・断面図



第245図 円形周溝14-S1505 出土遺物実測図①

がある。内外面はハケ調整を施す。10は凸レンズ状を呈する。



第246図 円形周溝14-S1505 出土遺物実測図②

方形周溝14-S1510（第247図・図版29-1）

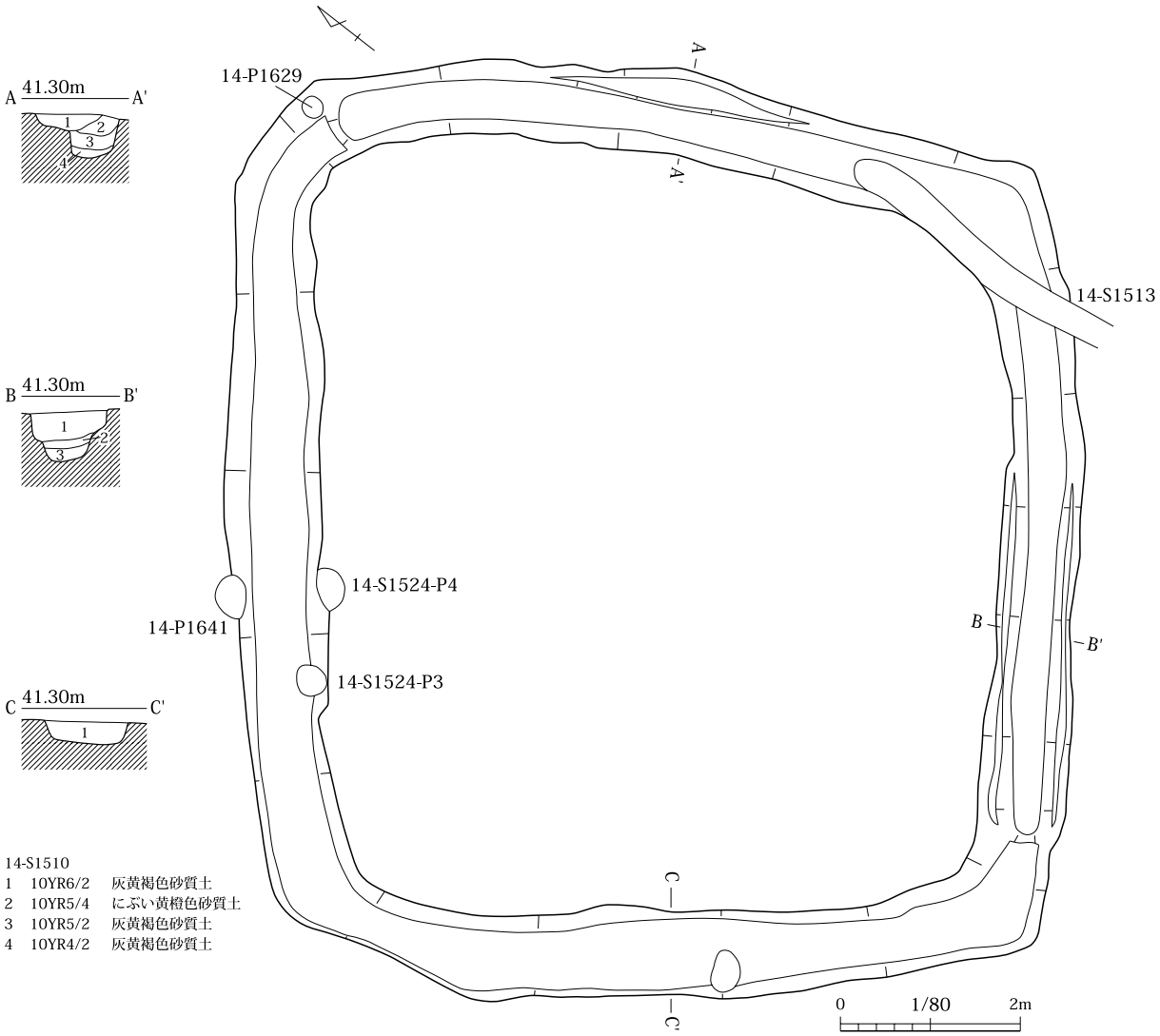
14グリッド６Ｃ・７Ｃ～６Ｄ・７Ｄ地区にかけて検出した方形周溝遺構である。住居14-S1509・14-S1524・14-S1511、大型建物５等と重複するが、S1524を切り、他の遺構たちには切られる。規模は10.4～9.62ｍの正方形に近い方形プランで、周溝の幅は0.66～1.12ｍ、深さは検出面から41～59㎝を測る。周溝の底面レベルが、東側40.60ｍに対して西側は40.85ｍと、東側の方に向けてやや深い形状をしている。土層断面から、東辺と南辺については掘り直していると考えられる。周溝内部には土坑、ピット等が存在するが、この周溝に伴うものかどうかは判断できない。

出土遺物（第248図）　１は口縁部がわずかに外傾する鉢で、内外面にハケを施す。２・３は中型の甕で、口縁部はくの字状に屈折する。内外面ともにハケを施す。２の底部はやや凸レンズ状を呈し、体部へやや外弯し外方へ大きく開く。３は凸レンズ状に近い平底を呈し、体部へやや外弯し外方へ大きく開く。４・５は甕の底部で凸レンズ状を呈し、体部へ直線的に外斜上方に立ち上がる。６はジョッキ形の把手で、ハケ調整を施す。

方形周溝20-S0001（第249図・図版35-1）

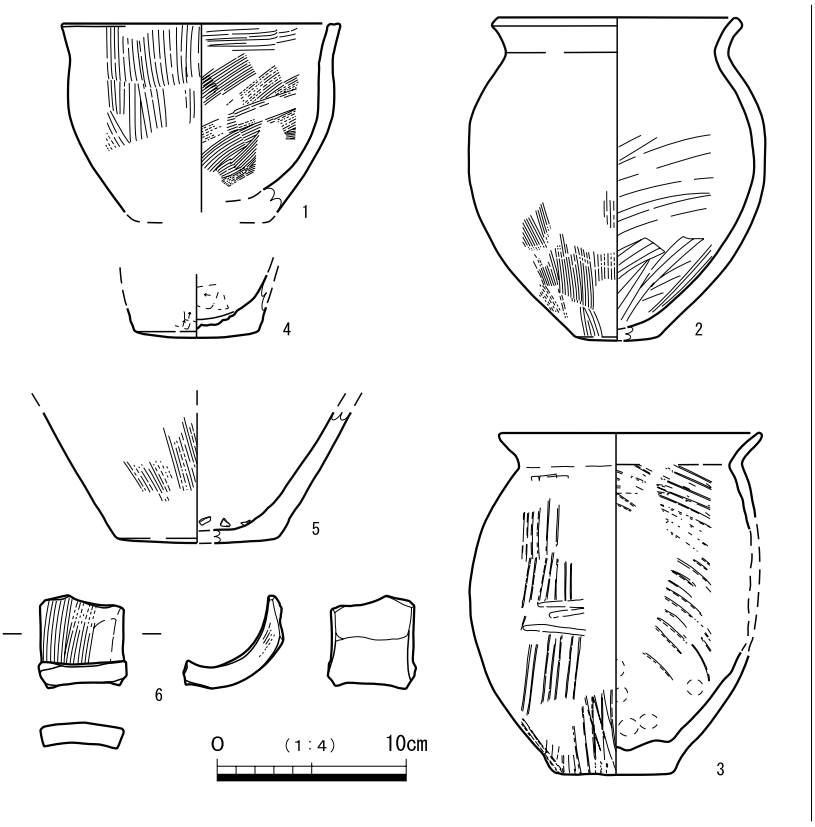
15グリッド３Ｊ・４Ｊ～20グリッド３Ａ・４Ａ地区にかけて検出した方形周溝状遺構である。住居20-S2002と重複するが、それを切っている。周溝は南へ下る斜面に立地し、北西、北東の２辺のみでL字形に確認した。南側は調査区外にのびるため全形は不明であるが、長辺6.5ｍ以上、短辺4.4ｍ以上を測る隅丸方形と想定される。溝は幅0.44ｍ～0.74ｍ、検出面からの深さは28～58㎝を測り、北西隅から南東へ深くなっている。溝内からは多量の土器が出土しているが、いずれも底面から多少浮いている。特に北西溝に集中しており、完形の個体も多い。丸底の小椀を２～３個入れ子にした壺もしくは甕が数個体出土している。一方で北東溝では小破片が数出土したのみであり、両溝で出土状況に違いが認められることから、北西溝の土器群は特定な目的によりなされた行為と推定される。

出土遺物（第251・252図・図版68～70）　１は複合口縁壺で、口縁部が直立する。山陰系であろう。２～４は短頸壺で、２は口縁部がやや内傾し、最大径が上方に位置する。３は扁平な体部を呈し、内外面にヘラミガキを施す。４は球形の体部で、外面体部上位にハケを、下位にヘラケズリを施す。５～12は鉢で底部が平たいもの（６・７）、丸いもの（５・９～12）、やや尖り気味なもの（８）に分類できる。５・６は手づくねでともに外面に黒斑を有する。８～12は内面にハケ調整を施す。13はさじ型土製品である。19・25・～27が大型、14・18・24が中型、15～17・20～23が小型の甕で、14・15・17～19・21～23・25～27は卵形の体部を呈し、16・24は張りの弱い体部をもつ。15は小さな平底、

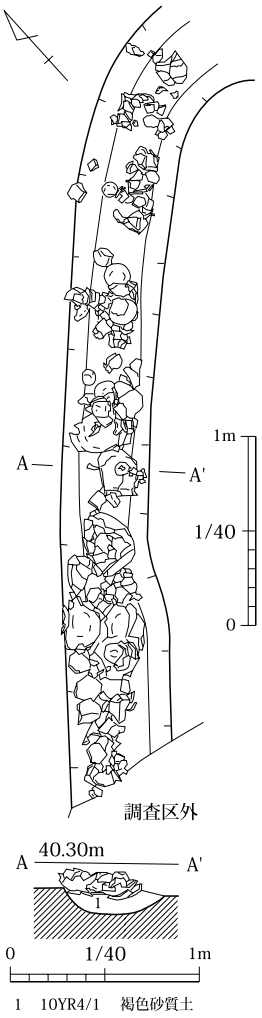


第247図 方形周溝14-S1510 平面・断面図

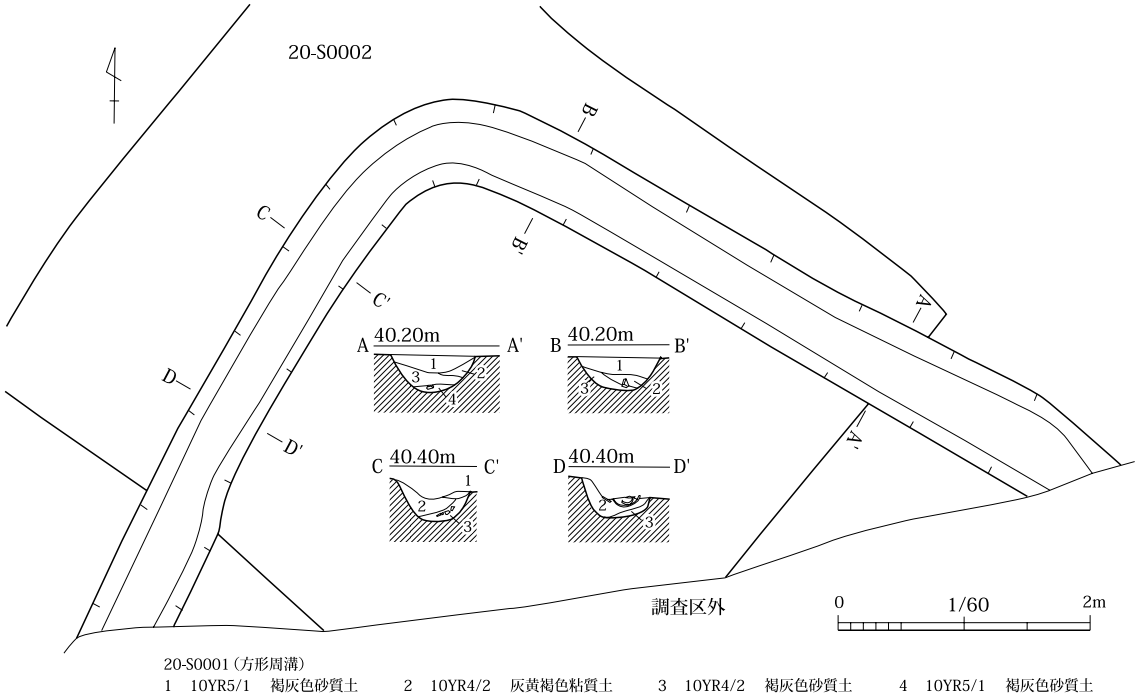
21・26は凸レンズ状、17・22・23・25はやや尖り気味の丸底、14・16・18・19は丸底を有する。19は口縁部から体部中位にかけてタタキを施し、以下はヘラナデを行う。外面タタキ部分に媒付着。20・22・23・26には頸部に断面三角形突帯をめぐらせる。甕の底部は小さな平底を残す凸レンズ状のものもあるが、尖り気味の丸底に外面下半をヘラケズリするものが顕著である。26の大型甕には凸レンズ状底部が残る。



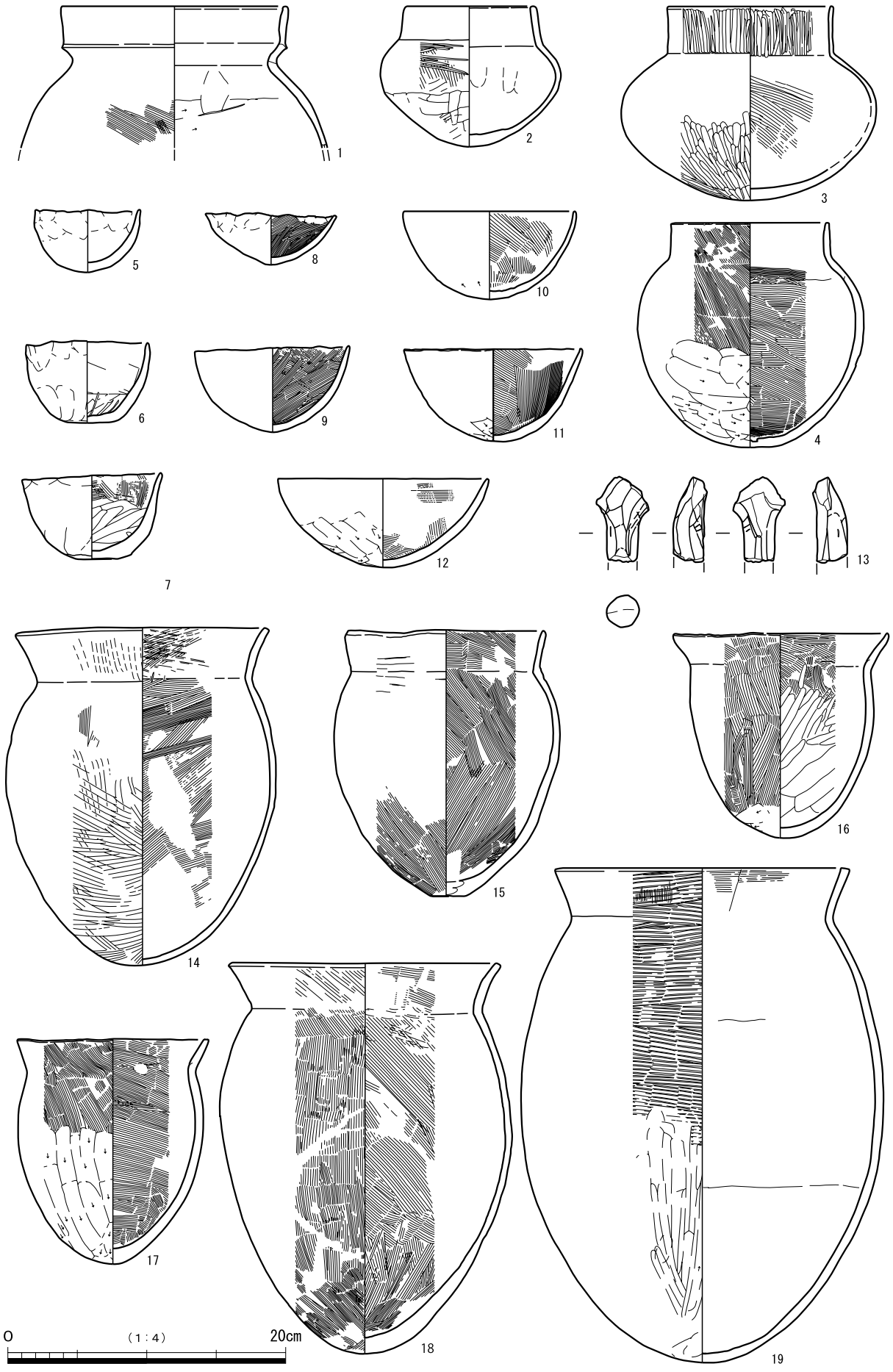
第248図 方形周溝14-S1510 出土遺物実測図



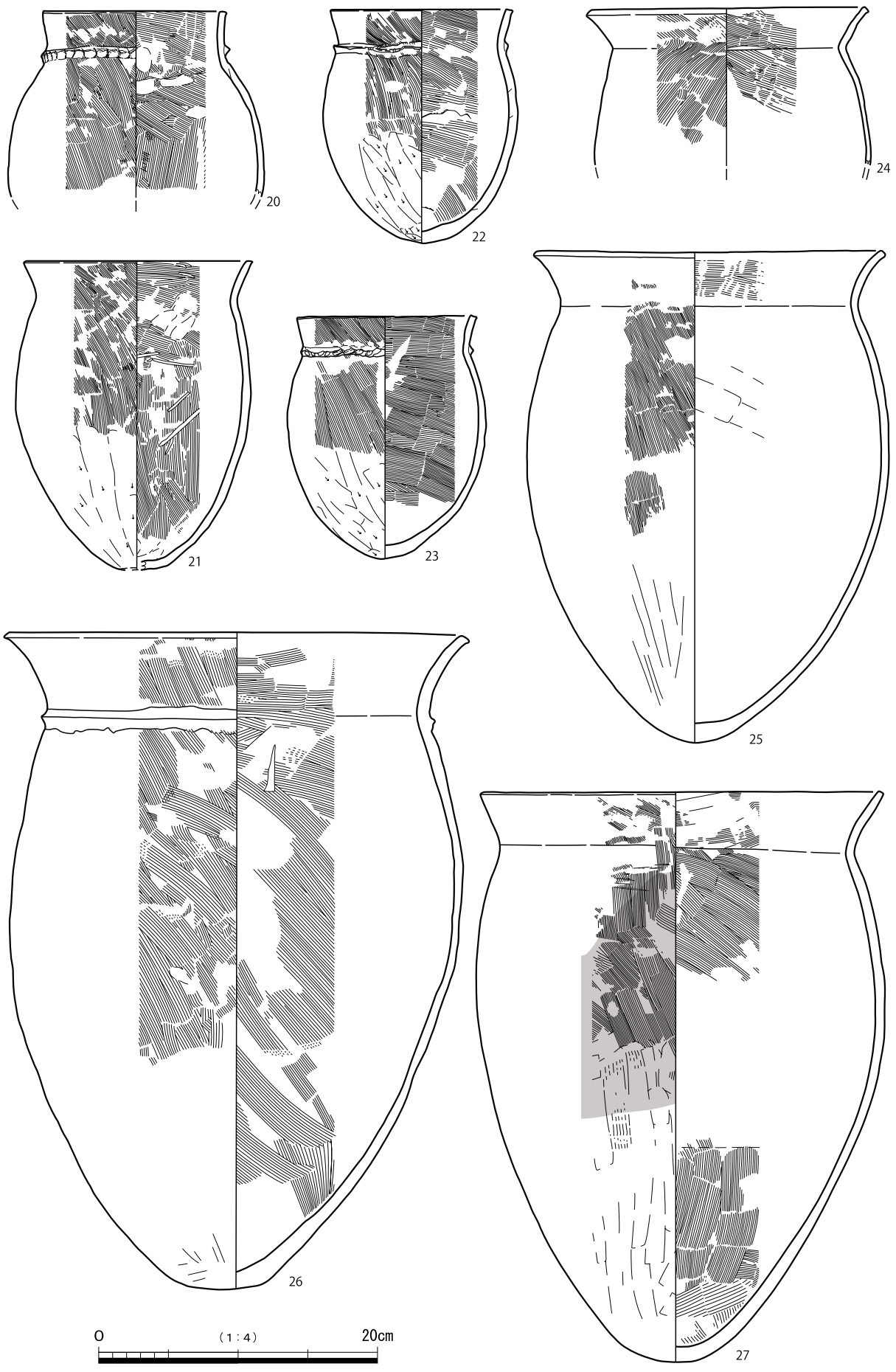
第250図 方形周溝20-S0001
遺物出土状態図



第249図 方形周溝20-S0001 平面・断面図

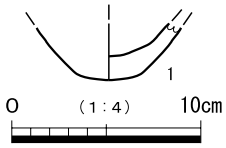


第251図 方形周溝20-S0001 出土遺物実測図①



第252図 方形周溝20-S0001 出土遺物実測図②

第253図 溝9-S0006・10-S0006・S0007 出土遺物実測図



第254図 溝14-S0011 出土遺物実測図

5　溝

溝9-S0006（第84図）

9グリッド６Ｄ～10-1Bにおいて検出した小溝である。5-S0001に併走するように北東方向へ流れる小溝であり、９-9Bにおいて二股に分岐する。分岐点における土層観察では、切り合いは認められず、両者は共存していたと考えられる。

現存状況は悪く、ところどころ途切れており、深さは最も深い中央部付近で約9㎝程度である。分岐点までの検出長は15.6mで、北側はそこから3.7m、南側は8.5m検出した。なお、南西端は5-S0001に切られている。

出土遺物（第253図１）　壺の底部である。凸レンズ状であるが、まだ平底の意識が残る。

溝9-S0526（第84図）

9グリッド4G～5F地区、区画溝9-S0016の内部で検出した小溝である。検出長約9.6m、幅約0.65m、深さ約15㎝を測る。南西端は9-S0016によって切られ、北東端は緩やかに徐々に深さを減じて終焉する。埋土はベースの黄橙色砂質土ブロックと粗砂を少量含む褐灰色粘砂土の単層で、出土遺物は弥生土器と考えられる土器片が数点出土したのみであった。

溝9-S0527（第84図）

9グリッド4G地区において、溝9-S0526の北側で検出した小溝である。検出長は3.4mを測り、北東端は区画溝9-S0016によって切られている。土坑状に大きく広がる部分も有する不整形な遺構であり、深さも約12㎝程度と浅い。南西に行くほど深さと幅が小さくなり消滅する。埋土は褐灰色粘砂土の単層で、出土遺物は弥生土器と考えられる土器片が数点出土している。

溝10-S0006・10-S0007（第84図）

９グリッド10D～10グリッド１Ｄ地区にかけて検出した小溝である。東西方向の浅い溝状の遺構で、本来は10-S0006と10-S0007は一連のものであると考えられる。10-S0006は複雑な様相を呈しており、２条が重なるか、もしくは切りなおしている可能性も考えられたが、埋土に切り合いは見られなかった。一方10-S0007の10-2D以東は直線状の溝で、これらが10-4D付近で収斂されるものと思われる。検出長は約16m、幅は10-S0006が0.62m、10-S0007で約0.44ｍを測り、深さは５㎝程度である。

出土遺物（第253図２）　これは鉢の上半部である。丸い体部から頸部は外折し、口縁部は大きく外反する。炭素を吸着させて黒ずんでいると考えられる外面は、口縁部に横ハケ後横ナデを施し、体部

にはヨコ方向の板ナデ調整がなされており、弱い光沢を放っている。内面の調整は、ナデで平滑に仕上げている。一見、半島系土器かとも見られたが、内面の様相と胎土には長石・石英が多く含まれ、微量ながらも角閃石や金雲母を含むことから在地産と判断される。

溝14-S0011（第257図）

14グリッド５Ｇ～６Ｈ地区において検出した溝である。住居14-S0012や土坑14-S0010、大型掘立柱建物らと重複するが、この溝は大型掘立柱建物より新しく、その他の遺構より古い。南西端は検出されたが、北東端は撹乱等による削平を受けて消滅していた。検出された総延長は約8.1ｍである。走行方向はN-28°-Eで、環濠とほぼ一致している。断面形は逆台形に近く、深さは最深部で0.25ｍを測る。埋土は単一層で、調査時の所見では自然埋没と思われた。埋土から弥生土器破片が少量出土した。

出土遺物（第254図）　甕の底部破片である。ヘラケズリで底部を整形し、凸レンズ状を呈する。また、布留系甕の口縁部破片も出土している。

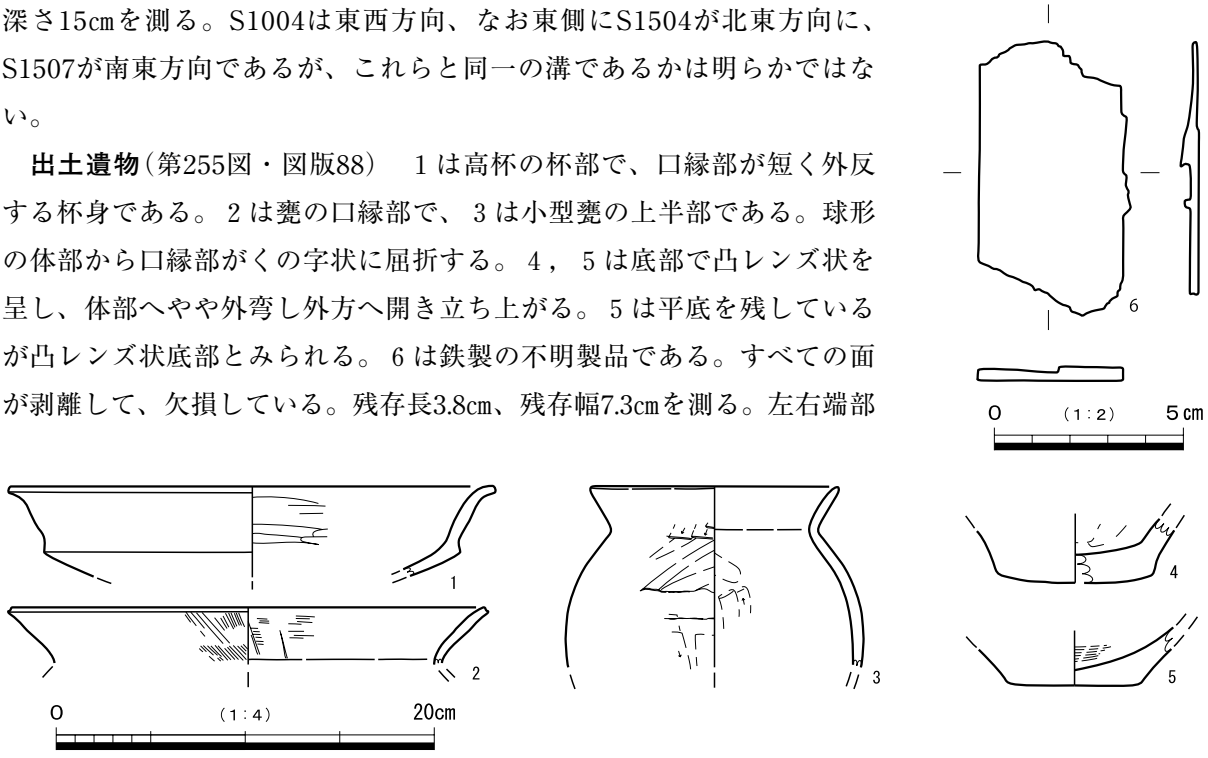
溝14-S0042（第257図）

13グリッド10Ｉ～14グリッド１Ｉ地区にかけて検出した溝である。土坑14-S0031のほかピット複数と重複する。重複部で非常に浅かったため明確ではないが、本遺構は14-S0031より古いと推定される。検出された総延長は約4.2m、走行はほぼ直線で方向はN-30°-Eである。環濠の走行とほぼ一致する。断面は浅い半円形で、深さは５～７㎝である。埋土は単一層でおそらく自然埋没。埋土から弥生土器小破片がごく少量出土した。

溝14-S1004（第257図）

14－５B～８B,９A～10A地区にかけて検出した小溝である。幅50㎝、深さ15㎝を測る。S1004は東西方向、なお東側にS1504が北東方向に、S1507が南東方向であるが、これらと同一の溝であるかは明らかではない。

出土遺物（第255図・図版88）　１は高杯の杯部で、口縁部が短く外反する杯身である。２は甕の口縁部で、３は小型甕の上半部である。球形の体部から口縁部がくの字状に屈折する。４，５は底部で凸レンズ状を呈し、体部へやや外弯し外方へ開き立ち上がる。５は平底を残しているが凸レンズ状底部とみられる。６は鉄製の不明製品である。すべての面が剥離して、欠損している。残存長3.8㎝、残存幅7.3㎝を測る。左右端部



第255図 溝14-S1004 出土遺物実測図

が平行することから、本来の形状をある程度留めていると想定される。その場合、この破片は板状鉄斧である可能性が考えられる。

溝14-S1011（第258図）

13グリッド９Ｈから14グリッド１Ｄ地区にかけて検出した連続する小溝である（13-S0003・S0005・S0007）。環濠9-S0017の西側で大型掘立柱建物２の西側桁行きを縦断しながら環濠と部分的に並行しながら最後は交わり環濠に切られる。大型掘立柱建物２より新しく、環濠より古いものである。溝は幅0.50～0.70ｍ、深さ30㎝を測る。

出土遺物（第258図）　土器と鉄器が出土している。１、２は在地のやや大型と中型甕で、口縁端部は面を有している。内外面ともにハケを施す。３は甕の底部で平底を有している。４は鉄製の不明製品である。上端を欠損する。残存長4.1㎝、幅４㎜、厚さ２～４㎜である。棒状であり、断面は方形になる。側面を観察すると、下端から上端に向かって徐々に太くなることがわかる。

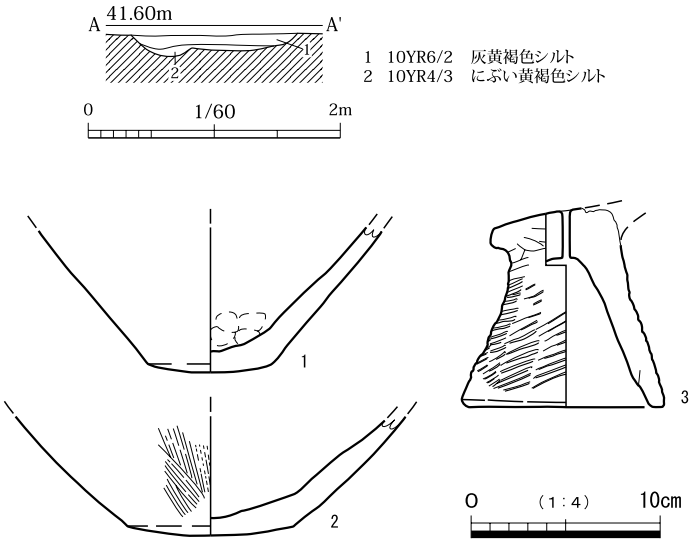
溝18-S0503（第256図）

18グリッド５Ｃ～６Ｄ地区にかけて検出した弥生時代終末の溝である。溝の北側は溝18-S502に切られている。平面形状は、南北方向に直線状に走っている。規模は検出長5.0ｍ、幅0.9ｍ、深さ15㎝を測る。溝の方位は、北から西へ30°振れる。埋土は褐灰色粘質シルトで埋められていた。土層は上層が灰黄褐色シルト層、下層はにぶい黄褐色細砂層である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第256図）　１は甕の、２は壺の底部である。どちらも凸レンズ状を呈し、体部へやや外弯し外斜上方へ大きく開く。３は沓形の土製支脚で受け部が斜めを呈し、中央に円孔を有する。外面はタタキを施す。

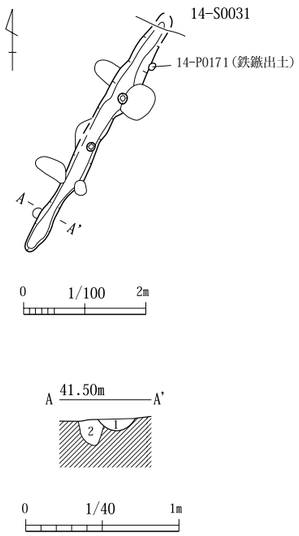
溝19-S0115（第310図）

19グリッド２Ｂ～４Ａ地区にかけて検出した溝である。19-S0008の南約2.1ｍに隣接する溝である。両端ともに良好に検出され、構築時の状態をとどめている。明らかに区画を目的とした溝であり、位置や主軸・走行方位の近似性から19-S0008とほぼ同時期に構築されたものと推定される。総延長約10.7ｍ、幅0.6～0.7ｍを測る。走行方位はN-50°-Eで19-S0008と平行する。断面はU字形で、深さ0.2～0.25ｍを測る。埋土は自然埋没を示し、滞水していた痕跡はない。埋土から弥生土器破片が少量出土したが図示できるようなものはなかった。本跡の構築時期は先述のように19-S0008と密接に関わると考えているので、同時期とみている。



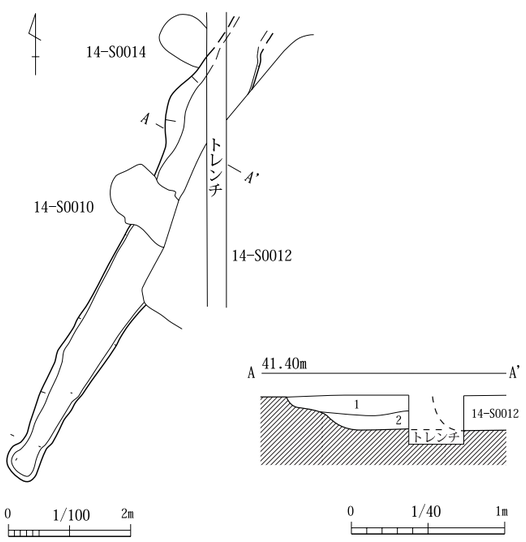
第256図 溝18-S0503 断面図、出土遺物実測図

14-S0042



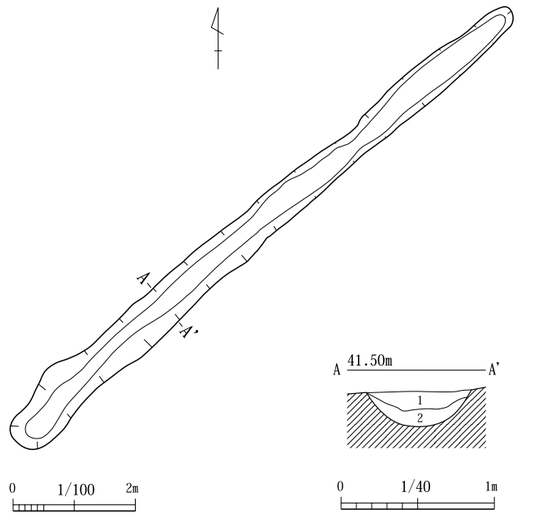
1　10YR4/3　にぶい黄橙色シルト
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト

14-S0011

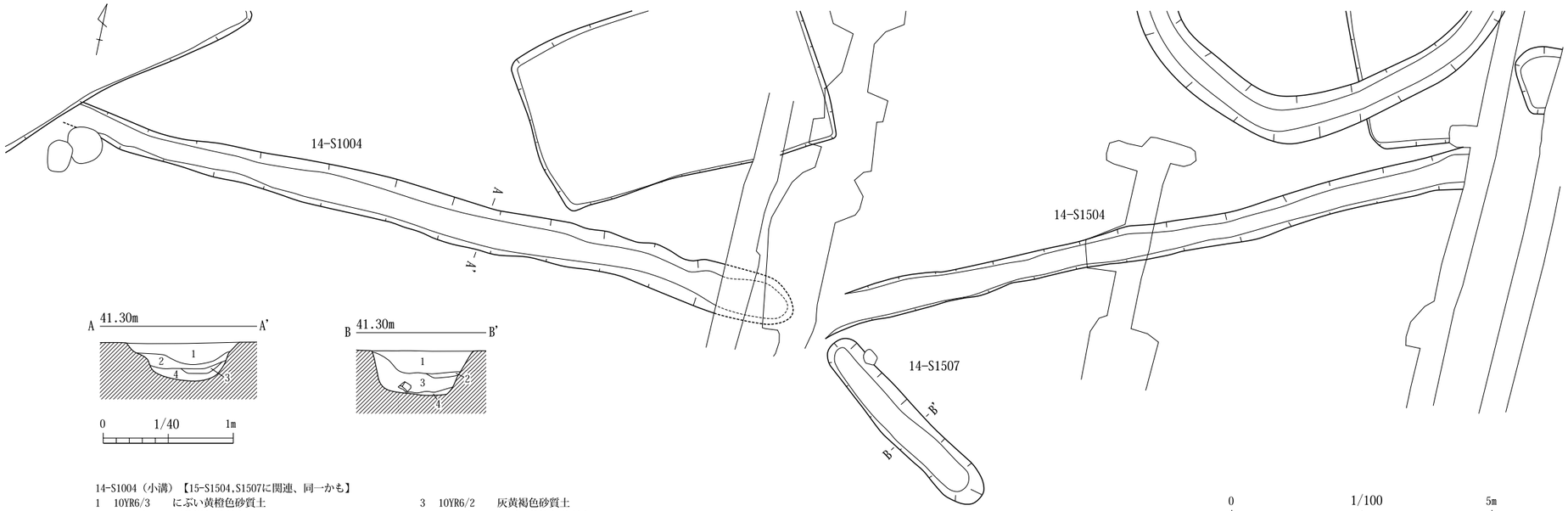


1　10YR4/3　にぶい黄橙色シルト
2　2.5YR4/2　暗灰黄褐色シルト

19-S0115

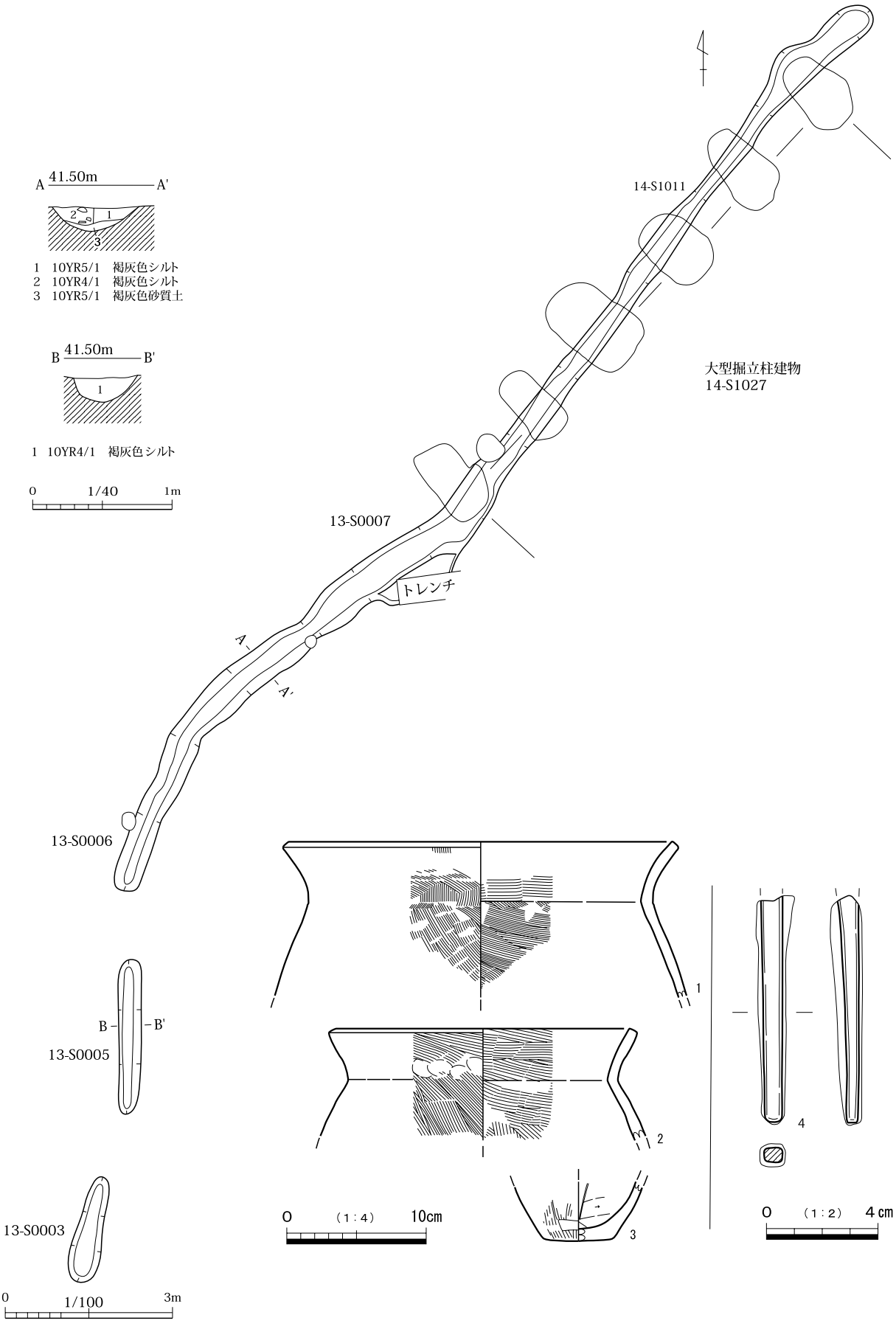


1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト



14-S1004（小溝）【15-S1504,S1507に関連、同一かも】
1　10YR6/3　にぶい黄橙色砂質土
2　10YR6/6　明黄褐色砂質土
3　10YR6/2　灰黄褐色砂質土
4　10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土

第257図 各溝 平面・断面図



第258図 溝14-S1011 平面・断面図、出土遺物実測図

６　環濠・区画溝

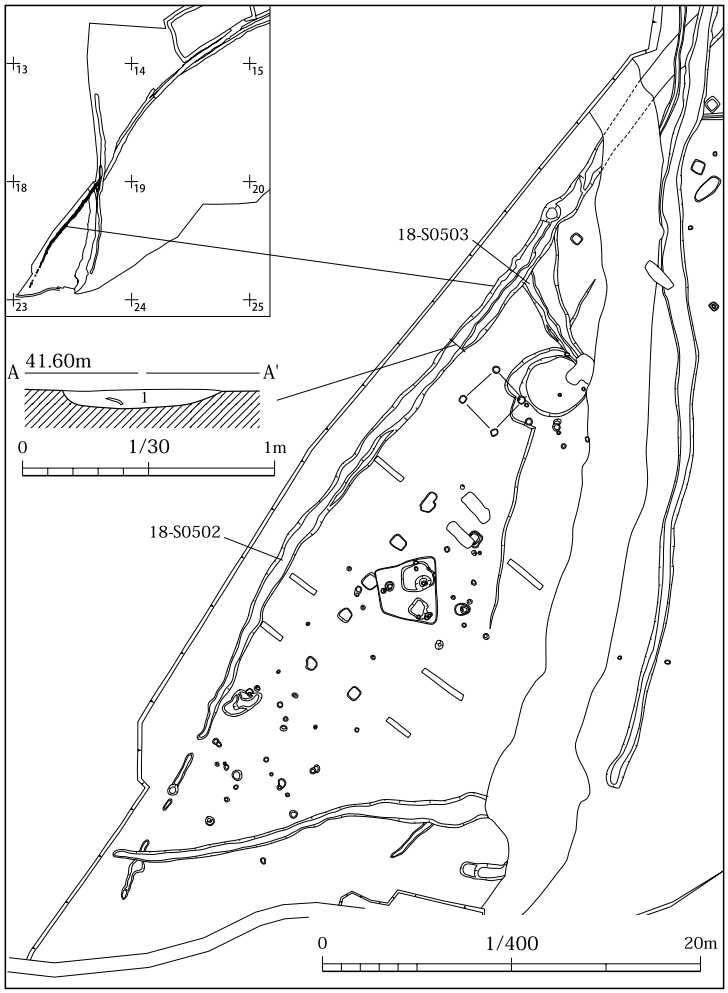
環濠14-S1007、9-S0017、13-S0002（第261図・図版９）

ＢⅡ地区の北東部10－５Ｅ～５Ｆ地区から18－２Ｊ地区にかけて半月状に弧状を描く３条の重複する環濠を検出した。その総長はＢⅡ地区のみで約160ｍ、ＢⅠ地区までも含めれば約200ｍである。遺跡は南西から北東方向に派生する舌状台地の先端部に位置し、検出した環濠はその舌状台地を囲むように配置されたと推定されるが、今回検出したのは北側部分のみである。南側は調査区外の台地斜面途中に存在するものと考えられる。流れも地形に沿って南西から北東方向である。

環濠は大型建物１・２と住居14-S1012などと重複しているが、それらとの切り合い結果から環濠が最も新しいものであることが判明している（第261図F、図版28-2）。

最も古い14-S1007は14－３Ｃ地区、大型建物１・２に隣接する北東側から開削され、底面幅約１ｍ、検出上面推定幅２ｍ強、深さ0.8ｍを測り、断面形状は逆台形を呈す。これに継続する南西域の溝は検出されていない。残存する深さも新しくなるにつけ、浅くなる。

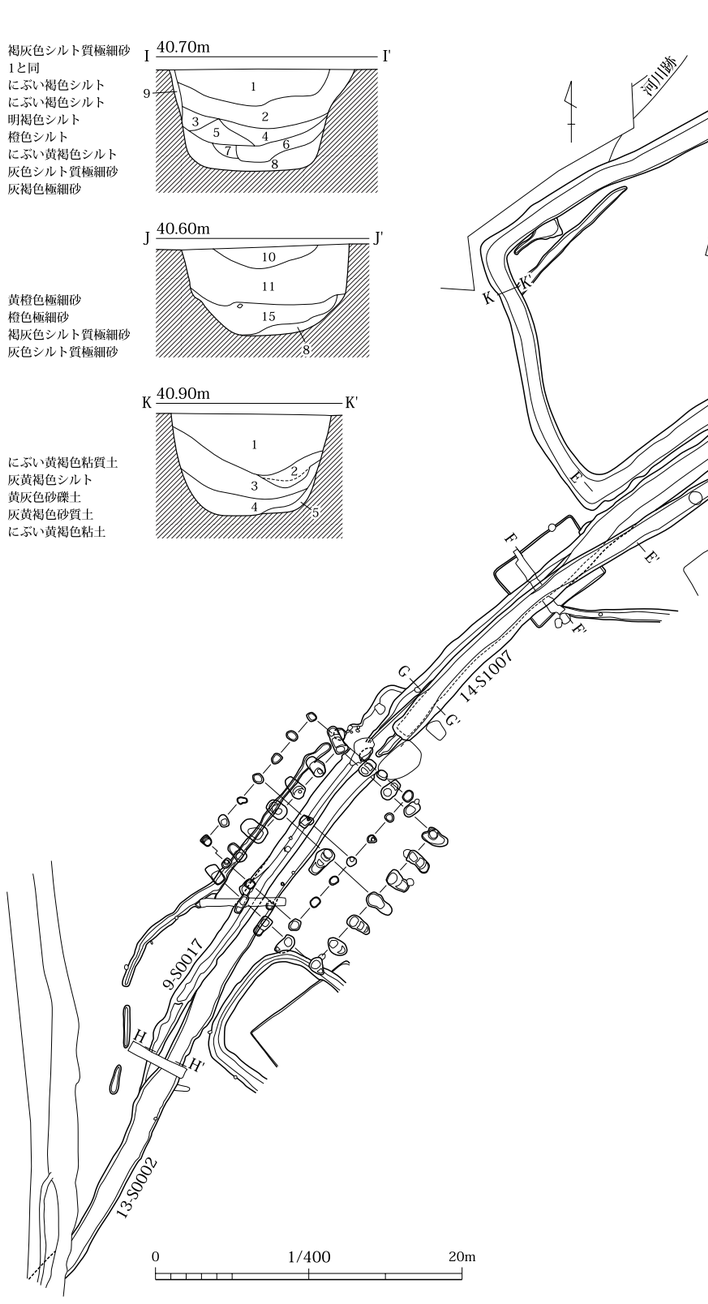
14-S1007に続く次の時期のものは、9-S0017である。この溝は大型掘立柱建物１・２内を縦断することから使用時には建物は廃絶している。溝の断面形状は緩いカーブのＵ字状を呈し、検出上面推定幅は1.2ｍ内外、深さ0.4～0.5ｍである。溝内より完形の大型壺と小型甕が出土している（第260図、第263図15、264図18）。最も新しい13-Ｓ0002は後世の大規模な削平を被り残存状況が非常に悪い。検出面での幅は2ｍ～1.7ｍ、深さは0.2ｍ～0.4ｍを測る。断面形状は緩いＵ字状を呈する。



第259図 環濠18-S0503 平面・断面図

第260図 環濠9-S0017遺物出土状態

環濠



環濠・区画溝

環濠A断面

1	10YR6/4	にぶい黄橙色粘質土	6	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土
2	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	7		6と同（縞状に堆積、粗砂含む）
3	10YR4/2	灰黄褐色砂質土			
4	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土	8	2.5Y5/2	暗灰黄褐色砂礫土
5	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土（地山？）	9	2.5Y4/2	暗灰黄褐色粘質土
			10	10YR4/2	灰黄褐色粘質土

環濠B断面

1	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	6	2.5YR5/2	暗灰黄色砂質土
2	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	7		1と同
3		2と同	8	2.5Y5/3	黄褐色粘質土
4		1と同	9	10YR4/2	灰黄褐色砂質土
5		1と同			

環濠C断面

1	2.5Y5/3	黄褐色粘質土	8	10YR4/2	灰黄褐色砂質土
2	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	9	7.5YR4/4	褐色粘質土
3	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	10		3と同
4	10YR5/2	灰黄褐色粘質土	11	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土
5		3と同	12	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土
6	10YR4/4	暗褐色粘質土	13	10YR3/3	暗褐色粘質土
7		3と同	14		3と同

環濠D断面

1	10YR4/2	灰黄褐色砂質土	9	10YR5/2	灰黄褐色粘質土
2	7.5YR3/3	暗褐色粘質土	10	7.5YR5/2	灰褐色粘質土
3	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土	11	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土
4	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	12	10YR5/2	灰黄褐色砂質土
5	7.5YR4/3	褐色粘質土	13	2.5Y4/2	暗灰黄色砂礫土
6	2.5Y4/2	暗灰黄色砂礫土	14	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
7		1と同	15	10YR4/4	褐色粘質土
8	2.5Y6/2	灰黄色粘質土			

環濠E断面

1	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土	9		5と同
2	2.5Y4/2	暗灰黄色砂礫土	10	2.5Y5/3	黄褐色粘質土
3	2.5Y3/2	黒褐色砂質土	11	10YR5/3	黄褐色粘質土
4	10YR4/2	灰黄褐色砂質土	12	7.5YR4/3	褐色粘質土
5	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	13	10YR4/2	灰黄褐色砂礫土
6		5と同	14		5と同
7		5と同	15		12と同
8	10YR4/4	褐色粘質土			

環濠F断面

1	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土	6	7.5YR4/2	灰褐色粘質土
2	10YR4/2	灰黄褐色砂質土	7	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
3	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土	8	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土
4		3と同	9	10YR4/2	灰黄褐色砂礫土
5		2と同	10		2と同

環濠G断面

1	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	7	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土
2		1と同	8		6と同
3	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	9	10YR4/4	褐色粘質土
4		3と同	10		7と同
5		3と同	11	10YR5/2	灰黄褐色粘質土
6	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土			

環濠H断面

1	10YR4/2	灰黄褐色砂質シルト
2	10YR4/1	褐灰色砂質シルト

環濠I断面

1	10YR5/1	褐灰色シルト質極細砂
2		1と同
3	7.5YR5/3	にぶい褐色シルト
4	7.5YR5/4	にぶい褐色シルト
5	5YR5/8	明褐色シルト
6	7.5YR6/6	橙色シルト
7	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト
8	5Y6/1	灰色シルト質極細砂
9	7.5YR4/2	灰褐色極細砂

環濠J断面

1	10YR8/6	黄橙色極細砂
2	7.5YR6/6	橙色極細砂
3	7.5YR5/1	褐灰色シルト質極細砂
4	5Y6/1	灰色シルト質極細砂

環濠K断面

1	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土
2	10YR5/2	灰黄褐色シルト
3	2.5Y4/1	黄灰色砂礫土
4	10YR4/2	灰黄褐色砂質土
5	10YR4/3	にぶい黄褐色粘土

第261図 環濠・区画溝 平面・断面図

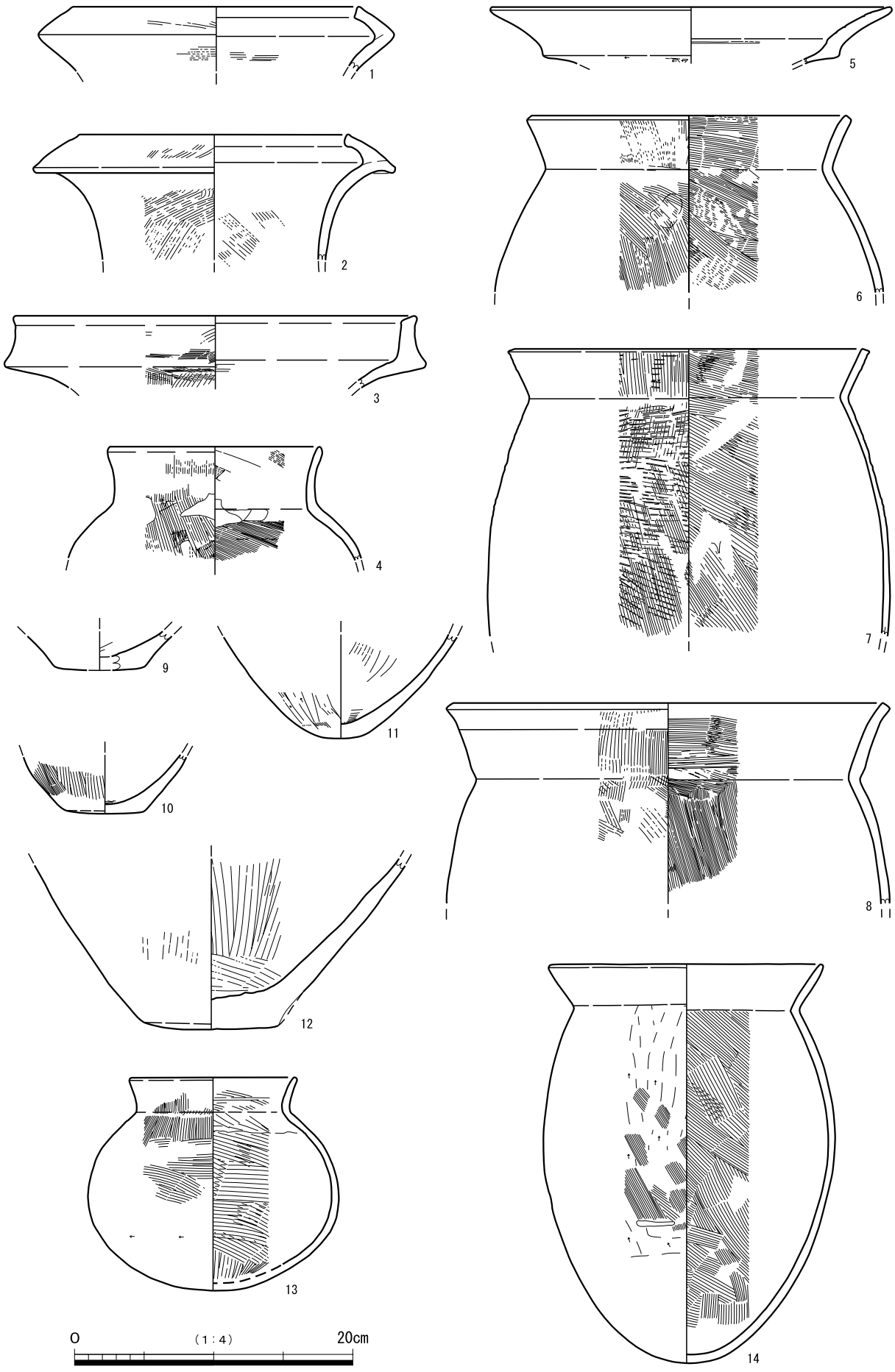
18-S0502（第259図）も13-S0002に連続する環濠である。18-1H～６Ｂの調査区にて検出したが、後世の削平を多く受け、南方に進むに連れ浅くなり消滅する。この調査区の北側にて溝18-S503を切っている。平面形状は、北東から南西方向に直線状に走る。規模は検出長43m、幅1.2m、深さ10㎝を測る。溝埋土は褐灰色粘質シルトで埋められていた。土層では単一層である。

出土遺物（第262～268図）　環濠は上述したように最低三時期にわたり重複している。したがって、個々の環濠出土で取り上げた遺物にも、明らかに他の環濠時期や他の古い遺構の混入品も含まれるが、ここでは包含して掲載する。

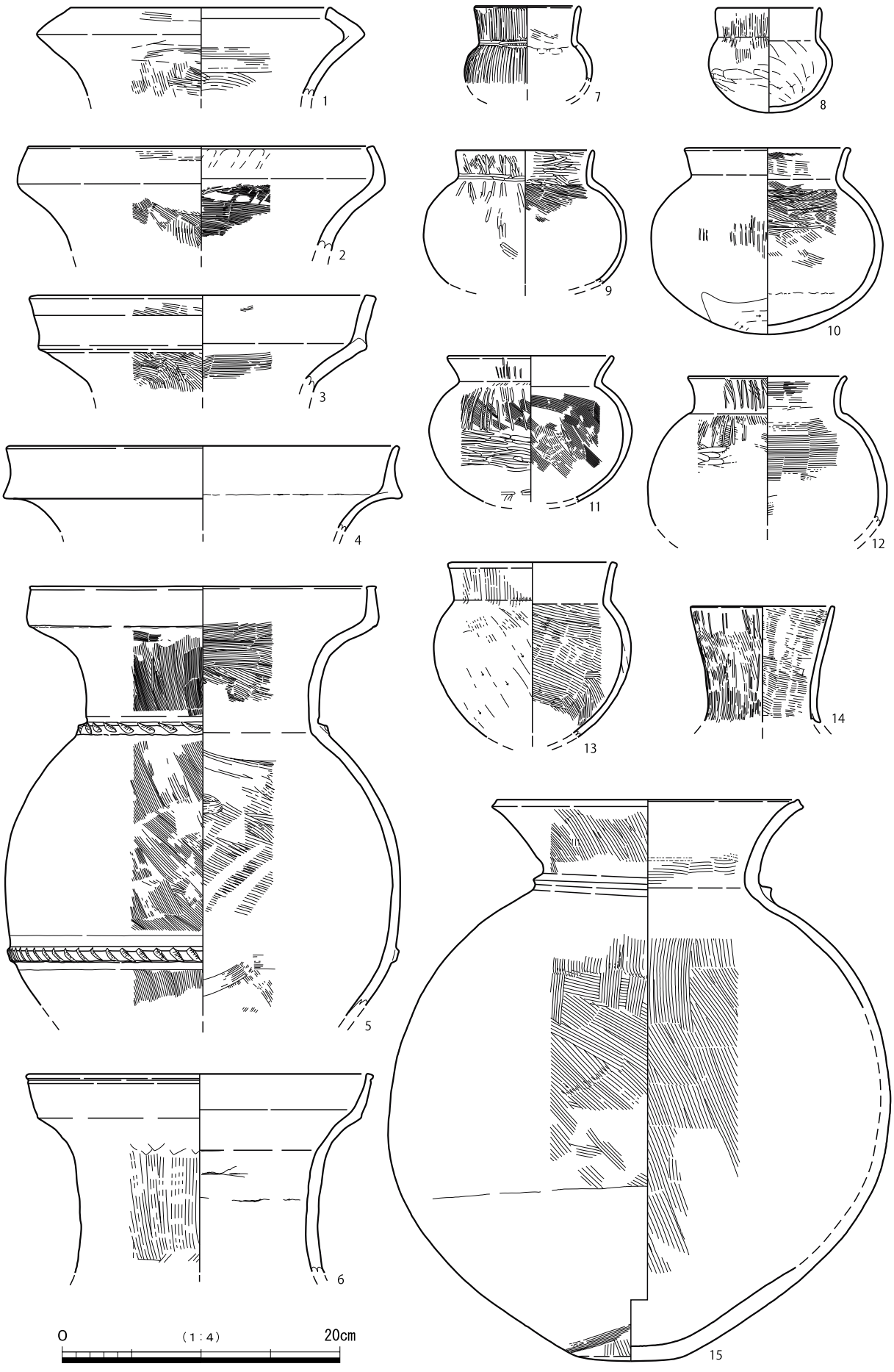
14-S1007（第262図・図版73）　１～３は複合口縁壺で、１～２は口縁部が強く内傾する逆くの字状口縁を呈する。３は口縁部が短く立ち上がり、端部上面は内傾する。いずれもハケ調整を施す。４は短頸壺である。内外面にハケ調整が施されている。５は高杯の杯部である。口縁部はやや浅く外反する。６～８・14は在地系の甕である。６～８は口縁部端部が外傾し面をなすが、14は丸くおさまる。６・８は内外面共にハケ調整が施される。７は外面整形としてタタキが顕著で、ハケによる二次調整を受ける。14は長胴の体部から口縁部がくの字状に屈曲する。外面はハケ及びヘラケズリ、内面はハケ調整を施す。８は体部が長胴で頸部の屈曲が弱く緩やかに外方する口縁部を有する。内外面はハケ調整である９～11は甕の底部である。９は平底を残す凸レンズ状底部で、体部へやや外弯し外方に開き立ち上がる。10は凸レンズ状呈し、体部へ直線的に外方に大きく開き立ち上がる。11は平底がやや残るが丸底を呈し、体部へ内弯気味に外方に開き立ち上がる。型式的には９～11の順に推移する。12は壺底部である。底部は凸レンズ状を呈し、体部へ直線的に外方に大きく開き立ち上がる。13は短頸壺である。底部は丸底で、扁球形の体部から口縁部は外傾し短部は丸くおさめる。新しい様相を示している。13・14は他の溝からの混入品と考えられる。

9-S0017（第263, 264図・図版73, 74）　１～６は複合口縁壺である。１は口縁部が逆くの字状を呈する。内外面ハケ調整。２は１と比べ口縁部が立ち上り内弯気味になる。３は外反する口縁部である。外面に赤色顔料が塗布がみられる。４は復元口径約28㎝を測るやや大型の壺である。摩滅のため内外面共に調整は不明瞭である。５は球形の体部から頸部が直立し立ち上がり、上端でなめらかに外反し口縁部は直口する。頸部と胴部に貼り付け突帯をめぐらせ、頂部にハケ工具による刻目を施す。内外面ともハケを施す。６は直立する頸部より上端で緩く曲り、口縁部はやや外傾し、端部は下方に棒状工具による沈線を一条めぐらす。７～８は小型壺で、口縁部が直口する。新しい様相を示す精製品である。７は外面密にヘラミガキを施こす。９～13は短頸壺で、９～12はやや扁平球な体部を呈すし外面ヘラミガキ調整を施す。９は口縁部が直立、10・13は外傾、11はくの字状、12は直立し上端で外反する。13は最大径がやや上方にある体部を有し、口縁部は直線的に開き端部を下方にわずかに拡張させる。外面体部～底部はヘラケズリが顕著である。内面はハケ調整が施される。14は直口壺で、口縁部は直線的に上外方へ開く。15は広口壺の完形品である。体部最大径を中位にもつ球形状の体部から口縁部は外反し、端部は上方に小さくつまみあげる。頸部は断面三角形の貼り付け突帯をめぐらす。底部は凸レンズ状を呈す。

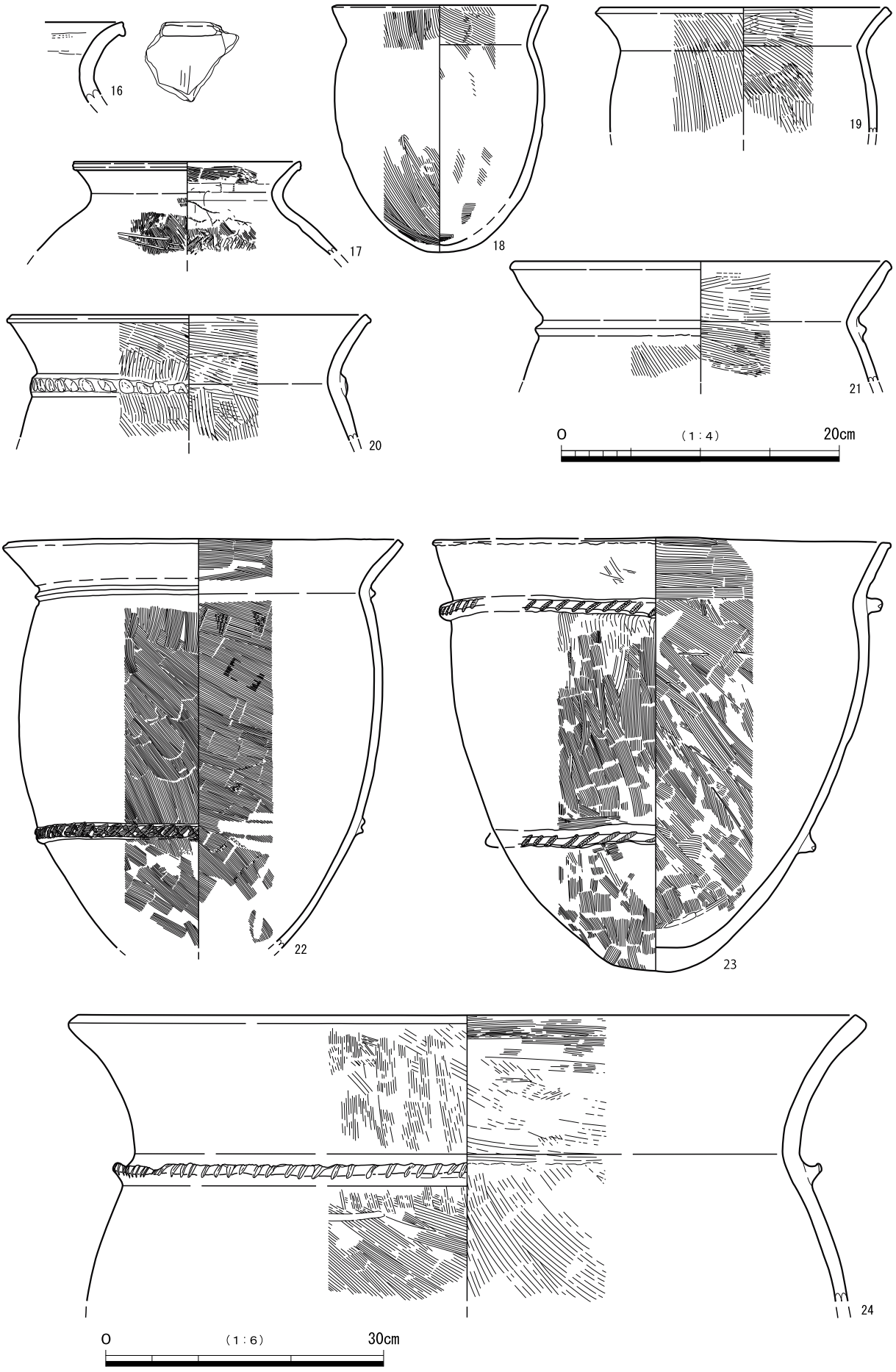
264図16は壺の口縁部で口縁部は緩やかに外反し、端部は下方に拡張する。外面調整に縦ハケが施される。焼成は良好で硬質感があり、色調は内外面とも赤色を呈する。この時期の在地形土器にはみられない口縁部の形態を示していることから半島からの搬入品であろうか。17は壺である。張りの強



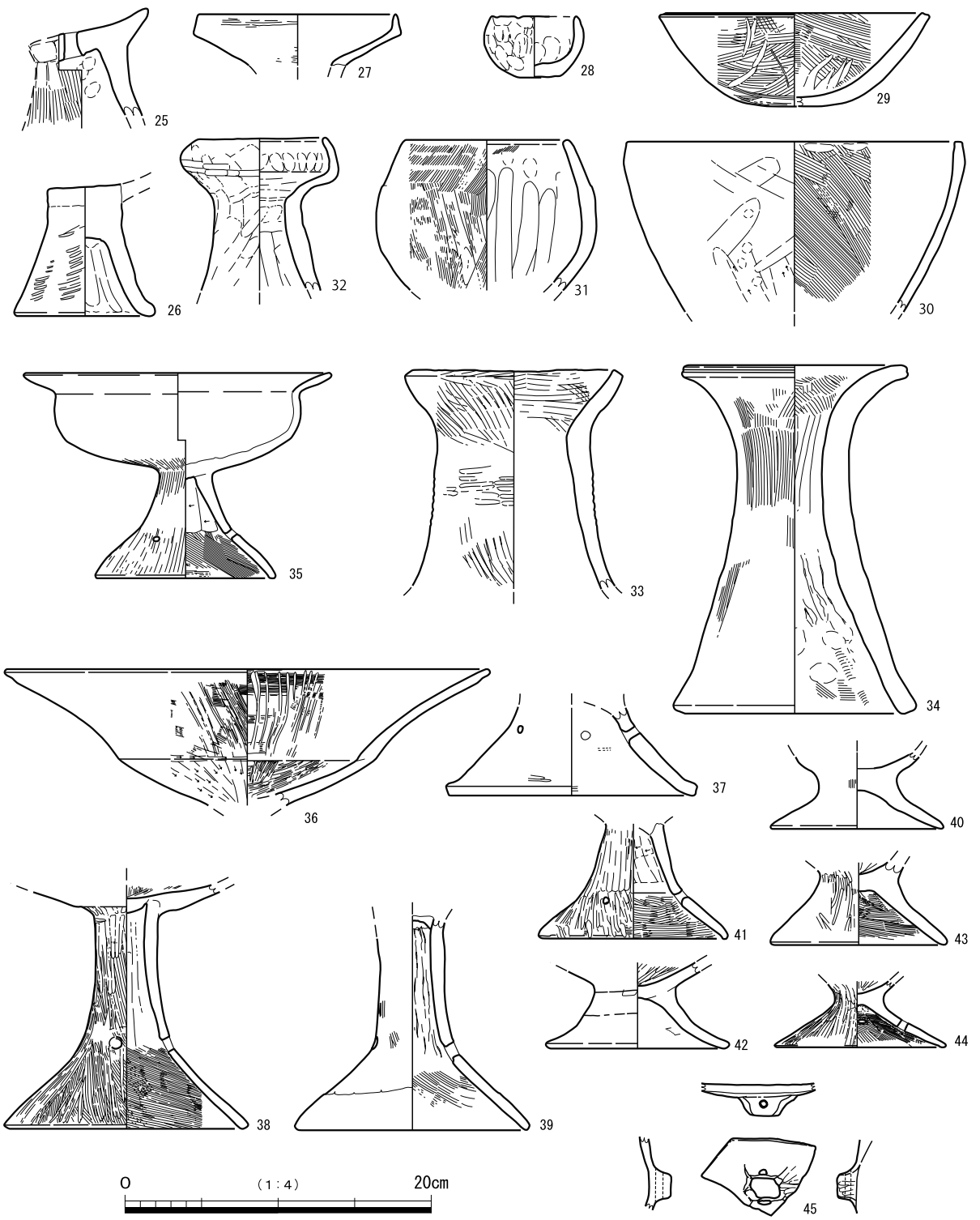
第262図 環濠14-S1007 出土遺物実測図



第263図 環濠9-S0017 出土遺物実測図①



第264図 環濠9-S0017 出土遺物実測図②



第265図 環濠9-S0017 出土遺物実測図③

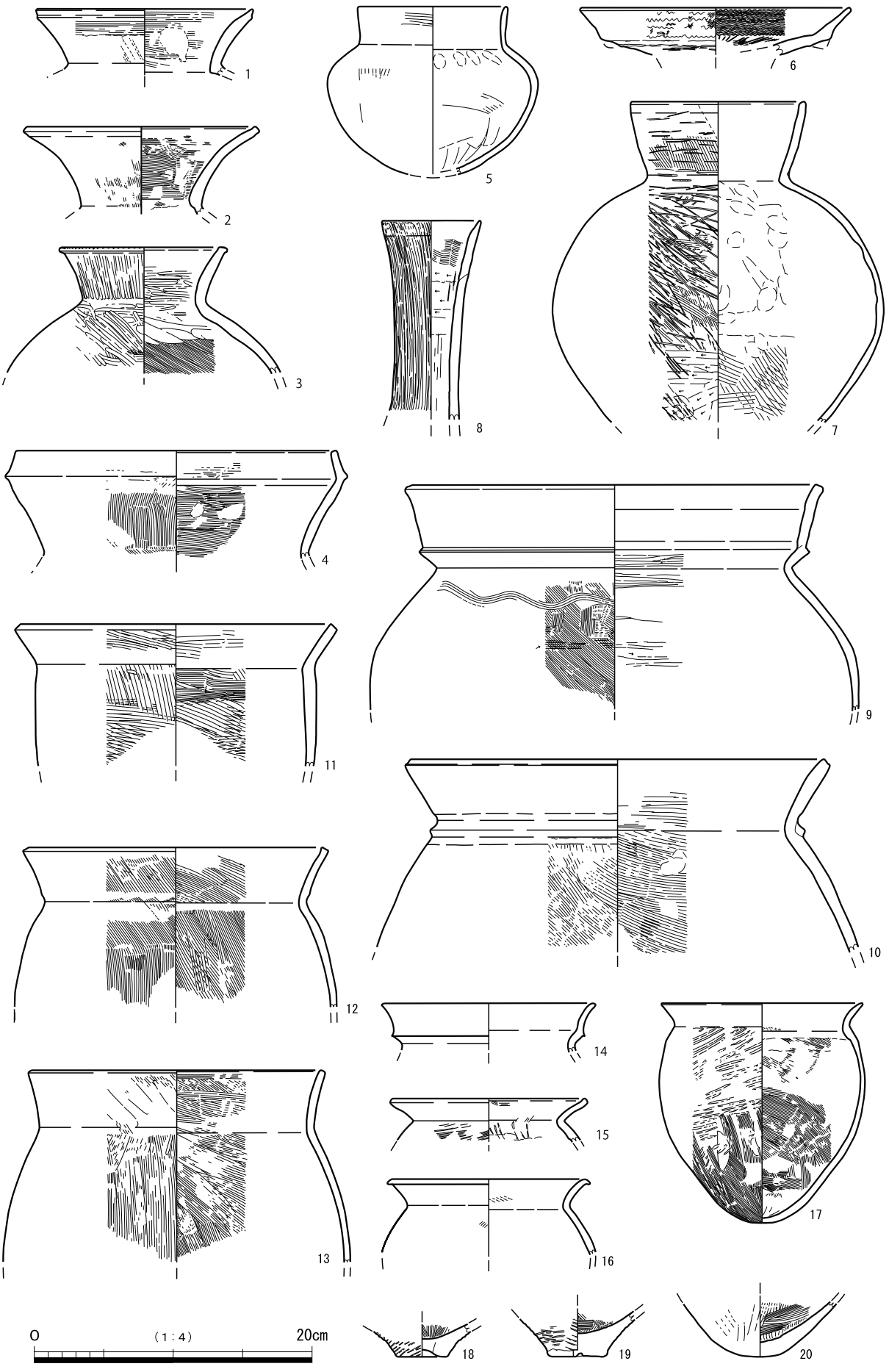
い体部から口縁部は「く」の字に屈折し外反する。これも16同様、在地形土器にはみられないことから半島品のものであろうか。18～24は甕である18は小型の甕で、底部は丸底を呈す。19は張りの弱い体部からやや外反し、内外面にハケを施す。20・21は中型の甕で、口縁部はややくの字状に外反し端部は下方に小さくつまみだす。頸部には貼り付け突帯をめぐらす。22～23は大型の甕（棺）で1/6の図を掲載している。22は頸部に断面三角形の突帯を、腹部突帯にはハケ状工具による刻み目を施す。内外面ともハケ調整。23は完形品で、砲弾型の体部から口縁部は直線的に外傾する。頸部・胴部にハ

ケ状工具による刻み目を施した突帯を貼付する。底部は凸レンズ状を呈す24は口径56㎝を測る大形の甕（棺）である。口縁部は緩やかに外反し端部は外端面をなす。頸部に断面三角形の刻目突帯が施される。

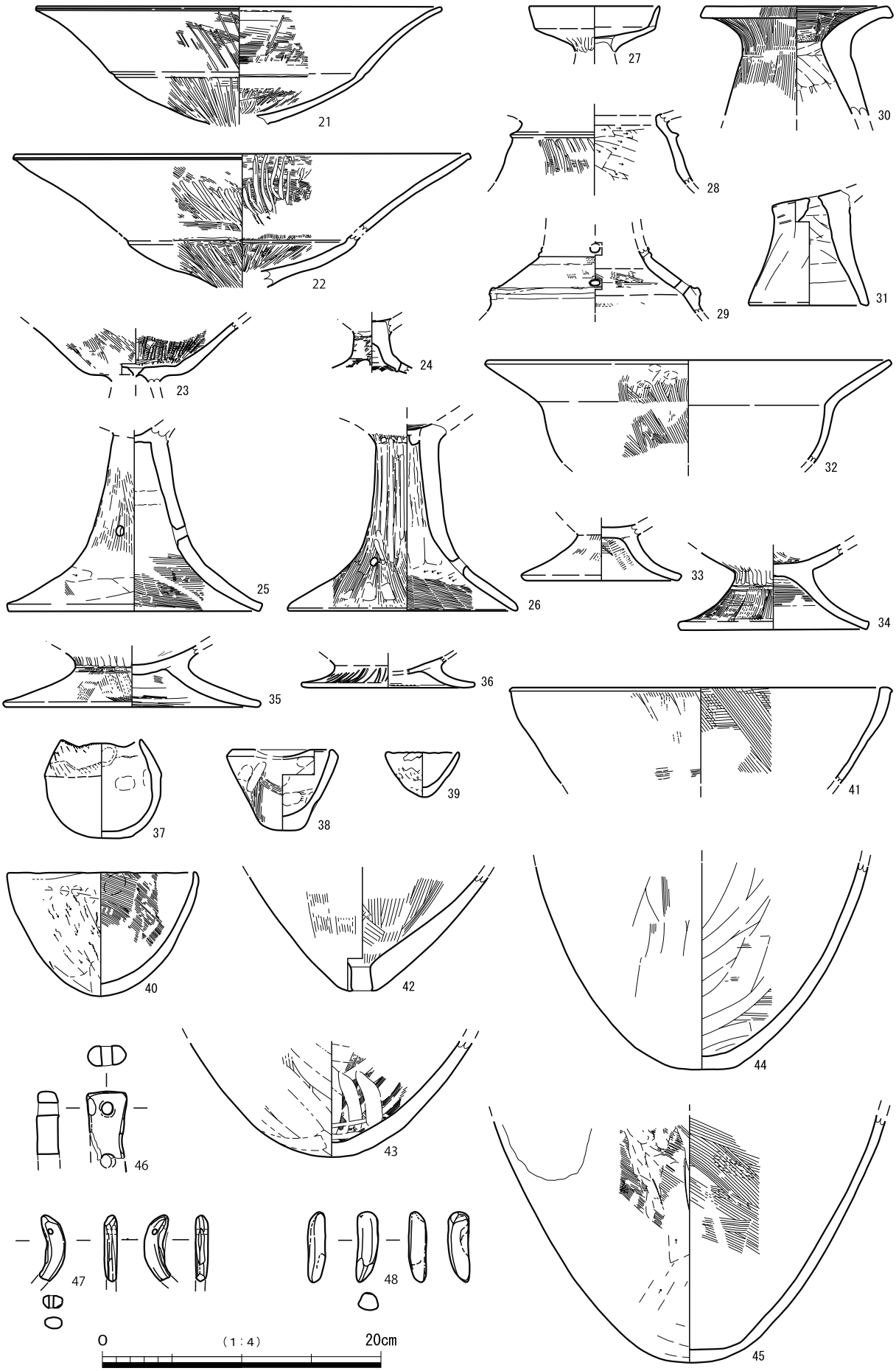
265図25・26は土製支脚である。25は斜めの受け部面と一端に突起が付き、円孔が穿たれている。26は受け部面が水平を呈する。これらは所謂「沓形器台」と呼称されるものである。27は小型器台の受け部で、口縁部は上方に短く立ち上がる。28は手づくねの小型鉢で、外面に黒斑を有する。29～31は鉢である。29は浅い椀状を呈し、内外面にハケを施す。31は口縁部が内傾するもので、ナデ仕上げである。32～34は在地系の器台で、32は受け部が袋状を呈す。33・34は筒部最少径が上方にあり、33は受け部が内弯気味、34は外反する。いずれも外端面をもつ。35は台付鉢で椀状の体部から口縁部は大きく外傾する。脚部にハの字状に開き３方向の円孔を有する。36～39は高杯である。36は杯部で口縁部が大きく外反する。外面口縁部はヘラミガキ、杯部はヘラケズリを施す。37～39は脚部で、37は低脚で裾部は外彎し端部をつまみ出す。5方向に円形孔を有する可能性がある。38・39は筒状の脚柱部からなめらかに外反し裾部に至る。38は3方向、39は2方向の円孔を有する。坏部との接合は円板を充填し、外面はハケ後のヘラミガキが顕著に観察される。41～44は台付鉢の脚部で、41は35に酷似している。40・42～44は低くハの字に開く脚である。43は二次焼成を受ける。40・42・43は山陰系台付鉢である。45は短頸壺の体部上部に付設される耳であろう。韓式系土器とみられる。

13-Ｓ0002（第266～268図・図版75）　１～８は壺である。１の口縁部は外反し端部側面に凹線を施す。半島系遺物の可能性がある。２は口縁部が大きく外反する。端部はわずかに上方に拡張させ外端面をなす。３は張りのある体部から口縁部がやや外反し端部を外下方につまみだす。端部に小さな刻み目を、外面にはヘラミガキを密に施す。４は逆くの字状口縁を有する。５は短頸壺で肩部の張りが強い球形の体部を有する。６は畿内系の二重口縁壺である。口縁部内外面に波状文が施される。７は広口壺である。口縁部は球形の体部からやや内弯気味に立ち上がり、口縁端部内傾する。外面はタタキ後、細かいミガキを施す。８は長頸壺で、外面に縦方向のヘラミガキが密に施される。９～20は甕である。９は山陰系の二重口縁鉢で、外面肩部に波状文を施す。10は大型の甕で口縁部はくの字状を有する。頸部に貼り付け突帯をめぐらす。11～13は中型の甕であるが、頸部の屈折の違いから型式差がみられ、13が新しい様相を示している。14は複合口縁部を呈す山陰系の甕である。15～17は小型の甕で、15は庄内系甕である。口縁部はくの字状に鋭く屈曲し、端部を上方に小さくつまみ上げる。16は口縁端部を外下方に拡張させる。17は凸レンズ状の名残りのある丸底である。体部外面はタタキ整形で下部はタタキ後ハケ調整が施される。18・19は平底で外面にタタキメが顕著に観察される。畿内第Ⅴ様式系甕の底部である。20は底部がやや凸レンズ状を意識した丸底を呈する。

267図の21～26は高坏である。21～23は坏部で、21は杯部と口縁部の境に段差を作り、口縁部は大きく外反する。２も同様、段を有し口縁部は直線的に伸びる。内外面ともハケ後ヘラミガキを施す。23の坏部は深く、布留系高杯の杯部とみられる。杯底部中央に穿孔がある。24～26は脚柱部である。24は低脚部である。小さく短い脚柱部から屈曲した裾部に４方向の円孔を有する。古式土師器出現時期にみられるタイプである。25は脚柱部に３方向の、26は脚柱部で３方向の円孔をそれぞれ穿つ。27は小型器台の受部である。28は山陰系鼓形器台である。29は異形の脚裾部で、円孔を二段に施す。30は器台で、筒部の最少径が上位にあり、受け部と裾部の区分が明瞭である。31は沓形の土製支脚である。受け部は斜めに面を形成し、受け部中央に円孔を有する。32は台付鉢である。椀状の体部から大



第266図 環濠13-S0002 出土遺物実測図①



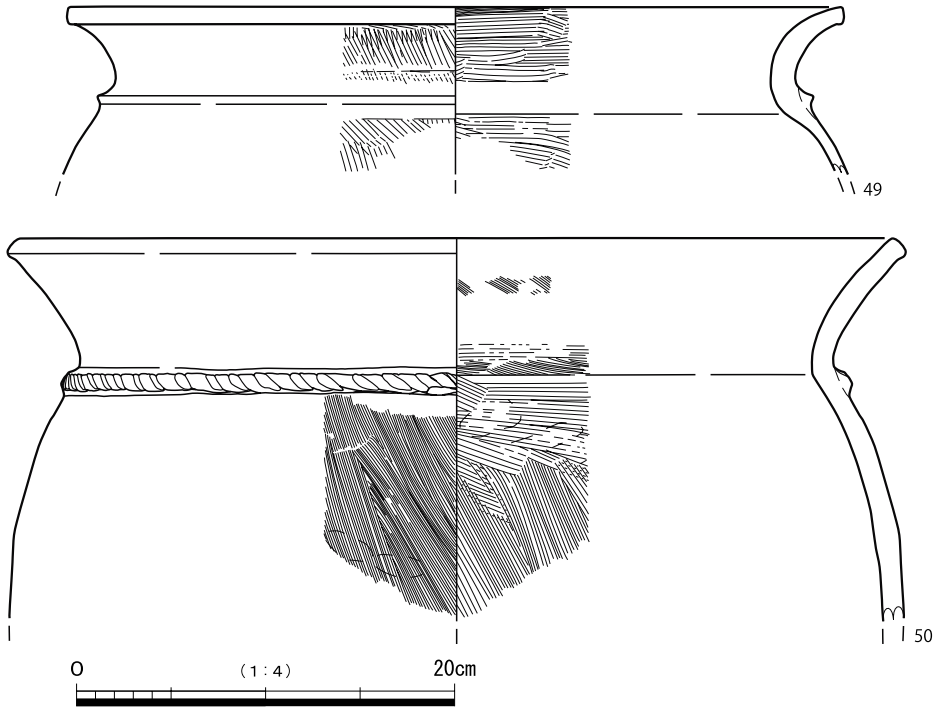
第267図 環濠13-S0002 出土遺物実測図②

きく外傾し口縁部に至る。外面に媒が付着。33は甕の脚台か。34は台付鉢の脚台部である。外面は坏部に縦方向のヘラミガキ、裾部に横方向のヘラミガキが施されている。35・36は低い脚台である。37・39は手づくねのミニチュア鉢で、37の口縁部は内傾し深めの丸底、39は尖り底を呈す。38は手づくねのミニチュア片口鉢で扁平な尖り底を呈する。40は深めの椀状を呈する鉢で、外面はヘラケズリ、内面はハケを施す。41は大型の椀形鉢である。42は甑である。尖り底に１ヶ所の孔を穿つ。内外面共にハケ調整が施される。43～45は壺の底部である。43は丸底、44・45は凸レンズ状を呈する。46は瀬戸内タイプの土錘である。残存長4.95㎝、幅2.8mで左右2ヵ所に径0.8㎝×0.9㎝の円孔を有する。47・48は土製勾玉である。47は残存長4.8㎝、幅1.35㎝、厚さ0.9㎝を測る。１ヶ所に孔が穿たれている。48も同様な形態と大きさを有する。

268図49・50は大甕である。49は口縁部が強く外反する。口縁部のみ残存し、推定口径40.4㎝を測る。口縁部は外湾し端部はヨコナデが施され面を有する。頸部には断面三角形の貼り付け突帯が施される。50は口縁部から肩部が残存し口径46㎝を測る。口縁部は外反し端部外端は面をなす。頸部には刻み目を施した貼り付け突帯をめぐらせる。内外面ともハケ調整を施す。

区画溝9-S0016（第261図・図版９）

９－４Ｇ～10－１Ｆにかけて検出した不整長方形に廻る区画溝である。その一辺が環濠に沿うように配置されている。規模は長辺約35m、短辺15m～18m、溝幅1.3～1.5m、深さ0.7～0.8mを測る。この溝は環濠14-Ｓ1017、9-Ｓ0017と重複するが、それらを切って掘削されていることが確認されている（第261図Ｄ断面）。掘削は溝底面の検出状況から南東コーナー部分より左回りに開削し、環濠に隣接する南辺では中央部付近から東に徐々に底面をあげて行っている。当初、この部分から発掘を開始したが、このような状況を把握できていなかったため、単純層の環濠埋土と認識して掘削してしまった。その結果、完全に陸橋部を形成していたかは残念ながら不明である。しかし、この部分が区画内への



第268図 環濠13-S0002 出土遺物実測図③

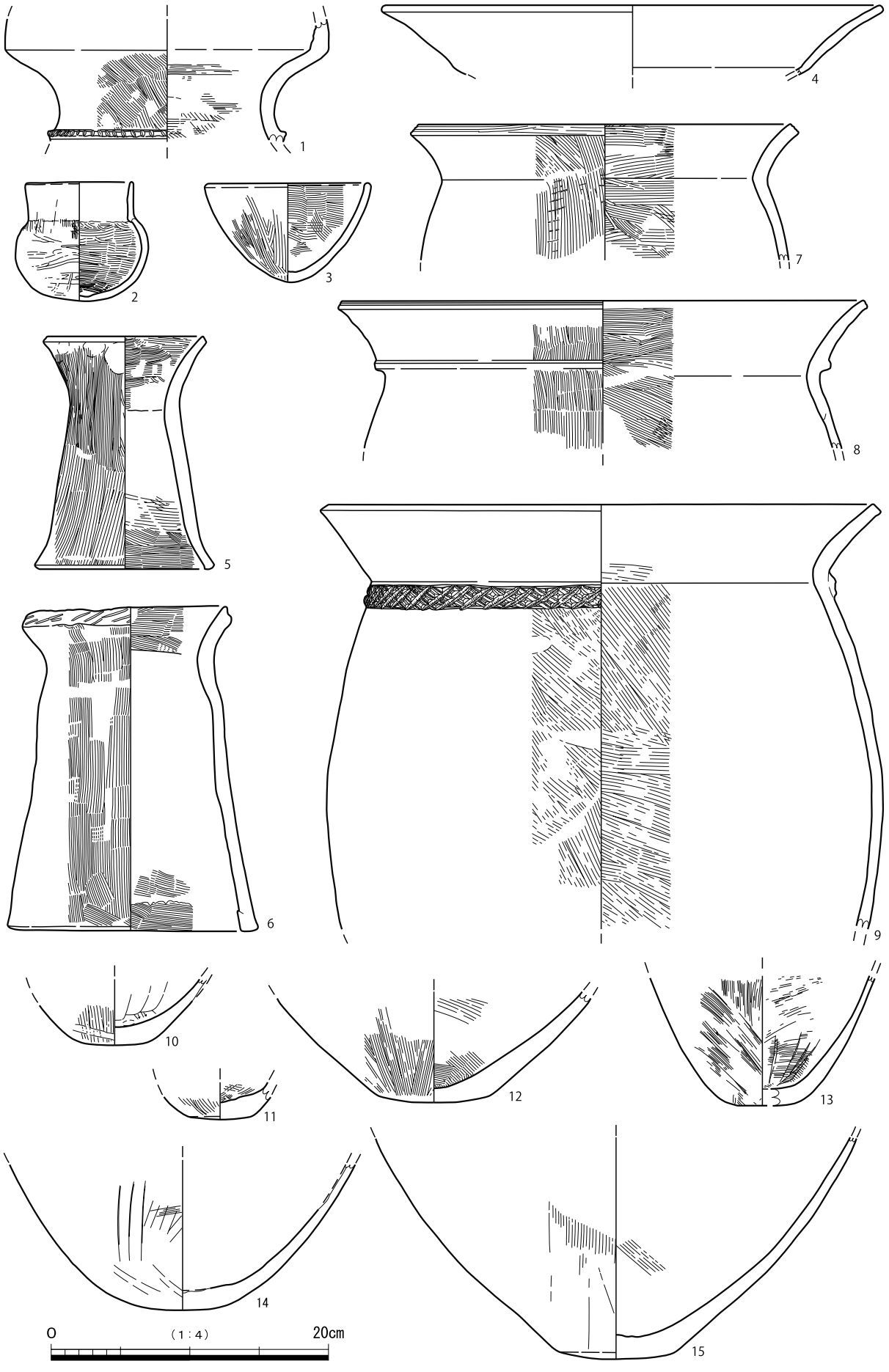
出入り口部に想定される確率は高いと思われる。

また、環濠13-Ｓ0002とは共存している可能性が高い。区画内では風土木と思われる不定形な自然の浅い窪みが検出されたほかは遺構らしい遺構がなく、どのような機能を有していたのかは定かにできない。溝内埋土の状況から下半部は自然堆積層であるが、上半部は人為的に埋め戻されていることが観察されている。

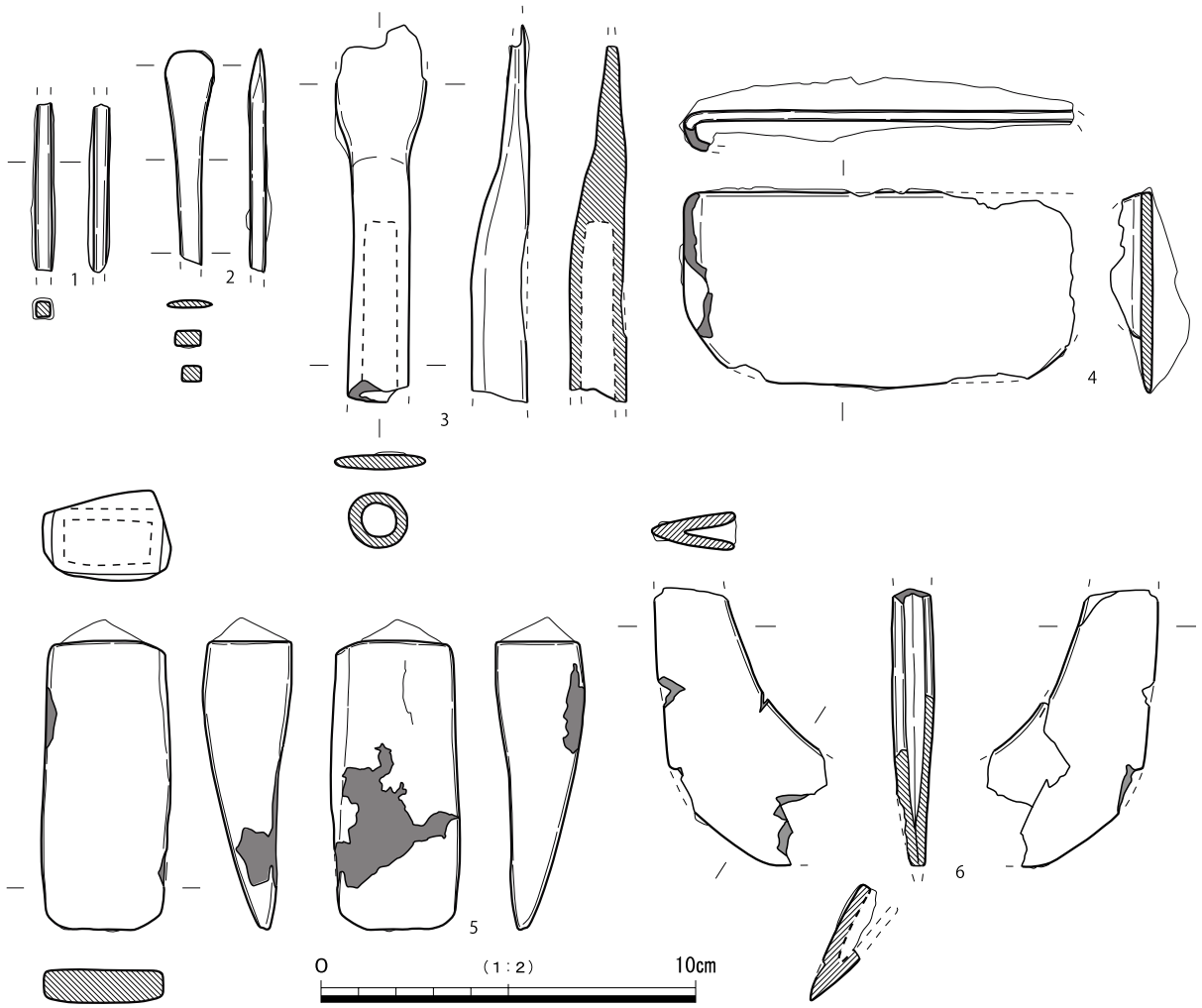
出土遺物（第269図・図版76）　１は複合口縁壺である。頸部は外反し口縁部は直立する。頸部には刻目を施した貼り付け突帯をめぐらす。２は小型丸壺である。扁球形の体部に口縁部は直立する。底部は丸底を呈する。３は鉢で椀状を呈する。底部はやや尖り気味な丸底。４は高杯杯部で外反し開く。５・６は在地系の器台で、筒部最少径が上方にあり、受け部は外反気味に開く。６は外端面に刻み目を施す。７は中型、８・９は大型甕で、口縁部は張りの弱い体部から外反する。内外面とハケを施す。８は頸部に断面三角形の突帯を、９はハケ状工具による刻みを施した帯状の貼り付け突帯をめぐらす。10～15は底部である。10～13・15は凸レンズ状、14は丸底を呈する。

環濠内出土鉄製品（第270図・図版86, 87）

１は18-S0502から出土した鉄製の不明製品である。上下とも先端を欠損する。残存長4.9㎝、幅４㎜、厚さ４㎜である。棒状であり、断面は方形となる。２は9-Ｓ0017から出土した鉄製の不明製品である。茎部先端を欠損する。残存長5.9㎝、最大幅1.3㎝、厚さ４㎜である。先端から７㎜下の範囲には、刃が確認できる。刃部形状は丸く、横断面は凸レンズ状である。茎部は刃部側が広く、斜めに緩い弧を描きながら茎部先端へとつながる。茎部横断面は、長方形である。３は13-S0002で出土したもので鉄製の匙状異形鉄製品である。刃部先端と袋部端を欠損する。残存長10.1㎝、刃部残存長3.5㎝、刃部最大幅2.4㎝、刃部最大厚９㎜、袋部残存長6.6㎝、袋部最大幅1.6㎝、袋部最大厚1.5㎝を測る。刃部が袋部よりも広がる。刃部横断面は、扁平な凸レンズ状である。横断面を上からみた場合、刃部と側面の境は、右側では連続的であるのに対し、左側では屈曲する。このことから筒状の袋部を左側から重点的に叩いてつぶした可能性が考えられる。袋部は断面円形である。Ｘ線透過写真で確認するも合わせ目は確認できていない。類例がないこともあり、舶載品と捉えておく。４は区画溝9-S0016から出土した鍬先である。方形鍬先であり、折り返しと背や刃の一部を欠損する。全長5.2㎝、残存幅10.4㎝、背厚３㎜である。背の形状は直線的である。刃の形状は中央が直線的であるものの、全体として弧状をなす。縦断面は長方形であり、刃先だけ尖る。５は14-S1007から出土した鍛造鉄斧である。ほぼ完形であるものの、剥離が部分的に入る。全長7.7㎝、最大幅3.5㎝である。袋部と刃部が連続してつながり、平面中央がやや幅広くなる。袋部の横断面形は長方形である。袋部端付近の計測値は、幅2.9㎝、高さ1.7㎝であり、その厚さは３㎜である。刃部形状は、隅丸方形となる。側面を観察すると、刃部は片刃状に傾くことがわかる。側面形状と法量から、手斧としての用途が想定される。６は14-S1007から出土した鍬先である。U字形鍬先のタイプに近似する。片側耳部と刃部の一部が遺存する。残存長7.4㎝、残存幅4.5㎝である。内縁には、柄を装着するためのＶ字溝がほどこされている。破面を観察すると、鉄板の合わせ目がみえる。舶載品と考えられる。



第269図 区画溝9-S0016 出土遺物実測図



第270図 環濠内出土鉄製品実測図

7　柱穴・土器溜り

柱穴14-S0020・14-S0066（第271, 272図）

それぞれ14グリッド５Ｆ地区において検出した大型柱穴である。住居14-S0018と重複するが、それに切られることから先行して存在していた遺構である。同一形態、方向などから対になるものと判断した。芯々距離で2.9mを測る。

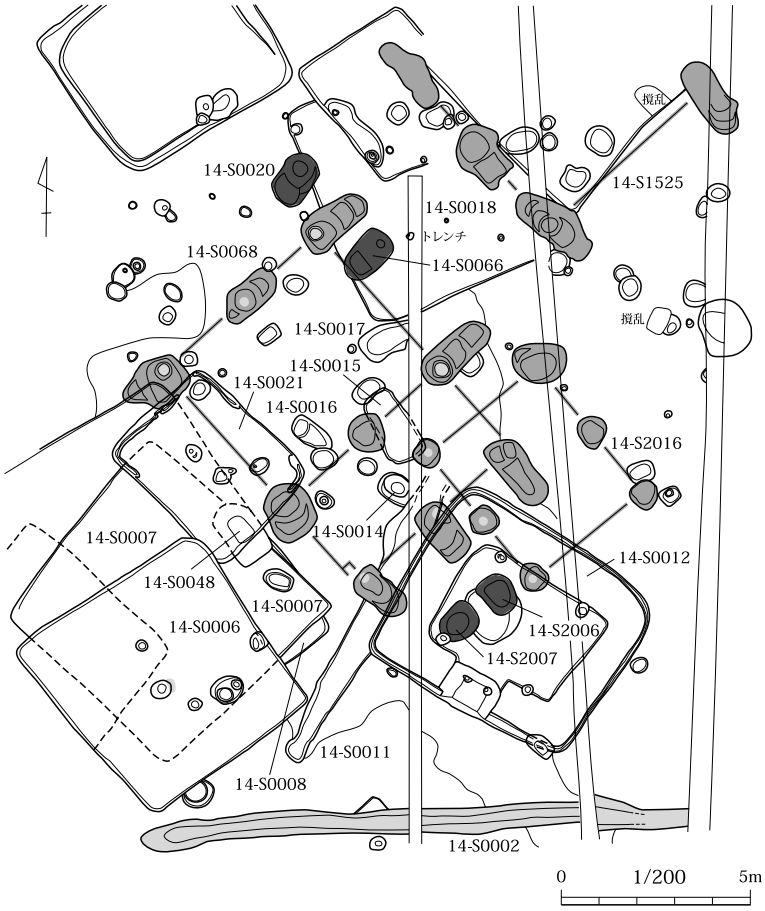
柱穴14-S0020は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ約1mを測り、平面形態は不整長円形を呈する。断面形状は南西側が段掘りで、北東側の対面は垂直に近い壁を形成している。他の大型建物と同様に段掘り形状から柱穴とまた、断面観察から柱は抜き取られたものと考えられる。大型建物５に関連するとも考えたが、14-S0066以外は付随する柱穴が見られないことなどから伴わないものと判断される。

14-S0066は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.85mを測り、平面形態は不整楕円形を呈する。断面形状は14-S0020同様に段掘りであり、大型柱穴と判断した。この柱穴も柱の抜き取りが観察される。その抜き取り後埋土から後述する土器が出土している。

出土遺物（第273図）　１は椀状の鉢で口縁端部が内傾する。外面体部下半にヘラケズリを施す。２・３は壺の底部である。２はやや凸レンズ状を意識した丸底を呈す。３は丸底で、胴部に刻み目を施した貼り付け突帯をめぐらす。内外面ともハケ調整。

14-S2006・14-S2007（第272図）

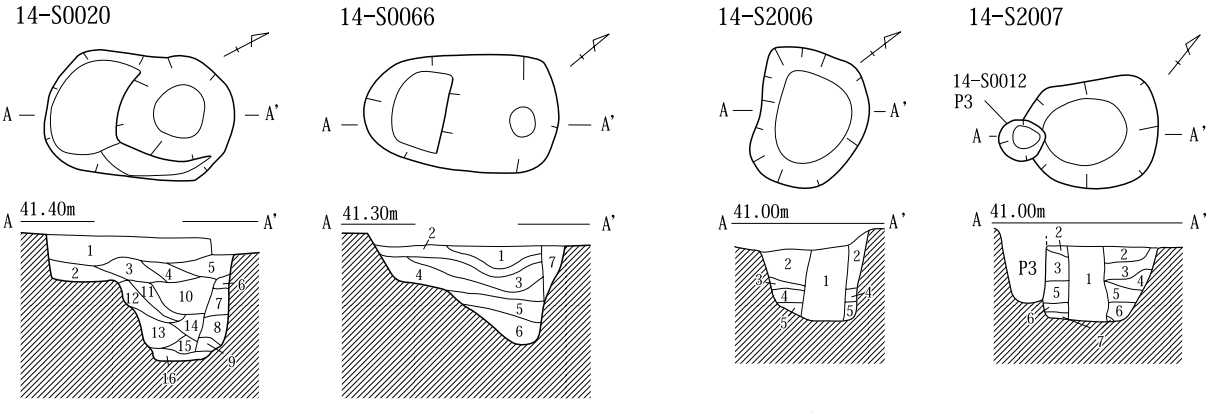
14グリッド６Ｈ地区において検出した大型柱穴である。約30㎝の間隔を開けて存在し、これらも14-S0020・0066同様、対になるものとみられる。芯々距離で1.3mを測る。しかし、これら以外に伴う柱穴がみられなく、どのような構造物が想定されるのか不明である。これらは住居14-S0012と重複するが、それに切られることから先行する遺構である。両者とも出土遺物はなかった。



第271図 大型柱穴配置図

14-S2006は長軸1.1m、短軸0.8m、深さは住居14-S0012床面から0.7mを測り、平面形態は不整円形を呈する。断面観察から直径30㎝の柱痕跡を確認した。

14-S2007は住居14-S0012の柱穴Ｐ３により一部切られる。規模は長軸１m、短軸0.8m、深さ0.7mを測り、平面形態は不整円形を呈する。これも断面観察から直径約30㎝の柱痕跡を確認している。



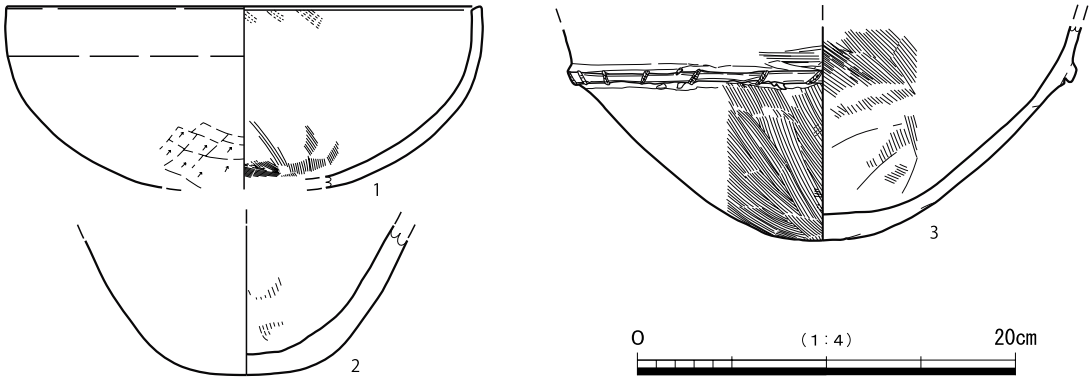
1 10YR5/1 褐灰色粘質土
2 10YR4/1 褐灰色粘質土
3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
4 10YR4/1 褐灰色粘質土
5 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
6 10YR5/1 褐灰色粘質土
7 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
8 10YR5/1 褐灰色粘質土
9 10YR4/1 褐灰色粘質土
10 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
11 10YR4/1 褐灰色粘質土
12 10YR5/1 褐灰色粘質土
13 10YR4/1 褐灰色粘質土
14 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
15 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
16 10YR5/1 褐灰色粘質土

1 10YR5/1 褐灰色粘質土
2 10YR4/1 褐灰色粘質土
3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
4 10YR5/1 褐灰色粘質土
5 10YT4/2 灰黄褐色粘質土
6 10YR5/1 褐灰色粘質土
7 10YR4/1 褐灰色粘質土

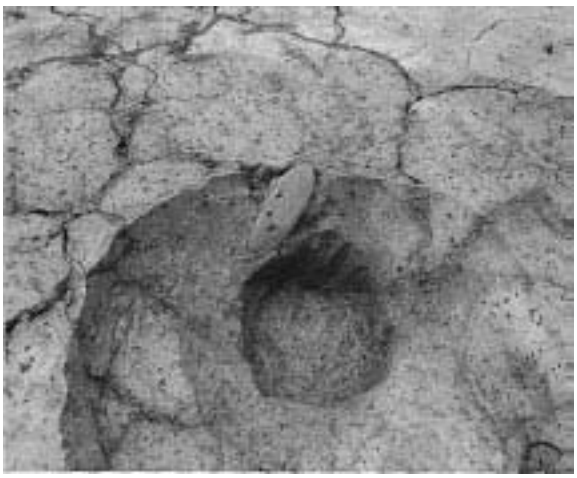
1 10YR3/2 黒褐色粘質土
2 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
3 10YR4/1 褐灰色粘質土
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
5 10YR4/1 褐灰色シルト

1 10YR4/2 灰黄褐色シルト
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
3 10YR5/4 灰褐色粘質土
4 5YR3/1 黒褐色粘質土
5 10YR5/3 灰黄褐色粘質土
6 10YR4/3 灰黄褐色粘質土
7 10YR4/4 褐色粘土

第272図 各柱穴 平面・断面図



第273図 柱穴14-S0066 出土遺物実測図



第274図 柱穴14-P0104 石庖丁出土状態

14-P0104（第102, 204図）

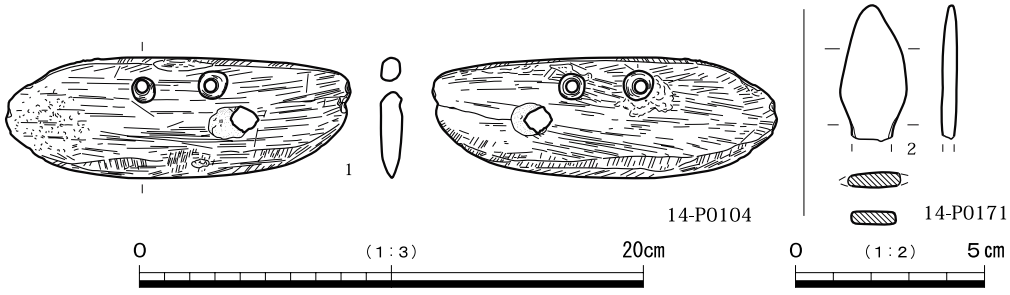
14グリッド４F地区において検出した直径約45㎝、深さ40㎝を測るほぼ円形の柱穴である。柱穴上部側面から石包丁が出土している。

出土遺物（第275図１・図版85） 石包丁で完形である。紐を通す貫通孔２ヶ所のほかにもう一ヶ所の貫通孔を有するが、加工の痕跡がみられないことから原石内にもともとあった空洞と判断した。全面に加工の痕跡があり、また刃部付近には使用による痕跡が残る。

14-P0171（第257図）

14グリッド１H地区において検出した直径30㎝、深さ30㎝を測る円形の柱穴である。溝14-S0042と重複するが、その溝に切られている。内部より下記鉄製品が出土している。

出土遺物（第275図２・図版87） 有茎式に属する鉄製の鏃である。茎部先端や刃部を欠損するものの、本来の形状をある程度留めていると思われる。残存長3.5㎝、残存幅1.8㎝である。刃部は、柳葉形に類似している。刃部の横断面形状は、凸レンズ状の両丸造である。茎部断面は、長方形である。



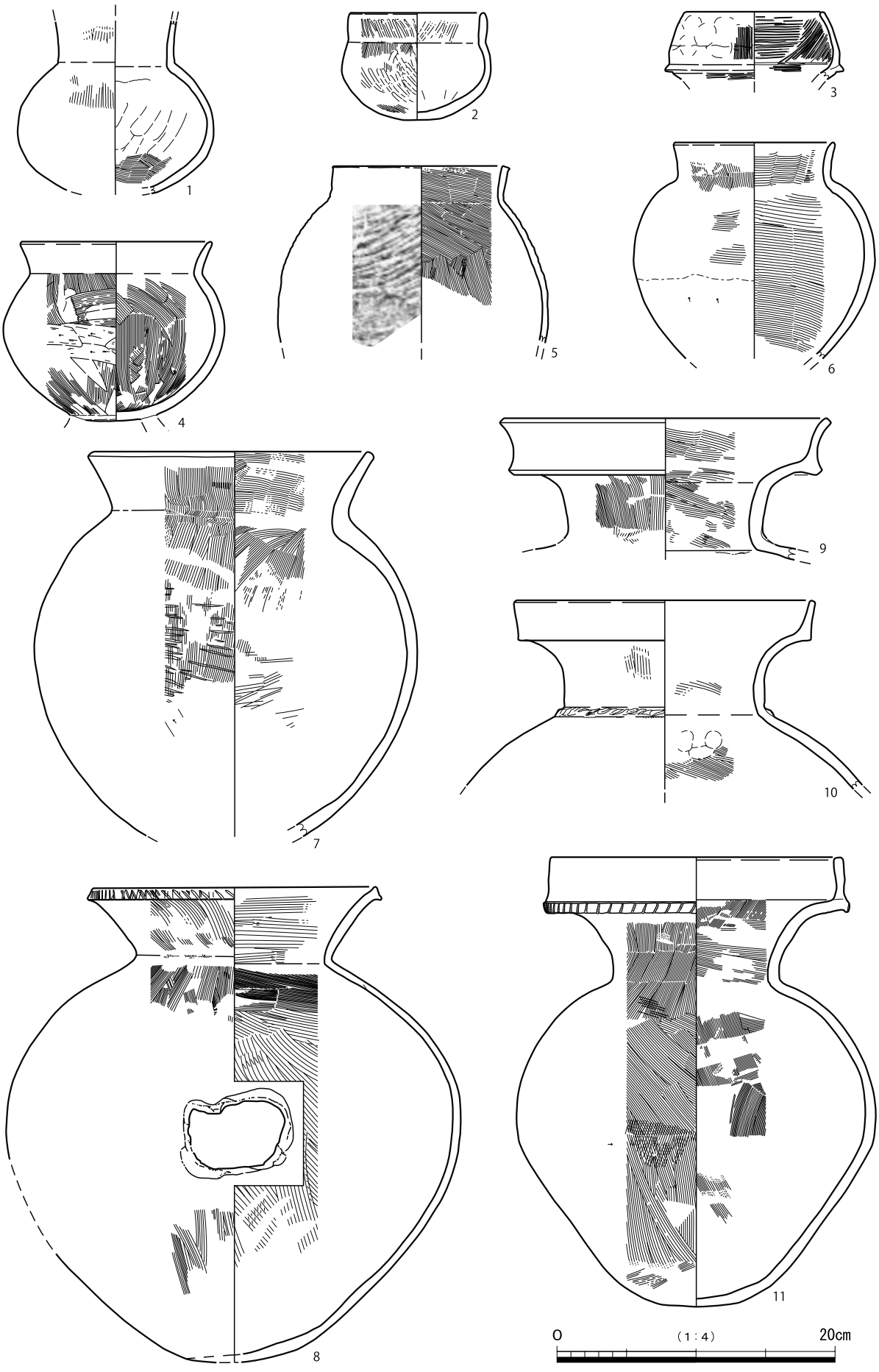
第275図 柱穴14-P0104・P0171 出土遺物実測図

土器溜り19-S0007出土遺物

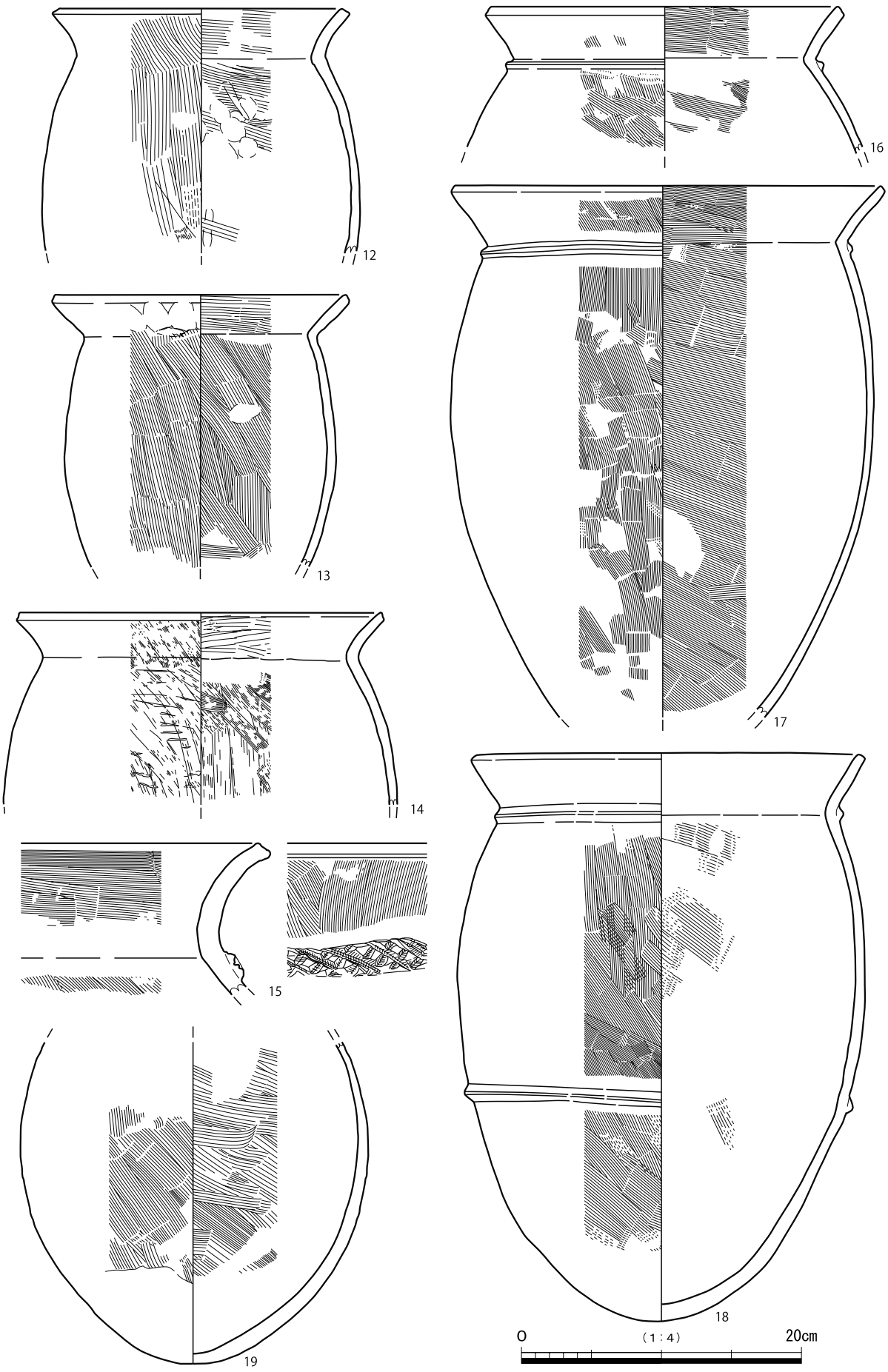
19グリッドの５Ｃ・６Ｃ～５Ｄ・６Ｄ地区において纏まって出土した土器群である。地形の変換点に位置し、地山面から遊離したものや、斜面に包含されているものも多く、出土状態から純粋に遺構と関連できる状況でもなく、二次集積された可能性も窺える。よって、土器溜りとして報告する。

土器（第276～279図・図版71, 72）　１～11は壺である。１はやや扁平球な体部と直線的に立ち上がる口縁部を有する。２は扁平な体部から口縁部は直口する。内外面ともヘラミガキを施す。３は口縁部が内弯し直下に突帯をめぐらす。４は脚台付きの小型壺で、口縁部は球形状の体部からくの字状に外反する。５・６は直口壺で、５は外面にタタキを施し媒が付着している。６は外面体部下半にヘラケズリを施す。７・８はくの字状に外反した口縁部を有する壺である。７はやや器壁が厚い。８は体部中位に焼成後の穿孔が見られる。９～11は複合口縁壺で、９は口縁部が外反、10はやや外傾、11は内傾する。９は内外面ともにハケを施す。10は外面頸部に刻み目を施した突帯をめぐらす。11はやや尖り気味の丸底を呈し、口縁下端部に刻み目を施す。外面頸部から体部をハケ、体部中位には横方向のヘラケズリを施す。12～20は甕である。12～14・16～18は口縁部がくの字状に外傾、15は緩やかに外反するものである。内外面ともハケ調整が主で、15は刻み目を施した突帯を、16・17は頸部に18は頸部・胴部にそれぞれ断面三角形の突帯をめぐらす。20は小型甕で、口縁部は張りの弱い体部からくの字状に外傾し、底部はやや尖り気味の丸底を呈する。21は甑の底部である。22～26は鉢で、22は杯状を呈し口縁部が上端でやや内傾する。外面口縁部に赤色顔料塗布。23は凸レンズ状を呈し、外面に黒斑を有する。24・26は椀状を呈し丸底。26は内外面ともハケを施す。27は小型の手づくね鉢である。30・31は脚台の脚部で30は直線的に、31は緩やかにハの字形に開く。32～34は高杯杯部である。32は深みのある杯部で、外面に黒斑を有する。33は杯部屈曲部に刻み目を施し、口縁部は椀状の体部から強く外反する。34は口縁部が直線的に立ち上がる。35・36は緩やかに外反し下方に開く高杯脚部で、35は上下二段一組の３方向の円孔を穿つ。いずれも外面はヘラミガキ、内面はハケを施す。39は受け部が斜めを呈し、ほぼ中央に円孔を有する在地系の土製支脚で、外面はタタキを施す。40～45は器台で筒部最小径が上方にあるもので、在地系のものである。

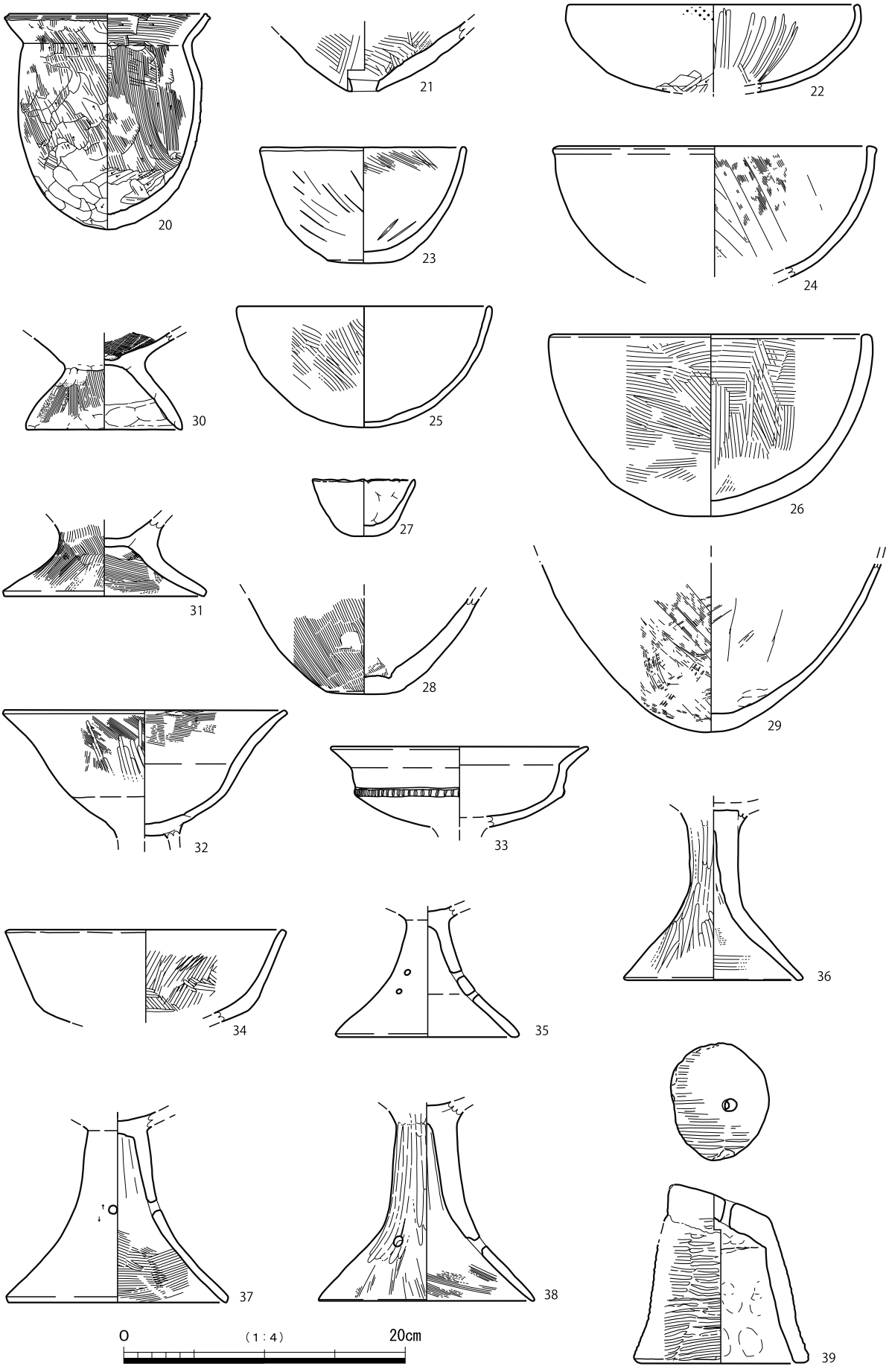
鉄器（第280図・図版87）　１は鉄製の鍬先である。ほぼ完形の方形鍬先であり、部分的に背と刃を欠損する。全長5.7㎝、幅11.9㎝、背厚３㎜である。背の形状は直線的であり、刃の形状は弧状をなす。折り返しは短辺全体に及び、その横幅はおよそ1.5㎝である。図を上からみた場合、左側の折り返し下半には、叩いてつぶした痕跡が明瞭に残る。縦断面は長方形であり、刃先だけ尖る。なお、裏面には幅３～８㎜の藁状有機質がほぼ全面にわたり付着している。切り合い関係や傾きの方向によって、有機質は大きく５つの単位にわかれる。一番上にあたる１番目の単位は、右下に傾き、約１㎝間隔の３条からなる。２番目の単位は、直交する約0.5～３㎝間隔の２条の単位が及ぶ。３番目の単位は、「#」に斜行する間隔の狭い単位である。４番目の単位は１番目の単位に平行し、３条からなる。一番下にあたる５番目の単位は、３番目の単位と直交する。有機質の性格は不明であるものの、単位が互い違いに交差しないことから編物とは考えられない。２は鉄製の刀子である。切先から刃部の途中まで残存する。残存長5.0㎝、残存幅1.1㎝、背厚１～２㎜である。断面は楔形となる。背は直線的にのびる。刃は部分的に窪むため、研ぎ減りが考えられる。３は鉄製の刀子である。刃部であり、両端を欠損する。また肉眼では判然とはしないものの、刀子先端付近の破片が付着しているのを、Ｘ線透過写真で確認した。残存長3.5㎝、残存幅1.3㎝、背厚３㎜である。また付着している破片は、残存長1.4㎝、残存幅８㎜、背厚２㎜である。いずれの破片も断面楔形をなす。４は鉄製の鏃である。無茎式に属す。



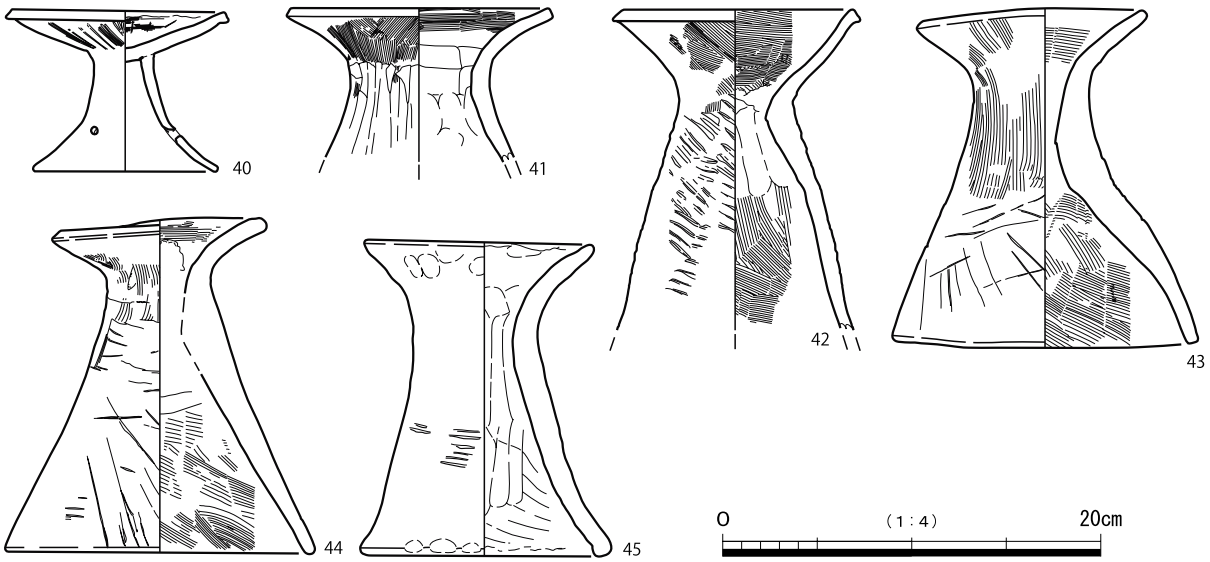
第276図 土器溜り19-S0007 出土土器実測図①



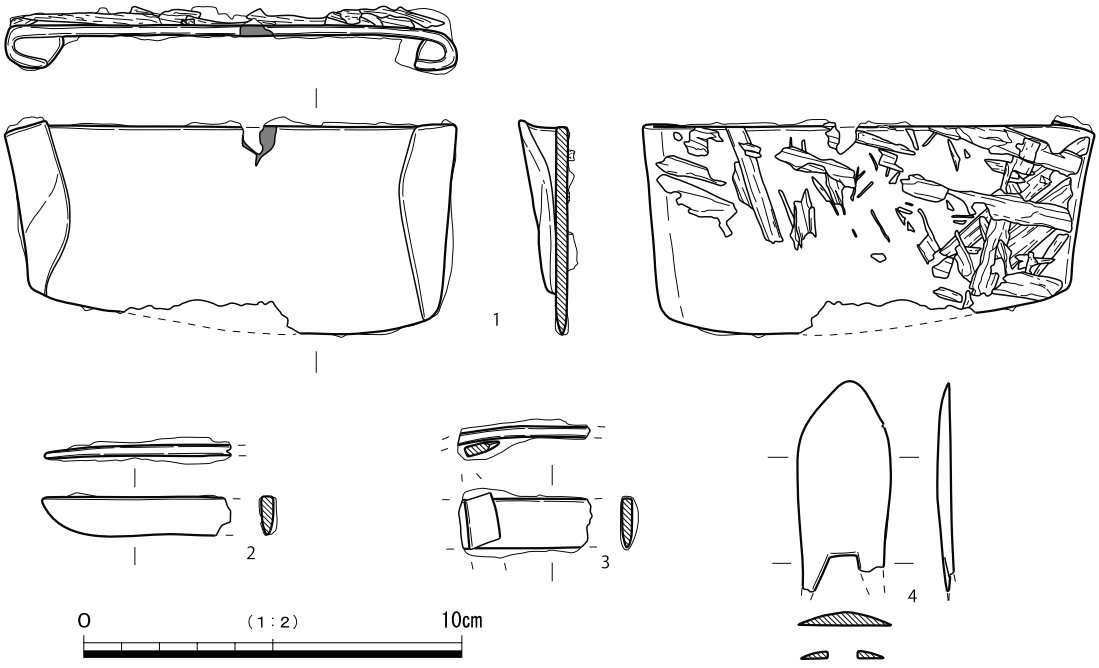
第277図 土器溜り19-S0007 出土土器実測図②



第278図 土器溜り19-S0007 出土土器実測図③



第279図 土器溜り19-S0007 出土土器実測図④



第280図 土器溜り19-S0007 出土鉄器実測図

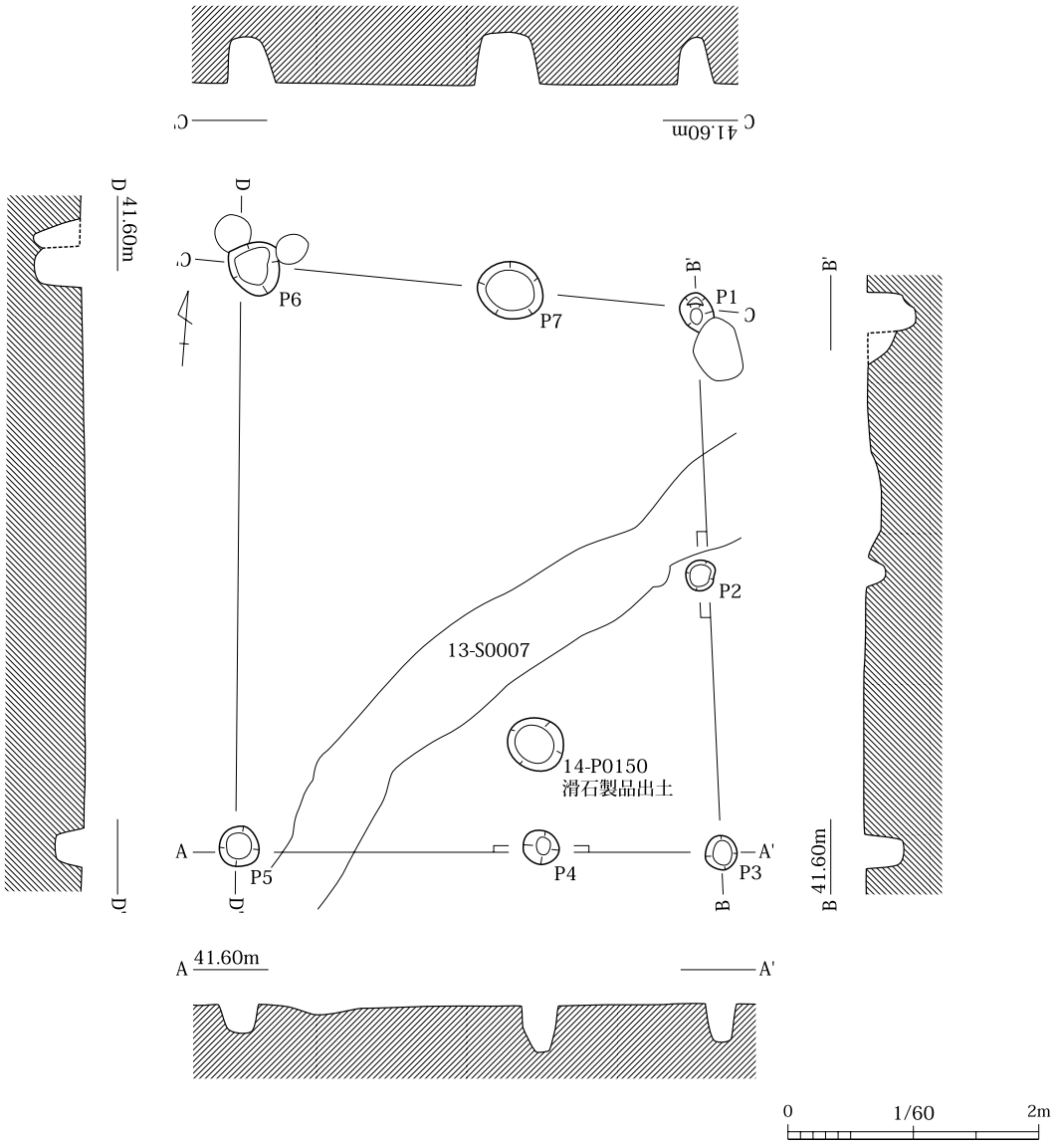
腸抉りの先端を欠損する。残存長5.6㎝、最大幅2.4、最大厚４㎜である。刃部形状は五角形に近く、角は丸みを帯びる。横断面形状は、一方が凸レンズ状に丸く、もう一方が平らになる片丸造である。側面を観察すると、中央付近が最も厚く、端にいくに従い徐々に薄くなることがわかる。腸抉りと基部端の形状が直線的であることから、鏨による切削が考えられる。

第３項　古代～中世の遺構と遺物

１　掘立柱建物

掘立柱建物13-S0010（第281図）

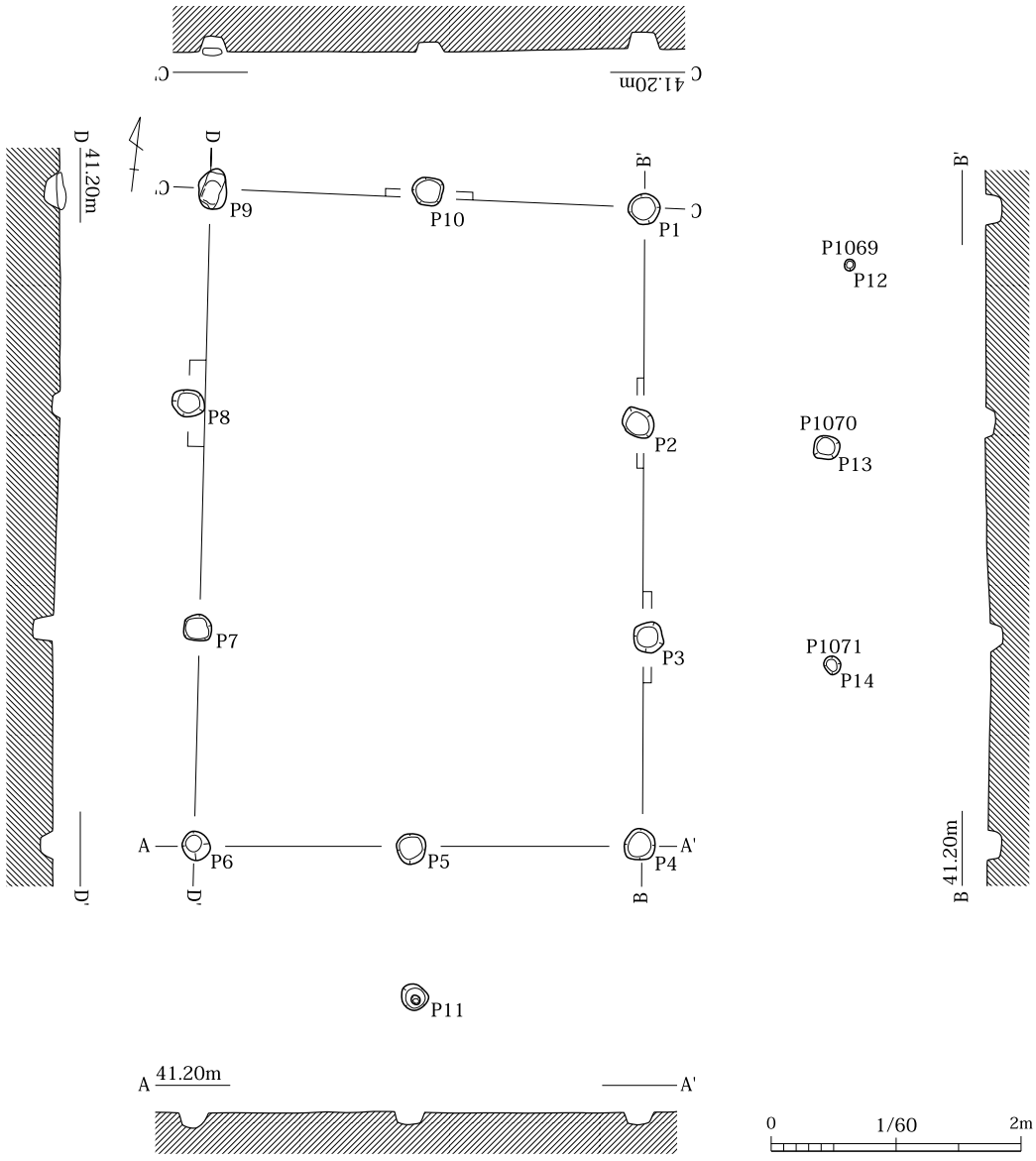
13グリッド９Ｅ～10Fに位置する２間×２間の掘立柱建物跡である。弥生後期の溝14-S0007と重複する。西壁中央の柱穴は検出されなかった。桁行4.3～4.7m、梁行3.6m、桁間は2.1～2.2m、梁間は1.4～2.4mとばらつきが大きい。主軸方位はN-7°-Wである。柱穴は不整円形または楕円形で、Ｐ１～Ｐ５は径25～30㎝であるがＰ６・Ｐ７は40～50㎝と一回り大きい。深さは北壁の３ヶ所が40㎝内外、南壁３ヶ所が25～35㎝、Ｐ２が約18㎝である。いずれの柱穴でも柱痕または抜き取り痕は検出されなかった。柱穴の埋土から弥生土器破片が少量出土している。本建物は13-S0007と重複するが直接柱穴で新旧関係を把握することができなかった。主軸方位から古代の可能性があるが、柱穴の規模が13-S1001等、該期の建物より大きく、疑問が残る。



第281図 掘立柱建物13-S0010 平面・断面図

掘立柱建物13-S1001（第282図・図版42-2）

13グリッド９Ａ～10Bに位置する３間×２間の掘立柱建物跡である。桁行5.1～5.2m、梁行3.5～3.6m、桁間1.74～1.8mを測る。主軸方位はN-5°-Wである。棟筋の延長上南へ1.2m離れて補助の棟持柱と考えられる柱穴が検出された。柱穴は不整円形で径は23～26cmとばらつきが小さい。深さは８～20cm。棟持柱を除いて底面や埋土に柱痕は検出されなかった。唯一P11で検出された柱痕は直径約８cmで、底面に深さ約５cmの窪みとして残っていた。なお、この建物の東1.3～1.6mに３ヶ所ピットが検出されている。本遺構の柱筋に近く、並びも本跡東壁にほぼ平行し、深さが14～18cmあることから軒支えや囲いなどの柱穴である可能性がある。ただし、この遺構からの間隔や柱穴間が本建物の間尺に合わないこと、径が９cmから20cmまでばらついていることから本建物の柱穴とは同列にみなし得ない。また、柱穴の埋土から弥生時代の土器小破片が出土しているほか、Ｐ９では上面に蓋をするように長さ27cm×幅14cm、厚さ５cmの長方形割石が出土した。構築時期は、主軸方位や柱穴の規模、および埋

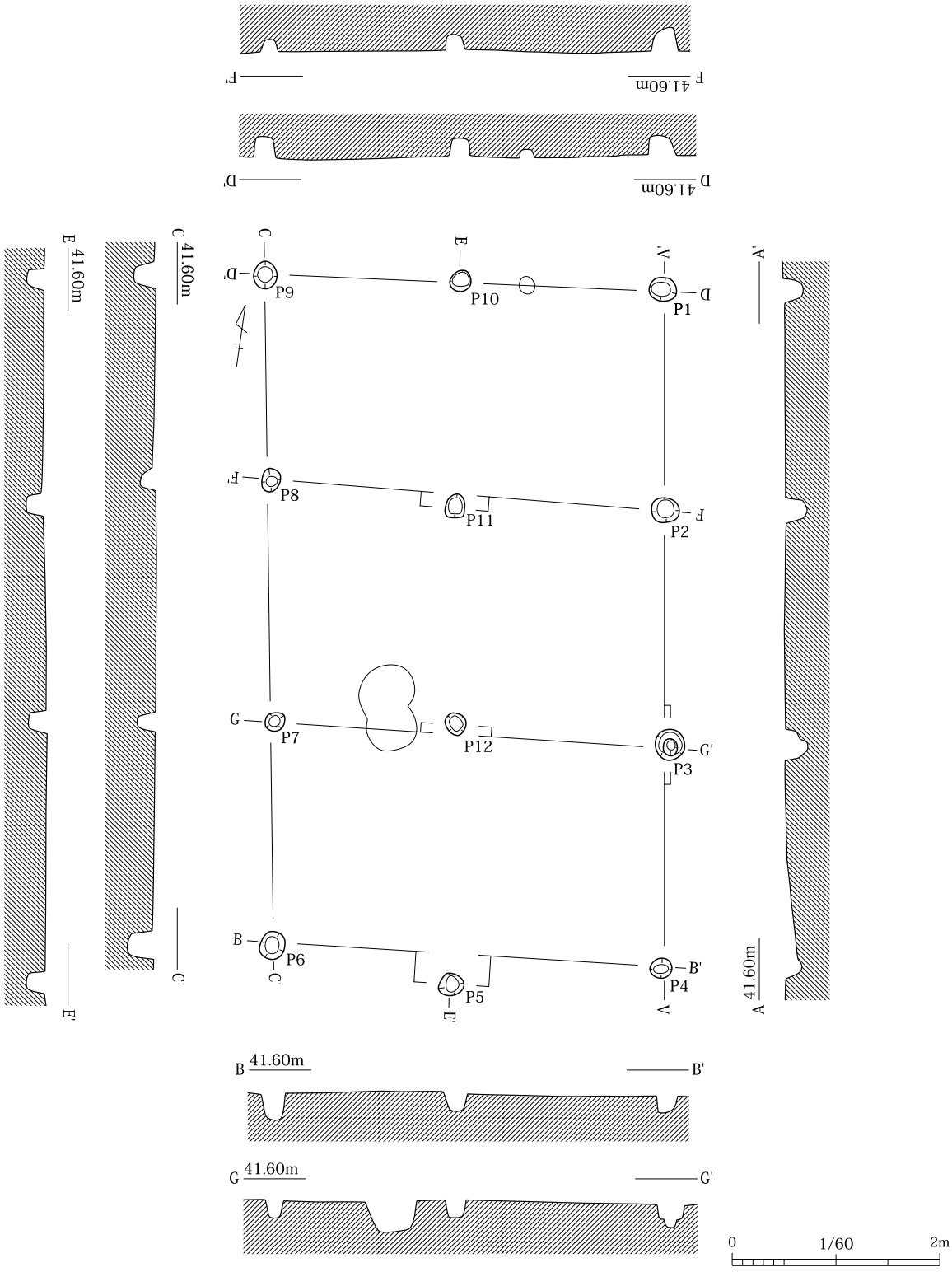


第282図 掘立柱建物13-S1001 平面・断面図

土が異なることから大型掘立柱建物ら弥生時代の建物と同時期とは考えにくい。よって、遺物が散見される９世紀中頃～後半に比定するのが妥当と考えている。

掘立柱建物14-S0061（第283図）

14グリッド４ Ｊ～19グリッド５ Ａに位置し、14-S0001住居と14-S0003住居の間に挟まる。３間×２

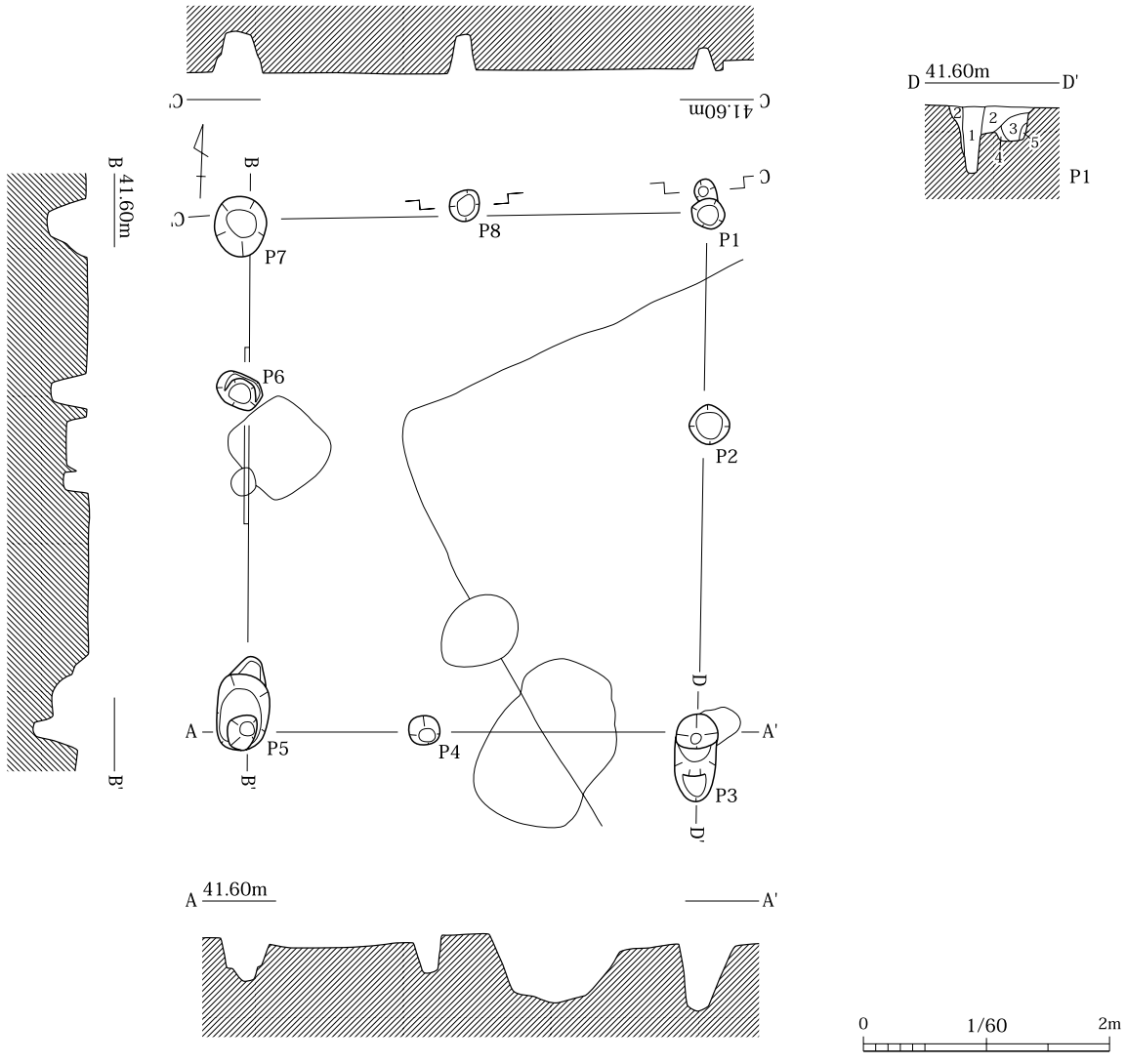


第283図 掘立柱建物14-S0061 平面・断面図

間の総柱式掘立柱建物跡である。桁行6.5m、梁行3.8m。桁間は2.0～2.3m、梁間2間のうち東は2.0m、西が約1.8mを測る。主軸方位はN-7°-Wである。柱穴は不整円形または楕円形で、径は17～24cmの範囲に収まるものが多いが、Ｐ３は30cmとやや大きい。Ｐ４は逆に15cmと小さいが、これは確認面が削平されていたためで、本来はもう少し大きかったものである。深さは14～20cmのものが多いが西の角柱２ヶ所はやや深い。Ｐ３では底面で柱痕らしき窪みが検出された。径約13cm。また、Ｐ１では柱が抜き取られたとも考えられる土層が断面で確認された。遺物は柱穴埋土から弥生土器破片がごく少量出土したのみである。建物の構築時期は建物、及び柱穴の規模、主軸方位などから古代９世紀後半頃と考えている。

掘立柱建物14-S0062（第284図）

14グリッド１Ｉ～１Ｊに位置し、14-S0040住居と重複する。本建物が新しい。東西の柱筋の並びが不整であるが対応する柱があるようにみえるので、桁行２間×梁行２間の掘立柱建物跡である。桁行4.2m、梁行3.7m。桁間は不定で、最も狭いところで約1.4m、広いところで約2.7mある。主軸方位はN-2°-Wである。柱穴は不整円形または楕円形で、南の角柱２ヶ所は長楕円形で他の柱穴より大きい。

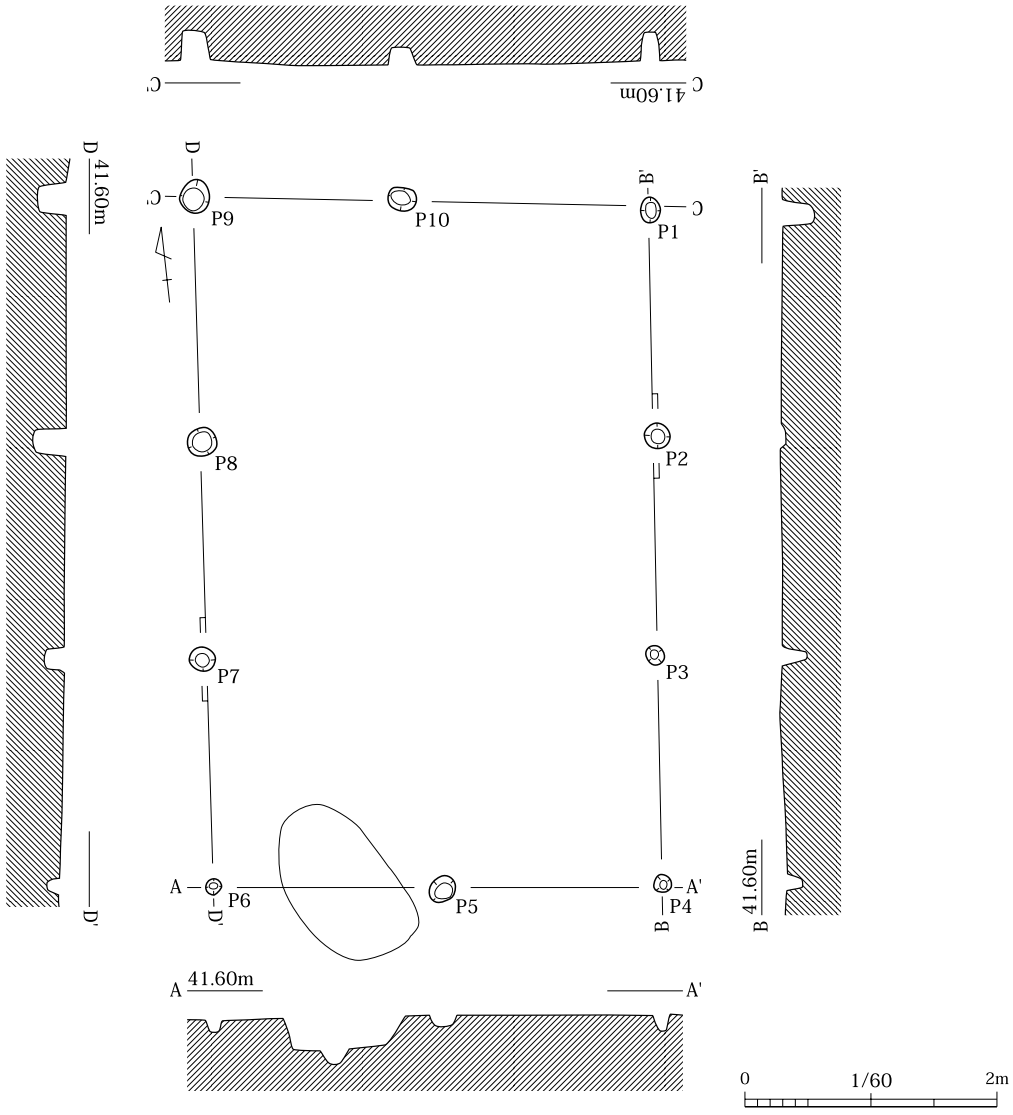


第284図 掘立柱建物14-S0062 平面・断面図

深さは南の２ヶ所を除いて30～35㎝。南東角は54㎝、南西角は44㎝を測る。柱痕は南柱穴２ヶ所とＰ７で検出された。いずれも径約12㎝を測る。なお、Ｐ７では土層断面で柱抜き取りと思われる堆積も確認されている。遺物は柱穴埋土から弥生土器破片が少量出土した。この建物は14-S0040建物より新しく、主軸方位から古代の構築であることが考えられるものの、建物規模や柱の配置、柱穴の規模等からやや疑問が残る。

掘立柱建物18-S0011（第285図）

18グリッド９Ｂ～10Bに位置し、18-S0013掘立柱建物と重複する。桁行３間×梁行２間の掘立柱建物跡である。桁行約5.4ｍ、梁行約3.7ｍ、桁間は1.7～1.9ｍを測る。主軸方位はN-4°-Eである。柱穴は不整円形または楕円形で、深さは最も浅いもので６㎝、深いもので23㎝である。柱痕は検出されなかったが、Ｐ７とＰ９では柱抜き取りと思われる土層が断面で確認された。遺物は出土しなかった。本建物は13-S1001、19-S0006とほとんど同規模であり、前者とは主軸方位もほぼ同じであることから同時期の９世紀後半頃に構築されたと考えている。



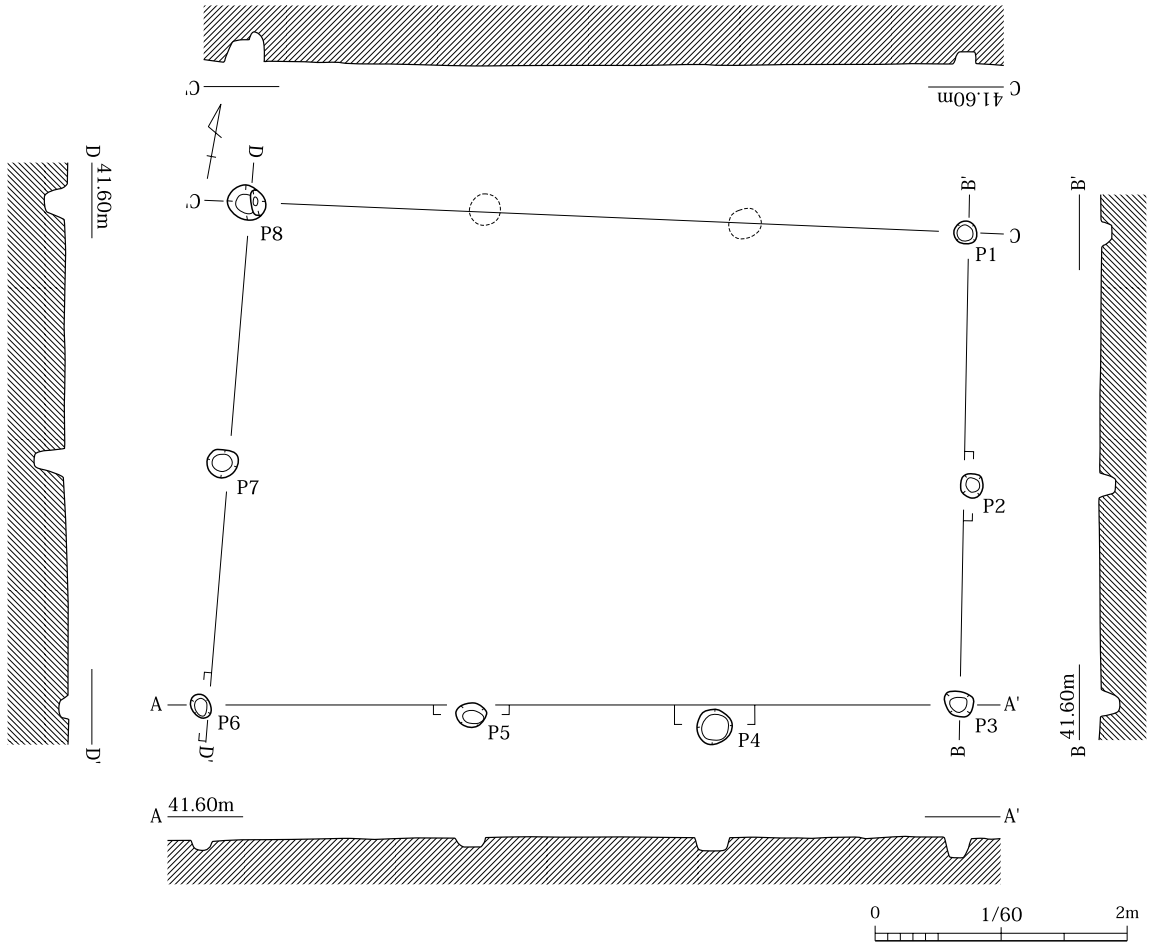
第285図 掘立柱建物18-S0011 平面・断面図

掘立柱建物18-S0012（第286図・図版42-1）

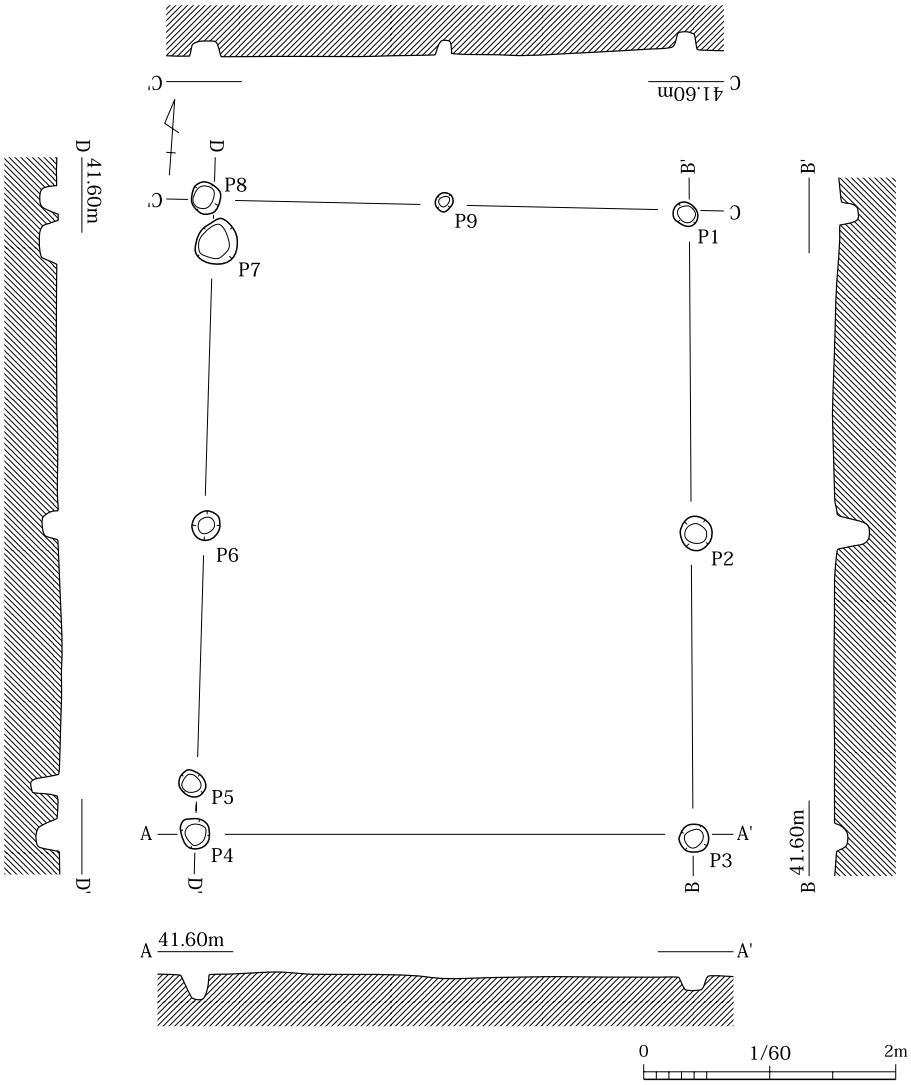
18グリッド９Ｅ～10Eに位置し、19-S0005の南西に約３ｍに隣接する。棟持柱と思われる柱穴があることから３間×２間の掘立柱建物跡と推定されるが、北側の桁柱２ヶ所が検出されず、あるいは囲いのような柵列であるのかもしれない。桁行約5.9m、梁行約3.7m。桁間は1.9～2.1mを測る。主軸方位はN-81°-Eで、本地区では少数の東西棟である。柱穴は不整円形または楕円形で、深さは浅いもので５㎝、深いもので23㎝を測る。北西角柱穴の底面で柱痕と思われる窪みが検出された。径約９㎝。また、この柱穴では柱が抜き取られたことをうかがわせる土層断面が確認された。本建物を構成する柱穴からは遺物は出土しなかった。この建物の構築時期は規模や主軸方位、柱穴の規模等から古代の９世紀後半頃と推定される。

掘立柱建物19-S0005（第287図・図版43-1）

19グリッド１Ｃ～１Ｄに位置し、掘立柱建物19-S0006の西に隣接する。間隔は最も狭いところで約0.3m程しかない。２間×１間の掘立柱建物跡である。桁行約5.0m、梁行3.9m、桁間は2.5～2.6mを測る。主軸方位はN-4°-Wである。桁行は13-S1001とほぼ同じ、梁行は19-S0006と同じである。北辺中央に小径のピットが検出されており、これも本跡に伴うものと考えている。また、西辺の角柱内側にもピットが２ヶ所検出され、これらは束柱の柱穴の可能性があるため図示してある。柱穴は概ね不整



第286図 掘立柱建物18-S0012 平面・断面図

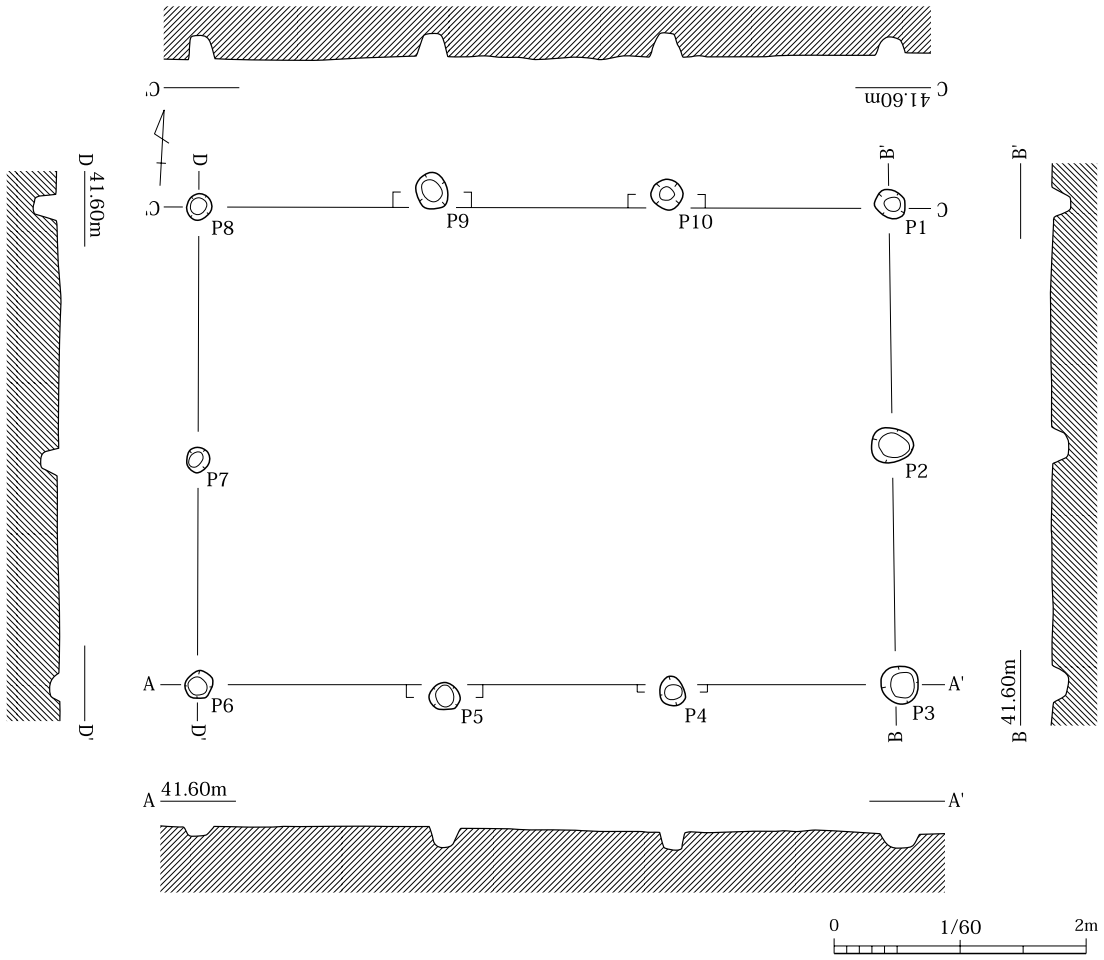


第287図 掘立柱建物19-S0005 平面・断面図

円形であり、径は棟持柱及び束柱の可能性がある３ヶ所を除いて22～25㎝と画一的である。深さはＰ２を除いて12～20㎝。Ｐ２のみ26㎝とやや深い。柱痕や抜き取り痕は検出されなかった。遺物は出土していない。構築時期は、規模や主軸方位、また付近のピットや溝、および確認面からの出土遺物から13-S1001、19-S0006とほぼ同じ９世紀後半頃と考えている。

掘立柱建物19-S0006（第288図）

19グリッド２Ｃ～２Ｄに位置し、19-S0005東に隣接する。間隔は最も狭いところで約0.3ｍ。柱筋や間尺が違うので一連の建物ではなく別棟であり、間隔が狭すぎるので同時併存は考えにくい。３間×２間の掘立柱建物跡で、東西棟である。桁行約5.6ｍ、梁行3.9ｍ、桁間は1.8ｍを測る。主軸方位はN-86°-Eで、隣接する19-S00005とほぼ直交する。梁間は19-S0005や14-S0061、18-S0012らと同じである。柱穴は不整円形または楕円形で、径は南東の2ヶ所を除いて20～25㎝と揃っている。南東２ヶ所は28～30㎝と一回り大きい。深さは南西角のＰ６を除き12～18㎝。Ｐ６のみ９㎝と浅い。柱痕や抜き取り痕は検出されなかった。遺物は出土していない。構築時期は、規模や主軸方位、また付近のピットや溝、および確認面からの出土遺物から13-S1001、19-S0005とほぼ同じ９世紀後半頃と考えている。



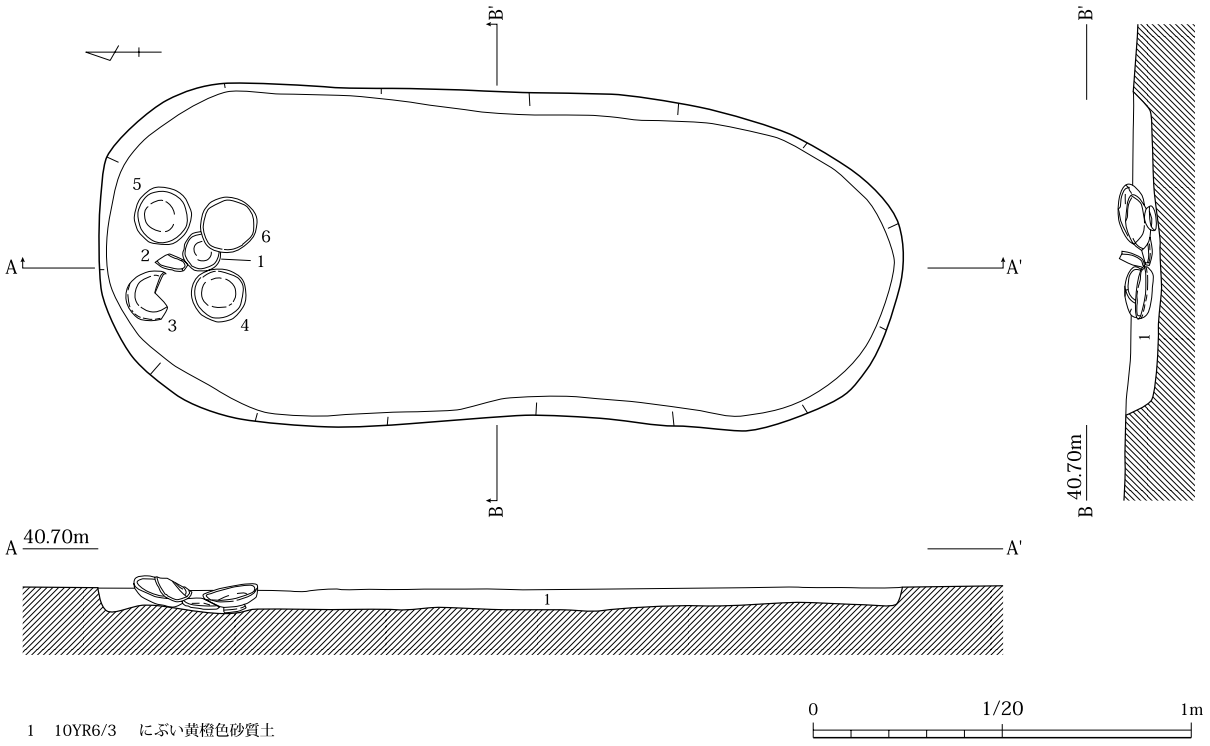
第288図 掘立柱建物19-S0006 平面・断面図

2　土坑

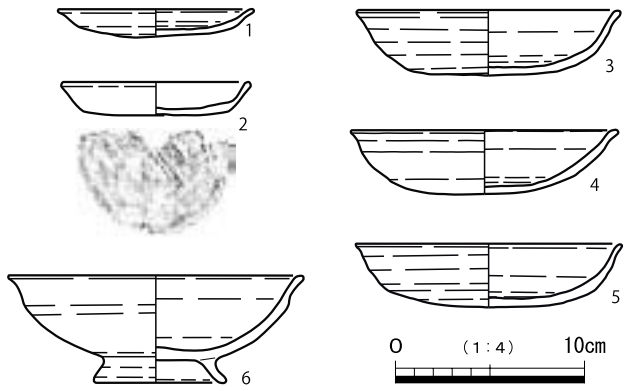
土坑10-S002（第289図・図版43-2）

10グリッド４ Ｊ～15グリッド４ Ａ地区にかけて検出した土壙墓である。規模は、長辺2.12ｍ、短辺0.85ｍの長楕円形プランで、深さは検出面から５～10㎝程である。土壙の主軸は真北方向を採る。埋土はにぶい黄褐色砂質土でしまりが全くない。土壙内の北辺で、土師器皿２個体、土師器坏３個体、土師器椀１個の計６個体が出土した。一回り小さい土師器皿（１）を中心に３個の杯と１個の椀を正方形上に配していた。そのうち、北西の杯（３）は裏返しに置かれていた。平面精査及び土層断面からは木棺の痕跡は確認できなかったが、土壙墓と考えられる。

出土遺物（第290図・図版79）　１・２は土師器の皿で１の口径は10.2㎝、器高は1.5㎝を測る。底部は内外面共にナデ調整、口縁部は強い横ナデ調整を施し端部は丸く納めている。２は復元口径9.8㎝、器高1.8㎝を測る。底部外面はヘラ切り後軽くナデ調整、内面はナデ調整されている。口縁部は強い横ナデ調整を施し端部は丸く納めている。３～５は土師器の坏で口径は13.6～14.1㎝、器高は3.4～3.5㎝を測る。技法としてはいずれも回転ヘラ削りによって、腰の張った丸い形態を作り出す「底部押し出し技法」が用いられている（中島1995）。口縁部は強い横ナデ調整によりやや外反し端部は丸く納めている。これらの技法や形態から杯というより椀に近いものである。６は土師器の椀で口径は15.5㎝、器高は5.7㎝を測る。製作技法としては杯と同様、回転ヘラ削りにより整形し「底部押し出し技法」に



第289図 土坑10-S0002平面・断面図



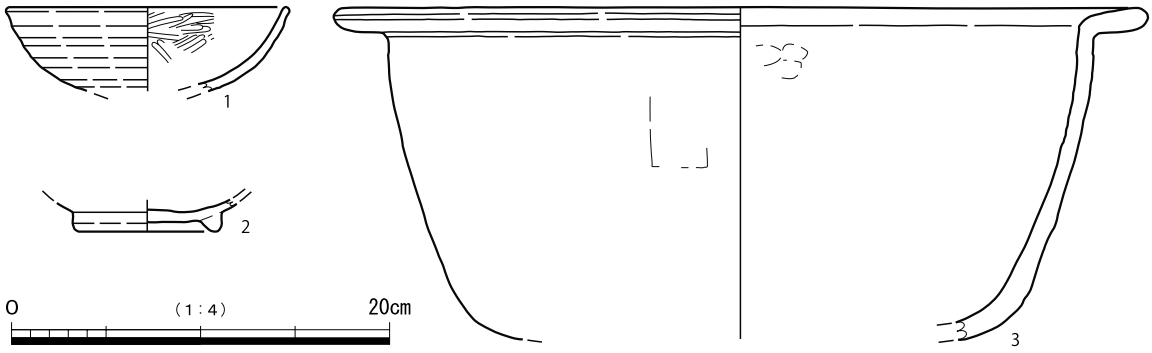
第290図 土坑10-S0002 出土遺物実測図

より腰の張った丸い形態を作り出されている。口縁部は強い横ナデ調整によりやや外反し端部は丸く納められている。高台は貼り付けで高く、やや外反し端部は丸く納めている。これらの土器は時期が新しくなると法量も次第に小型化する傾向があり、その変化は椀に顕著でそれは貼り付け高台等にも表れる。これらのことから11世紀中ごろのものと考えられる。

土坑14-S0039（第292図）

14グリッド１Ｉ～２Ｉに位置する。長軸2.4ｍ、短軸（東西）2.0ｍを測る不定形な土坑である。浅く皿状に掘り込まれ、底面は凹凸が多い。深さは中央部で約16㎝。埋土は人為的に埋め戻されている。埋土からは土器破片多数と須恵器・陶器破片少量、その他20㎝大の平たい割石が出土したが出土した土器の大部分は瓦質の土器破片であった。なお、これらの土器に混じって、図版65の半島系無文土器片が混入していた。

出土遺物（第291図）　１・２ともにロクロ整形、黒色土器の椀である。１は内外面黒色でヘラ磨きを施す。２は内外面灰色で底部篦切り未調整。低くカマボコ形の高台を貼り付け、高台外面を強くなでている。３は瓦質の大型の鍋で口縁部を水平方向まで外反させる。これらの遺物はいずれも12世紀初頭のものと思われる。また朝鮮系無文土器は口縁部が断面円形を呈する甕口縁部である。

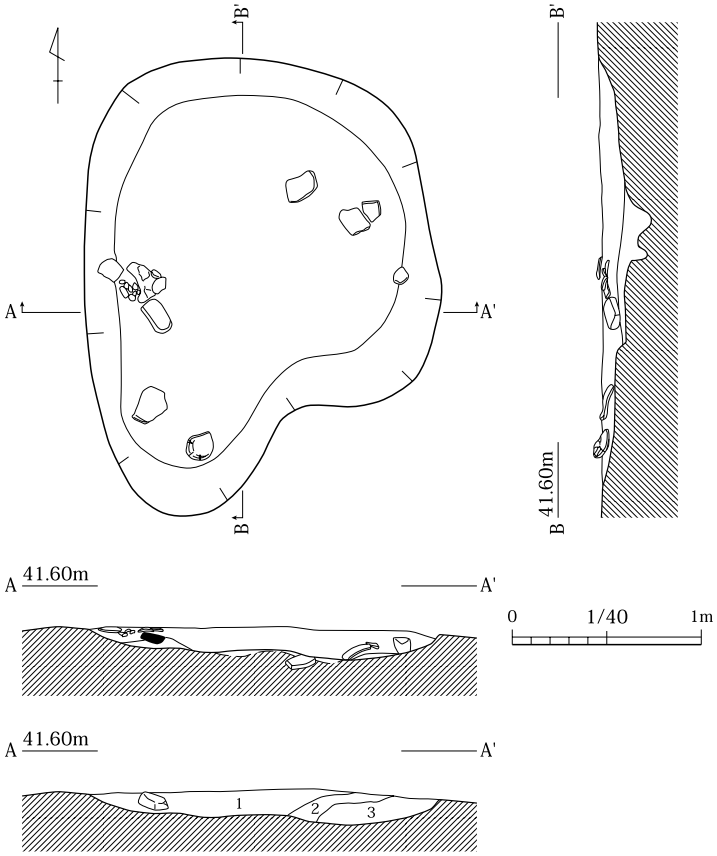


第291図 土坑14-S0039 出土遺物実測図

3　溝

溝14-S0002（第293図）

14グリッド４Ｉ～７Ｉに位置し、ほぼ東西に直線で延びる溝である。14-S0001住居と重複し、それより新しい。東端は撹乱で壊され、検出総延長は約14.5m、走行方向はN-87°-Eである。断面は浅い半円形で、底面は小さな凹凸が多い。深さは最深部で約20㎝を測るが平均すると12～15㎝程度である。埋土は底面直上に汚れた地山土が堆積し、上位は自然堆積層であった。埋土から図示した土師器の他、黒色土器、須恵器破片が出土した。



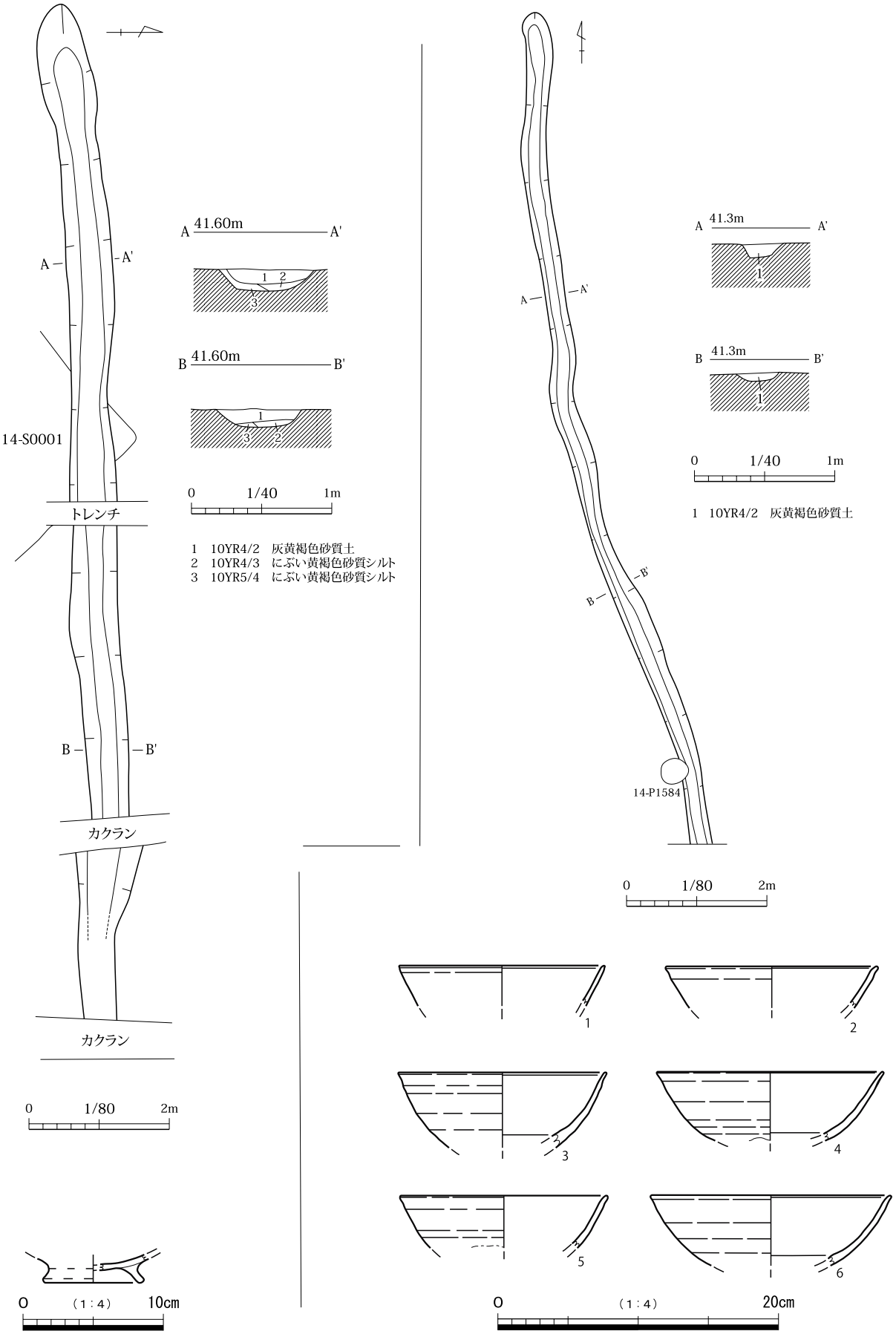
第292図 土坑14-S0039 平面・断面図

出土遺物（第293図）　土師器の高台付椀で、ロクロ整形、底面篦切り未調整。比較的高い高台を丁寧に貼り付け、外面は摩耗により調整は不明である。11世紀中ごろのものと考えられる。

溝14-S1513・14-S2008（第293図）

14グリッド８Ｄ～９Ｈ地区にかけて検出された小溝である。中央部で現代の撹乱により切られている。規模は、残存総延長約23m、幅約0.3m、深さは検出面から10㎝を測る。走行は南南東から北北西方向である。区画溝の一部と考えられる。埋土は灰黄褐色砂質土で、埋土中から白磁片が出土している。

出土遺物（第293図・図版80）　１～６はは白磁の碗である。1は口縁部のみで体部から直線的に外傾し、横ナデ調整を施し端部はシャープに丸く納めている。２～６の底部は破損しているため不明である。口縁部は体部からやや内弯し立ち上がり、端部は横ナデ調整によりやや外反しシャープに丸く納



第293図 溝14-S0002・S1513 平面・断面図、出土遺物実測図

めている。時期は大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶器編年よりその特徴を比較すると、１は白磁椀Ⅶ-2類、２～６は白磁椀Ⅴ-1a類に該当すると思われ、大宰府土器型式Ⅻに並行する12世紀中ごろと考えられる（山本1995）。

溝18-S0014（第298図）

13グリッド７Ｃ～18グリッド７Ｉに位置し、調査区西部を南北に走る長い溝である。環濠13-S0002と重複し、それより新しい。また、分岐している一部が新しい溝に壊されている。南北端ともに浅くなって消えており、本来更に延びる可能性もある。検出総延長約77.0m、走行方向はN-1°-Eである。断面は半円形もしくは逆台形を呈し、幅は最大約1.3m、深さは最深部で約18㎝、平均12～14㎝を測る。調査区中程で細い溝が分岐、合流しているが平面的には分離できなかったので一括して図示している。断面では新旧関係が認められ、細い溝が新しい。埋土はやや砂質のシルトであり、単一層。埋土から土師器、須恵器のほか陶磁器、石製品破片が出土した。

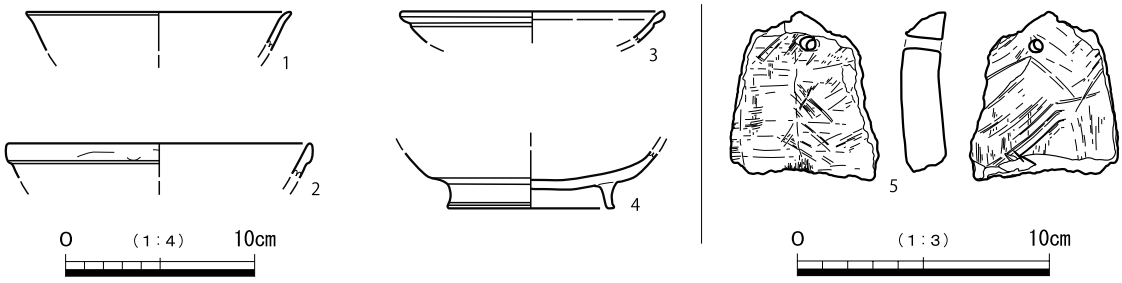
出土遺物（第294図）　１～３は白磁である。１は薄手の碗Ⅴ-3類である。斜めに開く器形で口縁部が短く外反する。２は口縁部が玉縁の碗Ⅳ-1a類で、外面に釉垂れがある。３は皿としたが口縁を玉縁とみれば碗かもしれない。外面の釉は口縁部のみかかる。これらの製作時期は11世紀半頃とみられるが、廃棄された時期は不明である。４は土師器高台付碗。ロクロ回転ヘラ削り整形後、「底部押し出し技法」により腰の張った丸い形態作り出され、ヘラ切り未調整の底部に断面台形で高い高台を貼り付けられている。時期は11世紀中頃のもので、白磁の製作年代とは一致する。５は滑石製の石製品破片である。外面に鑿痕を有し、穿孔が１ヶ所認められる。

溝18-S00015（第298図）

18グリッド８Ａ～６Ｊに位置し、調査区西部を南北に走る溝である。環濠13-S0002、溝18-S0014らと重複し、それらより新しい。南北端ともに調査区外へ延びる。検出総延長は約47.6m、走行方向はN-5°-Eである。断面は緩いV字形を呈し、幅は最大で約4.8m、平均３m前後を測る。深さは最深部で約1.3m、平均1.0～1.1mである。埋土は水成堆積層が認められ、用・排水路または堀割のような用途を考えることができる。埋土からはほとんど遺物が出土していないが、逆にこのことは他の遺構と隔絶した時代に構築されたことを示している。ただし、現在の地割とは一致しないので、少なくとも区画整理以前のものである。近世～近代であろうか。

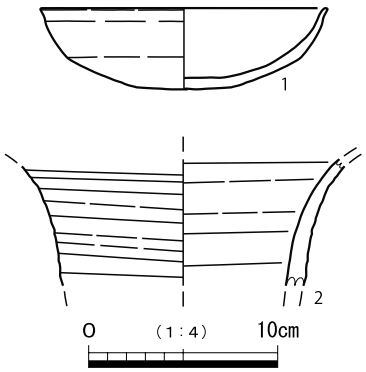
溝18-S00016（第298図）

18グリッド８Ａ～19グリッド1Aに位置し、ほぼ東西に延びる溝である。掘立建物18-S0013の柱穴、



第294図 溝18-S0014 出土遺物実測図

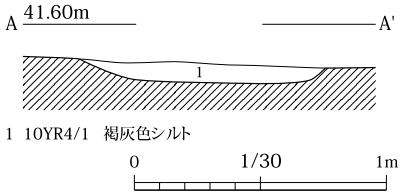
住居14-S0041やピット類と重複し、いずれも本溝が新しい。西端は18-S0014と重複して検出不能であった。検出総延長は約14.8m、走行方位はN-85°-Eである。断面は浅い半円形で、深さは最深部で約13㎝、平均６～８㎝であった。埋土は自然堆積と思える単一層で、土師器・須恵器破片が出土した。



第295図 溝18-S0016 出土遺物実測図

出土遺物（第295図）　１は土師器の杯である。口縁端部は上端で外反する。２は灰釉陶器で、壺の頸部である。ロクロ整形。小破片であるが、復元するとかなり大型になる。

溝18-S0501（第296図）



第296図 溝18-S0501 断面図

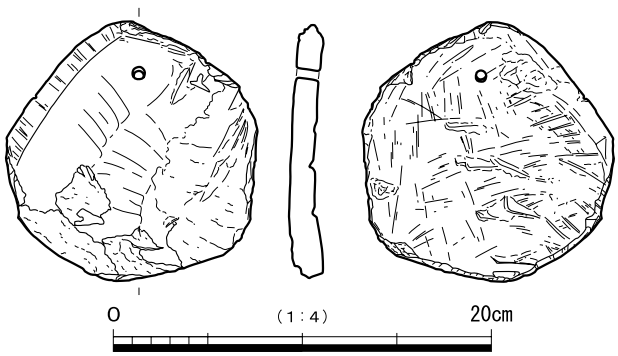
18グリッド１Ｉ～５Ｈ地区にかけて検出した溝である。溝の西側にて溝18-S502、東側にて溝18-Ｓ0506を切っている。平面形状は、西側から東方向にわずかに弓なり状を呈している。規模は検出長20m、幅1.6m、深さ８㎝を測る。溝の方位はほぼ東西方向を向いた状態で北から東へ70°振れる。埋土は褐灰色粘質シルトで埋められていた。土層では単一層である。遺物は中世の土師器片が出土した。

４　柱穴

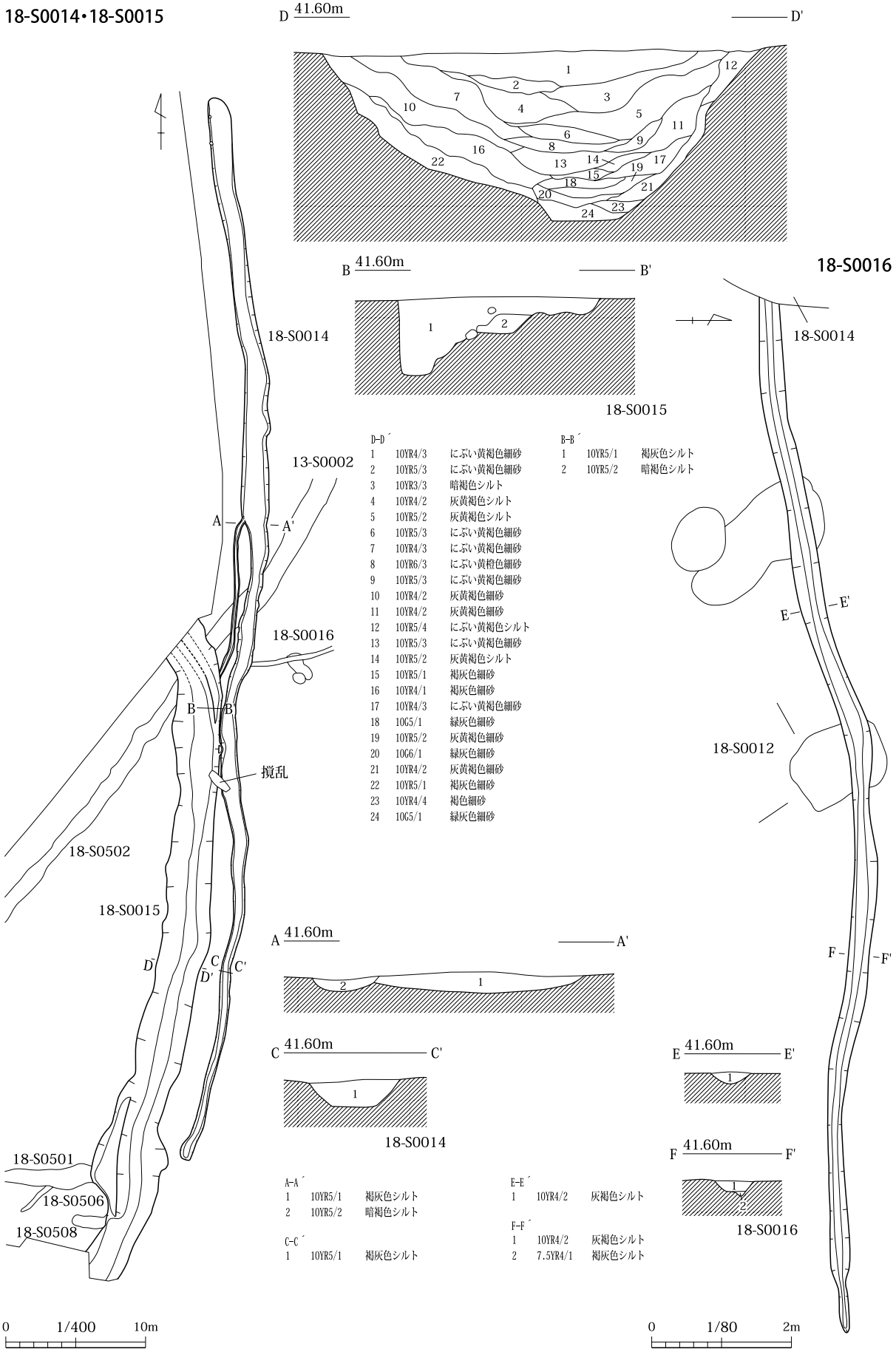
13-P0150（第281図）

13グリッド９Ｆ地区において検出した柱穴である。掘立柱建物13-S0010内に所在するが、その建物に付随するものではなく単独に存在する。直径35㎝、深さ30㎝を測り、柱穴内より下記遺物が出土している。

出土遺物（第297図・図版85）　滑石製の円盤状製品である。湾曲した板を略円形に加工している。内外面に刃痕が残る。径６㎜の貫通孔を設けるが加工以前か以後か不明。中世頃のものとみられる。



第297図 柱穴13-P0150 出土遺物実測図



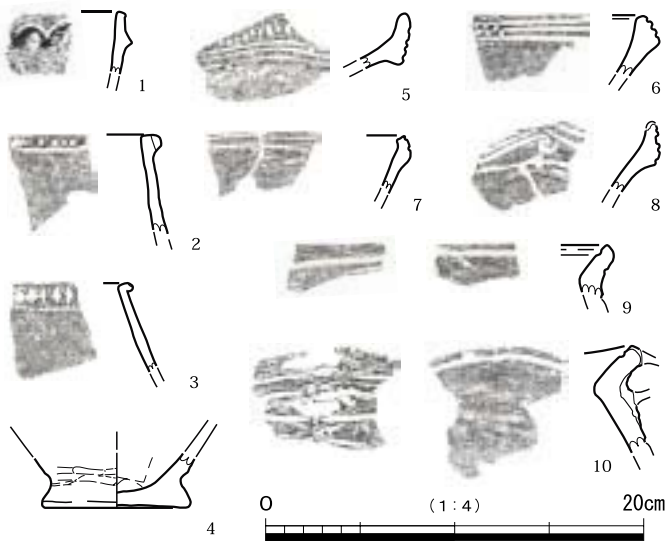
第298図 溝18-S0014～S0016 平面・断面図

第４項　遺構に伴わない出土遺物

１　縄文時代

土器（第299図・図版53）　ＢⅡ地区出土の遺構に伴わない縄文土器には、精製の深鉢・浅鉢、粗製の深鉢がある。その中でも今回は口縁の文様がある程度わかるものを図示した。

１は口縁部に波状の凸帯を巡らしているもので筑紫野市阿志岐シメノグチ遺跡からも類似した土器が出土している。砲弾形を呈していると思われ、「黒川式土器併行期で刻目凸帯出現の要素の一つ」と言われている。



第299図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図①

２・３はいわゆる刻目凸帯文土器で、15G-S0510（第176図）で分類した「甕形土器Ⅱ類」に属し、２は器厚や形状から小型品と考えられる。突帯は口縁部から斜めに下り小さな断面三角形を呈す。刻目は棒状工具で下から少し引き上げ気味に施文している。

３のやや大型品と考えられ突帯は口縁部から直線的に張り出し、断面三角形を呈す。刻目はヘラ状工具で下から引き上げるように施文している。４は深鉢の平底底部で、外端が強く外方へ張り出している。５から８の深鉢は凹点文（孔列文）や渦巻き文等の文様が幅広または山形の口縁に施されているが、形体的には広田式（小池1982）深鉢Aに類するものと考えられる。「く」の字形に口縁が立ち上がり内彎する頸部を介し胴部へ続き、口縁は波状（山形）と平縁のものがある。

５の広めの波状口縁部はほとんど内傾せず、直立気味に立ち上がり口縁部に明瞭な稜をなして屈折し内彎する頸部に続く。口縁部には３条の沈線と波状部には10点以上の孔列文が施されている。

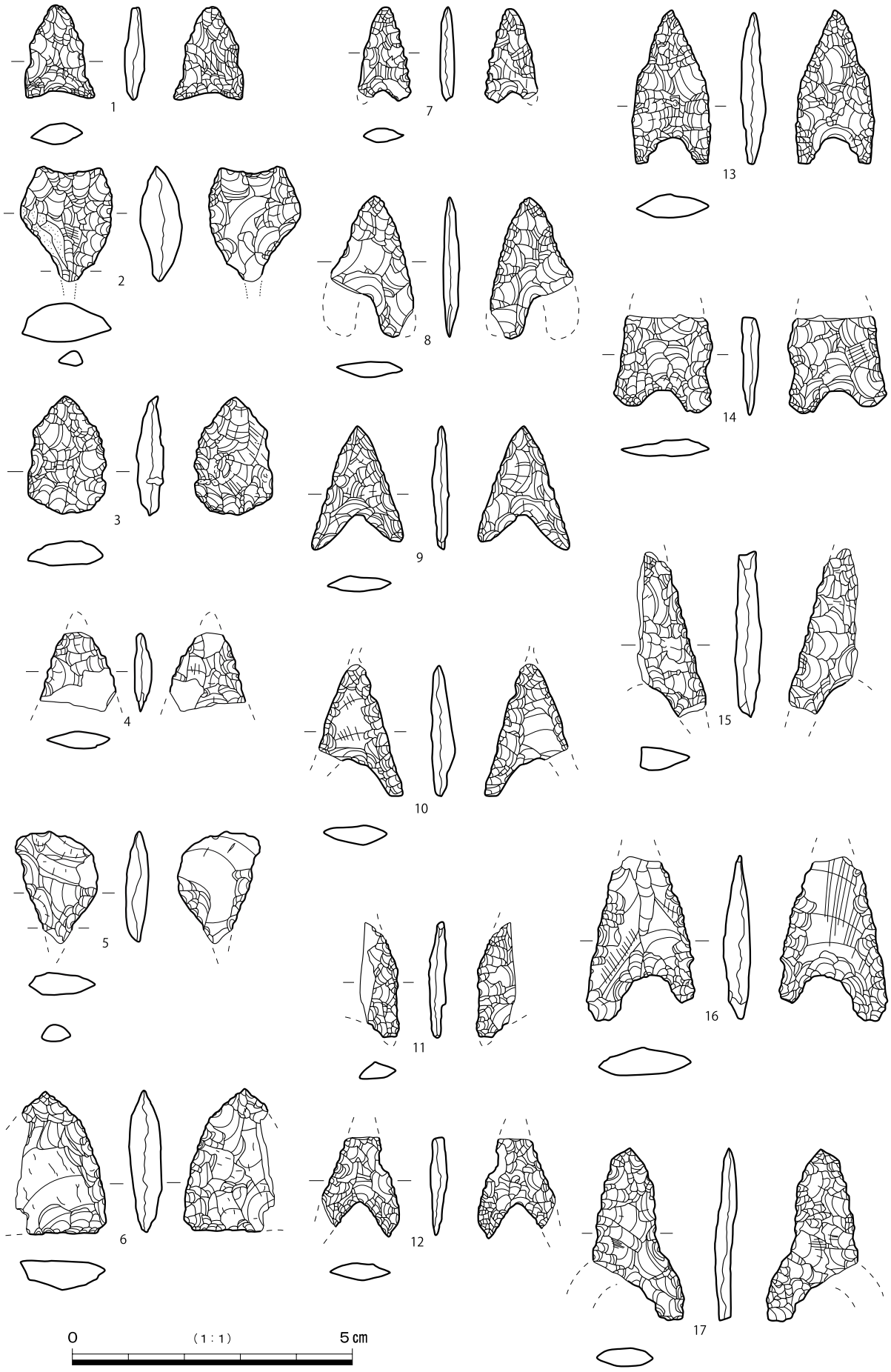
６の幅の広い口縁部の外面は稜を持って内傾し、内面は頸部に直線的に続き断面三角形を呈している。口縁は平縁と思われ、文様帯には凹線のような太目の沈線が３条めぐり上２条の数か所に６点以上の上下に列に配置された凹点紋が施され、内外面共に精良に仕上げられている。

７・８の幾分狭い口縁部は山形口縁で、やや丸み気味の稜を持って内傾し、２条の沈線がめぐり８は、山形部分に左巻きの小さな渦巻文様が施されている。頸部は上方に開き気味となっており調整は内外面共に精良である。

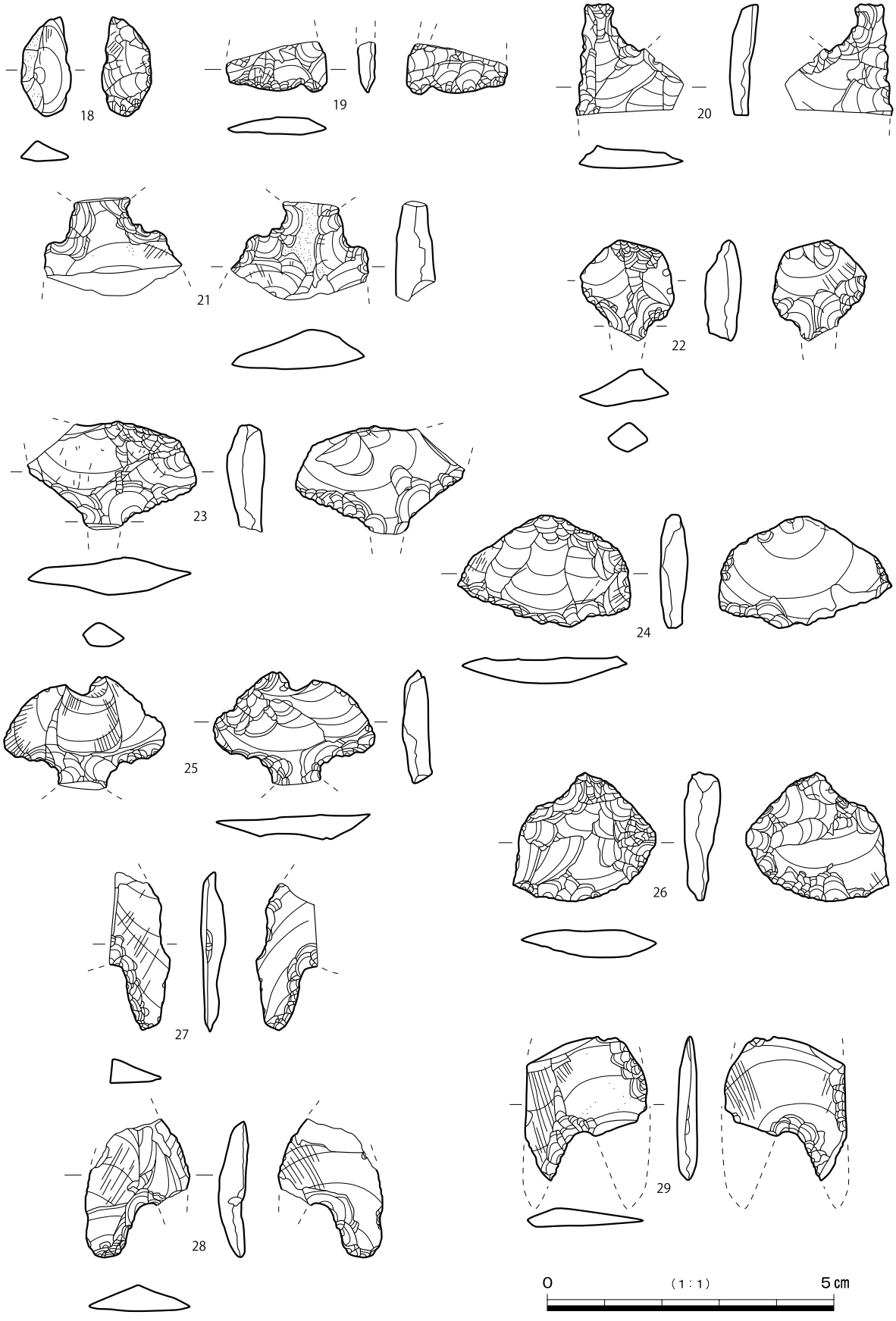
９・10はマリ形土器である。極めて短い口縁で端部は片玉縁につくられ短く屈折して深めの体部へと続く。屈折部の内面の稜はいずれもシャープで外面の体部との境がしっかりしたもの10と、あいまいで丸みのある９がある。また10に見られるように外面に沈線による文様が施されているものもあり、調整は内外面共に丁寧なヘラ磨きで精良である。

以上、図示した縄文土器で５～８の深鉢類は広田式の範疇に入り、後期末葉から晩期初頭のもので１の波状凸帯文土器と９・10のマリ形土器は黒川式新段階併行期晩期中葉のもの、２・３は夜臼Ⅱ式併行晩期後葉のものと考えられ、ＢⅡ区は縄文晩期初頭から後葉までの土器が出土している。

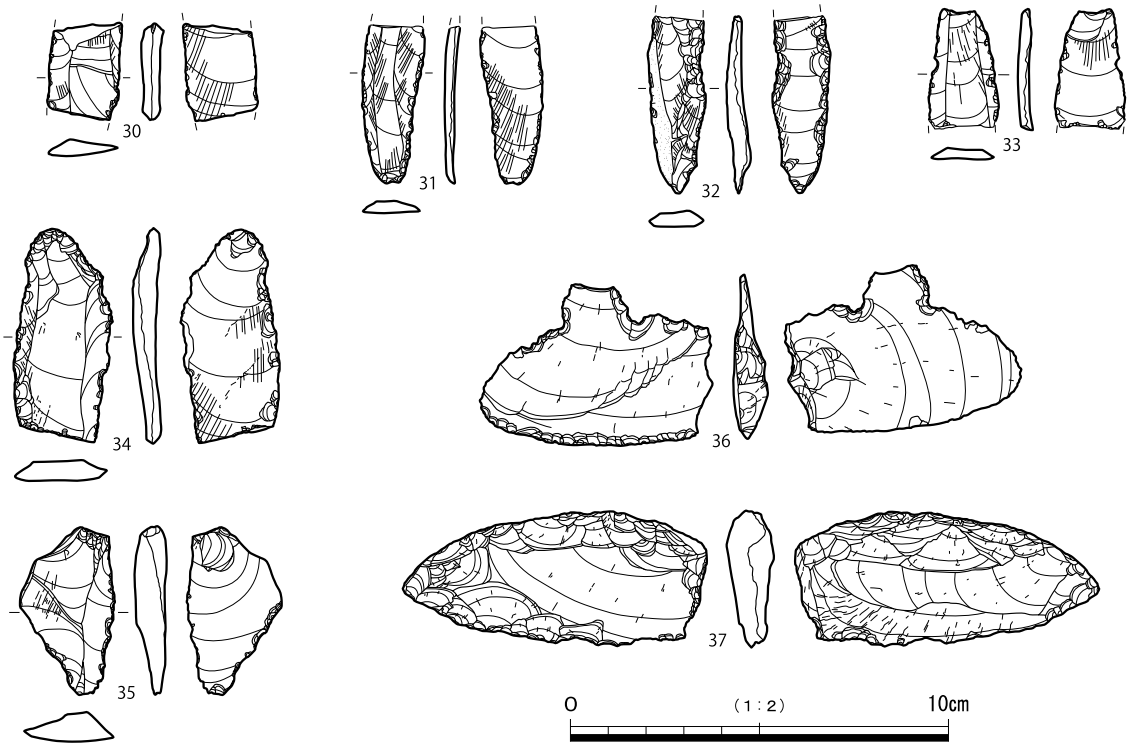
石器（第300～302図・図版81, 82）　ＢⅡ区出土の石器類を器種別に図示した。遺構から出土した石



第300図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図②



第301図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図③



第302図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図④

器は、住居15-S0510下層より出土した石鏃類のみである。その他石器は包含層や新しい遺構の埋土から多量に出土しており、縄文晩期の土器とともに使用されていた石器と考えられる。石器に使用されている石材はＢⅠ区同様圧倒的に腰岳産黒曜石が多く、次に多久産のサヌカイト、後は乳白色の姫島産黒曜石が使用されている。

打製石鏃（第300図１～17, 第301図18） 今回残存状況の良い18点を図示し、うち13点（１～３、７、10～18）が腰岳産黒曜石製で４点（４～６、９）が多久産サヌカイト製、残り1点8が姫島産黒曜石を使用している。また、各石器の法量については観察表10に記している。

１は、凹基鏃で基部の抉りは浅くカエシの端部は対照でなく左はやや内側に右は外側に向いている。表面の調整により素材の面はほとんど残っていない。縁辺の調整は細かくほぼ完形である。石材は腰岳産黒曜石。

２は、やや楕円形の凹基鏃で基部の抉りが浅くカエシは内斜めに形成されている。裏面には素材剥離面を残し、縁辺の調整は粗い。石材は腰岳産黒曜石。

３は、凸無茎鏃で基部の突起部は低く小型の剥片素材を利用しその剥片素材面を残す。表面の縁辺調整は細かいが、裏面の加工調整は少ない。この形態の石鏃は本調査ではこの１点のみである。石材は腰岳産黒曜石。

４は、基部が欠損しているため基部の形態は不明である。素材剥離面は残っておらず、表裏面共に比較的丁寧な加工が施されている。石材は多久産サヌカイト。

５は、石鏃未製品で作成中に左カエシが破損したと思われる。先端部縁辺のみ加工し使用することなく作成を終わっている。石材は多久産サヌカイト。

６は、平基鏃で平面形は三角形よりも五角形にちかく表面に剥片素材面を多く残す。左側縁辺は丁

寧な調整が施されているが、左縁辺は作成中破損したのか未調整のまま終わっている。石材は多久産サヌカイト。

７は、凹基鏃でカエシが破損しているものの抉りは深かったと考えられる。表裏面とも丁寧な加工が施され、縁辺部の調整も細かく施されている。石材は腰岳産黒曜石。

８は、凹基鏃で薄い剥片素材を使用したと思われ、素材の剥離面をそのまま利用しているところがある。右側の縁辺調整は細かいが、左側の縁辺調整は粗い。石材は姫島産黒曜石。

９は、凹基鏃で抉りも深くカエシは先端部から直線的に下りてくる典型的な「Ｖ」字鏃である。素材剥離面は残っておらず、表面の調整は丁寧で裏面はやや粗雑でほぼ完形である。石材は多久産サヌカイト。

10は、９同様凹基鏃で抉りの深い「Ｖ」字鏃で縁辺部のみ調整され表面裏面ともに自然面か素材剥離面を残す。石材は腰岳産黒曜石。

11は、凹基鏃で半身が欠損しているが抉りはやや深く、カエシが外側にやや開き五角形を呈したと考えられる。縁辺部の調整は細かく素材剥離面はほとんど残っていない。石材は腰岳産黒曜石。

12は、凹基鏃で抉りは深くカエシはやや内側に入る。表面裏面共に丁寧な加工が施され縁辺部の調整も丁寧である。石材は腰岳産黒曜石。

13は、凹基鏃で抉りは深くカエシは直線的である。平面形は五角形を呈し、素材剥離面を一部残す。縁辺部の調整もやや粗雑で完形である。石材は腰岳産黒曜石。

14は、凹基鏃で抉りは浅くカエシは直線的である。先端部を破損しているが、五角形を呈していたと考えられる。素材剥離面が残っており縁辺部の調整も粗雑である。石材は腰岳産黒曜石。

15は、凹基鏃で抉りは浅く半身が欠損している。やや大型のもので縦長の三角形を呈している。表面裏面ともに丁寧な加工が施され縁辺部の調整も細かい。石材は腰岳産黒曜石。

16は、凹基鏃で抉りは深くカエシはやや内側に入る。縦長剥片素材を利用し、表面裏面共に素材面を大きく残す。縁辺部のみを調整しいわゆる剥片鏃と言われるものである。石材は腰岳産黒曜石。

17は、凹基鏃で抉りは深くカエシは大きく開き、内側に納まる。いわゆる二股鏃と言われるもので縁辺部の調整は細かく、カエシ端部は平に整形してある。石材は腰岳産黒曜石。

剥片石器（第310図18・19、27～35）　これらの石器は石鏃を作成途中に破損した未製品や剥片の縁辺部を調整し刃器や小型スクレイパー、削器として使用されたものと考えられる。

18は、自然面を残す剥片素材の縁辺部に調整を施し刃部を作り、削器として使用されたと考えられる。使用痕と思われる微細剥離が確認されている。石材は腰岳産黒曜石。

19・27～29は石鏃未製品の転用品で縁辺部の細かい調整はカエシの端部のみに認められ、剥片石器として削器及び小型スクレイパーとして使用されたと考えられる。

30・31・33は、縦長剥片をそのまま削器に使用したもので使用痕と思われる微細剥離が縁辺部に見られる。

32・34・35は、縦長剥片の縁辺部のみに簡易な剥離調整を施し削器と掻器に使用しており、刃部に使用痕と思われる微細剥離が認められる。これらの剥片石器は断面が三角形または台形を呈している。31・33・34は鈴樋技法である。石材はすべて腰岳産黒曜石である。

石錐（第301図20）　20は剥片の縁辺部を調整し形を整え石錐として使用されたと考えられ、先端は破損している。作りは粗く石鏃の未製転用石器の可能性も考えられる。石材は腰岳産黒曜石。

つまみ型石器・小型スクレイパー（第301図21～26）　これらの石器の特徴は縦長剥片の両側縁に抉

りを入れ切断し、縁辺部の加工も表面しか行われず削器として使用され、微細剥離が認められる。断面は三角形を呈しつまみ型石器と呼ばれ、掻器または刃器とし小型のスクレイパーとして使用されたと考えられ、石材はすべて腰岳産黒曜石である。

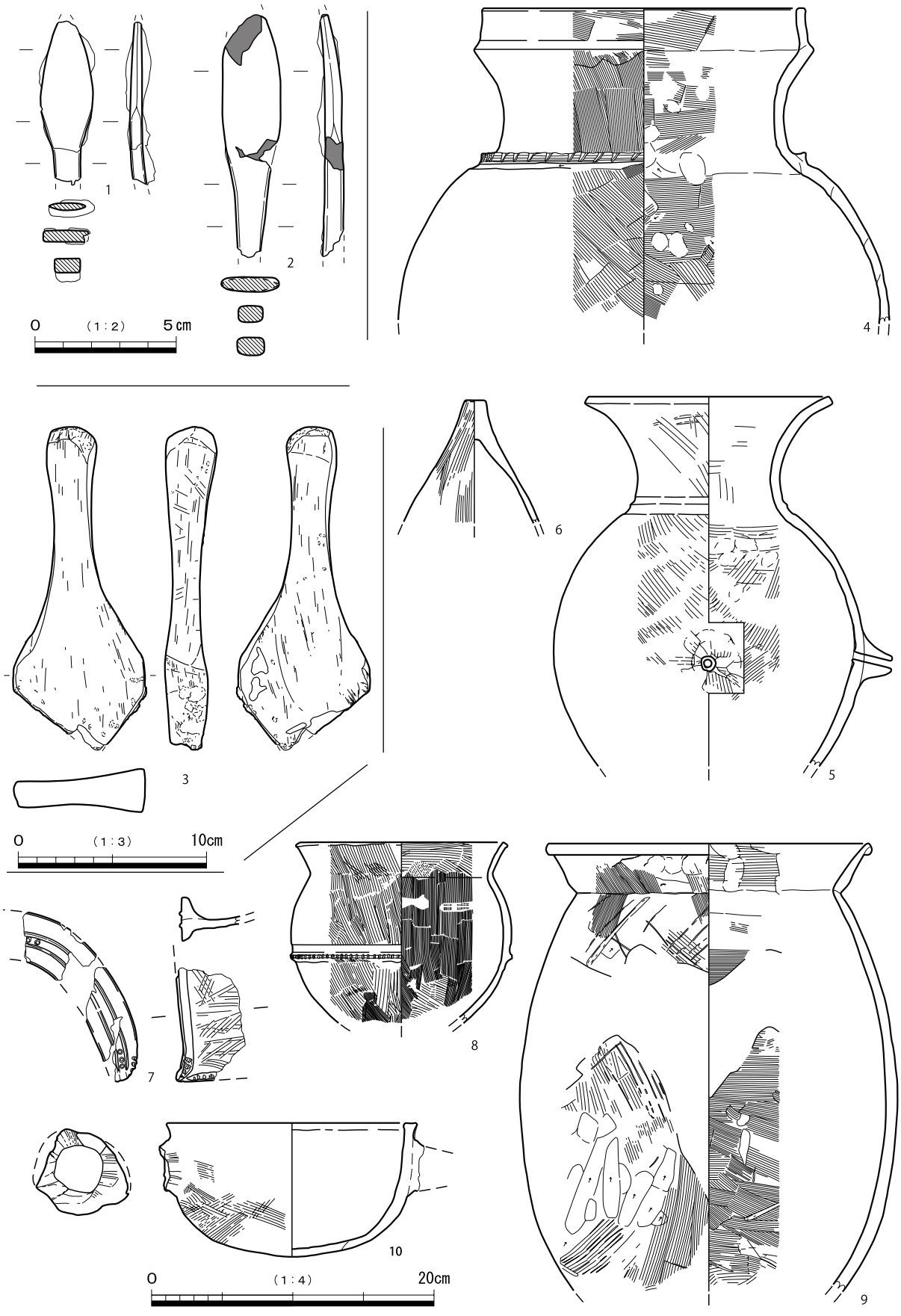
スクレイパー（第302図36・37） 36はつまみの上端がやや欠損し刃部も1/4欠損している。縦長の剥片を横に使い側縁に抉りを入れてつまみを作り出している。作りは雑で刃部とその対辺を片面からのみ調整を加え裏面は素材剥離面のみでほぼ調整されず、剥片石器にちかい。

37は、横長剥片を素材とし笹の葉状に整形を行い全体にゆるく彎曲する。つまみは無くほぼ全周を刃部として使用したと思われる。表面裏面共に素材剥離面が多く残り、作りは粗雑である。これらの石材はすべて多久産サヌカイトを使用している。

今回図示した遺構に伴わない石器の90%以上は腰岳産黒曜石が使用され、多久産サヌカイトは9%、残り１%以下で姫島産黒曜石が使用されている。石鏃の形態からこれら石器の時期は、第300図の12・15が縄文早期のものと考えられ１・２・６～８、10・11・13・17は縄文後晩期以降のものでその他の石器についても作りの粗雑さから見ても後者にちかいものと思われる。また、第302図の36・37のスクレイパーはすべて縄文後期から弥生前期初頭に相当すると思われる。

２　弥生～古墳時代

土器・鉄器・石器（第303図・図版76） １は14-4F地区確認面から出土した鉄製の鏃である。住居跡が重複する範囲の直近からの出土であり、いずれかの住居跡埋土に含まれていたものかもしれない。有茎式に属す。刃部先端と茎部端を欠損する。残存長5.8㎝、最大幅1.9㎝、厚さ４㎜である。刃部は、柳葉形である。刃部の横断面は、凸レンズ状の両丸造である。茎部は刃部と連続してつながり、刃部側が幅広く茎部端に向かって徐々に幅が狭くなる。茎部の断面は、長方形である。いずれも茎部を欠損する。２は15-１Ａ地区から出土した鉄製の鏃である。有茎式に属す。刃部先端と茎部端を欠損する。側面は反っているが、土圧の可能性が高い。残存長8.6㎝、刃部最大幅2.1㎝、厚さ６㎜である。刃部は柳葉形であり、凸レンズ状の両丸造である。刃部から茎部にかけては、緩やかに連続する。茎部は断面長方形であり、茎部端にいくにしたがい徐々に幅を狭める。３は砥石で、上下端を除く４面を使用している。使用による磨滅が著しい。４は口縁部が直立気味に立つ複合口縁壺である。頸部に刻みを施した断面三角形の突帯がめぐる。内外面ともにハケ調整が施される。５は胴部中位にやや下向きの注口を付している特異な壺である。頸部から口縁部にかけて大きく外反する。体部は到卵形を呈する。６は円錐状を呈する異形土器で、器種は不明。外面にハケ調整が施される。７は近江系の手焙り形土器破片である。覆いの開口部付近の部位であり、開口部前縁の平坦面に沈線を施す。覆い部には二条一組の沈線を横位、斜位に施される。この文様構成は近江系の特徴であり、胎土も精製であることから搬入品である。８は体部に一条の刻み目突帯を付した小型甕である。内外面ハケ調整で少し粗雑感がある。９は長胴甕である。口縁端部に粘土を貼り付け玉縁状にしている。内外面にハケ調整が施される。10は粗製の鉢でやや深い椀状を呈する。二次焼成を強く受け、内外面が変色し煤が付着している。口縁下方に把手の剥離痕が見られる。坩堝として使用されたのあろうか。



第303図 ＢⅡ地区遺構に伴わない出土遺物実測図⑤

第４章　自然科学的分析

第１節　住居跡出土炭化米

立明寺地区遺跡Ｂ地点調査出土大型植物遺体

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

今回の分析調査では、弥生時代終末期の竪穴住居跡から大量に出土したイネの胚乳主体の大型植物遺体を対象に、イネの穎（果）の有無と、イネ以外の栽培植物の有無に着目した大型植物遺体同定を実施する。

２　試料

試料は、水に浸した状態の堆積物２点（15-S505住居跡、15-S509住居跡）と、発掘調査時に水洗選別が行われた乾燥状態の種実遺体試料２式（14-S1502住居跡、15-S509住居跡）である。

３　分析方法

堆積物試料は、粒径0.5㎜の篩を通して水洗選別する。この水洗選別後の試料と、発掘調査時に水洗選別された試料を、粒径４㎜、２㎜、１㎜、0.5㎜の篩を通して、粒径毎にシャーレに集める。粒径の大きな試料から双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実を抽出する。多量確認されるイネの胚乳は、完形個体（状態良好・表面に土が覆う状態）と1/2個以上の破片を抽出する。イネの穎の破片は、基部の果実序柄が確認される個体を抽出する。

抽出した種実遺体は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数える。なお、多量確認されるイネの胚乳等には土が付着しているものが認められたが、これらの試料から土を取り除くと破損する恐れがあったため、付着した土を含む状態で容量（水洗選別試料は容量と重量）を別途計測している。また、同定・計数時に穎の付着が確認されるイネの胚乳は、別に抽出する。次に、イネの胚乳の状態良好な完形個体1,000個以上（15-S505住居跡は全375個）を目処に、胚乳両面の実体顕微鏡下観察による穎（果）の付着を精査し、穎付着胚乳の抽出と精査前抽出分を含めた計数を行う。イネとヒエ近似種の状態良好な穎付着胚乳各１個は、写真撮影後、走査型電子顕微鏡下観察・写真撮影を行う。

種実抽出後の残試料は、イネの胚乳1/2個未満の破片を含む炭化物と土粒・砂礫に分け、容量（水洗選別試料は容量と重量）を測る。分析後は、種実を種類毎に容器に入れて返却する。堆積物試料から検出された種実は、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

４　結果

同定・計数結果を表１に示す。栽培種のイネの炭化した胚乳が、15-S505住居跡より799個、15-S509住居跡（堆積物）より5,768個、14-S1502住居跡より15,669個、15-S509住居跡（水洗選別）より36,868個、計59,104個検出された。完形個体の比率は、14-S1502住居跡は４割、15-S505住居跡は５割、15-S509住居跡（堆積物・水洗選別）は８割程度を占める（表２）。また、完形個体の一部を精査した結果、完形個体（精査対象）に占める穎付着個体の比率は、15-S505住居跡は１％、15-S509住居跡（堆

表1　大型植物遺体同定結果

試料状況	種類名	部位	抽出試料の破損状態など			上段:試料状態　中段:遺構名　下段:単位									
						堆積物(水浸)600cc				水洗選別(乾燥)					
						15-S505		15-S509		14-S1502			15-S509		
						個	cc	個	cc	個	cc	g	個	cc	g
植物遺体(炭化)	ヒエ近似種	胚乳	完形		穎付着	−	−	−	−	−	−	−	3	<0.1	<0.1
	イネ	穎	破片			68	<0.1	507	0.5	4	<0.1	<0.1	10	<0.1	<0.1
		胚乳	完形	精査対象	穎付着	5	<0.1	164	3.5	63	2	0.5	863 (14)	20	8.5
					穎付着・土付着	−	−	13	<0.1	146	6	2.3	9	1	0.4
					穎付着なし	370	8	1410	30	1619	35	13.8	1150 (37)	25	10.5
				精査対象外	状態良好	−	−	2142	40	7249	160	63	30520	580	295
					土付着	−	−	518	15	1449	37	19.3	278	10	5.6
			破片		1/2以上	424	5	1521	15	5143	80	31.5	4048	90	40
植物遺体(未炭化)	オヒシバ	種子				−	−	1	<0.1	−	−	−	−	−	−
	イネ科	果実				2	<0.1	9	<0.1	3	<0.1	<0.1	1	<0.1	<0.1
	カヤツリグサ科	果実	分析中発芽			1	<0.1	−	−	−	−	−	−	−	−
	ツユクサ	種子				−	−	−	−	2	<0.1	<0.1	−	−	−
	木材					−	−	−	−	5	<0.1	<0.1	1	<0.1	<0.1
残試料	イネの炭化胚乳含む		1mm以上			*	3	*	11	*	310	120	*	100	45.6
			0.5-1mm			*	2.5	*	3	*	9	5.1	*	2	1.3
			0.5mm未満			−	−	−	−	*	12	8.2	*	3	2.7
	炭化材・イネ科の稈など					49	<0.1	*	0.5	*	2	0.6	*	2.5	1.1
	昆虫					−	−	−	−	19	<0.1	<0.1	1	<0.1	<0.1
	土粒・砂礫		4mm以上			*	8	*	40	*	20	13.1	*	6	5.4
			2-4mm			*	50	*	70	*	60	47.8	*	45	44
			0.5-2mm			*	50	*	42	*	45	36.8	*	30	31.9

注)「*」：未計数。　容量(cc)・重量(g)には表面に付着した土が含まれる。

注)括弧内の数字：小型個体の個数

表2　同定試料におけるイネ胚乳の完形率と完形個体の穎付着率

項目			上段:試料状態　下段:遺構名									
			堆積物(水浸)				水洗選別(乾燥)					
			15-S505		15-S509		14-S1502			15-S509		
同定結果	破片個体(1mm+1/2個以上)		*	8 cc	*	26 cc	*	390 cc	151.5g	*	190 cc	85.6g
	完形個体	精査対象と精査対象外	375 個	8 cc	4247 個	89 cc	10526 個	240 cc	98.9g	32810 個	636 cc	320g
		精査対象	375 個	8 cc	1587 個	33.5cc	1828 個	43 cc	16.6g	2012 個	46 cc	19.4g
		精査対象(穎付着)	5 個	<0.1cc	177 個	3.5cc	209 個	8 cc	2.8g	872 個	21 cc	8.9g
穎付着率/完形個体(精査・精査対象外)			1.3%	<1.3%	4.2%	4%	2%	3.3%	2.8%	2.7%	3.3%	2.8%
穎付着率/完形個体(精査対象)			1.3%	<1.3%	11.2%	10.4%	11.4%	18.6%	16.9%	43.3%	45.7%	45.9%
完形率(完形/(完形＋破片))			*	50%	*	77.3%	*	38.1%	39.5%	*	77%	78.9%

注)「*」：未計数

積物）・14-S1502住居跡は10%、15-S509住居跡（水洗選別）は40%程度であった（表２）。さらに、複数個の穎果が密着した状態や、多数の穎果をつける果序（小穂）の小軸（中心軸）が付着した状態も確認された。

イネは、炭化した穎の破片も検出され、15-S505住居跡より68個、15-S509住居跡（堆積物）より507個、14-S1502住居跡より４個、15-S509住居跡（水洗選別）より10個、計589個が確認された。穎は、胚乳の検出個数に対し、乾燥した水洗選別試料よりも水に浸した堆積物試料から多く検出された。

イネ以外の栽培種は、ヒエ近似種の炭化胚乳が15-S509住居跡（水洗選別）より３個検出された。

その他に、炭化材やイネ科の稈などの炭化植物片が各試料より検出され、組織形態の確認方法が炭化材と同じであるため一括した。炭化していない植物は、オヒシバの種子が15-S509住居跡（堆積物）より１個、イネ科の果実が各試料より計11個、カヤツリグサ科の果実が15-S505住居跡（堆積物）より１個、ツユクサの種子が14-S1502住居跡（水洗選別）より２個、木材が14-S1502・15-S509住居跡（水洗選別）より計６個確認された。植物以外は、昆虫や土粒・砂礫が確認された。

以下に、本分析で同定された種実の形態的特徴等を、炭化種実、炭化していない種実の順に記す。

＜炭化種実＞

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳、胚乳を包む穎（果）が検出された。炭化しており黒色。胚乳は長さ４～５㎜、幅２～３㎜、厚さ1.5㎜程度のやや偏平な長楕円体。一部（15-S509住居跡）長さ3.7㎜、幅1.7㎜、幅0.7㎜程度の小型個体もみられ（図版１-７）、未熟または成熟しなかった個体と思われる。胚乳の基部一端には胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で２～３本の隆条が縦列する。火を受けたことによる焼け膨れや、胴切れ（短軸方向に割れている）がみられる。状態良好な個体には、表面に穎果の破片が付着した状態（図版１-１～３・６・７）や、複数個の穎果が密着した状態（図版１-３）、多数の穎果をつける果序（小穂）の小軸（中心軸）が付着した状態（図版１-１・２）が確認される。

穎果は、長さ６～7.5㎜、幅３～４㎜、厚さ２㎜程度のやや偏平な長楕円体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と１対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は５脈、内穎は３脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。破片は果実序柄が確認される個体を抽出しており、最大で３㎜程度（図版１-４・５）。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する（図版１-６c）。

・ヒエ近似種（*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno）

胚乳が確認された。炭化しており黒色、長さ2.2㎜、径1.5㎜程度のやや偏平な広卵体。背面は丸みがあり腹面は偏平。表面はやや平滑で穎（果）の付着が確認される。果皮は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が配列する。

実体顕微鏡下では、栽培種のヒエと周辺域に生育していた可能性があるイヌビエ等の他のイネ科野生種との厳密な区別は困難であるが、状態良好な１個の走査型電子顕微鏡下観察の結果、ヒエにみられる表皮長細胞（松谷,1980;2001など）が一部確認された（図版２-８d左下付近）。同試料からはイネの炭化胚乳が多量供伴する点からも、確認された胚乳は栽培種のヒエである可能性が高いと判断される。

＜炭化していない種実＞

・オヒシバ（*Eleusine indica*（L.）Gaertner）　イネ科オヒシバ属

種子が検出された。暗褐色、長さ1.2㎜、径0.7㎜程度の三稜状狭倒卵体。20数個の細い隆条が基部

の臍から放射状に配列する。

・イネ科（Gramineae）

果実が確認された。形態上差異のある複数種を一括した。淡灰褐色、長さ２～３㎜、径0.8～1.5㎜程度の半狭卵体。背面は丸みがあり腹面は平ら。果皮表面は平滑-粗面で、微細な縦長の網目模様が配列する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。暗灰褐色、長さ1.5㎜、径１㎜程度の三稜状倒卵体。頂部の柱頭部分はやや延び、断面は三角形。基部は切形。果皮表面には微細な網目模様がある。分析中発芽が確認される（図版２-12）。

・ツユクサ（*Commelina communis* L.）　ツユクサ科ツユクサ属

種子が検出された。灰褐色、径３㎜程度の半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。背面と側面の表面には、大きなすり鉢状の孔が散在する。他の面には円形の小孔が散在する。

５　考察

各住居跡からは、多量のイネの炭化胚乳以外に、炭化した穎・小軸やイネ科の稈（イネに由来する可能性が高い）などの炭化植物片が検出された。イネの炭化胚乳に占める完形個体の比率は、４割（14-S1502住居跡）から８割（15-S509住居跡）と高率であった。多くの胚乳が明瞭に形をとどめる良好な保存状態で、完形個体（精査対象）に占める穎付着個体の比率は、15-S509住居跡（堆積物）と14-S1502住居跡で１割、15-S509住居跡（水洗選別）で４割程度であった。薄く壊れやすい穎の特徴と試料の由来（水浸または既に水洗選別された乾燥状態）を考慮すると、穎付着率は非常に高いと判断される。検出された胚乳は、脱穀調理前の生米・穎果の状態で火を受け住居内に残存したことが推定され、発掘調査時の水洗等の検出過程で穎が脱落した可能性が考えられる。さらに、複数個の穎果の密着や小軸が付着した個体が確認されることから、果序（稲穂）の状態で火を受けた可能性が指摘され、発掘調査時の所見を支持する結果と言える。

イネ以外の栽培種では、ヒエ近似種の炭化胚乳が15-S509住居跡（水洗選別）より３個確認された。イネに比べると非常に少ないが、ヒエは当時の本遺跡周辺域でイネと共に利用されていた可能性がある。

一方、炭化していない種実では、オヒシバ１個（15-S509住居跡）、イネ科15個（各試料）、カヤツリグサ科１個（15-S505住居跡）、ツユクサ２個（14-S1502住居跡）が確認された。明るく開けた場所などに生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多いことから、調査区周辺域の草本群落に由来するものと考えられる。ただし、分析中に発芽した個体（カヤツリグサ科）が認められるなど保存状態が極めて良好であることと、遺跡の立地より、炭化していない種実が長期間残るとは考えにくいことから、後代の種実が混入した可能性が高い。この点について、考古遺跡から出土する種実のうち、低湿地の遺跡以外から出土した炭化していない種実は、炭化物と同様に扱うには問題があるとされている（吉崎,1992など）。また、遺物包含層の年代観と出土した種実遺体の年代測定結果が異なる事例（木下,2003;高宮,2003など）もあることから、調査地点である住居跡を覆う堆積物の成因や試料採取時及び採取後の履歴、検出された種実の年代等の検証を行い、慎重に評価することが望まれる。

引用文献

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

木下尚子,2003,遺物包含層における現代イネ混入の検討.考古学研究室報告　第38集,熊本大学文学部考古学研究室,55-62.

松谷暁子,1980,十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について.浦幌町郷土博物館報告,第16号,203-211.

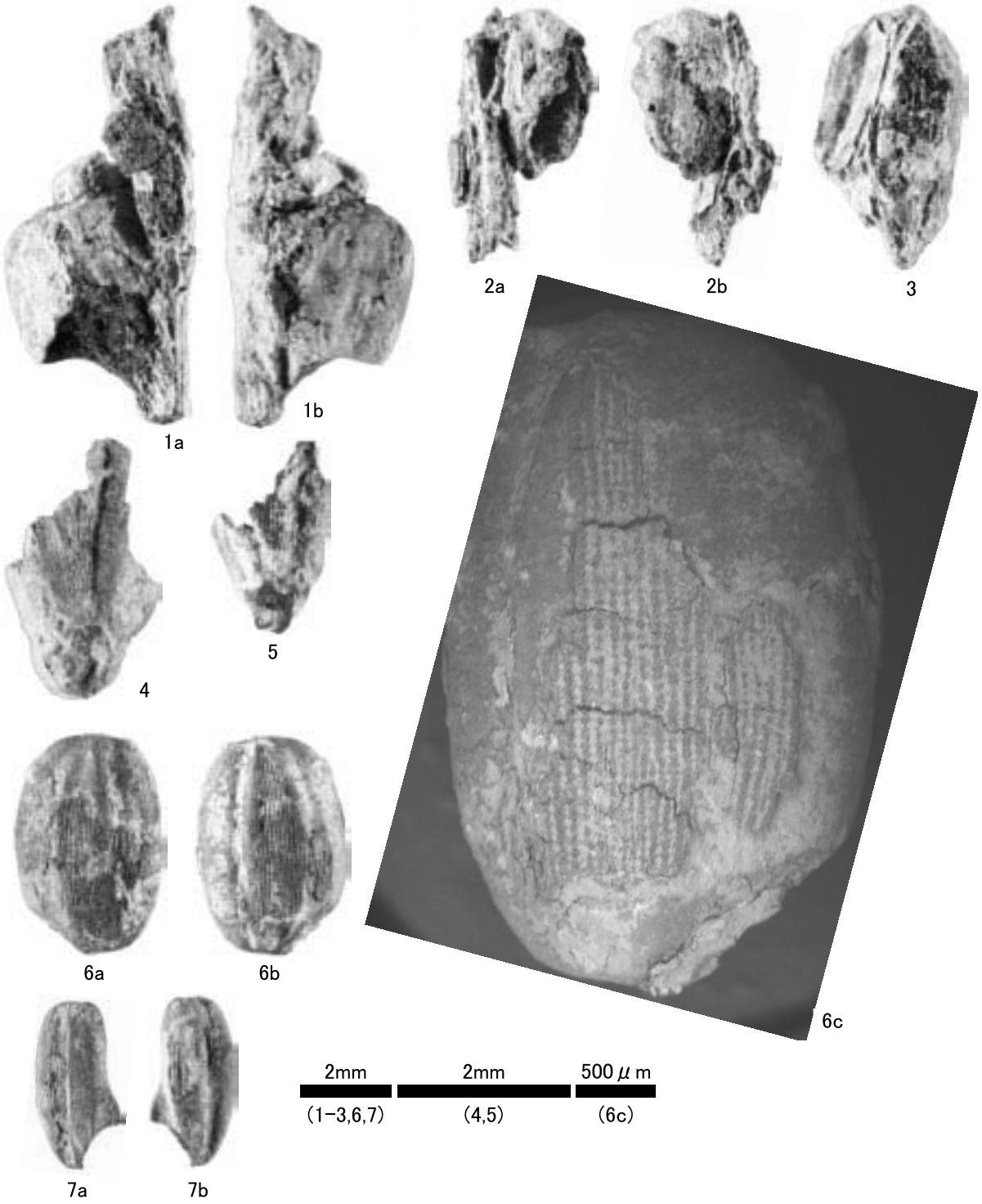
松谷暁子,2001,灰像と炭化像による先史時代の利用植物の探求.植生史研究,10,47-66.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

高宮広土,2003,ナガラ原東貝塚出土の植物遺体（2002年度）.考古学研究室報告　第38集,熊本大学文学部考古学研究室,49-54.

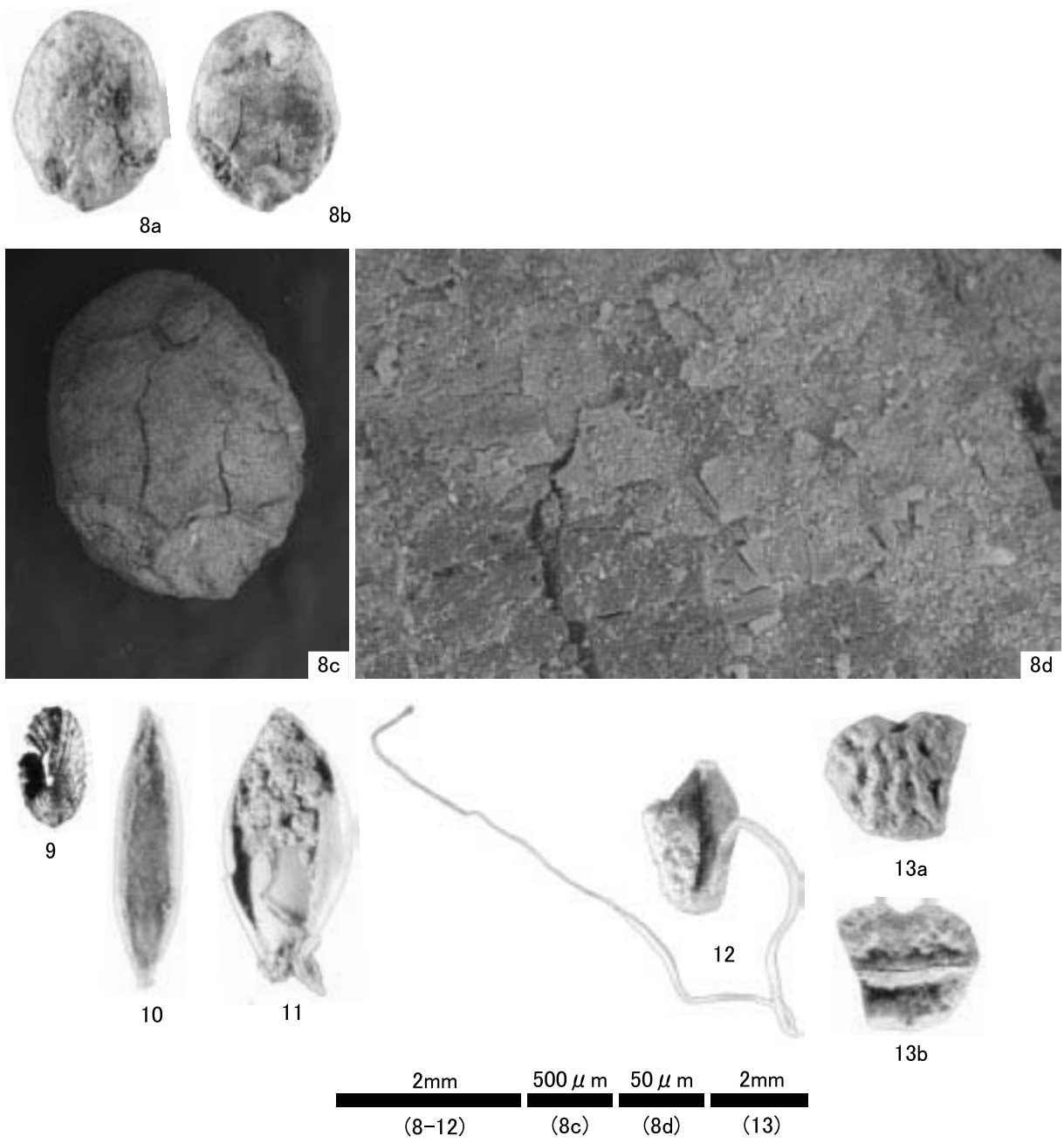
吉崎昌一,1992,古代雑穀の検出.考古学ジャーナル,355,2-14.

図版１　種実遺体（１）



１．イネ 胚乳・穎・小軸(14-S1502住居跡)
２．イネ 胚乳・穎・小軸(14-S1502住居跡)
３．イネ 胚乳・穎(14-S1502住居跡)
４．イネ 穎(15-S509住居跡(水洗選別試料))
５．イネ 穎(15-S509住居跡(堆積物試料))
６．イネ 胚乳・穎(15-S509住居跡(堆積物試料))
７．イネ 胚乳・穎(15-S509住居跡(水洗選別試料))

図版 2　種実遺体（2）



8．ヒエ近似種 胚乳・穎(15-S509住居跡(水洗選別試料))
9．オヒシバ 種子(15-S509住居跡(堆積物試料))
10．イネ科 果実(15-S509住居跡(堆積物試料))
11．イネ科 果実(14-S1502住居跡)
12．カヤツリグサ科 果実(15-S505住居跡)
13．ツユクサ 種子(14-S1502住居跡)

第２節　青銅品成分分析

筑紫野市立明寺地区遺跡Ｂ地点出土金属製品の成分分析調査

㈱吉田生物研究所

１　はじめに

筑紫野市に所在する立明寺遺跡で出土した金属製品について、以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

２　資料

調査した資料は表１に示す金属製品２点である。

表１　調査資料一覧

No.	遺物名	出土遺構	概　　要
１	小銅鐸	２８－Ｓ００９	小型銅鐸の上部のみが出土している
２	鋤先	１４－Ｓ１００５	鋤先の小片が出土している。

３　方法

資料本体から１～２㎜程度の試料を採取し、蛍光X線分析を行い、金属元素を同定した。装置はRIGAKU製の波長分散型蛍光X線分析装置ZSX-PRIMUSⅡを用いた。

４　分析結果

成分分析結果のスペクトルを付し、その結果を表２に示す。ただし、そのデータには土中成分も含まれるため、数値は参考資料である。No.１と２の主要構成成分はそれぞれ（鉛、錫、銅）、（錫、銅、鉛）であった。それ以外にも、No.１には（砒素、銀、アンチモン、ビスマス、鉄）などの成分も検出された。同じくNo.２には（砒素、アンチモン、銀、ビスマス、鉄）などが検出された。

表２　立明寺遺跡出土金属製品の成分分析結果一覧表

元素	No.１（wt%）
Pb	38.8
Sn	30.0
Cu	14.7
P	3.0
O	2.6
As	2.2
Al	2.0
Ag	1.7
Si	1.7
Sb	1.0
S	0.7
Bi	0.7
Cl	0.6
Fe	0.5

元素	No.２(wt%)
Sn	28.1
O	24.5
Cu	16.4
Pb	13.3
C	6.0
As	2.6
Sb	2.5
Si	2.1
Al	1.5
Ag	0.9
S	0.7
Bi	0.4
Fe	0.4
P	0.3
Cl	1.1
K	0.1

図 1　No. 1 の分析データ

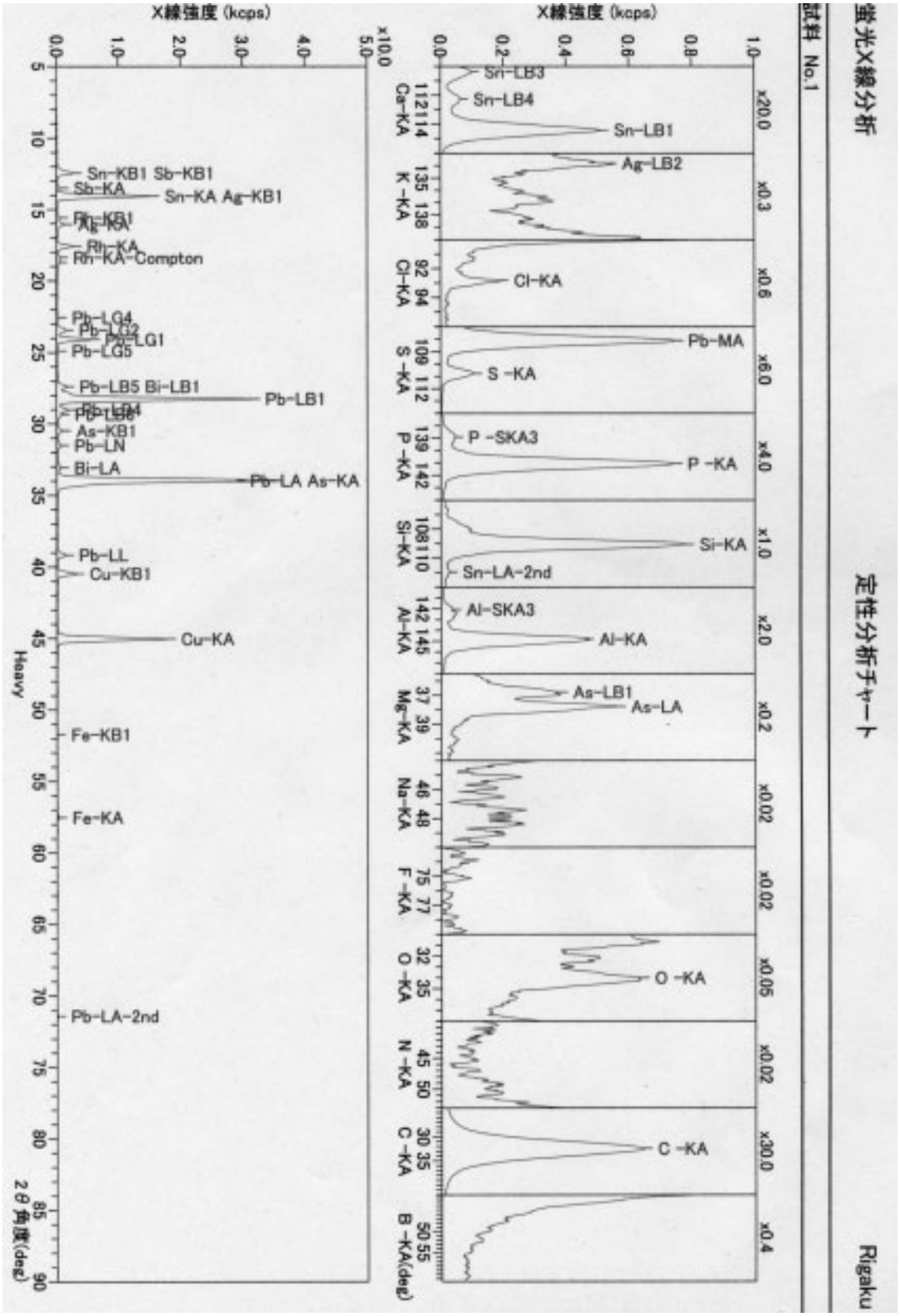
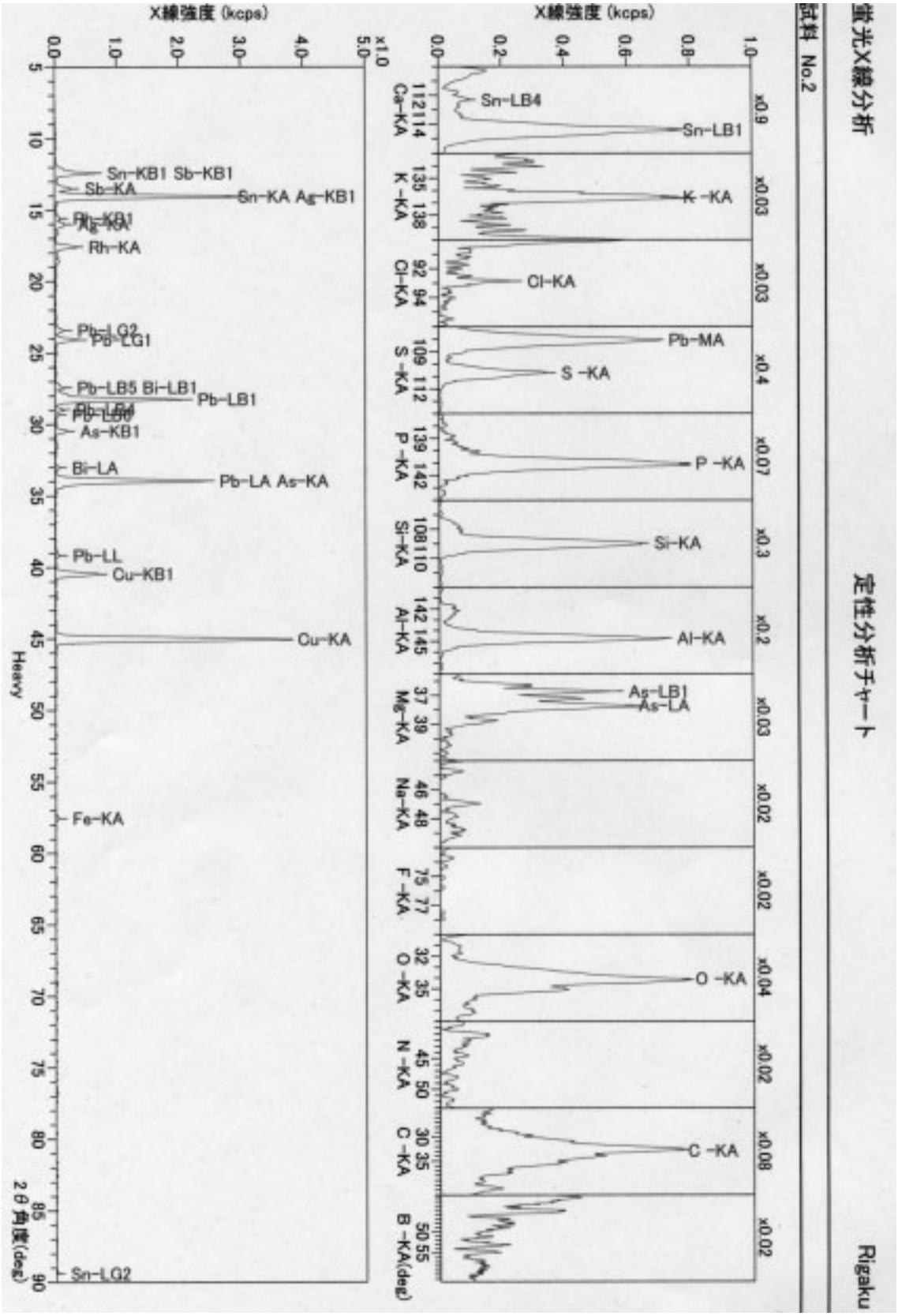


図 2　No. 2 の分析データ



第５章　総　括

第１節　縄文時代

第１項　出土遺物について

縄文時代晩期の土器

今回の調査で検出された縄文時代の遺構は、ＢⅠ地区で土坑２基（22-S0016・23-S0503）、ＢⅡ地区では河川１本（５-S0001・２）と後は、縄文時代終末期から弥生早期に位置づけた15-S0510下層の不確定遺構のみであり、他の時代の遺構に比べて非常に少ない。遺構に伴わない縄文時代の遺物が調査区全体で出土しており、中でも縄文時代晩期の土器が大半を占めた。しかしながら、遺構と同様その量は圧倒的に少なく、その全体像を把握することは出来なかった。表７に北部九州の土器の編年表に今回の調査で出土した遺物の年代を相対的に並べてみた。北部九州域では調査と資料精査が進み細分化されているが、ここでは中九州（熊本平野）を中心とした土器変遷（山崎純男2004）三万田式→島井原式→御領式→天城式→古閑式→黒川式と移行する。その流れに並行する御領式→広田Ⅱ・Ⅲ式→広田Ⅳ式→黒川式とし、縄文後期末葉と縄文晩期を大きく前・中・後、弥生早期の５期分類の中に、量や質的にも良好な資料とは言えないが示してみた。

縄文時代の石器

次に表８は縄文時代の石器製品点数一覧表で、うち打製石鏃の縄文早期を中心にするもの数点を除いて、他はほとんど縄文晩期のものと言える。石器組成は石鏃42%、つまみ形石器８%、スクレイパー類４%、縦長剥片10%、これだけで62%となる。なかでも注目されるのが、つまみ形石器を含むスクレイパー類の多さである。石鏃の次に多く、扁平打製石斧とともにこの遺跡の晩期集落の在り方が想像される。また、使用石材について（中間研志1997）は以前より指摘されており磨石や敲台は河原石、磨製石斧は蛇文石、扁平打製石斧は緑色片岩や結晶片岩を用い、打製石鏃やスクレイパーなどの剥片石器類は前項で示したように黒曜石等を使用しており、腰岳産が71%と最も多く、多久産のサヌカイトを含む安山岩系の石材が25%、以下姫島産黒曜石が４%未満である。また、吉留氏が各遺跡全

表４ 縄文晩期の土器編年と出土土器の並行関係

近畿地方	宮滝式	滋賀里Ⅱ	滋賀里Ⅲa		篠原式	滋賀里Ⅳ	船橋式	長原式
九州北部	御領式	広田式ⅡⅢ	広田式Ⅳ	柿原Ⅰ	黒川式(古) 堀田Ⅰ	黒川式(新) 堀田Ⅱ	山ノ寺式 夜臼Ⅰ	夜臼Ⅱ/板付Ⅰ
九州中部	御領式	天城式	古閑式		黒川式		長行Ⅰ	
立明寺遺跡 遺構出土の土器	23-S0503(12図)	22-S0016(10図)	河川5-0001・2（83図）				15-S0510下層(176図)	
遺構に伴わない土器BⅠ(77図)		1～15						
遺構に伴わない土器BⅡ(299図)		4・5・6・7・8	1・9・10		2・3			
	後期末葉	晩期前葉	晩期中葉		晩期後葉		晩期末葉	弥生早期

(註) 最近の調査や良好な資料研究により、北部九州における古閑式土器・黒川式土器の編年や細分そして時期設定等が進展しており、今後もより確かな編年が確立すると思われる。

体の石器の組成を比較し、縄文時代後・晩期の組成の変化や形態の変化、製作技術の変化や特徴をあげ、北部九州において後期中葉に石器技術の総体に大きな変化があり、従来の生活活動の他に耕作具を用いた生産活動の後退に対して、次第に発展した水稲耕作を主とする生産活動へ継続展開したことを指している（吉留秀敏1993)。また、中間氏は掘田遺跡の調査では、晩期後葉での扁平打製石斧の現象に注目し、これに代わる朝鮮系磨製石斧の出現を示している（中間1997)。ＢＩ地区とＢⅡ地区の石器の種類の相違点や、出土している土器の時期を重ねて観しても同じ縄文晩期の中でも前半に位置付けられる。ＢＩ地区の石器組成に対し、後半から弥生早期に位置づけられるＢⅡ地区の石器組成は本遺跡においても石鏃以外の剥片石器・つまみ形石器やスクレイパー等が比較的多くみられるのは晩期から弥生時代早期への生活変化の表れと考えられる。今回は資料も少なくそれらの若干の変化を示すのみとなったが、今後の調査や良好な資料の増加により縄文晩期から弥生時代早期への生活変化と、道具などの技術変化が如実に示されることを期待する。

表５ ＢＩ・ＢⅡ地区出土 縄文時代石器製品点数及び使用石材一覧表

	ＢＩ区		ＢⅡ区		合　計		使 用 石 材								
							黒曜石		サヌカイト		片岩		蛇紋岩	玄武岩	自然石
	遺構内	遺構外	遺構内	遺構外	点数	%	腰岳	姫島	多久	その他	結晶片岩	その他			
石鏃		9	3	18	30	42%	20	1	9						
つまみ型石器				6	6	8%	6								
スクレーパー			1	2	3	4%			3						
使用剥片石器	2		1	6	9	13%	8	1							
縦長剥片				6	6	8%	6								
石核		3			3	4%			2	1					
偏平打製石斧		7			7	10%					2	5			
打製石斧		2			2	3%							1	1	
磨製石斧		3			3	4%					2		1		
磨石		2			2	3%									1
敲石		1			1	1%									1
計	2	27	5	38	72	100%	40	2	14	1	4	5	2	1	2

第２節　弥生～古墳時代

第１項　検出遺構について

１　遺構の消長

今回検出した主要な遺構は、竪穴住居、大型掘立柱建物、環濠等で、これらを中心に構成された集落遺跡である。

集落の立地は南西から北東方向に延びた舌状台地の低位段丘上で、南側を山口川、北側を埋没谷で形成された後背湿地により区分される。南西部のＢＩ地区における環濠の始原部付近では、段丘ベース面中に礫群が充填し、それが北西部に向い扇方に開き砂層が堆積している。この状況は空撮写真にも認められる（図版１-１・２）ことから、古くは開析谷が存在していたことを物語っている。今回検

出した環濠も含めた中世までの小溝群は、すべてこの位置より始まっている（第82図）。この現象は水利、水脈を理解した上での結果と判断される。この土地環境を理解した上での土地利用が中世まで存続していたことの証左である。いや、中世までででなく、現在に至るまでこの地域の農業関係者には理解され、経験的に受け継がれているものと推考される。

さて、上記のような土地条件の元に居住を始めるのであるが、その始まりから終焉を概観してみることにする。この集落の変遷を理解するために、主要遺構の消長表を作成した（第９表）。時期区分は常松幹雄氏の業績（1991、2003等）を参考に一部改変した。断わっておくが、少ない資料からのものであり、一つの目安として受け止めていただきたい。

この集落では環濠が検出されているが、当初から溝に囲まれた村ではなさそうである。環濠に切られた住居14-S1008が存在し、出土遺物から下大隈式新相に比定され、弥生時代後期後半段階が想定される。また、ＢＩ地区の小銅鐸が出土した方形周溝内より出土した土器も下大隈式新相に考えられることから、遅くとも弥生時代後期後半には存在していたことが裏付けられるが、この時期には環濠は伴っていないのである。

次に特異な大型建物群の時期についてみると、遺構の切り合い関係から新旧が明らかにされている。大型建物１～３間では、大型建物１が大型建物２に切られ、大型建物２は大型建物３に切られていることから大型建物１から順に構築されていることが分かる。また、大型建物１・２では環濠とも重複しており、これも切り合い関係から大型建物１・２が先行することが判明している。ただ、環濠で最も古い14-S1007は大型建物１・２の東側３ｍ付近から開削されていることから共存する可能性も否定できない。しかし、環濠に切られた住居の存在などからこれらの住居群と共伴する建物群と理解したい。

これら大型建物群の時期であるが、出土遺物も少なくそのうえ当初、大型建物の柱穴とは認識できず、大型土坑と判断し一括して掘削、または柱痕跡の平面確認が容易ではなく、柱腐食埋土と区別して調査できなかったことなど我々の落度もあり、明確に断言できない状況も存在する。出土土器から見るならば、二番目に古い環濠９‐S0007に伴う第263図15と第264図18が、これら建物廃絶後内部を縦断する環濠内より出土していることから、これらに先行することは明白である。そして、これらの土器が西新町１式に想定されることから概ね下大隈式新相に比定するものである。大型建物３は大型建物２より新しく、環濠内に配置されていることから、環濠に伴うことも想定されるが、出土している壺底部が古い様相を留めていることから西新町式以前と想定した。大型建物４は、出土している底部からでは下大隈式古相にも比定されそうであるが、他の建物群との共存から下大隈式新相段階と捉えている。大型建物６～９については住居等の切り合い関係以外、出土遺物もなく想定できる資料がなく明確にできない。以上のような状況であるが、主要な大型建物１～３については、弥生時代後期後半、下大隈式新相段階を中心に推移していると理解している。

次に環濠であるが、前述したように当初から設置されてはいなく、大型建物１・２・３？廃絶後に開削されている可能性が高い。これらも切り合い関係から最低３時期が確認され、14-S1007→９-S0007→13-S0002の順に開削されている。区画溝は14-S1007、９-S0007と重複しており、これら二条の溝を切っていることから区画溝が新しい。もっとも古い14-S1007から出土している甕底部には、凸レンズ状のものも見受けられ、下大隈式段階に遡る可能性も窺えるが、概ね西新町Ⅰ式古相と捉えておく。９-S0007は前述した２点の完形土器、中型壺と小型甕があり、遺構の切り合い関係も絡めて環濠の時期を決める中心資料である。しかし、大型壺関係は凸レンズ状の平底底部が残存することから時期を

表 6　主要遺構消長表

		後期前葉		中葉	後葉	終末期		古墳初～前期前葉		前期中葉	
		高　三　猪		下大隈式		西新町Ⅰ式		西新町Ⅱ式		布留Ⅱ式	
		古相	新相	古相	新相	古相	新相	古相	新相	古相	新相
	環　　濠　14-S1007					■					
	〃　9-S0017						■				
	〃　13-S0002							■	■		
	区　画　溝　9-S0016							■			
	大型建物1　14-S1010				■						
	〃　2　14-S1027				■						
	〃　3　14-S0059				■						
	〃　4　14-S0068				■						
ＢⅡ	〃　5　14-S1525				■						
	〃　6　14-S2016				?						
	〃　7　18-S0013				?						
	〃　8　18-S0510				?						
	〃　9　15-S1526				?						
ＢⅠ	方形周溝(小銅鐸)　28-S0009				■		■				
ＢⅡ	方形周溝　14-S0033						■				
ＢⅡ	〃　14-S1510				■						
ＢⅡ	〃　20-S0001					■					
ＢⅡ	円形周溝　14-S1505				■						
ＢⅠ	竪穴住居　23-S0007				■						
	〃　27-S0009					■					
	〃　28-S0007							■			
ＢⅡ	〃　9-S0001									■	■
	〃　14-S0001									■	■
	〃　14-S0003							■			
	〃　14-S0004					■					
	〃　14-S0005						■				
	〃　14-S0006									■	■
	〃　14-S0007							■			
	〃　14-S0012							■			
	〃　14-S0021								■		
	〃　14-S0023				■						
	〃　14-S0026						■				
	〃　14-S0027							■			
	〃　14-S0030					■					
	〃　14-S0040									■	■
	〃　14-S0041					■					
	〃　14-S1001							■			
	〃　14-S1002					■					
	〃(環濠に切られる)　14-S1008				■						
	〃　14-S1509									■	■
	〃　14-S1511								■		
	〃　14-S1524				■						
	〃　15-S0005						■				
	〃　15-S0006					■					
	〃(布留系甕)　15-S0501							■			
	〃(庄内甕・陶質土器)　15-S0508						■				
	〃　15-S0509					■					
	〃　15-S0511				■						
	〃(楽浪系)　15-S0513							■			
	〃　15-S0514					■					
	〃　20-S0002				■						
	〃　20-S0003				■						

絞り込むのは難しいとされる。そこで、小型甕（第264図18）に注目すると、底部は尖り底というよりは丸底に近い状況を呈しており、頸部の形態も屈折というよりは屈曲気味であり、西新町Ⅰ式新相段階とみられる。よって、９-S0007は西新町Ⅰ式新相を中心にⅡ式にかかる時期と想定される。13-S0002は西新町Ⅱ式を中心にした古墳時代前期前葉からに中葉にかかる時期とみられる。区画溝は西新町Ⅱ式を中心に13-S0002と共存していると考えられる。

円形・方形周溝遺構は、小銅鐸が埋納されたＢⅠ区28-S0009が下大隈式新相段階とみられるが、西新町Ⅰ式に再利用されている。円形・方形周溝遺構は下大隈式新相から西新町Ⅰ式段階に位置付けられる。これらの遺構は上部を後世の削平により大きく消失しているため、遺構の性格は明確にできないが、墓としての方形・円形周溝墓ではなく、祭祀関係の可能性が高いと思われる。28-S0009周溝内に埋納された小銅鐸、20-S0001の西北側溝内に充填された土器群などから類推される。因みに小銅鐸が出土した28-S0009周辺の竪穴住居内からは多くの砥石が出土していることより、鉄器関連の工房施設の可能性が考えられる。

最後に集落の終焉時期であるが、住居14-S0006他の出土遺物より古墳時代前期中葉が想定される。古墳時代前期中葉も細分されると思われるが、小型丸底壺形のタイプは畿内の変遷では捉えられないもので、小型丸底壺Ｂタイプの亜流としてもみられることから概ね布留Ⅱ式併行と捉えておく。

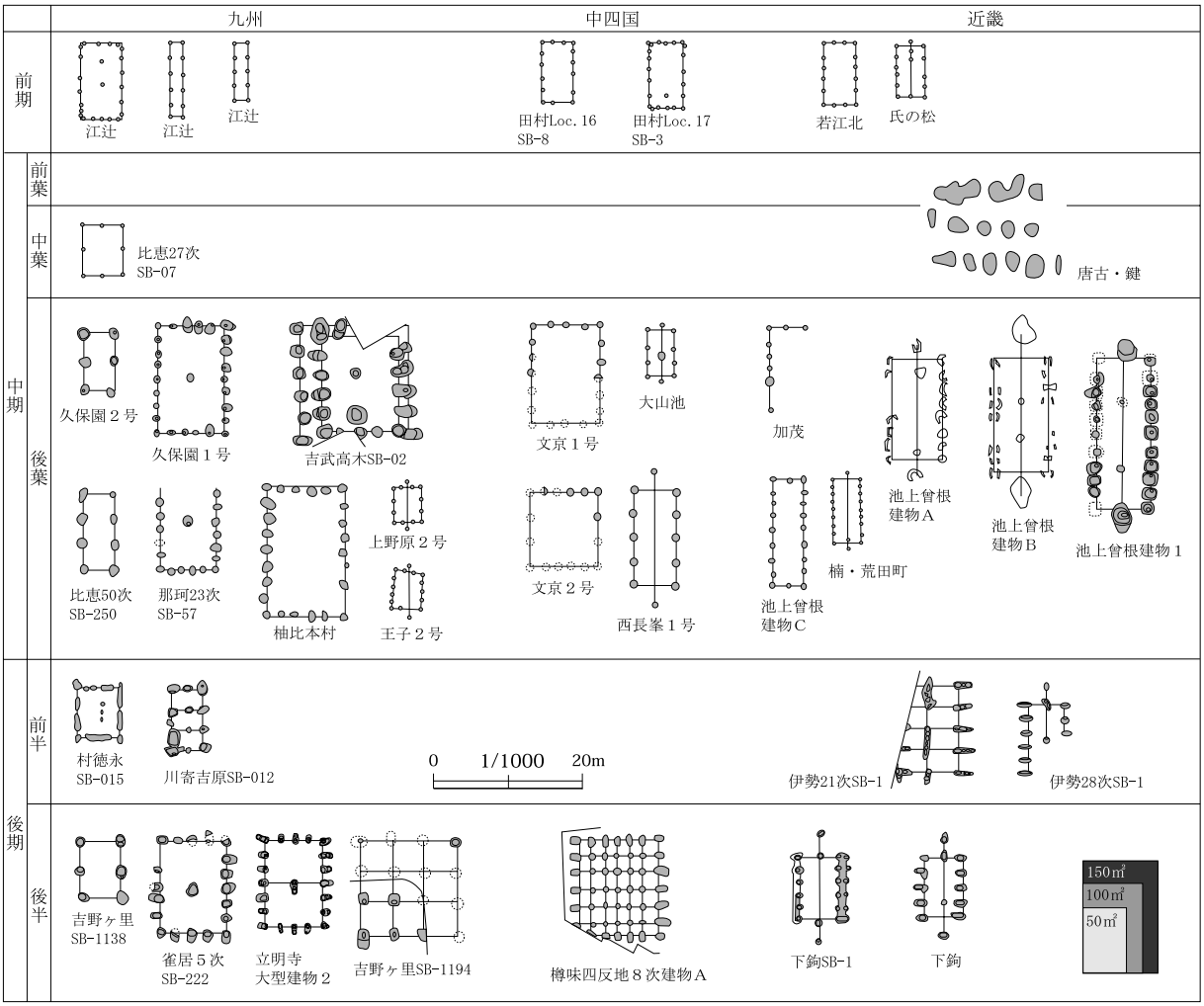
以上のような遺構の消長が想定され、この集落の存続期間は、仮に弥生時代後期中葉から後葉の下大隈式を、２世紀中葉を中心にした時期とみて、古墳時代前期中葉を４世紀前葉～中葉とすれば、約200年近く存続した集落と推定してみることができる。

２　大型掘立柱建物

今回の調査では、平面プランが異なる数種類の大型建物が検出されている。大型建物１・２は梁行４間、桁行６間で中央に棟持ち柱と考えられる柱穴を伴う特異な建物であり、雀居遺跡に類例が見られ、時期も同様である（第304図）。集落内における位置は中央の北端に配置されていることから南面する桁行側に出入り口が設けられているとみられ、大型建物３が位置する範囲も含め、空間が用意されていると想定される。また倉庫ではなく、集落の中核機能を有した建物と捉えたい。大型建物３は梁行が１間であることから大型建物４～６・９と同様であるが、桁行が３間で立柱方向、方法が大型建物１・２と同様であることから規模が大きく縮小しているが、これらと同様の機能を引き継ぐものと想定している。梁行が１間のものは５ｍ前後に集約されることから構造上梁間の限界を表しているものかもしれない。梁行１間、桁行２間の建物は倉庫と考えられるが、構造は梁、桁行とも５ｍ前後の正方形プランである。大型建物５は第３章での報告の通り、南側に１間分拡張したと考えられる建物で、平面プランが異なっているが１間×２間の建物を基本に増築したものと捉えれば理解しやすい。また、そのような平面構造形態を有している。

大型建物７は大型建物１・２と比較して、中央の棟持ち柱と想定される柱穴は同様であるが、桁行との関係をみると３間分の中間に当たることから筋が通らず、直線の柱穴上に沿ってこないなど異なる平面形態である。

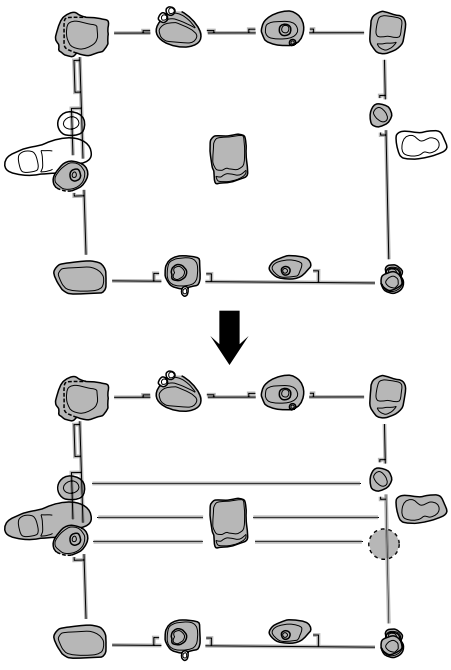
調査担当者は梁行１間乃至は３間、桁行３間の建物と捉えているが、仮に梁行３間と仮定した場合、中央の１間分の梁間長が両側の１間分に比べ短い構造になる。また、調査担当者は次に述べる形態には否定的であるが、南北に位置する長楕円形土坑が気にかかる。偶然の結果と言えば、それまでであるが、それほどうまく偶然は重ならないとみられる。建築史の研究者にも相談し、検討していただい



第304図 西日本の代表的な大型建物集成図（滋賀県立安土城考古博物館平成21年度春季特別展より抜粋して改変）

た。一案として、これをそのまま活用し、第305図のような形態を想定した。北部九州には近畿地方でみられる梁間側両端に棟持ち柱を有するタイプは現在のところみられない状況であるが、北部九州に通有の久保園タイプ（久住猛雄2006）の雀居５次SB-222、今回の大型建物１・２との折衷案として提起させていただきたい。

大型建物８は南西部に離れるが、梁行側が１間分しか検出されていない。大型建物７同様、柱穴底面に高低差がつくものが多いことから後世の削平により消滅している可能性も想定される。したがって、梁間１間、桁行き４間の建物と想定することもできるが確証もないことから不明としておく。



第305図 大型建物７想定案

第２項　出土遺物について

１　小銅鐸

今回の調査において、九州では10例目の小銅鐸（表４）が出土したことになる。小銅鐸とは文字通り小型の銅鐸を意味

するが、厳密には大小の法量による分類ではなく、様々な形状の特徴によって区分されている。また、最近では用途から銅鐸と区別するために銅鈴と総称する趣もある（2009進藤）。分布は福岡県から群馬県にまでの広域にわたり、小銅鐸・小銅鐸鋳型は全国から約60個の出土を数える。出土例は昨今の調査件数の増加に伴い急増の傾向を示している。出土例の増加と共に、各研究者による小銅鐸の細分化は進められているが、通常の銅鐸との区別や用途、変遷については現在に於いても不明な点が多い。

銅鐸の研究は、江戸時代の平田篤胤氏による『弘仁歴運記考』（平田811）まで遡る。1913年、沼田頼輔氏の作成した銅鐸分布図（沼田1913）、1920年、哲学者でもあった和辻哲郎氏によって発表された銅鐸銅剣文化圏論は青銅器文化圏理論の基礎となった（和辻1920）。1927年、梅原末治氏は慶尚北道入室里にて出土した小型の銅鐸を小銅鐸と命名し、国内出土の銅鐸とは異なった馬鐸として用いられた可能性を指摘した。更に国内出土のものよりも古い形式に部類する銅鐸であることを述べている（梅原1927）。その後、銅鐸の研究は1933年、森本六爾氏『長門発見の弥生土器-その青銅器との関連』（森本1933）、国内出土の小銅鐸と通常の銅鐸分布圏の違いについて述べた後藤守一氏「駿河浮島村出土の小銅鐸」（後藤1933）、1941年、小林行雄氏『銅鐸年代論』（小林1941）、1955年、三木文雄氏『日本考古学講座』（三木1955）、1960年、佐原眞氏『世界考古学大系』（佐原1960）、1970年、田中琢氏『古代の日本』（田中1970）、1973年、高倉洋彰氏『銅鐸製作開始年代論の問題点』（高倉1973）、1977年、田村晃一氏は朝鮮式小銅鐸を三分類、入室里タイプを国産タイプの祖形と論じた。また、朝鮮系小銅鐸は首長墓に埋葬されていることに着目、『三国志魏書東夷伝』「韓伝」の記述から司祭者が鐸舞として祭祀で使用したことを指摘している（田村1977）。1978年、小田富士雄氏は別府遺跡出土の小銅鐸を入室里タイプの朝鮮式小銅鐸と認定（小田1978）。1980年、馬淵久夫氏、『鉛同位体比からみた銅鐸の原料』（馬淵1980）、1982年、高倉洋彰氏は「朝鮮小銅鐸から銅鐸へ」（高倉1982）、宇野隆夫氏は「銅鐸のはじまり」（宇野1982）の中で小銅鐸は朝鮮から伝来したことを論じた。1983年、佐原眞氏は小銅鐸を「小型銅鐸」と「銅鐸型銅製品」に分類した（佐原1983）。また、逸見端氏は『三国志魏書東夷伝』「蘇塗」の記述から長木に掛けて使用した銅鐸祭祀を論じている（逸見1983）。1989年、松井一明氏は小銅鐸の細分を行い、「聞く銅鐸」としての祭祀形態が継承されていると述べている（松井1989）。1994年、春成秀爾氏『銅鐸の起源と年代』（春成1994）、1995年、高倉洋彰氏『銅鐸の起源と文化』（高倉1995）など他にも数多くの研究がある。

本稿では当遺跡出土の小銅鐸と朝鮮系小銅鐸、各地から出土した小銅鐸について比較検討した。

以下、出土遺構、小銅鐸の形状、まとめの順に記述する。

出土遺構

小銅鐸はＢⅠ地区の方形周溝28-S0009の「Ｌ」字状屈曲部より南側へ約２ｍの地点にて出土した。出土状態は、溝底部に向かって紐を真下方向に向けた天地が逆の状態であった。土坑、ピット等の埋納の掘り方は確認できなかったが、小銅鐸の最も小さく軽量な紐が真下方向を向いていたことから、自然に埋没したものでなく人為的に埋納されたものと考えられる。この状態から、埋納は溝底部に堆積土が幾分埋まった段階で紐を先端として溝底に押し込まれたものと推測される。溝の性格は最下層の褐色土に粘質、砂層等の流水痕跡を示していないことから、水路的な用途は該当しない。また、東西方向の主軸がN-45°-E、南北方向の主軸がN-45°-Wを測り、ほぼ直角に折れ曲がった「Ｌ」字の形状であることから方形周溝と考えられる。今回の調査において類似する遺構としては、ＢⅡ地区に方形周溝２例と円形周溝１例がある。方形周溝は一辺約９ｍ、溝幅0.7～1.1ｍ、円形周溝は直径約８ｍ、溝幅0.9ｍを測り、本周溝に近い規模を有することから、同様の祭祀関連の遺構の可能性がある。

溝S0009は溝断面に掘り返した痕跡が見られ、溝が掘削された初期と溝が埋没した後に再掘削された２時期が想定される。その時期は、各層からの出土遺物によって下層の埋没時期が下大隈式新段階、上層の埋没時期が西新町Ⅰ式段階に想定される。小銅鐸周辺からは一括性を有した遺物を確認できなかったことから、単独の埋納と思われる。時期は溝下層の埋没時期である下大隈式新段階と考えられる。

小銅鐸の形状

当出土の小銅鐸は、鐸身上端から下端にわずかに広がった形状を呈する。紐は大きく楕円形に張り出し、上端は平面状を呈する。断面は上端に僅かな面を有した菱形を呈する。粗製の無紋であるが、表面の鐸身中央には細長い透かし、反対面には瓢形状の透かしがみられる。舞は水平面を呈し、中央に舞孔がみられる。舞孔は鐸身中央の透かしにつながっている。この舞孔の周囲は丸みをもつことから、欠損よりも型持孔が鋳造時のガス抜けによって変形したものと考えられる。鐸身の側縁には明確な鰭はつかないものの、１条の突出した鋳型の合わせ目の稜を確認できる。両側縁ともに鐸身中央付近で稜がずれることから、鋳型がずれていたものと思われる。なお、鐸身には両面ともに縦の稜が２本残っており、鐸身横断面形はやや扁平な六角形になる。裾部を欠損していることから総高は確定できないが、残存高4.0㎝を測る。形状から想定すると4.5㎝の小型品に復元できる。鐸身上端の断面は扁平に近い楕円形を呈し、長径2.2㎝、短径1.4㎝を測る。鐸身最大径部の断面は隅丸六角形を呈し、長径2.8㎝、短径1.9㎝、鐸身厚２㎜を測る。鈕の大きさは最大幅2.2㎝、最大厚４㎜、鈕高1.2㎝を測り、内縁にはバリが残る。表面は全体に摩滅しているが、顕著な磨き、使用痕は確認できない。

まとめ

小銅鐸の起源は、中国の戦国時代（B.C.5000～3000年）に出現した土鈴と考えられる。その後、陶寺文化（B.C.2500年）から二里頭文化（B.C.2000～1600年）第２期との間に銅鈴が出現する（宮本2009）。銅鈴は朝鮮半島に伝わり、朝鮮式小銅鐸に変化する。更に朝鮮式小銅鐸は弥生時代前期に日本に伝播し、中期には製作が始まったものと考えられている。陶寺・二里頭文化の銅鈴は、朝鮮式小銅鐸と同様に上級階級の墳墓に埋葬された副葬品である。陶寺文化の銅鈴は鐸身横断面が木葉状、鐸身は上端から下端の裾へ広がった筒状である。舞部には１孔の型持孔を有するが、紐は持たない。舞孔は銅鈴のつり下げと舌を吊す目的に使用されている。側面の明確な鰭状稜線や鐸身の表・裏面の型持孔はみられないことから、外型と中型の２鋳型から製作されたものと考えられている。その後に出現する二里頭文化の銅鈴は、舞部の型持孔は１孔から２孔になり、孔の間を上方に持ち上げることで小さな紐の設定を行っている。側面の片方には端部に稜を残した方形状の鰭を持つことから、３個からなる分割鋳より製作されたものと推測されている（宮本2009）。更に鐸身の表裏面には方形の区画紋を施しており、朝鮮式小銅鐸に見られない特徴がある。朝鮮式小銅鐸により近い特徴をもつものとしては、無紋、鰭を有しない初期の陶寺文化の銅鈴を挙げることができる。また、朝鮮式小銅鐸は小型、無紋、鰭を有しない点から国内の小銅鐸と共通しており、直接の系譜を引く可能性が高い。国内の銅鐸は初期段階に文様と鰭を有している点から、二里頭文化の銅鈴との共通点を見いだすことができ、朝鮮半島を経由しない伝播の系譜によって何らかの影響を受けた可能性を推測できる。
この相違点は、改めて朝鮮式小銅鐸と小銅鐸、国産の銅鐸について比較検討すべきである。

中国の銅鈴や朝鮮式小銅鐸は、有力者の墓から出土することが通例であるが、国内の小銅鐸は、住居跡や溝、土坑等、生活に密着した箇所からの出土している。また、通常の銅鐸は、人里離れた丘陵の斜面から纏まって出土することが多い。これらの出土地の相違は、その所有者や祭祀形態の違いか

表7 九州出土の小銅鐸関連一覧

No.	遺跡名	所在地	遺構	概要
1	雀居遺跡4次	福岡市博多区雀居		銅鐸鋳型内型、長楕円形、現高3.5㎝、弥生時代後期。
2	今宿五郎江遺跡	福岡市西区今宿五郎江	溝	無紋小銅鐸、円環、中紐、円筒状身、赤色顔料付着、総高13.5㎝、弥生時代後期前半。
3	板付遺跡	福岡市板付二丁目	住居跡内ピット	無紋小銅鐸、無紋、ピット内埋納。現高5.5㎝の青銅舌共伴、総高7.6㎝。総高7.6㎝、弥生時代後期。
4	井尻B遺跡	福岡市南区井尻	住居跡	無紋小銅鐸、周辺から銅戈鋳型、ガラス勾玉鋳型、坩堝、銅滓出土。小銅鐸、総高5.3㎝弥生後期後半。
5	浦志遺跡A地点	福岡県糸島郡前原町大字浦志	溝	無紋小銅鐸青銅舌共伴。無紋。身正面に縦長の型持孔。総高6.55㎝。弥生時代後期～終末。
6	大南遺跡	福岡県春日市太田二丁目大南	溝(環濠)	無紋小銅鐸鋳型破片、縦横の隆起線、内面突帯、身の下端に型持孔。現高9.0㎝。弥生時代後期。
7	大谷遺跡	福岡県春日市小倉大谷	住居跡	無紋小銅鐸鋳型破片、裾に横帯がめぐる。現高7.8㎝、弥生時代中期後半。
8	岡本遺跡	福岡県春日市岡本4丁目	遺構面上	無紋小銅鐸鋳型、甕棺墓域、滑石片岩、総高6.5㎝、弥生時代中期中葉～中期後半。
9	元岡・桑原遺跡1号	福岡市西区元岡・桑原1号	土器群	無紋小銅鐸鋳型、2号と8ｍ離れて出土。総高6.5㎝、弥生時代後期後半。
10	元岡・桑原遺跡2号	福岡市西区元岡・桑原2号	土器群	無紋小銅鐸鋳型、総高7.0㎝、弥生時代後期後半。
11	須玖坂本遺跡1次	福岡春日市須玖坂本	溝	無紋小銅鐸鋳型、石英長石斑岩、未製品、現高6.3㎝、弥生時代後期。
12	須玖坂本遺跡3次	福岡春日市須玖坂本		銅鐸鋳型内型、長楕円形、舞に長方形型持、現高1.1㎝、弥生時代後期。
13	須玖坂本遺跡4次	福岡春日市須玖坂本	ピット	無紋小銅鐸鋳型、石英長石斑岩、湯口あり、現高8.0㎝、弥生時代後期。
14	須玖岡本遺跡5次	福岡県春日市須玖岡本		無紋小銅鐸鋳型内型破片、弥生時代後期。
15	永田遺跡4次	福岡県春日市須玖永田	包含層	無紋小銅鐸鋳型、紐と身、他の鋳型に転用、現高10.8㎝、弥生時代後期後半。
16	勝浦高原遺跡	福岡県福津市勝浦高原	貯蔵穴	無紋小銅鐸鋳型、紐部分欠損、蛇紋石滑石岩、総高16.1㎝、弥生時代中期前半。
17	原田遺跡	福岡県嘉穂市馬見原田	木棺墓	小銅鐸、裾に斜格子紋の横帯、身中央と左右に方形の型持孔、青銅舌共伴。総高5.5㎝、弥生中期前半。
18	立明寺地区遺跡B地点	筑紫野市字立明寺	区画溝	無紋小銅鐸、総高4.0㎝、紐を逆さまにした状態で埋納。弥生時代後期後半。
19	本行遺跡	佐賀県鳥栖市江島町本行	住居跡	無紋小銅鐸、紐欠損、身の正面の下部に孔、現高4.9㎝、弥生時代後期。
20	別府遺跡	大分県宇佐市大字別府・桜	住居跡	無紋小銅鐸（朝鮮半島製）、紐摩滅、潰されて廃棄。総高11.6㎝、弥生時代後期末。
21	多武尾遺跡	大分市大字横尾字南城多武尾	溝	無紋小銅鐸、現高5.5㎝、弥生時代後期後半。
22	上日置女夫木遺跡	熊本県八代市上日置女夫木	包含層	無紋小銅鐸、下端内面に突帯、身上半左右に型持孔、長さ5.5㎝青銅舌共伴、総高5.3㎝、弥生中～後期。
23	八ノ坪遺跡	熊本県熊本市護藤町・八ノ坪	土坑	無紋小銅鐸鋳型、無紋、石英長石斑岩？、現高11.8㎝、周辺から銅戈鋳型、弥生時代中前半。

ら派生するものと考えられ、国内の小銅鐸は村落の祭祀道具、朝鮮式小銅鐸は有力者・司祭者等の個人所有品、通常の銅鐸は大型化することで首長が支配する拠点集落の所有する共有祭祀道具と推測されている。朝鮮半島から搬入された小銅鐸は、各段階で個人所有から村落の共有祭祀具に変化し、拠点集落に於いて大型化したものと考えられる。国内に於いて古い祭祀形態を継承し、有力者の所有で

あった可能性のあるものは、木棺墓、墓壙内副葬品として出土した福岡県原田遺跡、静岡県愛野向山Ⅱ遺跡、千葉県文脇遺跡14号、同県大井戸八木遺跡１号、同県草刈遺跡Ｈ区367号跡等の例がある。原田遺跡の例は、弥生時代中期前半に属し、北部九州に位置していることから、朝鮮半島の祭祀形態を時間差なく継承したものと解釈できるが、関東の小銅鐸が使用されはじめられるのは弥生時代後期と考えられている（比田井2001）。これらの小銅鐸の形状は、紐断面の形状が細い円形、楕円形であり、鰭を有しない点から古出に分類されるが、関東出土のものは型持孔の位置が鐸身上半部の高い位置にあり、二孔一対であることから外縁付紐式及び扁平紐式銅鐸の模倣が薄らいだものとの論説（比田井2001）もある。

小銅鐸の種類は様々であるが、朝鮮半島から伝播し、変遷した過程を概略的な型式学によって下記の４段階に分類した。各段階は朝鮮式小銅鐸との違いによって更に細分できるが、基本的には無紋・紐・鰭・型持孔の特徴を基本とした。但し、この段階の分類は時期に対応したものではなく、古出段階に分類されるものについても弥生時代後期に属するものや中期前半に属するものであっても新出のものもある。

１段階は朝鮮半島から搬入された朝鮮式小銅鐸。２段階は朝鮮式小銅鐸を国内で模範、製造したもの。３段階は模範から逸脱した小銅鐸。４段階は国産銅鐸が小型化したものである。１段階に分類できる大分県別府遺跡出土の朝鮮式小銅鐸は、時期的に最も古く遡るべきであるが、弥生時代後期末である。また、最も古い弥生時代中期前半とされる原田遺跡の小銅鐸は、裾に斜格子紋を有することから３段階である。

当遺跡出土の小銅鐸は下記の特徴から２段階に該当するが、時期は弥生時代後期後半である。古い様相の特徴である舞の径と裾の径の差が少ない筒状を呈し無紋である。紐の幅は狭く断面菱形で、正面、裏面に２対の型持孔を有しないこと等から朝鮮式小銅鐸を模範している。同様の２段階に分類できるものは、福岡県原田遺跡、同県浦志遺跡の２例がある。３段階に分類される福岡県大南遺跡、同県大谷遺跡についても北部九州に位置する。この点は朝鮮半島により近いことから、一早く搬入された経緯の結果と思われる。いずれにしても、福岡県原田遺跡、岡本遺跡、大谷遺跡の鋳型は弥生時代中期中頃まで遡ることから、北部九州に於いて中期段階に小銅鐸が生産されていたことは確実である。その後、国内に広がった小銅鐸は弥生時代後期まで継承され、関東では古墳時代に入るものもある。

当小銅鐸は北部九州といった朝鮮半島に近い立地と環境にありながら、古い様相を弥生時代後期まで継承していた可能性が高く、今後の検討課題となるものといえる。

２　搬入遺物について

外来系土器と舶載された鉄器について、少し触れてみることにする。

外来系土器

西武瀬戸内系とみられる土器が２点存在する。一つは住居14-S0004から出土している第110図１の広口壺である。頸部に突帯を有し、口縁部を上方に拡張させて、その外端面に細い擬凹線をめぐらす。時期は布留系甕が共伴していることから西新町Ⅰ式新相からⅡ式併行とみられる。他の１点は住居14-S0026から出土している第129図11の複合口縁壺である。頸部に刻み目を有する突帯と口縁部外端面に鋸歯文をめぐらし、その内面に斜平行線を施す。時期は共伴遺物から西新町Ⅰ式併行と想定される。

山陰系土器は甕を中心に少量であるが出土している。環濠に切られている住居14-S1008で出土している第147図３は特異な杯部を有する高杯系土器である。精製された赤褐色系の胎土で外面に綾杉状

の文様を表出させているが、その施文具がタマキガイの稚貝で行われていることから山陰地方からのものと見ることができる。時期は下大隈式新相段階である。住居15-S0501からは布留系土器に伴って鼓形器台片（第165図５）が出土している。時期は西新町Ⅱ式古相段階である。また、住居15-S0509から壺？であろうか口縁部片が出土している。西新町Ⅰ式併行とみられる。他に環濠13-S0002から大型鉢などを含め数点が出土している（第266図９・14、第267図28）。いずれも西新町Ⅱ式併行と考えられる。

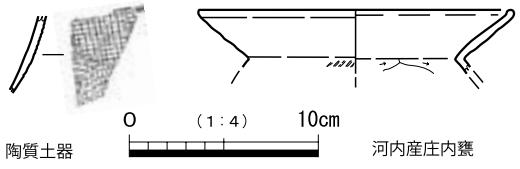
畿内系土器は庄内式甕を中心に布留系甕（図版77-３）、二重口縁壺、細頸壺、高杯などの影響を受けた器種がみられるが、確実に搬入されたと思われる遺物は山陰系と比べそれほど多くはない。畿外のものとしては精製品の近江系手焙り形土器（第303図７）が１点存在する。

今回目に付くのは河内産庄内甕である。胎土に特徴があることから容易に識別することができ、数点が出土している。一方、大和産庄内甕の搬入品はみられない。特に注目されるのは住居15-S0508から後述する陶質土器と共伴していることである（第172図３・12）。時期的な併行関係を探る資料となる。また、住居15-S0501から出土した布留系甕（第166図４）は、口縁端部内面の肥厚、底部内面の指頭圧痕、体部内面のへら削り、器壁の薄さ、精製された胎土など、どれを取り上げても畿内の布留甕と遜色はない。しかし、外面整形および調整が異なる。畿内の布留０式期の甕は体部外面にこれほど叩き目を残さない。残るにしても下半部にその痕跡がわずかに認められるほどで、細い刷毛目で体部全体が覆われる。それに比べ、この土器は体部上半と下半部にわずかに刷毛調整を施すが、叩き目の多くを残している。久住猛雄氏は、このような甕を筑前型布留甕と呼称されるが、大分県安国寺遺跡出土の甕も含め、検討材料の土器である。

朝鮮半島系土器

今回、数点の半島系土器が出土している。博多湾沿いに展開する中核的な遺跡には近年通有であるが、出土量が多くはないものの内陸部にも持ち込まれていることの確認ができ、さらにこの遺跡の性格を考える上で参考になる。

前述した住居14-S0508出土の陶質土器（第172図12）は器壁の薄い精製された胎土で、外面に細い格子叩きが施されている破片であるが、一部に叩き分けがみられることから短頸壺の体部下半と思われる。小片のため特定できないが、半島からの搬入品とみてまちがいがないと思われる。そしてこの土器には畿内河内産庄内甕が伴っていることである（第306図）。これにより、畿内・北部九州・半島の併行関係を検討する１資料になる。庄内甕は体部外面に特徴ある細かい叩き目を残しているが、口縁端部内面はつまみ上げではなく、肥厚気味であることから布留０式甕と共通する特徴とも採れる。型式的には新しい様相であり、庄内３式、あるいは布留０式古相段階と捉える事ができる。このことは同時期と推定される大阪市加美遺跡出土の疑似陶質土器にも影響を与える。陶質土器の出現年代に絡み苦しい解釈であったが、今回の共伴関係により加美遺跡出土の物も陶質土器として明確になり、その出現年代も、現在の日本の年代観では３世紀前半代として考えることができるなど、その証左が得られた意義は大きい。



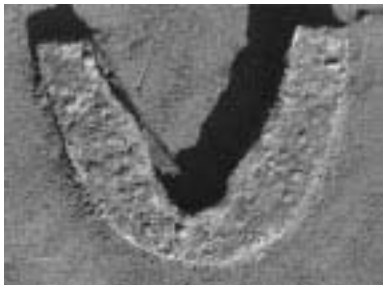
第306図 陶質土器・河内産庄内甕実測図

住居15-S0513から楽浪系とみられる土器片が出土している。小さな破片であるため器形は明確にはできないが、椀・鉢形状のものであろうか。回転整形による擬凹線をめぐらした口縁部で端部は細く

丸くおさめる。風化が激しく焼成がややあまく瓦質土器の感がする。外面には光線によって細かい縄蓆文叩きの痕跡らしきものがみられるが明確にできない。時期は共伴遺物から西新町Ⅱ式古相段階である。

環濠からは、９-S0017で短頸壺の肩部に付設されたと推測させる穿孔付き取手が出土している（第265図45)。また可能性として同環濠の第264図16や環濠13-S0002第266図１などの壺が器形や焼成などから窺われる。

a．A-23号住居出土鉄鍬先


b．A-９号住居出土鉄鍬先

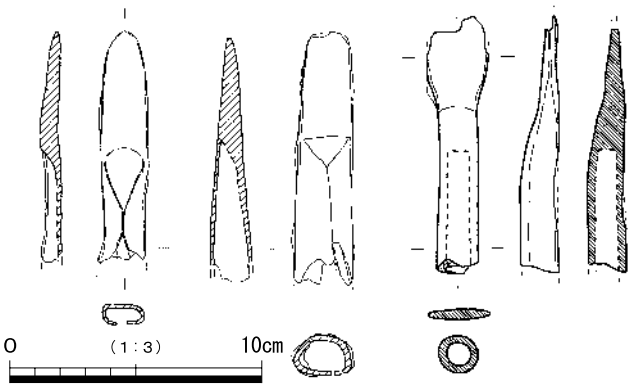
第307図 大成里遺跡出土鉄鍬先

搬入鉄器

半島から舶載されたと考えられる鉄製品が少量であるが存在する。その一つが鍛造の鉄鍬先である（村上恭通氏教示)。環濠から２点出土しているが、両者とも同一形態とみられる（第47図３・第270図６)。刃部両端部は隅丸形であるが、古墳時代中期のＵ字形鍬先の形状や大きさではなく、青銅の鍬先に近似し、20㎝にも満たない小型品である。西新町Ⅰ式に伴うものである。類例は国内では三雲遺跡他数例が存在する（武末純一氏教示)。国外では朝鮮半島西北部、黄海南道雲城里カマルメ第２号墳出土品、韓国ソウル市東方北漢江沿いに所在する大成里遺跡A-23号住居出土品（第307図）などで原三国時代に認められる（畿甸文化財研究院2005)。大成里遺跡では同様の小型品であるが、Ｕ字形のものも出土している（第307図b)。この大成里遺跡では北部九州系の弥生時代高杯杯部？（下大隈式？）が出土しており注目される。

もう一つは同じく環濠から出土したもので棒状の柄を有する匙状の鍛造鉄製品である。日本はもちろん韓国にも同一形態のものはない。ただ、第308図に掲げたような近似品が、忠清北道忠州の金陵洞遺跡に存在する（李東漢氏教示)。これも原三国時代のものである。この製品も鍛造品で柄の部分を巻きつけて作製していることがわかる。今回の出土品も同様の製作方法と推定されるが、詳細なＸ戦撮影を実施していないので現状では不明である。国内で類例がないことから現状では半島からの舶載品と考えている。

他に注目される鉄器にＢⅠ区23-Ｐ0101出土の針金状鉄製品が存在する（第75図・図版88)。番線状の形状をしているため、当初は近・現代遺物と疑ったが、鉄芯自体は腐食し空洞化された状態であることから新しいものではないことが想定された。そして、このような遺物の類例が曲り田遺跡11号甕棺内から出土していることを橋口達也氏から教示を受けた。曲り田遺跡出土品は弥生時代前期前半に伴うものとされるが、今回の出土品には共伴遺物がなく明確にできない。しかし、古代～中世の可能性も否定できないが、曲り田遺跡を参考に、この遺跡の主要時期の弥生～古墳時代に考えることもあながち無謀なことではないのではなかろうか。いずれにせよ、資料の増加を待つことにする。

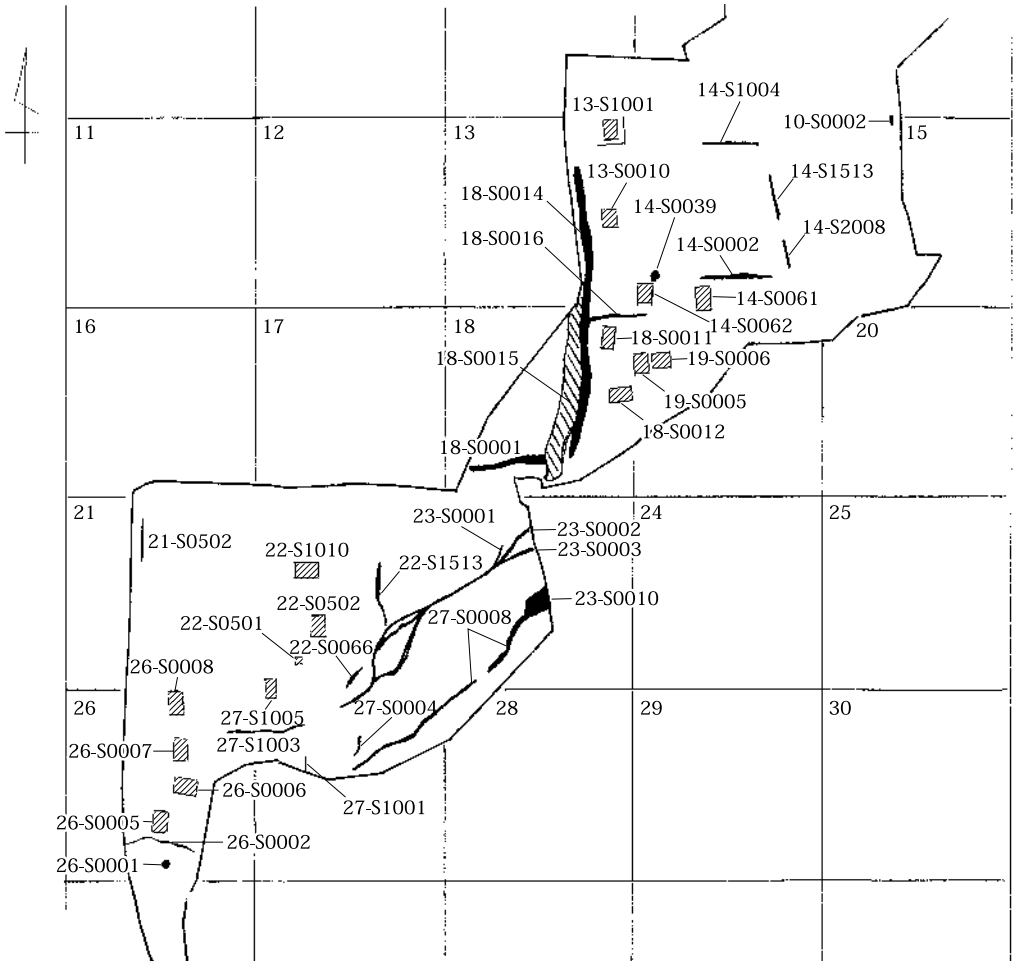


第308図 匙状異形鉄製品実測図

第３節　古代～中世

検出した古代の遺構は、掘立柱建物、溝、区画溝、土坑、井戸、土壙墓等があるが、その数量は弥生・古墳時代の遺構数から比べると少量である。遺構は近・現代の削平を大きく受けていることから残存状態は良くなかったが、調査地全域には整然と並んだ建物群と僅かな方形区画溝、各１基の土坑、井戸、土壙墓を検出することができた。時期は８世紀後半から９世紀後半までと11世紀から13世紀に至る２時期がみられる。ここでは、古代から中世の掘立柱建物を中心に方形区画溝とその付属する土坑、井戸、土壙墓について若干のまとめをしておきたい。

今回の調査に於いて検出できた掘立柱建物跡は、ＢⅠ地区８棟、ＢⅡ地区８棟、合計16棟（表８）を数える。その広がりは両地区共に広域であるが、西側に偏りがみられ東側は比較的に密度が薄い状態である。個々の建物は北方向に向いた状態で整然と並んでおり、方形区画溝によって囲まれていたものと考えられる。典型的な区画溝としては、ＢⅡ地区の中央に位置する溝14-S0002、S1004、S1513、S2008がある。溝14-S1004は古代の遺物が出土していないことから弥生時代としているが、形状、規模、埋土等から古代に属する可能性が高いため、本稿では古代の区画溝として扱った。これらの区画溝は北辺14-S1004、東辺S1513・S2008、南辺S0002、西辺18-S0014から構成されており、形状は西側



第309図 古代遺構配置図

へ歪んだ方形を呈する。規模は東西約50m、南北約35mを測る。時期はこの区画溝から出土した遺物から９世紀初頭に位置付けできる。また、南側にも同時期に機能していた東西方向に走る区画溝18-S0016がある。この溝は方形区画の北辺に該当し、西側の溝18-S0014が西辺の区画と考えられる。この区画溝と並行に走る北側の溝14-S0002との間隔は約９ｍを測る。溝間の性格は、区画間の道路及び各区画が共有しない敷地と思われる。西側の区画溝18-S0014は、全長約75mを測る長い区画溝であることから、区画の中でも大区画に相当するものと考えられる。時期は出土遺物から当集落の最終末である13世紀初頭まで機能していたことが判明する。その西側に隣接し、同一方向に走る大溝18-S0015は、この溝が機能しなくなった近世初頭に出現することから、溝18-S0014の区画機能を引き継いだものであろう。大溝の南西側には東西方向に走る区画溝18-S0001が存在する。位置関係から南辺の区画溝に該当し、北辺区画溝に推定される18-S0002からの距離は上記の方形区画と同様の約35mを測る。他には顕著な区画溝を確認できないが、南北方向に走る溝21-S0502、22-S1513、27-S0004、27-S1001、東西方向に走る溝27-S1005、27-S1003、26-S0002はその可能性が高い。他の地区に於いても同様の方形区画が全域に施工されていたものであろう。

これらの区画は北側の太宰府に規制されたものと考えられるが、筑紫野市教育委員会によって行われたＡ地区拡張調査に於いて検出された南北方向へ直線状に走る官道の影響も大きい。この官道は九州を統括する目的で８世紀に施工された６本の西海道に含まれるもので、太宰府から南側の基肄域の東を経由して筑後、肥前方面に至ったものと推測されている。当地は幹線に直面していることから、他地域よりもいち早く開発、整備されたことは明白である。また、方形区画は出土遺物から13世紀まで機能したものと推定できるが、施工時期は少なくとも８世紀まで遡る可能性は高い。

建物群はＢⅠ地区とＢⅡ地区に大きく分けられるが、両建物群の間（22、23、27、28区）には空白地帯が存在する。この点については近代の削平によって失われた可能性もあるが、当地には東側の山口川に流れる８世紀後半から13世紀の自然流路23-S0001～S0003、S23-0010、27-S0008が存在していることから荒廃地であった可能性があり、当初から建物が存在しない地域であったことも考えられる。

建物は真北に対し、東へ３・４度振るものと、西へ３度から７度振るものの２種類がみられる。これらは重複していないものの近接した状態であることから、新旧の２時期の差をもつものと考えられる。建物規模は３間×２間のものが主体を占めるが、２間×２間、２間×１間、１間×１間のものも少量みられた。建物の種類は、南北棟、東西棟、総柱建物や棟持柱状に少し張り出した柱を有する建物も存在する。建物の柱穴等から直接に出土遺物を確認することができなかったため、確実な時期の判断は不可能であるが、周辺から出土した遺物や建物の規模、形状から建物の時期を分類した。

最も古出と考えられる建物は、13-S0010、14-S0062、26-S0006の３棟がある。建物は小規模であるが、柱穴は比較的に大型の方形、不整円形を呈する。桁間は2.0～2.2m、梁間は1.8～1.9mを測る。時期的には８世紀後半頃に属するものであろう。次期に考えられる建物は、13-S1001、14-S0061、18-S0011、18-S0012、19-S0005、19-S0006、22-S1010、26-S0005、26-S0007、26-S0008がある。桁間は1.9～2.2・2.5m、梁間は1.9～2.1mを測る。桁間中央が2.5mと長い14-S0061や桁間全体が2.5mと長い19-S0005もあるが、殆どは同一寸法に規格された建物である。時期的には、柱穴の規模、形状、周辺出土の遺物から９世紀後半以降と考えられる。新出と考えられる建物は、22-S0502、27-S1005がある。これらの建物は小規模で小型の柱穴である。柱間も短く、桁間は1.8～1.9m、梁間は1.6・1.8～1.9mを測る。特に27-S1005の梁間は1.6mと短い。時期は10～11世紀と考えられる。22-S0501は１間×１間の小規模建物であることから、竪穴住居の支柱穴の可能性もある。

建物以外の遺構としては、南西端に位置する井戸26-S0001や北東側の土坑14-S0039、北東端の土壙墓10-S0002がある。井戸は北側を東西方向に走る溝26-S0002によって区画されているが、北側に隣接している建物26-S0005～S0007に付設するものであろう。土坑は南側に接する建物14-0062に伴うものと考えられる。時期は９世紀後半に属し、性格は形状から廃棄土坑と考えられる。土壙墓は段丘端部の集落縁辺で検出された。周辺からは古代の遺構を確認することはできなかったが、集落から離れた地である点から墓域と考えられる。但し類似した土壙墓等の存在はなく、単独の墓坑である。時期は11世紀から12世紀であることから、当集落の終末期近くに埋葬されたものであろう。

今回の調査によって、当地は町の基盤となる区画の形成が既に奈良時代にできあがっていたことが判明した。区画は太宰府の条坊や西側で検出された官道に沿った状態で計画的に配置され、その区画内に整然と並んだ建物群が想定される。建物は小規模であることから、一般的な庶民の建物と考えられるが、今回の成果は太宰府近接地での土地利用や古代の集落を考察する上で重要な資料の提示ができたものと言える。

表８ 掘立柱建物一覧(古代～中世)

No.	遺構番号	規模(m)	間　数	間規模(m)	方　位	柱穴（径m×深m）	備　考
1	13-S0010	桁行4.7×梁行3.6	桁間３間×梁間２間	桁間1.4～2.4×梁間2.1	N-7°-W 南北棟	不整円形・楕円形、0.25～0.30・0.4～0.5×0.18～0.4	9世紀後半、側柱式建物
2	13-S1001	桁行5.2×梁行3.6	桁間３間×梁間２間	桁間1.74～1.8×梁間1.8	N-5°-W 南北棟	不整円形、0.23～0.26×0.08～0.2、軒支柱・囲い柱深さ0.18	9世紀中～後、側柱式建物
3	14-S0061	桁行6.5×梁行3.8	桁間３間×梁間２間	桁間2.0～2.3×梁間1.8・2.0	N-7°-W 南北棟	不整円形・楕円形、0.17～0.24・0.3×0.14～0.20	9世紀後半、総柱建物
4	14-S0062	桁行4.2×梁行3.7	桁間２間×梁間２間	桁間1.4・2.7×梁間1.5～2.2	N-2°-W 南北棟	不整円形・楕円形、角柱、長楕円形、0.12×0.3～0.35・0.54	8世紀後半、側柱式建物
5	18-S0011	桁行5.4×梁行3.6	桁間３間×梁間２間	桁間1.7～1.9×梁間1.7～2.0	N-4°-E 南北棟	不整円形・楕円形、0.20～0.35×0.06～0.23、抜き取り痕。	9世紀後半、側柱式建物
6	18-S0012	桁行5.9×梁行3.7	桁間３間×梁間２間	桁間1.9～2.1×梁間1.95～2.0	N-81°-E 東西棟	不整円形・楕円形、0.20～0.40×0.05～0.23、柱痕径0.09	9世紀後半、側柱式建物
7	19-S0005	桁行5.0×梁行3.9	桁間２間×梁間１間	桁間2.5～2.6×梁間1.8～1.9	N-4°-W 南北棟	不整円形・楕円形、0.22～0.25×0.12～0.20	9世紀後半、側柱式建物
8	19-S0006	桁行5.6×梁行3.9	桁間３間×梁間２間	桁間1.8×梁間2.0～2.1	N-86°-E 東西棟	不整円形・楕円形、0.20～0.25×0.12～0.18	9世紀後半、側柱式建物
9	22-S1010	桁行6.9×梁行4.7	桁間３間×梁間２間	桁間1.9～2.4×梁間2.2	N-87°-W 東西棟	不整円形・楕円形、隅丸方形、0.2～0.4×0.18～0.3	9世紀後半、側柱式建物
10	22-S0501	桁行2.1×梁行2.0	桁間１間×梁間１間	桁間1.9×梁間1.75	N-3°-W 南北棟	不整円形・楕円形、0.2～0.3×0.28～0.36	側柱式建物或いは竪穴住居
11	22-S0502	桁行5.5×梁行3.9	桁間３間×梁間２間	桁間1.8×梁間2.0～1.9	N-4°-W 東西棟	不整円形・楕円形、0.15～0.35×0.22～0.38、柱痕残存	10・11世紀、総柱建物
12	26-S0005	桁行5.8×梁行4.35	桁間３間×梁間２間	桁間1.8～1.9×梁間2.0	N-3°-E 南北棟	不整円形・楕円形、0.2～0.38×0.28～0.46	9世紀後半、側柱式建物
13	26-S0006	桁行6.35×梁行4.5	桁間３間×梁間２間	桁間2.0×梁間1.9～2.0	N-84°-W 東西棟	不整楕円形・方形、0.30～0.6×0.22～0.39、柱痕径0.15	8世紀後半、側柱式建物
14	26-S0007	桁行6.1×梁行4.2	桁間３間×梁間２間	桁間1.9×梁間1.9～2.0	N-2°-W 南北棟	不整円形・楕円形、0.25～0.35×0.2～0.36、柱痕径0.15	9世紀後半、側柱式建物
15	26-S0008	桁行6.6×梁行4.0	桁間３間×梁間２間	桁間2.0～2.15×梁間1.9	N-2°-W 南北棟	不整円形・楕円形、0.2×0.08～0.32、柱痕状二段落掘方柱痕	9世紀後半、側柱式建物
16	27-S1005	桁行5.5×梁行3.3	桁間３間×梁間２間	桁間1.5～1.8×梁間1.6	N-6°-W 南北棟	隅丸方形・円形・隅丸方形、0.18～0.25×0.12～0.28	10・11世紀、側柱式建物

参考文献

論文関係

井上　洋一　1992「銅鐸起源論と小銅鐸」『東京国立博物館紀要』第28号　東京国立博物館
岩永　省三　1984「銅鐸年代決定論」『古文化談叢』13九州考古学会
宇野　隆夫　1982「銅鐸のはじまり」『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集、平凡社
梅原　末治　1922「慶州郡外東面入室里の遺蹟と発見の遺物」『大正十一年度古蹟調査報告第一冊　慶州南北道忠清南道古蹟調査報告』朝鮮総監府
小田富士雄　1978「大分県多武尾小銅鐸の系譜」『賀川光夫先生還暦論文集』
小田富士雄　1981「宇佐市別府遺跡出土小銅鐸の復元」『古文化談叢』８、九州考古学会
久住　猛雄　1999「北部九州における庄内式並行期の土器様相」『庄内式土器研究』21
久住　猛雄　2003「北部九州における弥生時代の特定環溝区画と大型建物の展開」『弥生時代の大型建物とその展開』日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジュウム１　サンライズ出版
久住　猛雄　2004「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人』平成16年度秋季特別展図録所収　大阪府立弥生文化博物館
久住　猛雄　2005「３世紀の筑紫の土器」『邪馬台国時代の筑紫と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジュウム５資料集所収　香芝市二上山博物館
小池　史哲　1982「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器―晩期初頭の広田式の設定―」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻
小南　裕一　2008「北部九州地域縄文後期末～晩期前葉土器の研究」『古文化談叢』第59集
後藤　守一　1933「駿河浮島村出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第23巻第４号日本考古学会
佐原　　眞　1960「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系』２-日本Ⅱ　弥生時代、平凡社
佐原　　眞　1983「銅鐸の始まりと終りと」『展望アジアの考古学』樋口隆康教授退官記念論集、新潮社
高倉　洋彰　1973「銅鐸製作開始年代論の問題点」『九州考古学』第48号、九州考古学会
高倉　洋彰　1982「朝鮮小銅鐸から銅鐸へ」『考古学ジャーナル』№210　ニューサイエンス社
高倉　洋彰　1996「銅鐸の起源と文化」『戦後50年古代史発掘総まくり』朝日新聞社
田中　　琢　1970「「まつり」から「まつりごと」へ」『古代の日本』５近畿　角川書店
都出比呂志　1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第３号　考古学研究会
常松　幹雄　1985「小銅鐸の分布とその背景―小銅鐸の史的位置づけをめぐって―」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部
常松　幹雄　1991「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学出版部
常松　幹雄　1993「庄内式土器の時代（玄界灘沿岸）」『考古学ジャーナル』363号　ニューサイエンス社
常松　幹雄　2003「弥生終末期の土器と土師器」『季刊考古学』84号　雄山閣
中島恒次郎　1995「各地の土器様相12 九州北部」『概説中世土器・陶磁器』真陽社
中間　研志　1995『久原遺跡群Ⅲ』久山教育委員会
中間　研志　1997『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書43』福岡県教育委員会
沼田　頼輔　1913「銅鐸考」『考古学雑誌』第３巻９号　日本考古学会
難波　洋三　1986「銅鐸」『弥生文化の研究』第６巻　道具と技術Ⅱ、雄山閣
春成　秀爾　1994「最古の銅鐸」『考古学雑誌』第70巻第１号、日本考古学会
比田井克仁　2001「関東における「小銅鐸」祭祀について」『考古学雑誌』第86巻第２号、日本考古学会

逸見　　端　1983「銅鐸小考―文献資料の囁き―」『考古学ジャーナル』214　ニューサイエンス社
平田　篤胤　811『弘仁歴運記考』
福島日出海　1988「福岡県嘉穂郡嘉穂町原田遺跡出土の小銅鐸について」『考古学雑誌』第73巻第４号、日本考古会
松井　一明　1989「静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第75巻第２号、日本考古学会
松井　一明　2004「小銅鐸と銅鐸祭祀」『季刊考古学』第86号、雄山閣
馬淵　久夫　1982「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』第86巻１号　日本考古学会
三木　文雄　1955『日本考古学講座』
宮地聡一郎　2009「弥生時代開始年代をめぐる炭素14年代測定土器の検討」『考古学研究』第55巻４号
宮本一夫・白雲翔　2009『中国初期青銅器文化の研究』九州大学出版会
森本　六爾　1930『長門発見の弥生土器-その青銅器との関連』『考古学』第１巻３号　東京考古学会
柳田　康雄　1986「青銅器の彷製と創作」『図説発掘が語る日本史』６
山崎　純男　1980「弥生文化成立期における土器の編年研究」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』
山崎純男・島津義昭　1981「晩期の土器―九州の土器―」『縄文文化の研究』４雄山閣出版
山崎　純男　2004「北九州縄文土器の編年」『古代東アジア出土の植物遺存体』（２）先史・古代九州出土植物遺存に関する実証的研究　熊本大学文学部
山本　信夫　1989「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『乙益重隆先生古稀記念論文集』
吉留　秀敏　1993「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価」『古文化談叢』第30集（上）
和辻　哲郎　1920「銅鐸銅剣文化圏論」岩波書店

市史・図録・報告書関係
筑紫野市史編さん委員会編『筑紫野市史』上巻　自然環境　原始・古代中世　筑紫野市　1999年
筑紫野市史編さん委員会編『筑紫野市史』資料編（上）　考古資料　筑紫野市　2002年
『大型建物から見えてくるもの』弥生時代のまつりと社会-第１回滋賀・大阪博物館連携企画「弥生建物を探る」平成21年春季特別展図録　滋賀県立安土城考古博物館　2009
『三雲遺跡』Ⅲ　福岡県文化財調査報告書第63集　福岡県教育委員会　1982
『三雲・井原遺跡』Ⅴ　前原市文化財調査報告書第90集　前原市教育委員会　2006
『大成里遺跡発掘調査第３次指導委員会議資料』京畿文化財団付設畿甸文化財研究院　2005
『忠州金陵洞遺跡』忠北大学校博物館調査報告　第112冊　忠北大学校博物館2007
『石崎曲り田遺跡』１　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第８集　福岡県教育委員会　1983
『雀居遺跡』３　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第407集　福岡市教育委員会　1995
『永岡岸元遺跡』筑紫野市文化財調査報告書　第91集　筑紫野市教育委員会　2007
『西新町遺跡』Ⅲ　福岡県文化財調査報告書　第157集　福岡県教育委員会　2001
『以来尺遺跡』Ⅰ～Ⅲ　筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書　第４・６・７集　福岡県教育委員会　1997～1999

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表（１）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第83図 1	5-S0002	粗製浅鉢 口縁部			(1.4)		内外面ともに 黄灰色	3㎜以上の長石と2㎜以下の石英、1㎜以下の角閃石を含む	やや良好	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	口縁直下沈線 1条沈線	縄P0090
第83図 2	5-S0002	粗製浅鉢 口縁部			(3.8)		外面：浅黄色 内面：暗灰黄色	1㎜以上の長石、角閃石、雲母を含む	やや不良	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	口縁直下沈線	縄P0086
第83図 3	5-S0002	粗製深鉢 口縁部			(11.0)		内外面ともに にぶい黄色	3㎜程の長石と石英、1㎜以下の角閃石を含む	やや良好	外面：二枚貝による条痕 内面：条痕後ヘラミガキ		縄P0091
第83図 4	5-S0002	精製浅鉢 口縁部			(6.1)		内外面ともに 黒褐色	1㎜以下の長石、石英、角閃石を含む	良好	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	口縁外端面 沈線1条	縄P0092
第85図 1	14-S1010 P20 大型建物1	複合口縁壺 口縁部	(15.6)		(4.6)		外面：黒褐色 内面：明黄褐色	金雲母、長石含む	やや不良	外面：口縁ハケ後ヨコナデ 肩部ヨコナデ 内面：ヨコナデ	山陰系？ 外面黒斑	P 1998
第85図 2	14-S1010 P3 大型建物1	甕 口縁部	(26.0)		(3.8)		内外面ともに 明黄褐色	石英、金雲母と長石を多く含む	良好	外面：口縁ハケ後ヨコナデ 内面：ハケ		P 2001
第85図 3	14-S1010 P3 大型建物1	甕 口縁部	(31.8)		(5.1)		外面：灰黄褐色 内面：にぶい褐色	金雲母、角閃石と長石を多く含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ハケ 頸部ヨコナデ	頸部貼付突帯	P 2002
第85図 4	14-S1010 P11 大型建物1	甕 底部		(8.0)	(3.5)		外面：明黄褐色 内面：橙色	金雲母、石英と長石を多く含む	やや不良	外面：ナデ 内面：ハケ		P 2000
第88図 1	14-S1027 P7 大型建物2	複合口縁壺 口縁～頸部	(23.6)		(8.3)		内外面ともに 明黄褐色	長石、赤色酸化粒均一に含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ 頸部ハケ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部ハケ		P 2038
第88図 2	14-S1027 P21 大型建物2	複合口縁壺 口縁部	(23.0)		(4.0)		内外面ともに 明黄褐色	1～3mm大の石英・長石と金雲母、角閃石含む	やや不良	外面：口縁部ヨコナデ 頸部ハケ 内面：ヨコナデ		P 2041
第88図 3	14-S1027 P7 大型建物2	甕 口縁～体部	(28.0)		(10.2)		内外面ともに 黄橙色	石英、金雲母を含み長石目立つ	良好	外面：口縁・体部ハケ 内面：ハケ後一部ナデ	頸部貼付突帯	P 2039
第88図 4	14-S1027 P2 大型建物2	甕 口縁～体部	(11.2)		(5.5)		内外面ともに 浅黄色	石英、長石、雲母含む	良好	外面：口縁部ナデ 体部ハケ 内面：口縁部ヨコハケ 体部ハケ後ヘラナデ		P 2037
第88図 5	14-S1027 P13 大型建物2	甕 底部		(7.0)	(1.8)		内外面ともに 黄灰色	石英、金雲母、角閃石を含み長石目立つ	やや不良	外面：体部ハケ 底部ナデ 内面：ハケ		P 2040
第91図	14-S0059 大型建物3	壺 底部		(4.0)	(5.3)		外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	1～3mm大の石英、長石と金雲母含む	不良	外面：ハケ及びナデ 内面：ハケ後ナデ		P 1822
第92図 1	14-S0068 P1 大型建物4	土玉	長 2.8		2.3	幅 2.7	内外面ともに 浅黄色	長石含む	良好	外面：ナデ 内面：ナデ	装飾品?	P 1839
第92図 2	14-S0068 P9 大型建物4	甕 口縁部	(29.4)		(5.9)		内外面ともに 橙色	1～3mm大の石英、長石と金雲母、角閃石含む	やや不良	外面：口縁部ヨコナデ及び ハケ、体部ハケ 内面：ハケ		P 1830
第92図 3	14-S0068 P8 大型建物4	甕 底部		5.0	(1.8)		外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	石英、長石、金雲母含む	やや不良	内外面ともに摩滅顕著により調整不明		P 1837
第92図 4	14-S0068 P8 大型建物4	甕 底部		(8.2)	(2.9)		内外面ともに 橙色	石英、長石、赤色酸化粒含む	やや不良	外面：ヘラケズリか？ 内面：ハケ		P 1836
第92図 5	14-S0068 P2 大型建物4	甕 底部		(9.0)	(3.7)		外面：にぶい黄橙色 内面：黒褐色	1～5㎜大の石英、長石と角閃石含む	やや不良	外面：体部ヘラナデ？ 底部ハケ後ナデか 内面：ハケ		P 1835
第92図 6	14-S0068 P1 大型建物4	土製支脚		脚径 (10.8)	(7.6)		外面：浅黄橙 内面：にぶい黄橙色	石英、角閃石と1㎜以下の長石多く含む	良好	外面：ヘラケズリか 内面：ヘラケズリ及びナデ		P 1838
第96図	14-S1525 P5 大型建物5	甕 底部		(5.5)	(1.8)		外面：にぶい橙色 内面：灰褐色	長石、角閃石を含み、長石目立つ	普通	外面：摩滅により調整不明 ヘラ状工具の痕跡 内面：目滅により調整不明	2次焼成	P 2177
第103図 1	9-S0001	甕 口縁～体部	(12.0)		(6.0)		外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	石英、長石、角閃石、赤色酸化粒、雲母を含む	良好	外面：口縁部ハケ、頸部～体部ハケ 内面：口縁部ハケ、頸部～肩部ナデ、体部ハケ	外面体部黒斑	P 1005

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表（２）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第103図2	9-S0001	甕 口縁～体部	(12.0)		(6.4)	12.6	外面:浅黄橙色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、角閃石0.2～0.3㎜以下の雲母を多く含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部タタキ後ハケ 内面:口縁部磨滅し調整不明、体部ハケ	外面体部黒斑	P 1003
第103図3	9-S0001	鉢	(13.2)	2.4	6.0		外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄橙色	1～2㎜大の長石を多くと、1㎜以下の角閃石をわずかに含む	普通	外面:磨滅顕著により調整不明 内面:口縁部ヨコナデ、体～底部ハケ後ミガキか	外面底部黒斑	P 1007
第103図4	9-S0001	甕 底部		(5.0)	(2.9)		内外面ともに 浅黄橙色	1～2㎜大の石英、長石、角閃石、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 1006
第103図5	9-S0001	壺 底部		(7.0)	(4.2)		内外面ともに にぶい橙色	1㎜以下の潮汐、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケを施すが磨滅し不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 1004
第103図6	9-S0001	高杯	16.2	脚径11.1	12.7		内外面ともに 浅黄色	1㎜以下の石英、長石、金雲母角閃石を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、杯部ハケ後ナデ、脚部ハケ 内面:杯部ハケ、脚柱部ヘラケズリ、裾部ハケ		P 1021
第106図1	14-S0001	甕 口縁～体部	16.5		(16.2)	27.7	内外面ともに 灰黄色	2㎜以下の長石、角閃石を多く1㎜以下の石英を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部ヘラナデ。体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	外面体部黒斑布留系	P 1092
第106図2	14-S0001	壺 口縁～体部	15.4		復元高(21.0)	22.2	内外面ともに 浅黄色	2.5㎜以下の長石を多く、1㎜以下の石英、角閃石含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部～体部ヘラケズリ	布留系	P 1091
第106図3	14-S0001	小型丸底壺	8.0		8.2	8.7	外面:オリーブ褐色 内面:灰黄褐色	1㎜以下の石英少量と、2㎜以下の角閃石、長石を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ。体部ハケ後ナデ。底部ケズリ 内面:口縁部ハケ後ナデ 体部ナデ・指圧痕 底部ケズリ	強い火を受ける	P 1089
第106図4	14-S0001	小型丸底壺	7.3		8.9	8.7	内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、角閃石、赤色酸化粒と、0.1㎜以上の金雲母を含む	良好	外面:口縁～腹部ハケ 腹部～底部ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ後ナデ 体部～底部ナデ	外面底部黒斑	P 1088
第106図5	14-S0001	手づくね土器 鉢	(4.8)		3.7		内外面ともに 浅黄色	1㎜以下の長石と金雲母、角閃石を含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ		P 1090
第106図6	14-S0001	高杯 杯部	14.1		(5.6)		内外面ともに 淡黄色	3㎜以下の長石と、1㎜以下の角閃石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 杯部ハケ 内面:口縁部ナデ 杯部ハケ		P 1094
第106図7	14－S0001 P2	高杯 杯部	(19.8)		(5.4)		内外面ともに 浅黄橙色	3㎜以下の長石と、1㎜以下の赤色酸化粒、微細金雲母を含む	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨滅により不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅により不明瞭		P 1105
第106図8	14-S0001	高杯 杯部	(18.5)		(5.7)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と、0.5㎜以下の角閃石、雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 杯部ナデ 内面:口縁部ナデ 杯部ハケ後ナデ		P 1093
第108図1	14-S0003	高杯 杯～脚部		脚径(13.9)	(8.7)		内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石と雲母を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 内面:脚柱部絞り痕 磨滅により不明瞭		P 1110
第108図2	14-S0003	小型器台 口縁～脚部	(9.2)		5.2		内外面ともに 橙色	長石を多く、角閃石、赤色酸化粒を少量含む	良好	外面:ヘラミガキ 部分的にハケを施す 内面:口縁部磨滅し調整不明、脚部ナデ	3方スカシ	P 1129
第108図3	14-S0003	鉢 口縁～底部	(12.8)		4.5		内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石、赤色酸化粒、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 体部～底部ハケ 内面:ナデ		P 1119
第108図4	14-S0003	小型鉢 口縁～体部	(13.0)		(4.1)		内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石を含む	良好	外面:磨滅により不明 内面:磨滅により不明		P 1124
第108図5	14-S0003	鉢 口縁～底部	9.2	2.6	5.2		外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄色	1㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒、角閃石を含む	良好	外面:タタキを施すが磨滅により不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅により不明瞭	外面体部黒斑	P 1114
第108図6	14-S0003	鉢 口縁～底部	11.0	5.5	6.4		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部指圧痕 内面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ、底部ナデ		P 1118
第108図7	14-S0003	鉢 口縁～底部	12.7		6.9		内外面ともに 淡黄色	1.5㎜以下の石英と金雲母を含む	良好	外面:磨滅により不明 底部ヘラケズリ 内面:ハケを施すが磨滅により不明瞭	外面体部～底部黒斑	P 1142
第108図8	14-S0003	鉢 口縁～体部	(17.0)		(7.0)		外面:灰褐色 内面:にぶい褐色	3㎜以下の長石と、1㎜以下の金雲母、角閃石を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:ハケ		P 1125

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表（３）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第108図 9	14-S0003	鉢 口縁～底部	(14.0)		7.2		内外面ともに にぶい橙色	2㎜以下の長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面：ハケ後ナデ 内面：ハケ後ヘラミガキ		P 1121
第108図 10	14-S0003	甕 底部		5.2	(5.7)		内外面ともに にぶい橙色	2㎜以下の長石、雲母と赤色酸化粒	普通	外面：体部ナデ 底部ヘラケズリ 内面：ナデ及び指圧痕	底部穿孔	P 1122
第108図 11	14-S0003	小型丸底壺	(12.2)		9.7	12.5	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄橙色	0.5㎜以下の長石を多く、雲母と角閃石を少量含む	良好	外面：口縁～頸部ヨコナデ 体部～底部ハケ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部～底部ハケ後ナデ	外面体部黒斑	P 1113
第108図 12	14-S0003	広口壺 口縁部	(18.0)		(7.8)		内外面ともに にぶい橙色	3㎜以下の長石と、角閃石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面：口縁部ハケ後ナデ 頸部上方ナデ 内面：ハケ後ナデ		P 1116
第108図 13	14-S0003	広口壺 口縁～肩部	(14.2)		(7.2)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、角閃石少量含む	普通	外面：磨滅し不明瞭 肩部ハケの痕跡 内面：口縁部ハケ後ヨコナデ、肩部ハケ後ナデ		P 1120
第108図 14	14-S0003	二重口縁壺			13.1	13.3	外面：にぶい黄橙色 内面：黄灰色	3㎜以下の石英・長石と、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面：口縁～腹部ヨコナデ 腹部～底部ケズリ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ 体部～底部ハケ	外面媒付着	P 1111
第108図 15	14-S0003	甕 口縁～体部	(10.9)		(4.5)		外面：浅黄覚色 内面：灰白色	2㎜以下の長石、赤色酸化粒、雲母を含む	良好	外面：磨滅により不明 内面：ハケ		P 1126
第108図 16	14-S0003	甕 口縁部	(16.0)		(3.4)		内外面ともに 灰褐色	石英、雲母を含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ 肩部磨滅 内面：口縁部ヨコナデ 頸～肩部ケズリ後ナデ	布留系	P 1127
第108図 17	14-S0003	甕 口縁部	(14.2)		(5.1)		外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい橙色	長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ 磨滅により不明瞭 内面：磨滅により不明瞭 肩部ヘラケズリ	布留系	P 1128
第108図 18	14-S0003	甕 口縁～肩部	(13.3)		(6.6)		内外面ともに にぶい橙色	2㎜以下の長石を含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ 頸部～体部ハケ後ナデ 内面：口縁～肩部ハケ 体部ナデ	布留系	P 1117
第108図 19	14-S0003	壺 底部		(3.9)	(4.1)		外面：黒色 内面：浅黄色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒少量含む	良好	外面：体部タタキ後ナデ 底部タタキ後ナデ 内面：磨滅しているがクモの巣状ハケを施す		P 1123
第108図 20	14-S0003	甕 底部		(9.0)	(14.9)		外面：にぶい橙色 内面：橙色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母を含む	やや不良	外面：体部タタキ後ハケ 底部ヘラケズリ 内面：体部ハケ 底部ナデ	2次焼成	P 1115
第110図 1	14-S0004	広口壺 口縁～体部	(17.0)		(10.7)		内外面ともに橙色	2㎜以下の長石と、0.5㎜以下の石英を含む	良好	外面：口縁部ハケ、頸部ハケ後ヘラミガキ、体部ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部ヘラミガキ、体部ハケ	搬入土器 頸部貼付突帯	P 1211
第110図 2	14-S0004	甕 口縁～体部	(15.7)		(6.3)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石を含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ 体部磨滅 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、体部ヘラケズリ	布留系 外面媒付着	P 1214
第110図 3	14-S0004	甕 口縁～底部	(11.7)		11.0	13.0	外面：にぶい橙色 内面：橙色	2㎜以下の長石を多くと、角閃石、金雲母、石英を含む	普通	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ、腹部～底部ハケ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ケズリ後ナデ、体部ケズリ		P 1213
第110図 4	14-S0004	甕 口縁～体部	12.8		(9.9)	12.2	外面：にぶい橙色 内面：黒褐色	2㎜以下の長石を多く、0.5㎜以下の雲母を含む	良好	外面：タタキを施すが磨滅により不明瞭 内面：口縁部ハケ 磨滅により不明瞭		P 1212
第110図 5	14-S0004	鉢 口縁～底部	(12.8)	3.8	6.3		外面：明褐灰色 内面：にぶい橙色	1㎜以下の長石、0.5㎜以下の金雲母	良好	外面：ナデ 内面：ナデ クモの巣状ハケ		P 1215
第110図 6	14-S0004	小型器台	10.0		(5.9)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面：磨滅により調整不明 内面：磨滅により調整不明		P 1217
第110図 7	14-S0004	手づくね土器 鉢	(3.0)		4.7		内外面ともに にぶい橙色	1～3㎜大の長石と1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面：ナデ及び指圧痕 内面：ナデ及び指圧痕		P 1218
第110図 8	14-S0004	鉢 口縁～底部	8.3		(4.2)		外面：橙色 内面：明赤褐色	1㎜以下の長石を含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ 体部ナデ 内面：ハケ後一部ナデ		P 1216
第110図 9	14-S0064	鉢 口縁～底部	9.0		(5.2)		内外面ともに 橙色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面：指押さえ、ナデ 内面：ハケ及びナデ	外面底部黒斑	P 1828
第110図 10	14-S0064	高杯 脚部			(9.9)		外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	2㎜以下の長石と角閃石、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面：ヘラミガキ 内面：脚柱部ヘラケズリ 裾部ハケ	2方スカシ	P 1829

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表（４）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第112図 1	14-S0005	鉢 口縁～底部	13.3		6.7		内外面ともに 黄橙色	3㎜以下の長石を多く、1㎜以下の石英、金雲母を少量含む	不良	外面:磨滅により不明瞭 内面:磨滅により不明瞭		P 1240
第112図 2	14-S0005	鉢 口縁～底部	(15.1)		(5.6)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:磨滅により不明瞭 内面:磨滅により不明瞭 ハケ後ナデか		P 1241
第112図 3	14-S0005	鉢 口縁～底部	9.4		5.0		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、角閃石金雲母を含む	良好	外面:ナデ、指押さえ 磨滅により不明瞭 内面:ナデ	内面口縁部 顔料？	P 1237
第112図 4	14-S0005	鉢 口縁～底部	15.5		13.5		内外面ともに 淡黄色	1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒、3㎜以下の石英、長石を含む	普通	外面:口縁部ヘラナデ 体～底部粗いハケ 内面:口縁部ヘラケズリ 体部～底部ハケ後ナデ		P 1239
第112図 5	14-S0005	甕 底部		(5.3)	(3.0)		内外面ともに 灰白色	3㎜以下の長石と、1㎜以下の石英、角閃石を含む	良好	外面:体部ハケ後ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ 内面:ハケ後ナデ		P 1238
第114図 1	14-S0006	高杯 口縁～底部	19.0	脚径 12.6	13.0		内外面ともに 浅黄橙色	1.5㎜以下の石英と、赤色酸化粒、2㎜以下の長石を含む	不良	外面:ヘラミガキと思われるが、磨滅により不明瞭 内面:杯部ハケ後ミガキの 併用。脚部磨滅	外面口縁部 黒斑	P 1258
第114図 2	14-S0006	高杯 杯部	17.7		(5.4)		内外面ともに 明黄褐色	4㎜以下の赤色酸化粒、1㎜以下の石英、角閃石、雲母を含む	良好	外面:ハケ、ミガキの痕跡 磨滅により不明瞭 内面:ハケの痕跡 磨滅により不明瞭		P 1249
第114図 3	14-S0006	高杯 杯部	17.6		(6.5)		内外面ともに 浅黄橙色	3㎜以下の角閃石、1㎜以下の石英、雲母を含む	良好	外面:杯部ハケの痕跡 磨滅により不明瞭 内面:磨滅により調整不明		P 1254
第114図 4	14-S0006	高杯 杯部		脚径 10.0	(6.6)		内外面ともに 橙色	2㎜以下の長石を少量含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:脚柱部ケズリ 裾部ハケ		P 1253
第114図 5	14-S0006	鉢 口縁～底部	(11.3)		(5.7)		内外面ともに 浅黄橙色	3㎜以下の長石と赤色酸化粒、金雲母をわずかに含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ、指圧痕		P 1262
第114図 6	14-S0006	小型丸底壺	(8.2)		10.9	10.9	内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の雲母、石英、角閃石を含む	普通	外面:口縁部磨滅 体部ハケ、磨滅 内面:口縁部磨滅。肩部指押さえ、体～底部ケズリ	外面媒付着 2次焼成	P 1255
第114図 7	14-S0006	小型丸底壺	8.7		10.6	9.1	内外面ともに 橙色	2㎜以下の長石と1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 体部タタキ後ハケ 内面:口縁～肩部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ナデ	外面媒付着	P 1250
第114図 8	14-S0006	小型丸底壺	8.8		10.2	8.5	内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の石英、雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部磨滅 体部ハケ 内面:口縁部磨滅。頸部ヘラケズリ、体部ナデ	外面体部黒斑 内面赤彩？	P 1251
第114図 9	14-S0006	小型丸底壺	8.3		(8.1)	9.3	内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石と石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ後ハケ 体部下部ヘラケズリ 内面:口縁部磨滅、体部ヘラケズリ	外面媒付着	P 1256
第114図 10	14-S0006	小型丸底壺	7.3		9.9	9.4	内外面ともに 黒褐色	3㎜以下の長石と1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 体部～底部ハケ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ 体部～底部ナデ	外面煤付着	P 1257
第114図 11	14-S0006	壺 口縁～肩部	(11.3)		(5.8)		内外面ともに 明赤褐色	1㎜以下の角閃石を少量、石英雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 肩部ハケ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ 肩部ヘラケズリか		P 1248
第114図 12	14-S0006	複合口縁壺 口縁部	(27.1)		(5.5)		内外面ともに 淡橙色	2㎜以下の長石と0.5㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 頸部磨滅し調整不明 内面:ナデ、指圧痕	外面口縁ヘラ 描き鋸歯紋	P 1261
第114図 13	14-S0006	器台 口縁～脚部	(13.2)		(6.8)		外面:浅黄橙色 内面:灰白色	2㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヨコナデ 磨滅 内面:ナデ 磨滅		P 1260
第114図 14	14-S0006	ミニチュア土器 鉢	3.7		2.5		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜大の角閃石を多くと、1㎜以下の石英、長石を含む	良好	外面:磨滅顕著 指圧痕 内面:磨滅顕著		P 1252
第114図 15	14-S0006	甕 口縁～肩部	(18.8)		(4.3)		外面:にぶい褐色 内面:灰褐色	2㎜以下の長石と角閃石をわずかに含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 肩部タタキ後ナデか 内面:口縁部磨滅 肩部ヘラケズリ	河内庄内	P 1259
第114図 16	14-S0006	鉢 把手			(4.1)		外面:灰白色 内面;浅黄橙色	2㎜以下の長石を多くと、金雲母、石英、赤色酸化粒を少量を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:ナデ	朝鮮半島系？	P 1263
第117図 1	14-S0007	高杯	(33.4)	脚径 (14.90)	21.6		上位:橙色 下位:浅黄色	3㎜以下の長石を多く、雲母を少量含む	普通	外面:口縁～杯部ヘラミガキ 脚部ハケ後ヘラミガキ 内面:口縁部ヘラミガキ、杯部ナデ、裾部ハケ後ナデ	外面脚部丹塗り 杯・脚部土を使用 裾部3方スカシ	P 1295

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表（５）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第117図 2	14-S0007	高杯	33.4		(20.7)		上位:橙色 下位:浅黄色	3㎜以下の長石と0.5㎜以下の金雲母を少量含む	不良	外面:磨滅により調整不明 内面:口縁部～杯部磨滅 脚柱部絞り痕	裾部3方スカシか 杯・脚部土を使用	P 1297
第117図 3	14-S0007	高杯 杯部	(33.0)		(9.6)		内外面ともに橙色	5㎜以下の長石、石英を含む	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨滅により不明瞭 内面:口縁部ヘラミガキ、杯部ハケを施すが磨滅により不明瞭		P 1294
第117図 4	14-S0007	高杯 杯部	33.7		(10.5)		内外面ともに 橙色	3㎜以下の長石を多く、1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁～杯部ハケ後ミガキ 内面:磨滅により不明瞭 ヘラミガキか		P 1296
第117図 5	14-S0007	高杯 脚柱部			(8.2)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と赤色酸化粒、1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:脚柱部ハケ後ナデ 裾部ヨコナデ 内面:脚柱部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ		P 1301
第117図 6	14-S0007	小型壺	(5.4)		9.2	10.5	内外面ともに にぶい橙色	3㎜以下の長石・石英と2㎜以下金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部ハケ後ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内面:口縁部ヘラミガキ 体部～底部ナデか	内面底部赤色顔料か	P 1298
第117図 7	14-S0007	甕 口縁～体部	(30.4)		(16.0)		内外面ともに にぶい黄橙色	2.5㎜以下の長石を多く、1㎜以下の金雲母を含む	普通	外面:口縁～肩部ハケ後ナデ、体部タタキ後ハケ 内面:ハケ	外面口縁部煤付着	P 1299
第117図 8	14-S0007	甕 口縁～体部	(25.4)		(28.5)	(26.7)	内外面ともに 橙色	4㎜以下の長石、赤色酸化粒と2㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部磨滅、体部タタキ後ハケ 内面:磨滅により不明瞭		P 1300
第120図 1	14-S0012	小型器台	7.5	脚径 7.5	6.4		内外面ともに 浅黄橙色	1～2㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 ハケか 内面:磨滅により不明瞭 脚部ハケ	3方スカシ	P 1347
第120図 2	14-S0012	低脚高杯 脚部			(4.2)		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の金雲母、3㎜以下の長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキ 内面:磨滅により不明瞭 ヘラミガキ		P 1346
第120図 3	14-S0012	高杯 脚柱部			(7.9)		内外面ともに 橙色	1.5㎜以下の石英、金雲母と3㎜以下の長石を多く含む	良好	外面:杯部ハケ、脚柱部ヘラミガキ及びハケ 内面:杯部磨滅、脚柱部ヘラケズリ、裾部ハケ		P 1344
第120図 4	14-S0012	高杯 脚部		脚径 13.1	(7.7)		内面ともに にぶい橙色	2㎜以下の長石を多く、1.5㎜以下の角閃石、金雲母、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 基部ヘラナデ 内面:脚柱部ヘラケズリ 磨滅により不明瞭	4方スカシ	P 1345
第120図 5	14-S0012 P5	鉢	8.5	2.9	6.3		内外面ともに 橙色	1～2㎜以下の石英、1㎜以下の長石、角閃石を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 内面:磨滅により調整不明 ナデか	外面口縁～体部黒斑	P 1377
第120図 6	14-S0012	鉢 底部		(4.0)	(3.9)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:ナデ 内面:ヘラナデ	外面体部～底部黒斑	P 1377
第120図 7	14-S0012 P5	鉢	10.8	3.6	6.3		内外面ともに にぶい褐色	1㎜以下の金雲母を多く、1～2㎜以下の長石、石英を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部周縁ヘラケズリ 内面:ハケ後ナデ		P 1376
第120図 8	14-S0012	小型壺	(10.5)		9.8		外面:橙色 内面:褐灰色	1㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ後ナデ、体部上ナデ、体部下～底部ヘラナデ 内面:口縁～体部上位ナデ 体部～底部ヘラケズリ		P 1335
第120図 9	14-S0012	甕 口縁部	(14.0)		(2.5)		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 頸部ヘラナデ痕 内面:磨滅により調整不明	畿内系	P 1337
第120図 10	14-S0012	甕 口縁部	(14.6)		(4.5)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の石英、長石を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 内面:磨滅により調整不明	畿内系	P 1339
第120図 11	14-S0012	甕 口縁部	〈15.60〉		(3.2)		内外面ともに にぶい橙色	2㎜以下の石英、長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部 頸部タタキ後ナデ 内面:口縁部ハケ後ナデ 頸部ヘラケズリ	畿内系 外面口縁部煤付着	P 1338
第120図 12	14-S0012	甕 口縁～体部	(13.8)		(6.5)		内外面ともに 明赤褐色	1㎜以下の石英、金雲母と3㎜以下の長石を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 内面:磨滅により調整不明		P 1336
第120図 13	14-S0012	甕 体部～底部			(10.4)		外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄褐色	1.5㎜以下の石英を少量と、2㎜以下の長石を多く含む	良好	外面:ハケを施すが磨滅により不明瞭 内面:磨滅により調整不明	2次焼成	P 1340
第120図 14	14-S0012	甕 口縁部	(31.1)		14.9	33.8	内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の石英、金雲母と3㎜以下の長石を多く含む	良好	外面:口縁部ハケ 体部タタキ後ハケ 内面:口縁部ハケを施すが磨滅により不明瞭 体部ハケ	口縁外端面刻目 頸部刻目付貼付突帯	P 1349

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表（６）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第120図 15	14-S0012	小型甕	(13.5)	3.2	15.2	15.9	外面:灰白色 内面:黒褐色	1.5㎜以下の石英、金雲母、長石を含む	良好	外面:口縁～体部中位ナデ 体部中位～底部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、体部上位ハケ及び指押さえ 体部下ヘラケズリ		P 1334
第120図 16	14-S0012	甕 底部			(4.2)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の石英、金雲母、角閃石、3㎜以下の長石を含む	良好	外面:ハケ及びヘラミガキ 内面:ヘラケズリ	外面底部2次焼成	P 1342
第120図 17	14-S0012	鉢	(19.4)	3.0	7.1		外面:にぶい橙色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の金雲母を多く、1.5㎜以下の石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ナデ、体～底部ヘラケズリ後ナデ 内面:口縁部ナデ、体部上位ハケ、下位ヘラミガキ		P 1343
第120図 18	14-S0012	土製支脚		脚径 9.0	8.0		内面ともに にぶい橙色	2㎜以下の長石を多く、1㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:天井部タタキ後ナデ 脚部ナデ 内面:ナデ	脚部円孔 ヘラ状工具による当たり	P 1348
第122図 1	14-S0018	高杯 杯部	(20.80		(6.4)		内外面ともに 橙色	3㎜以下の赤色酸化粒、2㎜以下の長石、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 1385
第122図 2	14-S0018	高杯 杯部	(17.0)		(6.5)		内外面ともに 灰白色	2㎜以下の長石、角閃石、赤色酸化粒、1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、杯部ヘラミガキを施すが磨滅により不明瞭 内面:磨滅し調整不明	外面杯部黒斑	P 1386
第122図 3	14-S0018	二重口縁壺 口縁～体部	13.5		(20.7)	(23.4)	外面:灰白色 内面:浅黄橙色	5㎜以下の石英と2㎜以下の長石を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	山陰系 外面黒斑 肩部刺突文	P 1383
第122図 4	14-S0018	甕 底部		(4.0)	(4.5)		外面:にぶい黄色 内面:黄灰色	2㎜以下の長石、角閃石と1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:体部ハケ 底部ナデ 内面:体部ハケ 底部ナデ		P 1384
第122図 5	14-S1002	壺 口縁～肩部	(8.9)		(4.6)		内外面ともに にぶい橙色	0.5㎜以下の長石を含む	良好	外面:口縁～肩部ハケ後ミガキか、目滅し不明瞭 内面:口縁～肩部ハケ 摩滅し不明瞭		P 2032
第122図 6	14-S1002	甕 口縁～肩部	(14.8)		(7.0)		内外面ともに 灰白色	0.1㎜前後の長石を多く、1㎜以下の金雲母を少量含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 肩部ハケ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ 肩部ハケ後ナデ		P 1929
第122図 7	14-S1002	鉢	11.5	5.1	8.2		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石と、0.5㎜以下の石英、角閃石を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデ		P 1930
第122図 8	14-S1002	鉢	(10.1)	5.4	8.5		内外面ともに にぶい浅橙色	1㎜以下の長石と、0.5㎜以下の石英、角閃石を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデ		P 1928
第124図 1	14-S0021	手づくね土器 鉢	7.5		5.4		内外面ともに にぶい橙色	1㎜以下の長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:指頭痕 内面:指頭痕、ナデ		P 1402
第124図 2	14-S0021	高杯 脚部		脚径 12.0	(6.3)		内外面ともに 橙色	1㎜以下の角閃石、赤色酸化粒と0.5㎜以下の金雲母を少量含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:脚柱部ヘラオサエ 裾部ナデ		P 1391
第124図 3	14-S0021	鉢	(11.3)		(3.0)		内外面ともに 橙色	1.5㎜以下の赤色酸化粒と、1㎜以下の石英、長石を含む	良好	外面:磨滅顕著、ナデ 内面:磨滅顕著、ナデ		P 1401
第124図 4	14-S0021	鉢	(10.4)		6.4	10.8	内外面ともに 灰黄色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の角閃石、赤色酸化粒、0.5㎜以下の石英を含む	良好	外面:口縁～肩部ナデ、体部～底部刷ハケ後ナデ 内面:ナデ 磨滅により不明瞭	外面体部～底部黒斑	P 1398
第124図 5	14-S0021	鉢	11.0	4.0	7.7		外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄褐色	1㎜以下の金雲母を多くと、2㎜以下の石英を含む	良好	外面:口縁～体部タタキ後ナデ 内面:体部ナデ、底部ヘラナデか	外面体部黒斑 外面底部木葉痕	P 1393
第124図 6	14-S0021	鉢	11.8		6.4		内外面ともに にぶい黄橙色	1.5㎜以下の長石、石英、金雲母と1㎜以下の赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁～体部ナデ、指圧痕認められるが磨滅 底部ヘラケズリ 内面:磨滅のより不明瞭		P 1399
第124図 7	14-S0021	台付鉢	(13.2)	脚径 11.0	(8.7)		内外面ともに 明赤褐色	1㎜以下の金雲母と、1.5㎜以下の角閃石を少量、長石を多く含む	良好	外面:磨滅により不明瞭 脚部ハケの痕跡 内面:磨滅により不明瞭 脚部ハケ後ナデ		P 1394
第124図 8	14-S0021	台付鉢	13.6		(8.0)		内外面ともに 橙色	2㎜以下の長石を多く、1㎜以下の石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 内面:磨滅により不明瞭 ハケの痕跡		P 1392
第124図 9	14-S0021	壺 口縁部	(13.8)		(4.6)		外面ともに 橙色	2㎜以下の長石を多く、1㎜以下の金雲母、角閃石を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 磨滅により不明瞭 内面:ハケ後ナデ 磨滅により不明瞭		P 1396

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表（７）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第124図 10	14-S0021	直口壺 口縁～体部	(13.4)		(16.9)	15.3	外面:明灰黄色 内面:浅黄色	0.5㎜以下の金雲母を多く、1㎜以下の長石を含む	普通	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 体部ハケ 内面:口縁部細いヘラミガキ 肩部ナデ、体部ハケ	布留式 外面口縁部赤彩か	P 1389
第124図 11	14-S0021	壺 口縁～体部	18.0		(23.3)	22.0	外面:浅黄橙色 内面:灰黄色	2㎜以下の長石を多く、1.5㎜以下の赤色酸化粒、0.5㎜以下の金雲母を含む	やや不良	外面:口縁部ハケ、体部ハケ 磨滅により不明瞭 内面:口縁部ヘラミガキ後ナデ、頸部ナデ、体部ヘラケズリ	布留式	P 1395
第124図 12	14-S0021	甕 口縁～肩部	(15.7)		(5.4)		内外面ともに 浅黄色	2㎜以下の長石、赤色酸化粒と1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 肩部磨滅、ハケか 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	布留式	P 1397
第124図 13	14-S0021	甕 口縁～体部	(15.3)		(11.6)	19.9	内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の赤色酸化粒と1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ナデ 体部ハケ 内面:口縁部ナデ 頸～体部ヘラケズリ	布留式	P 1400
第124図 14	14-S0021	甕 口縁～体部	(16.0)		(15.9)	16.4	内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多く、1㎜以下の石英、金雲母少量、赤色酸化粒を含む	不良	外面:口縁部ナデ 体部ハケ 内面:口縁部ナデ、頸部～体部ヘラケズリ	布留式 外面肩部沈線	P 1390
第126図 1	14-S0023	高杯 脚部			(11.0)		外面:橙色 内面:浅黄橙色	2㎜以下の長石を含む	良好	外面:ヘラミガキ 内面:脚柱部絞り痕、ケズリ 裾部ハケ	外面丹塗り	P 1435
第126図 2	14-S0023	壺	(16.1)		(12.3)		内外面ともに にぶい橙色	4㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英を少量含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部～体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ 体部ハケ	14-S0023 内面体部媒付着	P 1437
第126図 3	14-S0023	甕 口縁部	(28.0)		(4.8)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石を多くと、0.5㎜以下の石英、角閃石を含む	やや不良	外面:ヨコナデ 内面:ハケ後ヨコナデ		P 1436
第126図 4	14-S0023	甕 底部		5.6	(5.0)		外面:淡赤橙色 内面:灰褐色	1.5㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:体部たたき後ナデか 磨滅により不明瞭 内面:体部ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ	2次焼成	P 1434
第126図 6	14-S0063	複合口縁壺 口縁～体部	(26.7)		(17,70)		内外面ともに 浅黄色	2㎜以下の長石を多くと、1.5㎜以下の石英、金雲母を少量含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 頸部～肩部ハケ 内面:口縁部磨滅し調整不明、頸部～肩部ハケ	頸部貼付突帯	P 1826
第129図 1	14-S0026	高杯 脚部		脚径 8.2	(7.2)		内外面ともに にぶい橙色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の石英、金雲母、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:ハケ後ナデ		P 1465
第129図 2	14-S0026	小型器台	10.3	脚径 8.6	8.3		内外面ともに にぶい橙色	1～3㎜大の長石と、石英を多くと、1㎜以下の赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅顕著により調整不明 内面:磨滅顕著により調整不明		P 1464
第129図 3	14-S0026	台付鉢 脚部		脚径 (6.0)	(2.1)		内外面ともに 明赤褐色	2㎜以下の長石を含む	良好	外面:ナデ 磨滅により不明瞭 内面:ナデ 磨滅により不明瞭	2次焼成	P 1469
第129図 4	14-S0026	小型壺 口縁～体部	(7.6)		(5.7)	7.4	内外面ともに 明褐色	0.5㎜以下の長石を含む	良好	外面:磨滅顕著により調整不明 内面:磨滅顕著により調整不明		P 1467
第129図 5	14-S0026	鉢	13.8	3.2	5.7		内外面ともに にぶい黄橙色	4㎜以下の長石を多く、1㎜以下の石英、角閃石をわずかに含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ 体部ヘラケズリか 内面:ハケ後ナデ 磨滅により不明瞭		P 1461
第129図 6	14-S0026	鉢	12.6	3.0	5.7		外面:浅黄橙・橙色 内面:にぶい橙灰白色	6㎜以下の石英、3㎜以下の長石2㎜以下の角閃石、1㎜以下の白雲母、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 体部～底部ナデ 内面:口縁部～体部ナデ 底部ナデ	外面黒斑	P 1460
第129図 7	14-S0026	鉢	(12.4)	3.0	(6.5)		内外面ともに にぶい黄橙色	5㎜以下の長石を多く、0.5㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 体部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ、ケズリ	外面底部木葉痕	P 1459
第129図 8	14-S0026	ミニチュア土器 壺	(3.4)	2.2	7.1	5.8	内外面ともに 暗灰黄色	1㎜以下の長石と、0.5㎜以下の石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ナデ及び指圧痕 内面:ナデ及び指圧痕		P 1458
第129図 9	14-S0026	手づくね土器		5.0	(3.5)		内外面ともに 浅黄色	2㎜以下の長石と、0.1ミリ以上の金雲母を含む	良好	外面:ナデ及び指圧痕 内面:ナデ及び指圧痕	猪口形態	P 1468
第129図 10	14-S0026	複合口縁壺 口縁部	(21.8)		(6.3)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と、0.5㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 頸部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ 頸部ハケ		P 1466
第129図 11	14-S0026	複合口縁壺 口縁～肩部	26.0		(14.3)		内外面ともに にぶい黄橙色	5㎜以下の長石、1㎜以下の角閃石、雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、肩部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ後ナデ、肩部ナデ	外面口縁部鋸歯紋 口縁部黒斑 頸部刻目付貼付突帯	P 1463

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表（８）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第129図12	14-S0026	甕	(14.9)		16.1	15.4	内外面ともににぶい橙色	3～5㎜大の長石と、1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面：口縁部ハケ、体部タタキ体部下方～底部ハケ後一部ヘラナデ 内面：口縁部ハケ後ナデ、体部ナデ、底部ハケ後ヘラケズリ		P 1462
第129図13	14-S0026	甕底部		4.8	(2.8)		外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	3㎜以下の長石を多く、1㎜以下の角閃石、石英、雲母を少量含む	良好	外面：体部ハケ 底部周縁指圧痕 内面：磨滅により不明瞭 ナデ		P 1470
第132図1	14-S0027	高杯	(25.8)		(19.0)		内外面ともににぶい黄橙色	3㎜以下の石英、1.5㎜以下の金雲母、1㎜以下の長石を含む	不良	外面：杯部ハケ後ヘラミガキ 脚部ヘラミガキ 内面：口縁～杯部ヘラミガキ 脚柱部ヘラケズリ	4方スカシ	P 1540
第132図2	14-S0027	高杯	(24,80)	脚径11.3	(16.6)		内外面ともに橙色	4㎜以下の長石を少量含む	普通	外面：磨滅により不明瞭 裾部ハケ 内面：杯部磨滅顕著、脚柱部絞り痕、裾部ハケ	3方スカシ	P 1527
第132図3	14-S0027	高杯杯部	33.1		(8.1)		外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい橙色	1㎜以下の金雲母を多く、角閃石、赤色酸化粒、2.5㎜以下の石英を少量含む	普通	外面：口縁部ハケ後ヘラミガキ、杯部磨滅 内面：ヘラミガキを施すが磨滅により不明瞭		P 1526
第132図4	14-S0027	高杯杯部	(33.5)		(10.1)		外面：灰黄褐色 内面：灰黄色	2㎜以下の金雲母と、1㎜以下の石英、長石を少量含む	良好	外面：口縁部ハケ、杯部磨滅により不明瞭 内面：口縁部ハケ後ヘラミガキ、杯部ヘラミガキ	2次焼成	P 1538
第132図5	14-S0027	器台	11.3	脚径(15.0)	20.3		内外面ともに浅黄色	2㎜以下の長石を多く、1㎜以下の角閃石、石英、金雲母を含む	普通	外面：口縁～脚中位ハケ後ナデ、裾部タタキ後ハケ及びナデ 内面：口縁～脚部ナデ、裾部ハケ後ナデ	袋状口縁部	P 1533
第132図6	14-S0027	鉢	16.5		7.8		内外面ともに浅黄色	3㎜以下の長石と石英を多く、角閃石、金雲母を少量含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ、底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ハケ		P 1528
第132図7	14-S0027	鉢	(28.8)		10.6		内外面ともににぶい黄橙色	3㎜以下の石英と2㎜以下の長石を多く、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面：口縁～体部ハケ 体部下位ヘラケズリ 内面：口縁～体部上ヘラミガキ、下位ミガキ後ナデ		P 1537
第132図8	14-S0027	複合口縁壺口縁部	(24.4)		(9.4)		内外面ともににぶい黄橙色	1㎜前後の金雲母を多くと、1㎜以下の石英、長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面：口縁部ハケ後ナデ 頸部ハケ 内面：口縁～頸部ハケ 一部ヘラミガキか	外面赤色顔料頸部貼付突帯痕跡	P 1532
第132図9	14-S0027	小型甕	(12.6)		(12.3)	15.6	内外面ともに橙色	2㎜以下の長石を多く、角閃石少しと、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面：口縁部磨滅、体部上位ハケ、体部下位ヘラケズリ 内面：口縁～頸部ハケ後ナデ、体部ナデ		P 1535
第132図10	14-S0027	甕口縁～体部	23.7		(25.9)	25.9	内外面ともににぶい黄橙色	1㎜以下の石英、金雲母少量と3㎜以下の長石を含む	普通	外面：口縁～体部ハケ 体部磨滅により不明瞭 内面：ハケ		P 1531
第132図11	14-S0027	甕口縁～体部	19.4		(20.0)	22.2	内外面ともににぶい黄橙色	1㎜以下の石英、金雲母少量と2㎜以下の長石を含む	普通	外面：口縁～肩部タタキ後ナデ、体部タタキ 内面：口縁部ハケ、頸部ナデ体部ハケ		P 1530
第133図12	14-S0027	甕口縁～体部	(23.4)		(13.7)		内外面ともににぶい黄橙色	2㎜以下の長石を多く、1㎜以下の雲母を含む	普通	外面：口縁部ヨコナデ、頸部～体部ハケ、磨滅 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ、磨滅し不明瞭		P 1536
第133図13	14-S0027	甕	15.7		(23.7)	16.1	外面：灰黄色 内面：にぶい黄褐色	3㎜以下の長石を多く、1㎜以下の雲母を含む角閃石、石英、赤色酸化粒を少量含む	普通	外面：口縁部ナデ、体部上位タタキ後ナデ、中位～下位タタキ後ハケ 内面：ハケ	外面口縁～体部中位媒付着2次焼成	P 1524
第133図14	14-S0027	甕底部			10.7		内外面ともに暗灰黄色	2㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面：体部ハケ後ナデ、体部下位～底部ヘラケズリ 内面：体部ハケ、底部ナデ		P 1539
第133図15	14-S0027	甕底部			(11.8)		内外面ともににぶい赤褐色	3㎜以下の長石を多く、1㎜以下の石英、角閃石、金雲母を含む	やや不良	外面：体部ハケ後ナデ、体部底部付近ナデ 内面：磨滅により不明瞭 底部ヘラナデ		P 1525
第133図16	14-S0027	直口壺	12.7		29.7	21.9	内外面ともに灰黄褐色	3㎜以下の角閃石と長石を多くと、1㎜以下の石英、金雲母少量含む	良好	外面：口縁～体部下半ハケ 体部下半～底部ヘラケズリ 内面：口縁～体部ハケ 体部下半～底部ヘラナデ	外面体部黒斑	P 1529
第133図17	14-S0027	甕	21.4		31.5	23.3	内外面ともににぶい黄橙色	1.5㎜以下の長石を多く、1㎜以下の赤色酸化粒を少量と、石英、角閃石を含む	良好	外面：口縁～体部タタキ後ハケ、体部下半～底部磨磨し調整不明 内面：口縁～体部ハケ、体部中位～底部磨滅し調整不明	2次焼成	P 1521
第133図18	14-S0027	甕	21.5		30.7	25.3	内外面ともににぶい黄橙色	2.5㎜以下の長石を多く、1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面：口縁～底部ハケ 内面：口縁～体部下位ハケ体部下位～底部ヘラナデ	頸部貼付突帯腹部刻目付貼付突帯	P 1522

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表（９）　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第133図 19	14-S0027	甕	24.1		37.8	26.1	内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の色酸化粒少量と金雲母を含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ後ハケ 体部タタキ後ハケ、底部 ナデ 内面：口縁～体部ハケ 底部ナデ		P 1523
第133図 20	14-S0034	鉢	18.0		6.5		内外面ともに 淡黄色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母を少量含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラミガキ		P 1748
第133図 21	14-S0034	鉢	(29.8)		(11.0)		外内面ともに にぶい橙色	3㎜以下の長石を多くと、1.5㎜以下の角閃石、金雲母を少量含む	普通	外面：口縁部ナデ、体部上ハケ及びナデ、下位ヘラケズリ 内面：口縁部ナデ、体部上位ハケ後ヘラミガキ 下位ヘラミガキ	外面黒斑	P 1751
第133図 22	14-S0034	壺 底部		(8.4)	(3.6)		内外面ともに 浅黄橙色	2.5㎜以下の長石を多くと、2㎜以下の石英、角閃石、金雲母を少量含む	普通	外面：磨滅し調整不明 内面：ハケ		P 1752
第133図 23	14-S0034	壺 底部			(4.5)		内外面ともに 浅黄色	2㎜以下の長石を多くと、1.5㎜以下の角閃石少量、1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面：ヘラケズリ 一部ナデ 内面：ハケ		P 1749
第133図 24	14-S0034	甕 口縁部	(19.6)		(3.8)		内外面ともに にぶい黄色橙色	3㎜以下の長石と、1㎜以下の金雲母、角閃石少量含む	普通	外面：口縁～頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部ナデ	布留系	P 1750
第133図 25	14-S0034	甕 口縁～体部	(18.5)		(8.2)		内外面ともに にぶい黄色橙色	2㎜以下の石英、金雲母、長石を含む	普通	外面：口縁部ヨコナデ、頸部～体部ハケ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部～体部ハケ	布留系	P 1753
第137図 1	14-0030	鉢	(23.8)		(11.2)		内外面ともに にぶい橙色	0.5㎜以下の金雲母と、1.5㎜以下の石英を含む	良好	外面：口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ後ヘラナデ 内面：口縁～体部上ハケ後ナデ、下半ヘラミガキ		P 1651
第137図 2	14-0030	鉢	(15.0)		(3.3)		外面：浅黄色 内面：黒褐色	2㎜以上の長石と2㎜以下の金雲母を少量含む	不良	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ		P 1654
第137図 3	14-0030	鉢	(11.7)		(7.7)		内外面ともに にぶい橙色	2㎜以下の長石を少量含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ、体部上ハケ後ケズリ 下位一部ミガキ 内面：口縁部ハケ後ナデ、体部上ハケ、下ナデ	内面黒斑	P 1654
第137図 4	14-0030	手づくね土器 鉢	(10.1)		(5.4)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と金雲母を含む	良好	外面：口縁部ハケ後ナデ、体部ナデ後ヘラナデ 底部ヘラナデ 内面：口縁部ハケ、体部～底部ナデ		P 1653
第137図 5	14-0030	土製支脚		脚径 12.4	(11.3)		内外面ともに 灰黄褐色	2㎜以下の角閃石を少量と、1.5㎜以下の石英、長石、金雲母を含む	良好	外面：タタキ 内面：ナデ、指圧痕	上面に円孔	P 1655
第137図 6	14-0030	器台		17.2	19.8		内外面ともに にぶい橙色	3.5㎜以下の石英、3㎜以下の長石、1.2㎜以下の金雲母をやや多く含む	普通	外面：体部～脚裾部ハケ 脚裾端部ナデ 内面：脚部（上位）ナデ、（下位）ハケ、脚裾端部ナデ		P 1656
第137図 7	14-0030	器台 口縁～脚部	(14.5)		(20.4)		内外面ともに にぶい黄橙色	4㎜以下の長石を多く、2㎜以下の金雲母、1㎜以下の石英赤色酸化粒、角閃石を含む	良好	外面：口縁部ハケ後ナデ 脚部粗いハケ 内面：口縁部ハケ、脚部ハケ・ナデ、指押さえ	袋状口縁	P 1657
第137図 8	14-S0030	複合口縁壺 口縁部	(21.0)		(5.5)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石を含む	良好	外面：口縁部ヨコナデ 頸部ハケ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部ハケ後ナデ	外面口縁部 丹塗り？	P 1635
第137図 9	14-0030	複合口縁壺 口縁部	(21.0)		(3.5)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石を多く含む	不良	外面：磨滅により調整不明 内面：磨滅により調整不明	袋状口縁	P 1636
第137図 10	14-0030	甕 口縁～肩部	(24.0)		(6.5)		外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄色	4㎜以下の長石を多く、1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を少量含む	不良	外面：口縁部タタキ後ハケ、肩部タタキ 内面：ハケ		P 1649
第137図 11	14-0030	壺 口縁部	(19.0)		(5.5)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の石英、角閃石を少量含む	やや不良	外面：口縁部ハケ後ナデ 内面：口縁部ハケ	内面媒付着	P 1637
第137図 12	14-0030	甕 口縁～体部	(20.8)		(14.3)		外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄色	2㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の気雲母を含む	普通	外面：口縁部ハケ後ナデ、頸部～体部ハケ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部～体部ハケ	外面体部黒斑	P 1648
第137図 13	14-S0030	甕 体部～底部		(5.2)	15.0	27.8	外面ともに 淡黄色	4㎜以下の長石を多く、0.1㎜以下の金雲母を少量含む	良好	外面：体部中位ハケ、下位ハケ後ヘラナデ、底部ナデ 内面：体部中位ハケ、下位ハケ後ヘラナデ、底部ナデ		P 1638

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(10)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第137図 14	14-0030	底部			(8.7)		内外面ともに 灰黄色	2.5㎜以下の金雲母、赤色酸化粒、1.5㎜以下の石英、角閃石を含む	不良	外面:体部タタキ後ハケ 底部ナデ 内面:体部～底部ハケ後ナデ		P 1639
第137図 15	14-S0030	甕 口縁～底部	(30.2)		復元高 (47.4)	35.6	内外面ともに 淡黄色	2.5㎜以下の長石を多く、1㎜以下の角閃石、金雲母、石英を含む	普通	外面:口縁～体部中位ハケ 体部中～底部ハケ後ナデ、磨滅 内面:口縁～体部中位ハケ 体部下位ハケ後ヘラナデ、底部ナデ	頸部・腹部貼付突帯 図上復元	P 1645
第138図 16	14-0030	甕	43.5		(30.1)	42.8	内外面ともに 灰白色	2㎜以下の石英、金雲母角閃石少量と、3㎜以下の長石と赤色酸化粒を含む	不良	外面:口縁部ハケ、体部タタキ 内面:口縁部粗いハケ、体部原体の異なるハケ	口縁外端面刻目 頸部刻目貼付突帯	P 1642
第138図 17					(22.7)		内外面ともに 灰白色	3㎜以下の長石を多く、2㎜以下の石英、金雲母、角閃石少量含む		外面:体部タタキ後一部ハケ、体部下位～底部ヘラケズリ 内面:原体の異なるハケ	腹部刻目付突帯	P 1641
第138図 18	14-0030	甕 口縁～体部	(29.0)		(17.7)		内外面ともに にぶい黄褐色	2㎜以下の長石を多く含む	普通	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ、頸部～体部ハケ 内面:口縁部ハケ、頸部ナデ、体部ハケ		P 1646
第138図 19	14-S0030	甕 頸部～底部			(29.3)	23.9	内外面ともに にぶい黄褐色	3㎜以下の長石を多くと、2㎜以下の角閃石、1.5㎜以下の金雲母を少量含む	良好	外面:頸部～体部中位ハケ 体部下半ヘラナデ 底部磨滅し調整不明 内面:頸部～体部ハケ、底部ナデ	外面頸部～体部黒斑	P 1647
第138図 20	14-S0030	甕 口縁～体部	(36.0)		(13.5)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の金雲母と1.5㎜以下の石英を含む	良好	外面:口縁外端面タタキ、口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ 内面:口縁部粗いハケ、体部ハケ	頸部貼付突帯	P 1650
第138図 21	14-S0030	甕 底部		9.7	(17.0)		内外面ともに にぶい橙色	3㎜以下の長石を多く、1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒、角閃石を含む	やや不良	外面:体部粗いハケ、体部下位タタキ、底部ヘラケズリ 内面:体部ヘラナデ、体部下位～底部ハケ		P 1644
第139図 22	14-S0030	甕 口縁～体部	(52.4)		59.6	50.2	内外面ともに 浅黄色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の角閃石、石英、金雲母を含む	やや不良	外面:口縁～体部ハケ後ナデ、磨滅により不明瞭 内面:口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ後ナデ一部ヘラケズリ 磨滅し不明瞭	頸部刻目貼付突帯 腹部貼付突帯 外面体部黒斑 内面体部媒？	P 1640
第139図 23	14-S0030	甕 口縁～体部	(55.0)		(18.3)		内外面ともに 淡黄色	1㎜以下の石英、金雲母、長石を含む含む	不良	外面:口縁～肩部ハケ 内面:口縁～肩部ハケ	頸部刻目付貼付突帯	P 1643
第141図 1	14-S0040	高杯	(21.4)	脚径 12.2	12.7		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ナデ、杯部～脚柱部ナデ、裾部ハケ後ナデ 内面:口縁部ハケ後ナデ 杯部・脚部ヘラケズリ 裾部ナデ		P 1776
第141図 2	14-S0040	高杯	(18.8)	脚径 (13.00)	復元高 (13.00)		内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石、角閃石と0.5㎜以下の金雲母を含む	普通	外面:杯部ハケ後ナデ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ 内面:杯部ハケ、脚柱部ヘラケズリ、裾部ハケ後ナデ	図上復元	P 1777
第141図 3	14-S0040	鉢	(19.8)		(6.3)		内外面ともに 橙色	2㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母を少量含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリか 内面:口縁部ヨコナデ 体部ナデ		P 1775
第141図 4	14-S0040	複合口縁壺 口縁部	(21.7)		(3.4)		外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄色	3㎜以下の長石を多くと、0.5㎜以下の金雲母、角閃石を少量含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ		P 1772
第141図 5	14-S0040	壺 頸部～底部		1.6	(7.7)	11.6	内外面ともに 灰褐色	5㎜以下の長石を多く含む	良好	外面:頸部ヨコナデ、体部上位ハケ後ナデ、体部下位ハケ、底部ヘラケズリ 内面:頸部～体上位ナデ、体部中位ヘラケズリ 底部ナデ		P 1773
第141図 6	14-S0040	甕 口縁～体部		(15.7)	(7.3)	18.2	外面:黄灰色 内面:浅黄色	2㎜以下の長石と0.5㎜以下の金雲母、石英、角閃石を含む	良好	外面:口縁～頸部ハケ 体部ハケ 内面:ハケ		P 1789
第141図 7	14-S0040	甕	17.7	1.8	23.4	20.3	内外面ともに 黄灰色	4㎜以下の長石と角閃石を多く、石英を少量含む	良好	外面:口縁～体部下位ハケ 体部下位～底部ヘラケズリか 内面:口縁部ハケ、頸部～体部中位ヘラケズリ 体部下～底部ナデ		P 1774
第143図 1	14-S0041	鉢	(19.8)		(9.6)		内外面ともに 浅黄色	5㎜以下の長石と1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部上位ナデ 体部中位～下位ヘラケズリ 内面:口縁～体部中位ハケ 体部下位ナデ		P 1795

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(11)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第143図 2	14-S0041	甑	21.6		18.1		内外面ともに 黄橙色	2㎜以下の長石を多くと、角閃石、金雲母を少量含む	良好	外面:口縁部ナデ、体部ナデ及び指押さえ、体部中ヘラケズリ、底部ナデ 内面:口縁～体部下位ハケ 底部ナデ	外面黒斑	P 1797
第143図 3	14-S0041	甕 口縁～体部	(17.0)		(13.0)	20.0	内外面ともに にぶい橙色	1.5㎜以下の石英、長石、角閃石と0.5㎜以下の金雲母を少量含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、頸部～肩部ハケ、体部ナデ 内面:口縁部磨滅し不明瞭 頸部～体部ハケ	布留系	P 1792
第143図 4	14-S0041	甕 口縁～肩部	(22.8)		(4.2)		外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄色	2㎜以下の長石を多く、金雲母を少量含む	良好	外面:磨滅により不明瞭 口縁部ヨコナデ 内面:ハケ		P 1793
第143図 5	14-S0041	甕 体部～底部			(18.0)	15.7	外面:暗灰黄色 内面:浅黄色	1㎜以下の角閃石、雲母を含む	普通	外面:体部ナデ、体部下位粗いハケ後ナデ 内面:体部ハケ 底部ナデ		P 1794
第143図 6	14-S0041	底部		(7.0)	(3.1)		内外面ともに 黄灰色	金雲母を含む	良好	外面:ハケ 底部周縁ナデ 内面:ナデ		P 1791
第143図 7	14-S0041	手づくね土器 鉢	6.4		3.6		内外面ともに にぶい橙色	1～2㎜大の長石と、1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:指押さえ 内面:指押さえ、ナデ		P 1796
第145図 1	14-S1001	鉢	(10.0)		(6.3)		内外面ともに にぶい赤褐色	4㎜以下の長石を含む	普通	外面:口縁部ナデ 体部ハケ後ナデ 内面:口縁部ナデ 体部ハケ後ナデ		P 1863
第145図 2	14-S1001	鉢	(10.8)	(1.8)	7.1		外面:にぶい橙色 内面:橙色	2㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部細かいハケ、底部磨滅 内面:口縁部ハケ後ヨコナデ 体部ヘラナデ		P 1861
第145図 3	14-S1001	鉢	9.0		3.7		内外面ともに にぶい橙色	3㎜以下の長石を多く、1㎜以下の雲母を含む	普通	外面:ヘラナデ 内面:ハケ後ナデ		P 1864
第145図 4	14-S1001	鉢	(13.8)	(2.3)	5.8		内外面ともに にぶい橙色	4㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の雲母、角閃石を少量含む	良好	外面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭 内面:ヘラミガキ		P 1862
第145図 5	14-S1001	手づくね土器			(6.9)		外面:浅黄橙色 内面:にぶい橙色	4㎜以下の長石を多く、1㎜以下の雲母を少量含む	良好	外面:ナデ 摩滅し不明瞭 内面:ナデ 摩滅し不明瞭		P 1858
第145図 6	14-S1001	手づくね土器	(6.5)	3.4	5.0		外面:橙色 内面:にぶい橙色	3㎜以下の長石を含む	普通	外面:ナデ 内面:体部上位ハケ後ナデ 下位ナデ・指押さえ		P 1865
第145図 7	14-S1001	甕 口縁部	(16.0)		(2.7)		内外面ともに 橙色	3㎜以下の長石と、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ナデ 摩滅し不明瞭 内面:口縁部ナデ 摩滅し不明瞭		P 1859
第145図 8	14-S1001	脚台 脚部		脚径 (13.5)	(4.3)		内外面ともに にぶい橙色	3㎜以下の長石を多くと、石英、雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:ハケ後ナデ 摩滅し不明瞭 内面:ハケ後ナデ		P 1860
第147図 1	14-S1008	壺 把手			(3.5)		内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石を多く、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:ハケ後ナデ		P 1988
第147図 2	14-S1008	ミニチュア土器 鉢	5.2	2.3	5.6		外面:灰色 内面:暗灰色	1㎜以下の長石、石英と、0.2～0.3㎜の金雲母を含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ		P 1986
第147図 3	14-S1008	高杯or鉢			(3.5)		内外面ともに 明褐色	1㎜以下の石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ	綾杉紋	P 1987
第147図 4	14-S1008	甕 底部		(6.7)	(4.9)		外面:淡赤橙色 内面:灰白色	1㎜以下の長石を多く、角閃石金雲母を含む	不良	外面:ナデ 磨滅し不明 内面:ナデ 磨滅し調整不明	2次焼成	P 1985
第147図 6	14-S0018 P1012	甕 口縁部	(24.0)		(5.3)		外面:にぶい橙色 内面:浅黄橙色	5㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部～頸部ハケ 内面:口縁部ハケ後ヨコナデ 頸部ハケ		P 2026
第149図 1	14-S1502	甕 底部		3.7	(4.2)		内外面ともに 灰黄色	1㎜以上の石英、長石と1㎜以下の雲母を含む	普通	外面:体部ハケ 底部ハケ後ナデ 内面:ナデ、一部ヘラ状工具によるケズリ痕	外面体部煤付着	P 2062
第150図	14-S1506	甕 口縁～体部	(15.0)		(22.7)	(21.6)	外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄褐色	1～2㎜大の長石、石英と1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部磨滅、肩部～体部ハケ、下方ヘラケズリ 内面:口縁部磨滅、頸部～体部ヘラケズリ	外面体部黒斑媒付着	P 2104

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(12)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第151図1	14-S1509	高杯 杯部	20.8		(6.4)		外面:橙色 内面:浅黄色	1㎜前後の長石と、1㎜以下の角閃石を少量含む	普通	外面:ヘラミガキか 摩滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明	2次焼成	P 2106
第151図2	14-S1509	高杯 杯部	18.2		(5.0)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜前後の長石と、1㎜以下の角閃石を少量含む		外面:ヘラミガキか 摩滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 2113
第151図3	14-S1509	高杯 杯部	(23.2)		(10.0)		外面:浅黄橙色 内面:灰白色	1㎜前後の長石と、1㎜以下の角閃石を少量含む		外面:ヘラミガキか 摩滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 2112
第153図1	14-S1511	高杯 杯部	(11.6)		(5.2)		内外面ともに にぶい黄橙色	1～3㎜大の長石を少量と、1㎜以下の金雲母を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、杯部ハケ及びナデ 内面:口縁部ヨコナデ、杯部ハケ及びナデ	外面媒付着	P 2129
第153図2	14-S1511	甕 口縁部	(19.2)		(5.8)		外面:灰オリーブ色 内面:浅黄橙色	1㎜以上の長石と石英、1㎜以下の赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁～頸部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ 頸部～肩部ヘラケズリ	山陰系	P 2128
第153図3	14-S1511	甕 口縁部	(26.6)		(5.3)		外面:にぶい赤褐色 内面:にぶい橙色	1～2㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅顕著により調整不明 内面:磨滅顕著により調整不明	内面黒斑、口縁部に赤色顔料痕	P 2119
第153図4	14-S1511	甕 口縁部	(18.0)		(3.0)		内外面ともに にぶい橙色	2㎜以下の赤色酸化粒と、微粒の長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タタキ 内面:ヨコナデ	外面口縁部煤付着	P 2117
第153図5	14-S1511	甕 口縁部	(15.6)		(4.0)		内外面ともに 浅黄橙色	1～3㎜大の長石、石英と2㎜以下の角閃石を含む	普通	外面:ハケ 磨滅し不明瞭 内面:口縁部ハケ、頸部ナデ 磨滅し不明瞭	外面口縁部黒斑	P 2134
第153図6	14-S1511	甕 口縁部	(13.8)		(4.6)		内外面ともに 橙色	1～2㎜大の長石を少量含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ		P 2118
第153図7	14-S1511	小型丸底壺	(8.8)		(7.9)	(8.6)	外面:橙色 内面:にぶい橙色	5㎜以下の長石と1㎜以下の赤色酸化粒、微粒の金雲母を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ	外面体部黒斑	P 2116
第153図8	14-S1511	高杯	(14.5)	脚径 10.1	9.3		内外面ともに 橙色	3㎜以下の石英と、1㎜以下の角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ及びハケ	スカシ	P 2133
第154図1	14-S1514	壺 底部		6.9	(2.8)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	4㎜前後の長石、石英と2㎜以下の角閃石、金雲母を含む	普通	外面:ハケ 磨滅し不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅により不明瞭		P 2143
第157図1	14-S1524	直口壺	(13.6)		(11.8)	(15.7)	内外面ともに 褐灰色	1㎜以下の長石、石英、角閃石金雲母を含む	普通	外面:口縁～体部ハケ後一部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部指押さえ、体部ケズリ	外面体部煤付着	P 2166
第157図2	14-S1524	甕	14.4	6.5	23.5	18.3	外面:にぶい赤褐色 内面:橙色	3㎜以下の長石と、2㎜以下の石英、角閃石を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ、磨滅し不明瞭 内面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ、底部指押さえ	外面媒付着 2次焼成	P 2168
第157図3	14-S1524	壺 底部		8.1	(4.8)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石、赤色酸化粒と1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	普通	外面:磨滅し不明瞭 底部ナデ 内面:ハケ後ナデ	外面黒斑	P 2167
第157図4	14-S1524	壺 底部		(10.4)	(4.7)		外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄色	1～2㎜の潮汐、角閃石、赤色酸化粒を多く含む	普通	外面:体部ハケ 底部ナデ 内面:ハケ		P 2170
第157図5	14-S1524	鉢	(16.6)	(6.4)	8.2		外面:黄灰色 内面:灰黄褐色	1㎜以下の長石、石英、角閃石金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ケズリか 底部ナデ 内面:ハケ後ヘラナデ		P 2171
第157図6	14-S1524	鉢 底部		4.2	(3.9)		内外面ともに 灰黄褐色	1～2㎜大の長石、石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:指押さえ・ナデ 内面:指押さえ・ナデ	底部黒斑	P 2169
第157図7	14-S1524	製塩土器 脚部		脚径 4.6	(2.7)		外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄橙色	1㎜以下の長石と角閃石をわずかに含む	普通	外面:体部ナデ 脚部ヨコナデ 内面:体部磨滅し不明 脚部ナデ	2次焼成	P 2173
第157図8	14-S1524	器台	(12.6)		(15.2)		外面:淡黄色 内面:灰黄色	3㎜以下の長石、赤色酸化粒と1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面:口縁部ハケを施すが磨滅し不明瞭 体部ハケ後ナデ		P 2172
第159図1	15-S0001	短頸壺 口縁～体部	(9.8)		(6.1)		内外面ともに 浅黄色	1㎜以下の長石、石英、角閃石金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部タタキ後ナデ 体部タタキ後ハケ 内面:口縁～体部ハケ	外面体部黒斑	P 2231
第159図2	15-S0001	甕 口縁～体部	(13.8)		(15.2)	14.2	内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヘラナデ 体部ハケ、下位ヘラケズリ 内面:口縁部粗いハケ、体部ハケ後ナデ		P 2233

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(13)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第159図 3	15-S0001	甕 底部		(7.0)	(3.0)		外面:浅黄色 内面:褐灰色	1㎜前後の長石を含む	普通	外面:体部ハケ後ナデ 底部ナデ 内面:ハケ		P 2232
第159図 4	15-S0001	手づくね土器 鉢	(9.5)		(4.8)		外面:灰黄色 内面:暗灰色	1㎜以下の長石、石英、角閃石雲母を含む	良好	外面:指押さえ・ナデ 内面:指押さえ・ナデ	外面黒斑	P 2234
第159図 5	15-S0001	鉢	(24.8)		(10.5)		外面:明褐色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石、石英と1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部タタキ 体部ハケ 内面:口縁部ハケ後ナデ 体部ハケ		P 2230
第160図 1	15-S0004	甕 口縁部	(17.1)		(4.6)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英と微粒の金雲母を含む	良好	外面:ハケ後指押さえ 内面:ハケ	外面黒斑	P 2241
第160図 2	15-S0004	鉢 口縁～体部	(18.0)		(7.5)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石、石英と1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ 体部タタキ痕 内面:口縁部ハケ、体部ナデ後ヘラミガキ	内面黒斑	P 2242
第162図 1	15-S0005	甕 口縁～体部	(13.8)		(14.0)	(23.8)	外面:にぶい黄橙色 内面:橙色	2㎜以下の長石、石英と0.5㎜以下の金雲母、微粒の角閃石、赤色酸化粒も含む	良好	外面:口縁部ハケ、頸部～体部タタキ 内面:口縁部ハケ、頸部～体部ハケ後ナデ	外面体部黒斑	P 2247
第162図 2	15-S0005	鉢	(16.6)		復元高 (15.2)	(19.6)	外面:淡黄灰色 内面:黄灰色	1～3㎜大の石英を多く、2㎜以下の長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部ハケ下位ヘラナデ 内面:口縁～体部ハケ、底部ケズリ痕		P 2246
第162図 3	15-S0005	浅鉢	(28.0)		6.2		外面:浅黄橙色 内面:にぶい橙色	1～2㎜以下の長石、石英と1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:体部タタキ、底部ケズリを施すが磨滅 内面:板ナデ及びヘラミガキ	外面底部黒斑	P 2250
第162図 4	15-S0005	鉢	(12.3)		4.6		外面:浅黄橙色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜以下の長石、赤色酸化粒と1㎜以下の角閃石を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ 内面:ナデ		P 2249
第162図 5	15-S0005	鉢	(23.2)		(8.0)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、角閃石金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ 体部板ナデ 内面:磨滅し不明瞭 ハケの痕跡		P 2248
第163図 1	15-S0006	鉢	16.6	3.7	5.5		内外面ともに 橙色	1㎜以下の金雲母を多くと、1㎜前後の長石、石英を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ後ナデ 内面:クモの巣状ハケ 磨滅し不明瞭		P 2256
第163図 2	15-S0006	壺 底部		(7.6)	(2.5)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、角閃石金雲母を含む	良好	外面:体部ハケ 底部ハケ 内面:ハケの痕跡 磨滅し不明瞭		P 2257
第165図 1	15-S0501	甑	15.9		9.7		内外面ともに 黄橙色	5㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英、角閃石を含む	不良	外面:口縁～体部ナデ、体部下位～底部ヘラケズリ 内面:ナデ、底部付近指頭圧痕		P 2299
第165図 2	15-S0501	鉢 口縁～体部	(27.4)		(7.1)		外面:黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1～3㎜大の長石と、1㎜前後の石英、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ 内面:原体の異なるハケ 磨滅し不明瞭	馬蹄把手付鉢	P 2298
第165図 3	15-S0501	甕	13.6		19.4	16.3	内外面ともに にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石と、1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ後ハケ 体部タタキ後ハケ、下位タタキ・ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ、頸部～体部中位ハケ、下半ヘラケズリ	外面体部媒付着 2次焼成	P 2934
第165図 4	15-S0501	甕	17.0		23.7	21.6	外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ハケ、体部下位タタキ後ヘラナデ 内面:口縁部ハケ、頸部～肩部指押さえ、体部ヘラケズリ、底部指押さえ	外面体部媒付着	P 2935
第165図 5	15-S0501	鼓形器台			(6.2)		内外面ともに 橙色	5㎜以下の長石と、1㎜以下の角閃石、赤色酸化粒を含む	普通	外面:ヨコナデ 内面:ヘラケズリ 磨滅し不明瞭	山陰系	P 2936
第167図 1	15-S0505	鉢	(20.8)		(9.4)		外面:灰白色 内面:にぶい橙色	5㎜以下の長石、石英と金雲母を少量含む	良好	外面:ハケ後板ナデか 磨滅し不明瞭 内面:口縁～体部ハケ、底部ナデ	内外面口縁部丹塗り	P 2310
第167図 2	15-S0505	鉢	(27.2)		(10.1)		外面:にぶい橙色 内面:橙色	5～3㎜大の長石と、微粒の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ 内面:口縁ナデ、体部～底部ハケ後放射線状のヘラミガキ	外面体部黒斑	P 2308
第167図 3	15-S0505	高杯 杯部	(15.8)		(2.7)		外面:にぶい黄橙色 内面:橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を均一に、微粒の赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキの痕跡 磨滅し不明瞭 内面:ヘラミガキ		P 2307

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(14)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第167図 4	15-S0505	台付鉢 口縁～体部	19.8		9.0		内外面ともに にぶい黄橙色	5㎜以下の長石と、2㎜以下の赤色酸化粒を多く、1㎜以下の石英、金雲母を少量含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ		P 2309
第167図 5	15-S0505	台付鉢 脚部		脚径 (12.8)	(2.8)		外面:明黄褐色 内面:にぶい橙色	5㎜以下の長石と、1㎜以下の角閃石赤色酸化粒、微粒の金雲母を含む	普通	外面:ハケ 磨滅し不明瞭 内面:底部ハケ、脚部風化し調整不明		P 2304
第167図 6	15-S0505	甕 底部		5.9	(1.9)		外面:橙色 内面:灰色	1～2㎜大の長石と、1㎜以下の角閃石、金雲母を少量含む	普通	外面:ナデ・指押さえ 磨滅し不明瞭 内面:ナデ・指押さえ 磨滅し不明瞭	外面2次焼成	P 2306
第167図 7	15-S0505	甕 底部		7.6	(2.8)		外面:にぶい橙色 内面:にぶい赤褐色	1㎜前後の長石、石英を多く1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部ヘラの痕跡 内面:ナデ・指押さえ	底部木葉痕	P 2305
第169図	15-S0507	台付小型鉢 脚部		脚径 7.6	(5.5)		外面:橙色 内面:にぶい褐色	1㎜前後の赤色酸化粒と、1㎜以下の長石、石英、微粒の金雲母を含む	良好	外面:脚部ハケ後ヘラミガキ 磨滅し不明瞭 内面:底部ヘラミガキ 脚部ハケ後ナデ	裾端部媒付着	P 2328
第171図 1	15-S0508	小型壺			(13.3)	13.7	内外面ともに にぶい黄橙色	4㎜以下の長石、英を多くと、1㎜以下の金雲母を含む	普通	外面:口縁部磨滅し調整不明 体部～底部ヘラケズリ 内面:口縁部磨滅、体部ハケ・ナデ、底部磨滅	外面黒斑	P 2340
第171図 2	15-S0508	甕 口縁～体部	(24.8)		(9.8)	(24.6)	内外面ともに にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石と、1㎜以下の石英、角閃石を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部～体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、体部ナデ	内面黒斑	P 2337
第171図 3	15-S0508	甕	(16.6)		(3.3)		内外面ともに にぶい黄褐色	1㎜大の石英、長石、金雲母4㎜大の砂粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、 頸部タタキ(右上方向) 内面:頸部～体部ヘラケズリ	河内産	P 4212
第171図 4	15-S0508	甕	(13.7)		19.8	19.0	内外面ともに にぶい黄橙色	1～3㎜大の長石、石英と1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:底部周縁ヘラケうり 磨滅し調整不明 内面:ハケの痕跡 磨滅し調整不明瞭	内外面底部黒斑 2次焼成	P 2336
第171図 5	15-S0508	鉢 体部～底部		1.9	(3.9)		外面:にぶい黄橙色 内面:黄灰色	1～4㎜大の石英を多くと、2㎜以下の長石、1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部タタキ後指押さえ 底部ヘラナデ 内面:ハケ後ナデ		P 2338
第171図 6	15-S0508	手づくね土器 鉢	7.6		3.9		外面:橙色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石を多くと、1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:ナデ・指押さえ 内面:指押さえ後ナデ	外面黒斑	P 2335
第171図 7	15-S0508	鉢	11.4		4.6		外面:明黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜以下の長石、石英と1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、底部ヘラケズリ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ、底部ヘラケズリ		P 2334
第171図 8	15-S0508	土製支脚			(2.8)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜の長石、角閃石、金雲母赤色酸化粒を含む	普通	外面:ハケ 指頭圧痕 内面:ハケ	穿孔	P 2332
第171図 9	15-S0508	台付鉢 口縁～脚部	(18.0)		(8.9)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ、脚部ハケ 内面:口縁部ハケ、体部ナデ・ヘラミガキ、脚部ハケ後ヘラナデ	外面脚部丹塗りか	P 2333
第171図 10	15-S0508	高杯 脚部		脚径 11.4	(5.5)		外面:にぶい黄橙色 内面:明黄褐色	1㎜以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:脚柱部ナデ 裾部ヨコナデ 内面:ナデ		P 2339
第171図 11	15-S0508	高杯 脚部		脚径 (12.9)	(7.9)		外面:灰白色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石、石英と1㎜以下の角閃石を含む	良好	外面:脚柱部ハケ 裾部ハケ後ヨコナデ 内面:絞り痕 磨滅し不明瞭		P 2331
第171図 12	15-S0508	陶質土器 甕			(4.1)		内外面ともに 灰色	1㎜以下の石英、雲母を含む	良好	外面:格子目タタキ 内面:絞り痕ナデ		P 2330
第173図 1	15-S0509	台付甕 口縁～底部	17.3		17.6	16.2	上部:にぶい黄褐色 下部:にぶい赤褐色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面:口縁部ハケの痕跡 体部～底部ハケ	外面媒付着 内面体部下位炭化物付着？	P 2351
第173図 2	15-S0509	鉢	10.2		5.2		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒と、1㎜以下の角閃石を含む	不良	外面:口縁～体部ナデ 底部ヘラケズリ 内面:口縁部板ナデ、体部～底部ヘラケズリ・ナデ		P 2352
第173図 3	15-S0509	複合口縁壺 口縁部	(12.9)		(4.4)		外面:にぶい褐色 内面:橙色	1㎜以上の長石、石英を含む	普通	外面:ヨコナデか 磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明	山陰系	P 2354
第173図 4	15-S0509	高杯 杯部	(21.2)		(3.4)		外面:にぶい橙色 内面:にぶい黄橙色	1～3㎜大の長石を少量と、1㎜以下の石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキ 風化し不明瞭 内面:口縁部ハケ、杯部ヘラミガキ		P 2353
第175図 1	15-S0510	複合口縁壺 口縁～頸部	(27.3)		(9.8)		外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄褐色	2㎜以下の長石、石英と1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ 頸部ハケ 内面:口縁部ハケ・ナデ 頸部ハケ後ナデ	口縁部山形紋 内面黒斑	P 2372

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(15)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第175図 2	15-S0510	甕 口縁～体部	(17.2)		(6.8)		外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母と微粒の赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 肩部ハケ 内面:ハケ	外面媒付着	P 2366
第175図 3	15-S0510	鉢	(29.20		(11.2)		外面:にぶい橙色 内面:橙色	1～2㎜以下の長石、石英、角閃石を含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ後放射線状のヘラミガキ	外面黒斑	P 2373
第175図 4	15-S0510	把手			(4.3)		外面:灰白色 内面:浅黄橙色	1㎜以下の石英、雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:ヘラ押さえ後ナデ 内面:ナデ	ジョッキ形	P 2365
第176図 1	15-S0510	壺 口縁～体部	(15.5)		(7.5)		外面:赤褐色 内面:にぶい橙色	1㎜以上の長石と石英、1㎜以下の雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁・体部ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ・ナデ	外面丹塗り黒斑	P 2368
第176図 2	15-S0510	壺 口縁～体部	(15.5)		(5.8)		外面:浅黄橙色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以上の長石と石英、1㎜以下の赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁端部・頸部ヘラミガキ、体部ナデ 内面:口縁端部ヘラミガキ、体部ナデ	内外面丹塗り	P 2369
第176図 3	15-S0510	甕 口縁部			(3.9)		外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄褐色	1㎜以上の石英と、1㎜以下の長石、雲母を含む	普通	外面:ヘラ押さえ 内面:ヘラ押さえ	外面口縁端部刻目	P0123
第176図 4	15-S0510	甕 口縁～体部	(21.6)		(6.4)		外面:黒褐色 内面:明赤褐色	1～2㎜の長石と石英、1㎜以下の金雲母を多く含む	良好	外面:磨滅し不明瞭 条痕 内面:指押さえ・条痕	口縁部刻目 外面媒付着	P0126
第176図 5	15-S0510	甕 口縁部			(5.7)		内外面ともに 暗灰色	1㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:ナデ・条痕 内面:口縁部指圧痕 ナデ	口縁外端面刻目	P0124
第176図 6	15-S0510	甕 口縁部			(7.5)		外面:橙色 内面:浅黄橙色	1㎜以下の長石と石英、微粒の金雲母を含む	良好	外面:条痕 内面:指押さえ・ヘラミガキ状痕	口縁外端面・屈曲部刻目	P0125
第176図 7	15-S0510	甕 口縁～体部	(21.4)		(17.1)		内外面ともに 黒褐色	1㎜以下の長石、石英、角閃石金雲母を含む	良好	外面:ナデ 内面:口縁部ナデ 体部平滑な板ナデ	外面黒斑	P0122
第176図 8	15-S0510	甕 口縁部	(26.0)		(7.4)		外面:にぶい褐色 内面:暗灰黄色	1㎜大の長石と石英を均一に、1㎜以下の角閃石を含む	良好	外面:ナデ・条痕 内面:口縁部指押さえ 体部ナデ・条痕	口縁外端面・屈曲部刻目	P0127
第176図 9	15-S0510	甕 口縁部	(30.6)		(6.9)		外面:浅黄色 内面:暗灰色	1～2㎜大の長石と1㎜以下の金雲母、石英を含む	良好	外面:ナデ 内面:口縁端部指圧痕 状痕・ナデ	外面黒斑 刺突紋	P0128
第176図 10	15-S0510	壺or甕 底部		(9.0)	(7.7)		外面:にぶい橙色 内面:オリーブ黒色	1㎜以下の長石、石英、角閃石を含む	良好	外面:体部ヘラケズリ、底部周縁ナデ・指押さえ 内面:ナデ・ヘラケズリ？ 磨滅し不明瞭		P 2370
第176図 11	15-S0510	壺or甕 底部		(8.4)	(5.4)		外面:にぶい橙色 内面:灰黄褐色	1㎜以下の長石と石英を含む	良好	外面:ハケの痕跡 磨滅し不明瞭 内面:工具によるかきあげ？ 磨滅し不明瞭		P 2374
第176図 12	15-S0510	壺or甕 底部		7.0	(4.0)		外面:黄橙色 内面:黒色	1～2㎜以下の長石、石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	普通	外面:磨滅し調整不明 内面:板ナデ後指ナデ		P 2371
第179図 1	15-S0511	甕 底部		(4.8)	(2.9)		外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄橙色	1㎜以上の石英と長石、1㎜以下の雲母を含む	普通	外面:板状工具によるナデ 内面:ハケ	外面底部黒斑	P 2397
第179図 2	15-S0511	甕 底部		(7.0)	(3.7)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以上の石英と、1㎜以下の長石、赤色酸化粒を含む	普通	外面:ハケ後ナデ 内面:ハケ後ナデ	2次焼成	P 2398
第181図 1	15-S0513	複合口縁壺 口縁部	(23.0)		(6.0)		内外面ともに 橙色	3㎜以下の長石を多くと2㎜以下の石英を含む	良好	外面:口縁部ハケ、頸部ハケ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ及びナデ		P 2401
第181図 2	15-S0513	小型丸底壺	(8.2)		9.2	10.2	内外面ともに 橙色	1㎜以下の金雲母を多く、長石、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅し不明瞭、体部下半ヘラケズリ 内面:口縁～肩部ヨコナデ 体部～底部ハケ		P 2400
第181図 3	15-S0513	高杯 脚柱部			(8.6)		内外面ともに 橙色	1㎜前後の長石、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ヘラミガキの痕跡 磨滅し不明瞭 内面:磨滅顕著により調整不明	スカシ1つ残存 黒斑	P 2402
第181図 4	15-S0513	陶質土器 口縁部			(4.5)		外面:灰黄色 内面:灰オリーブ	顕著な砂粒みられない	普通	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	内外面とも強ヨコナデにより擬凹線化	P 2937
第183図 1	15-S0514	複合口縁壺 口縁～肩部	(21.8)		(13.9)		外面:橙色 内面:黒褐色	2㎜以下の石英、赤色酸化粒を少量と3㎜以下の長石を多く含む	やや不良	外面:口縁部ヨコナデ、頸部～肩部ハケ 内面:口縁部ナデ、頸部ハケ 肩部磨滅し調整不明	頸部刻目貼付突帯	P 2424

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(16)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第183図 2	15-S0514	甕 口縁～体部	14.5		(16.5)		外面:にぶい橙色 内面:浅黄橙色	2㎜以下の長石、角閃石と1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部タタキ後ヨコナデ、体部上位タタキ、下位ハケ後ナデ 内面:口縁部ハケ後ナデ、頸部～体部中位ハケ、体部下位ナデ		P 2420
第183図 3	15-S0514	甕	(13.6)	4.1	19.4	15.0	外面:浅黄橙色 内面:橙色	4㎜以下の長石と石英、1㎜以下の雲母を含む	良好	外面:口縁～体部中位タタキ下位ハケ、底部タタキ 内面:口縁部ハケ、体部～底部ハケ後ナデ	外面黒斑 体部中位貼付突帯	P 2421
第183図 4	15-S0514	鉢	(20.0)		(9.6)		内外面ともに にぶい黄橙色	1～2㎜以下の長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ナデ、体部ハケ後ヘラナデ 内面:口縁部ナデ・指押さえ体部ハケ		P 2419
第183図 5	15-S0514	手づくね土器 鉢	7.1		3.4		外面:にぶい黄橙色 内面:黒褐色	1㎜前後の長石、石英と1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部タタキ後ナデ体部工具によるナデ底部ナデ 内面:ハケ後ナデ		P 2422
第183図 6	15-S0514	鉢	9.0		4.4		外面:にぶい黄橙色 内面:黒褐色	1㎜以下の長石と石英、微粒の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部ヘラケズリ、底部ケズリ後ナデ 内面:ナデ	内面黒斑	P 2423
第183図 7	15-S0514	甕 底部		(5.2)	(4.5)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:体部ハケ底部ナデ 内面:クモの巣状ハケ	外面体部黒斑	P 2433
第183図 8	15-S0514	土製支脚	台径 (8.3)	脚径 (14.0)	9.7		内外面ともに 橙色	5㎜以下の長石と、2㎜以下の角閃、金雲母を含む	普通	外面:天井部タタキ、体部タタキ・ナデ 内面:ナデ 裾部ハケ	穿孔	P 2425
第187図	19-S0011	甕 体部～底部		(8.3)	(15.3)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、金雲母、角閃石 赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケナデ後、一部にヘラ押え 内面:ハケメ後ナデ		P 2731
第191図 1	19-S1021	高杯 杯部	(28.8)		(4.6)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の金雲母と、1㎜前後の長石、石英を含む	良好	外面:ヨコハケ後細かいヘラミガキ 内面:ヨコハケ後ヘラミガキ		P 2813
第191図 2	19-S1021	甕 口縁～肩部	(27.1)		(10.4)		外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄橙色	1～2㎜以下の長石、石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	普通	外面:ハケを施すが磨滅し不明瞭 内面:磨滅し調整不明		P 2812
第191図 3	19-S1021	甕 口縁～肩部	(29.0)		(6.9)		外面:黄灰色 内面:にぶい橙色	1㎜以下の長石と石英、金雲母を均一に含む	良好	外面:ハケ後指押さえ 内面:ヨコナデ後ハケ	外面口縁部に粘土塊	P 2811
第191図 4	19-S1009	壺 底部		(12.4)	(3.1)		外面:浅黄橙色 内面:橙色	5㎜以下の長石と、3㎜以下の角閃、微粒の金雲母を含む	良好	外面:体部ハケ、板ナデ 内面:風化し不明瞭ナデ後ヘラミガキか		P 2738
第191図 5	19-S1009	甕 底部		(8.8)	(5.5)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1㎜前後の長石と、微粒の角閃石、金雲母を含む	普通	外面:体部ナデ底部ヘラナデ 内面:ハケ後ナデ		P 2739
第193図 1	19-S1012	高杯 杯部	(28.2)		(8.0)		外面:にぶい橙色 内面:浅黄色	1～2㎜大の長石、石英と、1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:ハケを施すが磨滅し不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭	2次焼成	P 2763
第193図 2	19-S1012	高杯	31.7	脚径 15.4	23.0		内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石、金雲母を多くと角閃石を少量含む	普通	外面:口縁部ハケ後ミガキ杯部ハケ後ナデ、脚部ハケ後ミガキ 内面:杯部細かいヘラミガキ脚柱部ヘラケズリ、裾部ハケ後一部ナデ	口縁端部・裾端部黒斑	P 2757
第193図 3	19-S1012	甕 口縁～体部	(20.8)		(16.2)	(21.6)	外面:にぶい橙色 内面:浅黄色	3㎜以下の長石と、微粒の角閃石、雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ハケ体部粗いハケ 内面:口縁部粗いハケ体部ハケ	外面体部黒斑	P 2759
第193図 4	19-S1012	甕 口縁～体部	(25.8)		(15.2)	(26.4)	外面:橙色 内面:明黄褐色	5㎜以下の長石と、3㎜以下の角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ハケ、体部タタキ後ハケ 内面:口縁部ハケか体部ハケ後ナデ	内面体部黒斑 2次焼成	P 2758
第193図 5	19-S1012	甕 底部			(15.1)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以上の長石、石英と1㎜以下の雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ一部ヘラケズリ 内面:ハケ	外面媒付着	P 2760
第193図 6	19-S1012	甕 底部		5.9	(6.2)		内外面ともに にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石を多くと、赤色酸化粒を少量、1㎜以下の角閃石を含む	普通	外面:ハケ後ヘラケズリ底部ハケ後ナデ 内面:体部ハケ底部ヘラケズリ		P 2762
第193図 7	19-S1012	甕 底部			(5.8)		外面:にぶい橙色 内面:褐灰色	5㎜以下の石英、3㎜以下の長石と1㎜以下の角閃石、赤色酸化粒を含む	普通	外面:ハケ磨滅し不明瞭 内面:ヘラナデ	2次焼成	P 2761
第193図 8	19-S1015	鉢	9.6		3.3		外面:灰白色 内面:にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の角閃石、微粒の金雲母を含む	普通	外面:ナデ・指押さえ 内面:粗いハケ	内面黒斑	P 2787

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(17)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第193図 9	19-S1015	鉢	(12.8)		6.4		内外面ともに にぶい黄橙色	5㎜以下の長石を少量と、微粒の金雲母を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部～底部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラミガキ	外面黒斑	P 2786
第193図 10	19-S1015	鉢	14.2		6.8		外面:浅黄色 内面:にぶい黄色	2㎜以下の長石、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラナデ？ 内面:口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	外面黒斑	P 2785
第193図 11	19-S1015	鉢	13.6		7.7		外面:浅黄橙色 内面:黄灰色	1～2㎜大の長石、石英、赤色酸化粒と、1㎜以下の金雲母を含む	不良	外面:体部ハケ 磨滅し不明瞭 内面:磨滅・風化により不明瞭	外面黒斑	P 2788
第196図 1	20-S0002	甕	(10.4)	3.5	10.4	(13.4)	内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒と0.5㎜前後の金雲母を均一に含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、肩部ヘラナデ、体部原体の異なるハケ、底部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ	外面体部黒斑 内面体部丹塗り？	P 2921
第196図 2	20-S0002	高杯 杯部	(31.8)		(3.8)		外面:橙色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜以下の長石、石英を均一に、1㎜以下の角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅顕著により不明瞭 内面:磨滅顕著により不明瞭 ヘラミガキ	内面朱塗りの痕跡	P 2923
第196図 3	20-S0002	甕 底部		(6.8)	(2.3)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1㎜前後の長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部タタキ後ナデ 底部棒状圧痕 内面:クモの巣状ハケ		P 2922
第197図	20-S0003	壺 底部		(4.0)	(3.0)		外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄橙色	1㎜以上の長石と、1㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:磨滅し不明瞭 内面:体部ハケ 底部ハケ後ナデ		P 2930
第198図 1	10-S0010	甕 底部		(9.8)	(5.4)		外面:にぶい褐色 内面:褐灰色	1～2㎜大の長石と、1㎜以下の角閃石を含む	普通	外面:ナデ 内面:ハケ後ナデ 磨滅し不明瞭		P 1043
第198図 2	10-S0010	壺 底部		4.1	(12.9)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石、石英と0.5㎜以下の赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部ハケ後ナデ 底部ヘラナデ 内面:ハケ後ナデ		P 1042
第199図	14-S0015	台付鉢or甕		脚径 16.2	(9.4)		外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄褐色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母、石英を含む	良好	外面:体部～脚部ハケ 磨滅により不明瞭 内面:口縁部ハケ、体部ハケ 磨滅により不明瞭		P 1379
第201図 1	14-S0029	器台	18.2	脚径 22.0	24.3		内外面ともに 浅黄色	3㎜以下の長石を大くと、2㎜以下の石英を少量含む	良好	外面:ハケ後ナデ、磨滅により不明瞭 内面:ハケ後ナデ、磨滅により不明瞭	袋状口縁	P 1605
第201図 2	14-S0029	器台 胴部～脚部			(13.7)		内外面ともに にぶい黄橙色	1.5㎜以下の石英、角閃石、金雲母と1㎜以下の赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ナデ、磨滅により不明瞭 内面:ハケ後ナデ 指圧痕		P 1603
第201図 3	14-S0029	土製支脚	台径 (7.5)	脚径 12.5	(12.0)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石を多く、2.5㎜以下の角閃石、金雲母、1㎜以下の石英を含む	良好	外面:タタキ 内面:ナデ	内外面一部赤彩	P 1604
第201図 4	14-S0029	鉢	14.2	3.6	6.6		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石を多く、1㎜以下の金雲母、0.5㎜以下の赤色酸化粒、角閃石を含む	良好	外面:ナデ、指圧痕 内面:口縁～体部ハケ 底部ハケ後ナデ	外面黒斑	P 1604
第201図 5	14-S0029	短頸壺 口縁～肩部	(16.0)		(6.8)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の石英、赤色酸化粒と1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	普通	外面:口縁部ハケ後ナデ 肩部ハケ後ナデ 内面:口縁部ナデ、肩部ハケ後ナデ、指圧痕		P 1590
第201図 6	14-S0029	複合口縁壺 口縁～体部	(20.0)		(32.4)	30.0	内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石、0.5㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部磨滅、頸部ハケ 体部上位ハケ、下位タタキ及びハケ 内面:口縁部ナデ、頸部～体部ハケ	頸部・腹部貼付突帯	P 1591
第201図 7	14-S0029	台付甕	(18.1)	脚径 (15.4)	19.8	19.8	内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の石英と、1㎜以下の角閃石を含む	良好	外面:口縁～体部上位ハケ、体部中位～下位ヘラケズリ脚部ハケ後ナデ 内面:口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ、脚部ナデ	2次焼成	P 1601
第201図 8	14-S0029	小型甕 口縁～体部	(16.6)		(11.9)	17.5	外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい橙色	2㎜以下の長石を多く、0.5㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、頸部～体部ハケ、磨滅し不明瞭 内面:口縁～体部ハケ 磨滅し不明瞭	2次焼成	P 1598
第201図 9	14-S0029	甕 口縁～体部	(27.0)		(12.2)		外面:明黄褐色 内面:灰黄褐色	5㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒、角閃石を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部タタキ、磨滅顕著により不明瞭 内面:ハケ後ナデ、磨滅顕著により不明瞭	頸部貼付突帯	P 1599
第201図 10	14-S0029	甕 口縁～体部	(15.2)		(20.8)	19.5	内外面ともに にぶい黄褐色	3㎜以下の長石を多く、1㎜以下の石英、金雲母、角閃石をわずかに含む	良好	外面:口縁～体部ハケ 磨滅により不明瞭 内面:口縁～体部ハケ 磨滅により不明瞭		P 1595
第201図 11	14-S0029	甕 体部～底部		(4.0)	(16.2)		内外面ともに にぶい黄褐色	3㎜以下の長石を多く、2㎜以下の石英を少量含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:体部ハケ、体部下位～底部ナデ、磨滅し不明瞭		P 1593

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(18)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第202図 12	14-S0029	鉢	36.4		27.7		内外面ともに にぶい黄褐色	2㎜以下の金雲母、赤色酸化粒、角閃石、長石を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部～体部中位ハケ、体部下位～底部ハケ後ヘラケズリ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部～体部ハケ、底部ナデ		P 1596
第202図 13	14-S0029	鉢 口縁～体部	(31.3)		(27.0)		内外面ともに 灰黄色	2，5㎜以下の石英、角閃石、赤色酸化粒と0，5㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ後ナデ 内面:口縁部ナデ、頸部～体部ハケ、磨滅し不明瞭		P 1597
第202図 14	14-S0029	甕 口縁～体部	(39.4)		(14.5)		内外面ともに 浅黄色	3㎜以下の長石を多く、1.5㎜以下の石英、角閃石を少量含む	普通	外面:口縁～体部ハケ 磨滅により不明瞭 内面:口縁～体部ハケ 磨滅し不明瞭		P 1600
第202図 15	14-S0029	甕 口縁～体部	(25.3)		(32.6)	29.1	内外面ともに にぶい黄褐色	2㎜以下の石英、角閃石少量と4㎜以下の潮汐、赤色酸化粒を含む	不良	外面:口縁部ハケ、体部ハケを施すが磨滅により不明瞭 内面:磨滅により調整不明 ナデか	外面体部黒斑	P 1594
第202図 16	14-S0029	甕	50.6		71.5	49.9	内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ハケ、体部タタキ後ハケ 底部ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ、体部ハケ 底部ナデ	口縁外端面 刻目 頸部･腹部刻目付貼付突帯	P 1592
第205図	14-S0036	小型丸底壺	8.6		(7.2)	8.8	内外面ともに 浅黄色	1㎜以下の長石、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ、体部ケズリか 内面:口縁部ハケ後ヨコナデ、体部ケズリ		P 1761
第210図 1	14-S0069	台付壺or鉢 脚部		脚径 (26.4)	(9.4)		内外面ともに 黄橙色	2㎜以下の長石と、0.5㎜以下の金雲母を多く含む	やや不良	外面:口縁部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、ハケ		P 1850
第210図 2	14-S0069	高杯 脚部			(13.1)		外面:橙色 内面:にぶい黄橙色	3.5㎜以下の長石を含む	良好	外面:杯部ヘラミガキ 脚部ハケ 内面:脚柱部ナデ 裾部ハケ	スカシ1つ残存	P 1851
第210図 3	14-S0069	甕 体部～底部		3.0	(13.9)		外面:黄褐色 内面:橙色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の金雲母を少量含む	良好	外面:体部中位タタキ後ハケ 体部下位～底部ヘラケズリ 内面:ハケ		P 1849
第210図 4	14-S0069	甕 体部～底部	2.1	27.2	(28.9)		内外面ともに 橙色	6㎜以下の石英長石と、1㎜以下の角閃石、雲母を含む	良好	外面:体部タタキ、体部下位ヘラケズリ、底部ナデ 内面:体部ナデ 底部ナデ、ユビオサエ		P 1848
第212図 1	14-S1005	複合口縁壺 口縁部	(24.8)		(7.1)		内外面ともに にぶい橙色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 頸部ハケ 内面:ハケ後ナデ	口縁下端部 刻目付貼付突帯	P 1944
第212図 2	14-S1005	高杯 杯部	(28.0)		(4.1)		内外面ともに 橙色	2㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の角閃石、金雲母を少量含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:ハケ後ヘラミガキ		P 1948
第212図 3	14-S1005	高杯 脚部		脚径 11.9	(11.2)		内外面ともに にぶい橙色	1～2㎜大の長石を多くと、1㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキ後ハケ 内面:脚柱部絞り痕、裾部ハケ、磨滅し不明瞭		P 1949
第212図 4	14-S1005	甕 口縁～体部	(23.4)		(16.4)	(23.2)	内外面ともに 浅黄色	2.5㎜以下の長石を多くと、2㎜以下の石英、角閃石、金雲母を少量含む	やや不良	外面:口縁部タタキ後ハケ 体部タタキ 内面:口縁～肩部ハケ 体部ナデ		P 1946
第212図 5	14-S1005	甕	(23.0)		34.0	(24.0)	内外面ともに 明黄褐色	3㎜以下の長石を多くと、2㎜以下の角閃石、赤色酸化粒、1.5㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ後ハケ 体部～底部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ後ハケ 体部～底部ハケ	外面体部黒斑	P 1947
第212図 6	14-S1005	甕	(32.6)		38.8	(33.7)	内外面ともに 明黄褐色	3㎜以下の長石を多くと、2㎜以下の角閃石を少量と、1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部下位ハケ 底部付近ヘラケズリ 内面:ハケ	外面黒斑 内面媒付着 口縁外端面 刻み目 頸部･腹部 刻目付貼付突帯 外面口縁波状沈線	P 1945
第215図 1	15-S0007	高杯 杯部	(28.3)		(6.2)		内外面ともに 浅黄橙色	5㎜以下の長石と、1㎜以下の角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、杯部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、杯部ハケの痕跡		P 2265
第215図 2	15-S0007	甕 口縁部	(24.6)		(5.2)		外面:浅黄色 内面:橙色	1～2㎜以下の長石、石英、金雲母、角閃石、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁端部指押さえ、口縁～頸部ハケ 内面:口縁～頸部ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 2269
第215図 3	15-S0007	短頸壺 口縁～体部	(9.2)		(6.1)	(11.1)	内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石、角閃石を含む	良好	外面:口縁～体部ハケ後ヘラミガキ 内面:口縁部ハケ、体部ナデ・ヘラミガキ		P 2266
第215図 4	15-S0007	短頸壺	12.2	3.8	14.3	16.1	内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部～底部ハケ後ナデ・ケズリ 内面:口縁部ハケ、体部ヘラナデか	外面体部黒斑・赤色顔料？	P 2268

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(19)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第215図5	15-S0007	鉢	(28.0)		(12.5)		外面:橙色 内面:浅黄橙色	1～2㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒と、0.2～0.3㎜の金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部ハケ後ナデ・指押さえ 内面:ハケ		P 2267
第217図1	15-S0008	甕 口縁～体部	(12.6)		(9.7)	(13.0)	外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄橙色	1～2㎜大の長石、石英、角閃石と1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部ハケ後一部ナデ 内面:口縁～体部ハケ	外面体部黒斑	P 2282
第217図2	15-S0008	複合口縁壺 口縁部	(22.3)		(5.5)		内外面ともに 橙色	5㎜以下の長石と1㎜以下の角閃石、赤色酸化粒、微粒の金雲母を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ 磨滅し不明瞭 内面:口縁部ヨコナデ 磨滅し不明瞭	外面口縁部黒斑	P 2283
第217図3	15-S0008	壺 頸部～体部			(14.0)		内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後一部ナデ 内面:ハケ、一部ハケ後ヘラナデ	外面体部赤色顔料	P 2281
第219図1	15-S0009	小型器台 受部	(10.0)		(2.0)		外面:浅黄橙色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、赤色酸化粒と微粒の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 磨滅し調整不明瞭 内面:ヨコナデ 磨滅し調整不明瞭		2192
第219図2	15-S0009	小型甕 口縁～体部	(11.2)		(7.7)	(14.2)	外面:黄灰色 内面:灰白色	1㎜以下の長石、石英、角閃石赤色酸化粒、雲母を含む	普通	外面:体部ハケ後ヘラミガキ 磨滅し不明瞭 内面:口縁部ハケの痕跡 体部ナデ・指押さえ	外面体部媒付着・黒斑	2195
第222図1	15-S0515	短頸壺	10.5		(15.9)	(17.8)	内外面ともに 浅黄橙色	3㎜以下の長石と、2㎜以下の角閃石、金雲母と、1㎜以下の石英赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部上位ハケ、下半ハケ後ナデ 内面:口縁～体部上位ハケ 体部下半ハケ後ナデ	腹部貼付突帯	P 2435
第222図2	15-S0515	小型壺	11.5		(10.7)	(14.5)	内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石、石英、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部～体部中位ハケ、下位ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ、頸部ヘラケズリ、体部ハケ		P 2436
第225図1	15-S0517	甕 口縁～体部	(20.0)		(14.3)		内外面ともに 橙色	1～2㎜以下の長石、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ハケ後ケズリ 内面:口縁部ハケ、頸部板ナデ、体部ハケ・ナデ	外面黒斑	P 2439
第225図2	15-S0517	甕 口縁～体部	(34.4)		(8.0)		外面:灰白色 内面:浅黄橙色	1㎜前後の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後指押さえ 内面:ハケ		P 2440
第227図1	18-S0504	器台	(12.2)		(10.1)		外面:明褐色 内面:灰褐色	1㎜以下の長石、石英、角閃石金雲母を含む	良好	外面:口縁部タタキ、脚部タタキ後ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、脚部絞り痕、ナデ		P 2440
第227図2	18-S0505	甕 底部		(4.4)	(18.9)	(24.0)	内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	普通	外面:体部中位細いハケ、下位粗いハケ、底部ナデ 内面:体部ハケ後ナデ、底部粗いハケ	外面媒付着	P 2503
第230図1	19-S0008	鉢	(16.0)		(9.5)		内外面ともに 浅黄色	3㎜以下の長石と、1㎜以下の金雲母を少量含む	普通	外面:体部中位ハケ、下位ヘラケズリ 内面:ナデ 磨滅により不明瞭		P 2715
第230図2	19-S0008	脚付鉢 体部～脚部		脚径 (11.1)	(8.1)		内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英、金雲母少量を含む	良好	外面:体部磨滅し不明瞭 脚部ハケ後ヨコナデ 内面:体部ハケ、脚部ハケ及びナデ		P 2716
第230図3	19-S0008	器台	(15.1)	脚径 17.0	24.2		内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の石英、角閃石、赤色酸化粒と、1㎜以下の金雲母を少量含む	良好	外面:口縁外端面ハケ後ナデ、体部ハケを施すが磨滅し不明瞭 内面:口縁部ハケ、体部上ナデ、下位ハケ		P 2717
第230図4	19-S0008	甕	19.1		(26,10)	19.5	内外面ともに にぶい黄褐色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母、石英を少量含む	やや不良	外面:口縁部ヨコナデ後ハケ、体部上ハケ、下位ヘラ ケズリ後ハケ 内面:口縁部ハケ、体部ハケ施すが磨滅し調整不明		P 2713
第230図5	19-S0008	甕	(21.1)		復元高 (27.2)		内外面ともに にぶい黄褐色	1㎜以下の石英、長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部上ハケ、下位ハケ後ナデ、底部ヘラケズリ 内面:ハケ、底部付近ナデ	図上復元	P 2712
第230図6	19-S0008	甕 口縁～体部	(46.6)		(25.7)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の金雲母を少量と、石英、角閃石を含む	普通	外面:口縁部ナデ、体部ハケ、磨滅し不明瞭 内面:口縁部ハケ後ナデ 体部ハケ	頸部刻目付貼付突帯	P 2714
第230図7	19-S0008	甕 口縁～体部	49.6		47.4	45.5	内外面ともに にぶい橙色	1㎜以下の石英、長石、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部ハケ 内面:口縁～体部ハケ	口縁外端面刻目、頸部・腹部刻目付貼付突帯	P 2710
第231図8	19-S0008	甕 口縁～体部	49.0		(19.2)		内外面ともに 明褐灰色	2㎜以下の長石と1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁外端面タタキ、口縁ナデ後ハケ、体部ハケ 内面:口縁～体部ハケ	頸部刻目付貼付突帯	P 2711

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(20)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第231図 9	19-S0008	甕	(46.3)		(63.6)	45.2	内外面ともに 明褐灰色	2㎜以下の石英、長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部タタキ後ハケ 体部～底部タタキ後ハケ 内面:口縁部ハケ後ナデ、 頸部ナデ、体部～底部ハケ	外面黒斑 2次焼成 内面媒付着 頸部刻目付貼付突帯 腹部貼付突帯	P 2706
第231図 10	19-S0008	甕 口縁～体部	(41.0)		(18.4)		内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の角閃石を少量含む	良好	外面:磨滅し不明瞭 ハケの痕跡 内面:磨滅により不明瞭	頸部刻目付貼付突帯	P 2707
第231図 11	19-S0008	甕 体部～底部			(45.2)	(43.2)	内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の角閃石を少量含む金雲母角閃石を含む	良好	外面:体部ハケ 底部付近ヘラケズリ 内面:体部ハケ後一部ナデ 底部付近ヘラケズリ	腹部刻目付貼付突帯	P 2709
第231図 12	19-S0008	甕 体部			(25.0)	41.6	外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい橙色	2㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母、角閃石を少量含む	良好	外面:体部ハケ 磨滅し不明瞭 内面:体部ハケ後一部ナデ	腹部刻目付貼付突帯	P 2708
第233図 1	19-S1011	鉢	(11.6)		4.4		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、角閃石と微粒の金雲母を含む	不良	外面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部～底部ハケ後ナデ	内外面底部黒斑	P 2747
第233図 2	19-S1020	高杯 杯部	(30.4)		(4.1)		内外面ともに 橙色	1㎜以上の石英と、1㎜以下の長石、雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:磨滅し不明瞭 ハケの痕跡 内面:磨滅し不明瞭 ハケの痕跡		P 2807
第233図 3	19-S1024	高杯 脚柱部			(6.8)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の角閃石、赤色酸化粒と1～2㎜以下の長石を微量に含む	普通	外面:杯部ヘラミガキ 脚部ヘラミガキ、ハケ 内面:杯部ヘラミガキ 脚部ヘラケズリ		P 2829
第233図 4	19-S1029	台付鉢 口縁～脚部	(11.8)		(8.6)		内外面ともに にぶい黄橙色	5㎜以下の長石と、1㎜以下の赤色酸化粒、微粒の角閃石、金雲母を含む	普通	外面:脚部ヘラミガキ 磨滅し不明瞭 内面:口縁～底部ナデ、脚部ハケ後ナデ	スカシ	P 2836
第233図 5	19-S1029	鉢 底部		4.0	(5.8)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:体部ナデか 底部周縁指押さえ 内面:クモの巣状ハケ	外面黒斑	P 2835
第233図 6	19-S1029	高杯 杯部	(29.6)		(4.9)		外面:にぶい黄橙色 内面:明黄褐色	1㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒と微粒の角閃石を含む	良好	外面:ヘラミガキ 内面:ミガキの痕跡 磨滅し不明瞭		P 2833
第233図 7	19-S1029	甕 口縁～体部	(30.2)		(15.6)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい橙色	1～3㎜以下の長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ後ナデ	外面媒付着	P 2832
第233図 8	19-S1029	甕 底部		5.8	(4.8)		内外面ともに 浅黄色	1㎜以下の長石と、微粒の石英角閃石、金雲母を含む	普通	外面:ナデ 内面:ヘラケズリ	外面媒付着	P 2834
第243図 1	14-S0033	高杯 脚柱部			(8.9)		外面:浅黄橙色 内面:灰黄色	1㎜以下の長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨滅により不明瞭 内面:磨滅により不明瞭	脚部スカシ	P 1729
第243図 2	14-S0033	高杯 脚部		脚径 14.6	(6.7)		外面:にぶい橙色 内面:にぶい黄橙色	1.5㎜以下の長石と、0.5㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:脚柱部ナデ 裾部ハケ	3方スカシ	P 1730
第243図 3	14-S0033	鉢	(13.0)		5.8		内外面ともに 浅黄色	1.5㎜以下の石英、金雲母、角閃を石含む	良好	外面:磨滅により調整不明 内面:口縁部ヨコナデ 磨滅し不明瞭		P 1728
第243図 4	14-S0033	直口壺 口縁～体部	(11.8)		(13.8)	23.0	内外面ともに 明黄褐色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ、体部タタキ後ハケ 内面:ハケ	外面黒斑	P 1723
第243図 5	14-S0033	甕 底部			(13.0)		内外面ともに 浅黄色	3㎜以下の長石を多くと、1.5㎜以下の金雲母を少量含む	良好	外面:体部タタキ後ハケ、体部下位ヘラケズリ後ハケ 内面:ハケ	外面体部黒斑	P 1724
第243図 6	14-S0033	鉢	(30.8)		(16.2)		内外面ともに 浅黄色	3.5㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁～体部ハケ 底部ヘラケズリ 内面:口縁～体部ハケ 底部ヘラナデ		P 1727
第243図 7	14-S0033	甕	28.2		42.5	29.7	内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ後ハケ、頸部～体部下位ハケ、体部下位～底部ヘラケズリ 内面:ハケ	外面体部媒付着	P 1726
第243図 8	14-S0033	甕	(19.6)		復元高 (29.5)		内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと、1.5㎜以下の石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ、体部上位ハケ下位ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ後ヨコナデ、体部上位ハケ下位ナデか	外面媒付着 図上復元	P 1725

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(21)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第245図 1	14-S1505	複合口縁壺 口縁～体部	(20.8)		(18.9)		内外面ともに 浅黄色	角閃石、長石を含む	普通	外面:口縁部ハケ、頸部～ 体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ 頸部～体部ハケ	頸部貼付突帯	P 2078
		複合口縁壺 底部		6.4	(10.1)					外面:体部ハケ 底部ナデ 内面:体部ハケ 底部ナデ		
第245図 2	14-S1505	短頸直口壺 口縁～体部	(12.9)		(8.7)		内外面ともに にぶい橙色	長石、石英、角閃石、赤色酸化粒含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部ハケ 一部ミガキ 内面:口縁部ヘラナデ、頸部 ～体部ハケ		P 2079
第245図 3	14-S1505	甕 口縁～肩部	(31.0)		(7.7)		外面:浅黄色 内面:浅黄橙色	1㎜前後の長石、石英、角閃石 赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ、肩部 原体の異なるハケ 内面:口縁部ハケ、肩部ハケ 及びナデか	頸部貼付突帯	P 2082
第245図 4	14-S1505	高杯 脚柱部			(14.7)		内外面ともに にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石、石英と1㎜以 下の角閃石を含む	良好	外面:ミガキか 磨滅し調整不明瞭 内面:ハケの痕跡 磨滅し調整不明瞭		P 2087
第245図 5	14-S1505	鉢	17.2	4.6	6.9		外面:浅黄橙色 内面:灰白色	1㎜以下の長石、石英、角閃石 赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部 ～底部ハケ 内面:クモの巣状ハケ 磨滅し不明瞭		P 2086
第245図 6	14-S1505	手づくね土器 鉢	8.2		3.6		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以上の石英、長石と1㎜以 下の雲母を含む	普通	外面:口縁端部ヨコナデ 体部指圧痕 内面:口縁端部ヨコナデ 体部指圧痕		P 2085
第245図 7	14-S1505	棒状土製品			(8.3)	厚 2.6	外面:浅黄橙色 内面:褐灰色	1㎜以下の長石と、0.1㎜以上の 角閃石、金雲母、赤色酸化粒を 含む	普通	外面:粗いハケ後ヘラナデ 内面:		P 2088
第245図 8	14-S1505	甕 口縁～体部	(38.6)		(27.0)	41.6	内外面ともに 浅黄色	1～2㎜の長石、石英と1㎜以下 の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ 体部多方向のハケ 内面:口縁～体部ハケ後ナ デ・指押さえ	9-S0001と接 合	P 2080
第245図 9	14-S1505	甕 底部		(8.2)	(7.0)		外面:灰黄褐色 内面:灰白色	1㎜以下の長石、石英、赤色酸 化粒を含む	良好	外面:体部ハケ、底部周縁ナ デ・指押さえ 内面:磨滅し調整不明瞭 ハケの痕跡		P 2084
第245図 10	14-S1505	壺？ 底部		(6.0)	(10.1)		外面:浅黄橙色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母 赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅により調整不明 内面:ハケ		P 2083
第246図 11	14-S1505	甕 口縁～体部	38.0		(24.6)		内外面ともに にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石、石英、角閃石 金雲母と、1㎜以下の赤色酸化 粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、肩部 ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ハケ後ナデ、体 部ハケ、磨滅	頸部貼付突帯 外面体部黒斑	P 2081
		甕 体部			復元高 (38.8)	(57.0)				外面:ハケ後一部ナデ 内面:ハケ後ナデ 磨滅し不明瞭	図上復元 腹部刻目付貼 付突帯 外面体部黒斑 赤色顔料	
第248図 1	14-S1510	鉢	(14.6)		(10.0)		内外面ともに 浅黄色	1㎜前後の長石、角閃石、雲母 を含む	良好	外面:ハケを施すが磨滅によ り不明瞭 内面:ハケ	内外面体部黒 斑	P 2113
第248図 2	14-S1510	甕	(12.6)	(4.4)	17.1	(15.4)	内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母 を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、肩部 ナデ、体部ハケ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部 ナデ、体部粗いハケ状 工具によるハケ	外面黒斑	P 2109
第248図 3	14-S1510	甕	(13.5)	6.2	16.1	(15.3)	外面:浅黄橙色 内面:にぶい橙色	1～2㎜の長石を多く含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ後一部ミガキ 底部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ、底部指押さえ	外面体部黒斑	P 2107
第248図 4	14-S1510	甕 底部		(6.7)	(3.3)		外面:にぶい黄橙色 内面:褐灰色	1～2㎜大の長石、石英と赤色酸 化粒を多く含む	良好	外面:磨滅し不明瞭 ヘラナデか 内面:磨滅し調整不明 ヘラナデか		P 2108
第248図 5	14-S1510	甕 底部		(8.4)	(6.9)		外面:にぶい黄橙色 内面:灰褐色	3㎜以下の長石、石英と、角閃 石、赤色酸化粒を少量含む	良好	外面:ハケを施すが磨滅によ り不明瞭 内面:ナデ 磨滅し不明瞭		P 2110
第248図 6	14-S1510	把手			(4.9)		内外面ともに 橙色	1～2㎜前後の潮汐、石英、金雲 母を含む	良好	外面:ハケの痕跡、ナデ 内面:ハケ		P 2214
第251図 1	20-S0001	複合口縁壺 口縁～体部	(16.2)		(10.2)		外面:黄褐色 内面:明褐色	1～2㎜以下の赤色酸化粒と、1 ㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部～頸部ヨコナデ 体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部 ナデ、体部押さえ・ヘラ ケズリ	外面媒付着	P 2880
第251図 2	20-S0001	直口壺	9.2		10.0	13.0	内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと石英少 量含む	普通	外面:口縁部ナデ、体部上半 ハケ後ヘラミガキ、下 半ハケ後ヘラケズリ 内面:口縁部磨滅し不明瞭 体部ナデ		P 2851

表9 BⅡ地区 出土土器観察表(22)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第251図3	20-S0001	直口壺	(12.0)		14.0	18.4	外面:灰黄褐色 内面:明黄褐色	3㎜以下の石英、長石、2㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁～底部ヘラミガキ 内面:口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部ハケメ 底部ヘラミガキ？	外面黒斑	P 2860
第251図4	20-S0001	直口壺	11.4		16.2	16.3	外面:にぶい橙・灰黄色 内面:浅黄褐色	5㎜以下の石英、3㎜以下の長石、1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部上位ハケ、体部下位～底部ヘラケズリ 内面:口縁部ナデ、体部～底部ハケ	外面黒斑	P 2854
第251図5	20-S0001	手づくね土器鉢	7.4		4.5		内外面ともににぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒と微粒の金雲母を含む	良好	外面:口縁部指頭圧痕 体部ナデ 内面:口縁部指頭圧痕 体部ナデ	外面黒斑	P 2863
第251図6	20-S0001	手づくね土器鉢	8.7		5.9		内外面ともににぶい黄橙色	1～3㎜大の長石と、1㎜以下の石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:指押さえ・ナデ 内面:ナデ 磨滅し不明瞭	外面黒斑	P 2862
第251図7	20-S0001	鉢	10.0		6.2		外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい橙色	1㎜前後の長石、石英、赤色酸化粒と、微粒の金雲母を含む	良好	外面:ナデ・指押さえ 内面:口縁部ハケ後ナデ 体部ナデ		P 2866
第251図8	20-S0001	鉢	9.1		3.7		内外面ともににぶい黄橙色	1㎜前後の長石、石英と0，1㎜以上の金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部周縁指押さえ 体部ナデ 内面:ハケ後口縁周縁指押さえ		P 2855
第251図9	20-S0001	鉢	11.0		6.2		内外面ともににぶい黄橙色	1㎜前後の長石、石英と微粒の金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ナデ・指押さえ 内面:ハケ	外面黒斑	P 2859
第251図10	20-S0001	鉢	12.8		5.9		内外面ともににぶい黄橙色	4.5㎜以下の石英、1.5㎜以下の長石を多く含む 0.8㎜以下の金雲母、2㎜以下の赤褐色粒を少量含む	普通	外面:口縁端部ヨコナデ、口縁部～体部ナデ、底部ケズリ 内面:口縁端部ヨコナデ、口縁部～底部ハケメ	外面黒斑	P 2875
第251図11	20-S0001	鉢	12.8		6.7		外面:橙色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜大の長石、石英と1㎜かの角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ナデ、体部タタキ痕、下半～底部ケズリ 内面:ハケ		P 2873
第251図12	20-S0001	鉢	15.0		6.4		内外面ともににぶい黄橙色	1～2㎜大の長石を多くと、1㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅し不明瞭 体部～底部ヘラケズリ 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭	外面底部黒斑	P 2865
第251図13	20-S0001	さじ形土製品			(6.1)		内外面ともに灰黄色	1㎜以下の長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラ押さえ ヘラミガキ 内面:ヘラ押さえ ヘラミガキ		P 2882
第251図14	20-S0001	甕	18.2		24.3	19.4	内外面ともににぶい黄橙色	2㎜以下の長石を多くと、角閃石少量含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部タタキ後ハケ・ナデ 内面:口縁部ハケ後ナデ、頸部～体部ハケ後ナデ 底部ナデ	外面媒付着	P 2870
第251図15	20-S0001	甕	14.0	(2.5)	19.2	16.2	内外面ともに浅黄色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁～肩部タタキ、体部中位ナデ、下位ハケ 内面:ハケ	内外面体部黒斑	P 2864
第251図16	20-S0001	甕	15.5		14.8	13.2	内外面ともににぶい黄橙色	1㎜以下の長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部下位ハケ 底部付近ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ、体部上ハケ後ミガキ、底部ナデ	外面媒付着	P 2857
第251図17	20-S0001	甕	13.8		16.2	13.3	内外面ともににぶい黄橙色	長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁～体部中位ハケ、体部中位～底部ヘラケズリ 内面:ハケ	外面底部黒斑	P 2861
第251図18	20-S0001	甕	19.0		28.2	20.9	内外面ともににぶい黄橙色	2㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ		P 2868
第251図19	20-S0001	甕	(20.0)		35.6	(26.0)	外面:にぶい黄橙色 内面:灰白色	1～2㎜の長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁～体部中位タタキ一部ナデ、以下ヘラナデ 内面:口縁部ハケ、磨滅顕著により調整不明	外面口縁～体部中位黒斑・媒付着	P 2867
第251図20	20-S0001	甕	(13.1)		(13.4)	(18.3)	内外面ともに浅黄色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英、角閃石、金雲母を少量含む	良好	外面:ハケ後一部ナデ 内面:ハケ後一部指押さえ	頸部刻目付貼付突帯	P 2877
第251図21	20-S0001	甕	15.7		22.2	16.8	内外面ともににぶい黄橙色	3㎜以下の長石と、1㎜以下の石英、金雲母を少量含む	普通	外面:口縁～体部中位ハケ、以下ヘラケズリ 内面:ハケ後一部ナデ	外面媒付着	P 2881
第251図22	20-S0001	甕	13.1		16.8	14.0	外面:浅黄橙色 内面:浅黄橙 にぶい橙色	7㎜以下の石英、長石を含む 1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部中位ハケ、体部中～底部ヘラケズリ 内面:ハケ	頸部貼付突帯	P 2878
第251図23	20-S0001	甕	12.4		17.5	14.3	内外面ともににぶい黄橙色	4㎜以下の長石、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁～体部中位ハケ、以下ヘラケズリ 内面:ハケ	頸部刻目付貼付突帯	P 2853

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(23)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第251図 24	20-S0001	甕	19.5		11.4	19.9	内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ 内面:口縁部ハケ 体部ハケ後ナデ	外面媒付着	P 2876
第251図 25	20-S0001	甕	25.1		35.2	25.8	内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ後ハケ 体部上位ハケ、下位ヘラナデ 内面:口縁部ヨコナデ後ハケ 体部上ヘラナデ、以下磨滅し不明瞭		P 2871
第251図 26	20-S0001	甕	32.6	5.3	47.1	32.4	内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと、2㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 体部ハケ、以下ヘラケズリ 内面:口縁～体部ハケ、底部付近ナデ	頸部貼付突帯	P 2879
第251図 27	20-S0001	甕	28.3		40.8	29.3	内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと、2㎜以下の金雲母、赤色酸化粒、1㎜以下の石英、角閃石を少量含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部上位ハケ、下半粗いハケ、ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ後ナデ、頸部～底部ハケ	外面媒付着	P 2869
第253図 1	9-S0006	壺 底部		(6.0)	(1.6)		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ナデ 内面:指押さえ ハケの痕跡	外面底部黒斑	P 1030
第253図 2	10-S0007	韓式土器？ 鉢	(30.2)		(7.3)	(29.6)	外面:暗灰色 内面:灰黄褐色	1㎜前後の石英、長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ 体部櫛状のナデ 内面:口縁部ヘラナデ 体部ヘラケズリ	外面瓦質	P 1041
第254図	14-S0011	甕 底部			(3.0)		内外面ともに 灰白色	2.5㎜以下の角閃石、1㎜以下の石英、赤色酸化粒、0.5㎜以下の金雲母を含む	不良	外面:磨滅により不明瞭 ナデか 内面:ナデ	外面底部周縁黒斑	P 1332
第255図 1	14-S1004	高杯 杯部	(25.6)		(4.7)		内外面ともに 浅黄橙色	3㎜以下の長石と、1㎜以下の石英、角閃石を含む	良好	外面:磨滅し不明瞭 ナデ後ヘラミガキ 内面:ナデ後ヘラミガキ		P 1938
第255図 2	14-S1004	甕 口縁部	(25.0)		(3.0)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の金雲母を少量含む	不良	外面:ハケ後ヨコナデ 内面:ハケ後ヘラナデ		P 1937
第255図 3	14-S1004	甕 口縁～体部	(13.0)		(9.6)	(15.7)	外面:にぶい橙色 内面:にぶい褐色	4㎜以下の長石を多くと、1㎜以下の石英、金雲母を少量含む	良好	外面:口縁部ヘラケズリ後ヨコナデ、体部ケズリ後ヘラナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデ		P 1936
第255図 4	14-S1004	甕 底部		(8.0)	(3.4)		外面:にぶい橙色 内面:にぶい黄橙色	3㎜以下の長石を多くと、微粒の石英、角閃石を含む	良好	外面:磨滅し不明瞭 ナデ 内面:ヘラケズリ後ナデ		P 1935
第255図 5	14-S1004	壺 底部		(7.0)	(3.1)		内外面ともに 淡黄色	1㎜以下の長石を多く含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:ハケ後ナデ		P 1934
第256図 1	18-S0503	甕 底部		(6.6)	(7.7)		外面:浅黄橙色 内面:にぶい黄橙色	2～4㎜前後の長石、石英、角閃石を含む	良好	外面:風化により調整不明 内面:指頭圧痕 風化し不明瞭		P 2483
第256図 2	18-S0503	壺 底部		(8.8)	(6.3)		外面:浅黄橙色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、角閃石赤色酸化粒を含む	普通	外面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭 内面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭		P 2484
第256図 3	18-S0503	土製支脚		脚径 (10.2)	(10.2)		外面:にぶい橙色 内面:灰黄褐色	1㎜以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:タタキ後ヘラナデ 内面:ナデ・指押さえ	穿孔	P 2485
第258図 1	14-S1011	甕 口縁～体部	(27.8)		(11.0)		内外面ともに 灰白色	2㎜以下の長石を少量と、1㎜以下の石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 体部ハケ後ナデ 内面:口縁部ハケ 体部ハケ		P 2009
第258図 2	14-S1011	甕 口縁～体部	(21.0)		(8.0)		外面:にぶい橙色 内面:灰白色	2㎜以下の長石を少量と、微粒の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ケズリ後ハケ 頸部指圧痕、体部ヘラケズリ後ハケ 内面:ハケ	外面媒付着	P 2008
第258図 3	14-S1011	甕 底部		(5.0)	(4.1)		外面:浅黄橙色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、角閃石を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:ヘラケズリ後ナデ		P 2010
第262図 1	14-S1007	複合口縁壺 口縁部	(20.4)		(4.6)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石、石英、角閃石を含む	良好	外面:ハケ後ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ 摩滅し不明瞭	袋状口縁	P 4109
第262図 2	14-S1007	複合口縁壺 口縁部	(19.2)		(9.0)		内外面ともに 浅黄橙色	3㎜以下の長石と石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 摩滅し調整不明瞭 内面:口縁部ナデ 頸部ハケ	袋状口縁	P 4096
第262図 3	14-S1007	複合口縁壺 口縁部	(28.6)		(5.2)		内外面ともに 灰白色	1㎜以下の長石、石英、角閃石金雲母を含む	良好	外面:口縁部原体の異なるハケ、頸部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ		P 4097

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(24)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第262図4	14-S1007	壺 口縁～肩部	(15.1)		(8.2)		内外面ともに 灰白色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む含む	良好	外面:口縁部磨滅し調整不明 肩部ハケ 内面:口縁部ハケ、肩部ハケ・ナデ		P 4098
第262図5	14-S1007	高杯 杯部	(28.6)		(4.1)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ナデ 杯部ヘラケズリ 内面:ハケ及びナデか	外面黒斑	P 4105
第262図6	14-S1007	甕 口縁～体部	(22.5)		(12.7)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と石英、角閃石金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ、肩部ハケ後ナデ・指押さえ 内面:口縁部ハケ、肩部ハケ後一部ナデ	外面黒斑	P 4102
第262図7	14-S1007	甕 口縁～体部	(25.0)		(20.6)	(29.0)	内外面ともに 灰白色	1㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:タタキ後ハケ 内面:ハケ後ナデ	外面媒付着 2次焼成	P 4100
第262図8	14-S1007	甕 口縁～体部	(30.9)		(14.5)		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:ハケ		P 4101
第262図9	14-S1007	甕 底部		(6.6)	(2.8)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石と石英を含む	良好	外面:ナデ 内面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭		P 4103
第262図10	14-S1007	甕 底部		5.6	(4.2)		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の長石と石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部ハケ後ナデ 底部ハケ 内面:磨滅・風化激しい 底面ハケの痕跡		P 4106
第262図11	14-S1007	壺 底部			(7.5)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ 内面:体部ハケ 底部クモの巣状ハケ	外面黒斑	P 4104
第262図12	14-S1007	壺 底部		(9.7)	(12.3)		内外面ともに 浅黄橙色	3㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:体部ハケ後ナデ 底部ナデ 内面:ハケ	外面黒斑	P 4099
第262図13	14-S1007	短頸壺	(12.1)	18.1	15.4		外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい黄褐色 ~~灰黄褐色~~	3㎜以下の石英、1.2mm以下の長石、1.5mm以下の金雲母をやや多く含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、口縁部～体部(上位)ハケ後ナデ 体部(下位)～底部ケズリ 内面:口縁部～底部ハケ・ナデ	外面摩滅	P 4107
第262図14	14-S1007	甕	19.7		28.7	20.9	内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:タタキ後ハケ・ヘラケズリ、一部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ、底部ナデ	外面黒斑	P 3037
第263図1	9-S0017	複合口縁壺 口縁部	(18.6)		(6.4)		内外面ともに にぶい橙色	長石、石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、磨滅し不明瞭 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、磨滅し不明瞭		P 3278
第263図2	9-S0017	複合口縁壺 口縁部	(24.8)		(7.5)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ後ヘラナデ 内面:口縁部ヨコナデ・指頭圧痕跡、頸部ハケ		P 3288
第263図3	9-S0017	複合口縁壺 口縁部	(23.6)		(7.0)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、石英を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 頸部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ	外面赤色顔料 内面鉄分付着	P 3269
第263図4	9-S0017	複合口縁壺 口縁部	(28.0)		(6.2)		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜前後の長石、赤色酸化粒を均一に含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 3268
第263図5	9-S0017	複合口縁壺 口縁部	(24.6)		(30.9)	(28.4)	内外面ともに 橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ナデ、頸部ハケ 体部ハケ 内面:口縁～頸部ハケ、頸部ナデ、体部ハケ後ナデ	頸部・腹部刻目付貼付突帯 内外面黒斑	P 3287
第263図6	9-S0017	複合口縁壺 口縁～頸部	(24.6)		(14.3)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ・ヘラナデ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 3547
第263図7	9-S0017	小型丸底壺 口縁～体部	(7.4)		(5.5)	(9.2)	内外面ともに にぶい黄橙色	長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヘラミガキ、体部ヘラミガキ 内面:口縁部ハケ後ナデ、頸部指押さえ、体部ヘラミガキ		P 3247
第263図8	9-S0017	小型丸底壺	(11.3)		(7.6)	(9.0)	内外面ともに にぶい橙色	長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁～肩部ハケ後ヘラミガキ、体部ヘラミガキ・一部ケズリ、底部磨滅 内面:口縁ヨコナデ、肩部～体部ナデ	外面肩部丹塗り？	P 3262
第263図9	9—S0007	小型直口壺 口縁～体部	(10.0)		(9.6)	(15.2)	内外面ともに にぶい橙色	長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヘラミガキ、頸部～体部ヘラミガキ、下位ケズリ後ヘラミガキ 内面:口縁部ハケ後ヘラミガキ、肩部ハケ後ナデ 体部ナデ	内外面口縁部丹塗り？	P 3249

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(25)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第263図 10	9-S0017	小型直口壺	(11.8)		13.5	(16.7)	内外面ともに 浅黄橙色	長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ・ナデ 内面:口縁部ハケ、体部ハケ後ヘラミガキ、底部ヘラナデ	外面底部黒斑	P 3272
第263図 11	9-S0017	小型壺	(11.7)		(10.5)	(14.6)	内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヘラミガキ、肩部ハケ後ヘラミガキ、体部ヘラミガキ 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭	外面頸部～肩部丹塗り？	P 3281
第263図 12	9-S0017	小型壺 口縁～体部	(11.2)		(10.8)	(17.2)	内外面ともに にぶい橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヘラミガキ、肩部ハケ後体部ヘラミガキ 内面:ハケ		P 3248
第263図 13	9-S0017	小型直口壺	(11.4)		(12.6)	(14.2)	内外面ともに 浅黄橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ、肩部ハケ後ヘラナデ、体部～底部付近ヘラケズリ 内面:口縁部ヨコナデ、体部～底部付近ハケ	外面黒斑	P 3261
第263図 14	9-S0017	細頸壺 口縁部	(10.1)		(8.3)		内外面ともに にぶい橙色	長石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:ハケ後一部ナデ	口縁外端部黒斑	P 3271
第263図 15	9-S0017	広口壺	22.4	7.9	40.4	36.0	外面:橙色～にぶい黄橙色 内面:にぶい黄褐色	5mm以下の石英、3mm以下の長石、1mm以下の金雲母、角閃石を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ 肩部ハケ、体部ハケ 内面:口縁部ハケ後ナデ 体部ハケ後下半はナデ	頸部貼付突帯	P 3263
第264図 16	9-S0017	壺 (韓式系？) 口縁部			(5.8)		内外面ともに 赤色	長石、石英を含む	良好	外面:ヨコナデ ハケ 内面:ヨコナデ ハケ		P 3537
第264図 17	9-S0017	壺 口縁～体部	(16.2)		(6.7)		内外面ともに 明赤褐色	長石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、肩部ハケ後ヘラナデ・ミガキ 内面:口縁部ハケ、肩部ナデ 体部ハケ	外面丹塗り	P 3292
第264図 18	9-S0017	甕	15.5		17.8		外面:にぶい橙色 内面:褐灰～灰褐色	5.5mm以下の石英、2.5mm以下の長石、0.8mm以下の金雲母をやや多く含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部上位ナデ、下位ハケ 内面:口縁部ハケ、肩部～底部ハケ後ナデ	外面媒付着	P 3272
第264図 19	9-S0017	甕 口縁～肩部	(20..40)		(9.0)		内外面ともに にぶい橙色	長石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ	2次焼成 内外面媒付着	P 3251
第264図 20	9-S0017	甕 口縁～肩部	(25.2)		(9.1)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部ハケ 内面:ハケ、一部ナデ	外面媒付着 頸部貼付突帯	P 3253
第264図 21	9-S0017	甕 口縁～肩部	(26.7)		(8.8)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、肩部ハケ 内面:口縁～肩部ハケ	頸部貼付突帯	P 3254
第264図 22	9-S0017	甕	43.0		(44.2)	35.9	内外面ともに 明赤褐色	1.5mm以下の長石を多くと、1mm以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面:口縁～体部ハケ、体部下位ハケ後一部ナデ	頸部貼付突帯 腹部刻目付貼付突帯	P 3252
第264図 23	9-S0017	甕	32.9	4.0	31.3		内外面ともに 明黄褐色	2mm以下の長石と、1mm以下の石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部～底部ハケ 内面:ハケ	頸部・腹部刻目付貼付突帯	P 3250
第264図 24	9-S0017	甕 口縁～肩部	(56.0)		(20.6)		内外面ともに 灰白色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部タタキ後ハケ、肩部ハケ 内面:口縁部ハケ、一部ナデ 肩部ハケ	頸部刻目付貼付突帯	P 3265
第265図 25	9-S0017	土製支脚			(7.0)		外面:明赤褐色 内面:浅黄橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:台上部ナデ 脚部ハケ 内面:ナデ・指押さえ	穿孔 2次焼成？	P 3280
第265図 26	9-S0017	土製支脚		脚径 8.8	(8.5)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:台上部ナデ 脚部タタキ後ナデ 内面:ナデ・指押さえ		P 3267
第265図 27	9-S0017	小型器台	(12.8)		(3.3)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、赤色酸化粒を含む	やや不良	外面:口縁部ハケ後ナデ、頸部ハケ後ヘラミガキ 内面:磨滅し調整不明		P 3274
第265図 28	9-S0017	手づくね土器 鉢	(5.5)	(2.8)	4.0		内外面ともに にぶい橙色	長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ナデ・指押さえ 内面:ナデ・指押さえ	外面黒斑	P 3280
第265図 29	9-S0017	鉢	(16.7)		6.1		外面:にぶい橙色 内面:にぶい黄橙色	長石を含む	良好	外面:ハケ後一部ヘラナデ 内面:ハケ 底部ハケ後ヘラナデ		P 3246
第265図 30	9-S0017	鉢	(21.7)		(11.1)		外面:浅黄橙色 内面:にぶい橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁～体部上位ヘラナデ、下位ヘラケズリ 内面:ハケ後一部ナデ	外面黒斑	P 3255

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(26)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第265図 31	9－S0017	鉢	(10.6)		(9.8)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後一部ナデ 内面:口縁部ハケ、体部指押さえ、ナデ上げ		P 3590
第265図 32	9－S0017	器台	(8.2)		(10.0)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ナデ 磨滅し不明瞭 内面:口縁部指押さえ 脚部ナデ	外面口縁部 媒付着	P 3294
第265図 33	9－S0017	器台	(13.2)		(14.3)		外面:褐灰色 内面:にぶい黄橙色	長石、石英、角閃石を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部タタキ、脚部ハケ 内面:口縁部ハケ、脚柱部ナデ		P 3258
第265図 34	9－S0017	器台	(14.7)	脚径 (15.9)	22.8		内外面ともに にぶい黄橙色	3.5㎜以下の石英と1.5㎜以下の長石、金雲母、角閃石を含む	良好	外面:ハケ 摩滅し不明瞭 内面:口縁部ハケ、脚部ナデ 裾部ハケ・ヨコナデ		P 3591
第265図 35	9-S0017	台付鉢	(19.8)	脚径 (11.6)	13.4		外面:灰褐色 内面:にぶい黄橙色	長石、石英、赤色酸化粒と、少量の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部磨滅し調整不明、底部ハケ、脚部ハケ 内面:口縁～底部剥離、脚柱部ヘラケズリ、裾部ハケ	3方スカシ	P 3277
第265図 36	9-S0017	高杯 杯部	(31.3)		(9.0)		内外面ともに 橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ヘラミガキ、杯部ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ後ヘラミガキ、杯部ヘラミガキ		P 3266
第265図 37	9-S0017	高杯 脚部		脚径 (16.0)	(5.7)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨滅し不明瞭 内面:ハケの痕跡 磨滅し不明瞭	スカシ	P 3285
第265図 38	9-S0017	高杯 脚部		脚径 15.2	(15.9)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:脚柱部絞り痕、裾部ハケ	3方スカシ 脚部黒斑	P 3257
第265図 39	9-S0017	高杯 脚部		脚径 15.0	(14.0)		内外面ともに 橙色	長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 磨滅し不明瞭 内面:脚柱部絞り痕、裾部ハケを施すが磨滅	2方スカシ 外面黒斑	P 3282
第265図 40	9-S0017	台付鉢 脚部		脚径 (11.3)	(5.9)		内外面ともに 橙色	長石を含む	良好	外面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭 内面:磨滅・剥離により調整不明	2次焼成	P 3276
第265図 41	9-S0017	台付鉢？ 脚部		脚径 12.1	(7.5)		内外面ともに にぶい橙色	長石、石英を含む	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨 内面:脚柱部ヘラケズリ、裾部ハケ	3方スカシ	P 3260
第265図 42	9-S0017	台付鉢 脚部		脚径 (11.3)	(5.6)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:杯部ヘラミガキ、裾部ハケ後ナデ	裾外端面黒斑	P 3293
第265図 43	9-S0017	台付鉢 脚部		脚径 (11.6)	(5.4)		外面:明赤褐色 内面:にぶい褐色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:脚部ハケ	2次焼成	P 3273
第265図 44	9-S0017	台付鉢 脚部		脚径 (10.7)	(4.3)		内外面ともに にぶい橙色	長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキ 内面:杯部ヘラミガキ、脚部ハケ後ヨコナデ	3方スカシ	P 3256
第265図 45	9-S0017	韓式系土器 耳付壺			(5.0)		内外面ともに 橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ		P 3901
第266図 1	13-S0002	壺 口縁部	(15.4)		(4.8)		内外面ともに 橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ 内面:口縁部ハケ 頸部ハケ		P 3487
第266図 2	13-S0002	壺 口縁部	(16.4)		(8.7)		内外面ともに 橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ 内面:ハケ		P 3627
第266図 3	13-S0002	壺 口縁部	(12.1)		(9.1)		内外面ともに 灰黄褐色	長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヘラミガキ、肩部ハケ後ヘラミガキ 内面:口縁部ハケ、肩部ヘラナデ・ハケ	口縁外端面刻目	P 3650
第266図 4	13-S0002	複合口縁壺 口縁～頸部	(22.9)		(19.0)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ・ハケ 頸部ハケ後ナデ		P 3619
第266図 5	13-S0002	小型直口壺	(10.6)		(12.1)	(15.2)	内外面ともに 浅黄橙色	長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヘラミガキ、肩部ハケ、磨滅し不明瞭 内面:口縁部磨滅、肩部指押さえ、体部ハケ・ナデ		P 3662
第266図 6	13-S0002	壺 口縁部	(19.4)		(3.4)		外面:黒色 内面:にぶい黄橙色	長石、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部磨滅、頸部ヘラミガキ 内面:頸部ヘラミガキ	内外面口縁部波状紋 内面黒斑	P 3648

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(27)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第266図 7	13-S0002	壺	(12.4)		(23.1)	(23.9)	内外面ともに 明赤褐色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ミガキ、体部タタキ後細かいヘラミガキ、底部付近ヘラケズリ後ミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部～体部中位指押さえ、体部下位ハケ		P 3634
第266図 8	18-S0502	長頸壺 口縁～頸部	(7.0)		(14.3)		内外面ともに 灰白色	2㎜以下の長石、石英を含む	良好	外面:ヘラミガキ 内面:口縁部ハケ、頸部ヘラケズリ		P 4147
第266図 9	13-S0002	甕 口縁～体部	(29.0)		(16.3)		内外面ともに 橙色	長石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、体部ケズリ後ヘラナデ	山陰系 肩部波状紋	P 3636
第266図 10	13-S0002	甕 口縁～体部	(29.8)		(13.9)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面:口縁部ハケ、体部ハケ後一部ナデ	外面媒付着	P 3649
第266図 11	13-S0002	甕 口縁～体部	(21.4)		(10.2)	(20.2)	外面:にぶい黄橙色 内面:灰黄褐色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ・ナデ、頸部～体部ハケ 内面:口縁部ハケ後ナデ、頸部～体部ハケ	外面黒斑	P 3646
第266図 12	13-S0002	甕 口縁～体部	(21.1)		(11.5)		内外面ともに にぶい橙色	2㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部タタキ後ハケ、体部ハケ、磨滅 内面:ハケ	外面媒付着	P 3665
第266図 13	13-S0002	甕 口縁～体部	(20.8)		(19.8)	(13.8)	内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ハケ、体部ハケ後一部ナデ	外面媒付着	P 3623
第266図 14	13-S0002	複合口縁甕 口縁部	(15.0)		(3.5)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	山陰系 外面媒付着	P 3652
第266図 15	13-S0002	甕 口縁～肩部	(13.8)		(3.2)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タタキ 内面:口縁部ハケ、肩部ヘラ工具によるかきあげ	外面媒付着	P 3625
第266図 16	13-S0002	甕 口縁～肩部	(13.9)		(5.5)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 肩部ナデ・ハケ 内面:口縁部ヨコナデ・ハケの痕跡、肩部ナデ		P 3637
第266図 17	13-S0002	甕	(14.4)		15.8	(14.8)	内外面ともに 灰黄褐色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部上位タタキ、下位～底部タタキ後ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後一部ヘラナデ		P 3624
第266図 18	13-S0002	甕 底部		3.6	(3.3)		内外面ともに 灰黄色	長石、石英を含む	良好	外面:タタキ 内面:ハケ		P 3620
第266図 19	13-S0002	甕 底部		(3.6)	(2.4)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:体部タタキ 底部ナ 内面:ハケ		P 3644
第266図 20	13-S0002	甕 底部			(4.0)		内外面ともに にぶい橙色	6㎜以下の長石と、石英、金雲母を含む	良好	外面:ナデ・粗いハケの痕跡 内面:ハケ	2次焼成 外面媒付着	P 3663
第267図 21	13-S0002	高杯 杯部	(29.0)		(8.4)		内外面ともに にぶい橙色	長石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:ハケ後ヘラミガキ		3323
第267図 22	13-S0002	高杯 杯部	(32.6)		(9.6)		内外面ともに 灰褐色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:ハケ後ヘラミガキ	口縁部黒斑 図上復元	P 3667
第267図 23	13-S0002	高杯 杯部			(4.3)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:ハケ後ヘラミガキ	杯底面穿孔	P 3632
第267図 24	13-S0002	高杯 脚柱部			(3.9)		内外面ともに 橙色	長石、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:脚柱部ナデ・ハケ	4方スカシ	P 3621
第267図 25	13-S0002	高杯 脚部		脚径 (18.0)	(13.2)		内外面ともに 橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:脚柱部ハケ後ヘラナデ 裾部ハケ後ヘラケズリ 内面:脚柱部ヘラケズリ、裾部ハケ	3方スカシ	P 3635
第267図 26	13-S0002	高杯 脚部		脚径 (16.40)	(13.4)		内外面ともに 橙色	長石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:脚柱部ハケ後ヘラミガキ、裾部ハケ後ヘラナデ 内面:脚柱部絞り痕、裾部ケズリ・ハケ	3方スカシ	P 3647
第267図 27	13-S0002	器台 受部	(9.3)		(3.3)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅顕著により不明 ヘラミガキ痕 内面:磨滅顕著により不明		P 3643

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(28)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第267図 28	13-S0002	鼓形器台			(5.1)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石、石英、金雲母 赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:ヘラナデ・ヘラケズリ	山陰系	P 3660
第267図 29	13-S0002	特殊脚柱			(4.2)		内外面ともに にぶい黄橙色	3㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 内面:ハケ後ナデ	貼付突帯	P 3661
第267図 30	18-S0502	器台	13.0		(7.7)		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ 内面:口縁部ハケ、脚部ナデによるかきあげ		P 4154
第267図 31	18-S0502	土製支脚		脚径 (8.0)	(8.3)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:タタキ後ナデ 内面:ナデ	外面丹塗り痕	P 4155
第267図 32	13-S0002	台付鉢 口縁～体部	(28.8)		(7.4)		内外面ともに にぶい橙色	長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、指頭圧痕、体部ハケ 内面:磨滅し調整不明	外面媒付着	P 3654
第267図 33	13-S0002	脚台 脚部		脚径 (10.7)	(4.1)		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜前後の長石を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:杯部磨滅、脚部ハケ	裾端部黒斑	P 3657
第267図 34	13-S0502	脚台 脚部		脚径 (13.3)	(6.1)		内外面ともに 浅黄橙色	3㎜以下の長石と石英を含む	良好	外面:杯部ヘラミガキ、裾部ハケ 内面:杯部ヘラミガキ、脚部ハケ後ヨコナデ	裾部内外面ともに黒斑	P 4153
第267図 35	13-S0002	脚台 脚部		脚径 (17.9)	(4.4)		内外面ともに 橙色	長石、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:杯部ヘラミガキ、脚部ハケ後ヘラミガキ 内面:杯部ナデ、脚部ハケ後ナデ	2次焼成	P 3658
第267図 36	13-S0002	脚台 脚部		脚径 (11.6)	(2.2)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヨコナデ後ヘラミガキ 内面:杯部ヘラミガキ 裾部ハケ後ナデ		P 3659
第267図 37	13-S0002	手づくね土器 鉢	(5.6)		7.1	(8.4)	内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラナデか 内面:ナデ・指押さえ		P 3629
第267図 38	13-S0002	手づくね土器 片口鉢	(7.2)	(2.5)	5.8		内外面ともに 浅黄橙色	長石、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ナデ・指押さえ ハケ 内面:ナデ・指押さえ ハケ		P 3630
第267図 39	13-S0002	手づくね土器 鉢	(5.1)		3.2		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の長石と、石英、金雲母 赤色酸化粒を含む	良好	外面:ナデ・指押さえ 内面:ナデ	外面黒斑	P 3666
第267図 40	18-S0502	鉢	(13.5)		8.9		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と石英、金雲母を含む含む	良好	外面:口縁部指押さえ、体部～底部ヘラケズリ 内面:口縁部ハケ後体部ナデ	外面黒斑	P 4152
第267図 41	13-S0002	鉢	(27.0)		(6.9)		内外面ともに にぶい橙色	長石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ヘラナデ 一部タタキ痕 内面:ハケ	口縁外端面黒斑	P 3653
第267図 42	13-S0002	甑 底部		(2.0)	(8.3)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭 内面:ハケ 剥離	底部穿孔	P 3641
第267図 43	13-S0002	壺 底部			(8.4)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と石英、角閃石 金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部ハケ・ナデ 底部ヘラケズリ 内面:ハケ後ナデ		P 4148
第267図 44	13-S0002	壺 底部		(5.4)	(14.8)		外面:赤色 内面:灰黄褐色	長石、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ナデか 内面:ハケ後板ナデ	2次焼成	P 3651
第267図 45	13-S0002	壺 底部			(17.8)		内外面ともに にぶい橙色	2㎜以下の長石と石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部ハケ後ヘラナデ 底部付近ヘラケズリ 内面:体部ハケ後ナデ 底部付近ナデ	外面黒斑	P 3640
第267図 46	13-S0002	土錘			(4.8)	厚 1.5	浅黄橙色	2㎜以下の長石を含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ	2か所に穿孔	P 3664
第267図 47	13-S0002	土製勾玉			(4.8)	厚 0.9	にぶい赤褐色	1㎜以下の長石、石英を含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ		P 3669
第267図 48	13-S0002	土製勾玉			5.1	厚 1.5	橙色	長石、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ		P 3622
第268図 49	13-S0002	甕 口縁～肩部	(40.4)		(8.9)		内外面ともに 浅黄橙色	3㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁～肩部ハケ 内面:ハケ	頸部貼付突帯	P 4150

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(29)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第268図 50	13-S0002	甕 口縁～体部	(46.0)		(20.3)		内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケの痕跡、体部ハケ 内面:口縁部ハケ、頸部～体部ハケ後ヘラナデ	頸部刻目付貼付突帯 外面黒斑	P 4151
第269図 1	9-S0016	複合口縁壺 頸部			(8.8)		外面:浅黄橙色 内面:橙色	長石と石英を含む	良好	外面:ハケ後一部ナデ 内面:ハケ後一部ナデ	頸部刻目付突帯	P 4023
第269図 2	9-S0016	小型丸底壺	7.6		8.6	9.6	内外面ともに にぶい黄橙色	長石、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁～体部ヘラミガキ 底部ヘラケズリ 内面:口縁部磨滅 体部ハケ		P 4025
第269図 3	9-S0016	鉢	12.0		7.2		外面:にぶい橙色 内面:にぶい橙・黒	4㎜以下の石英と1～2㎜以下長石・赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ	外面媒付着	P 4021
第269図 4	9-S0016	高杯 杯部	(35.6)		(5.0)		外面:にぶい黄橙色 内面:黒褐色	長石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキ 摩滅し不明瞭 内面:磨滅し調整不明		P 4032
第269図 5	9-S0016	器台	(11.2)	脚径 (12.4)	16.8		外面:にぶい橙色 内面:褐灰色	長石、石英、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部付近指押さえ ハケ 内面:口縁部ハケ、脚柱部ナデ、裾部ハケ	外面媒付着	P 4034
第269図 6	9-S0016	器台	15.0	脚径 18.0	23.3		内外面ともに にぶい黄橙色	長石と石英を含む	良好	外面:ハケ 内面:口縁部ハケ、脚柱部ナデ、裾部ハケ	口縁外端面刻目	P 4022
第269図 7	9-S0016	甕 口縁～体部	(26.8)		(9.8)		外面:にぶい黄橙色 内面:灰褐色	長石、石英、角閃石を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部タタキ後ハケ 内面:ハケ、一部ナデ	外面媒付着	P 4027
第269図 8	9-S0016	甕 口縁～体部	(37.6)		(10.7)		内外面ともに にぶい黄橙色	長石、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ後一部ヘラナデ	頸部貼付突帯	P 4028
第269図 9	9-S0016	甕 口縁～体部	(39.4)		(30.6)	(40.1)	外面:灰黄褐色 内面:淡赤褐色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ、一部ナデ 内面:口縁部ハケの痕跡、体部ハケ	内外面黒斑 頸部交差する刻目付貼付突帯	P 4026
第269図 10	9-S0016	甕 底部		5.0	(4.8)		外面:にぶい黄橙色 内面:褐灰色	長石と金雲母を含む	良好	外面:体部ハケ、一部ヘラナデ、底部ハケ 内面:ナデ		P 4030
第269図 11	9-S0016	甕 底部		4.6	(2.7)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部ハケ 底部ハケ後ナデ 内面:ハケ		P 4036
第269図 12	9-S0016	壺 底部		(8.0)	(8.0)		外面:橙色 内面:赤橙色	長石と石英を含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ		P 4024
第269図 13	9-S0016	甕 底部		(5.0)	(9.4)		外面:浅黄橙色 内面:灰黄褐色	長石と金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ナデか 内面:ハケ後ナデか		P 4029
第269図 14	9-S0016	甕 底部		(5.2)	(10.5)		内外面ともに 浅黄橙色	長石と金雲母を含む	良好	外面:体部ハケ、底部付近ケズリ、底部ナデ 内面:ナデ	外面赤色顔料	P 3238
第269図 15	9-S0016	甕 底部		(8.2)	(16.0)		内外面ともに 浅黄橙色	長石、石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:体部ハケ 底部ナデ 内面:ハケの痕跡 摩滅し不明瞭		P 3237
第273図 1	14-S0066	鉢	(25.0)		(9.6)		外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 体部下半ヘラケズリ 外面:口縁部ヨコナデ 体部ハケ後ヘラナデ		P 2180
第273図 2	14-S0066	壺 底部			(7.1)		外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄橙色	角閃石を少量と、長石、石英、赤色酸化粒を多く含む	普通	外面:摩滅により調整不明 内面:摩滅し不明瞭 ハケの痕跡		P 2179
第273図 3	14-S0066	壺 底部			(11.3)		外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケを施すが摩滅し不明瞭 内面:ハケを施すが摩滅し不明瞭	腹部刻目付き貼付突帯	P 2178
第276図 1	19-S0007	小型直口壺			(12.5)	(14.1)	内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の石英と金雲母を多くと、1.5㎜以下の長石を少量含む	普通	外面:口縁～肩部ハケ、体部～底部ヘラミガキか 内面:口縁部磨滅、体部ナデ 底部周辺ハケ	外面媒付着	P 2553
第276図 2	19-S0007	小型直口壺	9.8		7.7		内外面ともに にぶい黄橙、黒褐	3mm以下の長石、2mm以下の石英、0.8mm以下の金雲母を少量含む		外面:口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ・胴部から底部ヘラミガキ 内面:口縁部ヘラミガキ、胴部から底部ヘラミガキ	外面媒付着	P 2559
第276図 3	19-S0007	壺 口縁部	(10.4)		(4.9)		外面:橙色 内面:にぶい橙色	1～2㎜前後の長石、石英と赤色酸化粒、金雲母を少量含む	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨滅により不明瞭 内面:ヘラミガキ	外面黒斑	P 2541

表9 BⅡ地区 出土土器観察表(30)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第276図 4	19-S0007	脚台付壺	(13.6)		(12.9)	(16.2)	外面:浅黄色 内面:褐灰色	1～2㎜前後の長石、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部～底部ヘラナデ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部～底部ハケ	外面付着物	P 2535
第276図 5	19-S0007	壺 口縁～体部	(11.7)		(12.7)	(19.7)	内外面ともに にぶい橙色	1㎜前後の長石、石英と微粒の金雲母を含む	良好	外面:タタキ後体部中位よりハケ 内面:ハケ	外面黒斑、媒付着	P 2542
第276図 6	19-S0007	壺 口縁～体部	(11.6)		(15.6)		内外面ともに にぶい橙色	1～4㎜以下の長石、石英、金雲母と、1㎜以下の角閃石を少量含む	普通	外面:口縁～体部中位ハケ体部下位ヘラケズリ 内面:ハケ		P 2551
第276図 7	19-S0007	壺 口縁～体部	19.6		(27.7)	27.5	外面:浅黄橙色 内面:灰白色	1㎜以下の石英、金雲母を少量と、2㎜以下の長石、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部上位タタキ後ハケ、下位ケズリ後粗いハケ 内面:口縁部ハケ、頸部ナデ体部ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 2540
第276図 8	19-S0007	壺	(20.8)		(10.5)		内外面ともに にぶい橙色	2～3㎜の長石、石英と赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ハケ後ヨコナデ 内面:ハケ		P 2528
第276図 9	19-S0007	複合口縁壺 口縁～肩部	(23.9)		(10.2)		内外面ともに にぶい橙色	1～4㎜以下の長石、石英、金雲母を多くと、1.5㎜以下の角閃石を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、頸部～肩部ハケ 内面:ハケ一部ヨコナデ		P 2539
第276図 10	19-S0007	複合口縁壺 口縁～体部	(21.7)		(13.6)		内外面ともに 浅黄橙色	2～5㎜以下の長石と石英、2㎜以下の金雲母、赤色酸化粒を含む	普通	外面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、体部ハケ、磨滅 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、肩部指圧痕、体部ハケ	頸部刻目貼付突帯 外面黒斑	P 2552
第276図 11	19-S0007	複合口縁壺	(21.2)		32.3	(25.7)	外面:にぶい黄橙色 内面:褐灰色	1～2㎜以下の長石、赤色酸化粒と、1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、頸部～底部付近ハケ、腹部ハケ後ヘラケズリ、底部タタキ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、肩部ナデ、体部ハケ後ナデ、底部ナデ・指押さえ	口縁下端部刻目 外面黒斑	P 2523
第277図 12	19-S0007	甕 口縁～体部	(20.0)		(17.4)	(22.6)	内外面ともに 浅黄橙色	1～3㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ 内面:口縁部ハケ体部ハケ後指押さえ	外面媒付着	P 2555
第277図 13	19-S0007	甕 口縁～体部	(20.8)		(19.4)	(19.4)	内外面ともに 灰黄褐色	1㎜以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部指押さえ、頸部～体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部～体部ハケ	外面媒付着 内外面媒付着	P 2556
第277図 14	19-S0007	甕 口縁～体部	(25.6)		(13.7)	(28.0)	内外面ともに にぶい橙色	1㎜以上の長石、石英と1㎜以下の金雲母を含む	普通	外面:口縁部ハケ、体部タタキ後ハケ 内面:口縁部ハケ、頸部ナデ体部ハケ	内面媒付着	P 2525
第277図 15	19-S0007	甕 口縁～頸部	(36.2)		(11.0)		内外面ともに 明赤褐色	1㎜以下の○○を含む	良	外面:口縁部ハケ 内面:口縁部ハケ、頸部ナデ肩部ハケ	頸部刻目付貼付突帯	P 2526
第277図 16	19-S0007	甕 口縁～体部	(25.6)		(10.5)		内外面ともに にぶい橙色	5㎜以下の長石と4㎜以下の石英、0.5㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ体部ハケ 内面:口縁部ハケ体部ハケ・ナデ	頸部貼付突帯	P 2557
第277図 17	19-S0007	甕 口縁～体部	(30.5)		(37.9)	(30.1)	内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の角閃石、0.5㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ後ハケ体部ハケ 内面:ハケ	頸部貼付突帯	P 2554
第277図 18	19-S0007	甕	27.4		41.1	29.6	内外面ともに 明黄褐色	3㎜以下の長石を多くと、2㎜以下の赤色酸化粒、1.5㎜以下の石英、角閃石、金雲母を含む	不良	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケを施すが磨滅 内面:口縁部ヨコナデ、体部ハケを施すが磨滅	外面黒斑 頸部貼付突帯	P 2543
第277図 19	19-S0007	壺 体部～底部			(19.1)		外面:灰黄色 内面:にぶい黄橙色	?	良	外面:胴部ハケ 内面:胴部ハケ		P 2560
第278図 20	19-S0007	甕	(14.0)		15.3	(12.6)	外面:灰黄色 内面:にぶい黄橙色	3㎜以下の長石と、2㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後一部指押さえ底部付近ヘラケズリ 内面:ハケ、底部付近ヘラケズリ		P 2524
第278図 21	19-S0007	甑		1.8	(5.0)		内外面ともに にぶい橙色	1㎜以下の長石、石英、角閃石微粒の金雲母を含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ		P 2562
第278図 22	19-S0007	鉢	(20.4)		(11.2)		内外面ともに にぶい橙色	1㎜以下の長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、下位ケズリ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	外面口縁部赤色顔料痕	P 2544
第278図 23	19-S0007	鉢	(14.4)	5.2	8.2		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜前後の長石、石英と1㎜以下の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁～体部タタキ後ナデ、底部ナデ 内面:口縁部ハケ、体部ハケ後ナデ、底部工具痕	外面黒斑	P 2527

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(31)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第278図 24	19-S0007	鉢	(22.0)		(9.2)		内外面ともに にぶい橙色	5㎜以下の長石、石英、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラケズリを施すが磨滅し不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭		P 2533
第278図 25	19-S0007	鉢	(17.8)		8.6		外面:浅黄褐色 内面:灰黄褐色	2～3㎜大の石英と、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ハケ 内面:磨滅し調整不明	外面黒斑	P 2532
第278図 26	19-S0007	鉢	(22.9)		12.9		内外面ともに にぶい黄橙色	5㎜以下の長石と石英、微粒の金雲母を多く含む	良好	外面:ハケ 内面:ハケ	外面媒付着	P 2558
第278図 27	19-S0007	手づくね土器 鉢	7.2		4.0		内外面ともに 黄灰色	1～2㎜以下の長石と石英、微粒の金雲母を含む	良好	外面:指押さえ 内面:指押さえ		P 2565
第278図 28	19-S0007	壺 底部		5.2	(6.8)		外面:明黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1～2㎜以下の長石と石英、金雲母を含む	良好	外面:タタキ後ハケ、一部ヘラケズリ 内面:クモの巣状ハケ 摩滅し不明瞭		P 2529
第278図 29	19-S0007	甕 底部			(10.5)		外面:灰白色 内面:明褐灰色	1～2㎜前後の長石と石英を含む	良好	外面:体部タタキ後ハケ・ナデ、底部ナデ 内面:ヘラナデ	内外面媒付着	P 2530
第278図 30	19-S0007	脚台 脚部		脚径 11.0	(6.9)		内外面ともに にぶい黄橙色	1～3㎜大の長石と、1㎜以下の石英、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ後ナデ 摩滅し不明瞭 内面:杯部クモの巣状ハケ 脚部ナデ・指押さえ		P 2561
第278図 31	19-S0007	脚台 脚部		脚径 (17.2)	(5.4)		内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石と石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ 摩滅し一部不明瞭 内面:杯部磨滅し不明瞭 脚部ハケ	内面2次的な付着物	P 2536
第278図 32	19-S0007	高杯 杯部	(19.8)		(9.1)		外面:にぶい橙色 内面:橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:ハケ後ヘラミガキ 摩滅し不明瞭 内面:ハケを施すが磨滅し不明瞭	外面黒斑	P 2545
第278図 33	19-S0007	高杯 杯部	(18.0)		(5.7)		内外面ともに 橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母赤色酸化粒を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明	杯屈曲部刻目丹塗りか	P 2546
第278図 34	19-S0007	高杯 杯部	(19.4)		(6.5)		内外面ともに 浅黄橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:ハケ後一部ヘラミガキ		P 2564
第278図 35	19-S0007	高杯 脚部		脚径 (12.6)	(9.3)		外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい橙色	1㎜以下の長石と石英、角閃石を含む	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨滅し不明瞭 内面:脚柱部ヘラケズリ、裾部ハケ、磨滅	上下2段一組の3方スカシ	P 2548
第278図 36	19-S0007	高杯 脚部		脚径 (12.0)	(12.1)		内外面ともに 浅黄橙色	1～2㎜大の長石、石英、赤色酸化粒	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨 内面:脚柱部絞り痕、裾部ハケ		P 2537
第278図 37	19-S0007	高杯 脚部		脚径 (15.5)	(13.5)		外面:明褐色 内面:橙色	1㎜以下の長石、金雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ヘラミガキを施すが磨滅し不明瞭 内面:脚柱部絞り痕、裾部ハケ	3方スカシ	P 2547
第278図 38	19-S0007	高杯 脚部		脚径 (15.2)	(14.1)		内外面ともに 橙色	1㎜以下の金雲母を多くと、長石石英を含む	良好	外面:脚部ヘラミガキ 裾部ミガキ後ハケ 内面:脚柱部絞り痕 裾部ハケ	3方スカシか	P 2531
第278図 39	19-S0007	土製支脚	6.7	脚径 (12.4)	(12.7)		内外面ともに 橙色	2.3mm以下の長石、1.5㎜以下の石英、1mm以下の金雲母を多く含む	良好	外面:タタキ 内面:ナデ・指押さえ	穿孔	P 2538
第279図 40	19-S0007	小型器台	(11.8)	9.8	8.6		内外面ともに にぶい橙色	1.5mm以下の長石、1.8㎜以下の石英、1mm以下の金雲母、0.8mm以下の赤褐色粒を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、杯部脚裾部ヘラミガキ 内面:杯部ハケ後ヘラミガキ 脚裾部ナデ・ヨコナデ	外面媒付着	P 2549
第279図 41	19-S0007	器台	(13.6)		(8.1)		内外面ともに にぶい橙色	1㎜以下の長石、石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ハケ 脚部ハケ後ナデ 内面:口縁部ハケ 脚部ナデ・指押さえ		P 2534
第279図 42	19-S0007	器台	13.1		(17.0)		内外面ともに にぶい橙色	2.5mm以下の長石、5mm以下の石英、1mm以下の金雲母をやや多く含む	良好	外面:口縁部ハケ 脚部タタキ 内面:口縁部ハケ 脚部ハケ・ナデ		P 2550
第279図 43	19-S0007	器台	12.2	脚径 (16.2)	(18.0)		外面:にぶい橙色 内面:にぶい黄橙色	2mm以下の石英、長石、1mm以下の角閃石、雲母を含む	良好	外面:受部ハケメ後ヨコナデ 胴部ハケメ、裾部ナデ 内面:受部ハケメ後ヨコナデ 胴部ナデ、裾部ハケメ		P 2522
第279図 44	19-S0007	器台	11.4	脚径 16.4	17.8		内外面ともに にぶい橙色	7mm以下の石英、3mm以下の長石、2mm以下の金雲母を含む	良好	外面:受部ハケメ、端部はヨコナデ、胴から裾部タタキ後ハケメ 外面:受部ハケメ、端部はヨコナデ、胴から裾部タタキ後ハケメ		P 2521
第279図 45	19-S0007	器台	12.2	脚径 (13.3)	16.6		内外面ともに にぶい黄橙色	3mm以下の長石、2mm以下の石英、1mm以下の金雲母をやや多く含む。1.5mm以下の赤褐色粒を少量含む	良好	外面:受部ナデ,胴部タタキ後ナデ、脚裾部ナデ 内面:受部から胴部から脚裾部ナデ	外面媒付着	P 2563

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(32)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第290図1	10-S0002	土師器 皿	10.2		1.5		内外面ともに 灰白色	1～3㎜大の石英と1㎜以下の長石、金雲母を含む	良好	外面:ヨコナデ 底部ヘラ切り後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ 底部ナデ		P 1035
第290図2	10-S0002	土師器 皿	(9.8)		1.8		外面:明褐灰色 内面:にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と、0.1ミリ以上の角閃石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 底部ナデか 内面:口縁部ヨコナデ 底部ナデ	燈明皿か 内面煤付着	P 1036
第290図3	10-S0002	土師器 杯	13.6		3.5		内外面ともに 灰白色	2㎜以下の石英と、1㎜以下の長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 底部ヘラ切り後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ 底部ナデ		P 1032
第290図4	10-S0002	土師器 杯	13.9		3.4		内外面ともに 灰白色	1㎜以下の石英、長石、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 底部不定方向のナデ 内面:口縁部ヨコナデ 底部ナデ		P 1033
第290図5	10-S0002	土師器 杯	14.1		3.4		内外面ともに 灰白色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の石英、金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 底部ヘラ切り後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ 底部ナデ		P 1031
第290図6	10-S0002	土師器 椀	15.5	高台径 (7.0)	5.7		内外面ともに 灰白色	5㎜以下の長石と石英、1㎜以下の金雲母を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ 底部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ 底部ヨコナデ	貼り付け高台	P 1034
第291図1	14-S0039	黒色土器 椀	(14.6)		(4.5)		内外面ともに 黒色	顕著な砂粒なし	良好	外面:ヘラケズリ後ミガキ 内面:ヘラミガキ		P 1765
第291図2	14-S0039	黒色土器 椀		高台径 (7.4)	(1.7)		内外面ともに 黄灰色	2㎜以下の長石を含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ		P 1766
第291図3	14-S0039	瓦質土器 鍋	(42.2)		(17.6)		内外面ともに 黄灰褐色	2.5㎜以下の長石を多く含む	良好	外面:口縁部ナデ、体部ヘラナデ及びナデ 内面:口縁～体部ナデ 摩滅し不明瞭	無文土器	P 1763
第293図	14-S0002	土師器 椀		高台径 (7.0)	(2.0)		内外面ともに 淡黄橙色	2㎜以下の長石を少量含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ		P 1106
第293図1	14-S1513	白磁 椀	(14.6)		(2.9)		内外面ともに 灰白色	微粒の黒色砂粒を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ		P 2138
第293図2	14-S1513	白磁 椀	(15.0)		(3.0)		内外面ともに 灰白色	微粒の黒色砂粒を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ		P 2140
第293図3	14-S1513	白磁 椀	(14.8)		(5.4)		内外面ともに 灰白色	微粒の黒色砂粒を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ		P 2142
第293図4	14-S1513	白磁 椀	(16.0)		(4.9)		内外面ともに 灰白色	微粒の黒色砂粒を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面一部露胎	P 2141
第293図5	14-S1513	白磁 椀	(14.6)		(4.7)		内外面ともに 灰白色	微粒の黒色砂粒を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面一部露胎	P 2139
第293図6	14-S1513	白磁 椀	(17.0)		(5.0)		内外面ともに 灰白色	微粒の黒色砂粒を含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ		P 2137
第294図1	18-S0014	白磁 椀	(14.0)		(2.0)		内外面ともに 灰白色	顕著な砂粒含まない	良好	外面:ナデ 内面:ナデ	内外面ともに貫入	P 2462
第294図2	18-S0014	白磁 鉢	(16.0)		(1.8)		内外面ともに 灰白色	顕著な砂粒含まない	良好	外面:ナデ 内面:ナデ	内外面ともに貫入	P 2463
第294図3	18-S0014	白磁 皿	(14.0)		(1.7)		内外面ともに 灰白色	顕著な砂粒含まない	良好	外面:ナデ 内面:ナデ	内外面ともに貫入	P 2461
第294図4	18-S0014	土師器 椀		高台径 8.8	(3.0)		内外面ともに 灰白色	顕著な砂粒含まない	良好	外面:回転ヘラ切り 内面:ナデ		P 2464
第295図1	18-S0016	土師器 杯	(15.0)		4.3		内外面ともに 灰白色	1.5㎜以下の石英、長石と、1㎜以下の角閃石を含む	良好	外面:磨滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明		P 2479
第295図2	18-S0016	灰釉陶器 壺			(6.7)		内外面ともに 灰白色	顕著な砂粒含まない	良好	外面:ナデ 内面:ナデ		P 2480

表９ ＢⅡ地区 出土土器観察表(33)　　法量における(　)内数値は、口径・底径は復元径、器高は残存高

挿図番号	出土遺構	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	最大径	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
第299図 1	19-SH2	粗製深鉢 口縁部			(3.3)		外面:にぶい黄橙色 内面:黒褐色	1㎜以上の長石、石英、金雲母を含む含む	やや不良	外面:ナデ 摩滅し不明瞭 内面:磨滅し調整不明	口縁直下隆起による波状紋	縄P0140
第299図 2	13-S0002	粗製深鉢 口縁部			(4.8)		内外面ともに にぶい黄色	1㎜以上の長石を多くと、1㎜以下の角閃石を含む	良好	外面:ヘラミガキ 摩滅し不明瞭 内面:ナデ	口縁端部刻目	縄P0102
第299図 3	14-S1012	粗製深鉢 口縁部			(5.1)		外面:橙色 内面:浅黄色	2㎜程の長石と1㎜以下の石英、角閃石、金雲母を含む	やや不良	外面:ヨコナデ 板条痕 内面:磨滅し不明瞭 ナデか	口縁端部刻目	縄P0115
第299図 4	14-S0051	深鉢 底部		(10.4)	(4.1)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜程の長石と石英,1㎜以下の角閃石を含む	良好	外面:ナデ 内面:ナデ		縄P0117
第299図 5	13-S0002	粗製深鉢 口縁部			(2.4)		外面:浅黄色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の長石、石英、角閃石と微細な金雲母を含む	やや良好	外面:摩滅し調整不明 内面:磨滅し調整不明	山形口縁部 口縁直下に列点紋、口縁外端面沈線3条	縄P0103
第299図 6	13-S0002	精製浅鉢？ 口縁部			(2.8)		内外面ともに にぶい黄橙色	1㎜以下の長石と石英、金雲母赤色酸化粒を含む	やや良好	外面:磨滅し不明瞭 内面:一部ヘラミガキ	口縁外端面沈線3条 棒状工具による刺突	縄P0104
第299図 7	18G包含層	深鉢 口縁部			(2.8)		外面:にぶい黄橙色 内面:褐灰色	1㎜程の長石、石英、角閃石、金雲母を含む	やや不良	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	口縁部沈線2条	縄P0145
第299図 8	18-S0500	深鉢 口縁部			(3.2)		外面:灰黄褐色 内面:黒褐色	1㎜以下の長石、角閃石、金雲母、赤色酸化粒を含む	やや不良	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	山形口縁部 口縁波頂部入組渦紋	縄P0138
第299図 9	14G包含層	浅鉢 口縁部			(2.5)		内外面ともに にぶい黄橙色	2㎜以下の長石、石英と1㎜以下の金雲母、角閃石、赤色酸化粒を含む	やや不良	外面: 内面:マメツし不明瞭	沈線間に𠦂縄文 内面沈線	縄P0144
第299図 10	14-S1511	粗製深鉢 口縁部			(5.0)		外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	2㎜以下の長石と、1㎜以下の石英、金雲母、角閃石を含む	やや不良	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラ工具による条痕	山形口縁部 外面沈線4条 内面沈線1条	縄P0119
第302図 4	15G包含層	複合口縁壺 口縁～体部	(22.7)		(22.3)	34.8	内外面ともに 橙色	1～4㎜大の長石、2㎜以下の石英、1㎜以下の赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ、頸部ハケ後ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ハケ、頸部～体部ハケ後ヘラナデ	外面黒斑 媒付着 頸部刻目付突帯	P 2939
第302図 5	14G-5B 包含層	異形壺	(17.0)		(26.2)	24.0	内外面ともに 浅黄橙色	2㎜以下の長石と、0.5㎜以下の石英を含む	良好	外面:口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ・ナデ、体部下ナデ 内面:口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ・ナデ、体部下ハケ後ナデ		P 2933
第302図 6	19G包含層	異形土器	台径 1.5		(8.6)		内外面ともに 浅黄色	1㎜以下の長石、角閃石、金雲母を含む	普通	外面:ハケ 内面:ナデ	外面黒斑	P 2943
第302図 7	14G-3H 包含層	手焙り型土器 開口部			(12.0)		内外面ともに にぶい黄橙色	石英、雲母、赤色酸化粒を含む	良好	外面:ハケ状工具による竹管状の刺突 内面:ナデ	近江系 体部2条一組の沈線	P 2932
第302図 8	20G包含層	小型甕	(14.4)		(12.8)	(15.7)	外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄橙色	1㎜以下の金雲母を多くと長石、石英、を含む	良好	外面:口縁～体部原体の異なるハケ 内面:口縁部ハケ、体部細かいハケ	腹部刻目付貼付突帯 外面黒斑・媒付着	P 2944
第302図 9	15G包含層	長胴甕 口縁～体部	(22.6)		(31.7)	(26.6)	外面:浅黄橙色 内面:にぶい橙色	1㎜以下の長石、石英、角閃石、赤色酸化粒を含む	良好	外面:口縁部ハケ、体部タタキ後ナデ、一部粗い板状工具によるハケ・ケズリ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ、一部ナデ	外面体部黒斑	P 2940
第302図 10	15G包含層	把手付鉢	(17.6)		(9.5)		外面:黒褐色 内面:にぶい赤褐色	2～3㎜以下の長石と1㎜以下の石英、角閃石を含む	良好	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケ、底部ナデ 内面:ナデ	内外面炭素吸着 内面黒斑 外面2次焼成	P 2938

表10 BⅡ地区出土石器観察表

挿図番号	出土遺構	種別	残存状況	法量(cm)				石材	備考	遺物番号
				長	幅	厚	重量(g)			
第83図 5	5-S0001	スクレイパー	完形	3.3	7.8	1.1	21.6	サヌカイト(多久産)		4001
第108図 21	14-S0003	磨石	完形	4.9	3.7	2.1	57.5	玄武岩		4026
第117図 9	14-S0007	石庖丁	破片	4.5	5.2	0.7	20.1	粘板岩		4030
第117図 10	14-S0007	砥石	ほぼ完形	12.2	3.5	3.1	184.7	粘板岩		4031
第129図 15	14-S0026	砥石	ほぼ完形	9.1＋	1.9	1.8	31.5	粘板岩		4041
第129図 16	14-S0026	砥石	ほぼ完形	5.6	3.4	2.0	46.7	砂岩		4047
第129図 17	14-S0026	砥石	ほぼ完形	10.0	3.6	3.2	117.9	粘板岩		4042
第129図 18	14-S0026	砥石	ほぼ完形	23.6	6.3	6.6	1444.2	砂岩		4043・4044
第147図 5	14-S1008	砥石	半分欠	11.4＋	5.6	4.7	302.8	砂岩	中砥石	4055
第171図 13	15-S0508	砥石	半分欠	13.5	9.0	4.3	549.3	砂岩	中砥石	4062
第177図 1	15-S0510	石鏃	完形	1.6	1.6	0.5	1.1	黒曜石(腰岳産)		4063
第177図 2	15G包含層	石鏃	完形	2.4	1.5	0.4	1.3	サヌカイト(多久産)		4080
第177図 3	15-S0510	石鏃	破片	2.2	1.8	0.5	1.6	黒曜石(腰岳産)		4064
第177図 4	15-S0505	剥片	完形	3.3	1.7	0.6	3.2	黒曜石(腰岳産)		4061
第275図	14-P0104	石庖丁	完形	4.0	11.4	0.7	50.8	凝灰岩(立岩産)		4059
第297図	13－P0150	石製品	完形	13.8	13.3	1.6	476.8	サヌカイト(北松浦産)		4024
第294図 5	18-S0014	石製品	破片	7.4	6.5	1.8	145.7	滑石		4066
第300図 1	13G包含層	石鏃	完形	1.7	1.3	0.4	0.6	黒曜石(腰岳産)		4077
第300図 2	9-S0006	石鏃	完形	2.1	1.7	0.8	2.0	黒曜石(腰岳産)		4002
第300図 3	14-S0026	石鏃	完形	2.1	2.5	0.7	1.2	黒曜石(腰岳産)		4037
第300図 4	13-S0002	石鏃	逆刺欠	1.3	1.3	0.4	0.5	サヌカイト(多久産)		4016
第300図 5	13-S0002	石鏃？	破片	2.0	1.5	0.5	1.1	サヌカイト(多久産)		4022
第300図 6	14-S1001	石鏃	破片	2.6	1.65＋	0.6	2.5	サヌカイト(多久産)		4053
第300図 7	14-S0006	石鏃	完形	1.7	1.0	0.3	0.3	黒曜石(腰岳産)		4028
第300図 8	9G包含層	石鏃	逆刺欠	2.5	1.5	0.3	0.8	黒曜石(姫島産)		4074
第300図 9	9-S0017	石鏃	完形	2.1	1.7	0.4	0.7	サヌカイト(多久産)		4010
第300図 10	9-S0017	石鏃	逆刺一部欠	2.4＋	1.4	0.4	0.8	黒曜石(腰岳産)		4005
第300図 11	13-S0002	石鏃	半分欠	2.1	0.7＋	0.4	0.4	黒曜石(腰岳産)		4021
第300図 12	14G包含層	石鏃	先端・逆刺一部欠	1.8＋	1.4	0.3	0.5	黒曜石(腰岳産)		4079
第300図 13	包含層	石鏃	完形	2.75	1.4	0.5	1.4	黒曜石(腰岳産)		4084
第300図 14	13-S0002	石鏃	ほぼ完形	1.8＋	1.8	0.3	1.0	黒曜石(腰岳産)		4018
第300図 15	8G包含層	石鏃	半分欠	3.0	1.15＋	0.5	1.3	黒曜石(腰岳産)		4073
第300図 16	9-S0017	石鏃	ほぼ完形	2.9＋	1.9	0.5	2.1	黒曜石(腰岳産)		4004
第300図 17	9-S0017	石鏃	逆刺一部欠	3.1	1.6	0.4	1.2	黒曜石(腰岳産)		4008
第301図 18	14-S0005	剥片	破片	1.8	0.9	0.4	0.4	黒曜石(腰岳産)		4027
第301図 19	18-P068	石鏃	破片	0.9	1.8	0.4	0.5	黒曜石(腰岳産)		4070
第301図 20	13-S0002	剥片	破片	1.9	1.9	0.4	1.2	黒曜石(腰岳産)		4015
第301図 21	9-S0017	石鏃	ほぼ完形	1.6＋	2.4	0.8	2.4	黒曜石(腰岳産)		4009
第301図 22	9-S0017	石鏃	ほぼ完形	1.8	1.7	0.7	1.4	黒曜石(腰岳産)		4006
第301図 23	18-S0505	石鏃？	破片	1.9	3.0	0.7	2.7	黒曜石(腰岳産)		4069
第301図 24	14-S0012	削器？	ほぼ完形	2.0	3.0	0.5	2.6	黒曜石(腰岳産)		4032
第301図 25	9-S0017	石鏃	ほぼ完形	2.0	2.9	0.5	1.9	黒曜石(腰岳産)		4012
第301図 26	14-S0026	石鏃	完形	2.3	2.5	0.7	2.6	黒曜石(腰岳産)		4038
第301図 27	13-S0002	石鏃	半分欠	2.8	1.1	0.5	0.9	黒曜石(腰岳産)		4017
第301図 28	14-S0030	石鏃	先端・逆刺一部欠	2.4＋	1.9	0.5	1.4	黒曜石(腰岳産)		4048
第301図 29	9-S0017	剥片	破片	2.1	2.4	0.4	1.7	黒曜石(腰岳産)		4003
第302図 30	14-S0026	剥片	破片	2.6＋	2.0	0.6	2.8	黒曜石(腰岳産)		4039
第302図 31	9-S0017	剥片	破片	4.2	1.7	0.4	2.5	黒曜石(腰岳産)		4007
第302図 32	9-S0017	石鏃	ほぼ完形	4.7	1.6	0.6	3.6	黒曜石(腰岳産)		4011
第302図 33	15G包含層	剥片	破片	3.3	1.9	0.5	2.1	黒曜石(腰岳産)		4081
第302図 34	14-S0026	剥片	破片	4.7	2.6	0.8	8.4	黒曜石(腰岳産)	鈴樋技法	4040
第302図 35	18-S0502	剥片	破片	4.4	2.5	0.9	7.3	黒曜石(腰岳産)		4067
第302図 36	13-S0002	石匙	破片	4.5	6.2	0.9	16.9	サヌカイト(多久産)		4013
第302図 37	13-S0002	石槍	完形	3.6	8.1	1.3	32.0	サヌカイト(多久産)		4014
第303図 3	14G包含層	砥石	完形	17.4	7.1	2.8	241.7	砂岩	中砥石	4078

表11 ＢⅠ・Ⅱ地区出土鉄・青銅製品観察表

挿図番号	調査区	出土遺構	種別	器種	残存状況	法量(cm)			備考	遺物番号
						長	幅	厚		
第47図	ＢⅠ	22-S1514	鉄器	鏃	半分欠	7.5＋	5.2＋	0.9	木質付着	4
第51図	ＢⅠ	28-S0009	青銅器	小銅鐸	半分欠	4.3＋	2.3＋	0.6		1
第52図 1	ＢⅠ	28-S0009	鉄器	手鎌	半分欠	3.6	4.3＋	0.3	鏃の可能性も	16
第52図 2	ＢⅠ	28-S0009	鉄器	鎌	一部欠	14.6＋	4.7	0.4		14･15
第66図	ＢⅠ	23-S0012	鉄器	不明	？	5.0	4.8	0.5		5
第67図	ＢⅠ	22-S0020	鉄器	釘？	一部欠	6.6＋	2.1	0.6		3
第71図	ＢⅠ	27-S0008	鉄器	不明	一部欠	3.2＋	2.3	0.5		6
第75図 1	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	1.6＋	0.8	0.4		13(4)
第75図 2	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	1.7＋	0.5	0.4		13(1)
第75図 3	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	2.0＋	0.7	0.4		9(1)
第75図 4	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	2.0＋	0.7	0.3		9(2)
第75図 5	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	3.0＋	0.5	0.4		13(2)
第75図 6	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	3.5＋	0.7	0.3		11
第75図 7	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	3.2＋	0.7	0.3		13(3)
第75図 8	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	5.4＋	1.0	0.3		7(1)
第75図 9	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	5.9＋	0.7	0.3		10
第75図 10	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	2.8＋	1.2	0.4		7(2)
第75図 11	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	7.5＋	1.3	0.6		8
第75図 12	ＢⅠ	23-P0101	鉄器	針金	？	5.2＋	2.9＋	2.2＋		12
第81図 14	ＢⅠ	南北ベルト	鉄器	刀	？	4.4＋	2.4＋	0.5		41
第81図 15	ＢⅠ	南北ベルト	鉄器	不明	完形	5.8	2.2	1.4		40
第96図 2	ＢⅡ	14-S1525	鉄器	不明	？	3.8＋	1.7＋	0.7		42
第108図 22	ＢⅡ	14-S0003	鉄器	剣	一部欠	28.6＋	2.3	0.4	木質付着	28
第120図 19	ＢⅡ	14-S0012	鉄器	鏃	一部欠	2.9	1.4	0.5		35
第129図 14	ＢⅡ	14-S0026	鉄器	鏃	一部欠	6.5＋	2.4	0.6		27
第145図 9	ＢⅡ	14-S1001	鉄器	刀子	？	3.0＋	0.9	0.3		38
第153図 9	ＢⅡ	14-S1511	鉄器	不明	？	2.9＋	2.7＋	0.2		39
第163図 3	ＢⅡ	15-S0006	鉄器	不明	？	1.6＋	1.1	1.1		30
第171図 14	ＢⅡ	15-S0508	鉄器	刀子	？	4.0＋	1.3	0.7		19
第204図 6	ＢⅡ	14-S0031	鉄器	鎹？	？	1.8＋	2.1＋	1.4		44
第212図 7	ＢⅡ	14-S1005	青銅器	鏃先	小片	3.2＋	2.5＋	0.6		2
第255図 6	ＢⅡ	14-S1004	鉄器	斧？	？	3.8	7.3＋	0.5		29
第258図 4	ＢⅡ	14-S1011	鉄器	不明	？	4.0＋	0.4	0.3		36
第270図 1	ＢⅡ	18-S0502	鉄器	不明	？	4.5＋	0.4	0.4		34
第270図 2	ＢⅡ	9-S0017	鉄器	不明	一部欠	5.9＋	1.3	0.4		20
第270図 3	ＢⅡ	13-S0002	鉄器	鑿？	一部欠	10.1＋	2.4	1.5		22
第270図 4	ＢⅡ	9-S0016	鉄器	鏃	一部欠	5.2	10.4＋	0.3		23
第270図 5	ＢⅡ	14-S1007	鉄器	斧	ほぼ完形	7.7	3.5	2.4		25
第270図 6	ＢⅡ	14-S1007	鉄器	鏃	半分欠	7.4＋	4.5＋	1.1		26
第275図 2	ＢⅡ	14-P0171	鉄器	鏃	一部欠	3.6＋	1.8	0.4		37
第280図 1	ＢⅡ	19-S0007	鉄器	鏃	ほぼ完形	5.7	11.9	0.3	有機質付着	21
第280図 2	ＢⅡ	19-S0007	鉄器	刀子	？	5.0＋	1.1	0.3		18
第280図 3	ＢⅡ	19-S0007	鉄器	刀子	？	3.5＋	1.3	0.3	刀子の切先付着	17
第280図 4	ＢⅡ	19-S0007	鉄器	鏃	一部欠	5.5＋	1.9	0.4		33
第302図 1	ＢⅡ	14-4F	鉄器	鏃	一部欠	5.8＋	1.9	0.4		43
第302図 2	ＢⅡ	15-1A	鉄器	鏃	一部欠	8.6＋	2.1	0.6		24

第310図 ＢⅡ地区主要区域遺構配置図

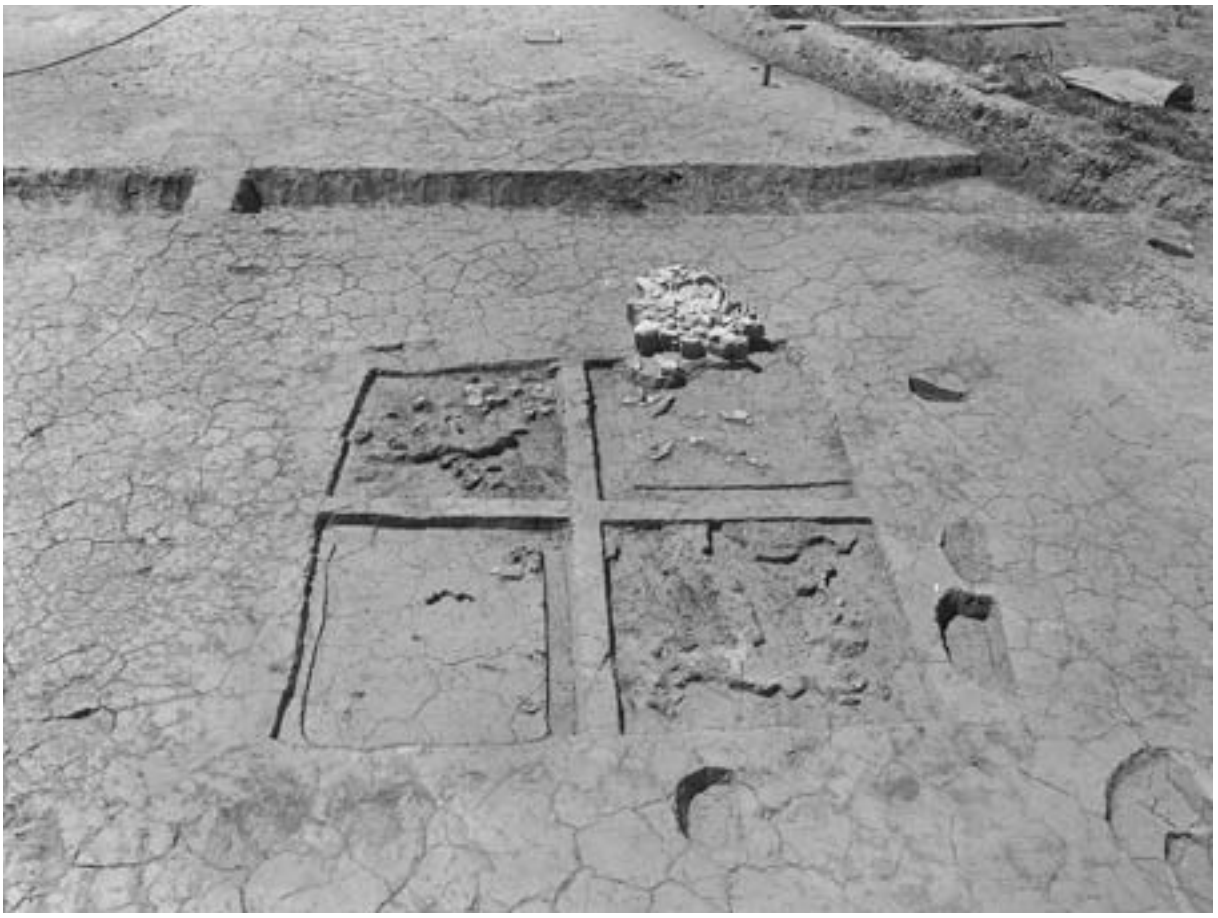
写真図版

図版１　ＢＩ地区　遺構

（１）全景（北から）

（２）全景（南から）

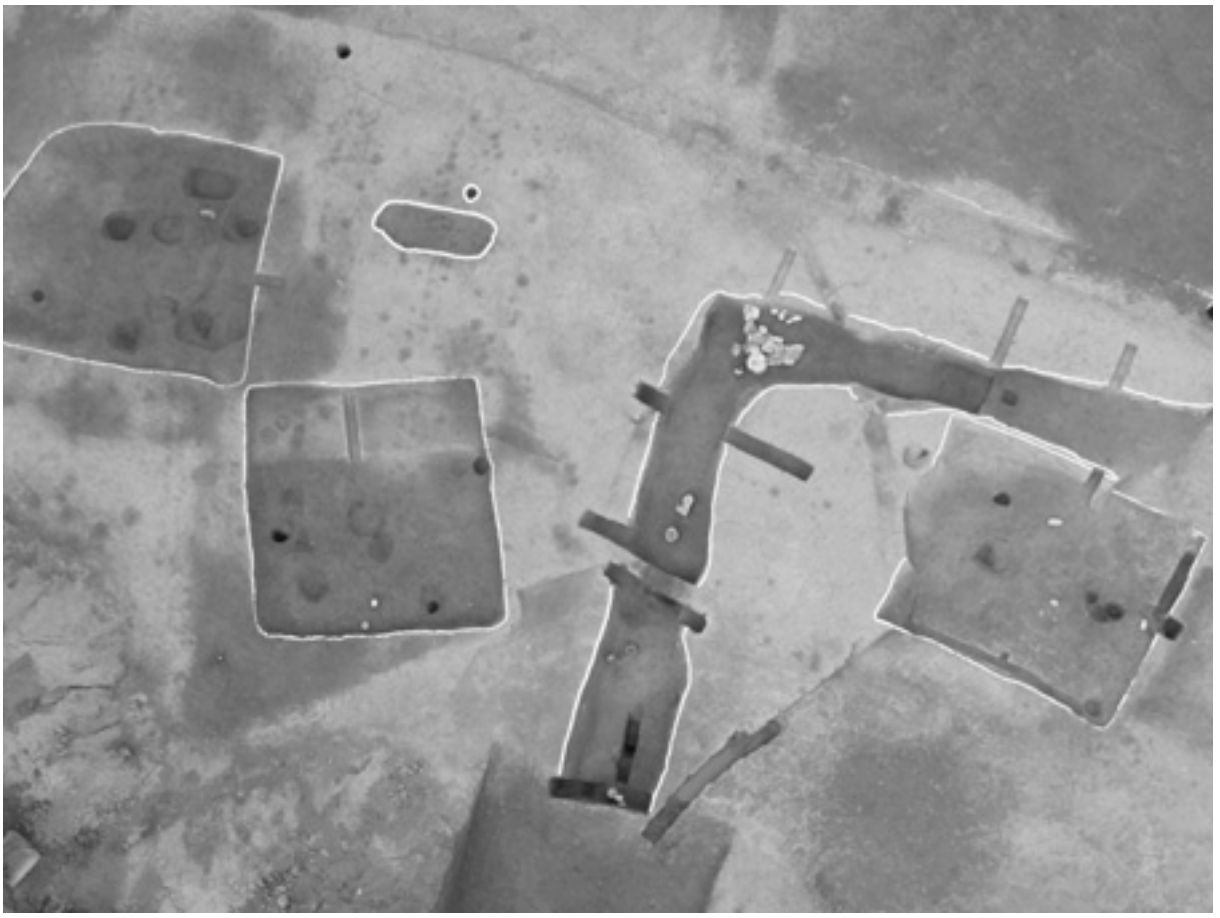
図版２　ＢＩ地区　遺構



（１）住居23 - S0007（南東から）

（２）住居28 - S0007（南東から）

図版３　ＢＩ地区　遺構



（１）方形周溝28 - S0009・周辺の住居群（俯瞰）

（２）方形周溝28 - S0009・周辺の住居群（北東から）

図版４　ＢＩ地区　遺構

（１）方形周溝28 - S0009・住居28 - S0007（北西から）　（２）方形周溝28 - S0009　遺物出土状態（南西から）
（３）方形周溝28 - S0009　断面・小銅鐸出土状態（南東から）

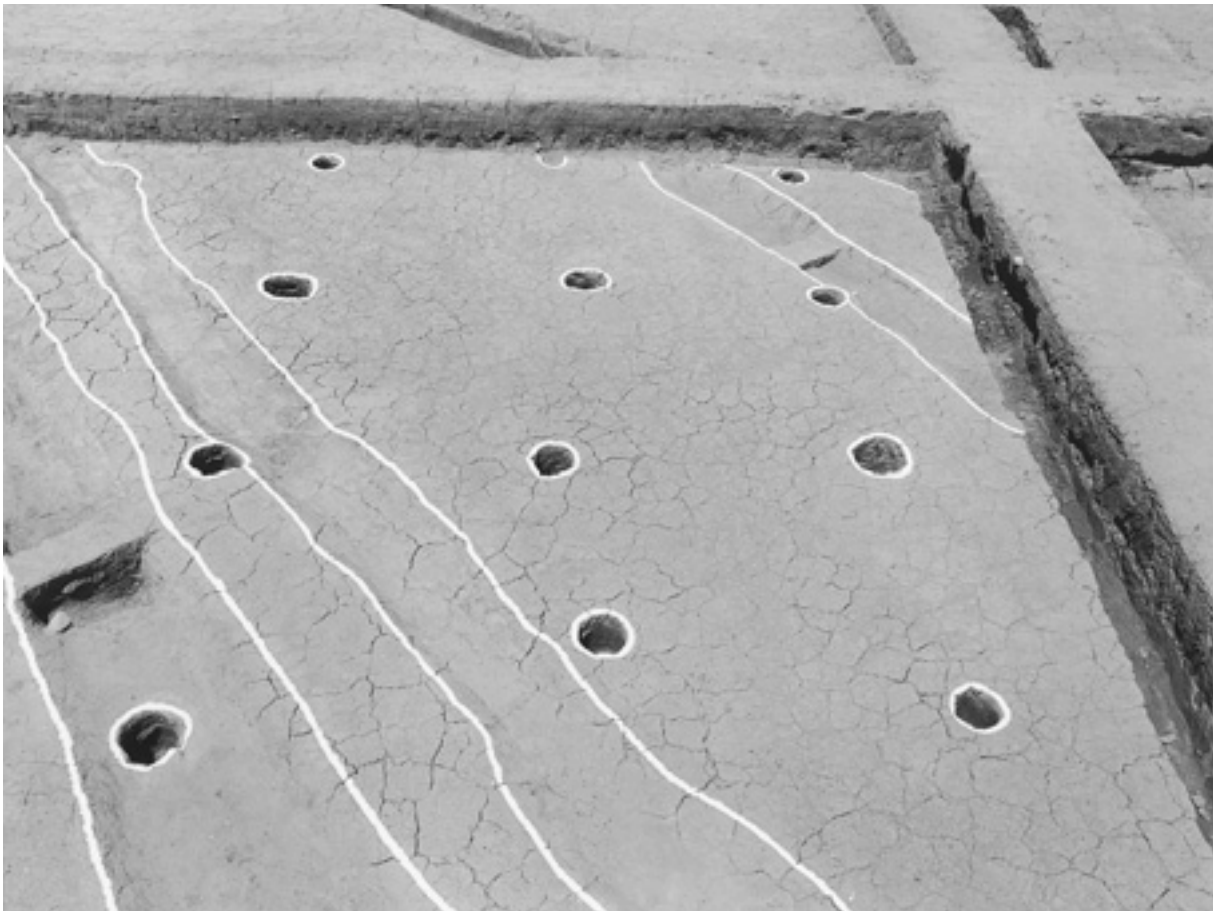
図版５　ＢＩ地区　遺構

（１）住居28 - S0005（北東から）

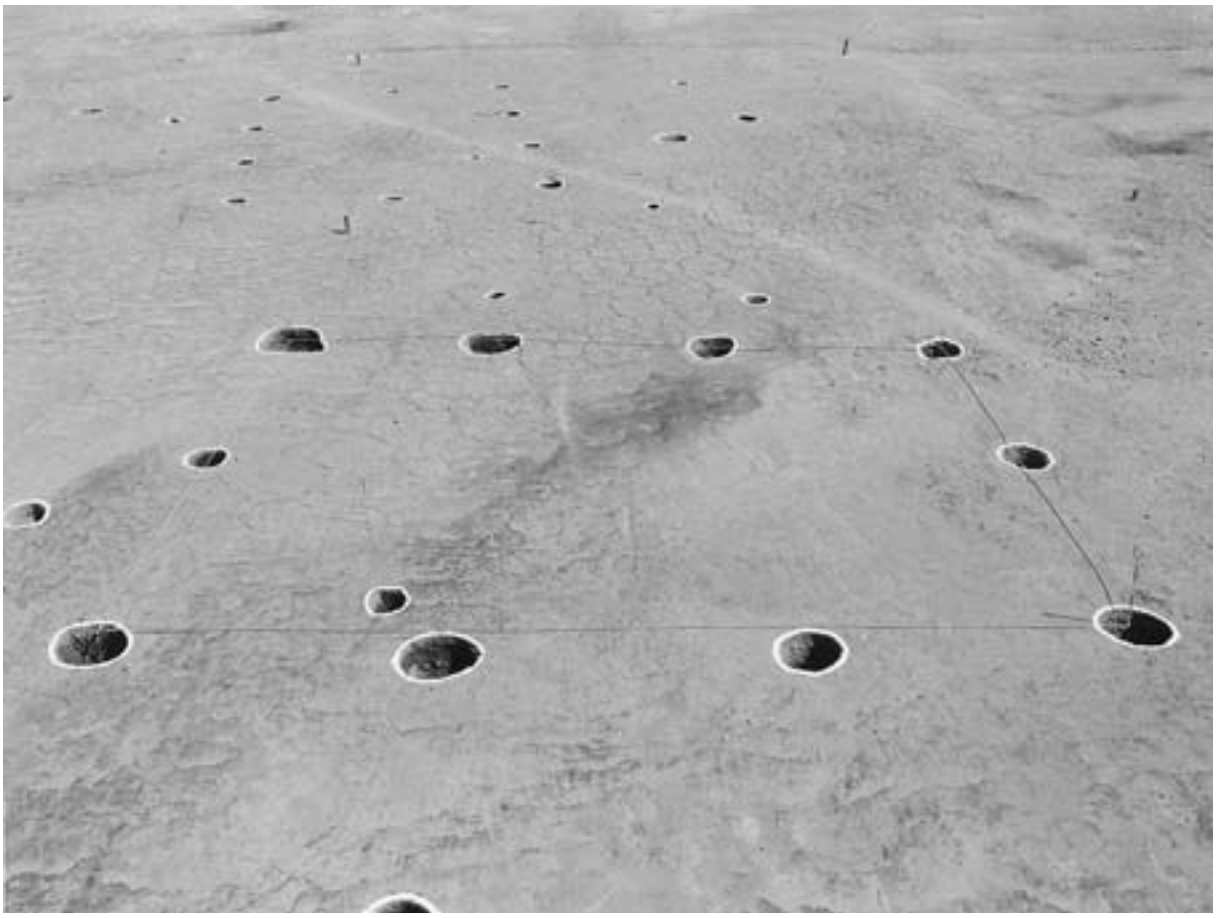
（２）住居27 - S0009（北東から）

図版６　ＢＩ地区　遺構

（１）掘立柱建物群（南東から）



（２）掘立柱建物22 - S0502（南から）



（１）掘立柱建物26 - S0006（南から）

（２）掘立柱建物26 - S0007（南から）

図版８　ＢＩ地区　遺構

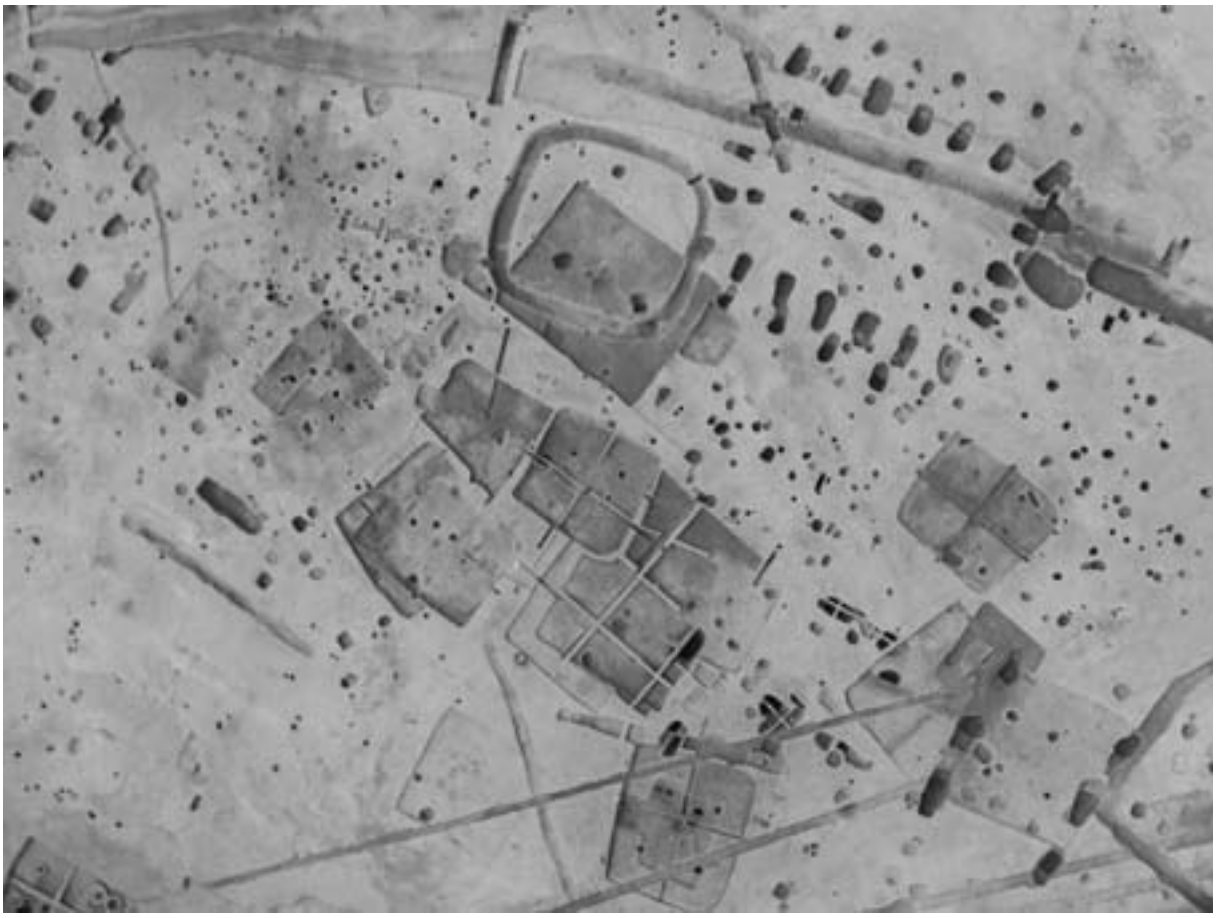
（１）小溝群23G（南西から）

（２）溝23 - S0010（北東から）

図版９　ＢⅡ地区　遺構

（１）全景（俯瞰）

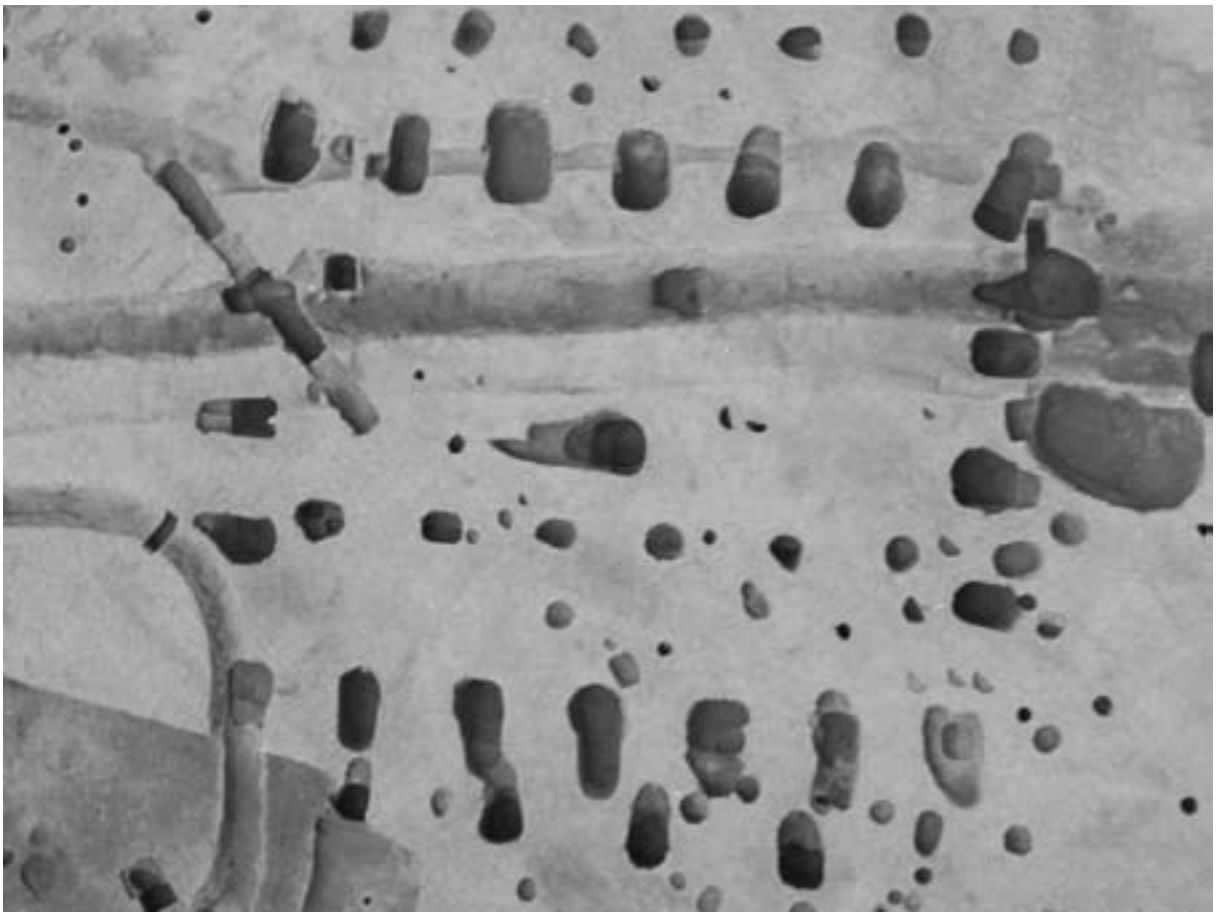
図版10　ＢⅡ地区　遺構



（１）重複する大型建物群・住居群（俯瞰）

（２）重複する大型建物群・住居群（北西から）

図版11　ＢⅡ地区　遺構



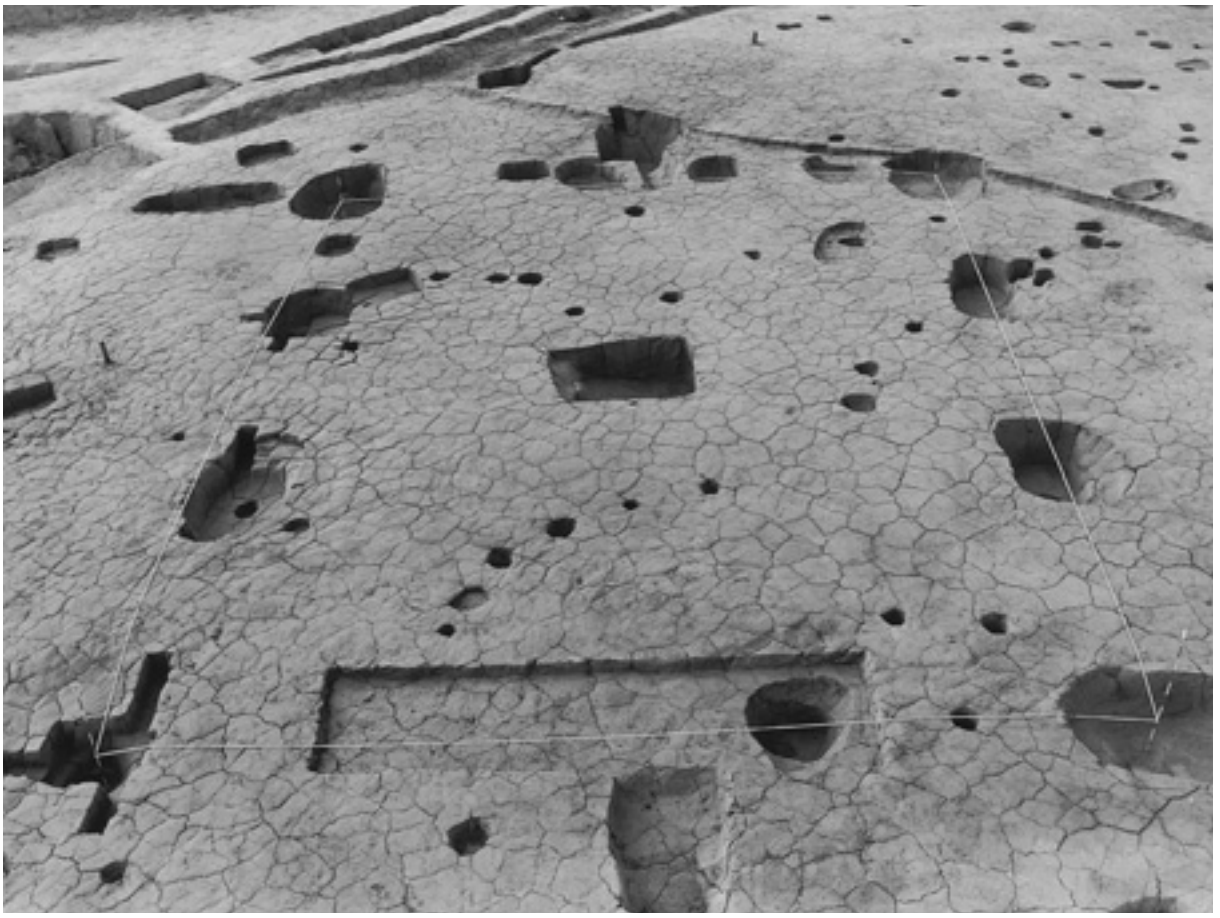
（1）重複する大型建物１・２（俯瞰）

（2）大型建物４・５・６（南東から）

図版12　ＢⅡ地区　遺構

（１）大型建物５・４（東から）

（２）大型建物５（南東から）



（1）大型建物 7（南東から）

（2）大型建物 7（南西から）

図版14　ＢⅡ地区　遺構

（１）大型建物４　Ｐ６柱穴断面（南西から）

（２）大型建物４　Ｐ８柱穴断面（南西から）

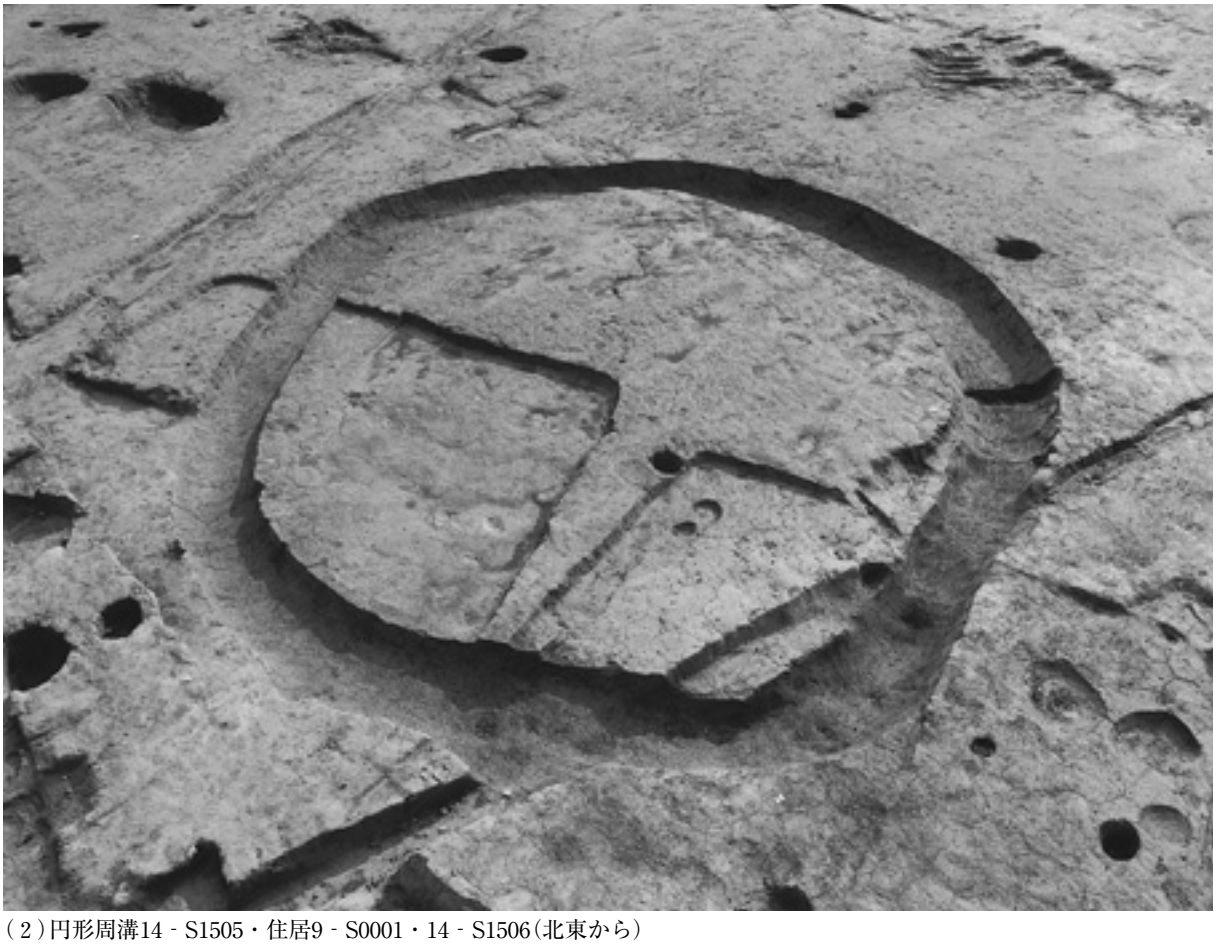
図版15　ＢⅡ地区　遺構

（1）大型建物４　Ｐ３柱痕跡

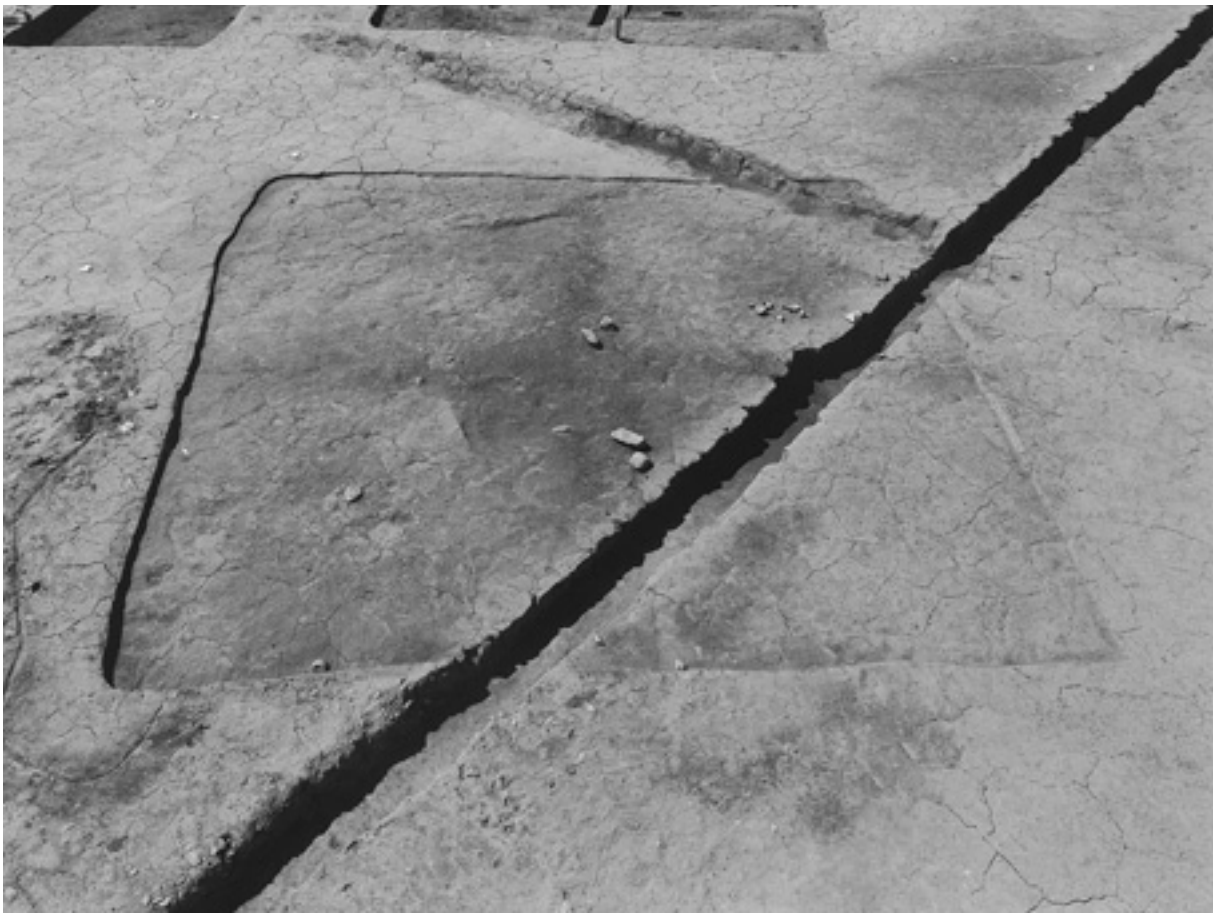
（2）大型建物４　Ｐ４柱痕跡

図版16　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居９ - S0001（東から）



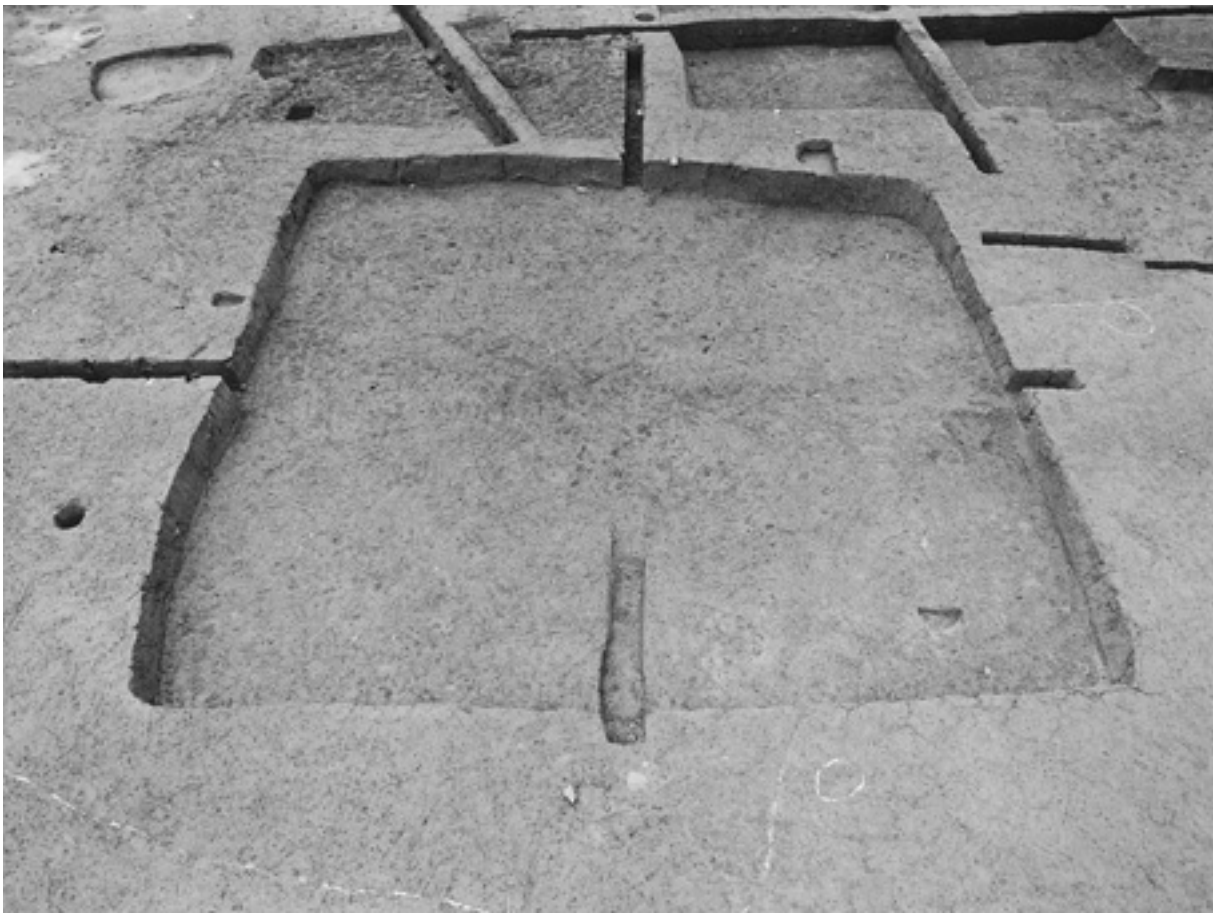
（２）円形周溝14 - S1505・住居9 - S0001・14 - S1506（北東から）



（１）住居14 - S0001　貼床上面（南東から）

（２）住居14 - S0001　床下面（北東から）

図版18　ＢⅡ地区　遺構



（１）住居14 - S0003（南東から）

（２）住居14 - S0003・周辺の住居群（南西から）

図版19　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居14 - S0006（南東から）

（２）住居14 - S0006　遺物出土状態（南から）

図版20　ＢⅡ地区　遺構

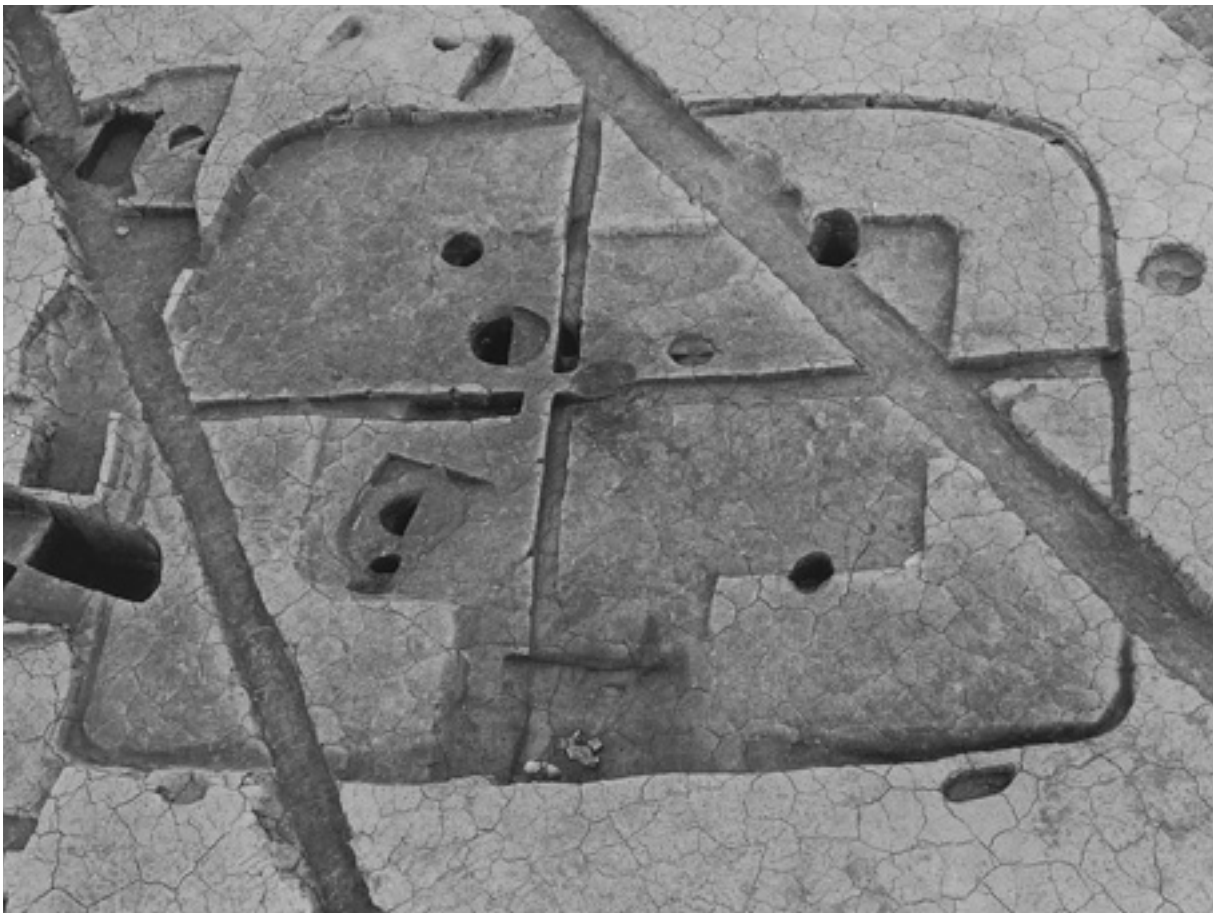
（１）住居14 - S0006・周辺の住居群（西から）

（２）住居14 - S0021（北西から）

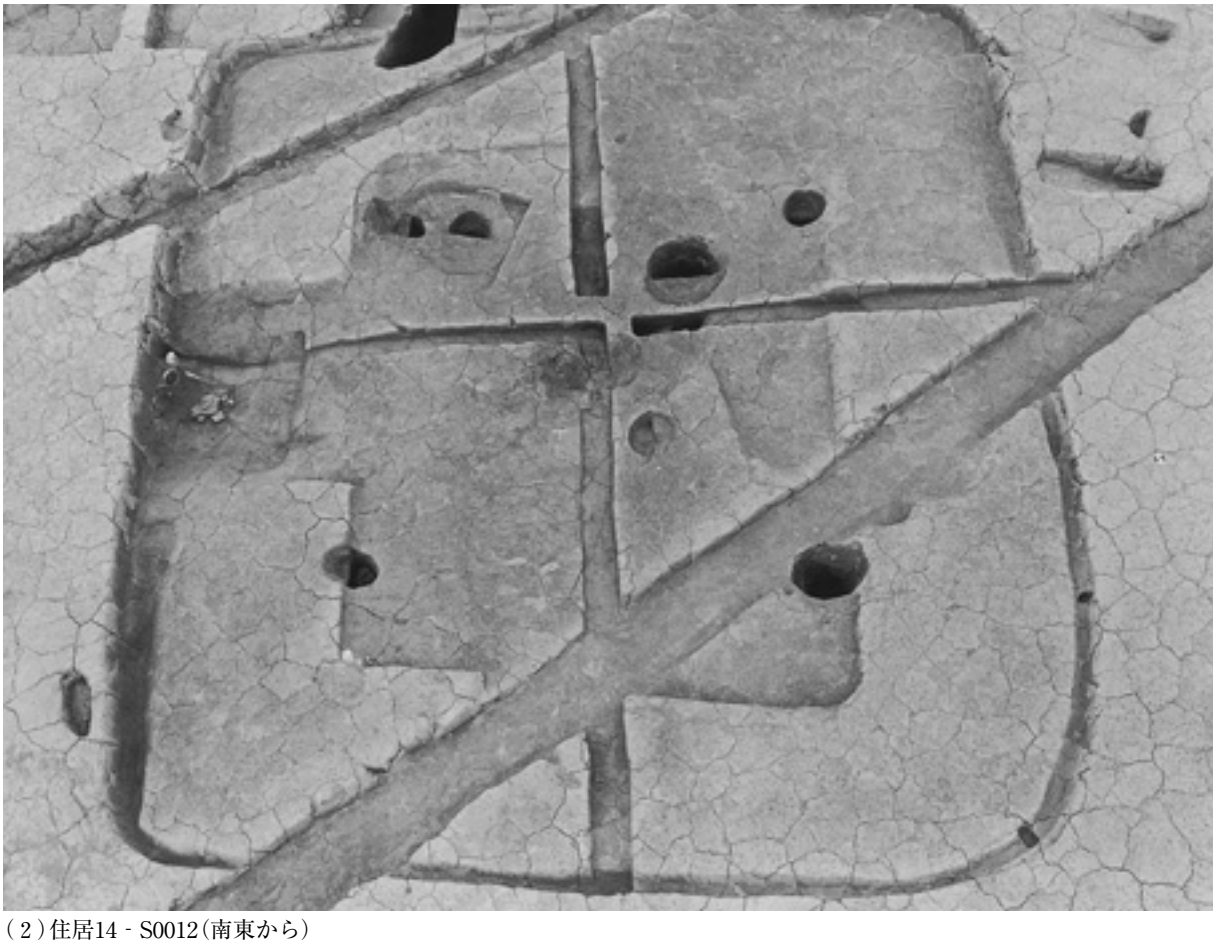
（１）住居14－S0027　遺物出土状態（北東から）

（２）住居14－S0027・住居14－S0034（南西から）

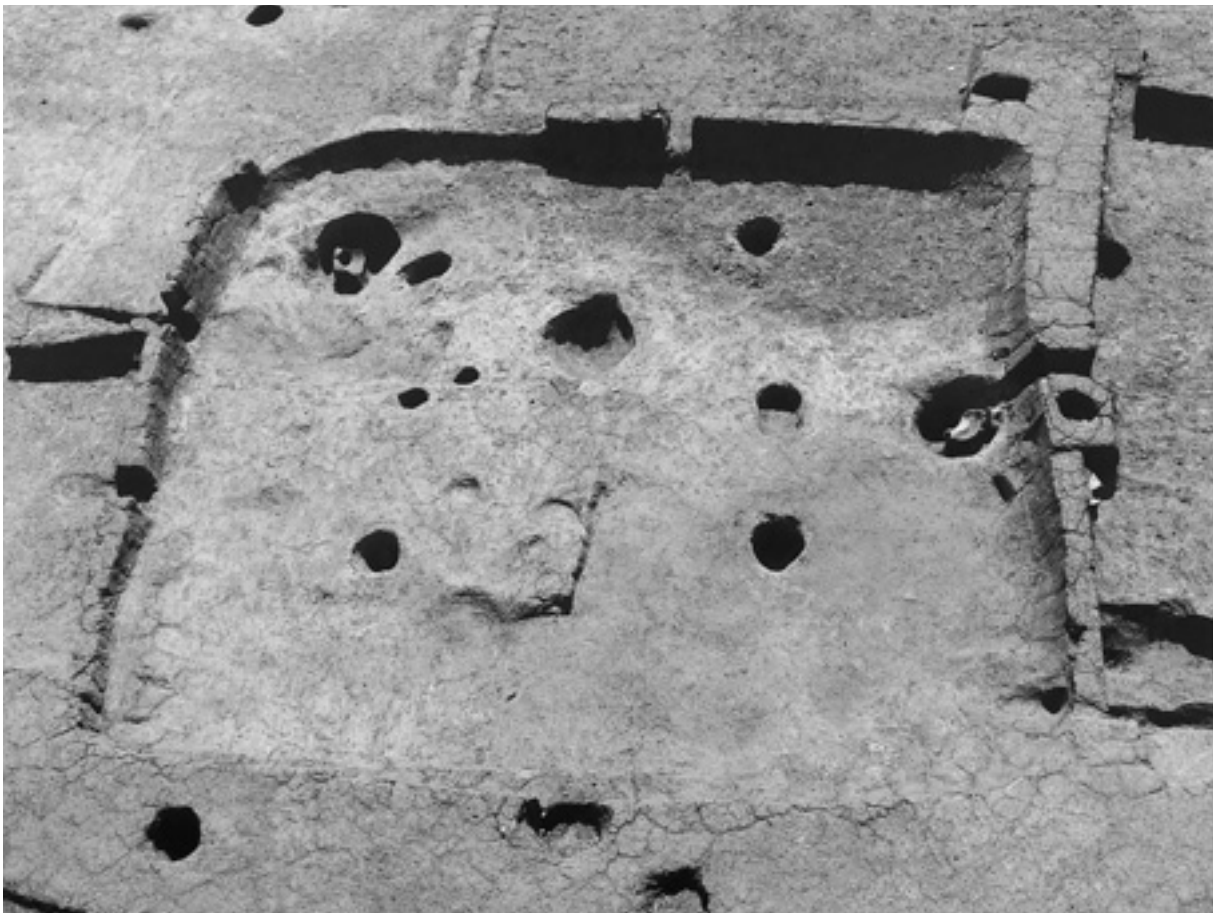
図版22　ＢⅡ地区　遺構



（１）住居14 - S0012（南西から）



（２）住居14 - S0012（南東から）



（１）住居14 - S0026（北西から）

（２）住居14 - S0028（南東から）

図版24　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居14 - S0030　炭化材・土器の出土状態（南西から）

（２）住居14 - S0030・方形周溝14 - S0030（南西から）

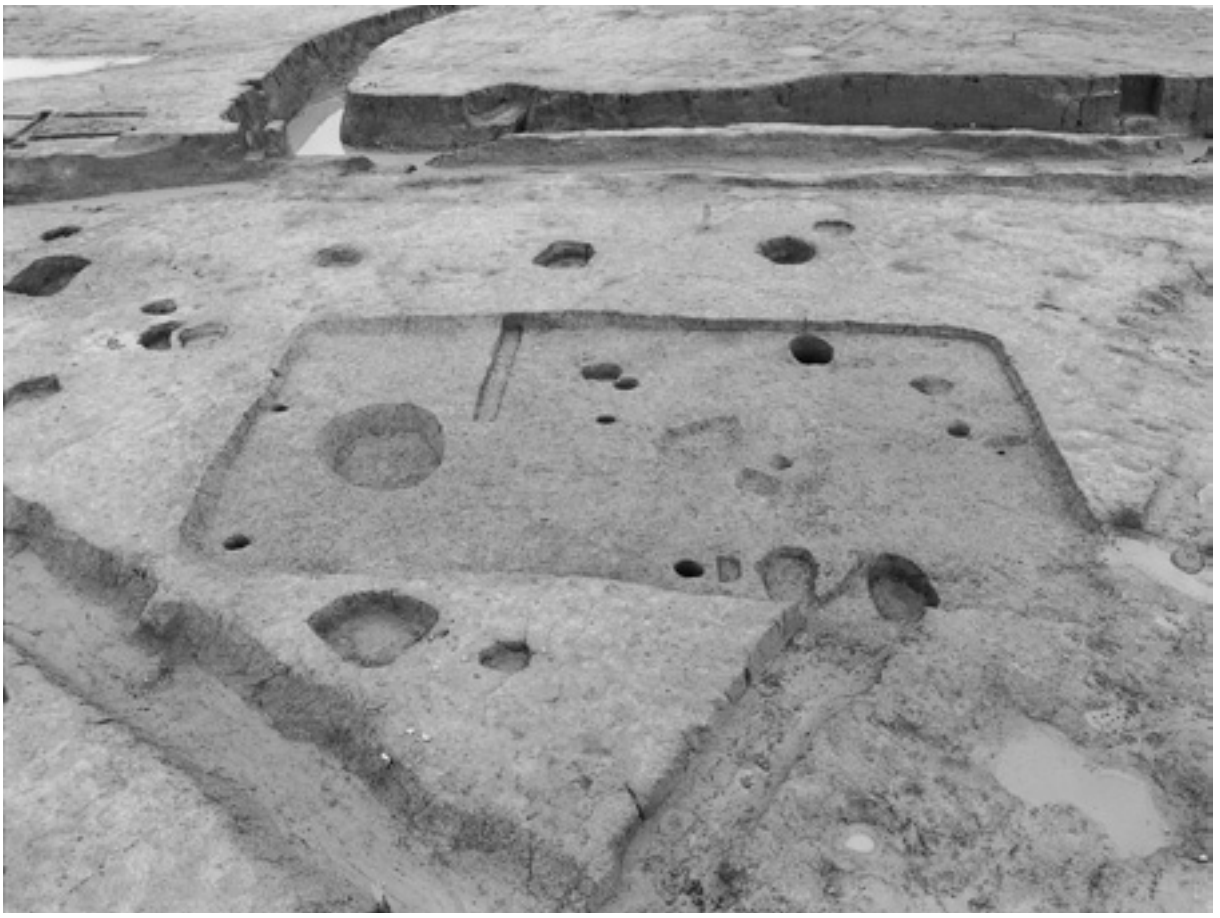
（１）住居14－S0030・方形周溝14－S0033の関係断面（南西から）

（２）住居14－S0040（南東から）

図版26　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居14 - S1001（南西から）

（２）住居14 - S1002（南東から）



（１）住居14 - S1502（南東から）

（２）住居14 - S1008（北西から）

図版28　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居14 - S1008と環濠（南西から）

（２）住居14 - S1008・環濠断面（南西から）

（１）方形周溝14 - S1510・住居14 - S1524（北西から）

（２）住居14 - S1524（北東から）

図版30　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居14 - S1509・方形周溝14 - S1510（東から）

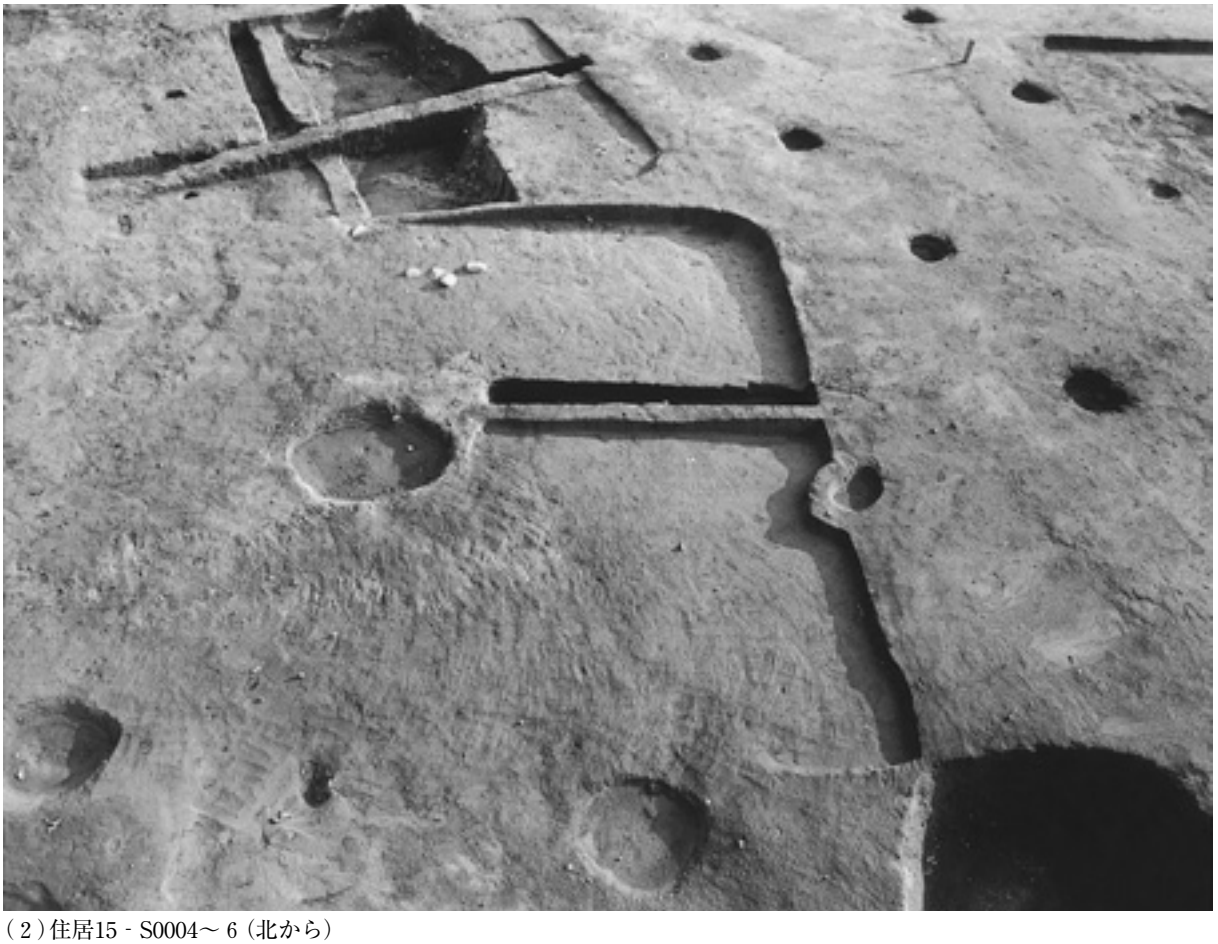
（２）住居14 - S1511（南東から）

（１）住居14 - S2004（南西から）

（２）住居14 - S1516・大型建物９柱穴（南東から）

図版32　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居15 - S0001（西から）



（２）住居15 - S0004～ 6（北から）

（１）住居15－S0505・同15－S0509（北西から）

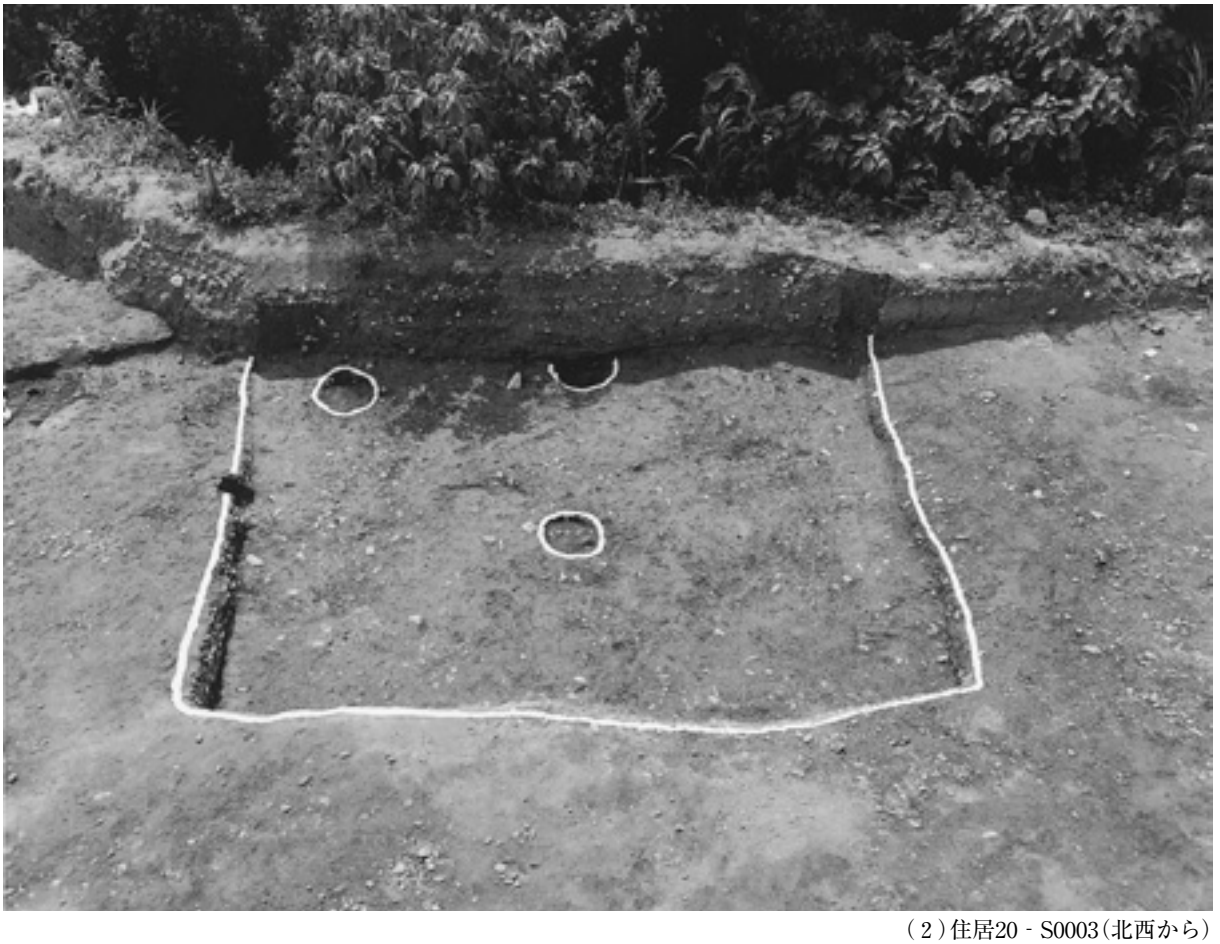
（２）住居15－S0509　炉跡（西から）

図版34　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居15 - S0508（北東から）

（２）住居15 - S0514（北西から）

（１）方形周溝20－S0001・住居20－S0002（北西から）



（２）住居20－S0003（北西から）

図版36　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居15－S0501・同15－S0511・同15－S0513（北西から）

（２）住居19－S1009・周辺の住居群（北西から）

（１）住居19 - S1012 - 1・2　遺物出土状態（南東から）

（２）住居19 - S1015　遺物出土状態（南東から）

図版38　ＢⅡ地区　遺構

（１）住居19－S0011・住居19－S0012（北東から）

（２）住居19－S0011（北西から）

（１）土坑14 - S0029（北東から）

（２）土坑19 - S0008（南東から）

図版40　ＢⅡ地区　遺構

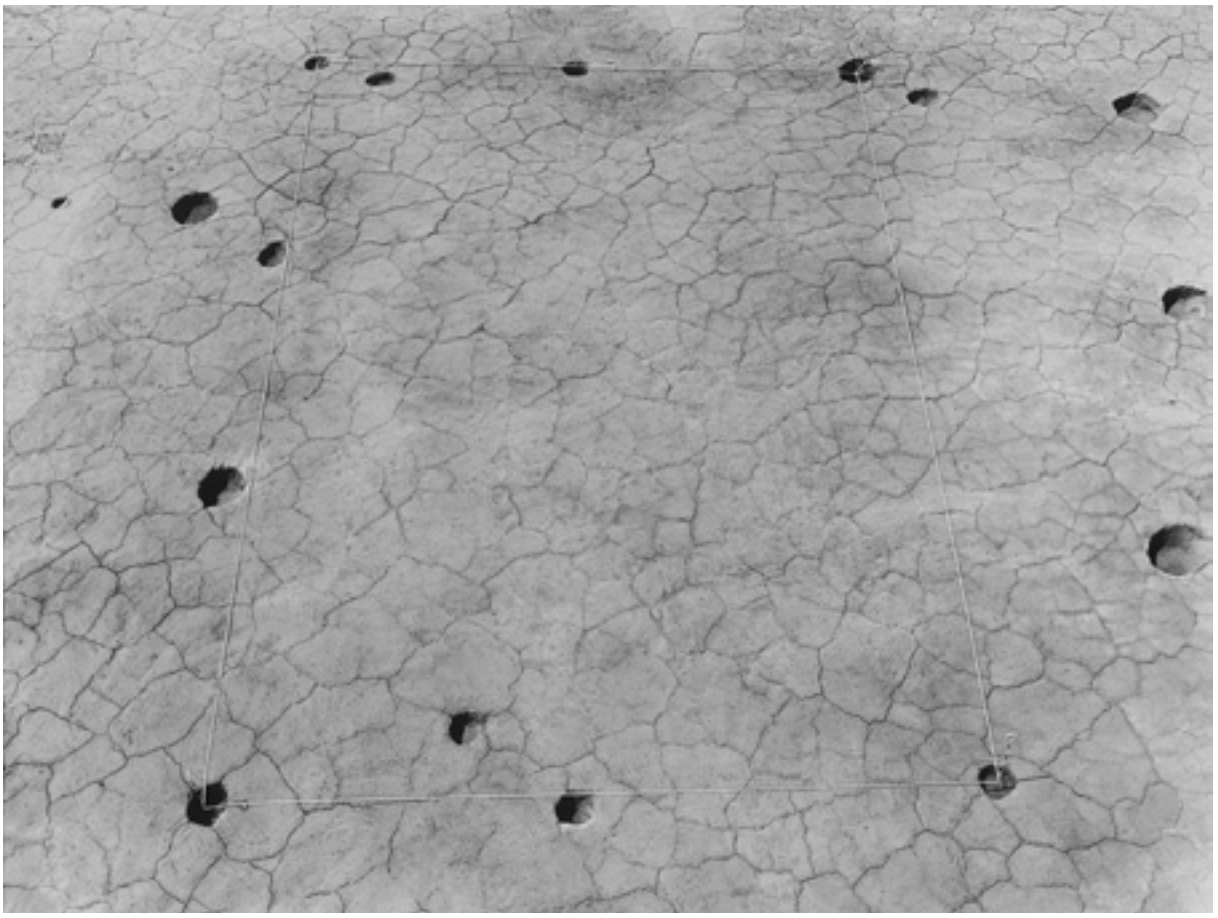
（１）土坑14 - S0048（南西から）

（２）土坑14 - S0069（南東から）

（１）土坑18 - S0504（西から）

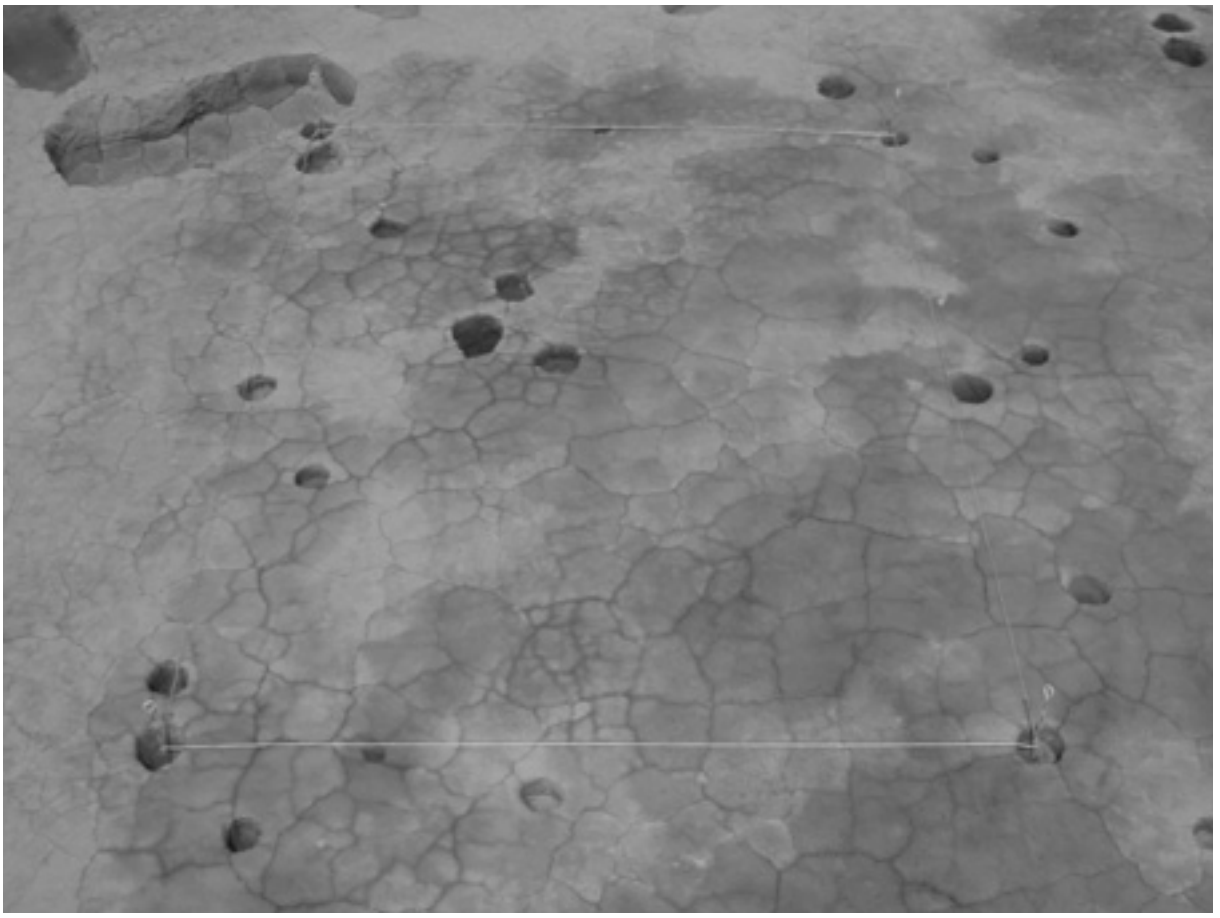
（２）土坑18 - S0505（西から）

図版42　ＢⅡ地区　遺構



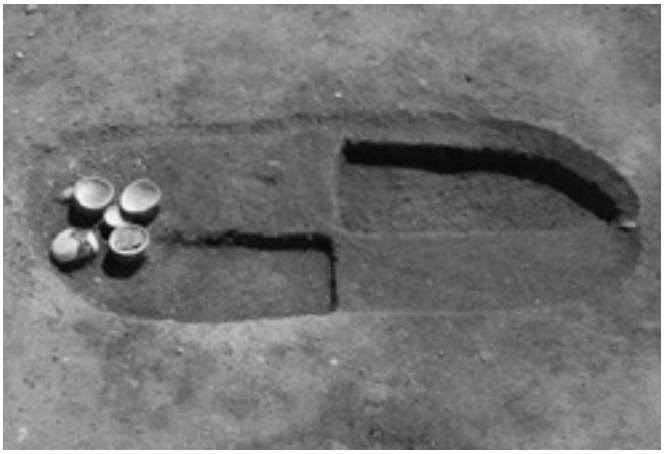
（１）掘立柱建物18 - S0012（東から）

（２）掘立柱建物13 - S1001（東から）



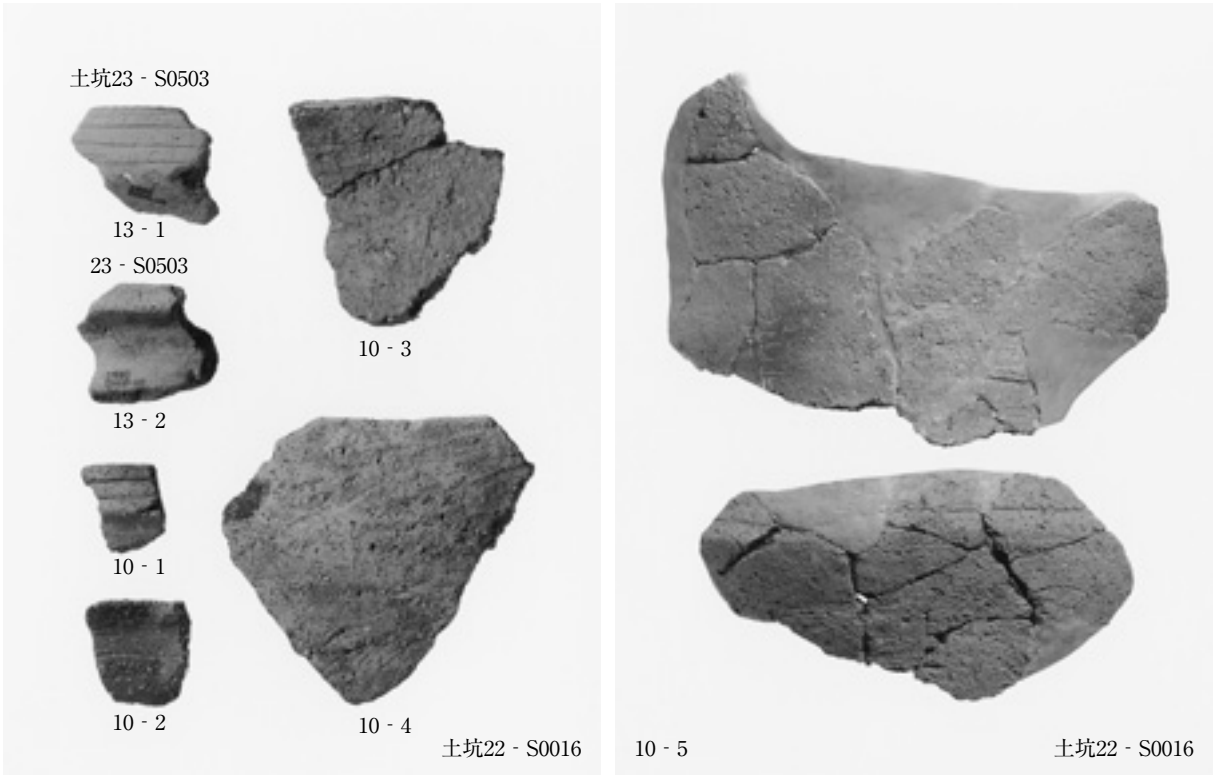
（１）掘立柱建物19 - S0005（南から）

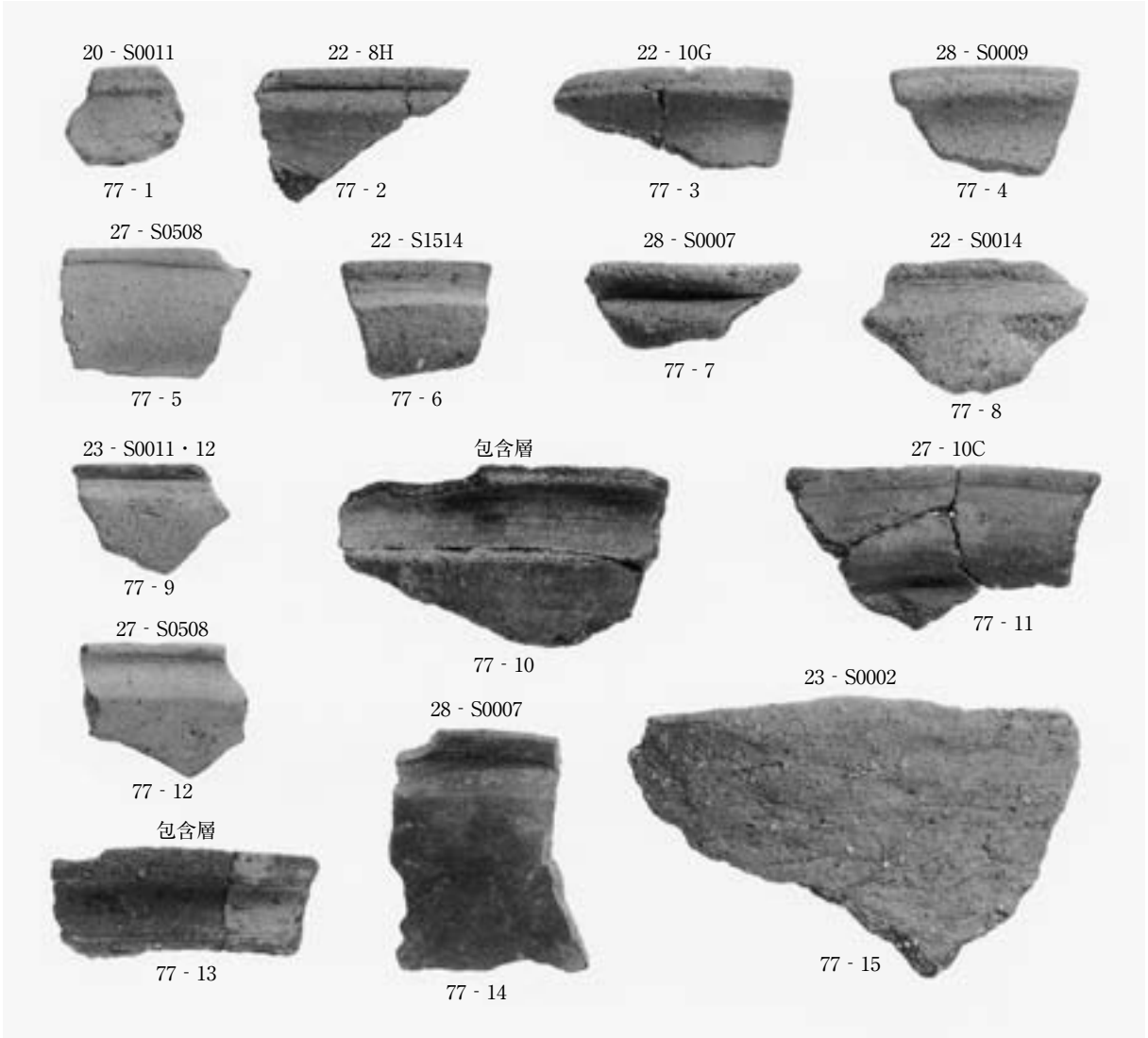
（南から）



（２）土壙墓10 - S0002（西から）

図版44　ＢＩ地区　遺物　土器　縄文土器





48 - 28　　環濠22 - S1514

48 - 13　　22 - S1514

住23 - S0505

26 - 3　　28 - S0005

17 - 5　　住23 - S0007

26 - 2　　住28 - S0005

53 - 15　　方形周溝28 - S0009

図版46　ＢＩ地区　遺物　土器

53 - 3　　方形周溝28 - S0009

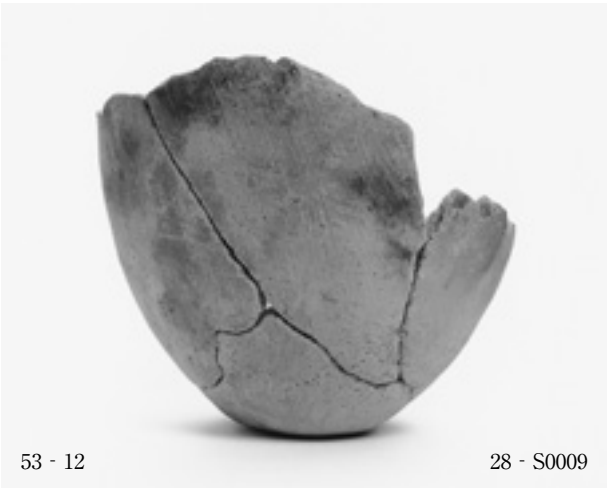
54 - 16　　28 - S0009

53 - 9　　28 - S0009

53 - 4　　28 - S0009

54 - 19　　28 - S0009

53 - 11　　28 - S0009



53 - 12　　28 - S0009

54 - 22　　28 - S0009

55 - 33　　28 - S0009

55 - 43　　28 - S0009

55 - 35　　28 - S0009

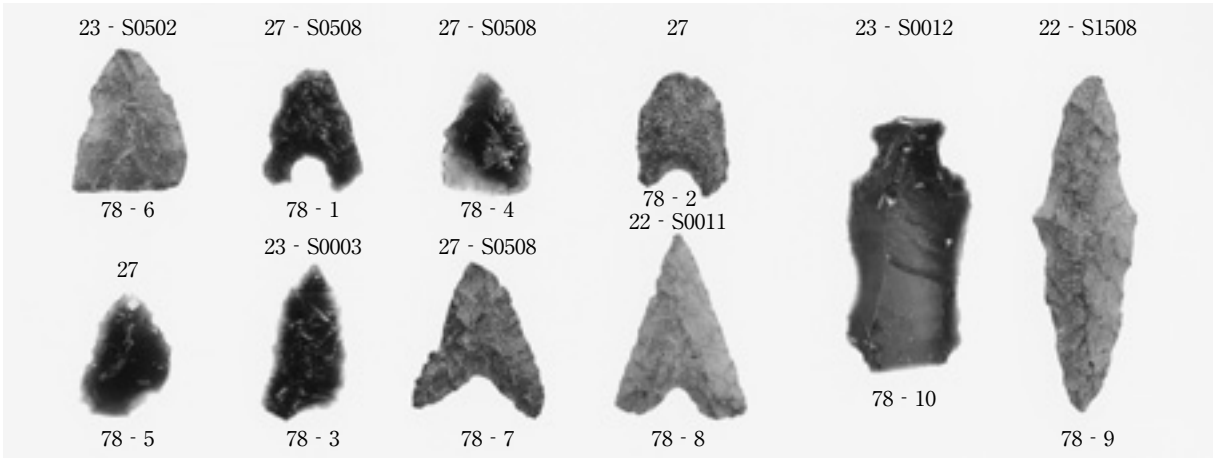
55 - 32　　28 - S0009

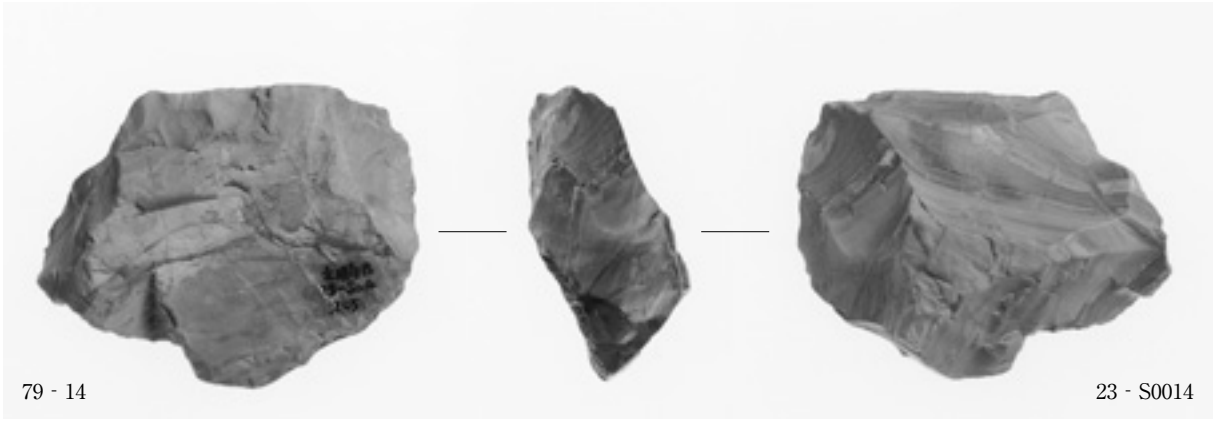
54 - 30　　28 - S0009

65 - 1　　溝22 - S0001

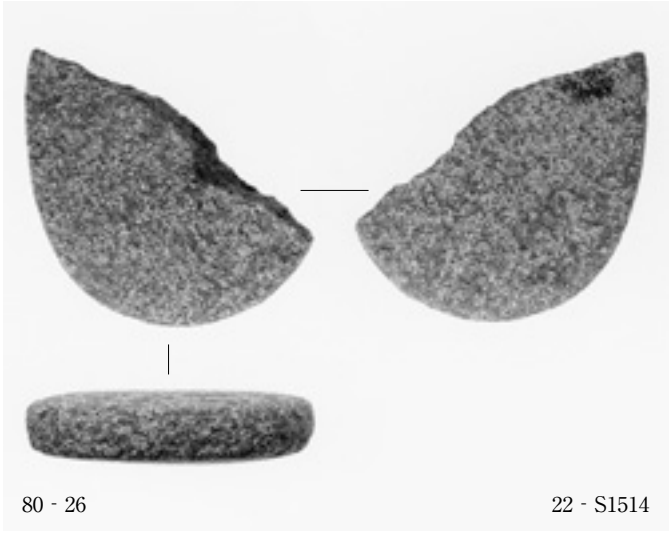
66 - 6　　溝23 - S0002

図版48　ＢＩ地区　遺物　石器





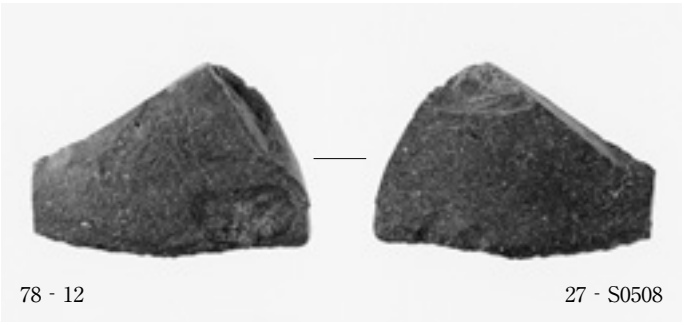
79 - 14　　23 - S0014



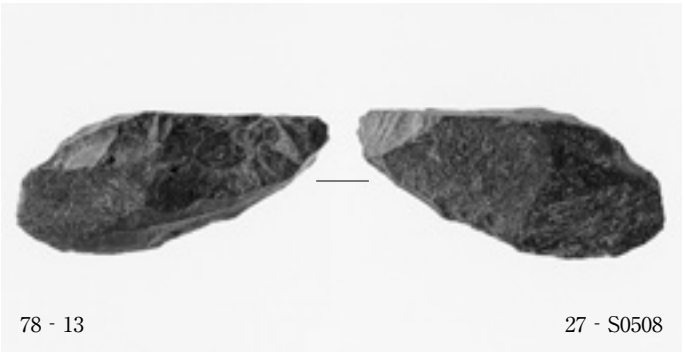
80 - 26　　22 - S1514

80 - 25　　27 - S0508

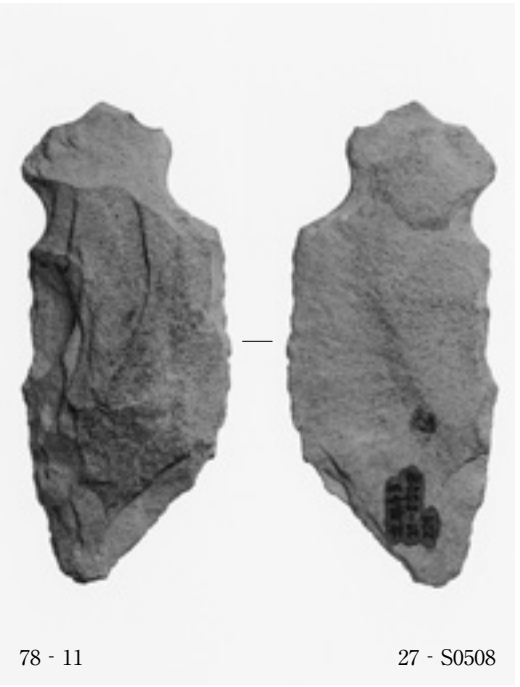
52 - 4　　方形周溝28 - S0009



78 - 12　27 - S0508

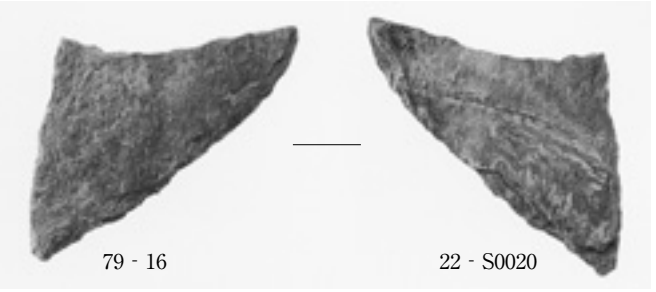


78 - 13　27 - S0508

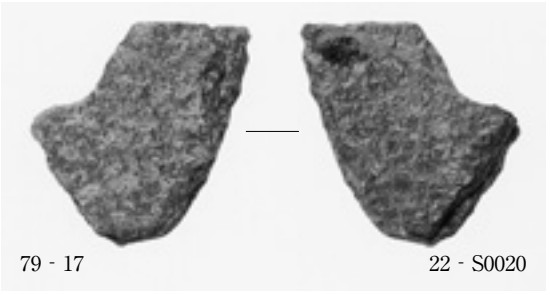


78 - 11　27 - S0508

79 - 15　22 - S0020



79 - 16　22 - S0020



79 - 17　22 - S0020

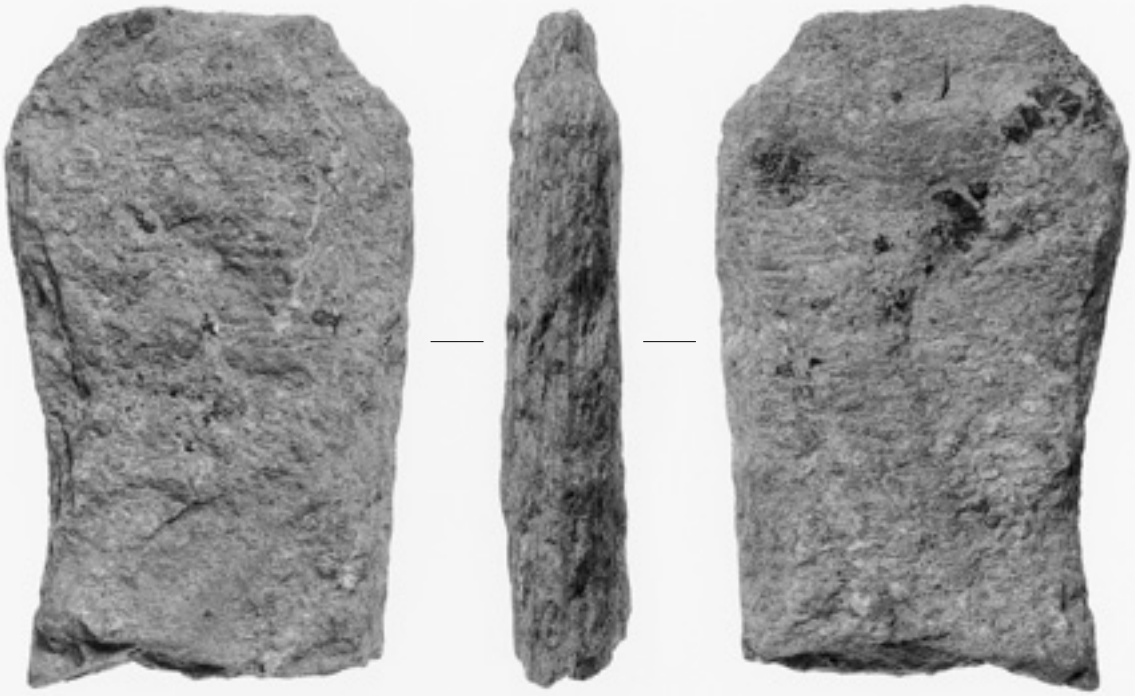
79 - 20　28 - 2B

79 - 21　27 - 5B

図版50　ＢＩ地区　遺物　石器

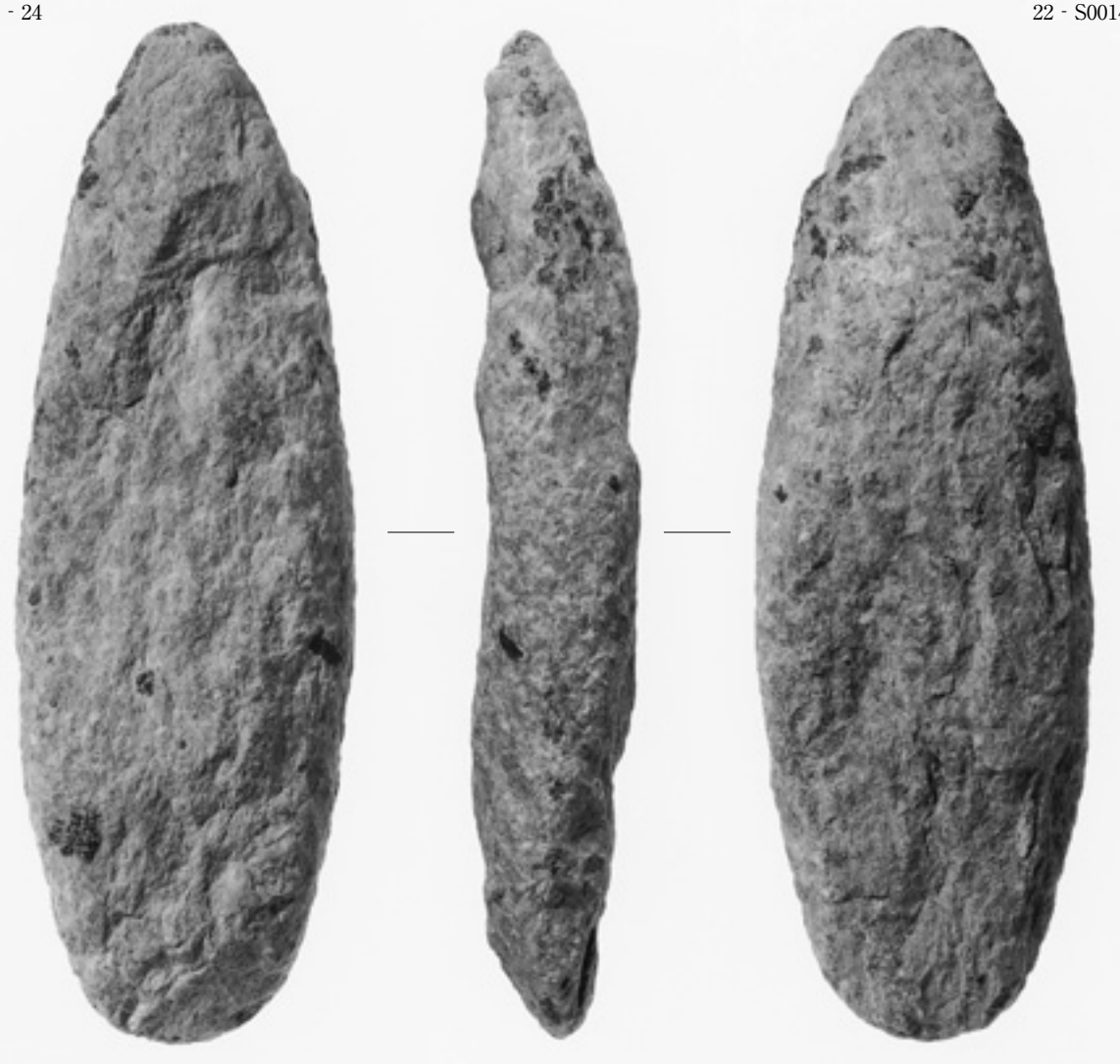
79 - 19

22 - S0014



80 - 24

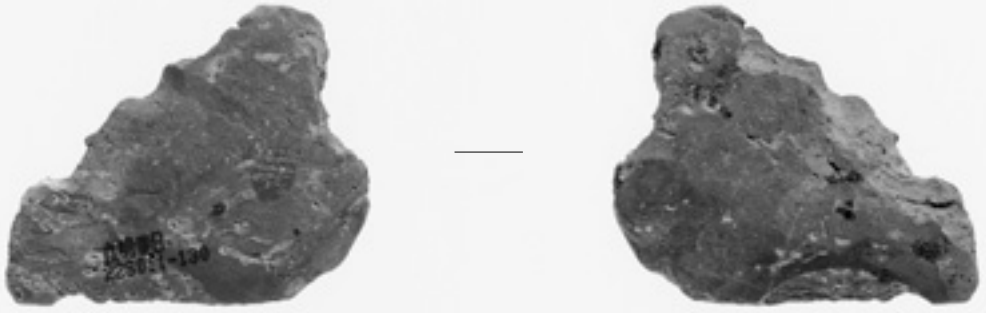
22 - S0014



47 - 4　環濠22 - S1514

52 - 3　方形周溝28 - S0009

81 - 16　22 - S0011



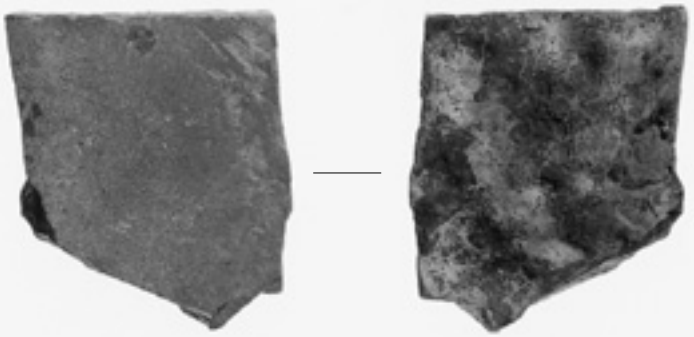
80 - 22　22 - S0014

80 - 23　22 - S0014

図版52　ＢＩ地区　遺物　石器

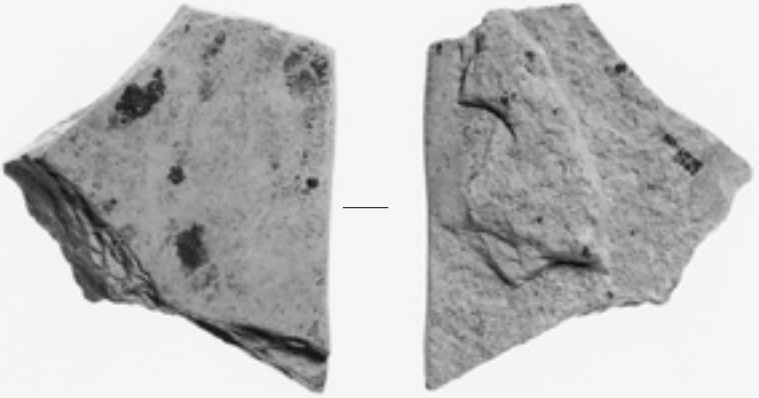
24 - 1　住27 - S0009

24 - 4　27 - S0009



24 - 2　27 - S0009

28 - 3　住28 - S0007



24 - 3　27 - S0009

5 - S0001

83 - 1

5 - S0002

83 - 2

5 - S0002

83 - 3

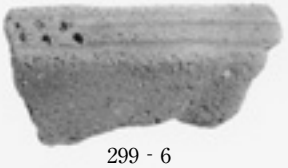
19 - S0002

299 - 1

13 - S0002

299 - 5

13 - S0002



299 - 6

13 - S0002

299 - 2

18 - 9B

299 - 7

14 - 9F

299 - 8

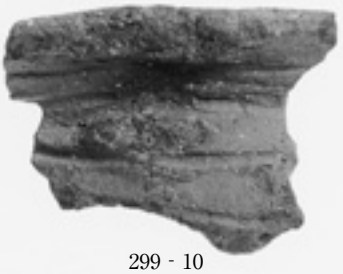
14 - S1012

299 - 3

13 - S0002

299 - 9

14 - S1511



299 - 10

図版54　ＢⅡ地区　遺物　土器

103 - 6　　住 9 - S0001

106 - 4　　住14 - S0001

106 - 3　　14 - S0001

106 - 6　　14 - S0001

108 - 17　　住14 - S0003

108 - 14　　14 - S0003

108 - 11　　14 - S0003

108 - 9　　14 - S0003

108 - 5　　14 - S0003

108 - 6　　14 - S0003

108 - 1　　14 - S0003

108 - 2　　14 - S0003

110 - 1　　住14 - S0004

265 - 17　　13 - S0002

110 - 8　　14 - S0004

110 - 6　　14 - S0004

110 - 7　　14 - S0004

110 - 5　　住14 - S0005

112 - 4　　14 - S0005

112 - 1　　14 - S0005

図版56　ＢⅡ地区　遺物　土器

114 - 7　　住14 - S0006

114 - 8　　14 - S0006

114 - 6　　14 - S0006

114 - 10　　14 - S0006

265 - 35　　9 - S0017

114 - 1　　14 - S0006

114 - 2　　14 - S0006

114 - 3　　14 - S0006

114 - 16　　14 - S0006

117 - 6　　住14 - S0007

117 - 2　　14 - S0007

120 - 5　　14 - S0012

120 - 18　　14 - S0012

114 - 14　　14 - S0006

117 - 1　　14 - S0007

120 - 7　　住14 - S0012

120 - 1　　14 - S0012

124 - 10　　住14 - S0021

図版58　ＢⅡ地区　遺物　土器

122 - 3　14 - S0018

124 - 14　住14 - S0021

124 - 13　14 - S0021

124 - 6　14 - S0021

124 - 4　14 - S0021

124 - 5　14 - S0021

124 - 1　14 - S0021

124 - 8　14 - S0021

129 - 11　住14 - S0026

126 - 2　14 - S0026

129 - 12　　14 - S0026

129 - 6　　14 - S0026

129 - 7　　14 - S0026

129 - 2　　14 - S0026

129 - 1　　14 - S0026

129 - 8　　14 - S0026

133 - 16　　住14 - S0027

133 - 19　　14 - S0027

図版60　ＢⅡ地区　遺物　土器

133 - 18　　14 - S0027

132 - 11　　14 - S0027

133 - 13　　14 - S0027

132 - 6　　14 - S0027

132 - 1　　14 - S0027

132 - 3　　14 - S0027

132 - 2　　14 - S0027

132 - 5　　14 - S0027

137 - 5　住14 - S0030

141 - 1　住14 - S0040

126 - 6　住14 - S0063

145 - 3　14 - S1001

122 - 7　住14 - S1002

133 - 20　住14 - S0034

143 - 2　住14 - S0041

110 - 9　住14 - S0064

145 - 5　住14 - S1001

147 - 2　住14 - S1008

151 - 1　住14 - S1509

図版62　ＢⅡ地区　遺物　土器

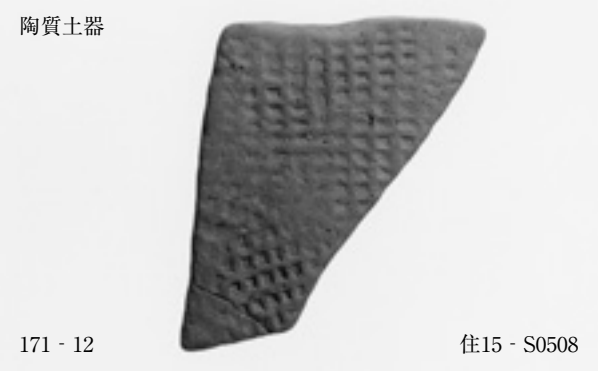
153 - 8　　住14 - S1511

157 - 7　　住14 - S1524

165 - 4　　住15 - S0501

165 - 1　　15 - S0501

陶質土器



171 - 12　　住15 - S0508

157 - 2　　14 - S1524

165 - 3　　15 - S0501

167 - 4　　住15 - S0505

171 - 1　　15 - S0508

176 - 1　不確定遺構15 - S0510下層

176 - 2　15 - S0510

15 - S0510

15 - S0510

176 - 11　176 - 10

15 - S0510

15 - S0505

176 - 12　167 - 7

176 - 7　15 - S0510

15 - S0510

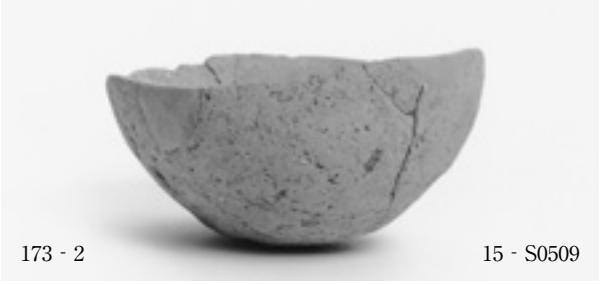
176 - 3

176 - 5

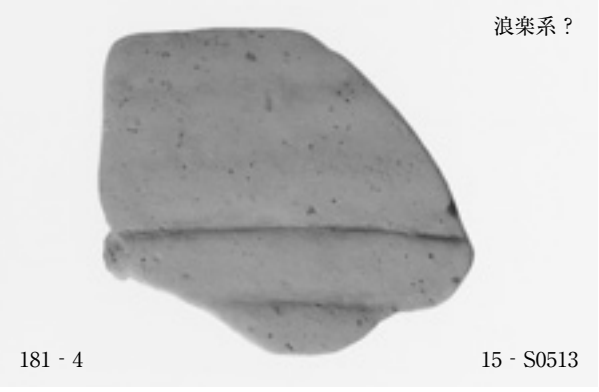
176 - 4　176 - 6　176 - 8

図版64　ＢⅡ地区　遺物　土器

173 - 1　　住15 - S0509



173 - 2　　15 - S0509



浪楽系？

181 - 4　　15 - S0513

181 - 2　　住15 - S0513

183 - 5　　住15 - S0514

183 - 2　　15 - S0514

193 - 2　　住19 - S1012

193 - 10　　住19 - S1015

193 - 9　　19 - S1015

193 - 8　　19 - S1015

202 - 12　　土坑14 - S0029

202 - 16　　14 - S0029

201 - 4　　14 - S0029

204 - 3　　土坑14 - S0031

半島系　無文土器

土坑14 - S0039

201 - 1　　14 - S0029

210 - 4　　土坑14 - S0069

207 - 1　　土坑14 - S0048

図版66　ＢⅡ地区　遺物　土器

土坑14 - S1009

215 - 3　　土坑15 - S0007

215 - 5　　15 - S0007

222 - 1　　土坑15 - S0515

231 - 9　　土坑19 - S0008

230 - 7　　19 - S0008

230 - 4　　19 - S0008

土坑19 - S0008

252 - 26　　14 - S0033

243 - 2　　方形周溝14 - S0033

245 - 1　　円形周溝14 - S1505

245 - 6　　14 - S1505

245 - 7　　14 - S1505

図版68　ＢⅡ地区　遺物　土器

251 - 2　　方形周溝20 - S0001

251 - 3　　20 - S0001

251 - 4　　20 - S0001

20 - S0001

20 - S0001

252 - 26　　20 - S0001

252 - 22　　20 - S0001

252 - 23　　20 - S0001

251 - 18　　20 - S0001

252 - 21　　20 - S0001

252 - 25　　20 - S0001

252 - 27　　20 - S0001

図版70　ＢⅡ地区　遺物　土器

251 - 17　　方形周溝20 - S0001

251 - 15　　20 - S0001

20 - S0001

251 - 11　　20 - S0001

20 - S0001

20 - S0001

251 - 8　　20 - S0001

251 - 7　　20 - S0001

276 - 11　　土器溜り19 - S0007

276 - 8　　19 - S0007

276 - 2　　19 - S0007

277 - 13　　19 - S0007

277 - 18　　19 - S0007

277 - 17　　19 - S0007

図版72　ＢⅡ地区　遺物　土器

278 - 20　　土器溜り19 - S0007

278 - 26　　19 - S0007

279 - 44　　19 - S0007

279 - 40　　19 - S0007

279 - 43　　19 - S0007

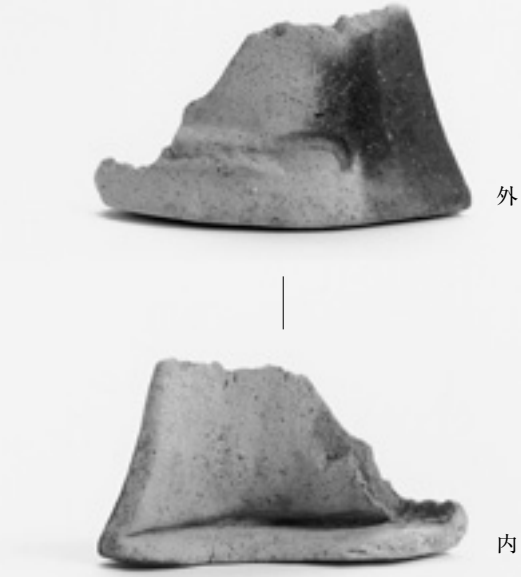
278 - 45　　19 - S0007

278 - 39　　19 - S0007

262 - 12　　環濠14 - S1007

262 - 13　　14 - S1007

262 - 14　　14 - S1007



14 - S1007

263 - 5　　環濠9 - S0017

263 - 15　　9 - S0017

図版74　ＢⅡ地区　遺物　土器

263 - 8　　環濠9 - S0017

264 - 18　　9 - S0017

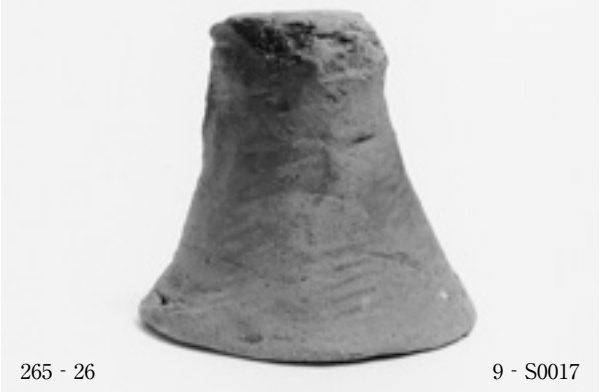
264 - 22　　9 - S0017

264 - 23　　9 - S0017

264 - 17　　9 - S0017

114 - 4　　14 - S0006

265 - 32　　9 - S0017



265 - 26　　9 - S0017

265 - 28　　9 - S0017

266 - 9　　13 - S0002

13 - S0002

266 - 8　　環濠18 - S0502

266 - 7　　環濠13 - S0002

266 - 3　　13 - S0002

267 - 46　　13 - S0002

267 - 34　　18 - S0502

図版76　ＢⅡ地区　遺物　土器

269 - 2　　区画溝9 - S0016

269 - 9　　9 - S0016

269 - 6　　9 - S0016

269 - 3　　9 - S0016

303 - 5　　14 - 5B

303 - 10　　15 - 3B

303 - 6　　19 - 10B

ＢⅠ 22 - S1514

47 - 1

ＢⅡ 13 - S0002

266 - 47

ＢⅡ 13 - S0002

266 - 48

（1）土製勾玉

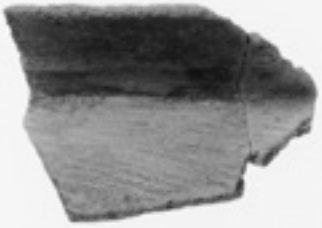
ＢⅡ 14 - S0012

120 - 11

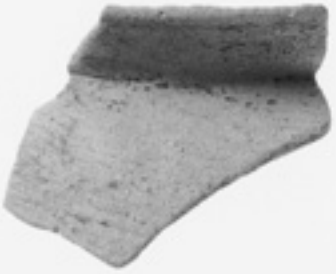
120 - 11

ＢⅡ 13 - S0002

ＢⅠ 22 - S1514



48 - 8

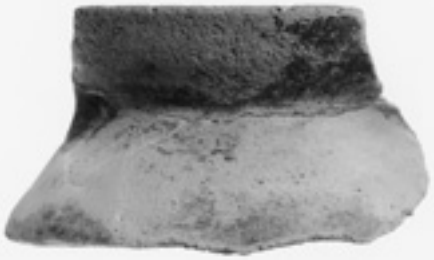


ＢⅡ 14 - S0006

114 - 15

（2）畿内系甕

ＢⅠ 23 - S0011・12



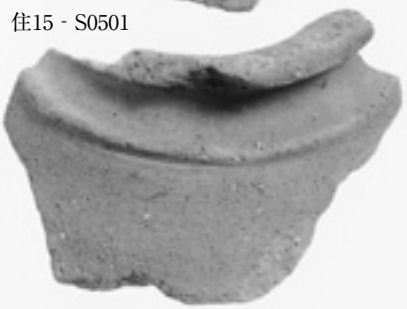
110 - 2

ＢⅡ 14 - S0004

（3）畿内系甕

ＢⅡ 包含層

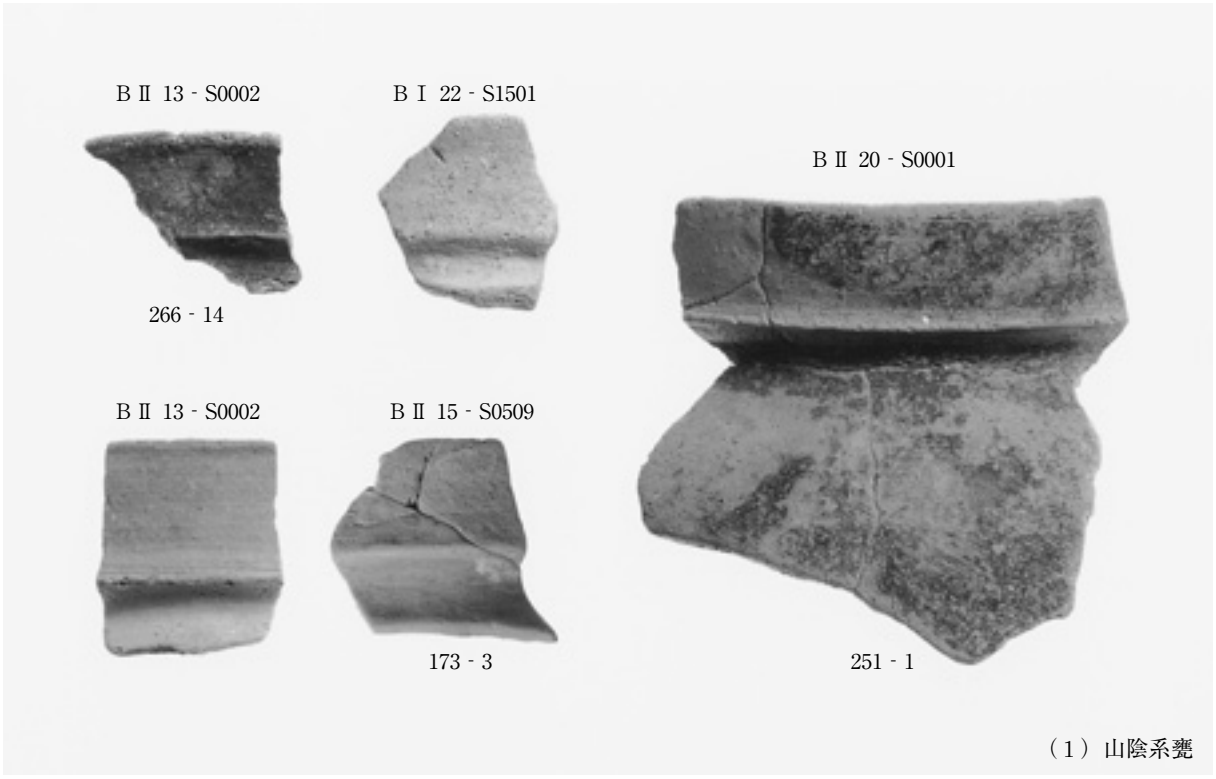
住15 - S0501



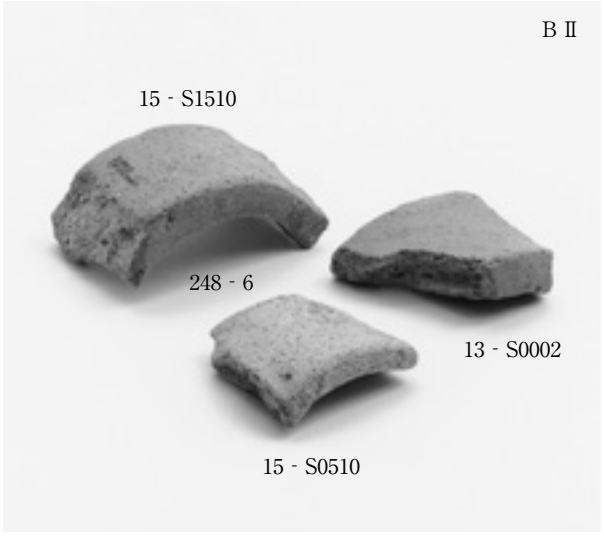
165 - 5

（4）山陰系、鼓形器台

図版78　ＢⅠ・Ⅱ地区　遺物　土器・炭化米



（１）山陰系甕



（２）ジョッキ形土器把手

（３）炭化米15 - S0509

290 - 2　土壙墓10 - S0002

290 - 1　10 - S0002

290 - 5　10 - S0002

290 - 3　10 - S0002

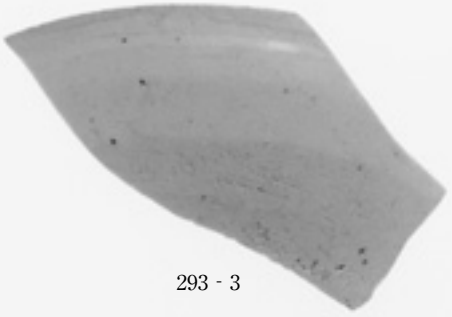
290 - 4　10 - S0002

290 - 6　10 - S0002

土壙墓10 - S0002出土土器

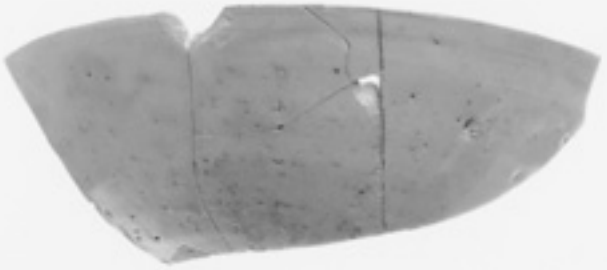
図版80　ＢⅡ地区　遺物　土器

溝14 - S1513

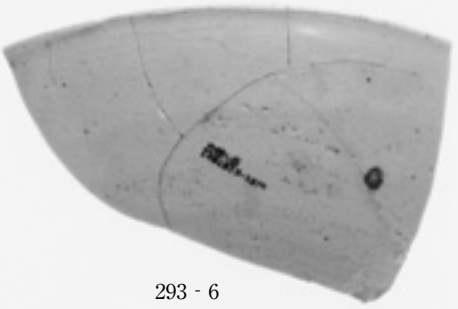


293 - 3

293 - 5

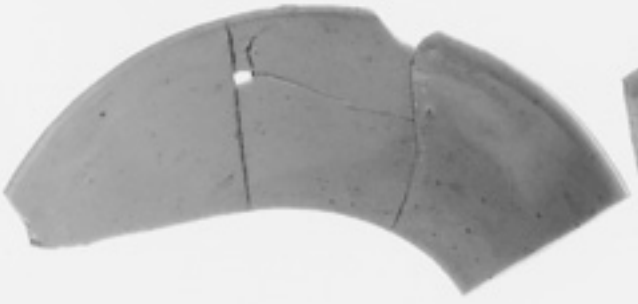


293 - 4



293 - 6

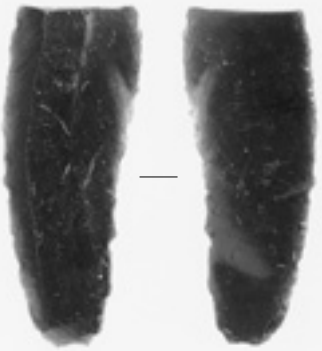
（外面）



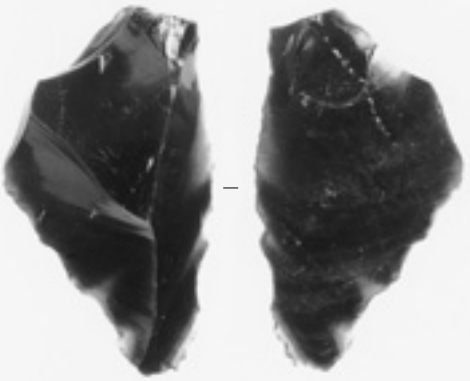
（内面）

177 - 4　15 - S0505

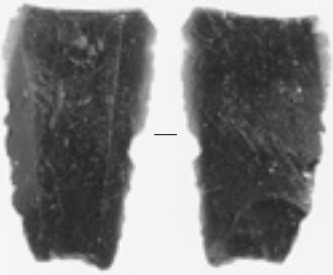
302 - 31　9 - S0017



302 - 35　18 - S0502

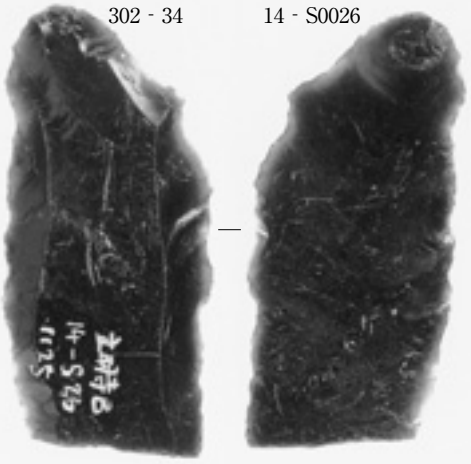


302 - 33　15 - 2J



302 - 32　9 - S0017

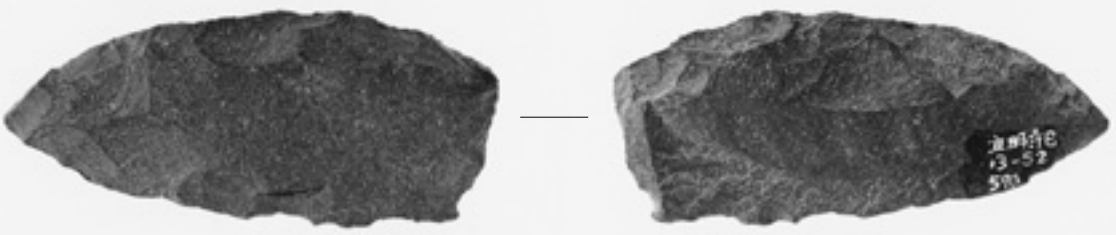
302 - 34　14 - S0026



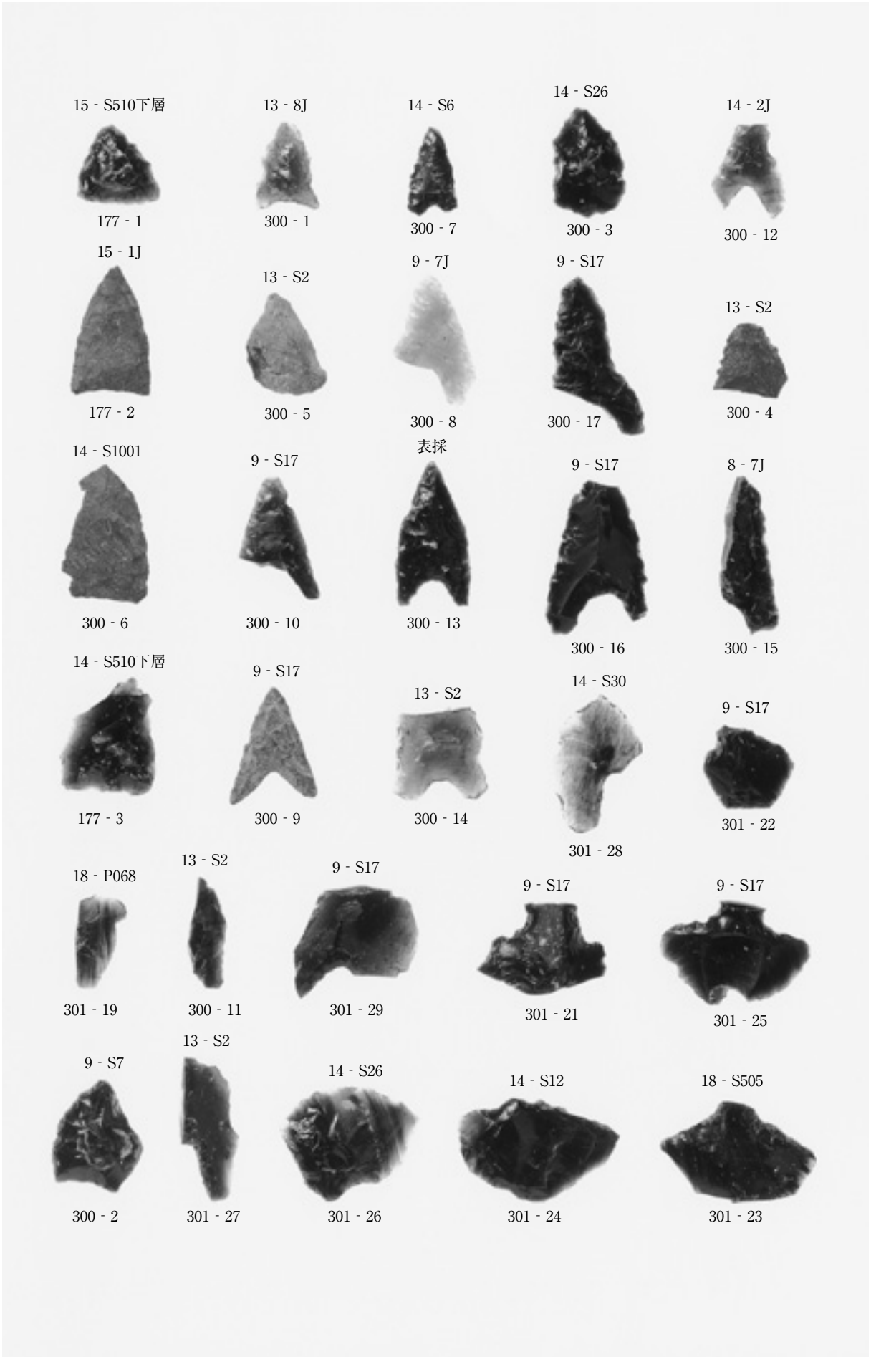
83 - 5　5 - S0001

302 - 36　13 - S0002

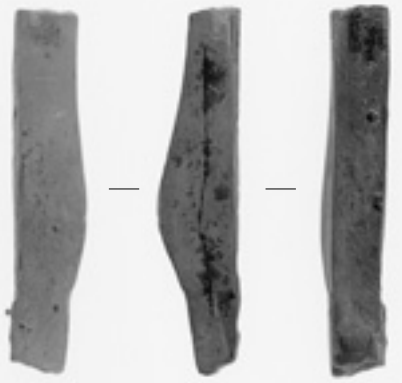
302 - 37　13 - S0002



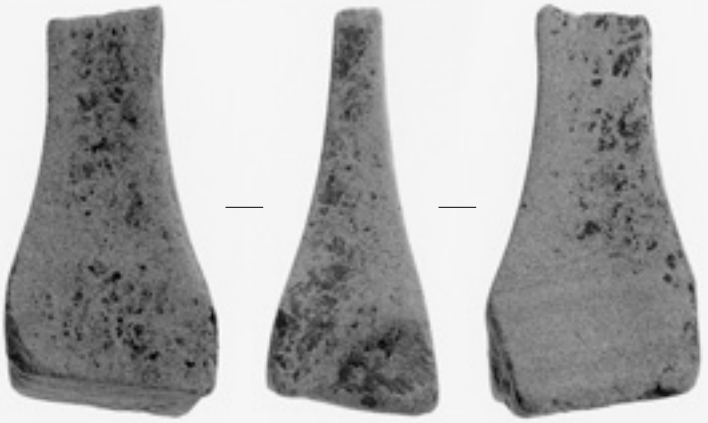
図版82　ＢⅡ地区　遺物　石器



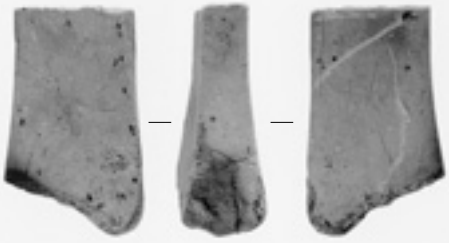
129 - 15　住14 - S0026



147 - 5　住14 - S1008

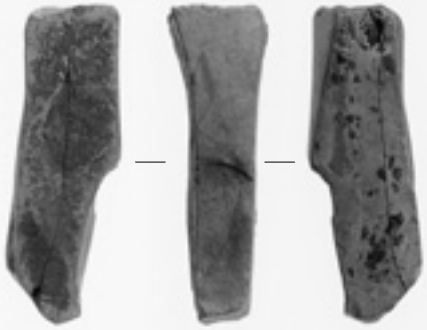


129 - 16　住14 - S0026



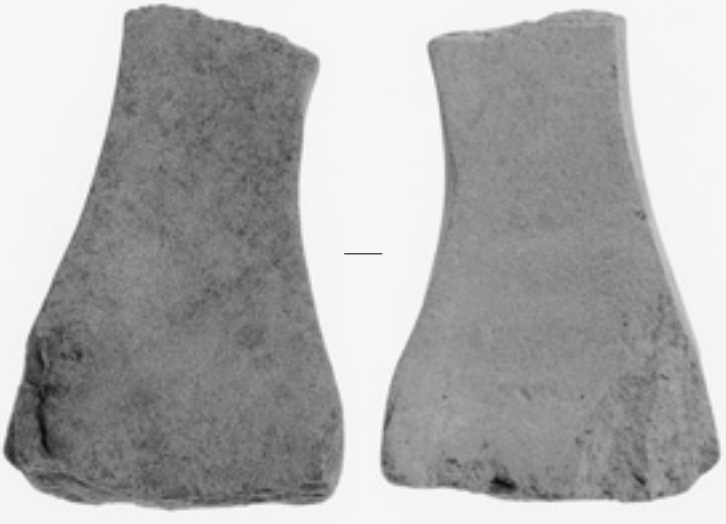
303 - 3　住14 - S0023

129 - 17　14 - S0026



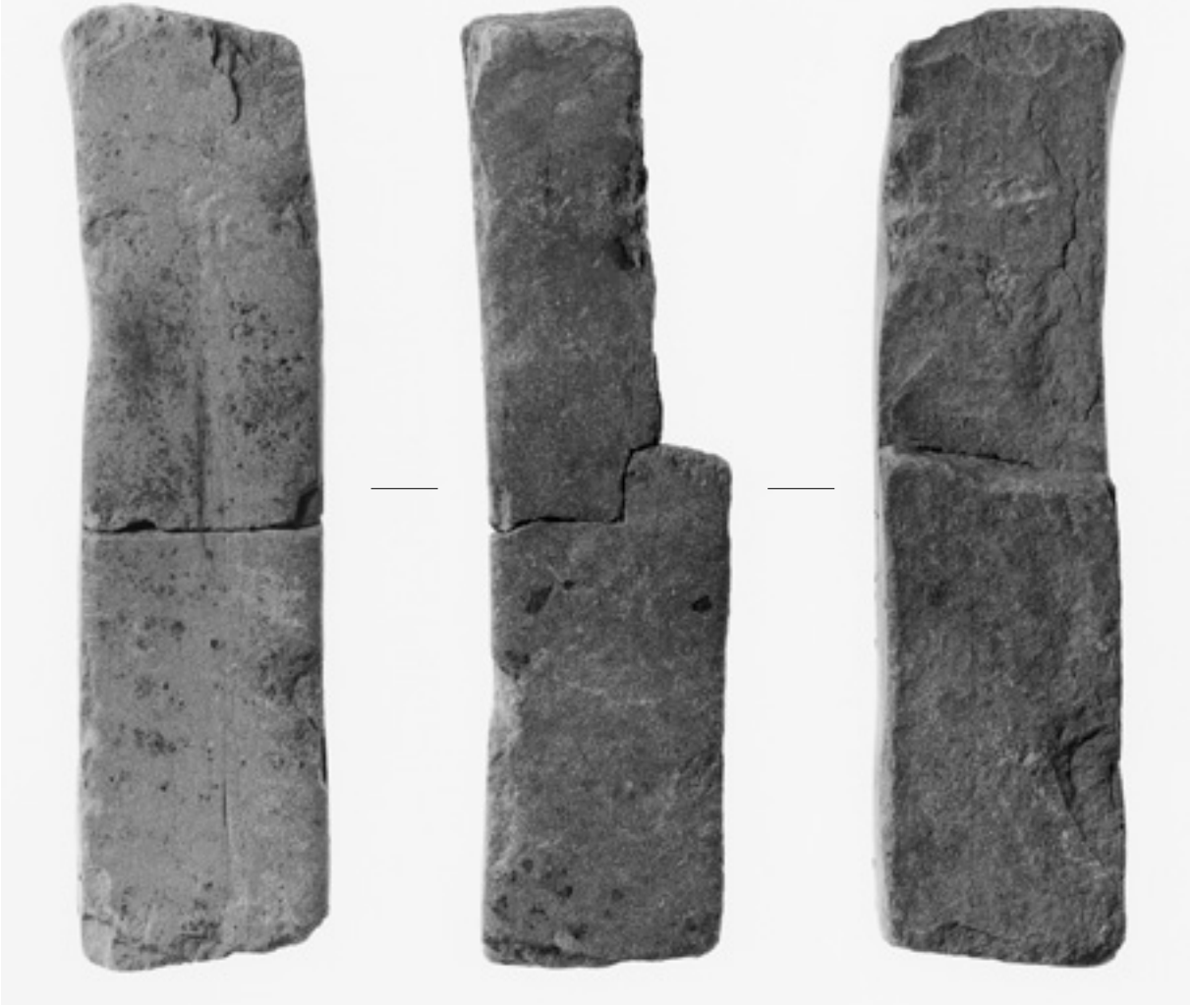
117 - 10　住14 - S0007

171 - 13　住15 - S0508

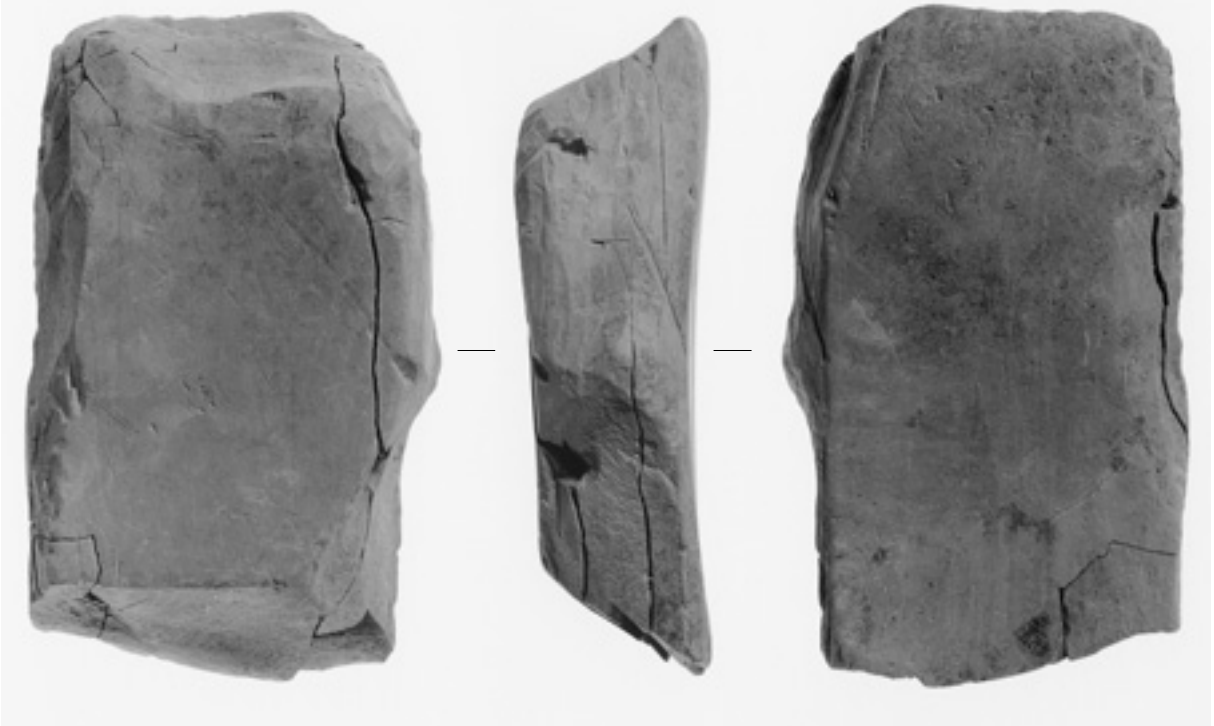


図版84　ＢⅡ地区　遺物　石器

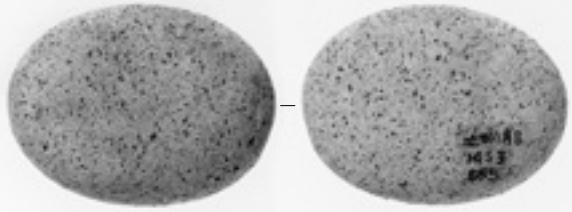
129 - 18　　住14 - S0026



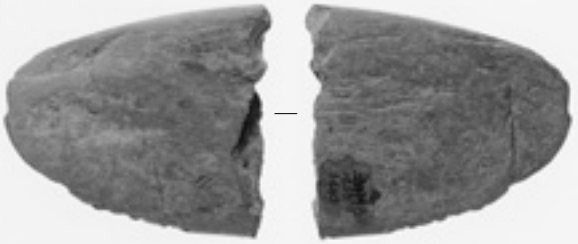
181 - 5　　住15 - S0513



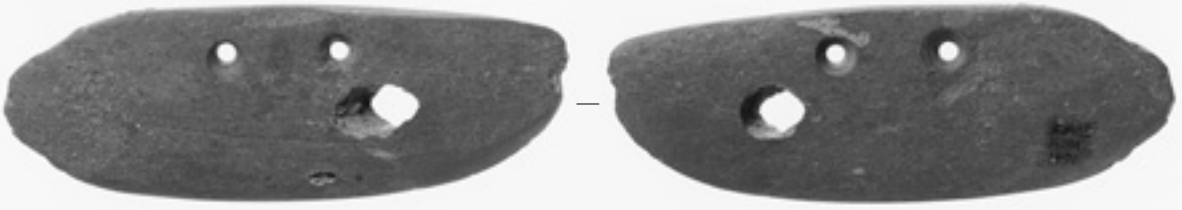
108 - 21　住14 - S0003



117 - 9　住14 - S0007

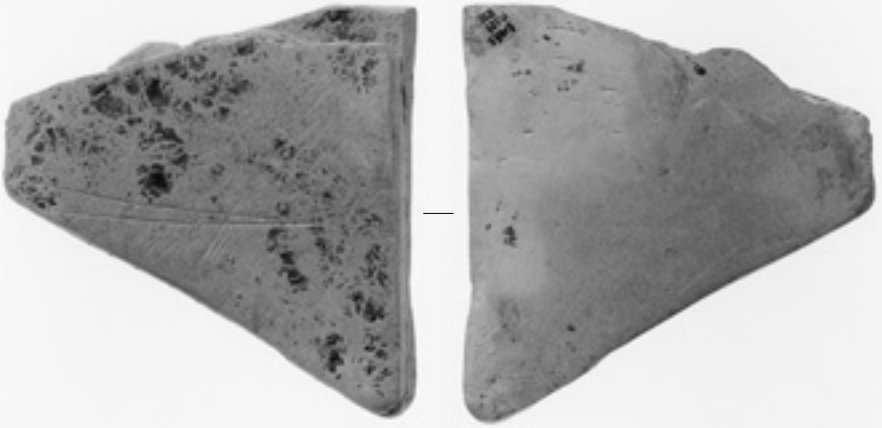


275 - 1　柱穴14 - P0104



294 - 5　ピット18 - S0014

126 - 5　住14 - S0023



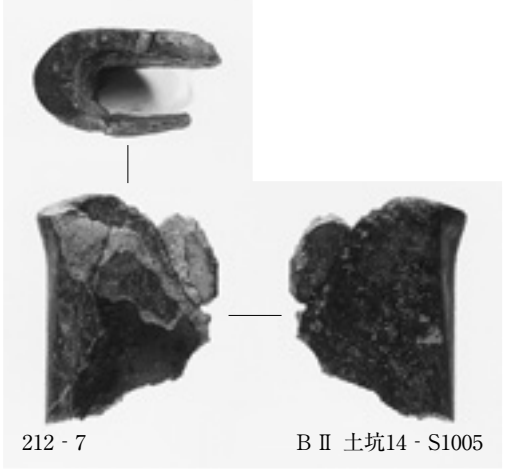
柱穴13 - P150

297

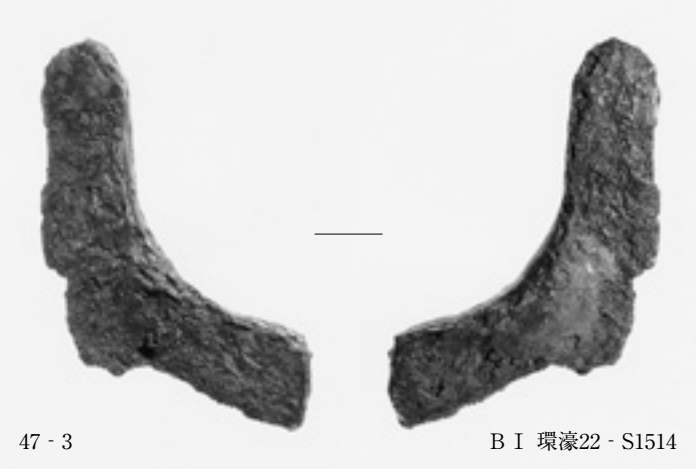
図版86　ＢⅠ・Ⅱ地区　遺物　青銅器・鉄器

51

ＢⅠ 方形周溝28 - S0009　小銅鐸



212 - 7　　ＢⅡ 土坑14 - S1005



47 - 3　　ＢⅠ 環濠22 - S1514

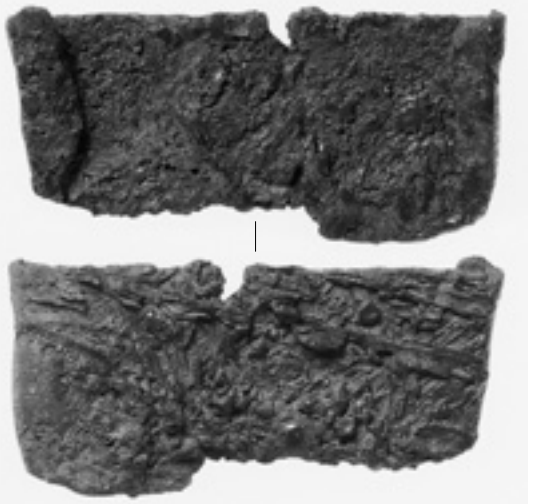
270 - 5　　ＢⅡ 14 - S1007

270 - 6　　ＢⅡ 環濠14 - S1007

108 - 22　　ＢⅡ 住14 - S0003

270 - 3

ＢⅡ
環濠13 - S0002

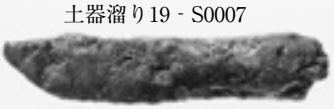


280 - 1　　ＢⅡ 土器溜り19 - S0007

270 - 4　　ＢⅡ 環濠9 - S0016

52 - 1　　ＢⅠ 方形周溝28 - S0009

ＢⅡ
土器溜り19 - S0007



280 - 2

土器溜り19 - S0007

280 - 3

住15 - S0508

171 - 14

住14 - S1001

145 - 9

19 - S0007

280 - 4

ＢⅡ
15

303 - 2

住14 - S0026

129 - 14

14 - 4F

303 - 1

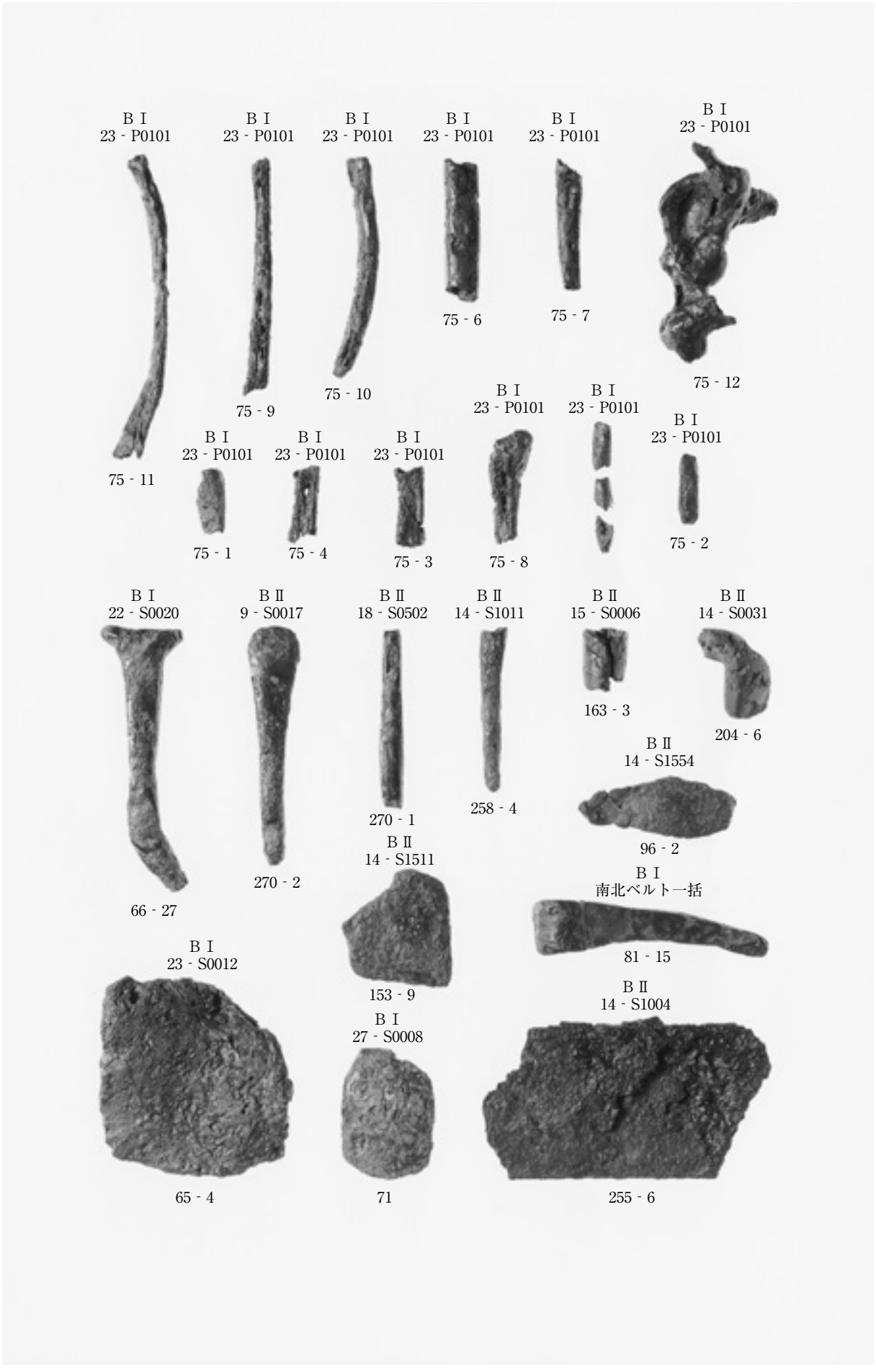
住14 - S0012

120 - 19

ピット14 - P0171

275 - 2

図版88　ＢⅠ・Ⅱ地区　遺物　鉄器



報 告 書 抄 録

ふりがな	りゅうみょうじちくいせきびいちてん
書名	立明寺地区遺跡Ｂ地点
副書名	(仮称)イオン筑紫野ＳＣ開発に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	荒川和哉･角上寿行･河野正訓･作田一耕･田中俊輔･西森忠幸・萩原美香･福嶋正史･松田重治･松田繁･村尾政人･柳本照男
編集機関	株式会社島田組
所在地	〒581-0034 大阪府八尾市弓削町南3丁目20番地2　ＴＥＬ：072－949－2410
発行年月日	2009年12月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード				調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
りゅうみょうじちく 立明寺地区 いせきびちてん 遺跡Ｂ地点	ふくおかけんちくしのし 福岡県筑紫野市 おおあざりゅうみょうじ 大字立明寺 577-1、 565-1,566-3･4、 567-1、568他	170	170438	33度 28分 51秒	130度 31分 35秒	2007年 7月5日 ～ 2007年 9月28日	19,716㎡	(仮称)イオン筑紫野ＳＣ開発に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立明寺地区 遺跡Ｂ地点	包含層	縄文～古墳時代･古代･中世		縄文･弥生土器･土師器･陶磁器･石器	
	自然流路	縄文･弥生時代	自然流路	縄文土器･石器	縄文時代後･晩期の自然流路。
	集落跡	縄文時代後晩期弥生時代後期～終末	竪穴住居跡･掘立柱建物跡･環濠･土坑･区画溝･ピット	縄文･弥生土器･石器･鉄器･銅製品	弥生時代後期から古墳時代初期までの集落跡である。段丘縁辺を円弧を描いた環濠によって区画。遺構は竪穴住居跡、大型掘立柱建物跡、方形･円形周溝等があり、区画溝内から小銅鐸が出土した。
	集落跡	古墳時代初期	竪穴住居跡･掘立柱建物跡･環濠･土坑･区画溝	土師器･石器･鉄器	
	集落跡	平安時代後期･中世	掘立柱建物跡･ピット･溝･土坑･井戸	土師器･須恵器･黒色土器･陶磁器･石製品	遺構は北方向に主軸をもった掘立柱建物跡群と土壙墓、溝を検出した。

立 明 寺 地 区 遺 跡 Ｂ 地 点

（仮称）イオン筑紫野ＳＣ開発に伴う発掘調査報告書

発行年月日／2009（平成21）年12月25日

編集・発行／株式会社 島田組

〒581-0034 大阪府八尾市弓削町南 3 丁目20番地 2

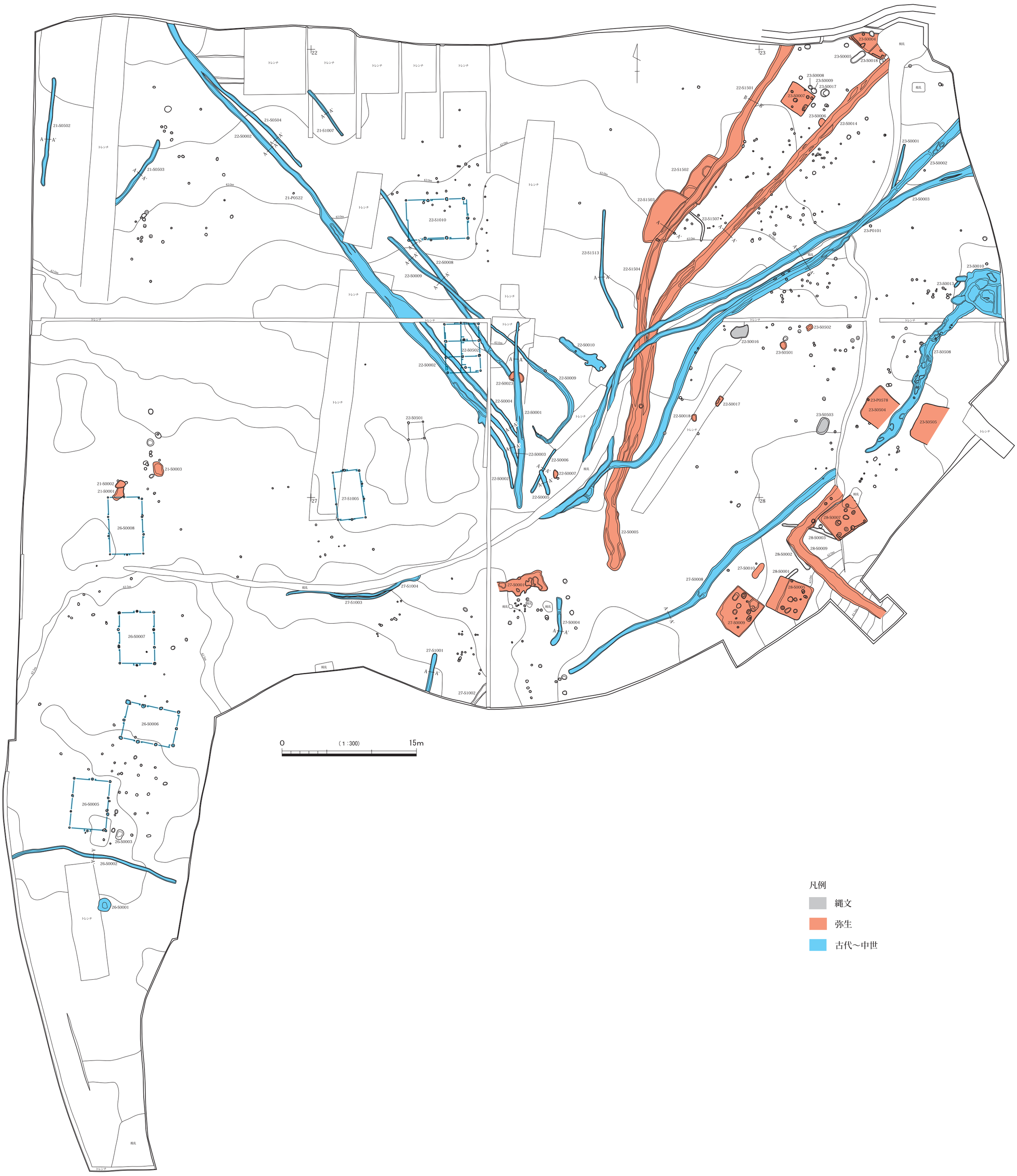
ＴＥＬ：072－949－2410

印　　刷／株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪府大阪市東成区深江南 2 丁目 6 番 8 号

ＴＥＬ：06－6976－8761

B Ⅱ地区遺構平面図(1/300)



B Ⅰ地区遺構平面図(1/300)